大和川・今池遺跡

Ⅱ

第3・4・5地区 発掘調査報告書

1980.3

大和川・今池遺跡調査会

大和川・今池遺跡

Ⅱ

第3・4・5地区 発掘調査報告書

1980.3

大和川・今池遺跡調査会

序　　文

摂津国と河内国の国境上にある大和川・今池遺跡は、つい数年前まではまったく知られていませんでした。昭和52年度に実施した試掘調査で遺跡があることがわかり、昭和53年4月に当調査会が調査を開始して、丸二年を経過しました。この間広大な面積を調査し、また第1地区の調査報告書を刊行することができました。

ここに上梓する報告書は、第3地区、第4地区、第5地区の報告書であります。長期間にわたる調査では、酷暑・厳寒の中、担当者・調査員の皆様に多大の苦労をかけ、関係各位の御協力のおかげで調査を完遂することができました。

また、調査の実施にあたっては、立命館大学日下雅義先生、堺女子短期大学嶋田暁先生、関西大学網干善教先生、同志社大学鈴木重治先生、松原市史編さん室出光睦己先生からいろいろと御指導いただき、さらに日下先生、出水先生よりは玉稿をいただきました。文末とはなりましたが厚く御礼申し上げます。

昭和55年3月

大和川・今池遺跡調査会理事長

高　尾　正　二

例　　言

1．本書は大和川下流西部流域下水道今池処理場建設に伴う大和川・今池遺跡第3地区・第4地区・第5地区発掘調査報告書である。

2．本調査は大阪府（代表者　南部流域下水道事務所長）の委託をうけて大和川・今池遺跡調査会があたり、事務局は堺市教育委員会社会教育部社会教育課内に置いた。なお、調査に要した費用は全額大阪府が負担した。

3．調査は大阪府教育委員会・石神　怡、堺市教育委員会・奥田　豊の指導の下に、堺市教育委員会技術職員・森村健一、大阪府教育委員会技師・大野　薫、松原市教育委員会技師・足立俊彦の三名があたり事務は西野淳一があたる。それぞれの担当は下表に記したとおりである。

4．調査の実施にあたっては大阪府教育委員会・井藤　徹氏、堺市教育委員会・北野俊明氏、石田　修氏、樋口吉文氏、十河稔郁氏、大阪府南部流域下水道事務所、堺市下水道部、松原市下水道部、小平　登自治会長、西野　正自治会長、地元各位、飛鳥・奥村・鴻池・大末共同企業体から協力を得た。

5．土層・遺物等の色調は農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1967、日本色研事業）によった。また基準高は特に記さないかぎりO.P.＋10.00mに統一した。

6．本書の編集は森村が担当し、執筆は森村・大野・足立のほか、川口宏海・古園哲朗・渡邊みどり・上野俊雄・足立　寛があたり、文末に氏名を掲げた。

7．昭和55年3月31日までの調査終了地ならびに対象面積は下表のとおりである。

地区名	担当者	建設構造物	面積	調査期間
第1地区	森村健一	第一水処理棟	3,500㎡	昭和53年4月1日～6月14日
第2地区	森村健一	関電配電塔	400㎡	昭和53年5月20日～6月10日
第3地区	森村健一	汚泥消化タンク	4,500㎡	昭和53年12月1日～54年3月31日
第4地区	森村健一	管理棟・沈砂池	10,000㎡	昭和53年12月1日～54年3月31日
第5地区	大野　薫・足立俊彦	汚泥処理棟	3,850㎡	昭和54年6月25日～10月25日
第6地区	森村健一	ボイラー室ほか	4,000㎡	昭和54年12月1日～55年3月31日
試掘調査	森村健一	汚泥処理棟・ボイラー室	700㎡	昭和53年12月1日～55年3月31日

発掘調査参加者

調　査　員－川口宏海、植田一正、渡邊みどり、奥野朋子、山本　薫、西谷啓三、菊地明美、森村紀代、古園哲朗

調査補助員－河合隆次、安村俊史、積山　洋、藤田道子、市場健次、岸　託男、木村晃久、岡本　晶、島川一郎、山口昌宏、山中竜一、原須美子、前田庄一、原田徹弥、吉田　聡、小谷友二、上野久隆、井上憲生、石原　誠、上野俊雄、西山祐司、吉野　実、大岡康之、西岡君雄、池尻祐典、前田千鶴子、辻本記公子、勝田幸枝、田中佐知子、上野浩司、足立　寛、大谷達彦、加藤芳樹、宇那木隆司、加藤淳次、佐藤　彰、津村雅洋、近藤昌樹、長谷川仁、伊藤　昇、奥　　斉、杉本一浩、下川昌一、松本　浩、古賀　彰、尾崎孝一、蔵城生雄、蔵後　力、藤井　勝、喜多哲也、長岡雅也、秋吉匡一、石丸廣道、早川直也、川口賀子、井畑真弓、滝川昌宏、岩本佳代子、木村真弓、井上浩四郎、津村季之、村谷陽子、米田純子、井上直子、森　　薫、榊原　香、藤田順子、藤本さつき、大石智子、岩本静江、宮脇敏子、森　康代、鈴木登紀子、島村実佐、重水利美子、高瀬昭子、中澤明美、小松祐子、松本美穂、薮野容子、乾　充子、安藤由里、片木伸江、山口里美、青山裕子、伊藤洋子、片木智子、長田真弓

内業作業員－佐伯ケサ子、上原ムツ子、森本久美子、西野善子、青木満規子、池田房子、都　悦子、山本良子

８．遺構略号は次のようにした。

Ｔ又はＳＢは建物　　Ｐ又はＳＫは土壙・柱穴　　Ｅ又はＳＥは井戸

９．石製品については、便宜上左をＡ面と、右をＢ面とした。

本　文　目　次

森村・大野・足立

Ⅰ　遺跡の位置と環境 ……（森村、川口）……1

Ⅱ　調査経過……14

1．調査に至る経過……（大野、森村）……14
2．調査日誌……（足立、森村）……17

Ⅲ　調査成果……20

1．既調査区（第1・2地区・依網池）……（森村）……20
2．第3地区、第5・6地区試掘調査……26
(1)　層　　位……（森村）……27
(2)　遺　　構……（古園、森村）……29
(3)　遺　　物……（森村・古園）……76
(4)　小　　結……（森村）……91
(5)　第5・6地区試掘調査……（森村）……109
3．第4地区……125
(1)　層　　位……（森村）……125
(2)　遺　　構……（古園、森村）……135
(3)　遺　　物……（森村、古園）……177
(4)　小　　結……（森村）……178
4．第5地区……179
(1)　地区設定……（大野）……179
(2)　層序……（大野）……180
(3)　古墳時代の遺構と遺物……（大野）……184
(4)　歴史時代の遺構と遺物……（大野、川口）……200
(5)　地質調査……（大野）……206
(6)　包含層出土の遺物……（足立）……212
(7)　小　　結……（大野）……230

Ⅳ　結　　語……（森村）……233

1．まとめ……（森村）……233
2．大和川・今池遺跡集落の立地条件と消長……（森村）……237
3．棟持柱をもつ掘立柱建物……（森村）……243
4．竪穴住居の復元……（森村）……246

Ⅴ　研 究 編……251

1．大和川・今池遺跡付近の地理的環境……日下雅義……251
2．松原市域における条里……出水睦己……295

図　版　目　次

図版１　大和川・今池遺跡周辺土地条件図
図版２　大和川・今池遺跡周辺航空写真
図版３　大和川・今池遺跡旧地形航空写真
図版４　第３地区遺構全体写真
図版５　第３地区掘立柱建物全景
柱穴Ｐ－３、４
図版６　第３地区掘立柱建物柱穴Ｐ－２、上・平面、下・断面
図版７　第３地区上左・滑石製勾玉、右・土製人形、下・Ｐ－８出土、土師器、高杯出土状態
図版８　第３地区上・耕作用井戸（Ｅ）－23～35、下・Ｅ－１・２、断面
図版９　第３地区上・Ｅ－８、上・平面、下・断面
図版10　第３試掘調査出土石器、第３地区１～７試掘地点－３Ｔ－８
図版11　第３地区出土須恵器
図版12　第３地区出土遺物
図版13　試掘調査地区全景航空写真
図版14　第４地区全景航空写真
図版15　第４地区Ｐ－81、77
図版16　第４地区Ｅ－２上・平面、下・断面
図版17　第４地区上・Ｅ－16平面、Ｅ－17断面
図版18　第４地区Ｅ－12桶側井戸１段目断面
図版19　第４地区Ｅ－12桶側井戸とタガ
図版20　第４地区条里制遺構畦畔
図版21　上：第５地区斜航空写真、
下：第５地区垂直航空写真
図版22　第５地区西半垂直航空写真
図版23　上：Ａ地区全景（西より）
下：Ｃ－１地区全景（東より）
図版24　上：SB01（垂直）
下：SB01（西より）
図版25　上：SB02・SB03（垂直）
下：SB02（北より）
図版26　上：SB03（北より）
下：SA03（南西より）
図版27　上：SE01（堀削前）
下：SE01（東より）
図版28　上：SE02（西より）
下：SE02（南より）
図版29　上：SE02内土師器出土状況
下：SE02内土師器出土状況
図版30　上：SE03・SK10・SK29（西より）
下：SE03（西より）
図版31　上：SE03断ち割り（南より）
下：SK10（北より）
図版32　上：SK29（北より）
下：SK29内土師器出土状況
図版33　上：SK35（東より）
下：SK35内土師器出土状況
図版34　上：SK41（北より）
下：SK41内土師器出土状況
図版35　上：SK16（東より）
下：SK13（東より）
図版36　上：SK23（北より）
下：SK24（西より）
図版37　上：SA01〈左〉SA02〈右〉（南より）

下：C－2地区耕作用井戸群(西より)
図版38　上：SE05・SE06（西より）
下：SE04（西より）
図版39　上：条里畦畔（北壁）
下：条里畦畔（南壁）
図版40　上：地質調査第10地点（東より）
下：地質調査第7地点（西より）
図版41　上：「至和元宝」出土状況（C－Ⅱ37）
下：「天禧通宝」出土状況（C－Ⅱ16）
図版42　上左：石鏃出土状況（C－Ⅱ37）
上右：石鏃出土状況（C－Ⅱ46）
下左：鉄器出土状況（C－Ⅱ6）
下右：須恵器出土状況（C－Ⅱ15）
図版43　遺構内出土遺物
図版44　遺構内・包含層出土遺物
図版45　包含層出土遺物
図版46　上：遺物（土師器）
下：遺物（須恵器）
図版47　上：遺物（瓦器、瓦質土器）
下：遺物（石鏃・銅銭）
図版48　大和川・今池遺跡内条里制遺構
図版49　復元住居・面積設定、堀削
図版50　復元住居・側壁の粘土張り、側板建て
図版51　復元住居・側板の焼成、周堤状態
図版52　復元住居・入口部、4本柱建て
図版53　復元住居・木組状態、棟木部分
図版54　復元住居・茅葺き状態
図版55　復元住居・棟木（内部から）側板と垂木
図版56　復元住居・棟部分・茅葺き状態
図版57　復元住居・茅を蔓で押える作業、道具、完成後

挿　図　目　次

第 1 図　今池遺跡と周辺遺跡
第 2 図　反正天皇陵古墳垂直写真
第 3 図　百舌鳥湯の山古墳遺物出土状態図
第 4 図　三宅遺跡出土羽釜形土器
第 5 図　大和川今池遺跡第 1 ～ 6 地区位置図
第 6 図　発掘調査風景、案内協力板、内業作業風景
第 7 図　調査風景
第 8 図　井戸最下層遺物出土状態
第 9 図　第 1 地区、遺構全体写真
第 10 図　第 2 地区、遺構配置図、井戸遺物出土状態
第 11図　「大和川開墾前地方図」(大依羅神社所蔵)
第 12 図　依羅池復元図
第 13 図　「依羅池古図」(大依羅神社所蔵)
第 14 図　第 3 地区、地区割図
第15 図　第 3 地区、西壁土層断面図
第 16 図　第 3 地区、東・南壁土層断面図
第 17 図　第 3 地区、畦土層断面図（セクション－1・2・3・4）
第 18 図　第 3 地区、遺構配置図
第 19 図　掘立柱建物遺構図
第 20 図　掘立柱建物、各柱穴遺構図
第 21 図　溝－1 土層断面図
第 22 図　溝－2 土層断面図
第 23 図　溝－3 土層断面図
第 24 図　不明落ち込み(8)出土土師器
第 25 図　不明落ち込み遺構図
第 26 図　第 3 地区遺構内出土遺物
第 27 図　井戸－1・2 遺構図
第 28 図　井戸－3 遺構図
第 29 図　井戸－4 遺構図
第 30 図　井戸－5 遺構図
第 31 図　井戸－6 遺構図
第 32 図　井戸－7 遺構図
第 33 図　井戸－9 遺構図
第 34 図　井戸－10遺構図
第 35 図　井戸－11遺構図
第 36 図　井戸－12遺構図
第 37 図　井戸－13・14遺構図
第 38 図　井戸－15遺構図
第 39 図　井戸－16・17遺構図
第 40 図　井戸－18遺構図
第 41 図　井戸－19遺構図
第 42 図　井戸－20・21遺構図
第 43 図　井戸－22遺構図
第 44 図　井戸－23・24遺構図
第 45 図　井戸－25遺構図
第 46 図　井戸－26遺構図
第 47 図　井戸－27遺構図
第 48 図　井戸－28遺構図
第 49 図　井戸－29・30遺構図
第 50 図　井戸－31遺構図
第 51 図　井戸－32遺構図
第 52 図　桶側井戸(E－8)遺構図
第 53 図　桶側実側図
第 54 図　桶側板実側図

第55図　桶側板実測図
第56図　井戸―8出土遺物
第57図　第3地区出土石製品
第58図　第3地区出土須恵器杯蓋
第59図　第3地区出土須恵器杯身
第60図　第3地区出土須恵器壺甕
第61図　第3地区出土須恵器高杯
第62図　第3地区出土須恵器壺
第63図　第3地区出土須恵器
第64図　第3地区出土土師器壺甕
第65図　第3地区土師質皿
第66図　第3地区出土須恵質摺鉢
第67図　第3地区出土陶磁器
第68図　第3地区出土瓦器
第69図　第3地区出土蛸壺・土錘
第70図　第3地区土鉄製品
第71図　第3地区出土勾玉・貨幣
第72図　第3地区出土土製品
第73図　第3地区周辺旧状図と井戸位置図
第74図　第5・6地区試掘調査地点
第75図　試掘トレンチ土層断面図
第76図　試掘トレンチ土層断面図
第77図　試掘トレンチ土層断面図
第78図　第3トレンチ遺構配置図・垂直写真
第79図　第3トレンチ遺構図
第80図　条里制遺構確認地点図
第81図　第5試掘地点土層断面図（条里制畦畔）
第82図　第6試掘地点土層断面図（条里制畦畔）
第83図　第1―2トレンチ耕作用井戸
第84図　第3トレンチ出土石製品
第85図　第4地区遺構配置図
第86図　西・北・東壁土層断面図
第87図　北・東壁土層断面図
第88図　南壁土層断面図
第89図　南壁土層断面図
第90図　南壁土層断面図
第91図　南壁土層断面図
第92図　南壁土層断面図
第93図　南壁土層断面図
第94図　南壁土層断面図
第95図　南壁土層断面図
第96図　第4地区出土遺物
第97図　井戸―1遺構図
第98図　井戸―2遺構図
第99図　井戸―3遺構図
第100図　井戸―4遺構図
第101図　井戸―5遺構図
第102図　井戸―6・7遺構図
第103図　井戸―8・9遺構図
第104図　井戸―10遺構図
第105図　井戸―11遺構図
第106図　井戸―13遺構図
第107図　井戸―14・15遺構図
第108図　井戸―16遺構図
第109図　井戸―17・18遺構図
第110図　井戸―19遺構図
第111図　桶側井戸（E―12）実測図
第112図　1段目桶側板実測図
第113図　2段目桶側板実測図
第114図　3段目桶側板実測図
第115図　4段目桶側板実測図

第116図　5段目桶側板実測図
第117図　6段目桶側板実測図
第118図　E—12出土遺物・瓦
第119図　条里制遺構土層断面図(S—8～10)
第120図　条里制遺構土層断面図（S—11～13)
第121図　第4地区出土遺物・出土状態
第122図　第4地区周辺旧状図と井戸位置図
第123図　第5地区割図（1：1000)
第124図　セクション位置図（1：1000)
第125図　大和川・今池遺跡、第5地区遺構配置図
第126図　第5地区位置図
第127図　SB01実測図
第128図　SB01出土土師器
第129図　SB02実測図
第130図　SB03実測図
第131図　SA03実測図
第132図　SE01実測図
第133図　SE01出土須恵器・土師器
第134図　SE02実測図
第135図　SE02出土土師器
第136図　SE03実測図
第137図　SK10実測図
第138図　SK10出土土師器
第139図　SK29実測図
第140図　SK29出土土師器
第141図　SK35実測図
第142図　SK35出土土師器
第143図　不定形土壙実測図(1)
第144図　不定形土壙実測図(2)
第145図　不定形土壙実測図(3)
第146図　SK25出土須恵器
第147図　SK41実測図
第148図　SK41出土土師器
第149図　SA01(左)・SA02(右)実測図
第150図　耕作用井戸実測図
第151図　条里畦畔位置図（1：1000)
第152図　条里畦畔実測図(L＝O.P.＋9.60m)
第153図　地質調査位置図（1：1000)
第154図　地質調査第1・2・3地点
第155図　地質調査第4・5・6地点
第156図　地質調査第7・8・9地点
第157図　地質調査第10地点
第158図　包含層出土須恵器実測図
第159図　包含層出土土師器実測図
第160図　包含層出土瓦器・瓦質土器実測図
第161図　石器実測図
第162図　鉄製品
第163図　鉄製品実測図
第164図　銅銭拓影図
第165図　大和川・今池遺跡周辺土地条件図及び遺跡図
第166図　松原市樋野ヶ池須恵器窯出土遺物
第167図　大和川・今池遺跡地形復元及び遺構分布図
第168図　大和川・今池遺跡遺構全体図（1980.3現在)
第169図　第5地区SB04遺構図
第170図　第6地区掘立柱建物遺構図
第170図　伝香川県出土銅鐸
第172図　復元住居図
第173図　復元住居外気温表

第174図　復元住居内部上層気温及び湿度表
第175図　復元住居内部、下層気温及び湿度表
第176図　地域の概念図
第177図　等高線図
第178図　東西地形断面図（E－E′）
第179図　東西地形断面図（A－A′）
第180図　東西地形断面図（B－B′）
第181図　地形分類図
第182図　東西地形断面図（C－C′）
第183図　東西地形断面図（D－D′）
第184図　地質柱状図
第185図　今池付近の等高線図
第186図　南北地形断面図
第187図　旧河道の地籍図
第188図　西除川旧流路の地質柱状図
第189図　現在の水利系統図
第190図　17世紀ごろの水系「狭山池流域図より」
第191図　古代における水利系統推定図
第192図　東除川左岸の微地形と溝渠の推定図
第193図　旧西川村の地籍図
第194図　明治初期の景観
第195図　大正初期の景観
第196図　依網池古図
第197図　大和川池中貫通見取図
第198図　明治期の地形図
第199図　依網池によって水没した開析谷
第200図　依網池復原図
第201図　条里型地割の分布と微地形
第202図　今池遺跡付近の地理的環境
第203図　旧河道の地層断面図（A－A′）
第204図　今池地区の地質柱状図（B）
第205図　今池地区の地質柱状図（C）
第206図　古代における主要道路図
第207図　松原市北部条里制
第208図　松原市（丹比・丹南八上部）条里復元図
第209図　松原における大字及び小字図

Ⅰ　遺跡の位置と環境

本遺跡は、大阪府堺市北東部より松原市北西部にわたる地域、行政区画上の大阪府堺市堂盤町から松原市天美西町にかけて広範囲に広がる、古墳時代の集落跡を中心とする遺跡である。

この地域は、大阪府南部の和泉山脈より北方に延びる洪積台地がとぎれ、沖積平野へと移行していく地域にあたる。遺跡は、このうちの上町台地根幹部の洪積段丘中位面東縁に立地する。東方は旧西除川の氾濫原となっている。周辺は、近年まで条里制地割がよく残る、溜池の多いのどかな田園地帯であった。しかし、現在は大阪市のベッドタウンとして急速に都市化されつつあり、早晩自然は原形をとどめぬまでに変貌をとげるであろうことが予想される。

1．旧石器時代

この時期の遺跡は二上山付近や泉南地方では数多く存在するが、周辺ではほとんど報告されておらず、尖頭器が出土した堺市百舌鳥本町遺跡（註－1）があげられるのみである。

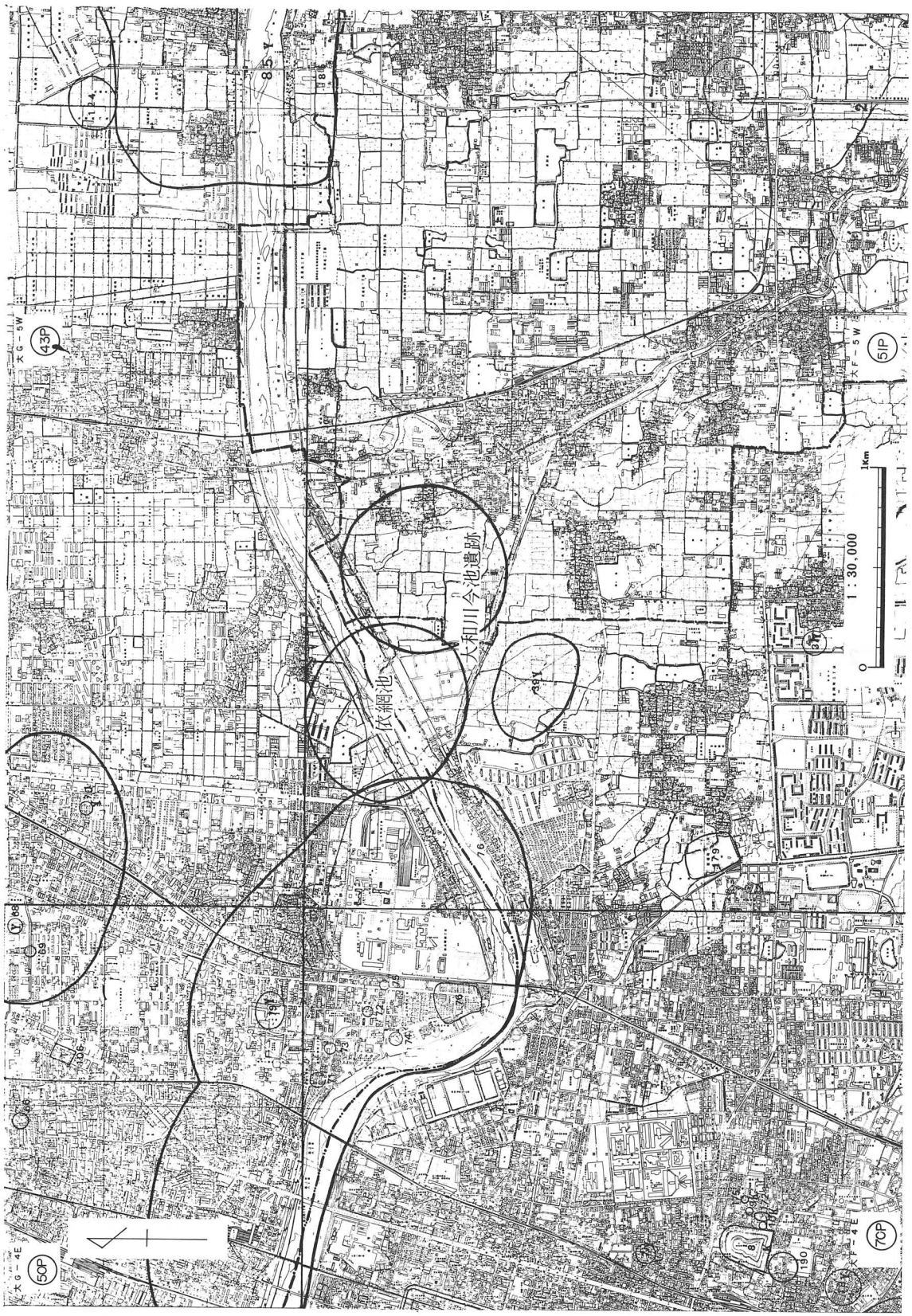
2．縄文時代

これも上町台地北端部や泉南地方ではかなり知られているが、この地域では堺市南榎町遺跡（註－2）で中期の石鏃・石ヒが数点出土したことが報告されているだけである。この様に旧石器・縄文時代のこの地域の様相は、一応の人跡を認め得るのみで、いまだ全容を把握するに至っていない。

3．弥生時代

弥生時代の遺跡数は10数ケ所を数え、前代に比べて急激に増加する。大阪市域に最っとも多く、住吉区西住之江町遠里小野遺跡（註－3）、同区南住吉町住吉第８地点遺跡（註－4）、同区同町住吉第７地点（註－4）遺跡、同区山之内町住吉第６地点遺跡（註－5）、同区遠野小野町山之内遺跡（註－6）、東住吉区瓜破東之町瓜破（註－7）遺跡、同区瓜破狭川町瓜破北遺跡（註－8）等がある。

遠里小野遺跡以下４遺跡は、新大和川北側の上町台地頂部付近に集中して立地する。距離的にみて１～２遺跡に統合して考えてよいと思われるが、いずれも小面積での調査成果ゆえ関連が摑めていないいまは別個の遺跡としてとりあげておきたい。遠里小野遺跡は1938年９月に調査され、第Ⅰ様式の鉢形土器・サヌカイト製打製石器・土師器などの他に多量の蛸壺形土器が出土している。他遺跡も同様に蛸壺形土器が出土している。ここは狭間川が大阪湾に注ぎ込む、いわゆる潮口部にあたる。堀田啓一氏はこれについて「飯蛸は水の澄んだ所には生息せず、ど



第１図　今池遺跡と周辺遺跡

第2図　反正天皇陵古墳垂直写真

ちらかといえば海水のよどんだ青黒いところを好み、潮口部を中心に淀んだ地域があって、飯蛸漁などをしつつ生活していた人々の居住地であったろう」としている。また、海岸からの登口に際しても潮口部は便利で、そのような地理的条件もあったろうと述べている。(註－9) 集落の立地は生業や自然条件と切り離して考えられず、注目すべき見解であろう。

瓜破遺跡は瓜破台地の北端の低湿地を望む位置に立地している、農業生産を基礎とする遺跡である。戦前より新大和川川床から弥生時代前期～古墳時代前期にかけての遺物が多量採集されており、弥生式土器と共に採集された王莽の貨泉はとりわけ有名である。近年では1975年と1977年に新大和川北側域で本格的な発掘調査が行なわれ、遺跡の全容がほぼ明らかになった。それによると、集落は弥生時代前期より営まれ、中期には周囲に大溝を巡らし、内側に建物群と土壙墓群をもつ大集落としてあり、古墳時代前期までの長期間存続した遺跡であることがわかる。

堺市域では、中田井町田出井遺跡(消滅？)(註－10)、三国ケ丘町三国ケ丘遺跡(全壊)(註－10)、北花田町北花田遺跡(註－11)、南花田町南花田遺跡等(註－12)があげられる。

前の2遺跡は、小量の弥生式土器・石器等の遺物の出土が伝えられるのみである。北花田遺

第３図　百舌鳥湯の山古墳遺物出土状態図

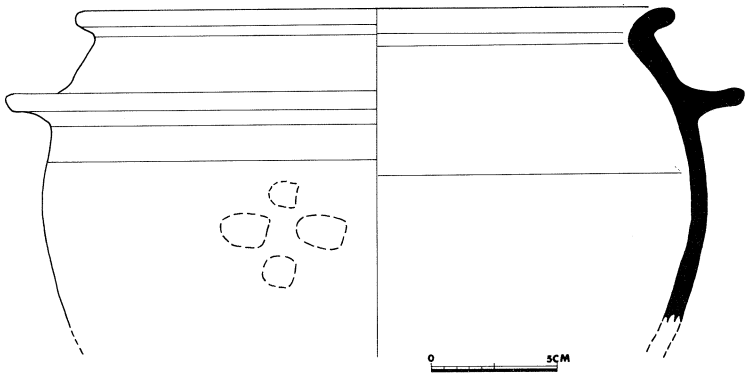
跡では弥生時代のピットと中世の井戸が検出され、弥生式土器・瓦器・曲物等が出土している。しかしながら、調査面積の関係上明確な全体像はいまだにつかめていない。

この様に弥生時代に入ると遺跡数は急増する。また瓜破北遺跡の様に特定地域内で長期間継続して営まれる、中心的大集落が出現してくる。この様な集落は大阪平野南部においていくつかあげられる。長原遺跡や池上遺跡、四ツ池遺跡等がそれである。このような大集落は、他の遺跡に比べて政治的により傑出した集落であると考えられ、弥生時代のこの地域の様相を暗示させる。

４．古墳時代

大阪市域では住吉区西住吉町住吉第10地点遺跡(註－13)、同区遠里小野町住吉第４地点遺跡(註－13)、同区杉本町住吉第３地点遺跡(註－13)、同区遠里小野町住吉第１地点遺跡(註－13)、同区山之内町住吉第５地点遺跡(註－13)、東住吉区瓜破東之町花塚山古墳(註－14)等がある。

第10地点遺跡以下４遺跡は、先述の遠里小野遺跡と同地域にあり、１～２遺跡としてとらえられる可能性がある。出土遺跡としては、須恵器・土師器等の一般的なものの他に蛸壺形土器・土錘等が出土しており、この遺跡が弥生時代から引き続いて営まれたことを想定させる。



第４図　三宅遺跡出土、羽釜形土器

花塚山古墳は墳丘が削平され、今日では姿をみることはできないが、相当規模の古墳であったことが伝えられている。この地域には、この様に墳丘が削平され痕跡だけをとどめる古墳が数多くある。六反古墳跡や城山古墳跡、最近の発掘によって明らかになった長原古墳群等がそれである。長原古墳群では約19基の小規模古墳が確認されている。これらを統括して広義の「長原古墳群」とする意見もあり、平野部の新たな古墳群として注目されている。(註－15)

堺市域では北三国ケ丘町田出井山古墳(伝反正陵)(註－16)、その陪塚の天王古墳(註－16)、鈴山古墳(註－16)、新掘町今池遺跡等がある。(註－17)

田出井山古墳は全長148m、後円部径76m、前方部幅110mの大古墳である。最近近傍で行なわれた発掘調査によって周濠が２重であったことが明らかとなった。鈴山古墳は１辺22m、高さ３mの方形墳で、１重の周濠をもつ。天王古墳も１辺19m、高さ３mの方形墳である。(註－18)これらの古墳は百舌鳥古墳群の北端に位置している。

今池遺跡では、洪積台地中位面の谷間をぬって北上する狭間川を利用した大溝と、「コ」字形に木枠で形成した水霊祭祀跡が検出され、出土遺物より５Ｃ後半から６Ｃ中頃を中心に祭祀が行なわれていたことが明らかとなった。またこの遺跡発掘によって、周辺の洪積台地に生活遺跡が存在することが推察されることとなった。

松原市域では、松原市上田伝丹比柴籬宮跡(註－19)、三宅町三宅遺跡(註－20)、上田町上田町遺跡(註－21)、上田町樋野ケ池古窯跡等がある。(註－22)

伝丹比柴籬宮跡では、名称通りに宮殿址を思わせる遺構・遺物は現在のところ検出されていない。しかし最近の発掘調査で、古墳時代の前期～中期を主とした北流する旧河道と数本の溝跡が検出され、多量の古式土師器の出土をみた。その中には人為的に埋設したと思われるものもある。三宅遺跡は、記紀の記載にある「依羅屯倉」跡推定地として考えられている遺跡であ

るが、この遺跡の範囲内も近年発掘された。しかしながら、古墳時代の遺構は調査地区内からは検出されず、後述する中世の遺構が確認された。しかし、遺物包含層からは須恵器片等が出土しており、周辺に古墳時代の遺構が存在する可能性は十分にあると考えられている。上田町遺跡は1964年と1973年に調査され、第1次調査では明確な遺構は検出されなかったものの、古式土師器が出土して話題を呼んだ。第2次調査では、松原警察署構内で古墳時代のピットと中世の遺構が検出され、須恵器(古墳時代中期)・弥生式土器・木杭等が伴出した。古式土師器は、今だ決定的な位置付けがなされておらず、これらの遺跡の調査成果が注目される。樋野ケ池古窯跡は、洪積台地中位面の谷間をせきとめた通称、樋野ケ池の「波消し」として残存した部分に露呈する須恵器窯跡である。従来は、数基が小丘陵の斜面に群集していたものと考えられる。表面採集された遺物から判明した事実として、技法・形態に鮮明度がなく、焼成・胎土にも陶邑古窯跡のそれとはやや異なるなどの諸点があげられる。尚、窯の使用時期は6C前半と考えられる。

この様に、古墳時代に入ると遺跡数はさらに増加し、水利能力の低い洪積台地中位面にも集落が営まれるようになる。この時代はまた、この地方を挟む様にして古市・百舌鳥の2大古墳群が営まれ、陶邑古窯跡群が営まれるなど目立った動きが見られ、政治・経済の中心地であったとされている所から、今後研究が進むにつれてこの地域の様相についてさらに大きな成果があげられる。

5．古墳時代以降

大阪市域では住吉区山之内町住吉第2号地点遺跡(奈良時代～平安時代)、同区干躰町津守廃寺跡(奈良時代～鎌倉時代)、東住吉区瓜破東之町瓜破廃寺跡等がある。(註－23)(註－24)

津守廃寺跡は1945年代に調査され、存在が確認されている。(註－24)しかし、他の遺跡についてはいまだ不明な点が多い。

堺市域では、新金岡町新金岡町所在遺跡、北三国ケ丘町北三国ケ丘遺跡、依羅池跡等がある。(註－25)(註－26)(註－27)新金岡町所在遺跡では、13C～14C頃の2棟の掘立柱建物と規則性をもつ溝、墓坑、井戸等の遺構が検出されている。またそれに伴なう瓦・羽釜・甕・瓦器・陶磁器等の遺物が報告されている。特に墓坑については、出土した白磁や青磁をもとに文献史料を併用して、附近の在地領主であった和田氏のもの、との結論が出されている。北三国ケ丘遺跡では、深さ1m程の南北方向に走る溝から14C末頃の瓦器・瓦・瓦質甕・埴輪等が出土している。埴輪は田出井山古墳からの流入物であると考えられ、同古墳の築造時期判定の貴重な資料となっている。依羅池跡は、本遺跡の西側に存在する、『記・紀』にも数ケ所記載がみえる古代の池である。近年まで、その所在地については諸説唱えられ、結論をみるに至っていなかったが、新大和川をはさんだ

形で洪積台地中位面の低地を利用して作られていたことが最近の考古学的調査や地籍調査、大依羅神社所蔵絵図等から復元され、確証を得るに至った。

松原市域では、三宅町三宅遺跡があげられる。三宅遺跡は西除川の氾濫平野の東側、瓜破遺跡のある洪積台地中位面の西縁辺部(註－28)に位置する。最近の発掘調査によって、12C後半～13C前半の掘立柱建物数棟と数多くの排水溝を検出した。今後の周辺地域での調査が期待される遺跡である。

この他に、本遺跡の南約1.5kmの所には、古代の道と推定されている長尾街道がある。また本遺跡周辺には、東西・南北方向に整然と区画された条里制遺構が広がっている。

長尾街道は、古代の河内国国府の所在地と推定される藤井寺市国府より田出井山古墳の北側にある方違神社まで一直線に西進する道で、これを岸俊男氏は「大津道」に比定している。氏はこの他に、難波京の中軸線より南進して松原市と堺市の境界線に至り、長尾街道に達する南北方向の古道があるとの説を唱えている。この古道が実存したとすれば、それは本遺跡内を通過することとなる。しかし、いままでの調査地区内では、検出されていない。(註－29)

次に条里制遺構についてであるが、この地域の条里の里・条の起点や坪付を述べたものに由井喜太郎氏の論文がある。それによると、丹比郡の条里は里の起点を長尾街道に置き、条の起点を摂津国住吉郡に接する北山・南山・枯木・油上・我堂を含む線に置いて、西南隅より東北隅に数える坪割となるとされる。この他『堺市史』続篇第1巻では、河内国依羅郷に隣接する摂津国大羅郷の長尾街道北側の条里が、いずれも「一ノ坪」から「六ノ坪」を欠き、河内国依羅郷に接する南北方向の条里が「六ノ坪、七ノ坪」、「十八ノ坪、十九ノ坪」、「三十ノ坪、三十一ノ坪」を欠くことが報告されている。そして、これを「摂津国大羅郷は『オオヨサミ』と読み、河内国依羅郷とともに、依羅池・依羅屯倉のあった地域であり、依羅造・依羅宿禰・物部依羅など、依羅諸族の本貫地であり、両郷は極めて共通した性格をもつ地域である。従って、この連地域縦断して摂津国境が設けられたことによって、条里坪付が政策的に不整合なものにされたということができよう。」と説明している。(註－30)

〔古代氏族〕

この地域の古代氏族として文献上に見えるものに依羅氏がいる。今これを年代順に追ってみると、

史料1、『日本書記』仁徳天皇42年9月条

庚子朔、依羅屯倉阿弭古、捕異鳥、献於天皇曰、臣毎張網捕鳥、未曽得是鳥之類、故奇而献之。天皇召酒君、示鳥曰、是何鳥矣。酒君対言、比鳥之類、多在百済。得馴而能従人。亦捷飛之掠諸鳥。百済俗号比鳥曰倶知、今時是鷹也乃授酒君令養馴。未幾時而得馴。酒君則以韋緡著其足、以小鈴著其尾、居腕上、献干天皇。是日、幸百舌鳥野而遊猟。時雌雉多起。

乃放鷹令捕。忽獲数十雉。

史料２、『日本書紀』皇極天皇元年（642）５月条

乙未（５日）、於河内国依網(羅)屯倉前、召翹岐等、令観射猟。

史料３、『西琳寺縁起』養老６年（722）３月23日

一、僧宝等事

天平十五年帳云

僧沙弥並廿二口僧十六僧　見在口之中二僧借住
四不知去三死

僧行會　年五十四　摂津国住吉郡大国里戸主津云々
臈卅三　戊申年四月廿八日飛鳥寺受戒受公験

（中略）

僧知蔵　年五十一　河内国丹比郡余戸郷□□戸主依(羅)□白波男廣鳥
臈十九　養老六年三月廿三日薬師寺受戒受公験

（中略）

右四僧不知去

史料４、『続日本紀』神護景雲元年（767）７月条

辛未（24日）、河内国志紀郡人正六位上山川造魚足等九人、賜姓山川連。同国同郡人従六位上依羅造五百世麻呂、丹比郡人従六位下依羅造里上等十一人、依羅連。

史料５、『新撰姓氏録』引仁６年（815）７月

河内国神別　起管生朝臣。　尽等禰直。六十三氏。

天神

（中略）

物部依羅連

神饒速日命之後也。

矢田部首

同神六世孫伊香我色雄命之後也。

（中略）

襷多治比宿祢

火明命十一世孫殿諸足尼命之後也。男兄男庶。其心如女。故賜襷為御膳部。次第男庶。其心勇健。其力足制十千軍衆。故賜靫弓四十千健彦。因負姓靫負。

丹比連

火明命之後也。

史料６、『新撰姓氏録』引仁６年（815）７月

河内国諸蕃　起高宿禰。尽伏丸。五十五氏。

漢

（中略）

三宅史

山田宿禰同祖。忠意之後也。

（中略）

依羅連

出自百済国人素禰志夜麻美乃君也。

山河連

依羅連同祖。素禰夜麻美乃君之後也。

以上となる。史料1、2については、そのまま信じるわけにはいかないが、依羅に屯倉が置かれて依羅氏がその管理にあたっていたことだけは読みとっていいと考える。「阿弭古」については直木孝次郎がカバネの一種であるとし、その伝承から大化以前の皇室と密接な関係のあるものが多い(註−31)としている。そして、官職としての阿比（弭）古が制定され、機能を発揮した時期を5世紀を中心とする時期だと考えられるとしている。また依羅屯倉については、井上辰雄が「もともと屯倉は、穀霊信仰と顕著に結びついていたであろう。」とし、「屯倉でも開墾地に立つ屯倉として初期に属する点に注目すれば、大王に対する御贄貢献がほぼ五世紀初頭にすでに成立していたと考えてよいであろう。」(註−32)としてその性格を説き、「屯倉の管理者は御贄貢献を最も重要な職掌としていた」と依羅屯倉阿弭古の性格についても説明している。これで依羅氏の性格がほぼわかろう。

また史料4からは、8C中頃の依羅一族が下級官僚として国家機構に組み込まれていたことが読みとれる。

次に出自であるが、史料6では「百済国人素禰夜麻美乃君也。」とし、史料5では「物部依羅連」としている。屯倉設置に関しては物部・大伴氏が深く関係しているとされるから(註−32)「百済国人云々」はともかくとして物部系の氏族であることが考えられる。そして9世紀初頭までは、確実に系譜が続いていたと考えられる。

居住地については、正確にはつかめないが、依羅池附近より依羅屯倉跡とされる松原市三宅町にかけての一帯であろうと思われる。

史料では、依羅氏の他にこの地域の氏族として矢田部首（大阪市住吉区矢田附近）、三宅史（松原市三宅町附近）、襷多治比宿禰（丹比郡中）などが見え、このうち矢田部首は物部依羅連と同神をもつから依羅氏と深い関係にある氏族であろうと考えられる。また志紀郡の山川氏も同様であろう。文献上では以上のことが考えられる。

〔式内社〕

式内神社は『延喜式』巻九　神祇に以下のように記されている。

神名上　宮中　宮中
五畿内　東海道

（中略）

畿内神六百五十八座 大二百卅一座 小四百廿七座

（中略）

河内国一百十三座

大廿三座 並月次新嘗。就中、八座預相嘗

小九十座 並宮幣

（中略）

丹比郡十一座 大三座 小八座

丹比神社 鍬鞦　　阿麻美許曽神社 鍬鞦

狭山提神社 大。月次新嘗。　　大津神社三座 鍬鞦

酒屋神社 鍬鞦　　菅生神社 大。月次新嘗

田坐神社　　櫟本神社 鍬鞦

このうち本遺跡近辺のものとしては阿麻美許曽神社があり、大阪市東住吉区矢田枯木町に現存している。また北方には、大依羅神社（同市住吉区庭井町33）がある。

阿麻美許曽神社は、スサノオの命を祭神とし、西除川の近傍に位置する神社である。大依羅神社は、依羅池の北側の池畔にある神社で、依羅我彦の祖建豊波豆羅和気王を主祭神とする。

（森村・川口）

註

註－1　三浦周行監修『堺市史』第一巻　堺市役所　1929年
註－2　中西弘光「堺市南榎町の縄文遺跡」　『古代学研究』1号
註－3　『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第十二輯　大阪府
註－4　瀬川芳則『住吉の上代遺跡』1959年
註－5　註－4参照。
　　小林行雄『日本考古学概説』　創元新社　1951年
註－6　『大阪府文化財分布図』　大阪府教育委員会　1977年
註－7　山本博「河内国大和川床出土の弥生式遺物に就いて(1)」　『考古学雑誌』第30巻第11号他
註－8　不明「大阪市土木局の共同溝建設に伴う瓜破北遺跡発掘調査結果について」（現地説明会用パンフレット）大阪市教育委員会　1973年
註－9　堀田啓一「住吉周辺の考古学散歩(一)」　『すみのえ』通巻152　春季号　1979年
註－10　註－1参照。
註－11　堺市教育委員会　1980年発掘調査
註－12　堺市教育委員会　1975年発掘調査
註－13　註－4参照。
註－14　森浩一・井上薫共編『大阪府史』第1巻古代編Ⅰ　大阪府　1978年
註－15　註－14参照。
註－16　註－14参照。

註—17　森村健一『今池遺跡』—学校予定地内発掘調査報告書—　今池遺跡調査会・堺市教育委員会　1976年
註—18　森村健一『反正陵二重濠確認調査概報』　堺市教育委員会　1980年
註—19　松原市教育委員会　1979年12月発掘調査
註—20　松原市教育委員会　1979年８月発掘調査
註—21　原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」　『大阪府立島上高等学校研究紀要』復刊３号　1968年
註—22　註—20参照。
註—23　註—４参照。
註—24　註—６参照。
註—25　樋口吉文『新金岡町所在遺跡発掘調査抄報』（中世墓地の調査）　堺市教育委員会　1978年
註—26　堺市教育委員会　1977年発掘調査
註—27　森村健一『大和川・今池遺跡』—第一地区発掘調査報告—　大和川・今池遺跡調査会　1979年
註—28　註—20参照。
註—29　坪井清足・岸俊男共編『古代の日本』５近畿　角川書店　1970年
註—30　由井喜多郎「河内国条里の研究」　『ヒストリア』13号
註—31　直木孝次郎『日本古代国家の構造』　1958年
註—32　竹内理三編『古代の日本』１要説　角川書店　1971年

文化財一覧表　（『大阪府文化財地名表』大阪府教育委員会 1977 より抜粋）

大阪市

遺跡番号	文化財名称	種類	時代	文化財所在地	所有者	地目	立地	摘要
66	住吉行宮跡			大阪市住吉区 墨江中	国及 住吉大社			史跡
68	住吉第８号 地点遺跡		弥生・古墳	大阪市住吉区 南住吉町２丁目	連　利三	畑	台地	範囲（N－S 10m　E－W 10m）　土師器片、須恵器片、石鏃、（我孫子中学校）　半壊
69	住吉第10号 地点遺跡	散布地	古墳	大阪市住吉区 西住吉町２丁目	大阪市	水田	低湿地	範囲（N－S 5m　E－W 15m）　須恵器片（我孫子中学校　瀬川芳則） 瀬川芳則：住吉の上代遺跡　全壊
70	住吉第７号 地点遺跡	〃	弥生・古墳	大阪市住吉区 西住吉町	山本敏男	畑		範囲（N－S 20m　E－W 15m）　石鏃、小型土錘（瀬川芳則：我孫子中学校） 瀬川芳則：住吉の上代遺跡　全壊
71	住吉第４号 地点遺跡	住居跡	古墳	大阪市住吉区 遠里小野町３丁目	関西電力KK その他 川本正一 間瀬　章	畑	台地	N－S 30m　E－W 5mの範囲　須恵器（杯、甕、壺、瓶、土錘） 鐸状土製品　石鏃１（瀬川芳則　我孫子中学校） 瀬川芳則：住吉の上代遺跡　半壊
72	住吉第３号 地点遺跡		〃	大阪市住吉区 杉本町３丁目	山野商事KK	宅地	台地	範囲（N－S 10m　E－W 10m）全壊 須恵器（瓶、壺、高杯、蓋杯）　土師器（甑、杯）　桃の実験（瀬川芳則） 瀬川芳則：住吉の上代遺跡
73	住吉第１号 地点遺跡	住居地？	〃	大阪市住吉区 遠里小野町２丁目	関西電力KK	畑		範囲（N－S 20m　E－W 20m）須恵器、土師器、土錘、鐸状土製品（我孫子中学校　瀬川芳則） 瀬川芳則：住吉の上代遺跡　半壊

遺跡番号	文化財名称	種類	時代	文化財所在地	所有地	地目	立地	摘要
74	住吉第2号地点遺跡	散布地		大阪市住吉区山之内町4丁目	関西電力KK	宅地	台地	範囲（N－S 20m　E－W 20m）土錘（我孫子中学）瀬川芳則：住吉の上代遺跡　半壊　瓦（奈良～平安）
75	住吉第5号地点遺跡	住居跡	古墳	〃　〃　〃	原田栄治郎ほか	〃	〃	範囲（N－S 10m　E－W 30m）須恵器片、鐸状土製品（瀬川芳則　我孫子中学校）瀬川芳則：住吉の上代遺跡　全壊
76	住吉第6号地点遺跡	散布地	弥生・古墳	〃　〃　〃（市営住宅）	大阪市			範囲（N－S 200m　E－W 50m）土師器、須恵器、鐸状土製品、石小刀、石鏃、石包丁、磨製石斧、（京都大学、藤井直正、瀬川芳則）土偶（縄文晩）東大人類 弥生式土器（前・中（3．4）） 小林行雄：日本考古学概説　瀬川芳則：住吉の上代遺跡、藤井直正氏調査、京都大学考古学資料目録（P228）
79	山之内遺跡		弥生	大阪市住吉区遠里小野町		宅地		
85	瓜破遺跡		弥生前～後	大阪市東住吉区瓜破東之町（大阪市瓜破霊園）				弥生式土器、貨銭、木製品『農耕文化の生成』
106	津守廃寺跡	寺院跡	奈良～鎌倉	大阪市住吉区千躰町				昭和20年代に発掘調査　古瓦　土器出土
124	加美北遺跡	集落跡	弥生～古墳	大阪市平野区加美鞍作1丁目8-5				弥生式土器・土師器

堺市

遺跡番号	文化財名称	種類	時代	文化財所在地	所有地	地目	立地	摘要
7	田出井町遺跡	弥生		堺市中田井町2丁		宅地	台地	弥生式土器、石器（石鏃、磨製小石杵）「先史時代及び原史時代の遺跡」全壊と思われる。（堺市史第1巻）昭2．発見
8	田出井山古墳（「反正天皇陵」）	前方後円墳	古墳中	堺市北三国ケ丘町2丁	宮内町	（山林）墳墓地	（丘陵端）台地	（周堤）、周濠1重、段築、造出（左）、長軸方向N－S（伝反正天皇陵）保存良好（完存）、全長148m　後円径76m　前方部幅110m
9	天王古墳	（円墳）方形墳	古墳中	堺市北三国ケ丘町3丁		山林	台地上平坦地	1辺13m、反正天皇陵部塚、保存良好
10	鈴山古墳	（古墳）方形墳		〃　〃　〃		〃	〃	1辺22m、高さ3m、周濠一重、段築、墳丘保存良好、反正天皇陵部塚、墳丘の西側濠残存、東、北、南側道路及び空地のため破壊
18	三国ケ丘遺跡			堺市三国ケ丘町南1丁		宅地	（丘陵）台地上	弥生式土器、石器（石包丁、石鏃、石鎗、石斧、磨製石斧、土器紡錘車）「先史時代及び原始時代の遺跡」（堺市史第1巻）大13発見

遺跡番号	文化財名称	種類	時代	文化財所在地	所有者	地目	立地	摘要
37	南花田遺跡		弥生中	堺市南花田町			平地	
39	北花田遺跡	住居跡	弥生中～古墳	堺市北花田町		水田・宅地	平地	範囲300×500m 遺構大型ピット(弥生)、井戸(鎌倉)、弥生式土器(壺、ため壺等)、石鏃、瓦器(関大考古学研究室)、西除川の流域に住置し、水田耕作のために削りとられ、深いピット井戸等を残す。区画整理により盛土されている。破壊の危険性大。
172	北三国ケ丘遺跡	散布地	古墳～鎌倉	堺市 北三国ケ丘2丁				スズ山古墳周辺 堺市教育委員会発掘調査、北野俊明 1977
175	方遺神社のくろがねもち			堺市 北三国ケ丘町2丁82	堺市			府天
179	今池遺跡	溝	古墳	堺市 新堀町1丁85－2 (通称今池)				森村健一『今池遺跡』堺市教育委員会 1976.3
190	向泉寺跡			堺市三国ケ丘				

松原市

遺跡番号	文化財名称	種類	時代	文化財所在地	所有者	地目	立地	摘要
2	丹比柴籬宮跡	宮殿跡	古墳後期	松原市上田215	安松茂	畑・宅地	平地	範囲NS1200m EW1000m 宮跡を証明する資料は発見されていない。 大正9年、昭和19年史跡指定
4	上田町遺跡	集落跡	古墳前期	松原市上田町	郵政互助会	宅地	〃	弥生式土器、古代土師器、須恵器『大阪府立島上高等学校研究紀要』復刊3号(1968)『節・香・仙』第27号(1975)前方後円墳『大阪府の歴史』(1975)
8	三宅(屯倉)遺構	古墳後期	古墳後期	松原市三宅、馬場		〃	〃	範囲(NS 200 FW 180m)屯倉を証明する資料は発見されていない。

Ⅱ 調 査 経 過

1．調査に至る経過

大和川・今池遺跡は古墳時代の集落遺跡であるが、歴史から忘れ去られてしまい、大阪府及び堺市の埋蔵文化財分布図にもまったく記されていなかった。この遺跡が周知されるようになったのは、本地域に大阪府下水道部が下水処理場建設を計画し、それに対して1977年に「堺市宅地開発等指導要項」に基づき堺市教育委員会が2回にわたって試掘調査を実施したことによる。試掘調査の結果地表下30cm～50cmに遺物包含層が認められ、また遺構の存在も予想されるところであったので、処理場建設計画が実施された場合、遺構の破壊はまぬがれないものと考えられた。下水処理場の建設と遺跡の保存をめぐって大阪府下水道部・大阪府教育委員会・堺市教育委員会はそれぞれ協議を進めてきたが、汚水・雨水の流域や処理後の水の放流の関係で大きく地域を変更できないこと、処理場建設に必要な敷地が本地区以外では確保し得ないこと、下水処理場建設が火急の事業であること、などから当該地区での処理場建設も止むを得ないと判断され、「重要な遺構が検出された場合、保存に配慮する」ということで下水処理場建設に先立って発掘調査を実施する運びとなったものである。

調査の実施にあたっては大阪府教育委員会・堺市教育委員会・松原市教育委員会の三者で調査会を結成し、事務局を堺市教育委員会社会教育課内に置いてこれにあたることになった。調査会の組識は下のとおりである。

大和川・今池遺跡調査会（発足時）

理 事 長　高尾正二（堺市教育委員会教育長）
副理事長　戸神繁一（堺市教育委員会教育次長）
理　　事　谷川秀善（大阪府教育委員会文化財保護課長）
〃　　萩原行夫（堺市教育委員会社会教育部長）
〃　　土井源幸（松原市教育委員会指導部長）
〃　　吉田敬道（堺市文化財保護委員）
〃　　小谷方明（堺市文化財保護委員）
〃　　福島雅蔵（堺市文化財保護委員）
顧　　門　末永雅雄（関西大学名誉教授）
監　　事　深井久男（堺市教育委員会教育次長）

監　　事　　滝野正秀（松原市教育委員会指導部次長）
〃　　高橋健雄（堺市教育委員会財務係長）
事務局長　　中村楠美（堺市教育委員会社会教育課長）
調査部長　　石神　怡（大阪府教育委員会文化財保護課技師）
調査主任　　奥田　豊（堺市教育委員会社会教育課文化財保護係長）

以上の経過を経て1978年4月1日から同年6月14日まで第1地区（第1水処理棟建設予定地）の発掘調査を実施したが、その結果10数棟の掘立柱建物ほかを検出したことはすでに報告したとおりです。

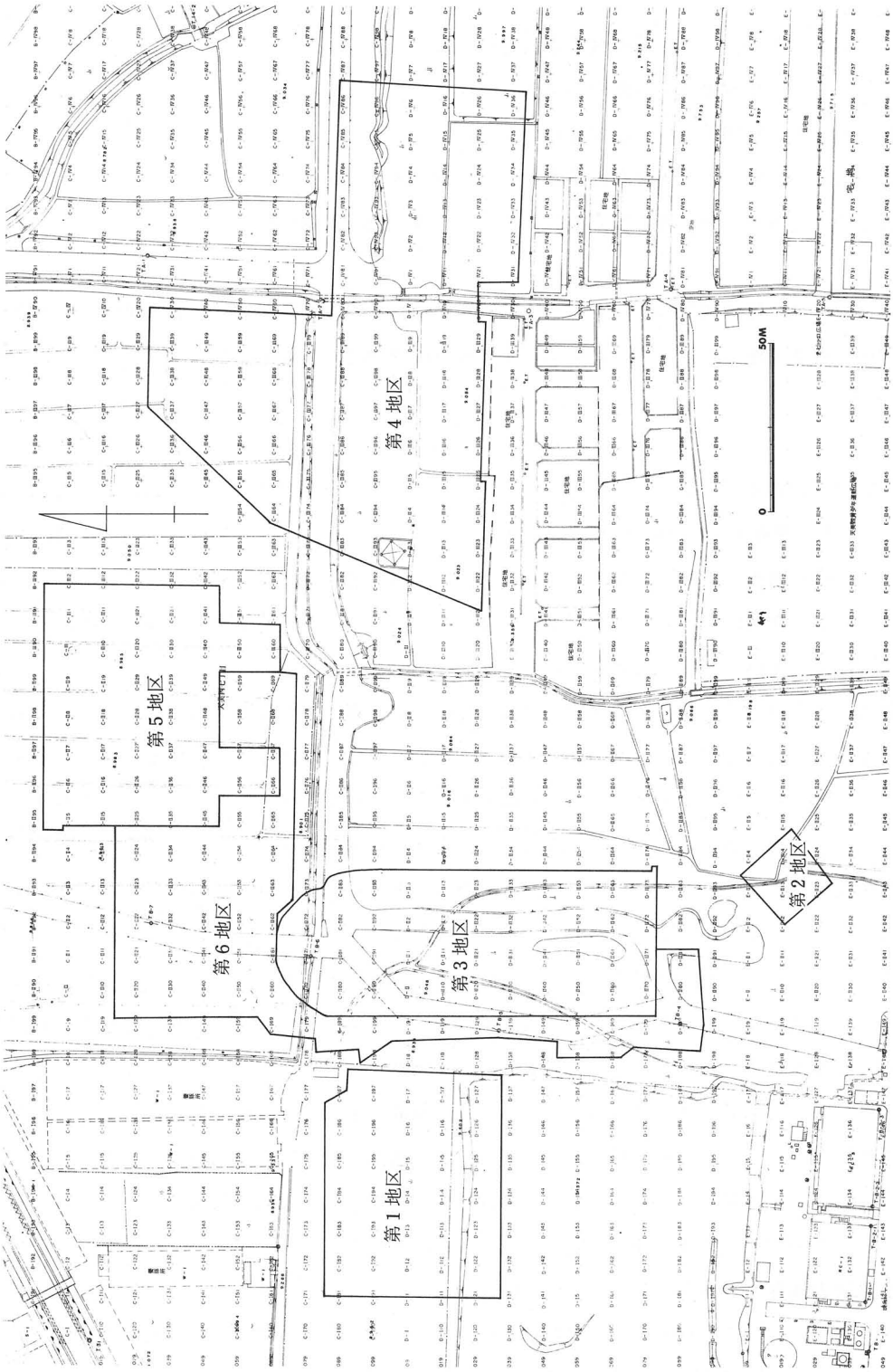
発掘調査の着手前に第1期下水道計画に上がっている処理場内の北半分について南部下水道事務所作製の500分の1の現状図に100m方眼の杭打ちを行った。10m角杭と説明板を設定したが現在（昭和55年3月31日）も遺存しているのは、「C-Ⅱ」と「D-Ⅱ57」だけである。尚、杭名は、北からA、B、C……、西からⅠ、Ⅱ、Ⅲ……、各ブロック内をそれぞれ10m方眼に図上作製し東西に「平行式」に1～100まで名付けた。

調査区域の設定には、第1～5地区に関しては、各工事の影響範囲内にとどめていたが諸施設を連絡する管廊の取り扱いがクローズアップされ将来にわたる保存行為が不実行となる事を考え合わせると工事区間を接合したいわゆる面的な調査に変更することを南部下水道事務所に提示し、再度の協議の後、「接合型」の調査方法を採用、実施することにした。

次に人員の確保についての問題となると調査員と調査補助員の確保と育成に上げられよう。調査員については、雇用期間の制限から京都・仏教大学大学院生を、調査補助員については、関西大学・仏教大学・大阪市立大学・同志社大学・近畿大学・阪南大学・桃山学院大学等を採用した。内業での調査員を3～4人、調査補助員として女子学生を中心に春・夏休みの期間を利用して事を進めてきた。

土器洗浄・ネーミング・石膏入れについては、近隣の主婦を採用する事によって辛うじて報告書作製までこぎつけてきたが少なからずや必要な考古学的な知識を修得した学生が全体の約半分にもみたない事には多少の不安の念を持ちつづけている。しかし、数次にわたる長期採用によって一定の考古学的水準に達した発掘調査から報告書へという一貫作業が成し遂げられてきた。

第3地区の保存　棟持柱を有する掘立柱建物については、その重要性を考慮して30cmの砂と4mの盛土によって永久保存へと決定した。尚、その際、管廊については一部設計変更の協力をいただいた。保存区域は、「D-Ⅰ69」・「D-Ⅱ60」・「D-Ⅱ70」・「D-Ⅰ79」を結ぶ4点内である。



第5図　大和川今池遺跡第1～6地区位置図

2．調査日誌

第3・4地区及び試掘調査日誌抄

昭和53年11月24日

地元関係者、南部下水道事務所にあいさつを行う。

午後から発掘調査方法、安全作業について内部の打合せ。

昭和53年11月26日

発掘調査請負業者と発掘方法、安全作業等について細部の協議。

昭和53年12月4日

第3地区の草刈：廃材その他の資材片が散乱していたため思うように作業が進まない。

昭和53年12月6日

第3地区の耕作土及び盛土の排土開始。

床土の直下は、黒褐色粘質土の包含層が見られた。又、近世期の耕作用井戸が多量に検出されそうである。

昭和53年12月10日

第3地区の包含層掘削開始。

第4地区は包含層上面まで機械掘削によって排土開始。

昭和53年12月21日

第3地区、D－Ⅱ－60～70まで地山面へ掘り下げ西壁面の精査。

昭和53年12月25日

第3地区、D－Ⅱ－60黒褐色粘質土中より滑石製勾玉出土したが遺構に伴うものではなさそう。

昭和53年12月27日

第3地区、D－Ⅱ－62より「元豊通宝」出土。

第4地区、機械掘削分完了、午後の打合によって仕事始めを昭和54年1月8日とする。

昭和54年1月9日

第3地区、周囲四壁の精査と土層図の仕上げ。

昭和54年1月11日

第3地区、D－Ⅱ－30～33まで掘削完了、地山が南と異なり灰黄色微砂粒土になる。

第4地区、東・西壁土層図作製

昭和54年1月19日

第3地区、南西隅で棟持柱を有する掘立柱建物を検出した。1間×1間

昭和54年1月23日

試掘第7地点において地山を掘り込んだ柱穴らしきピットを検出した。その地点より東側は、0.5m降下するので4地区のかね合いから建物群は、この微高地に限定される。

昭和54年2月2日

第3地区の中央から北側にかけて、40ヶ所におよぶ耕作用井戸が検出された。

試掘地点の土層図を完了、やはり東側は、土地条件図にみられた西除川の氾濫源内に入る。

昭和54年2月5日

中央部、北側で地山直上層から弥生式土器、土師器、管玉出土

昭和54年2月20日

P－7より布留式土器・高杯を、P－8からは須恵器・土師器片と伴出して鉄滓出土。

昭和54年3月7日

第3地区、P－16と呼ばれる耕作用井戸が桶側である事が判明した。

第4地区、条里制畦畔を精査しその部分のみ1/10の縮尺で土層図作製。

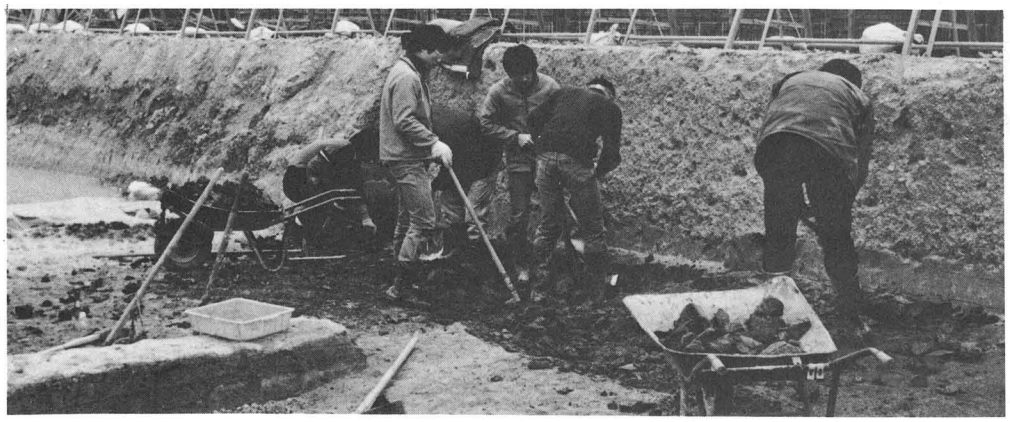
昭和54年3月25日～29日

第3・4地区共に、航空測量用の精査を行い同時に各遺構の写真撮影を実施。

昭和54年3月30日

午前10時に航空測量を行った後、直に耕作用井戸の前割調査に入る。

約4ヶ月内の調査期間に15,000㎡を対象に調査出来たのも学生諸君の努力である。(森村)



第６図　発掘調査風景、案内協力板、内業作業風景

第５地区、調査日誌抄

６月25日　調査方法につき検討する。その結果、調査区域を地形変換部分で西側と東側に分け、さらに南側突出部を加えて三つに区分し、調査は西側から始めて、順次作業を東側、南側突出部に移すことを決めた。

６月26日～７月７日　進入路工事の後、調査区域西側を包含層上面まで機械掘削する。排水溝掘削中に古墳時代の井戸（ＳＥ01、ＳＥ02）を検出する。

７月９日　調査区域西側の壁面精査と、東側の機械掘削を始める。壁面精査が完了した所から逐次、土層実測、写真撮影を行なう。

７月13日　南側突出部を除く区域の機械掘削を終了する。

７月14日　壁面土層実測、写真撮影を終了する。

７月16日　調査区域西側の包含層上面精査開始。

７月19日　包含層上面より杭跡及びピットを検出し、ピットから「至和元宝」等の銅銭が出土。

７月25日　杭跡及びピットの掘削と、実測、写真撮影を行なう。関西大学教授・網干善教博士が来られ、御教示を得る。

７月26日　調査区域西側の包含層掘削開始。

７月27日～８月３日　ＳＥ01、ＳＥ02の掘削をする。その結果、ＳＥ01から須恵器の高杯脚部と土師器の高杯杯部が、ＳＥ02から土師器の甕高杯、小型丸底壺が出土した。

８月４日　ＳＥ01、ＳＥ02の実測、写真撮影を終了する。

８月８日　包含層中より須恵器瓶子、石鏃、鉄器等が出土する。

８月17日　竪穴住居（ＳＢ01）を検出する。

８月23日　調査区域西側の包含層掘削を終了し上面精査を始める。

８月24日～８月31日　掘立柱建物（ＳＢ02、ＳＢ03）、土坑（ＳＫ10、ＳＫ29）、井戸（ＳＥ03）等を検出。

９月１日　調査区域西側の遺構掘削開始。掘削が終了した遺構から、実測、写真撮影を行なう。

９月10日　調査区域東側の包含層掘削開始。

９月11日～23日　包含層掘削が終了した所から逐次上面精査を行なうが遺構は検出されない。

９月24日　南側突出部の機械掘削開始。

９月27日　南側突出部の包含層掘削を、調査区域東側の包含層掘削と並行して進める。

９月28日　調査区域東側の包含層掘削を終了。

９月29日～10月13日　南側突出部分の包含層掘削続行。包含層掘削が終了した所から逐次上面精査、遺構掘削を行なった結果、奈良時代の土坑（ＳＫ41）と近世以後の素掘り井戸数基を検出。実測、写真撮影を行なう。

10月14日　土層観察用の畦畔断面の実測、写真撮影を終了し、取りはずす。

10月15日～17日　航空測量のための全面清掃を行なう。

10月18日　航空測量実施。

10月19日～24日　地質調査のため、平面４×４ｍ、深さ４ｍの掘削を、バックホーで10箇所行なう。

10月25日　掘立柱建物の柱穴を断ち割り、掘方の検出と実測を行なう。

本日、10月25日をもって、大和川今池遺第５地区の発掘調査を終了する。(足立)

第７図　調査風景

Ⅲ　調　査　成　果

1．既調査区

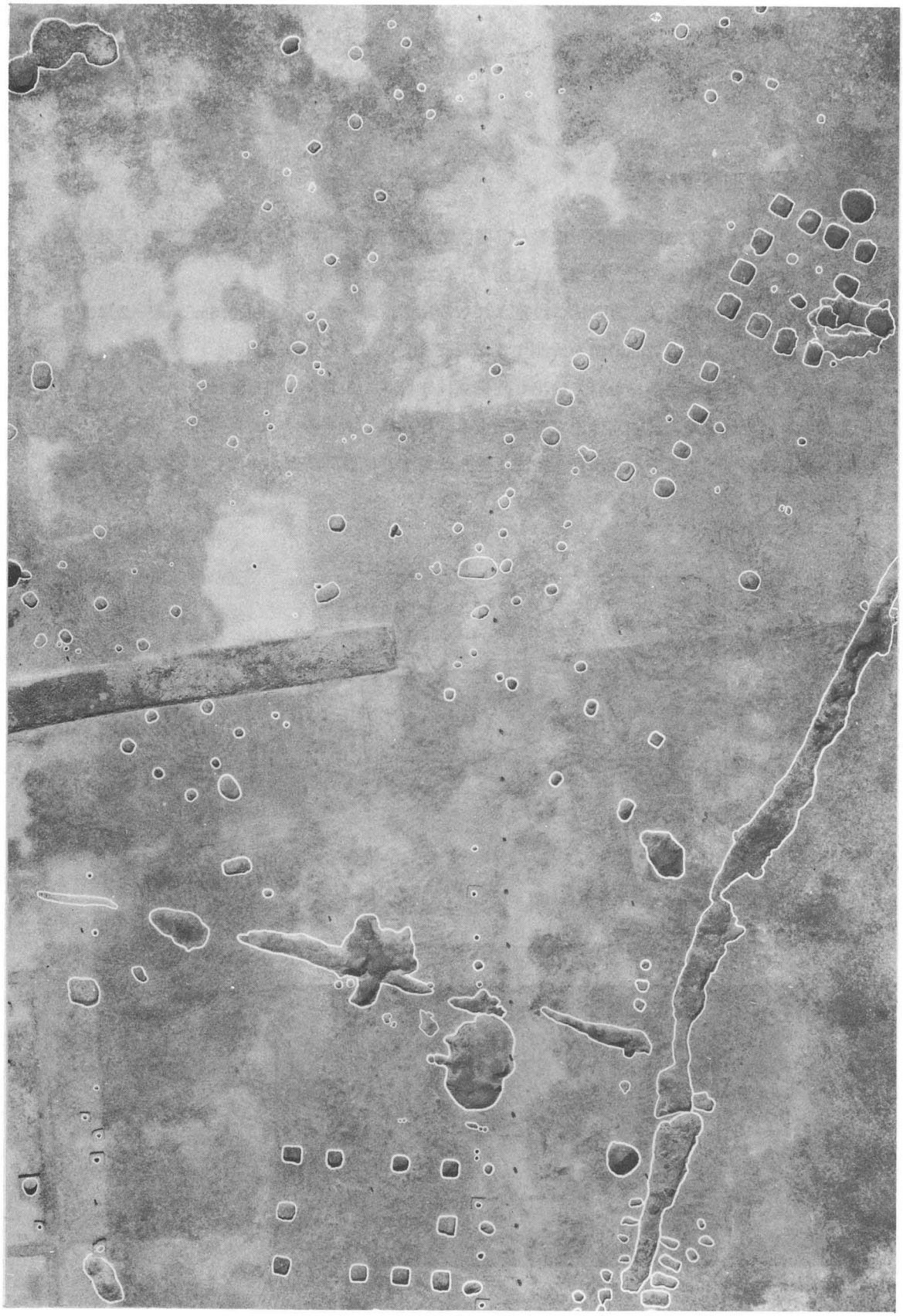
第1地区発掘成果

T字形に設定された溝は、掘立柱建物群と企画性をもって掘削され5世紀後半から約100年内にまたがり使用されたが、後、集落の廃絶と共にしていた。検出された14棟の掘立柱建物群を伴出土器や建物の主軸から建築段階を4期（6世紀前半～後半）に分類した。それらの掘立柱建物を分析するとⅠ期には単位集団の首長たる大型住居を構築しているにもかかわらず倉庫は存在せず、Ⅱ、Ⅲ期に推移するや単位集団の自立性が表出する。その具体的事象として、円形に配設された掘立柱建物群内に大型住居と倉庫、さらには、構成員の住居にプラスして付属建物が3棟組み込まれた内の1棟に大型な建物で共同作業場と考えられる。Ⅳ期に属する建物群は北側に偏在し、前の時期よりも衰退が認められるものの倉庫は一応、群内に含有しているが、この単位集団の終末へとたどる。

この他に、特長付けられるものとしては、各建物築造期の住居と井戸が組み合わさっているものと、集団の存在時期を通じて利用された井戸に分類される。前者は構成員の個人管理という自発的な性格タイプを有し、後者は、集団の共同管理を促がす事象といえる。

第8図　井戸最下層遺物出土状態

洪積台地中位の東縁上に設定されたこの掘立柱建物群は、さらに周辺に広がると思われ濃密度の発掘調査が必要である。



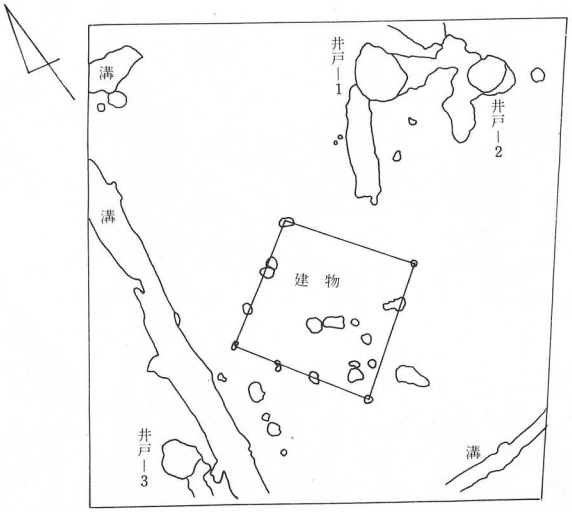
第９図　第１地区　遺構全体写真

第２地区発掘調査概要

この地区は、第１地区の南側に位置し、関西電力特別鉄塔用地として400㎡について発掘調査した成果で、行政区画上、松原市天美西７丁目223番地に所在する。

検出された３本の溝は、方画状に設定されたらしく、溝―１は、0.5～0.6m、溝―２は1.33～1.4m、溝―３は、1.2mの幅を計測するが溝底は0.1～0.3と比較的浅い。

調査区域のほぼ中央部において検出した掘立柱建物は、３間×３間（6.1×6.1m）の東西に主軸をおいた建物で、各柱穴は不定形を呈する。柱穴痕もふぞろいで0.1～0.3mと幅がある。柱穴からは、後述する井戸状遺構―１出土の土師器群とほぼ同時期とおぼしき土師器片が出土した。



井戸状遺構―１は、逆凸形に掘削されて段差部分に布留式土器、甕、高杯を出土した。（２、３）の遺構からは、遺物は検出されていないが埋土からみて、同期に営まれたものであろう。掘立柱建物と井戸状遺構を組み合わさって検出された事に興味深くし、又、溝は６世紀前半～中期にかけて使用されていた。これらの遺構に、四方に拡大していく蓋然性を十分考えられる。

第10図　第２地区、遺構配置図、井戸遺物出土状態

記紀にみる「依羅池」について

「池」が古代において経済的、政治的な重要性を有する事は、周知の事実でもある。特に大和川・今池遺跡のような洪積台地中位という生産性の低い土壌にあっては、その必要性が認知される。それが、当時の集落群成の一要素であるなら洪積台地の窪地や、小河川をせき止めたダム状の溜池に対して、考古学的な視点をかえなければならない。

森　浩一は「河内湖の南側と新たに安定させた広大な水田地帯に給水……」と述べ依羅池の性格を灌漑用と考験しさらに日本書紀・仁徳天皇43年9月条に触れて「中国の池でやっていた養漁・補鳥というようなものへも少し注目しなければならない」と説いている。

掘田啓一は、依羅池を大阪市住吉区庭井町から堺市常盤町3丁付近に設定しているのには賛同出来るが(註—10)、その池に流れ込む水系を新西除川として図示しているが川床のO.Pと依羅池底高を考えた場合又は、新西除川の開鑿が新大和川付替え時に伴うことが考拠しているのでこの解釈には同意し難い。

日本書紀・崇神天皇62年10月条に「(是月)造二依網池一造」古事記、崇神天皇条「又、是之御世、作二依網池一、亦作二軽之酒折池一也」とあり記述をそのまま鵜呑にするならば古墳時代に依羅池を築造し、農業生産性を高揚していたことになりこの記述の前後にも他地域において「池」を造る記述が再三みられ、特に、河内の狭山地方に「池」「灌漑用水路」に充当するものを構築するという具体的な文章が表出する。

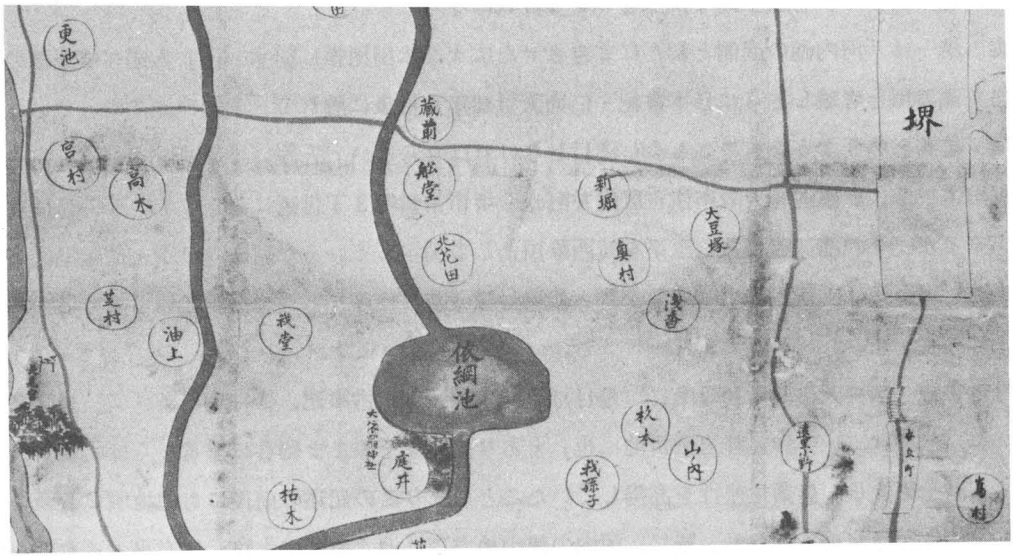
渡来人である秦人の技術を利用して土木工事を完成させていた事が古事記、仁徳天皇条「又役二秦人一作二茨田提及茨田三宅一、又作二丸邇池、依網池一、又掘二難波之掘江一而通海、又、掘二小椅江一、又定二墨江之津一。」と記されていた。

日本書記、応神天皇13年9月条に「瀰豆多摩蘆、豫佐瀰能伊戒砥、奴那波区利、破陪鶏区辭羅砥、委遇比菟区、伽破摩多曳能、比辭餓羅能、佐辭区辭羅珥、阿餓許居呂辭、伊夜干古職辭氏。」とあり依羅池には、ひつじぐさ科の多年生水草である蓴菜すなわちぬなわが池に繁茂した情景を歌にしたものであろう。

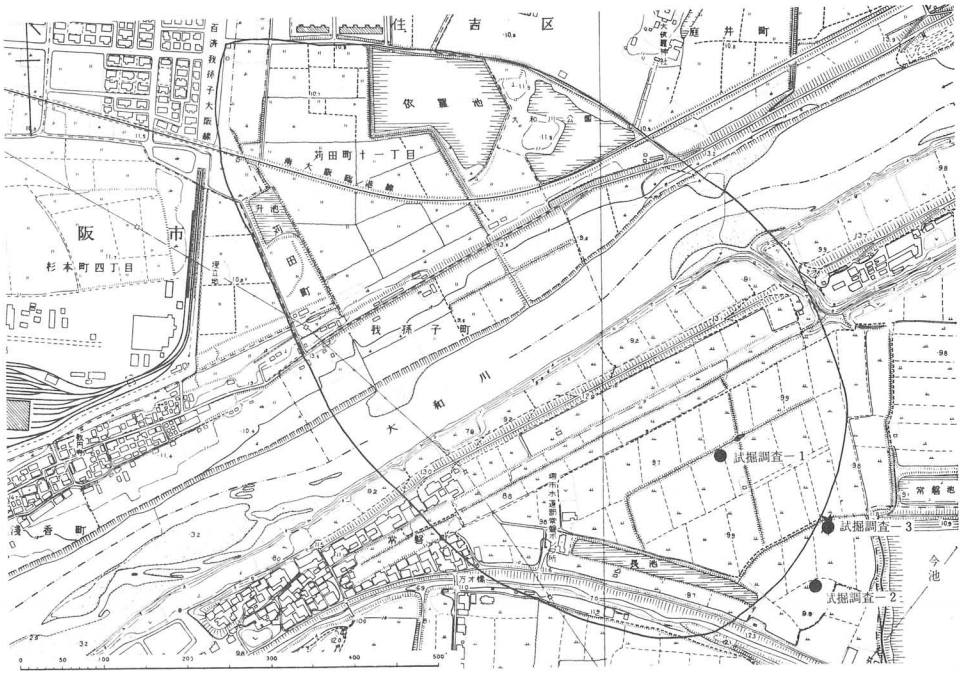
古事記・応神天皇条「水溜る　依網の池の　堰材打ちが　挿しける知らに　蓴繰り　延へけく知らに　我が心しぞ　いや愚にして　今ぞ悔しき」と歌い上記とほぼ同義の内容が見受けられた。

日本書紀・推古天皇15年冬条には「是歳冬、於二倭国一、作二高市池・藤原池・肩用池・菅原池一。山背国、掘二大溝於粟隈一。且河内国、作二戸苅池・依網池一。亦毎レ国置二屯倉一。とみられ屯倉の設置ともに数多くの池の築造が正史に記載している旨を考えると当時の古代国家において国単位の池の築造がいかに重大なメリットを所持していたかを窺わせる。

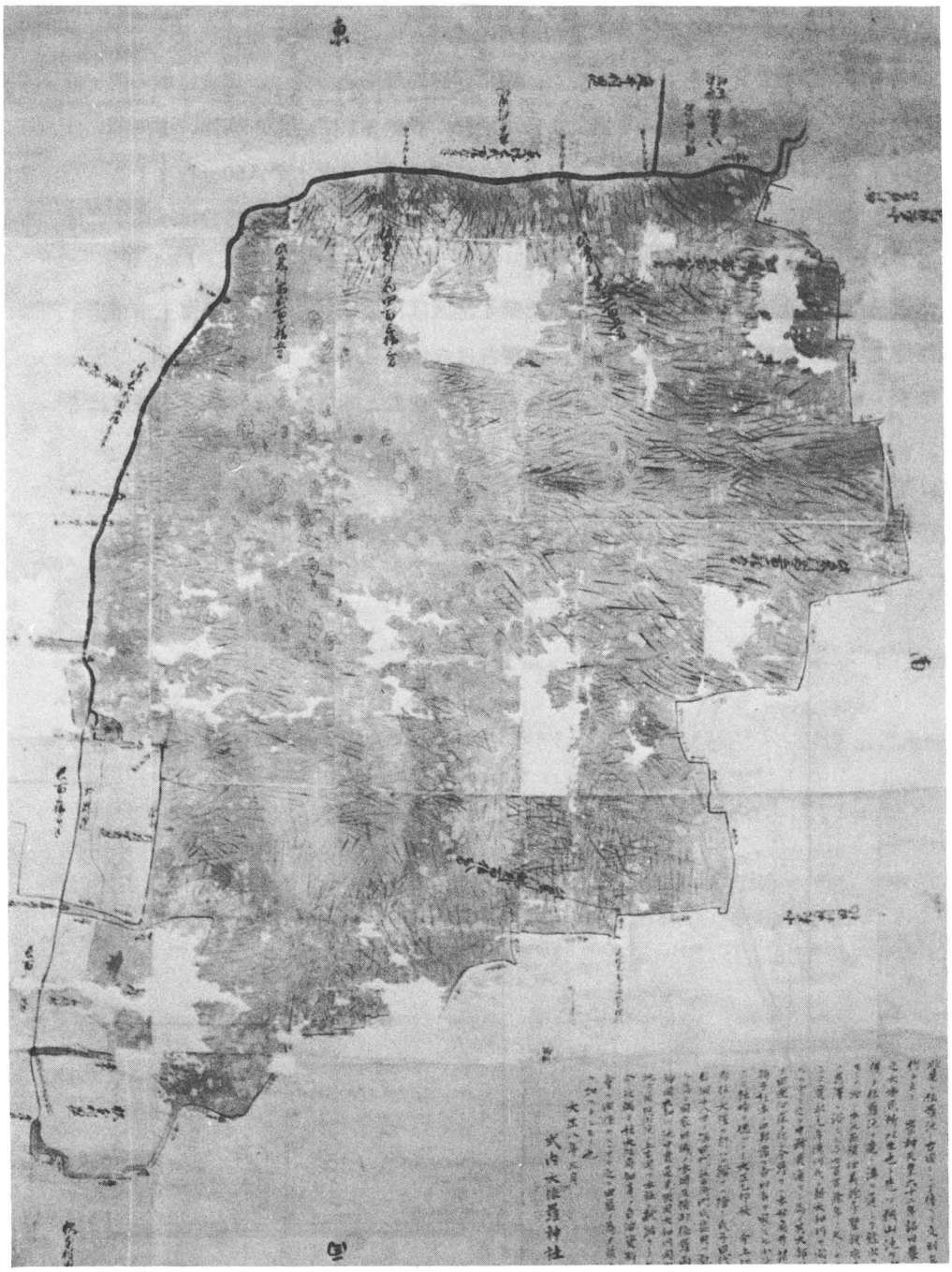
考古学的にも最近の試掘調査によって、「池」の有機質層も確認された事もあって確実に、依羅池の範囲を、現在の行政区画では北は大阪市住吉区苅田町11丁目、我孫子町、南は新大和川を挟んだ堺市常盤町三丁目に属しラグビーボールに類似した平面形を呈したようで約35万㎡に及ぶ池であると考えられる。各資料を総合的に判断して大和川・今池遺跡の西側に隣接して所在し西・南側は旧地形上の高度から自然堤を主とし、北側は多分に人為的な築堤が考えられる。



第11図　「大和川開鑿前地方図」(大依羅神社所蔵)



第12図　依羅池復元図



第13図　「依羅池古図」(大依羅神社所蔵)

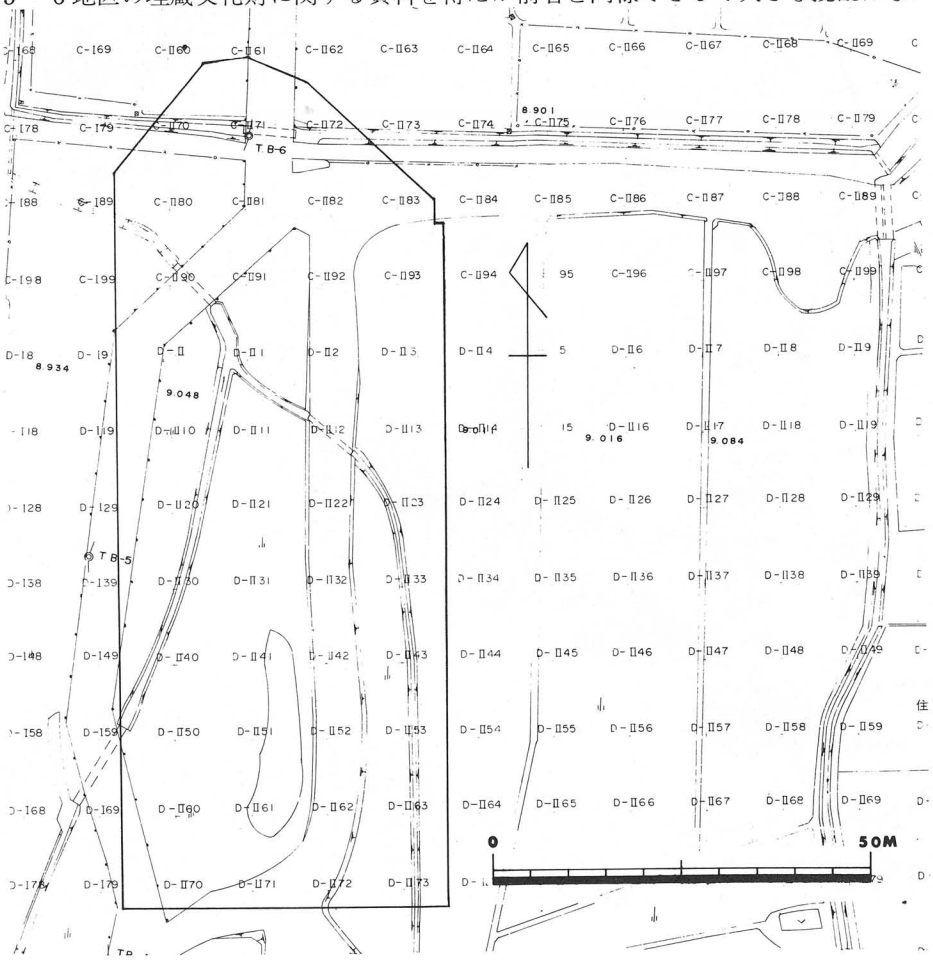
2．第3地区及び第5・6地区試掘調査

第3・4地区及び試掘地点の現状と調査方法

昭和35年当時の航空写真では、条里制遺構の畦畔が極めて良好な保存状況を示す地帯で10年前まで水田耕作地として利用されていた。堺市西除処理場建設後は、調査区域の西・北・中央部に幅員6～10mのバキューム車道とその迂回路が設置されていた。南側、中央部には、周辺工事に伴う10×10mの攪乱穴が知られたが深さは遺構面よりマイナス50cm程度であった。その他、第3地区内には、北の今井戸川に向って流れていた「Y」字形の新設排水路中には、多量のヘドロが堆積していた。

水田耕作の休止後、雑草の繁茂していた第4地区は、条里制畦畔上を走る工事車道と西端の関西電力・高圧線鉄塔以外には、目立った攪乱はない。

第5・6地区の埋蔵文化財に関する資料を得たが前者と同様でさして大きな攪乱はない。



第14図　第3地区、地区割図

堺市が作製した500分の1の地形図に使用されている基準点から当遺跡を図化する事によって将来、建設された工事部分であっても遺構の復元を可能とした。

昭和53年度に設定した遺跡内の100m方眼を細分した10m方眼を調査区域内に広げ遺物の取り上げや図化の基本とした。

本遺跡のような、広範囲の調査区については以上の基準杭が必要で将来にわたる考古学的な十分な活用、応用が出来るものと考えられる。

(1) 層　　位

南北の層位については、東・西壁から、東西の層位変化を知り得る為に南壁と南より20m毎にセクションを残し土層観察を行った。

表土から地山まで極めて浅いのでベルト状堆積を基準に線引きし鉄分沈澱層という微々たる層位の変化は、層別けの対象にはしていない。これは、各層が単一時期の堆積土でない事による。ただし、地山直上の5～10cmの単一時期の堆積と考えられる包含層については、遺構の掘り込み、切り合い関係に気をくばり数度の精査を繰り返した。

西壁面

旧耕作土上には、0.3～1.8mの盛土又は、バキューム車道が敷きつめられており北側半分以外は、旧耕作土すら削平された状況にあった。基本的な層位を旧耕作土（灰オリーブ色土・5Y4/2)、床土（暗灰黄色土・2.5Y4/2)、オリーブ褐色土（2.5Y4/3)、灰褐色粘質土(7.5Y4/3)、黒褐色粘質土（10YR2/2）の5層に細分出来た。粘質土の地山は、フラットではなくその性質上、小さな隆起が多い。中央部よりやや北よりの一部に、灰黄色粘質土と地山上のレンズ状堆積が認められた。又、北側には、最近の水田耕作時に残存していた幅1.5m、深さ0.4mの排水路を確認した。それに伴う畦畔は、削平されていた。

東壁面

北端よりには、車道の下敷による盛土がある以外は、旧耕作土がそのまま露呈していた。

基準層序は、西壁面の5層と同一であるが大きく帯状堆積としては4層に限定されよう。耕作土、床土を除く包含層（3、4、5）は、約0.3～0.4mの厚みを有する。地山（明黄褐色粘質土・10YR3/2）は、前者の壁面にも見られたレンズ状の隆起は随所に存在し一部では上層の包含層と小ブロックで混在していた部分もある。この現象は、地山の地質的な事に起因するものであろう。従って、地山直上での発掘面は、雨天によってヘドロ化し乾燥時は大きな亀裂が生じた。実測、遺構検出、写真撮影には、十分、水をまきビニールシートを掛けて水分の保持に努めなければならない困難な土層であった。

南壁

東側よりに掘削された幅1.8m、深さ1.0mに達する排水路に関する攪乱以外は、概ねベルト状の堆積が良好に知られた。層位も前者の土層とは大差はなく地山の小さな隆起も気にならない程である。

ただ、西半分は前述した車道の盛土が極めて分厚い。この壁面では、旧耕作土の良好な保存状況にもかかわらず床土がレンズ状にしか遺存していない。

中央部の幅3.0m、高さ0.3mの畦畔は、昭和35年当時の航空写真にも表現されている。東西に傾斜した条里制遺構に復元されない畦畔である事が判明した。

東西土層断面―セクション―1

耕作土は、場所によって異なるが0.2～0.3mに対して床土は薄い。包含層（3、4層）は、ベルト状堆積であるのに地山の上面は、相当な隆起が知られた。

セクションの中央部には、最近の攪乱と思われる灰黄色土、灰色土、黄褐色土の3層が見られ深さ0.8mに達していた。

セクション―2

東・西端の断面には、工事用排水路が土層を切断している。包含層の3、4層もベルト状堆積を形成しているものの多少の凸凹は否めない。

西端では、遺構上面をおおっていた黒褐色粘質土（10YR3/2）が0.1～0.2mの厚みで残存していた。又、地山の凸凹が他のセクションでの観察よりも大きく著しい。

セクション―3

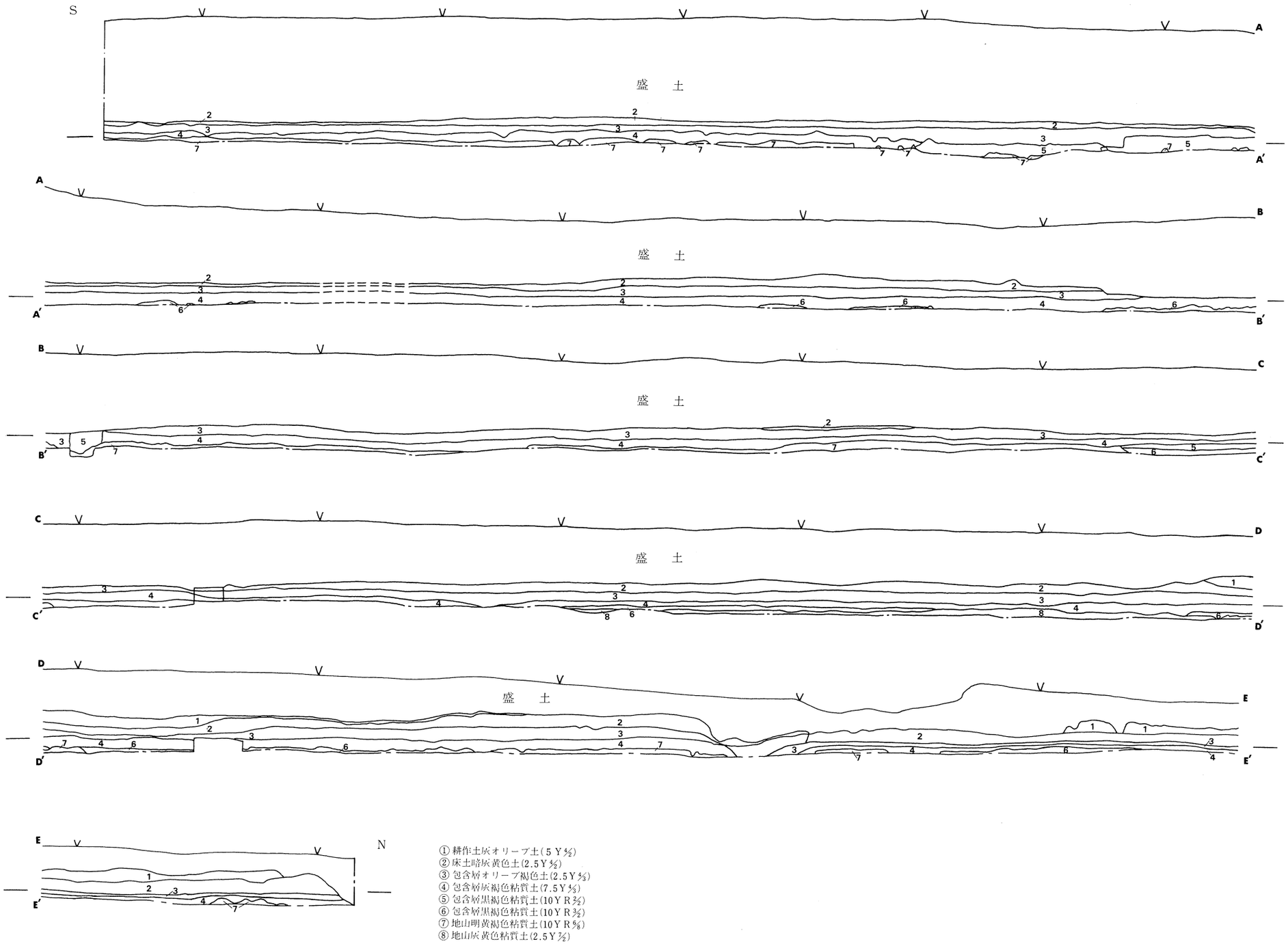
セクション―2と同様に2本の排水溝が認められる。第3・4層の包含層ですら十分にベルト状な堆積が観察出来ずレンズ状にカットしている。これは、おそらくこの部分より北半分に密集して検出された近世期の耕作用井戸が原因していよう。

尚、南側のセクションに比して地山がわずかに上昇しているのは、北側、すなわち、第5・6地区の古墳時代に比定される遺構群を乗せた旧河道と合致している。

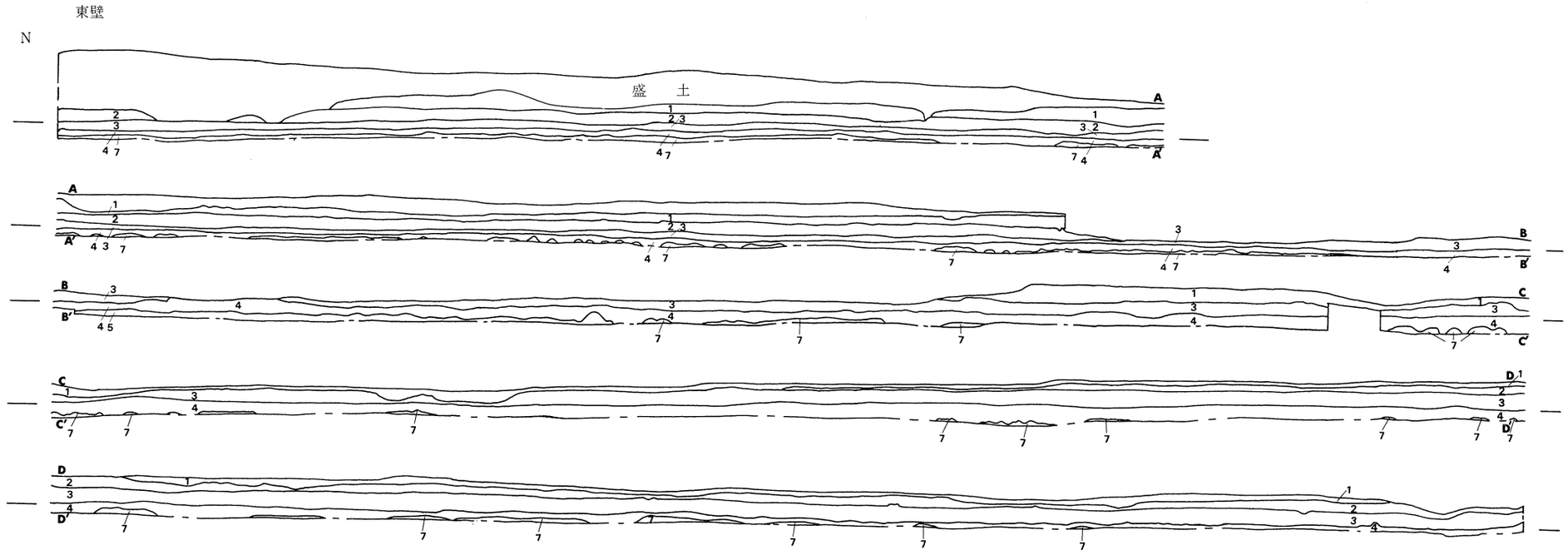
セクション―4

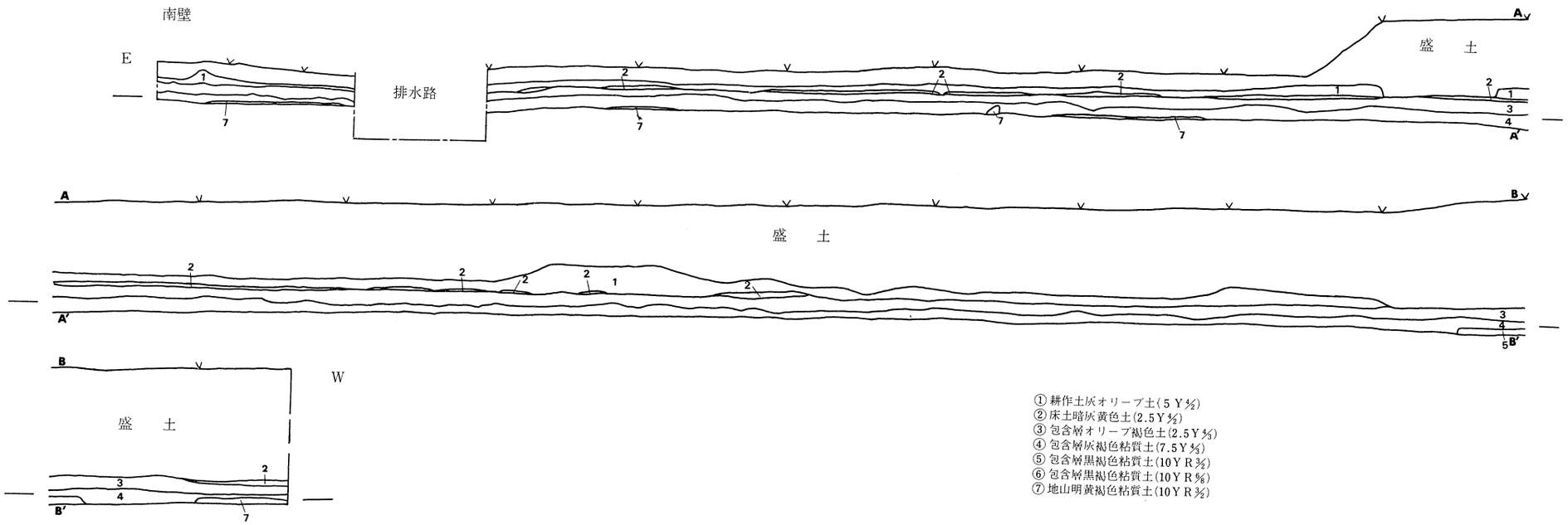
前述のセクションに増して地山の上昇した事実によって包含層の第3・4が0.2～0.3mと希薄となる。地山、すなわち明黄褐色粘質土（10YR6/8）のコブ状隆起が顕著で上層との混在も他に比して目立つ。

各セクション共に、包含層からは、古墳時代と中世とが混入しているが地山直上は単一である。



第15図　第３地区、西壁土層断面図

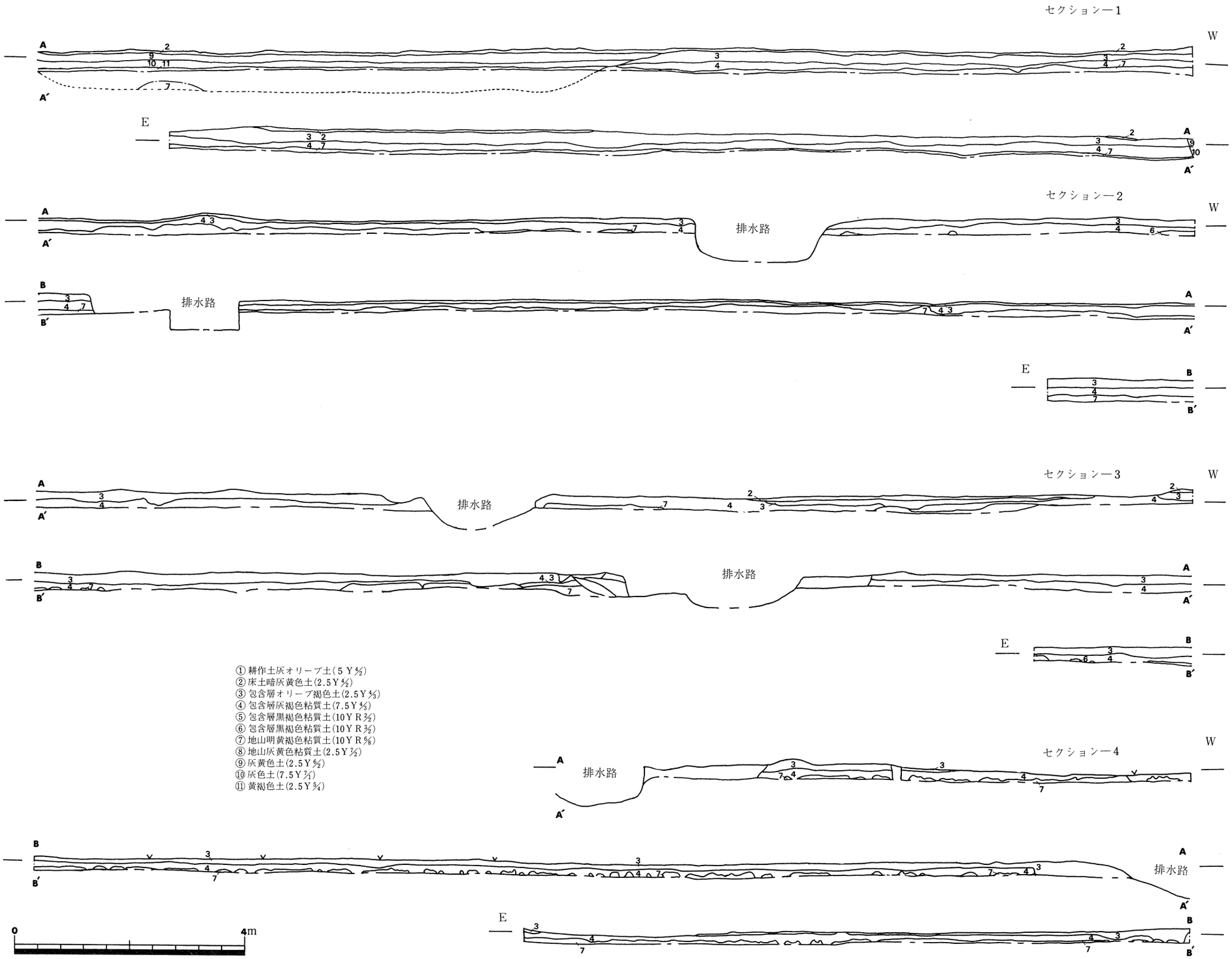




① 耕作土灰オリーブ土(5Y 4/2)
② 床土暗灰黄色土(2.5Y 4/2)
③ 包含層オリーブ褐色土(2.5Y 4/3)
④ 包含層灰褐色粘質土(7.5Y 4/3)
⑤ 包含層黒褐色粘質土(10YR 3/2)
⑥ 包含層黒褐色粘質土(10YR 5/6)
⑦ 地山明黄褐色粘質土(10YR 3/2)

0　4m

第16図　第3地区、東・南壁土層断面図



第17図　第３地区、畦土層断面図（セクション—１・２・３・４）

(2) 遺　　構

第3地区は、基本的には耕作土・床土・包含層の3層によって区別されているがその包含層の十分保護されているブロックにあっては古墳時代の遺構を遺存させている。

攪乱は「Y」字形排水路、南側中央で古墳時代以降の遺構を大きく削平されたとは考えられない。

古墳時代の溝―1と3は、近世期の耕作用井戸の築造時に切断されているが本来、同一の遺構であろう。溝―3は、さらに南側へ継続することが第6地区の発掘調査によって確認されている。この溝は、又、第1地区の溝―1・2と共に方形区画化された溝に入ろう。不明落ち込み（P―7・8・9・13）は、相関関係を有する他の落ち込みは見受けられず単一的な性格のものである。P―10・11・12の不明落ち込みは、共に埋土から近世期でP―10・11は杭跡かもしれない。総数36ヶ所もの異常とも言える耕作用井戸の密集度からして3ブロックに区別されるが中でも北端の過度は目に入る。これらの築造期は、新大和川開鑿による水位低下が主としてヒントになる。

掘立柱建物（T―1）

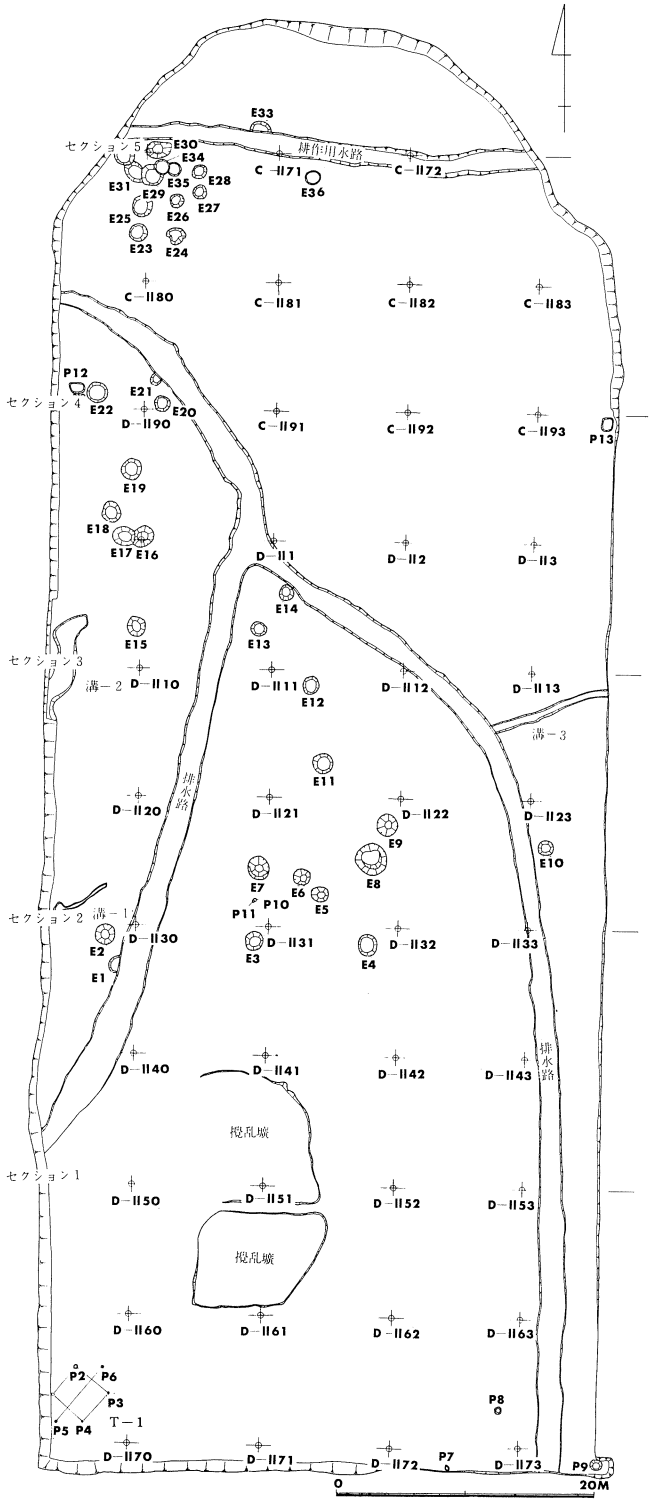
地区の南西隅の地山(明黄褐色粘質土)上面で、棟持柱を特設した切妻造りの掘立柱建物―1棟を検出した。柱穴は6ヶ所検出したが、その内1ヶ所(P―1)は深さが極めて浅く掘り方を明確に確認できず惜まれる。同時にこの検出状況は遺構がすでに削平されていたことを推定させる。

主軸を北東（N40°E）にもち、1間×1間の正方形の平面プランを有した倉庫址と考えられる。桁行間2.95m、梁間間3.2m棟持柱間5.47mを測り、棟持柱は各々の梁間からP―6で1.26m、P―5で1.28m離れて突出する。床面は南西側にやや下り気味に傾斜するがほぼ平担である。床面積9.44㎡を計測できる。

各柱穴の詳細は以下のとおりである。

P―1　前述した様にその存在は確認されたが、規模・掘り方は不明である。P―1が微底地に存在するとはいえ、その差は他の柱穴上面と比較してわずか2cm程にすぎず、他の柱穴の遺存状態と考え合わせれば本来浅い掘り方の柱穴であったともみられる。

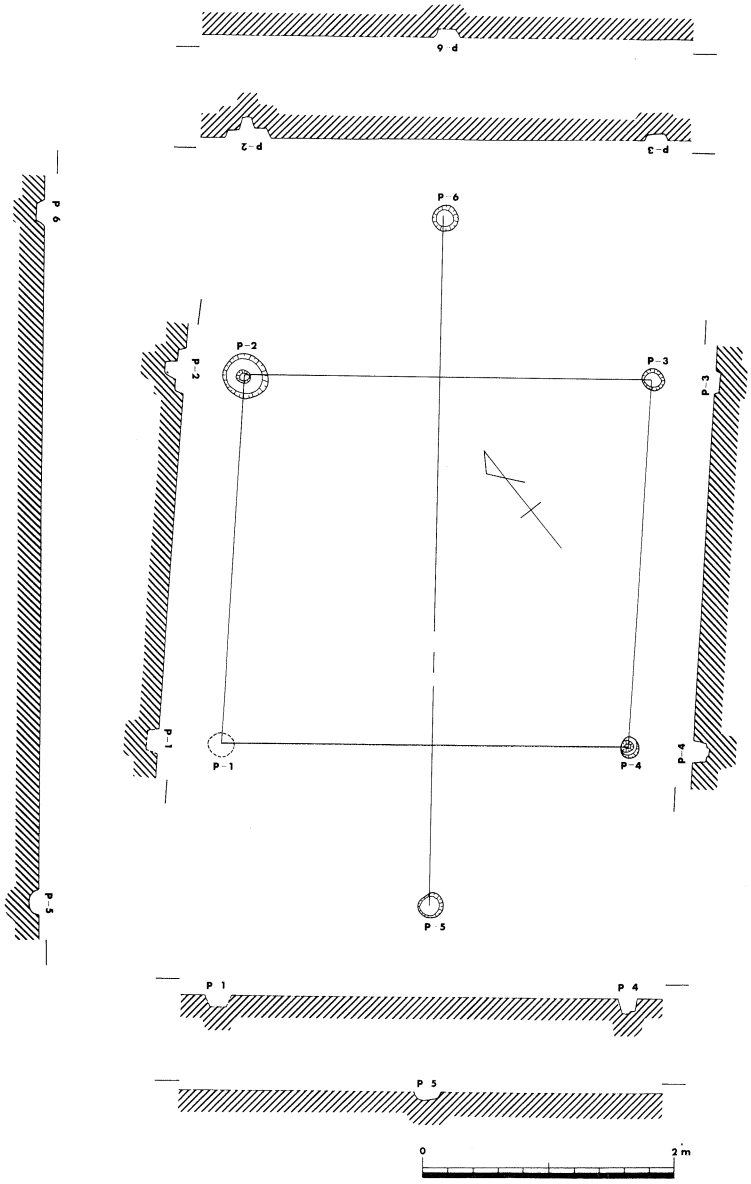
P―2　上面の平面形は円形で、(長軸34.5×短軸31.5×深さ17.0cm）を測り、柱穴の中で最も大型でしっかりしている。掘り方は－8cmまで急傾斜して掘り込まれた後、中央部を平面形が円形で（11.5×9.5×9.0cm）に掘り抜かれており、凸形状の2段底を呈する。埋土は2段底に沿って中央に黒色土が柱状にみられ、柱痕を掘り方と共によく残している。したがって柱には径10cmほどの丸木が使用されていたものであろう。



第18図　第３地区、遺構配置図

P—3　上面の平面形は楕円形に近く、(19.5×15.5×3.5cm)を測る。急傾斜面を有して掘り込まれる。底は円形に近く（14.5×13.5cm）を測り、底面は平担である。埋土は黒色土と灰白色・地山の混合土がブロックで混入する。

P—4　平面形は不整円形で、(14.0×14.0×11.0cm）を測る。掘り方は垂直に近い壁面を有して底部に至たり、さらに底部の西壁際に（9.0×9.0cm）の円形を呈して深さ3.0 cmの掘り込みがあり、2段底になる。埋土はP—1と同じく、2段底の中央部に底へややすぼまる柱状の

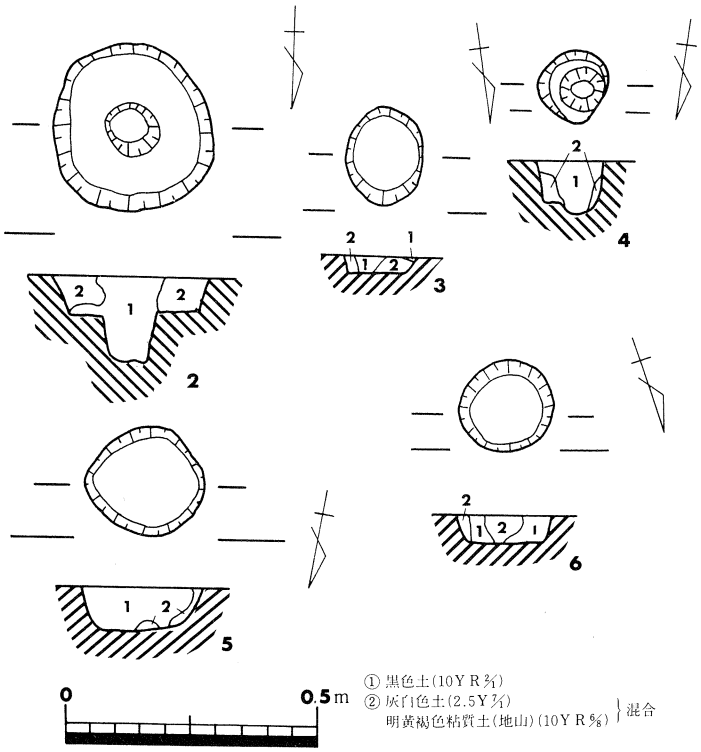


第19図　掘立柱建物遺構図

黒色土がみられ、柱痕をよくとどめる。

P—5　不整円形を呈し、(24.0×21.0×9.0cm)を測る。壁面は弯曲気味の傾斜面をもつ。底は上面と同じく不整円形で（21.0×18.0cm）を測り、底面はほぼ平担である。埋土は黒色土が大半を占めるが、西壁寄りにかけて灰白色土と地山の混合土がわずかに混入している。

P—6　上面の平面形は円形で、(19.5×18.0×6.0cm）を測る。壁面は垂直に近い急斜を呈して掘り込まれる。底は(14.5×13.5cm)の円形で、底面は平担である。埋土は黒色土と灰白色土・地山の混合土がブロックで混合していた。



第20図　掘立柱建物、各柱穴遺構図

2段底の掘り方や埋土で柱痕をとどめる例はみられたが、柱根を残すものは全くなかった。柱穴内に遺物は全く認められず建物の時期決定に困難をきたしたが、建物の上面や周辺より須恵器片（図化不能）が多く検出されておりその時期に6世紀中頃が考えられる倉庫である。

建物は3地区の区域内において見る限り南西隅に単独で存在することになるが、建物・溝など古墳時代の遺構の削平された遺存状態、地山の北側への下り傾斜を考え合わせれば、可能性としての3地区の建物群がすでに消滅していることは十分あり得る。

この建物を3地区の東側に隣接する1地区の掘立柱建物群—14棟、南東側に隣接する2地区の掘立柱建物—1棟との関連でみるならば、位置的には両者の中間地に存在するが、時期的には6世紀中頃を中心とする1地区の建物群との併存の可能性が強い。建物の主軸で比較してみると、3地区の建物の主軸—N40°Eは1地区のⅡ期建物—3・4・5（主軸N35°5′E～N38°E）とりわけ建物—5のN38°Eに近く、ほぼ同じ軸を有しているといえる。

3地区に先行して調査された1・2地区で検出した掘立柱建物については、5世紀前半とす

る2地区の建物から、約半世紀ほどの空白があるが、6世紀前半～6世紀後半とする1地区の建物への集団の移行として考察されている。3地区の建物は位置的には両者の中間地に存在するが、時期・主軸の点では1地区の6世紀中頃の建物群と同じくする。したがって2地区から1地区への集団移行の過程における空白を埋めるものではない。むしろ3地区の建物は1地区の集団における6世紀中頃の興隆期・自立性の成立がうながした居住空間の拡大の結果ともいえるのではないか。

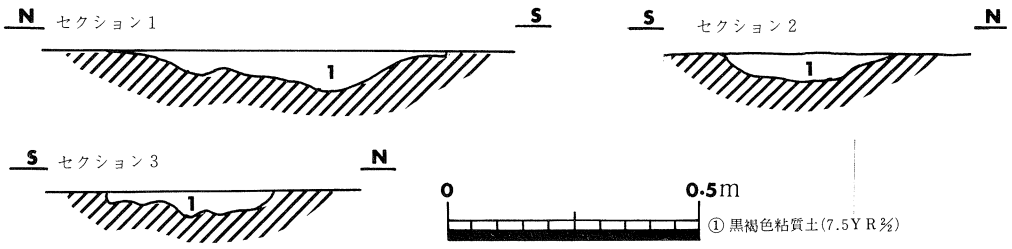
一方、推定復元された溝区画との関係でみると、1地区の溝―1・2・3地区の溝―2のコの字形の区画によって1地区の建物群と3地区の建物は東西・南北に隔離されることになる。そこには居住空間の拡大もさることながら、6世紀中心とした別の集団が併存していたことも考えることができる。

溝

第3地区で検出された溝は3本である。溝―1・3は地区中央の東・西壁寄りで各々検出されて分離した状態にあるが、共に北東方向へ延びるもので本来は地区中央を北東に横断する1本の溝であったと思われる。溝―2は溝―1から北へ15mほど離れた西壁際で、溝―1・3より北方向に軸を振って延びる。溝はいずれも途切れていたり、削平されており本来の形状・規模がかなり失なわれていることを考慮しておかなければならない。

溝―1

地区の中央部・西壁寄りからN59°5′Eに延びるもので、全長4.5m、幅0.15～0.92m、深さ0.05～0.09mを測る小規模な溝といえる。平面の形状は長軸0.9mの楕円形の落ち込みに、幅0.15～0.4mの部分的にくびれを有する溝が付帯するマッチ棒の様な形を呈する。掘り方は凹凸ないし段を有するいびつな半月形の断面を観察した。底は部分的に凸凹がみられるがほぼ丸味をもち連続する。埋土は黒褐色粘質土の単一層である。



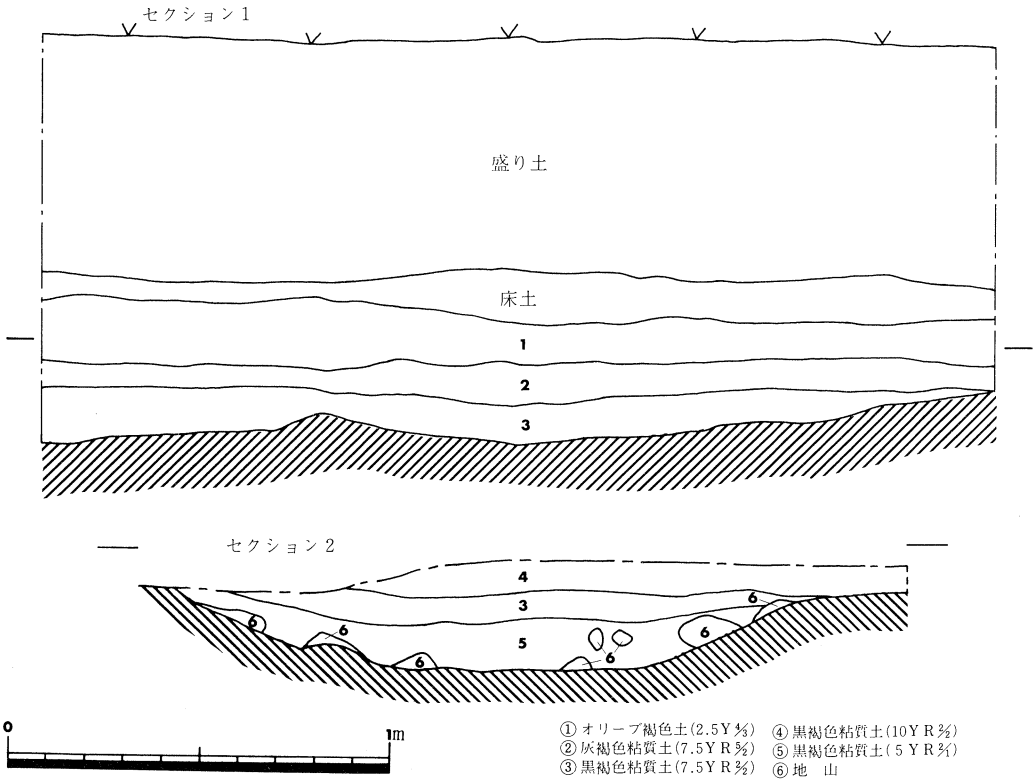
第21図　溝―1、土層断面図

溝－2

溝－1の北側15mの位置からN17°5′Eに延びる。全長8.5m、最大幅2m、深さ0.1～0.2mを測り、3本の溝の中では最も大型である。平面形でとらえると屈曲が著しく必ずしも整美な形状とはいえない。掘り方はゆるい内弯気味の傾斜面を有して掘り込まれており、半月形の断面形である。底は部分的に地山のうねり・コブ状の隆起があり、流水によるえぐれの結果ともいえるが、溝底に途切れはなく一様に連続する。埋土は2層に区別できるが、基本的には黒褐色粘質土の単一層である。後述するが、この溝は第1地区の溝－1とほぼ平行する配置にあり、その形状も細長い落ち込みが連続する第1地区の溝－1に類似する。

溝－3

溝－1の延長上にあたる東壁際でN69°Eに延びる。全長9mを検出することができたが、西側端は排水路に切られておりそれより以西においても検出できなかった。幅0.5～0.7m、深さ0.05～0.2mを計測した。平面では割合平行な流水路を残していた。セクション－1で最深0.2mを測り凸形に掘り込まれ、むしろ流水によるえぐれを思わせる断面以外は、ゆるく傾斜する



第22図　溝－2、土層断面図

壁面を残した半月形の掘り方を示す。埋土は各セクションによって単一層と2層に区別できる所があり厳密には均一といえないが、基本的には褐色土を中心としていると考えてよいだろう。

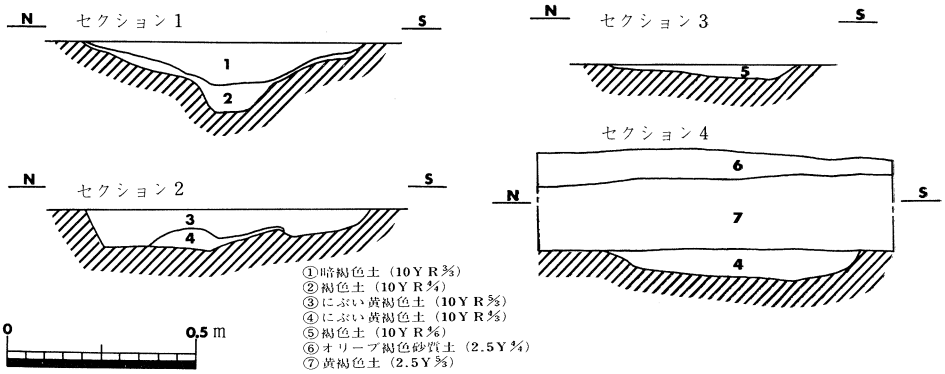
出土遺物

溝内からは、須恵器・土師器・瓦器の細片を検出したが図化出来るものがなく、一覧表の黒色土器一点に限られる。

溝の使用時期に6世紀中葉を中心としていますが、これらの遺物は、極めて上層から出土しているので流れ込みと考えられる。

溝内より遺物が伴出する例はなく時期決定の資料に欠けるが、溝の上面からは土師器片、須恵器片がやや後者の割合を多くして検出された。しかしその中にも時期を比定できるようなものはあまりなく細片が大半を占めており惜まれるが、6世紀代を想定するに留めたい。

第3地区に先行して調査された隣接する第1地区では、T字形に配置される溝―1・2、第2地区ではコの字形を構成する溝―1・2・4が検出されており、第3地区の溝との関係が注目される。それはあくまでも推定の復元によるものであるが、1地区の溝―1（N14°5′E）、2地区の溝―2（N16°E）、3地区の溝―2（N17°5′E）がほぼ平行して延びると想定され、その溝間隔が1地区～3地区―63m、3地区～2地区―59mを測り近い数値を示すことである。さらに1地区の溝―1が同地区の溝―2（N97°E）に直交するように、溝―2の延長に第2・3地区の溝―2も同様に直交する配置にある。しかし第1地区の溝―2の延長上にあたる第3地区では相当する溝は検出されていない。他の遺構の削平された遺存状態を考慮すれば、第1地区の溝―2の延長にもその可能性があるとはいえ実証性に欠けることは事実である。ただ、第1～3地区にかけてT字形・あるいはコの字形を想定できる溝の企画性が配慮されていることをうかがえるのではないか。



第23図　溝―3、土層断面図

一方、溝―1・3はその軸に若干のずれを生じるが、3地区中央を斜めに横断する1本につながる溝として復元できることは前述したとおりである。この溝は溝―2ないしは第1地区の溝―2の延長に約45°の角度で交わることが推定される。そしてこの関係が溝―2、第1・2地区の溝―2によって区画される方形の地域をほぼ南北（三角形状）に分離することは、ある意味では興味ある推察といえようが、先の企画性への配慮が欠けているともみれる。

したがって溝―2は遺物の概観に1地区の溝との関連を加味すれば、6世紀中頃の時期にしぼれそうであるが、溝―1・3は溝―2よりやや前後する時期を想定する必要があるかもしれない。いずれにしてもこれらの溝には企画性が想定できるとはいえ、未確認・不明瞭な部分が多く残されており、今後進められる調査によって明らかにされることを期待したい。

不明落ち込み

遺構の性格が不明確な落ち込み7ヶ所を検出した。いずれも地山上面から掘り込まれた状態で確認されたもので、古墳時代の遺構である。地区の南端に若干の集中がみられるものの、存在状況は散在的でありその密度も極めて小さい。したがって落ち込み間での関連性は認めがたい。遺物を伴出させる落ち込みが2ヶ所あり、特にP―8での土師器（高杯）出土状況は意識的な埋設を思わせ興味深い。

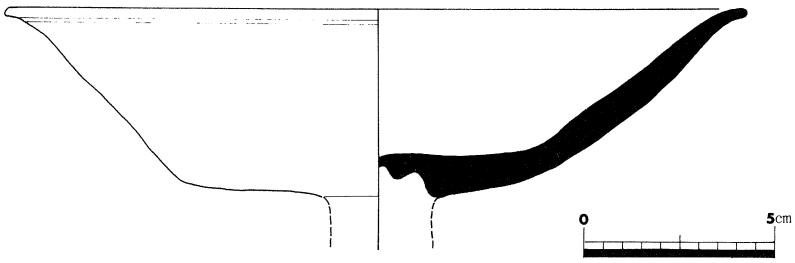
P―7

南端に存在。平面形は不整な楕円形。(長軸45.0×短軸29.5×深さ3.0cm)を測り、極めて浅く上面の削平が考えられる。掘り方は東壁で内弯気味の傾斜面を残す。底部は平担。埋土は暗灰黄色土の単一層である。

P―8

P―7のやや北側に存在する。平面形は不整円形。(59.5×59.0×22.5cm）を計測。掘り方は東壁でやや段を有した外弯気味の傾斜面を呈する。底部は（22.0×17.0×10.0)、(26.0×14.0×5.0)、(18.0×10.0×8.0cm）を測る不定形な凹み3ヶ所からなる。埋土は中央部に暗灰黄色粘質土と黒褐色粘質土が落ち込んだ状態で堆積するのをはじめ、壁面際から底部にかけては灰白色土・地山混入土が互層を呈す。また黒褐色粘質土中には若干であるが炭を含んでいた。

遺物に上面で土師器片（器種不明)、底部から土師器・高杯を出土した。高杯は脚部を欠いた杯部残存で、口を上にして西壁寄りの底部凹みに安置した状態で検出した。亀裂を生じているものの完形を保ち、その出土状況からみても単純に投棄されたものではなく、故意に脚部を除去、意識的に埋設したものであろう。しかしその意味については、井戸にみられるような祭祀



第24図　不明落ち込み(8)出土土師器

的儀礼とは異なり、遺構の性格とともに判然としない。

出土遺物（土師器・高杯）

全体的に保存状態が不良なために細かい技法は不明である。内面はフラットな底部から外方向にゆるやかに伸ばし、口縁端部を水平に引き出す。外面は、ゆるやかな丸味を持たす。脚基部から下半分は欠損して不明、胎土―礫含むが良好、焼成―不良、色調―浅黄橙色（7.5YR 8/4）、口径19.4cm、杯部器高4.9cm、布留式土器の中にあって、新しい形態に属するものである。

尚、上層からは、須恵器甕の出土をみている。

P―9

地区の南東隅を一部拡張して検出した。平面形は隅丸の長方形に近い。規模は（89.5×73.5×55.5cm）を計測した。掘り方は南壁側でやや内弯気味の垂直壁を呈し、他も急傾斜面である。底部は丸味をもつが、東壁寄りに（45.0×33.5×8.5cm）を測る楕円形の落ち込みが存在する。埋土は黒色土を基本層として3層に分けられ、下層に地山と砂礫の混入が著しい。黒色土中より土師器片多数、スラッグ2点の出土をみたが、土師器に図化できるものはなかった。

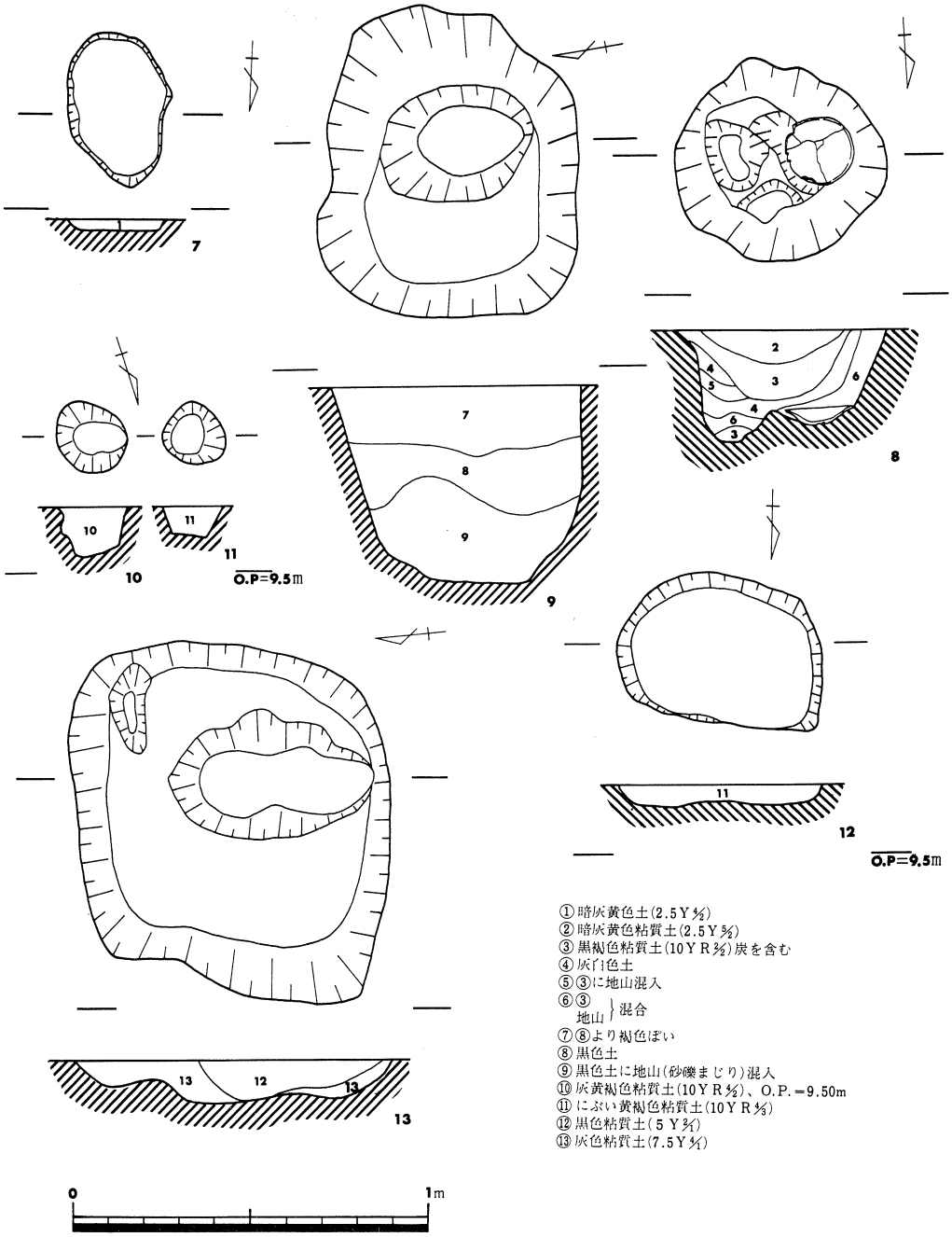
この落ち込みには倉庫などの大きな掘立柱建物の柱穴の可能性があるが、対応する柱穴は地区外に想定され確認はされていない。

尚、P―8・9については遺物から判断するかぎりにおいて、共に5世紀前半頃の遺構であり、南東約25mに隣接する第2地区の同じく5世紀前半を中心とする遺跡との密接な関係が考えられる。それは第2地区で検出された建物を中心とした5世紀前半期の居住空間を、北側地域では3地区のP―8・9の存在位置にまで広げられる可能性がある。

出土遺物

黒色土層出土の鉄滓(2)と須恵器・杯身・甕片の3点である。

2点の鉄滓の内で1個は最大径約3㎝、長さ約9㎝で一見くそ状にひねった形態を呈し、他



第25図　不明落ち込み遺構図

方は、5×4㎝、厚さ1.5㎝位いで前者の方が鉄分の相当量含有してい様である。

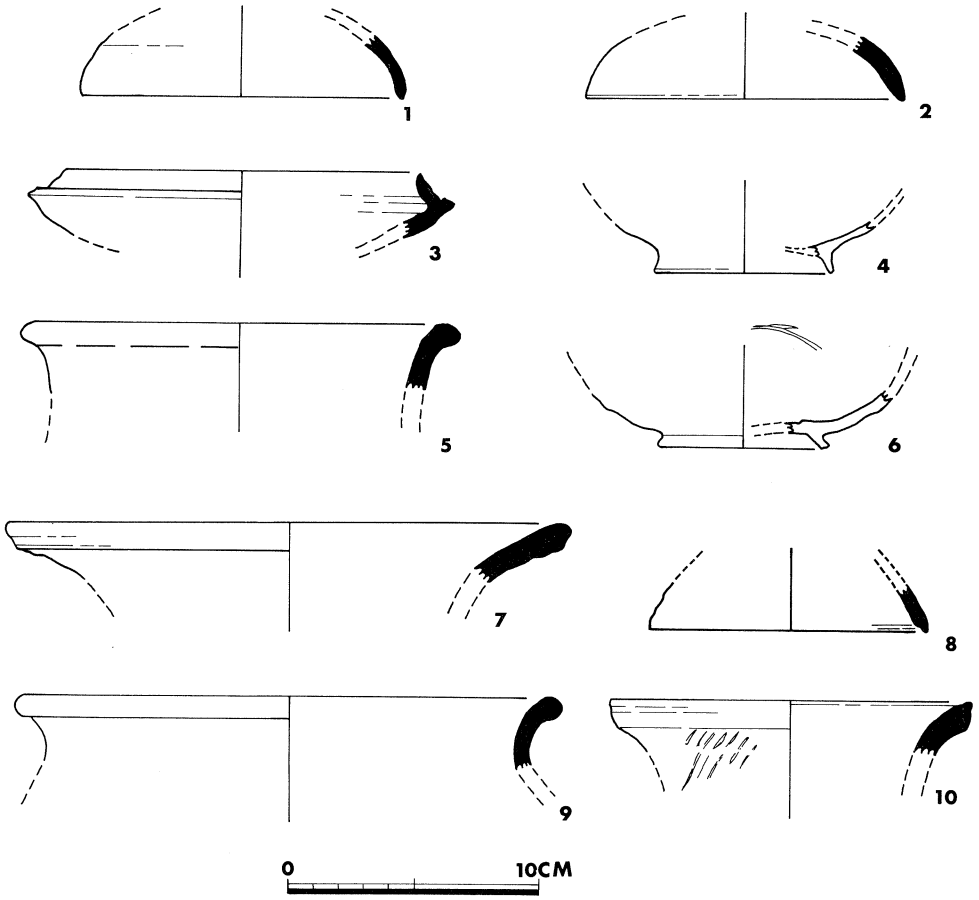
尚、科学的分析については、次回に報告する予定である。

P—10

地区の中央やや南側に存在する。平面形は不整円形。(22.0×18.5×14.0㎝) を測る。掘り方は西壁で垂直に近く、東壁で一部えぐれた傾斜面を有する。底はやや丸味をもち、東側へ下がっていく。埋土は灰黄褐色粘質土の単一層である。

P—11

P—10に北側に並列して存在する。平面形は不整円形。(18.0×16.0×9.0㎝)を測る。掘り方は摺鉢状に近い壁面の傾斜を呈する。底は平坦で、西側へ下がっていく。埋土はP—10と同様、



第26図　第3地区、遺構内出土遺物

灰黄褐色粘質土の単一層である。

このP—10・11は近接しすぎのきらいはあるが、柱穴の可能性を残す。

P—12

北側の西壁寄りに存在する。平面形はやや角ばった楕円形。(57.0×43.0×6.0cm)を測る。掘り方は北側で垂直に近く、他は内弯気味のゆるい傾斜面。底は中央部で若干高くなる。埋土はにぶい黄褐色粘質土の単一層である。

P—13

北側の東壁際、P—12の東側延長に存在する。平面形は隅丸方形に近い。(103.0×88.0×12.0cm) を測る。掘り方は内弯気味のゆるい傾斜。底はうねりを有し、北東壁際に (26.0×10.5cm) 東側の南壁寄りに (57.0×37.5cm) を測る共に不整楕円形の浅い凹みが存在する。埋土は中央部に落ち込んだ状態で黒色粘質土、壁面から底部にかけてちょうど黒色粘質土をドーナツ状に囲んで灰色粘質土が堆積する。

出土遺物

黒色粘質土出土土器は、須恵器、土師器の破片で図化出来たのは6点にすぎない。この遺物の使用時期を6世紀後半期に比定出来る。詳細は一覧を参照されたい。

第3地区、各遺構内出土遺物観察表

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
杯蓋		1	P—13		口径(推) 12.6 器高(残) 2.5	口縁部は内弯して下り端部に至る。	ナデ調整。		密	良好	内面・外面 灰色N⁶⁄₈	時計方向。
杯蓋		2	P—13		口径(推) 12.5 器高(残) 2.5	口縁部は、ゆるやかに内弯して下り端部に至る。	天井部は、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。		密	良好	内面灰白色N⁷⁄₈ 外面灰 色 ⁵⁄₈	逆時計方向。
杯身		3	P—8		口径(推) 14.0 器高(残) 2.6	たちあがりは内傾し、端部はほぼ丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。たちあがりと受部の境に凹線を有す。	回転ナデ調整。		やや粗 1~1.5mm位の粗砂礫を含む。	良好	外面灰白色N⁷⁄₈	逆時計方向。
黒色土器 椀		4	溝—3		底部径 (推)7.0 器高(残) 1.9	高台は、底端部よりやや外傾してのびている。端部は丸い。底部は欠損のため不明。体部は底部より、上外へのびる。	ナデ調整。		やや密 3mmの礫を含む。	良好	外面橙色 7.5YR⁶⁄₈	

種　類	番　号		出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数km内	胎　土	焼成	色　　調	備　　考
	写真	図版										
須恵器甕		005	P－8		口径(推) 16.0 器高(残) 2.7	口頸部は外傾したのち部部で、外反する。	回転ナデ調整。		密 1mm位の粗砂を含む。	良好	内面・外面 青灰色10BG5/1 断面灰赤10R5/2	逆時計方向。
瓦　器 椀		6	P－13		口径(推) 6.8 器高(残) 2.3	高台は、底端部より、外傾してのびている。端部は角ばっている。 底部は平担である。 体部は、底端部より、上外方へのびる。	ナデ調整。 底部内面にヘラミガキ有り。		密1～2mm位の粗砂を含む。	良好	内面暗緑灰色 10GY3/1 外面緑灰色 10GY5/1	
須恵器甕		7	P－13		口径(推) 21.8 器高(残) 2.4	口頸部は、外弯し、端部でさらに外反する。 端部は丸い。	回転ナデ調整。		密	良好	内面・外面 明暗灰色5B7/1	逆時計方向。
須恵器杯蓋		008	P－13		口径(推) 11.1 器高(残) 1.8	口縁部は、やや内弯して端部に至る。 端部は、内面に凹状を有し、やや鋭い。	回転ナデ調整。		密	良好	内面灰白色N7/0 外面灰　色N5/0	時計方向。
須恵器甕		009	P－9		口径(推) 20.8 器高(残) 2.9	口頸部は、外弯し、さらに端部で外反する。	回転ナデ調整		密 1～1.5mmの礫を含む。	良好	外面灰　色N5/0	不明。
須恵器甕		010	P－13		口径(推) 14.4 器高(残) 2.1	口頸部は、外弯して、端部に至る。 端部は鋭い。	口頸部、外面に左下方向にくしがきした後、回転ナデ調整。 他は、回転ナデ調整。		密	不良	内面灰白色 7.5Y8/1 外面灰白色 7.5Y8/1 断面灰　色 N5/0	逆時計方向。

耕作用井戸

旧耕作地に設けられた井戸で、地区の中央から北西側にかけてかなり密集して33基を検出した。本来は耕作土上面から掘り抜かれたものであるが、後世の耕作土・ないし床土によって埋没しており、さらに整地・盛土のために例外なく当初の上面を失なっているものばかりである。遺構を明確に検出・調査したのは地山上面からであり、その規模において0.4～0.7mほどの上面を考慮しなければならない。

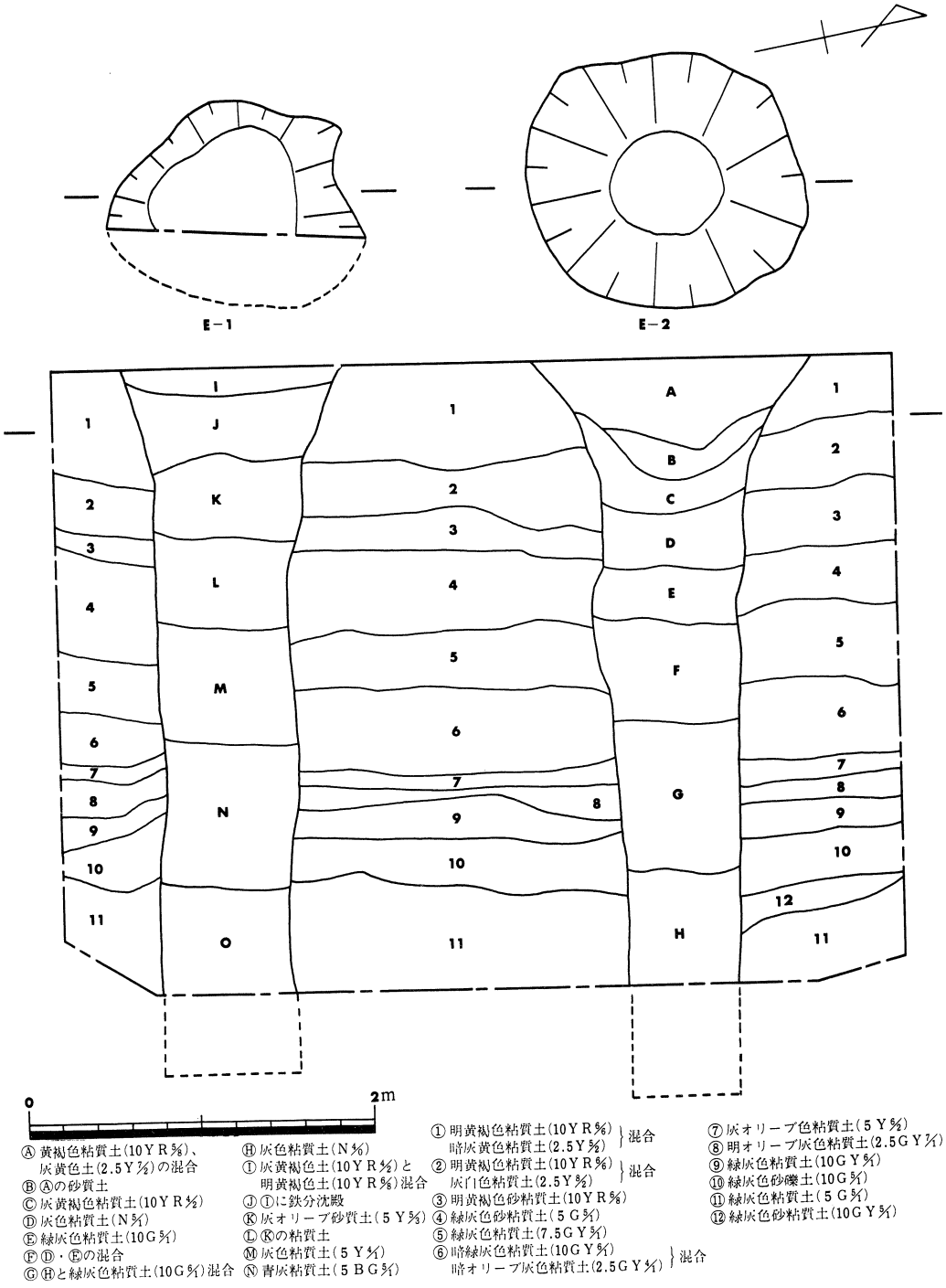
33基の内、32基は遺存状況で観察する限り何ら特別の施設をもたず、土中を湧水が得られるまで掘り下げただけの「素掘り」の井戸である。今ひとつは地区中央で検出した、桶を積み重ねた構造をもつ「桶側井戸」である。

素掘りの井戸

後述する桶側井戸の底部残存を考慮すれば、これらの井戸に桶側を撤去した後の遺存も考えられる。しかしE－8の桶側を標準的な大きさとしてみると、他の井戸の掘り方に桶側を埋設

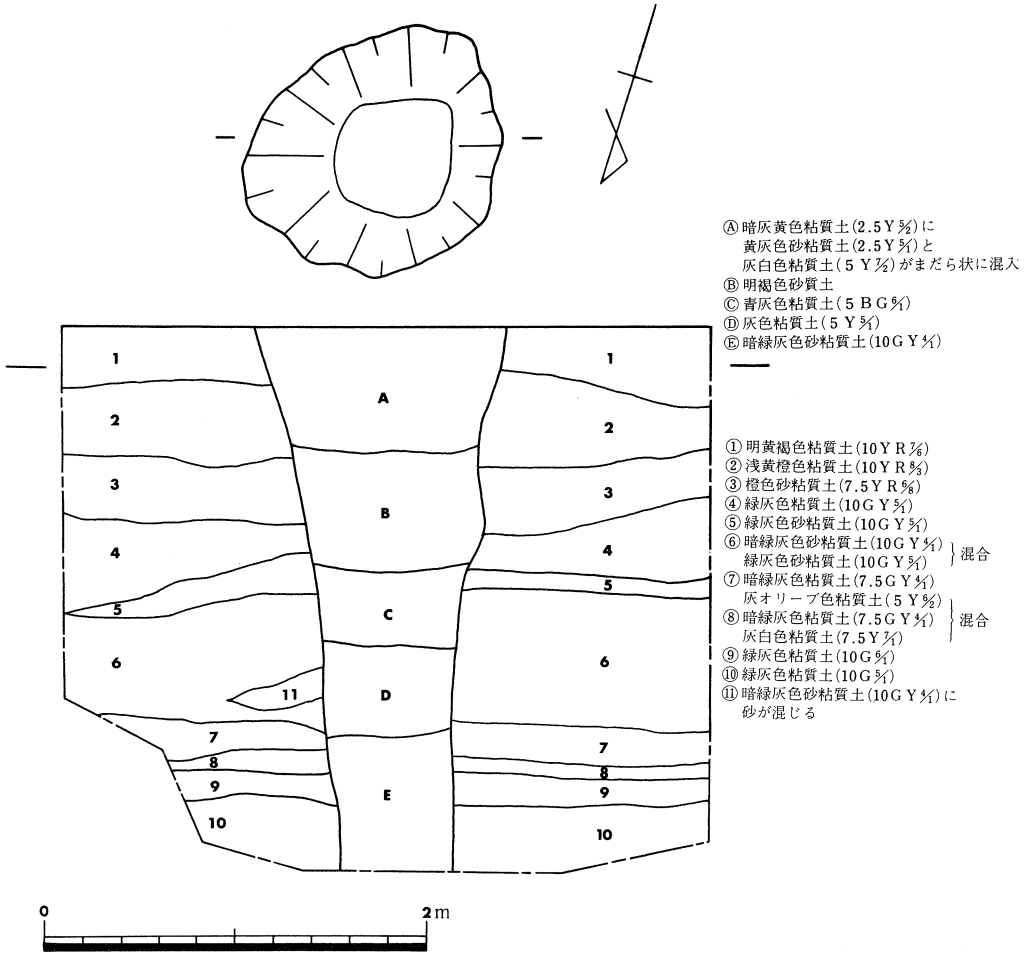
するだけの余裕はなく、少なくとも井側には何ら施設をもたない井戸と考えてまちがいない。

井戸の形状・規模においてさほど顕著な差異はない。上面の平面形は一様に円形ないし楕円



第27図　井戸—1・2遺構図

形を呈する。その規模も径約1.2〜1.8mの計測内にとどまるが、とりわけ1.3〜1.5mを計測する例が最も多い。深さについてはその井戸の湧水が得られる地層の深さによって左右されるものであるが、最も深いもので（推定）4.27m、浅いもので1.4mの掘削によって底に達する。底部の形状は上面の平面形に準じる円形・楕円形を呈し、その規模に1mを越えるものはほとんどなく、底面は平坦かやや丸味を有する。断面観察による掘り方は、そのほとんどが上面から−0.6〜0.8mまで摺鉢状に内側へ傾斜した後、直下に垂直あるいはややすぼまりながら掘り抜かれる。中には井側の中位や底部直上で外側へ大きくえぐれている例があり、湧水による壁面の崩壊であろう。摺鉢状の形態について当初「掘り方」と考えていたが、E−8（桶側井戸）における摺鉢状の壁面にみられた粘土の張り付けをみると、上面からの流水等によって削られたと判断する方が妥当かもしれない。湧水や流水によって壁面の崩壊を招くにもかかわらず、それを積極的に防止する施設はなく、これらの井戸の長期間に渡る使用については疑問である。

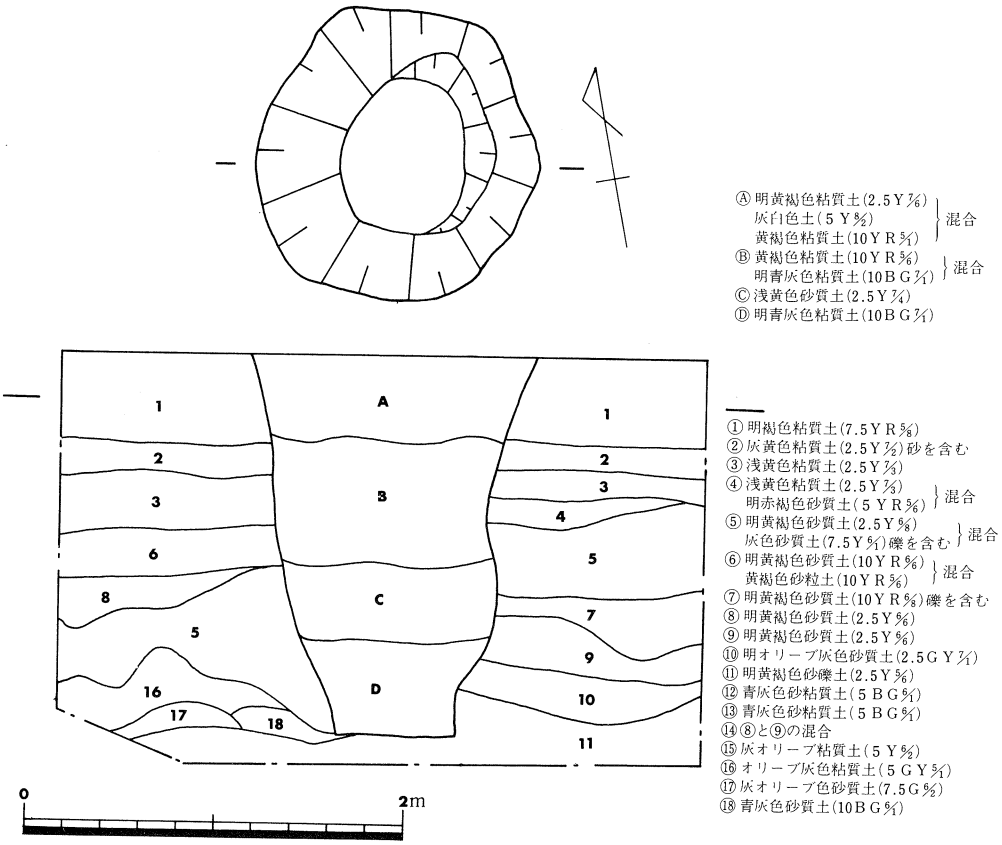


第28図　井戸−3遺構図

調査中、多くの井戸から現在でも十分その機能を果せるだけの湧水をみている。湧水が得られる地層はいずれも砂層ないし砂礫層で、上面から0.9～3.0mで達しており、場所によって異なり必ずしも一定の深さではない。ただ近接する井戸については同一の湧水層を共有しているのがみられた。地区の南側では井戸の存在は全くないが、E－1・2における湧水が得られる地点までの深さ－3mが示すように、おそらく南側地域では湧水層まで極度に深いためであろう。つまり比較的浅い（－2m以内）掘削で湧水が得られる北側地域を意識的に選択しており、南域を避けたために、井戸の密集度が極端に異なる。井戸の底と湧水が得られる地点までの深さは同一とは限らず、むしろ湧水地点よりもさらに0.5～1mほど掘り抜いている例が多い。十分な貯水、湧水による壁面崩壊の結果の土砂堆積を考慮しての掘削とみられる。

E－1

上面を排水路によって切られており平面形は不明であるが、楕円形に近いと思われる。平面規模は現存で長軸1.45mを残し、深さ（推）4.1mを測る。－0.6mまで摺鉢形状で、以下、長



第29図　井戸－4遺構図

軸0.82×短軸0.78mの不整楕円形を呈して、ややうねりを有しながらほぼ垂直に掘り下げられる。底部については不明。埋土は上層に土・砂質、－1m以下からは粘質土を中心にした堆積層で7層に分かれる。

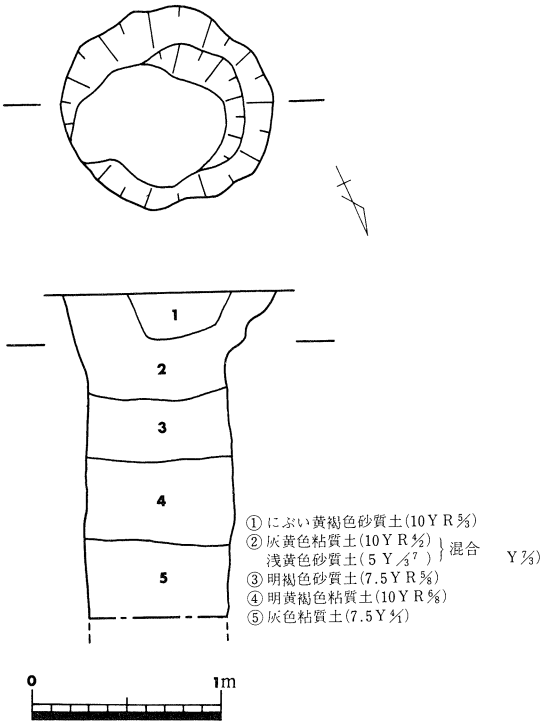
E－2

平面形は円形。(長軸1.65×短軸1.48m)、深さ（推）4.27mを測り、3地区の井戸の中では最も深い。掘り方は－0.6mまで摺鉢形状で、(0.9×0.85m）の円形を呈してすぼまりながら垂直に近い傾斜で下がっていく。－3.62m地点では（0.05×0.58m）の円形をなす。南壁側－1.18～1.94m地点で若干の壁面崩壊がある。埋土は上層（摺鉢形状の部分）に落ち込んで3層（A～C）がみられ、以下5層がみられる。

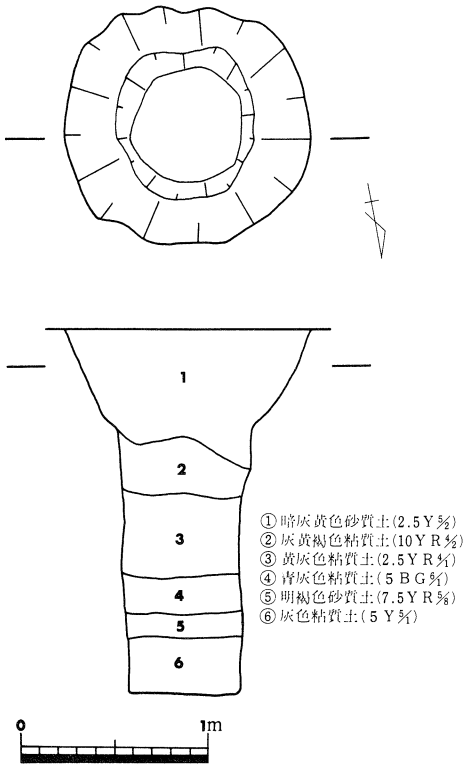
E－1・2の湧水は共に－3m地点の緑灰色砂礫層からである。

E－3

平面形は不整楕円形。(長軸1.37×短軸1.22×深さ3.0m)を測る。掘り方は－0.66mまで東壁



第30図　井戸－5遺構図



第31図　井戸－6遺構図

でやや内弯気味を呈するがほぼ摺鉢形状に近く、以下（0.96×0.84m）の不整楕円形ですぼまりながら、西壁側に傾斜面を有して掘り下げられる。東壁の摺鉢形状の直下にえぐれがあり、壁面崩壊かと思われる。底部は（0.73×0.6m）の隅丸方形に近く、平坦である。湧水は－2.1mの暗緑灰色砂粘質土、緑灰色砂粘質土の混合層より、しみ出してくるという感じで得られた。

出土遺物として牛の鼻輪が確認された。長か9.5㎝、最大幅3.0㎝、厚み1.2㎝のヘチマ形に径1.3～1.5㎝の開孔が両端に見受けられる。

E－4

平面形は不整円形。(1.6×1.32×2.0m）を測る。掘り方は中位に大きなえぐれをもって傾斜するが、底部直上で垂直に下がる。底部は（0.81×0.65m）の不整円形で、平坦になる。埋土は上層（A・B）に2～3の混合土がみられる。湧水は－0.9m以下の砂質、砂礫層(⑤以下)より大量に得られる。中位の壁面のえぐれは位置的にみても明らかに湧水による壁面の崩壊である。

E－5

平面形は不整円形。(1.31×1.16m）を測り、深さは1.71mまでを確認した。掘り方は－0.4mまで西壁側に段を有して傾斜した後、(0.86×0.63m）の不整楕円形を呈し、中位でやや内弯してふくらむがほぼ垂直に掘り下げられる。底部については不明、埋土は上面でにぶい黄褐色砂質土がピット状のブロックで入るのをはじめ、5層に分けられた。

確認されE－1.71mまでの深さにおいて湧水は得られず、まだ若干の掘削によって湧水をみるものであろう。

E－6

平面形は不整円形。(1.36×1.28×1.9m）を測る。掘り方は－0.6mまで摺鉢形の傾斜をした後、(0.77×0.74m）を測る不整円形を呈し、壁面にややうねりを有してすぼまりながら下がっていく。底部は（0.6×0.6m）の円形で、平坦である。埋土は摺鉢形の掘り方直下までに落ち込み状に、暗灰黄色砂質土が大量に埋まるが、以下5層はほぼ水平層といえる。湧水は－1.8m地点の灰色砂礫層から得られた。隣接するE－5の湧水は、おそらくE－6の灰色砂礫層を共有していると思われる。

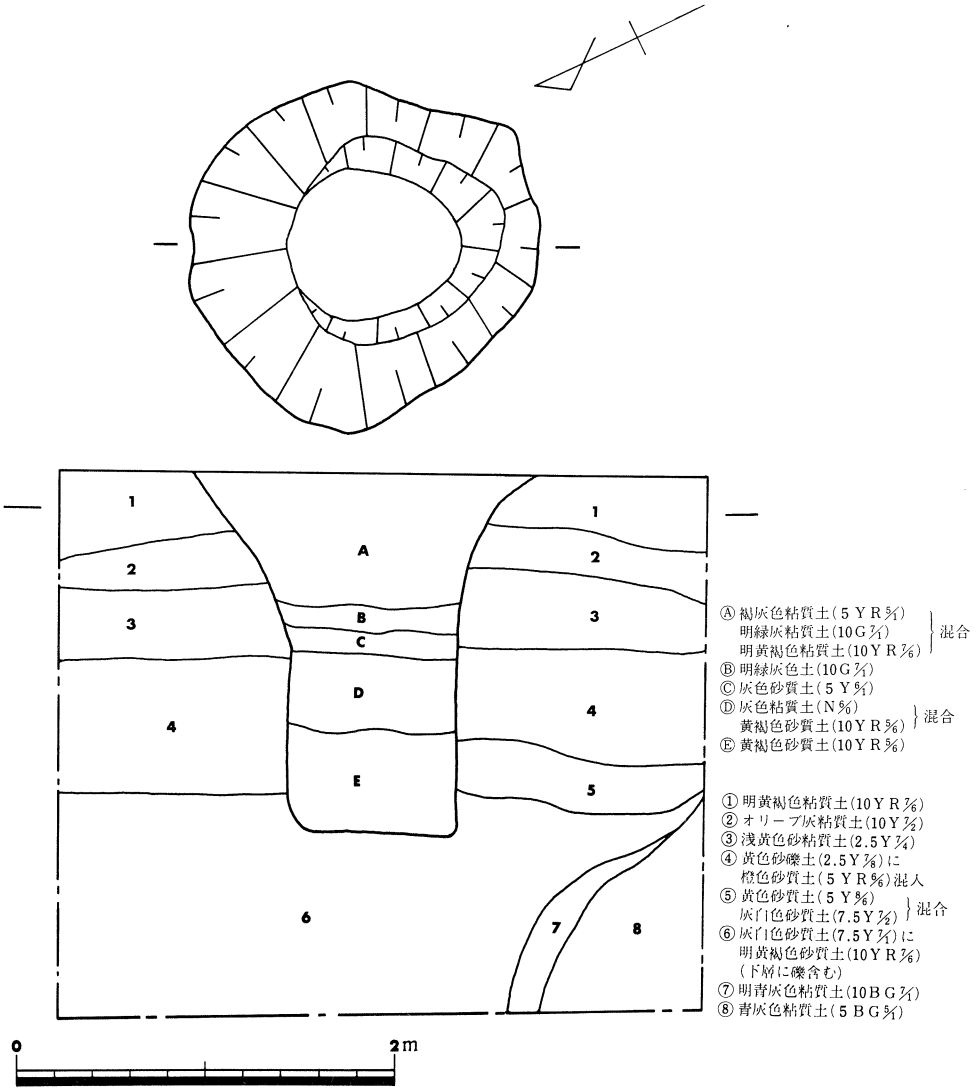
E－7

平面形は不整円形。(1.9×1.71×1.9m）を測る。掘り方は－0.7mまで南壁側に屈曲した傾

斜を有する摺鉢形状を呈しており、(0.9×0.84m)の円形をなくして以下ほぼ垂直に掘り下げられる。底部は(0.9×0.77m)の楕円形で、平坦な底といえる。埋土は摺鉢形状の掘り方部分を境にして、上・下に厚い混合層(A・D・E)、中間に薄い2層(B・C)がはさまれる。湧水は－1m以下の混合砂礫層中位から、浅いながらもかなり大量に得られた。

E－9

平面形はほぼ楕円形。(1.77×1.56m)を測り、深さは1.1mまでを確認している。掘り方は



第32図　井戸－7遺構図

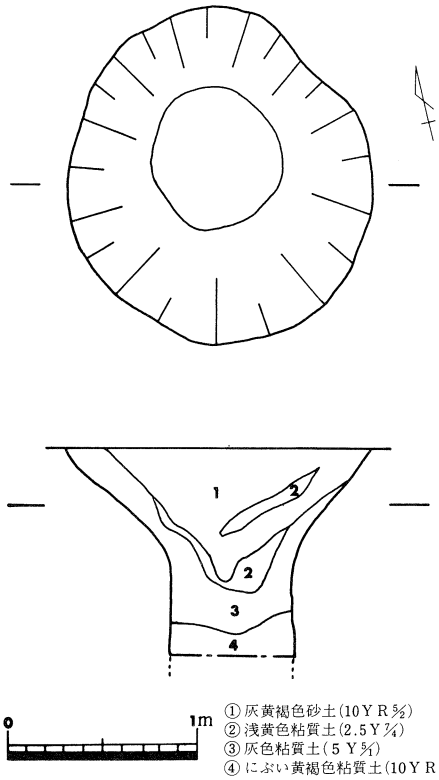
−0.6mまで弯曲した摺鉢形状を呈し、以下(0.76×0.67) mを測る不整円形でほぼ垂直に掘り下げられる。埋土は摺鉢形状の直下までに3層（①〜③）がブロックでの混入をともないながら、上面から大きく落ち込で埋まるのをはじめ4層に分けられる。湧水は−1.1mの深さの段階ではまだ確認できなかった。

E−10

平面形は不整な楕円形。(1.14×1.05×1.93m）を測る。掘り方は−0.04mまで摺鉢形に近いが急傾斜の壁面を有する。以下、(0.8×0.76m）の不整楕円形を呈してほぼ垂直に掘り下げられる。底は（0.85×0.7m）の不整な楕円形で、平坦である。埋土は中位の2層（B・C）が傾斜して堆積し、その上・下に各1層あり4層に分かれる。−0.66m掘り下げた地点で砂土層に到達しているが、湧水が得られたのは−1.3mからのオリーブ灰色砂礫層である。

E−11

平面形は不整円形。(1.48×1.35×2.24m）を測る。掘り方は−0.85mまでゆるく内弯した摺鉢形で、(1.18×0.86m）の不整な楕円形を呈する。以下、除々に内弯して下がり、−1.7m地点において平面規模（1.24×1.09m）を計測しており、最も大きくえぐれている。底部は（0.73×0.69m）の不整円形で、平坦である。埋土は7層に分かれるが、−1.2mまでの4層（A〜D）はいずれも砂礫層で、以下は砂質・粘質土である。井戸の掘削は2層の礫を含む砂質土（5・6）に達しており、湧水はこの2層の境を中心に得られた。この湧水地点は、−1.7m地点における壁面のえぐれと一致する。



第33図　井戸−9遺構図

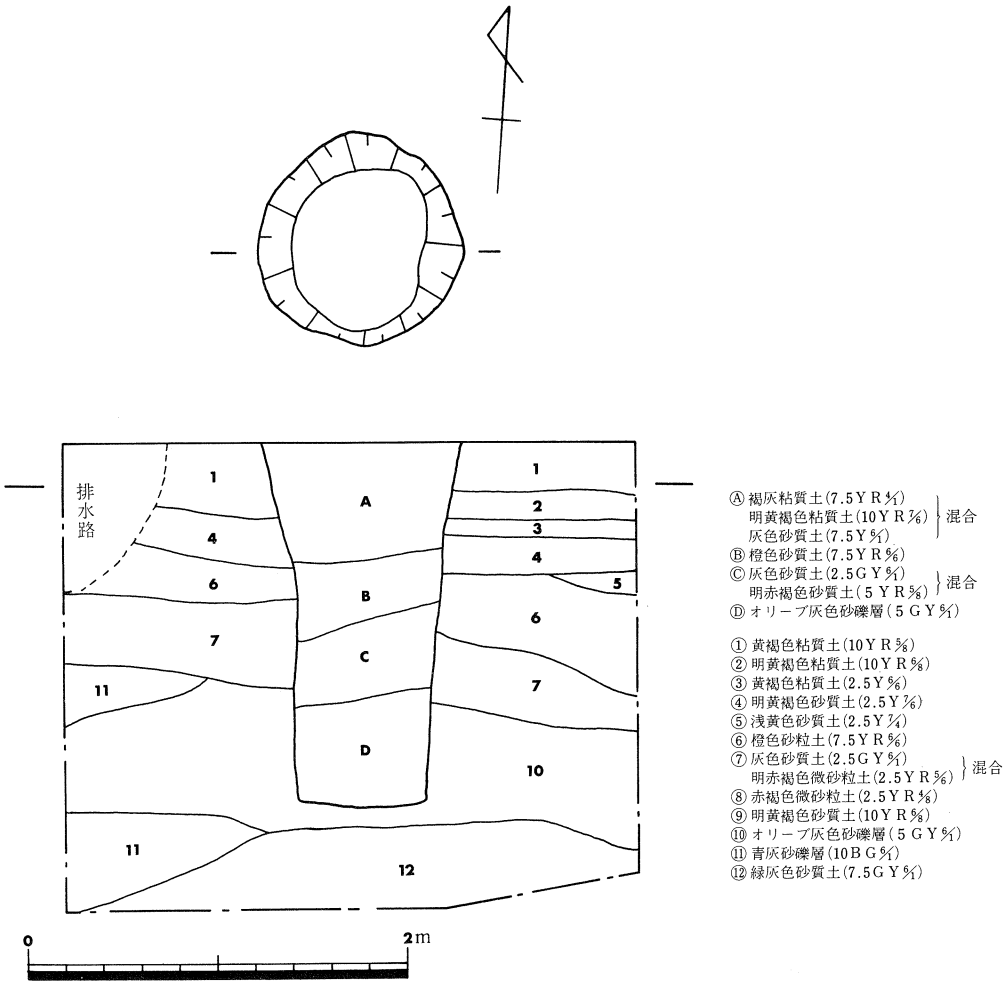
E−12

平面形は隅丸方形に近い。(1.41×1.2×1.4m）を測る。−0.6mまで摺鉢形に近い断面で、南壁側は急傾斜面を有する。以下、(1.08×1m）を測る不整な隅丸方形を呈して垂直に下がる。底は（1.07×0.95m）を測る隅丸方形で、底面は若干北側へ下だり気味のゆるい傾斜。埋土は上層で南北に傾斜して分離する2層（A

・B）があり、以下5層に分かれる。湧水は底部直下の黄橙色砂礫層からしみ上がってくる状態で得られたが、その湧出量は他の井戸と比較して少ない。

E—13

平面形は不整円形。(1.2×1.14×2.08m)を測る。—0.56mまでやや内弯気味の摺鉢形状の断面形で、以下、(0.76×0.68m）の不整円形を呈してほぼ垂直に下がる。南壁は—1.6m地点で大きく内弯しており長軸0.9mを計測した。底は（0.8×0.72m)の不整な隅丸方形でほぼ平坦な面をもつ。埋土は摺鉢形状の地点で第2層（B）がやや高くなって、逆に—1.24mの南壁のえぐれから底にいたる4層（E～H）は凹んだ状態の堆積にある。—0.9mの井戸掘削で礫混りの地層に達するが、湧水をみたのは—1.52mからの深い混合砂礫層（6）からであった。



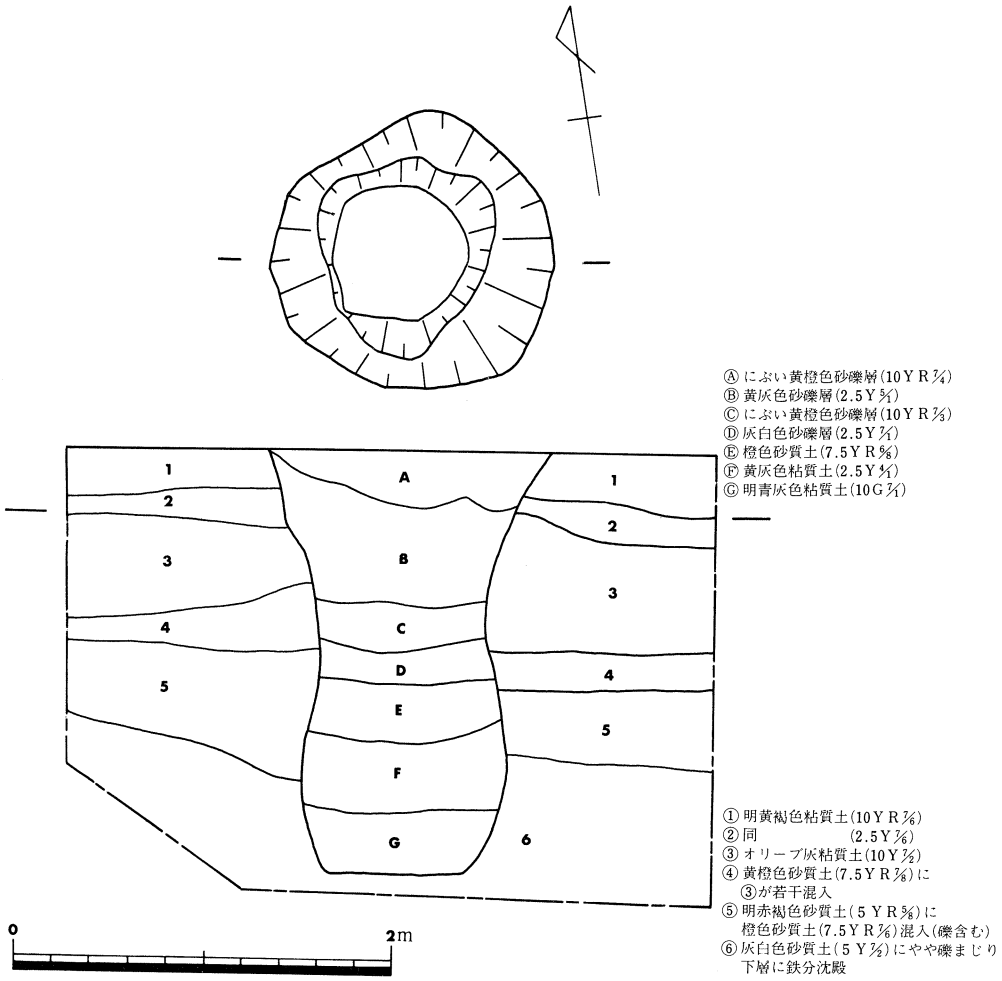
第34図　井戸—10遺構図

E—14

平面形は不整円形。(1.26×1.14×2.04m) を測る。掘り方は −0.5m まで垂直に近く、さらに0.3m ほど摺鉢形に近い傾斜面があり、(1.0×0.8m) の不整楕円形を呈する。以下、底部まで南壁側でやや垂直を保ちながらも他の壁面の急傾斜によってすぼまって下がっていく。底は(0.8×0.68m) を測る不整な隅丸の三角形に近く、平坦である。埋土はいずれも落ち込んだ状態にあり、ブロック状の堆積も含めて7層に分かれる。湧水はE—13と同じく混合砂礫層(6)から得られたが、この層はE—14からE—13にかけて大きく下がっていくのがみられた。

E—15

平面形は楕円形。(1.63×1.28×1.94m) を測る。上面から −0.5m まで北壁側で内弯気味の

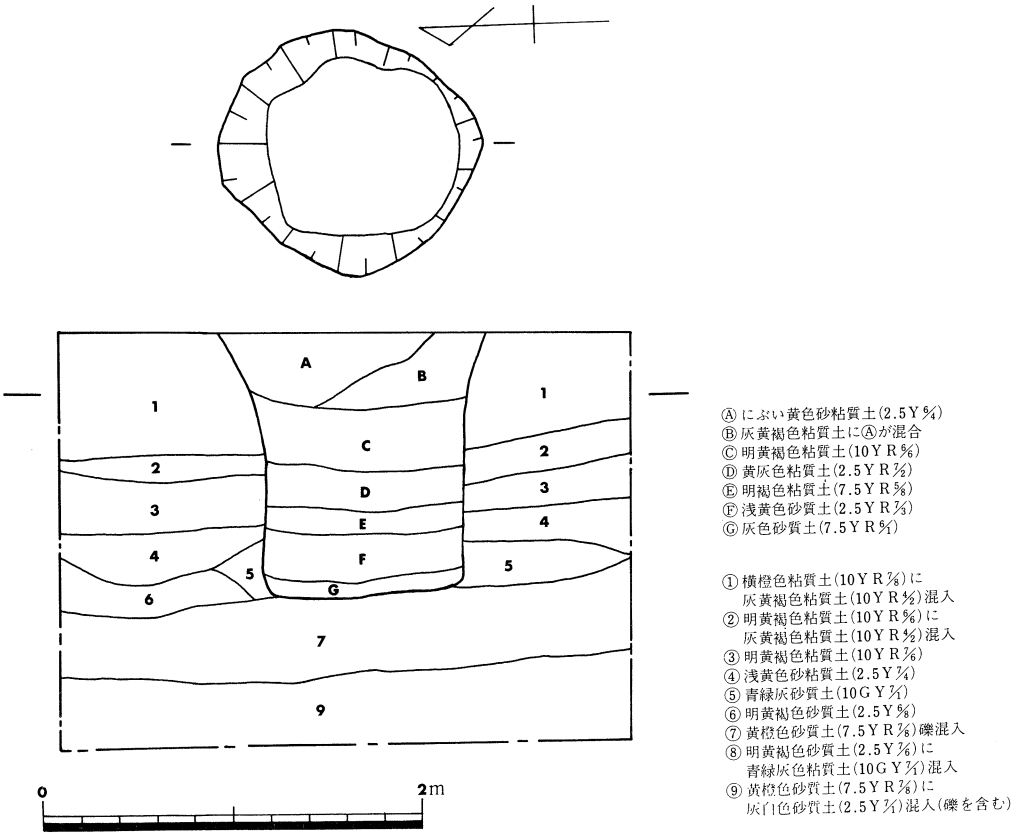


第35図　井戸—11遺構図

摺鉢形を呈し、(1.3×0.8m) の不整楕円形になる。以下、底部までゆるく内弯して下がり、最も大きくふくらむ−1.2m 地点では長軸1.42m を計測した。底は (0.96×0.64m) の楕円形で、平坦である。埋土は基本的に6層に分けられ、上層に凹凸状の堆積がみられる。湧水は −1.0m から厚さ 0.8 m ほどの橙色砂礫層からで、井戸掘削はその下の砂層にまで達している。尚、橙色砂礫層がE−15の南側 0.6 m から段状に下がっていくのがみられる。

E−16

上面から−0.5m にかけてE−17によって切られて存在する。平面形は楕円形。現存で(1.82×1.45×2.21m) を測る。−0.74m まで、東壁にえぐれを有した摺鉢形の断面を呈し、(1.4×1.08m) の楕円形をなす。以下、底部までは先細りして掘り下げられる。底部は (1.02×0.89) m を測る不整円形で、底面は東側寄りがやや高くなっている。埋土は6層に分かれ、上層のピット状の混合土 (H) 以外は、いずれも東壁側に傾斜していく堆積状態がみられた。

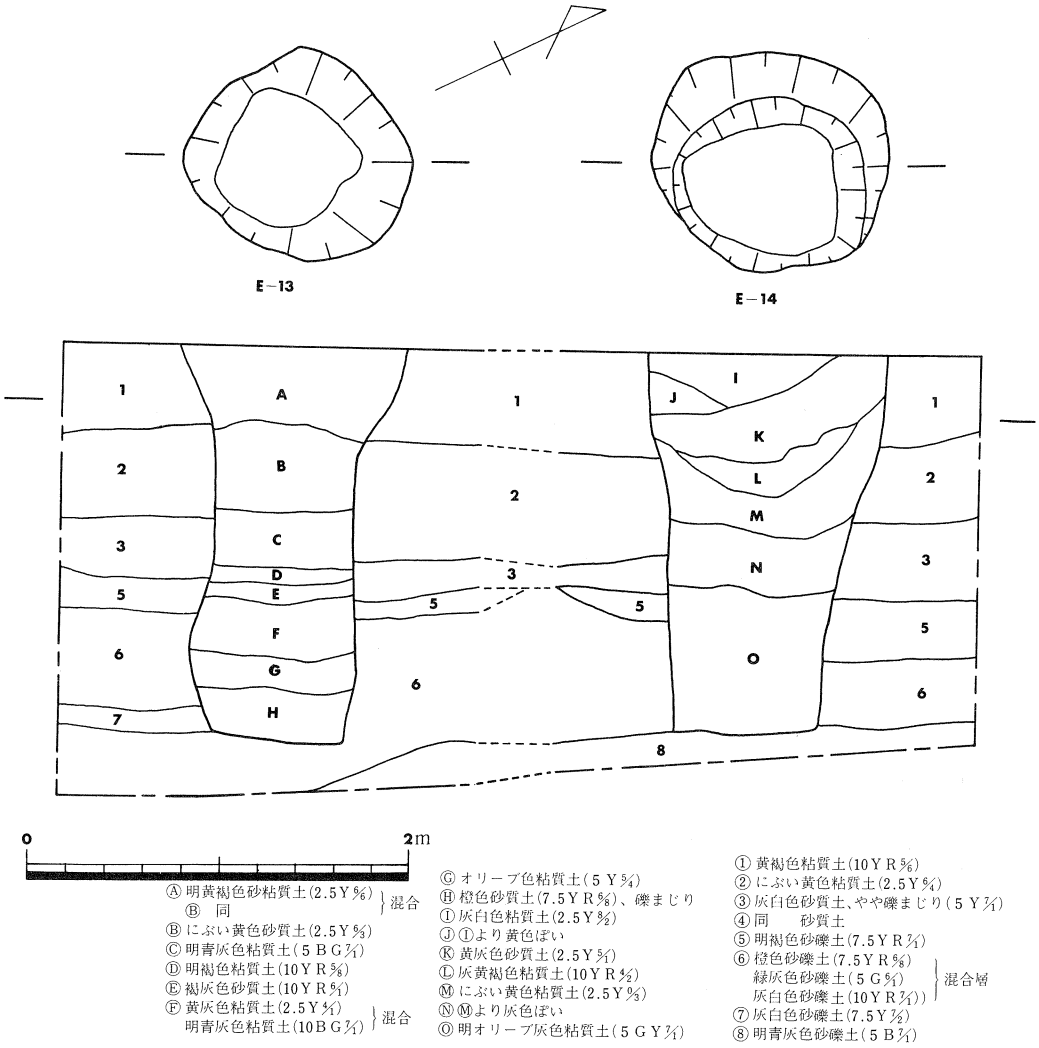


第36図　井戸−12遺構図

E—17

平面形は楕円形。(1.8×1.31×2.1m) を測る。−0.5m まで西壁側で大きく内弯する傾斜面を有して内側へ掘り下げられて、(1.24×1.20m) を測る歪んだ隅丸方形になる。以下、すぼまりながら傾斜して底部に至る。底は (0.8×0.72m) を測る隅丸の三角形に近い平面形で、平坦である。埋土は上層にブロック混入を供なう大きく落ち込んだ状態の堆積がみられ、以下はほぼ水平層に近い。

湧水は−1.72m の礫を含む砂質層 (4) の下層から得られており、E—16・17が共有する湧水地点である。



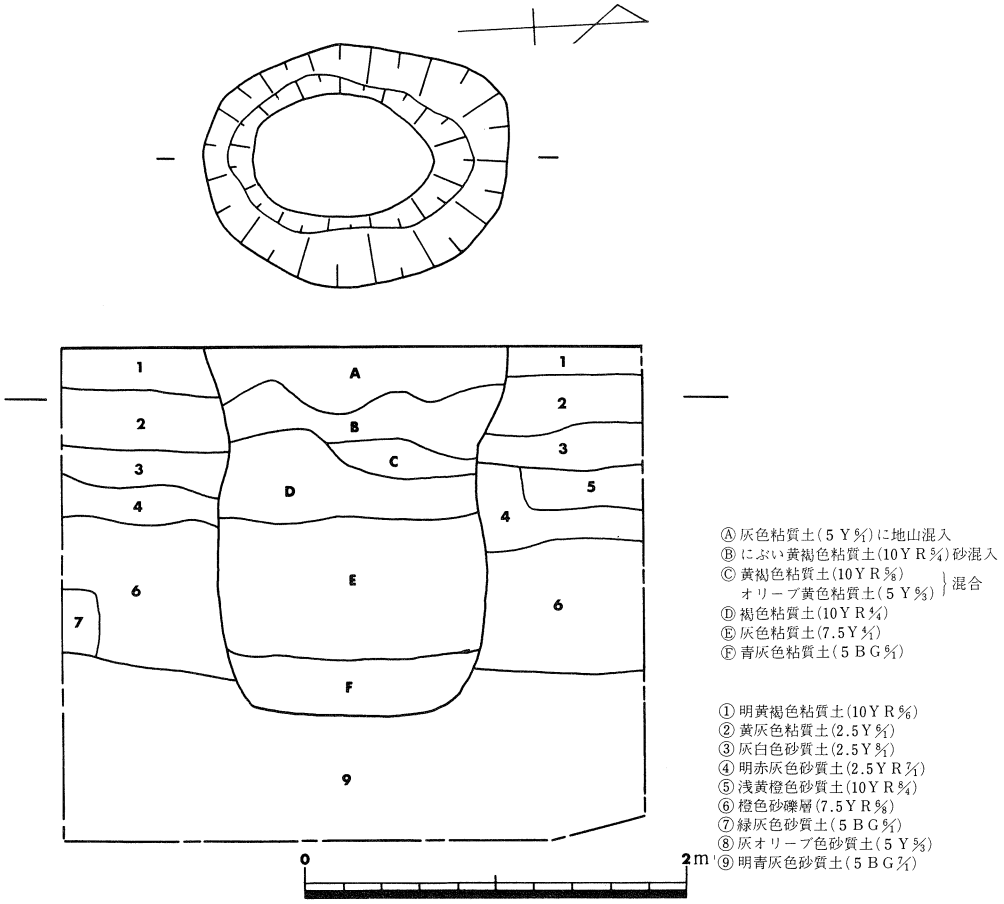
第37図　井戸—13・14遺構図

E—18

平面形は楕円形。(1.7×1.46×1.9m) を測る。掘り方は −0.5m まで内弯気味の傾斜を呈し、(1.1×1.06m) の不整円形になる。そこから段を有して−0.95m まで摺鉢形状の傾斜で下がり、(0.7×0.9m) の不整楕円形になり、その規模は縮小される。以下、底部までは垂直に掘り抜かれ、その平面形、規模に上とさほどの変化はみられない。底面は中央部でやや高くなっている。埋土はいずれも粘質土であるが6層に分けられ、内弯した掘り方地点までに落ち込んだ3層がみられた。湧水はE—18の南側に隣接するE—16・17と同じ砂層で、−1.7m を計測した地点より得られた。

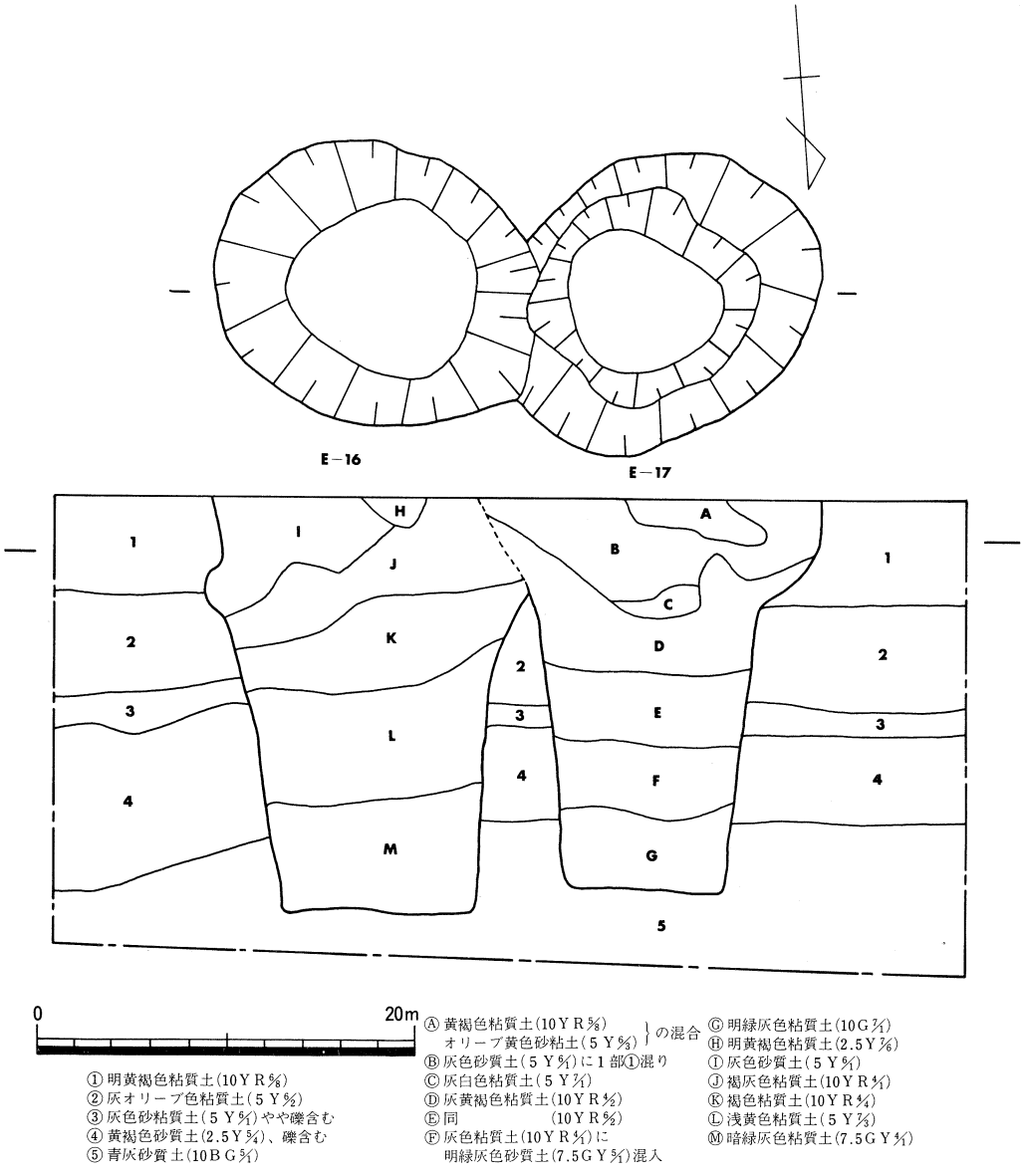
E—19

平面形は不整円形。(1.66×1.6×2.4m) を測る。−0.46m まで摺鉢形状に傾斜する壁面がみられ、(1.1×0.9m)を測る隅丸方形に近い平面形を呈する。以下、ほぼ垂直に下がるが、−1.68



第38図　井戸—15遺構図

m付近より外側へやや広がって底にいたる。底は（1.2×0.9m）を測る不整楕円形で、底面はやや丸味を有する。埋土は6層に分けられ、上部に互いに食い込み落ち込んだ状態の堆積がある。湧水は－2m付近の緑灰色砂層から得られた。埋土の最上層（6）が緑ぽいのはこの壁面が混入したものであろう。



第39図　井戸—16・17遺構図

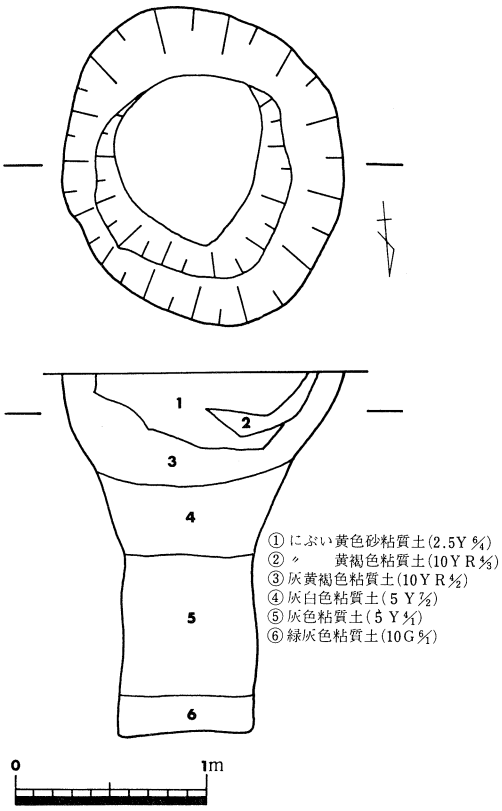
E—20

平面形は不整円形。(1.24×1.14×2.2m)を測る。掘り方は、南壁側で—0.5mまで内弯気味の傾斜の後、—0.8mまで垂直に下がり、北壁側では—0.7mまで垂直、さらに—1.0mまで0.3mほど内側へ傾斜する。—1.0m地点で(0.88×0.8m)を測る不整円形を呈し、以下外側へ広がりながら底へ至る。底部は(1.24×1.0m)を測る不整円形で、底面はやや丸味を有する。埋土は5層に分かれ、上層(B)は北側へ落ち込み、また最下層(F)の緑灰色粘質土はかなりの地山混入をみる。湧水は—1.5m付近にあたる。暗緑灰色砂粘質土の直上の砂礫層より得られた。

E—22

平面形はほぼ円形。(1.02×1.56×2.52m)を測る。南壁側—0.6mから北壁側の—0.8mにかけてやや内弯気味の摺鉢形に近く、(1.0×0.84m)を測る不整円形になる。以下、—1.4mまでほぼ垂直に掘り抜かれ、その後、内弯して底部に至る。底部は(0.80×0.64m)を測る不整円形を呈し、平坦である。埋土は7層に分けられるが、摺鉢形の部分までにブロックでピット状に落ち込む2層(A・B)と凹凸状のうねりを有する粘質土2層(C・D)がみられる。湧水は—2.2m付近の明青灰色砂質土(12)の直上から大量に得られた。—1.4mからの壁面の内弯は、砂質土・礫を主とする軟弱な地層の湧水によるえぐれである。

この井戸からは素掘りの井戸の中において唯一の遺物として「にがり」を検出した。—1.7m地点の明赤褐色砂質土(G)直上、北壁寄りに口をやや上にした傾むいた状態でほぼ完形を保っていた。



第40図　井戸—18遺構図

出土遺物

にがり　水をくみ上げるための桶で幅5.5～6.0cm、厚さ5cmの板材を14枚組み合わせ上辺から4.5cmと最底部の2ヶ所に竹製タガで底部をしめつけて桶としている。上辺には、幅2.0cm、厚さ0.5cmの板をはめ込んで紐と直結させてい

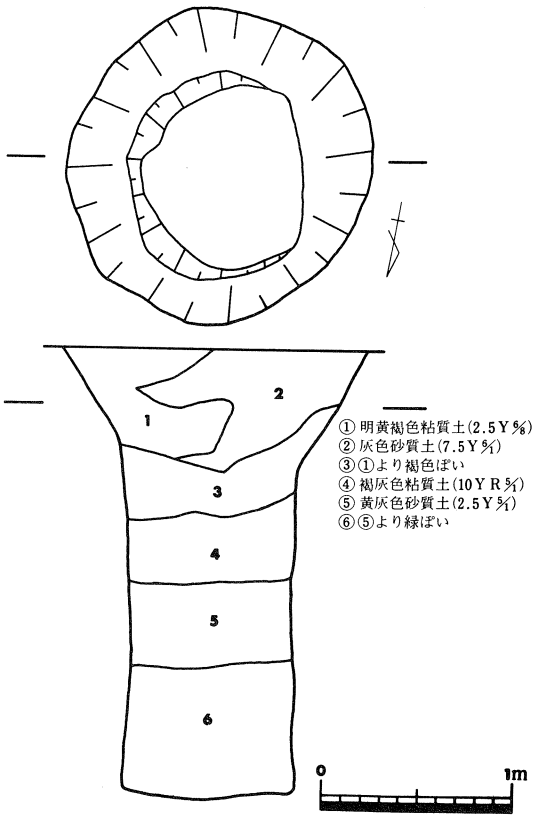
た。底部は、中央の幅2.5～3.0cmの狭い板材を含めて4枚で構成されていて、その板材との接合には、長さ3.0cm、最大幅0.5cmの両端を尖出させた竹櫛で2ヶ所づつ差し込んでその接合としている。上径27.0cm、下径21.5cm、厚さ0.5cm。

E—23

平面形は不整円形。(1.38×1.32×1.94m）を測る。掘り方は垂直に下がった後、内弯気味のゆるい傾斜を呈するのが西壁側で—0.4mまでみられ、東壁側では同じ形状の掘り方が—0.62mまで2段をもってみられた。以下、(0.86×0.84m）の不整円形をなし、ほぼ垂直に掘り抜かれるが、底部直上の西壁がややえぐれている。底部は（0.02×0.88m）を測る不整円形を呈し、底面は平坦である。埋土は6層に分かれる。湧水は—1.36mの黄灰色砂礫層（a）の下層から得られた。

E—24

平面形は楕円形に近い。(1.1×1.0×2.04m）を測る。掘り方は—0.64mまで内弯気味の垂直に近い傾斜で、(0.76×0.68m）を測る不整円形になる。以下、ややすぼまりながらうねりを有して直上に掘り抜かれ底に至る。底部は（0.68×0.64m）の不整円形を呈し、平坦である。埋土6層に細分されるが、基本的に4層であり深い単一層がみられる。湧水はE—23とほぼ同じ地点から得られたが、E—24でE—23からの黄灰色砂礫層（a）が途切れ、逆方向から砂層が食い込んでいるのがみられ、E—24の湧水はこの砂礫層と砂層の分離地点にあたる。



第41図　井戸—19遺構図

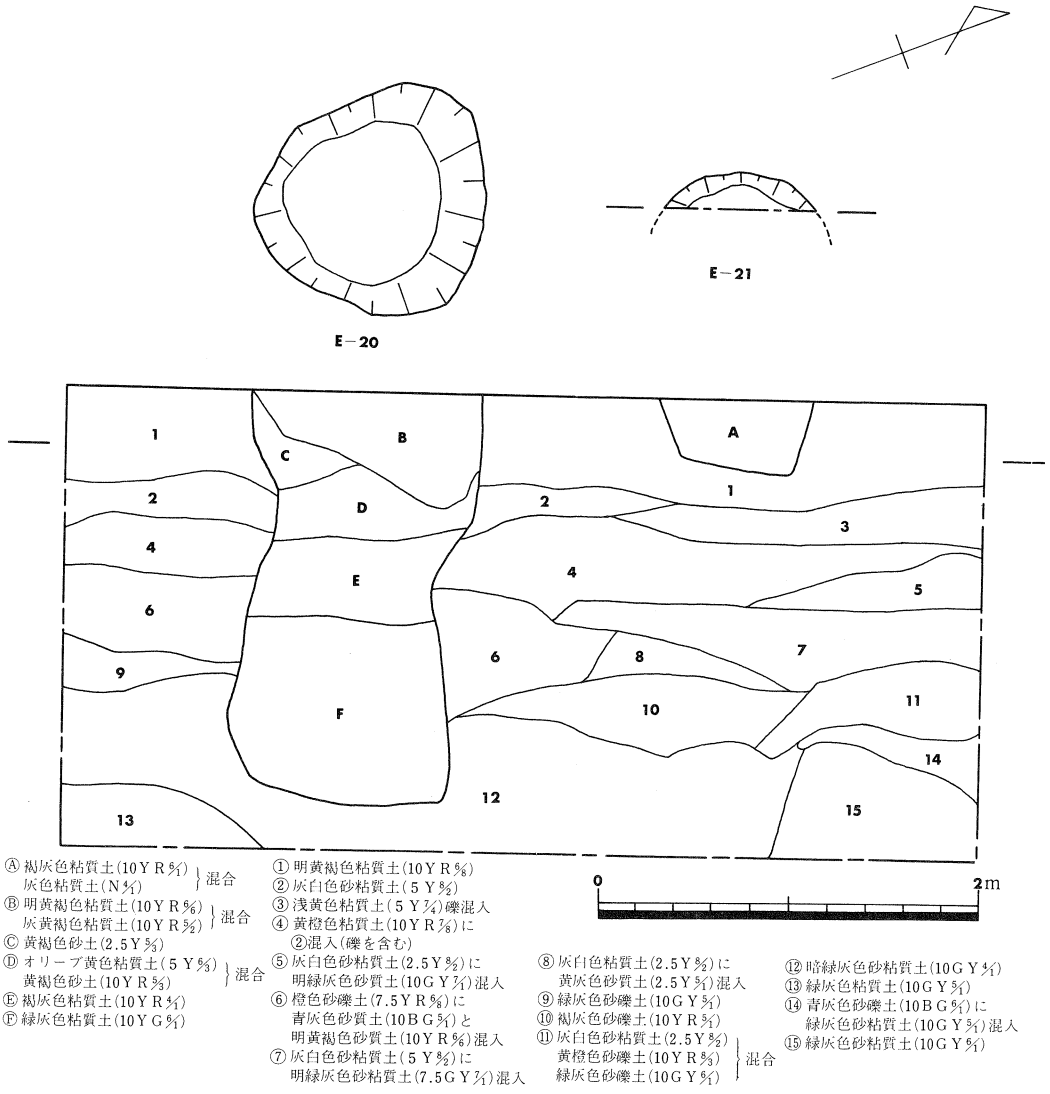
E—25

平面形は楕円形。(1.66×1.42×2.3m）を測る。掘り方は—0.6mまで内弯気味に内側へ急傾斜して、(1.24×1.16m）を測

る隅丸方形に近い平面形になる。さらに－1.08mまでは外弯状の壁面傾斜で掘り抜かれ、(1.0×0.96m）を測る不整円形を呈する。以下は垂直に下がり底に至る。底部は平坦で、その形状・規模は－1.08m地点のそれとほぼ同一である。埋土は内弯した掘り方直下までに4層（1～4）が落ち込み、以下4層に分けた。湧水は－2 mの黄灰色砂礫層より得られた。

E－26

平面形は円形。(1.16×1.08×1.84m）を測る。掘り方は東壁側で－0.7m、西壁側で－0.3mまで内側へ急傾斜する。以下、東壁側はうねりを有して内側へ、西壁側はやや外側へ広がるよ

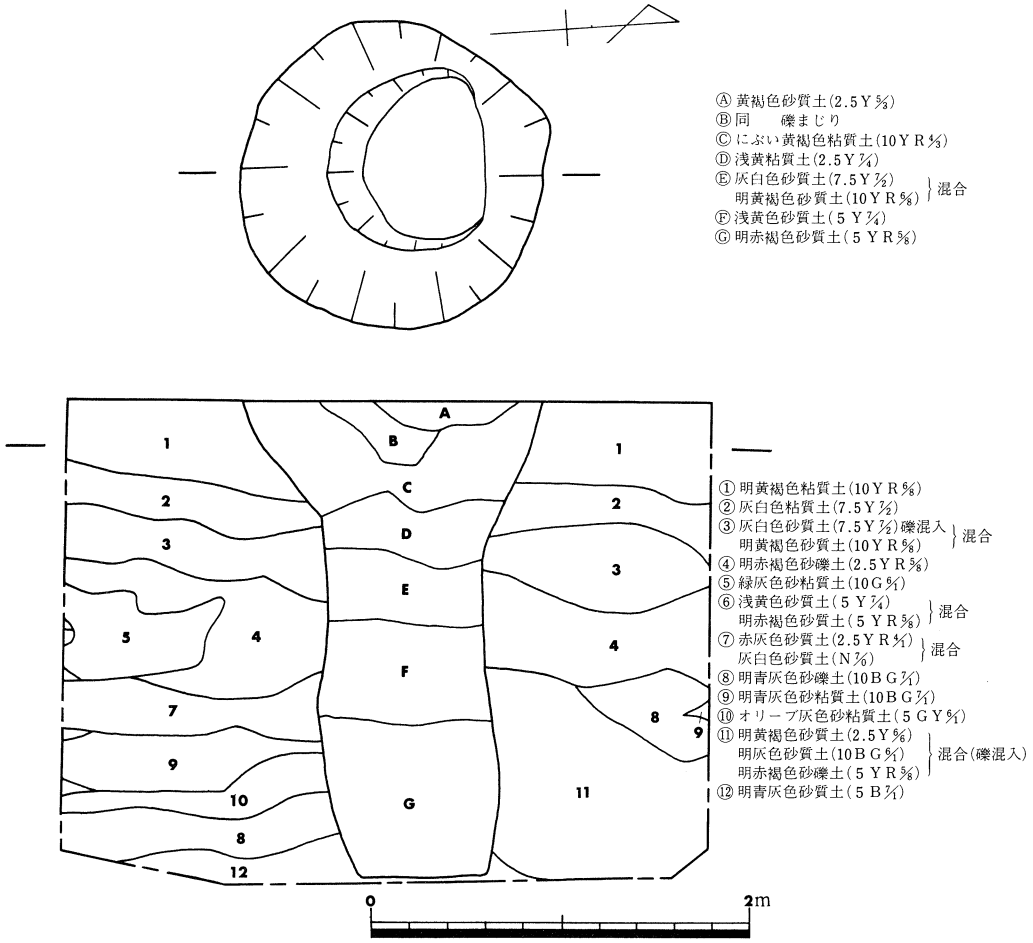


第42図　井戸－20・21遺構図

うにして掘り抜かれる。底は（0.88×0.84m）を測る不整円形を呈し、やや尖底状である。埋土は4層に区別したが、−0.9mまでの第1層（A）は4層からなる混合土層である。湧水は黄灰色砂礫層（12）からわずかにしみ出す程度で、井戸の機能に疑問を残すほどにその量は少なかった。

E−27

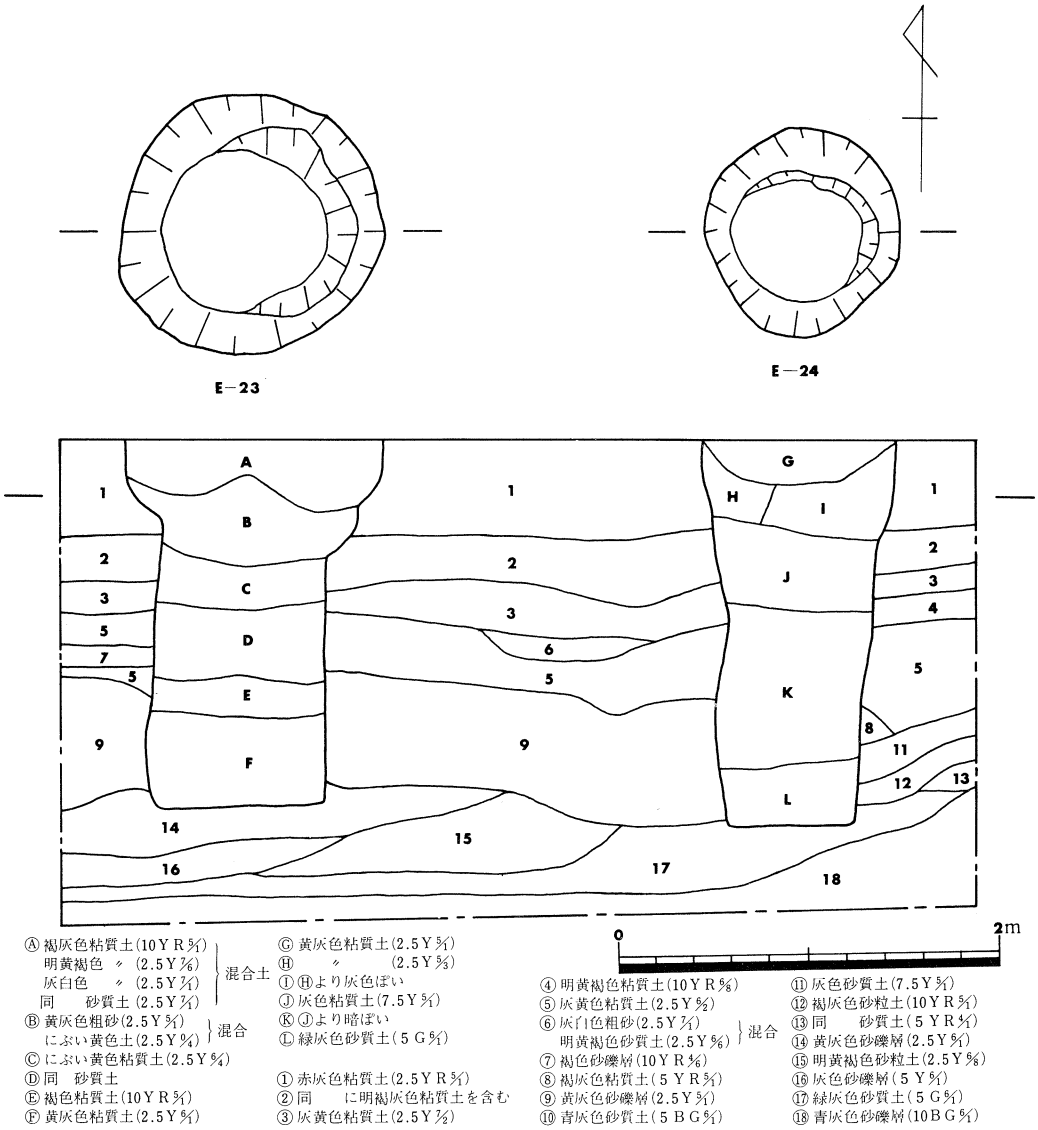
平面形は不整円形。平面規模で（1.06×1.02m）を測り、深さは0.96mまでを確認した。掘り方は、東壁側で内弯、西壁側でやや外弯気味の傾斜する壁面を有して、すぼまりながら掘り下げられていく。−0.96m地点で（0.6×0.6m）を測り、平面形は不整円形を呈する。埋土は5層に分かれ、いずれも中央部が落ち込んだ堆積状態を示す。湧水はまだ得られていない。



第43図　井戸−22遺構図

E—28

平面形は不整円形。（1.2×1.02m）を測り、深さは1.0mまでを確認した。掘り方は、西壁側に内弯気味にえぐれる段を有しており、—0.04mまで同じくやや内弯気味の急傾斜を呈してすぼまりながら掘り抜かれる。—1.0m地点で（0.8×0.64m）を測り、平面形は不整楕円形になる。埋土は5層に分かれ、第1層目（1）が弯曲して落ち込むのをはじめ、上層には中央へ傾斜して下り気味の堆積がみられる。湧水は未確認である。



第44図　井戸—23・24遺構図

E—28

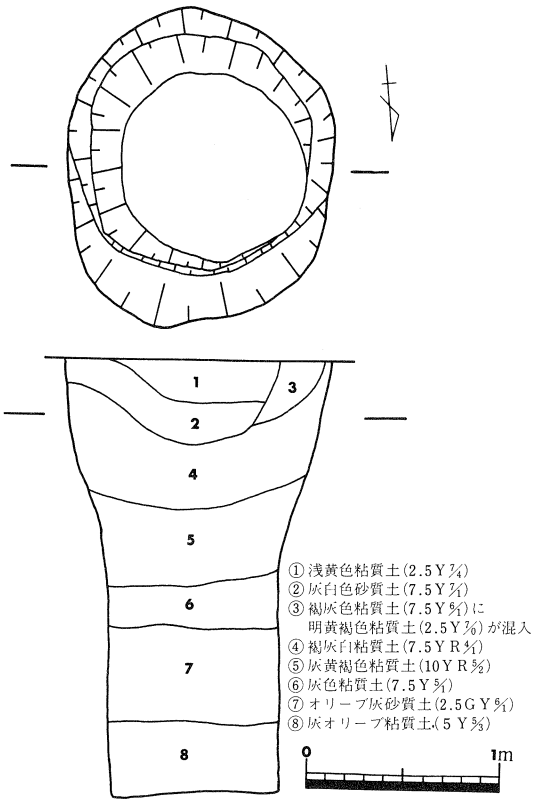
平面形は不整円形。(1.2×1.02m) を測り、深さは1.0mまでを確認した。掘り方は、西壁側に内弯気味にえぐれる段を有しており、−0.04mまで同じくやや内弯気味の急傾斜を呈してすぼまりながら掘り抜かれる。−1.0m地点で (0.8×0.64m) を測り、平面形は不整楕円形になる。埋土は5層に分かれ、第1層目 (1) が弯曲して落ち込むのをはじめ、上層には中央へ傾斜して下り気味の堆積がみられる。湧水は未確認である。

E—29

上面の北側一部を野つぼによって切られた状態で検出した。平面形は楕円形。(1.28×1.08×2.21m) を測る。−0.92mまで急傾斜して内側へ掘り抜かれ細長い摺鉢形状を呈し、(0.94×0.78m) を測る不整楕円形になる。以下、内弯して底部に至るが、特に北壁側は大きくえぐれており、最長軸1.28mを計測した。底部は上面の中心から北側へずれて位置し、(0.76×0.48m) を測る楕円形を呈し、丸底である。埋土は4層に分けられ、凹凸ないしうねりを有した堆積状態が観察できた。湧水はE—29で北から南へ下がっていく(−1.6〜1.96m) 黄灰色砂礫層の最下位から得られた。

E—30

平面形は不整な長楕円形。(2.0×1.4×1.98m) を測る。−0.68mまで摺鉢形状の断面形を呈し、(0.94×0.76m) を測る楕円形になる。以下、北壁側はほぼ垂直に掘り抜かれるが、南壁側は−1.52mより内弯してえぐれ底部にいたっており、最長軸0.88mを計測した。底部は径約0.8mの不整円形で、底面は北壁へやや下っていく。埋土は上層3層 (E〜G) が摺鉢形状の直上まで傾斜して落ち込み、以下4層はややうねりのある状態で堆積していた。湧水はE—29と同じ黄灰色砂礫層の下層から得られた。



第45図　井戸—25遺構図

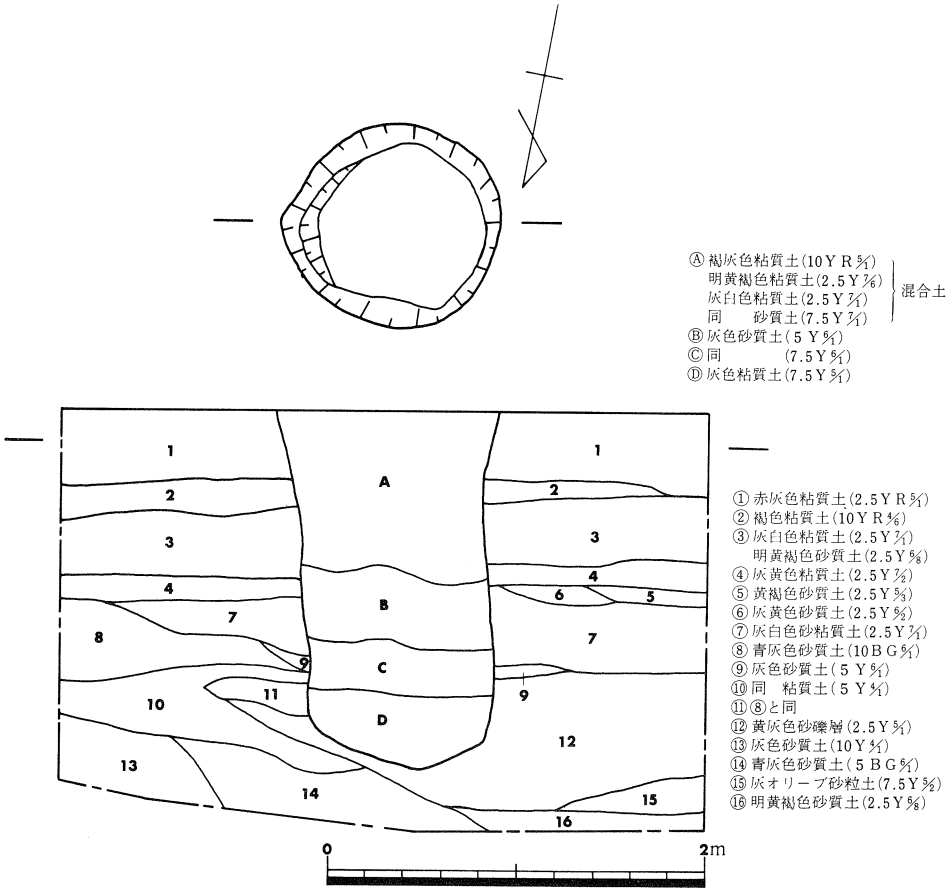
E—31

上面の南東・北西側の一部をE—29・32

に切られて存在する。平面形は不整な楕円形を呈すると思われる。現存で(1.3×1.18m）を測り、深さは1.06mまでを確認した。掘り方は－0.8mまで内弯気味の傾斜面を有して摺鉢形状に近く、以下ほぼ垂直に下がると思われる。－1.06m地点で平面形は不整な楕円形を呈し、(1.1×0.72m）を計測した。埋土は5層までを確認しており、上層3層（1～3）は西壁寄りに落ち込む。湧水は得られていない。

E－32

平面形は円形。(1.44×1.32m）を測る。掘り方は－0.64mまで、東壁側で垂直に近い急傾斜、西壁側は0.1mほど垂直に下がった後、外弯気味で内側へ傾斜し、(0.86×0.84m）を測る隅丸方形に近い平面形を呈す。以下、ほぼ垂直に掘り抜かれていく。深さは1.7mまで確認した。湧水は可能な深さではあるが、まだ砂礫層に達しておらず湧水はみていない。埋土は9層に分けられたが、上層（1～5）は大きな落ち込み状の埋土を細分したものであり、以下の層もや



第46図　井戸－26遺構図

や中央部で落ち込んで堆積していた。

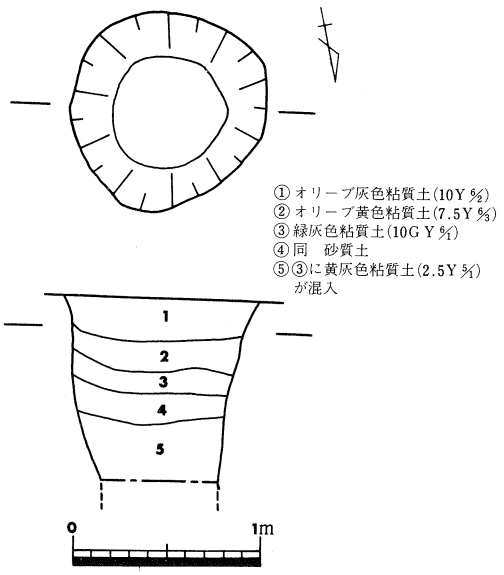
桶側井戸

地区中央に存在するE－8は、その平面規模に径約2.6ｍを測る他の井戸と比較にならない大型のもので、当初で掘削調査中に塼を伴出させるなど注目はされていたが、他の井戸同様に素掘りの井戸と考えていた。そして井戸の上面より－2.2ｍ掘り下げた地点で木桶を検出し、E－8が「桶側井戸」であることを確認した。

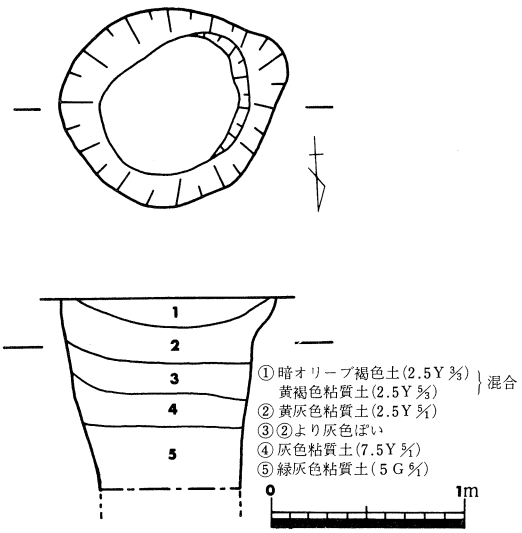
桶側は底部に2段を積み重ねた状態で検出した。桶側はほぼ完形を保っているが、いずれも2～3枚の板を倒壊させ、1段目の桶側においては損傷する板も含まれている。また桶側の埋土中より、塼と2段の桶側には不用な桶側に組まれる板（2枚）を検出した。本来、桶側はまだ数段（2～3段）重ねられ、最上端には塼が積み回してあったと思われ、それは第4地区で検出された6段の桶側と塼を積み重ねた完形を保つ桶側井戸によって復元できる。E－8の桶側井戸は、その検出状況からして、おそらく何らかの目的で上段部の桶側が撤去された底部の残存と考えられる。

掘り方

遺構の上面検出は他の素掘りの井戸と同様に地山上面であるが、実際の井戸掘削は0.6ｍほど上面の旧耕作土からである。上面の平面形はほぼ円形を呈す。その規模に（長軸2.45×2.35



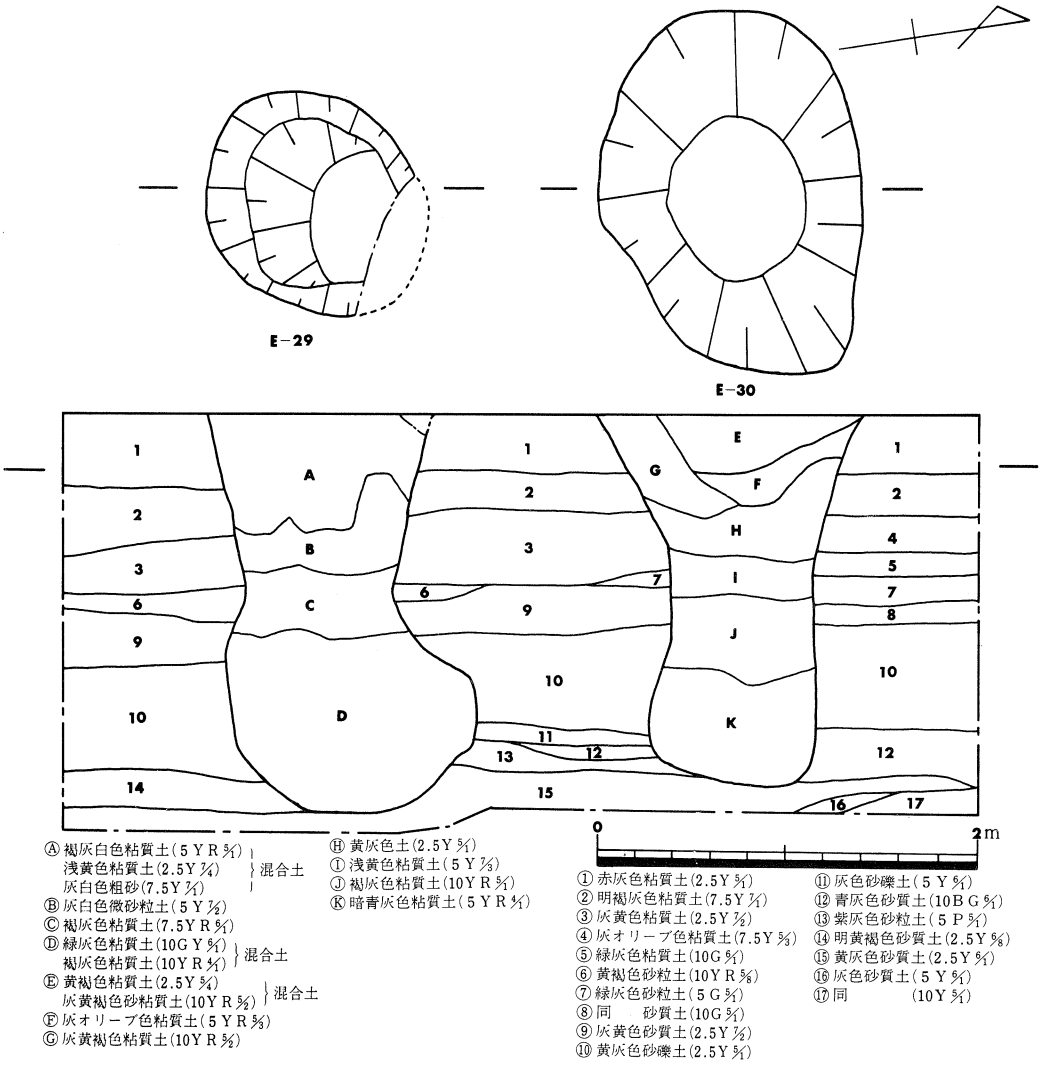
第47図　井戸―27遺構図



第48図　井戸―28遺構図

m)、深さは4.1mを計測した。−0.3〜0.4mまで内側へゆるく傾斜して段をもち、さらに−1mまでは内弯気味の急傾斜面を呈して下り、(1.6×1.35m)を測る不整な楕円形の平面形になる。以下、垂直に掘り抜かれるが、北壁面をはじめ大きくえぐられて壁面崩壊をきたす部分もみられた。この壁面崩壊は桶側を撤去した後に生じたと考えられる。桶側が埋め込まれた部分の掘り方については、調査中の湧水による砂礫層の崩壊により明確にできなかったが、−2.2m地点で、桶側と壁面の隙間に0.1〜0.3mを測り、上端近くではさらに広がることになる。

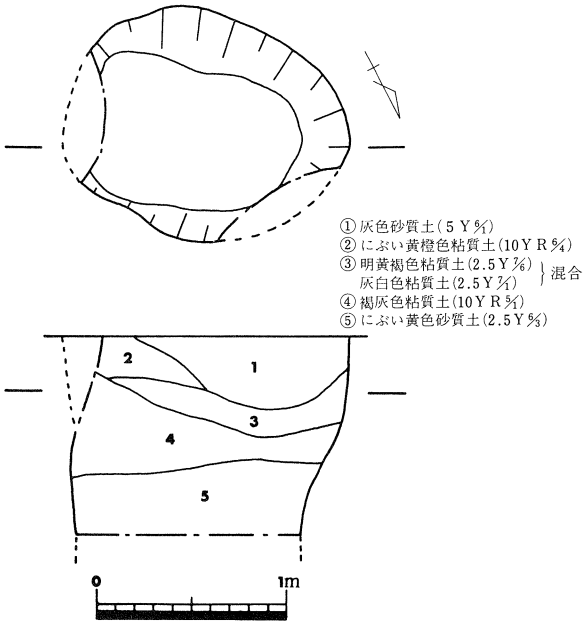
埋土は11層に分かれるが、桶側中には砂礫が大量に詰まっていた。ここで興味深いのは、上端の壁面傾斜にみられる、黄褐色・灰色粘土(3・4)による2重の張り付けである。この壁



第49図　井戸−29・30遺構図

面の傾斜は、流水の侵入によって壁面が削られてラッパ状に広がってしまった部分であり、粘土の張り付けはそれを補修したもので、他の素掘りの井戸にはみられない配慮である。

井戸の掘削は－4.1ｍの青灰色砂礫・粘質土混入層（E）まで達するが、湧水はその直上、青灰色砂礫（D）から最もよく得られた。その湧水は現在でも井戸の機能を十分果し得る。むしろその調査に困難をともなうほどに大量であった。

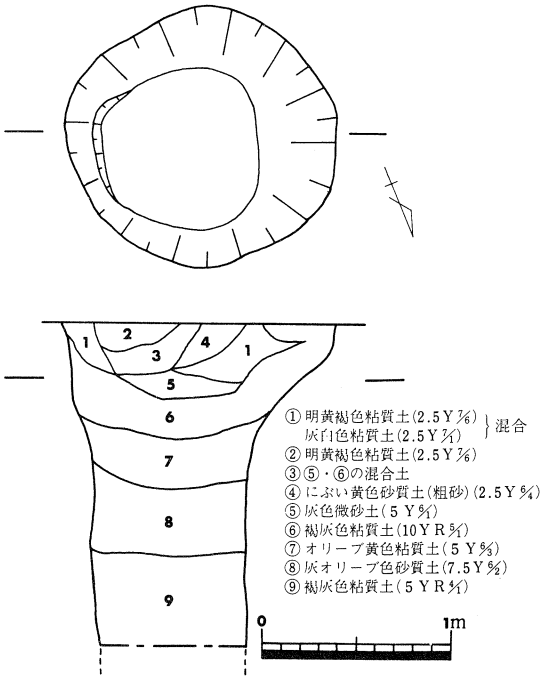


第50図　井戸―31遺構図

桶側構造

桶側は、その板の中に工具（斧と思われる）による荒々しい損傷を受けたり、土圧のために倒壊するものがあり、やや歪んだ状態で残っていた。

一段目の桶側は３枚の板を倒壊させるが、ほぼ円形を保っており、上端径1.15ｍ、下端径1.30ｍ、高さ約0.96ｍを測り、下方へハの字形に広がる。18枚の板を寄せ合わせてつくられ、板の幅は多くが下端幅を広くとるが、中には同じもの、上端幅が広い板もあり桶側の形状を整える。桶側の外側には２～３cm幅のたが（竹製）を約20cmの等間隔に４段しめ回すが、その遺存状態はあまりよくない。板の側面には少ないもので１ヶ所、多くは２～５ヶ所に、湧水を吸水するための切り込み（吸水孔）をもち、総数54ヶ所を数える。吸



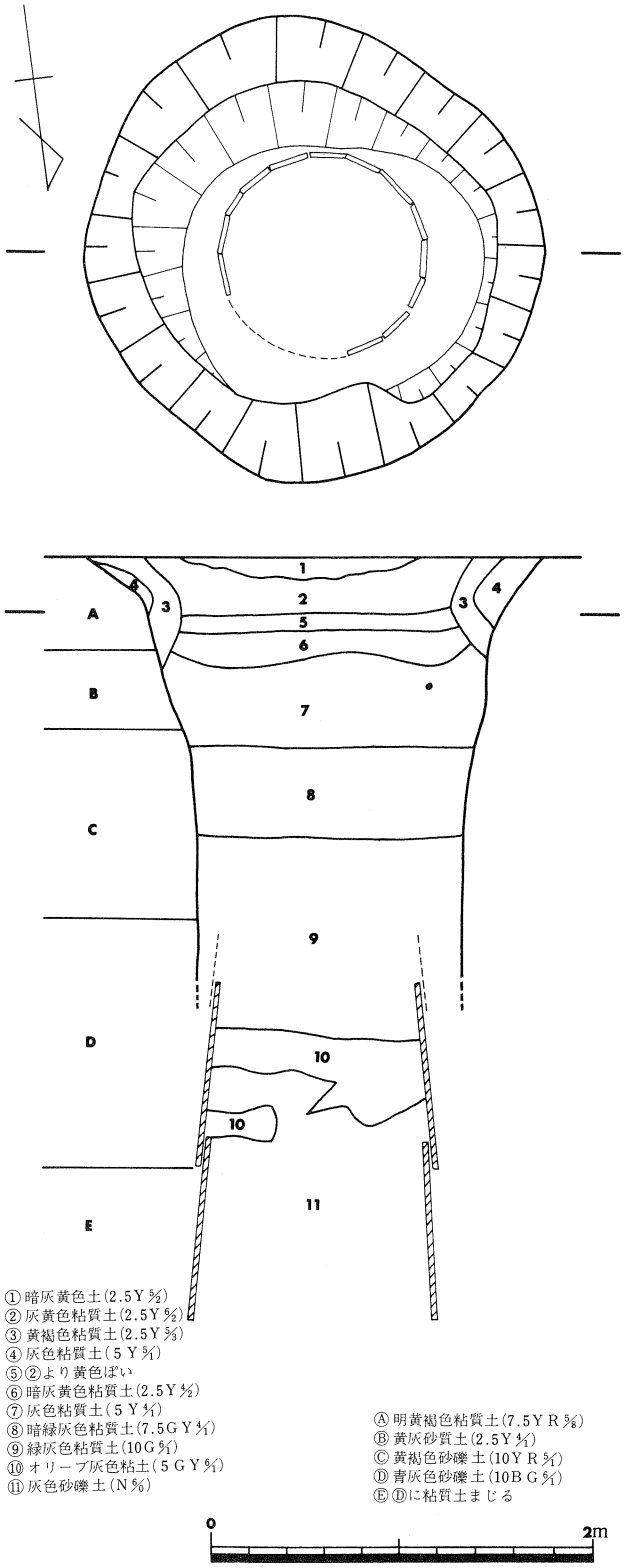
第51図　井戸―32遺構図

水孔をもたない板は18枚の内わずかに3枚である。

2段目の桶側は井底にあたるが、2枚の板を倒壊させるとともに平面形はやや楕円形に歪む。良好な遺存部分で、上端径1.14m、下端部1.25m、高さ約0.965m前後を測る。1段目と同じく下方へハの字形に広がるが、2段目の方がより垂直に近い。17枚の板が利用されており1段目より1枚少ないが、各板における幅の調整、たがのしめ回しについてはほぼ同じといえる。さらに異なるのは、吸水孔を有する板が3枚のみで総数8ヶ所にすぎない。

1段目の桶側は湧水地点にあたり、したがって湧水を積極的に井側の中へ取り入れるための吸水孔が多い。一方、2段目の桶側は井底にあたり、吸水孔が極端に少ないのは吸水のためよりも、むしろ湧水を積極的に貯水する機能を優先させたからであろう。そしてこの意識的な桶側の重ね方は、この地点における湧水位をある程度把握して後の桶側埋設を想定させる。

2段の桶側は、1段目を2段目の桶側に回る最上段のたがの直上まで12～13cmほど重ねて積んであった。さらにこの接合部の外側には、つまり1段目の桶側下端の回



第52図　桶側井戸（E－8）遺構図

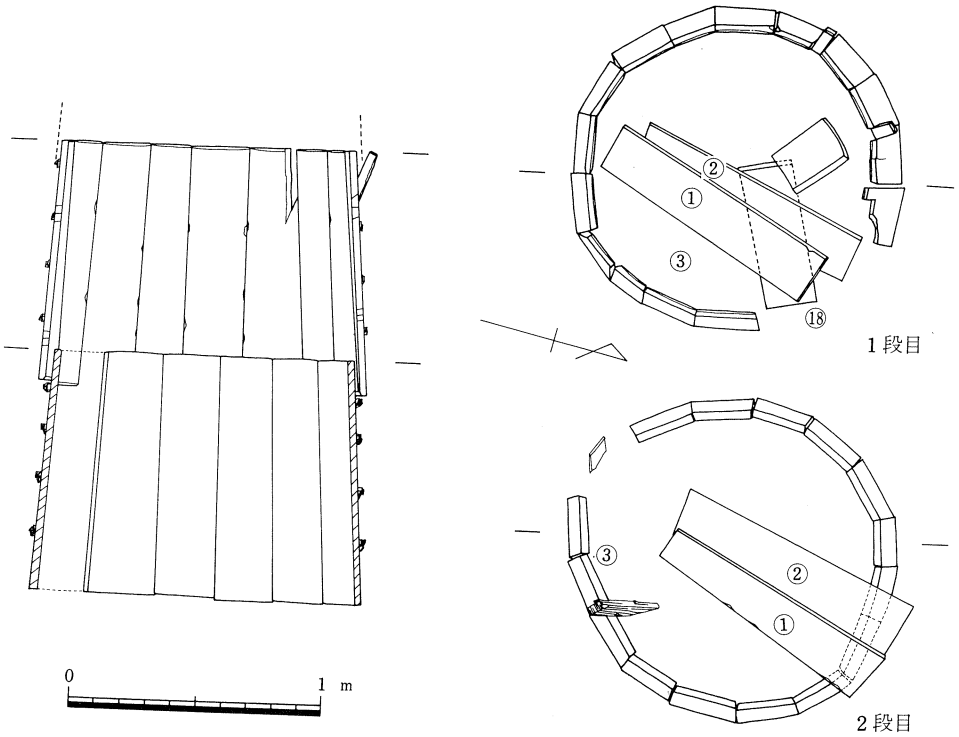
りに植物性（不明）のつるが10数本近くまきつけてあった。

桶側板の加工

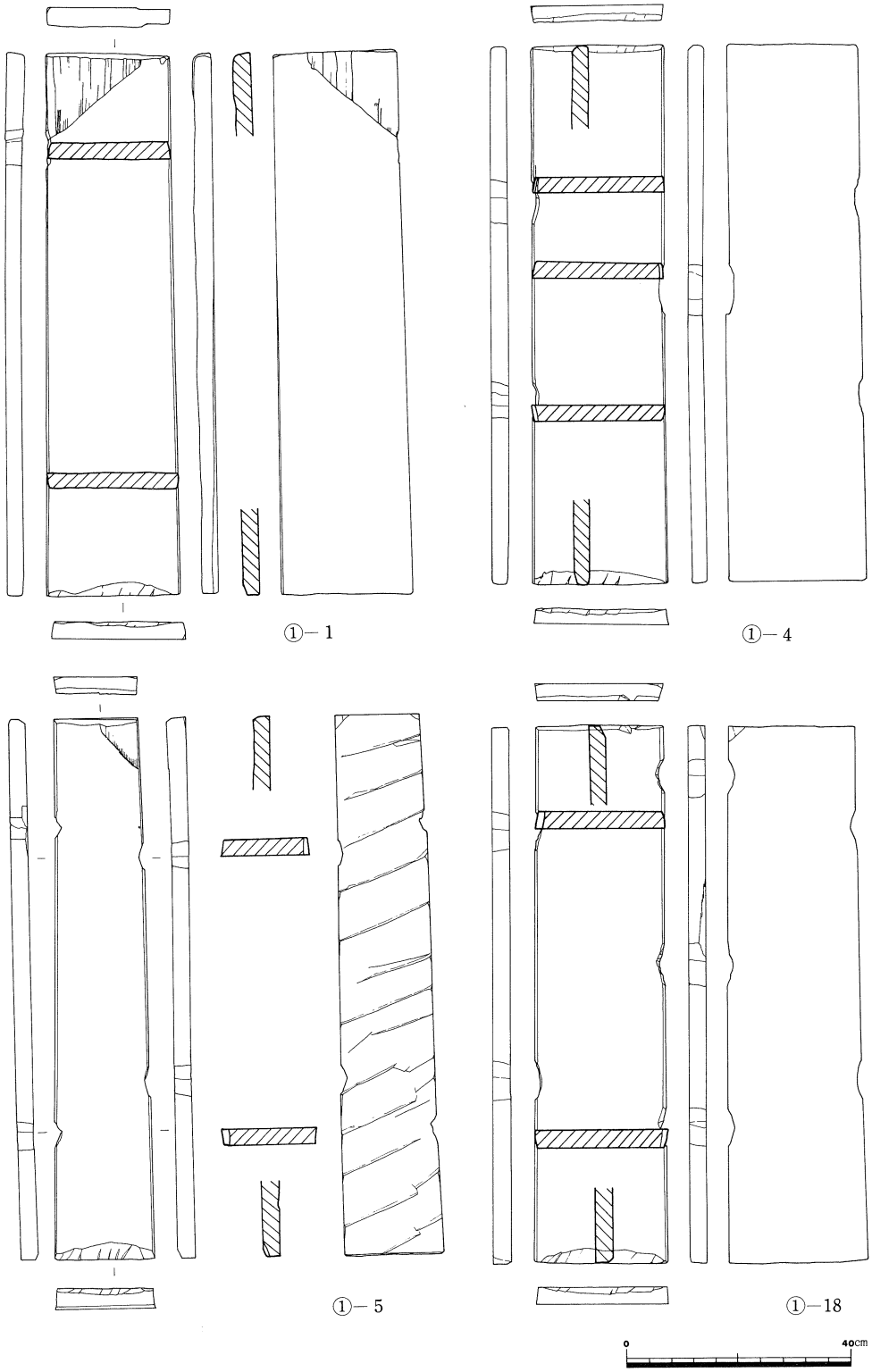
板はいずれも小幅の長方形を呈する細長いものである。材質は湿気に強く割り易いとされるスギを用いている。

長さは96.0～96.6cmの計測値にとどまり、必然的に規格化される。幅の平均値は22cm前後を測るが幅については、桶側の外側と内側において1cmほどの差があり、円形の組み合わせを容易にするために板の側面は外側へやや斜めに広がって調整される。また上端幅と下端幅においても、異なるものと一定のものがある。最も多くみられるのが、下端幅の方が上端より広いもので、その差は1～2cmにとどまる例に集中し中には5cmほどの広がりをみる板もある。一方、数は少ないが逆に上端幅の方が広く同じく1～2cmの差を有する板がある。桶側の組立てには、下端幅の広い板で基本的な概形と規模を整え、下端幅の狭いものあるいは垂直板を数枚、組み入れることによって調整していたようである。板の厚みは3cm前後を有する。

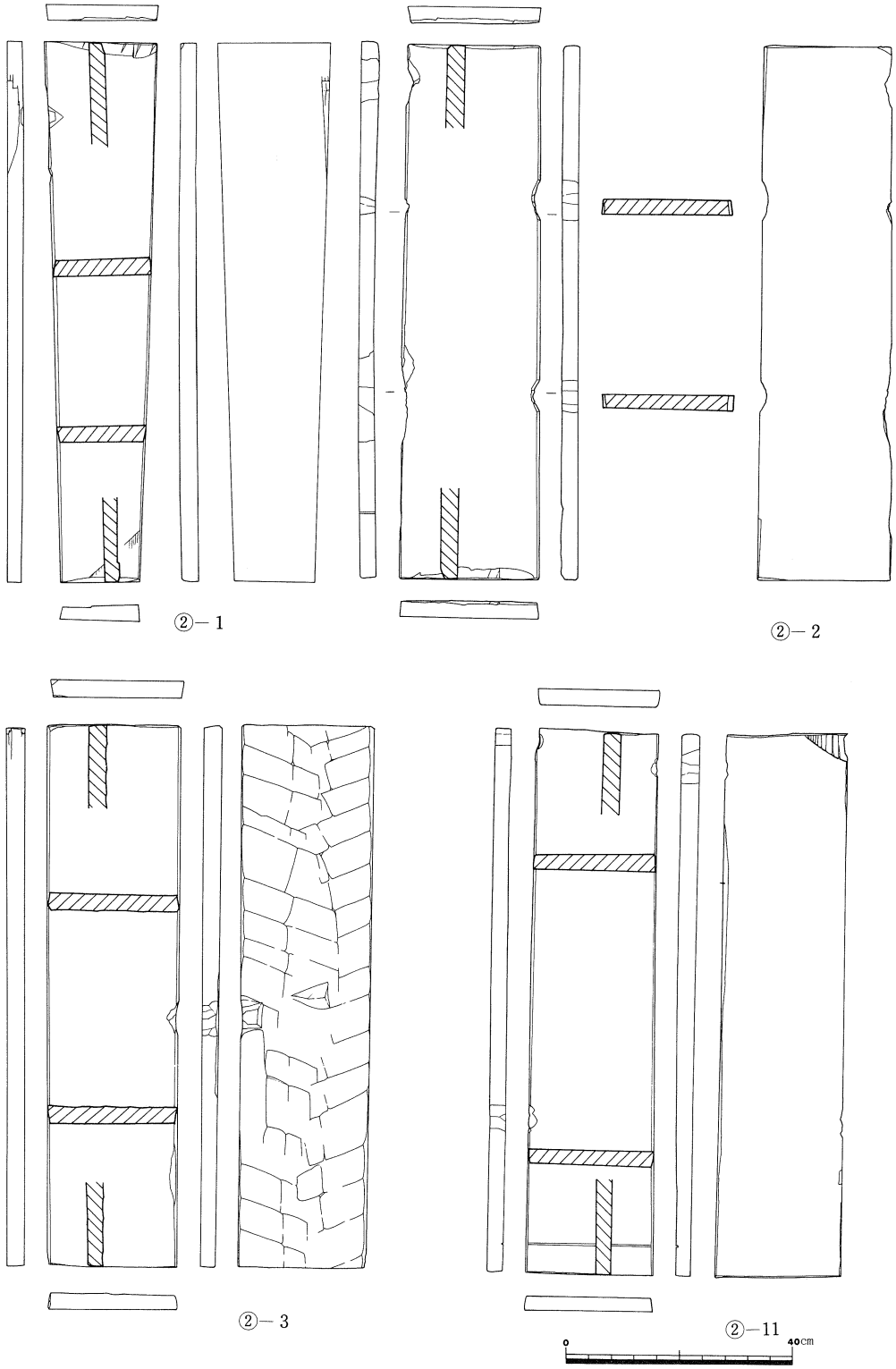
1段目の桶側において内側（面）の上・下端角は全周にわたって細長い半月形状に面取りさ



第53図　桶側実側図



第54図　桶側板実側図



第55図　桶側板実側図

れている。特に下端角の面取りは、桶側の積み重ねを容易にするものと思われるが、2段目には認められない。

板の加工は、鋸、鉋、斧（手斧）に限られる。板の裁断は例外なく「のこびき」でその痕跡をよく残しており、同一方向からののこびきが認められる。のこびきの中には、完全にのこびきによって裁断せずにその最終段階においてのこびきを省略（中止）して、以下、残りの部分については裂いて割っているものがかなりある。両側面については、のこびきの裁断の後に「鉋」によって削り整える。吸水孔は、板の側面を上・下方向から「斧」で切り込み板の接合部に三角形・半月形・台形状の隙間をつくる。その規模は、長さで5～10cm、深さで1cm前後を測る。各板によって吸水孔の数は異なるが、少ないもので1ヶ所、多いもので5ヶ所存在しており、復数に及ぶ例については左・右側面で各々対応して並列する位置に施されている場合も多い。内面の上・下端角における面取りは、鉋ないしは手斧と思われる。

加工痕の中で特に興味深いのは、外側の全面に「手斧」痕を残すものが、1段目に2枚、2段目に5枚、各々組み入れられていることである。手斧痕はのこびき痕等に比較して摩滅が著しく、明らかに桶側板の製材時に施されたものではない。手斧の刃幅に12cm（以上）を計測し、削りの長さに1.2～12.0cmを測る。手斧の方向はある程度の一定方向を保つが、製材時の裁断によって手斧痕が途中で切られているのが、端部に認められる。すなわち手斧痕の残る板については、材料の調達の際にすでに手斧で製材された原材、いわば廃材利用といえる。

瓦積み

E－8の埋土層、緑灰色粘質土（10G 6/1）から3片と最下段上面に大から2段目の抜かれた桶側井戸と共伴した完形品の3個体のみである。それらは、すべて桶側の最上段部に段積みしていたものが廃絶時に落ち込んだものである。

出土した瓦は技法からみて、2種類に分別される。その1つは、厚さ1.8～2.0cmを計りナデ上げを行ったものだが規模は不明なものと他方は、長さ27.5×幅22.5×厚み3cmのがっしりした造りで表裏面はナデ仕上げ端面はヘラ削りを施す。2者ともに1枚作り、反りは少くない。胎土―礫を含むが良好。焼成―優良で光沢あり、色調はほぼ青灰色（10BG 6/1）を呈する。最後に、この井戸は、4段の桶側と、3段の瓦積されて、水のくみ上げを行っていたのであろう。

付属施設

井戸の上端において付属施設の痕跡をとどめるものはない。しかしこれらの井戸の上面が後世の耕作土中に埋没していることを考えれば、この井戸が放棄された時点で、井桁・つるべに関する施設が除去された可能性はある。少なくとも井側に桶側を重ねて、ある程度の長期間に

亘って使用されていたと思われる井戸に付属施設があってもおかしくないし、前述した粘土の張り付けはその一端を示す。特に2段目の桶側の外側に位置する所で伴出した、長方形の木製品（長さ27cm、幅8.5cm、厚み1.2cm）は一端を内弯する円弧状にカットされており、付属施設等の遺物である可能性を残すことを付記しておく。

3．遺　　物

石製品

剝　片（1）　C－Ⅱ－9

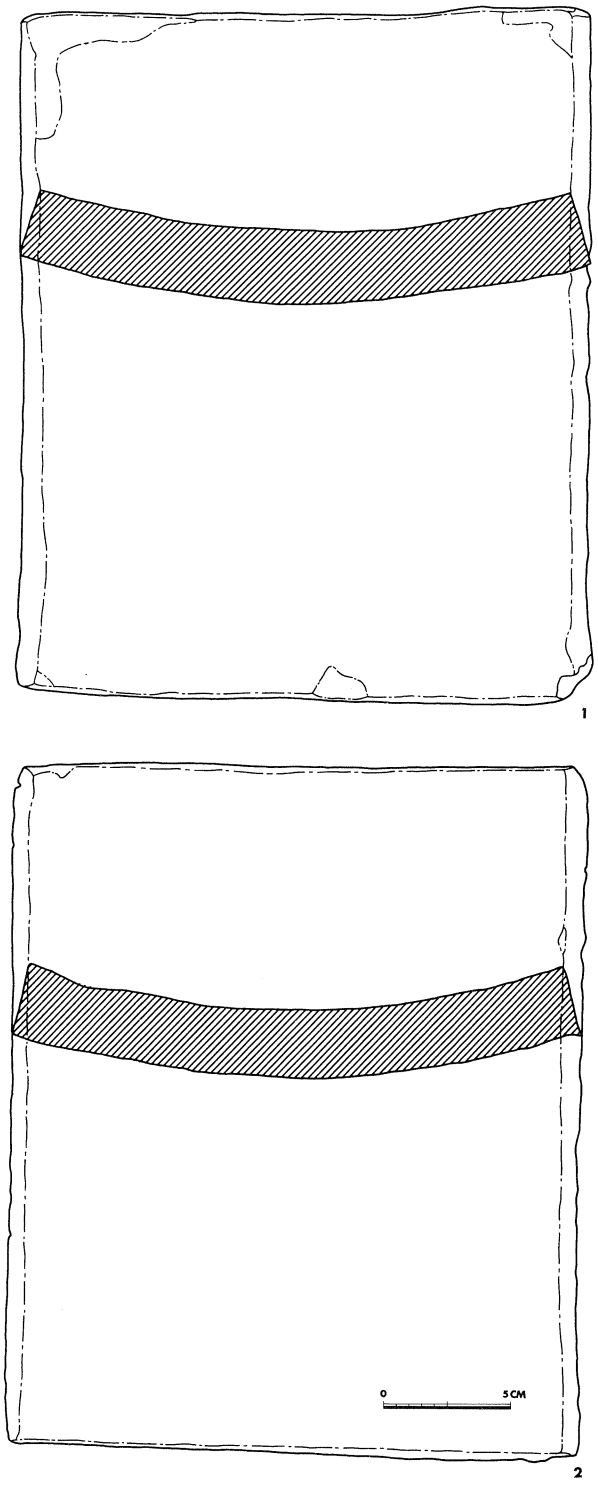
同方向の大剝離面に占有された剝片で、背面には自然を残す。うすくなった側辺部には二次的な細かい剝離痕を数ヶ所認めることができる。刃器として可能性は大いにあるが、その使用痕は極めて消極的である。

3.95×1.75×1.08cm　5.80g

不定形刃器（2）

C－Ⅱ－82

本来的にうすく剝き取られた横長剝片の両側辺部を裁断した後の残存した末端部分を刃縁として有効に利用している。A面にはポジティブな、



第56図　井戸－8出土遺物

B面にはネガティブな剥離面を打撮、裂痕とともに素材の剥離面の特性を残している。

剥離調整はA面の末端部分に限られ、細かなフリー・フレイキングがみられる。B面には全く加工の手を入れず、刃部はA面に稜をもつ片刃である。　4.92×3.65×0.70cm　7.60g

不定形刃器　(3)　C－Ⅱ－71

石匙の残存を思わせる優秀な刃器であるがB面からの加撃によって破損している。素材剥片の中央近くにまで入り込むフリー・フレイキングによってうすくした後、側辺を細かな剥離調整により外形、刃部を整えている。刃辺の剥離調整は厚みのあるA面側にのみ極めてていねいにほどこし、稜を有した外弯する片刃を呈する。　5.20×4.50×0.61cm　12.30g

叩石　(4)　D－Ⅱ－23

指先に納まる程度の小さな自然礫をそのまま石材とする。石材のややうすくなる一側辺を積極的に使用しており、自然面がその部分のみ剥離していて、さらに縁がつぶれている。また稜にも細かな打痕や表面においては擦痕を残すのが観察出来る。　4.65×3.80×2.10cm　50.90g

剥片　(5)　D－Ⅱ－41

やや自然面を残存させた石核より、剥ぎ取られた不良な横長剥片・A面には石核の時点における剥離調整痕として大きく3回の剥離面を残している。剥片はB面の右上からの打撃によって得られたもので打撮、裂痕が明確にみられる。　5.40×3.65×1.20cm　31.05g

剥片石器　(6)　D－Ⅱ－20

あらかじめ調整された石核から剥ぎ取られた縦長剥片を素材とする。やや分厚い剥片の周辺を細かなあらい剥離調整によってある程度うすく整えている。しかし、刃器としての使用には困難であり、側辺に一様なつぶれが残っていることより、小叩き用の敲打器とみれる。

5.90×4.25×1.20cm　50.80g

石鏃　(7)　C－Ⅱ－71

凹基式、身部の側辺にわずかに内弯し基部の抉りもさほど深いものではない。B面の右側辺部にステップ・フレイキングを残す以外は、全て中央部にとどくフリー・フレイキングによって調整されている。A面の右側辺には他のどの部分よりも明らかに新しい細かな剥離痕が並んでおり、二次加工を思わせる。先端はわずかではあるが欠損しており、鋭さに欠ける。

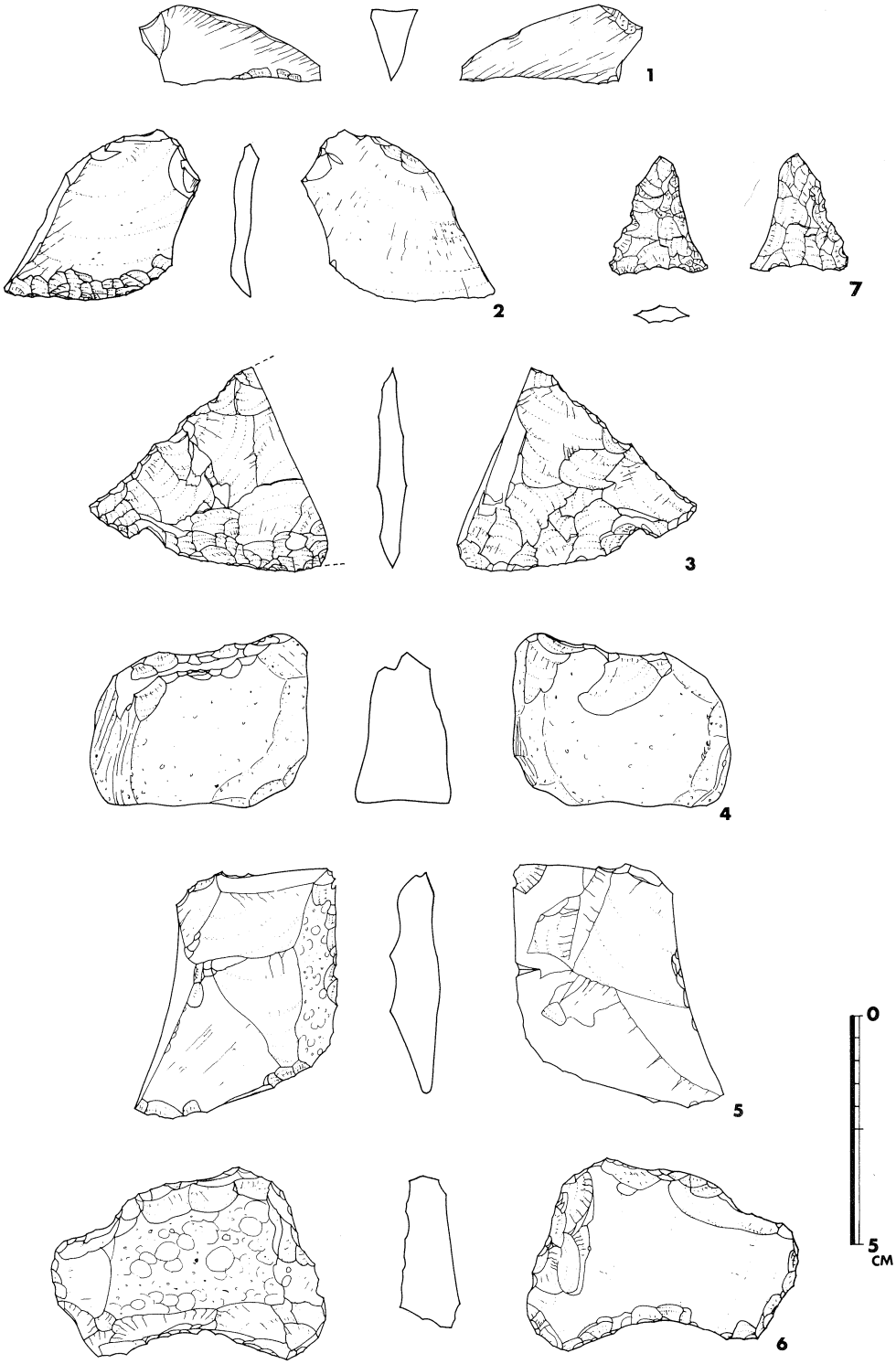
2.60×2.15×0.33cm　1.55g

（1～7）の石材は、すべてサヌカイト製である。

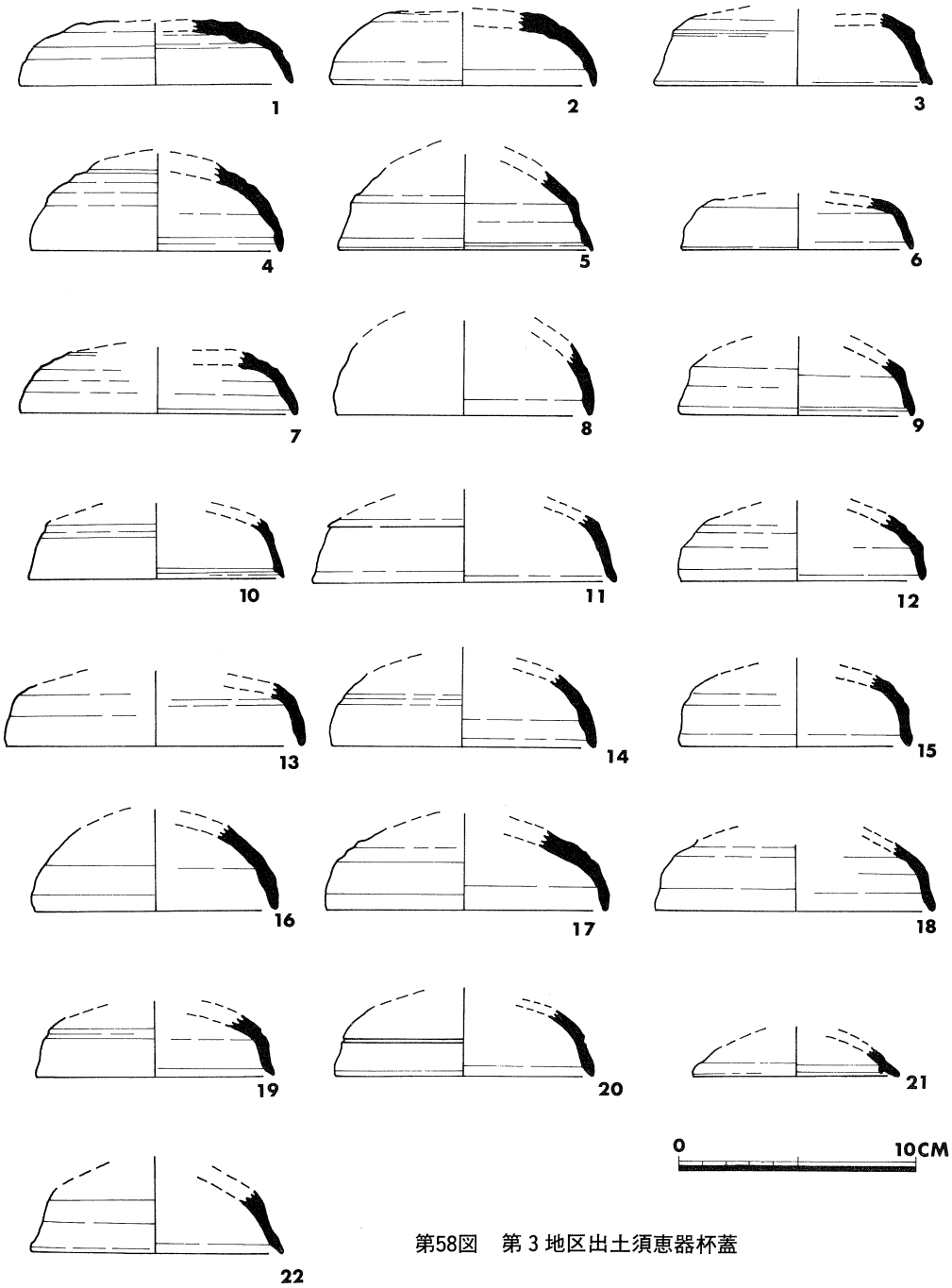
須恵器

杯　蓋

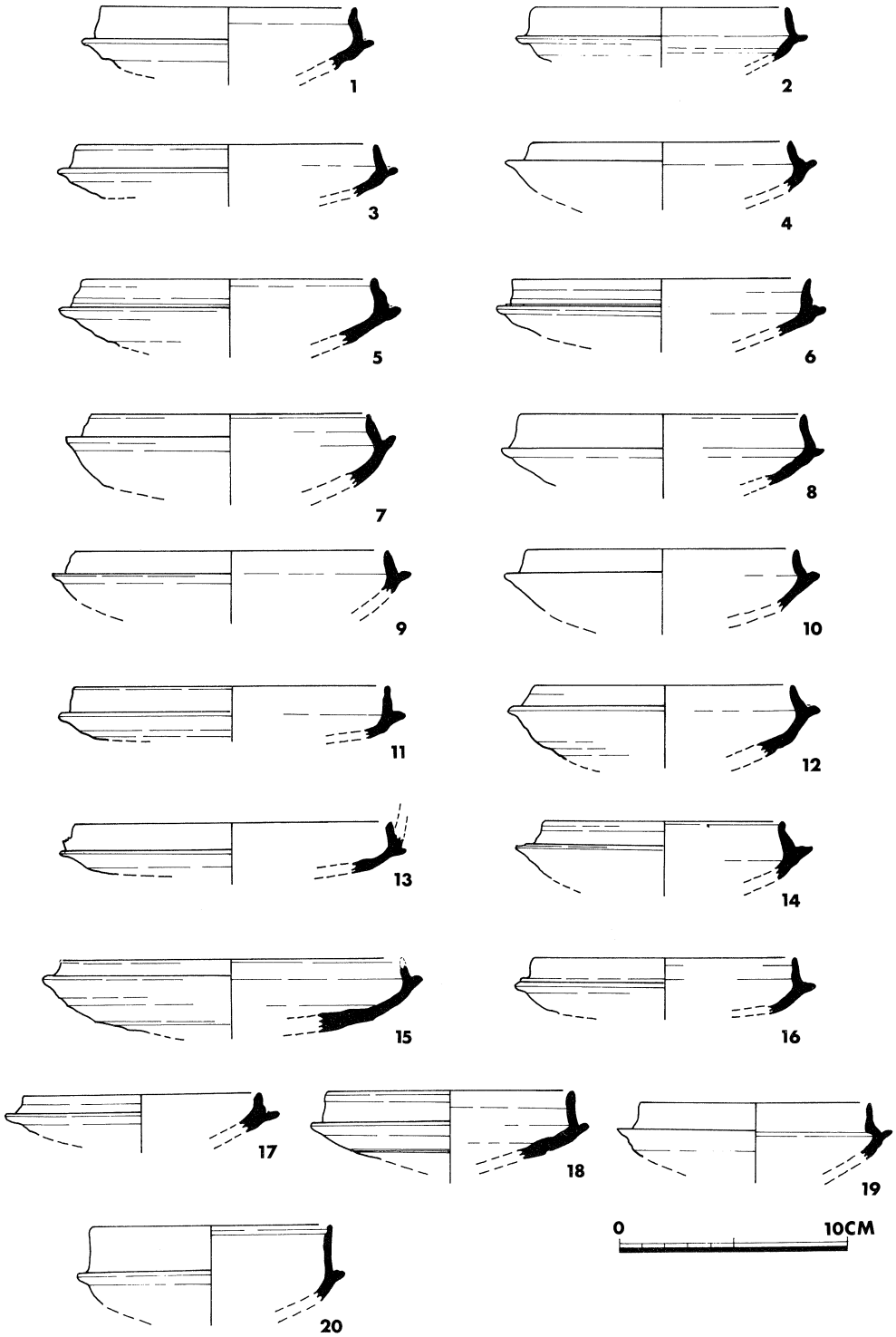
全体的なプロポーションは、時期・形式によってその特徴を持ちそなえている。天井部が平滑



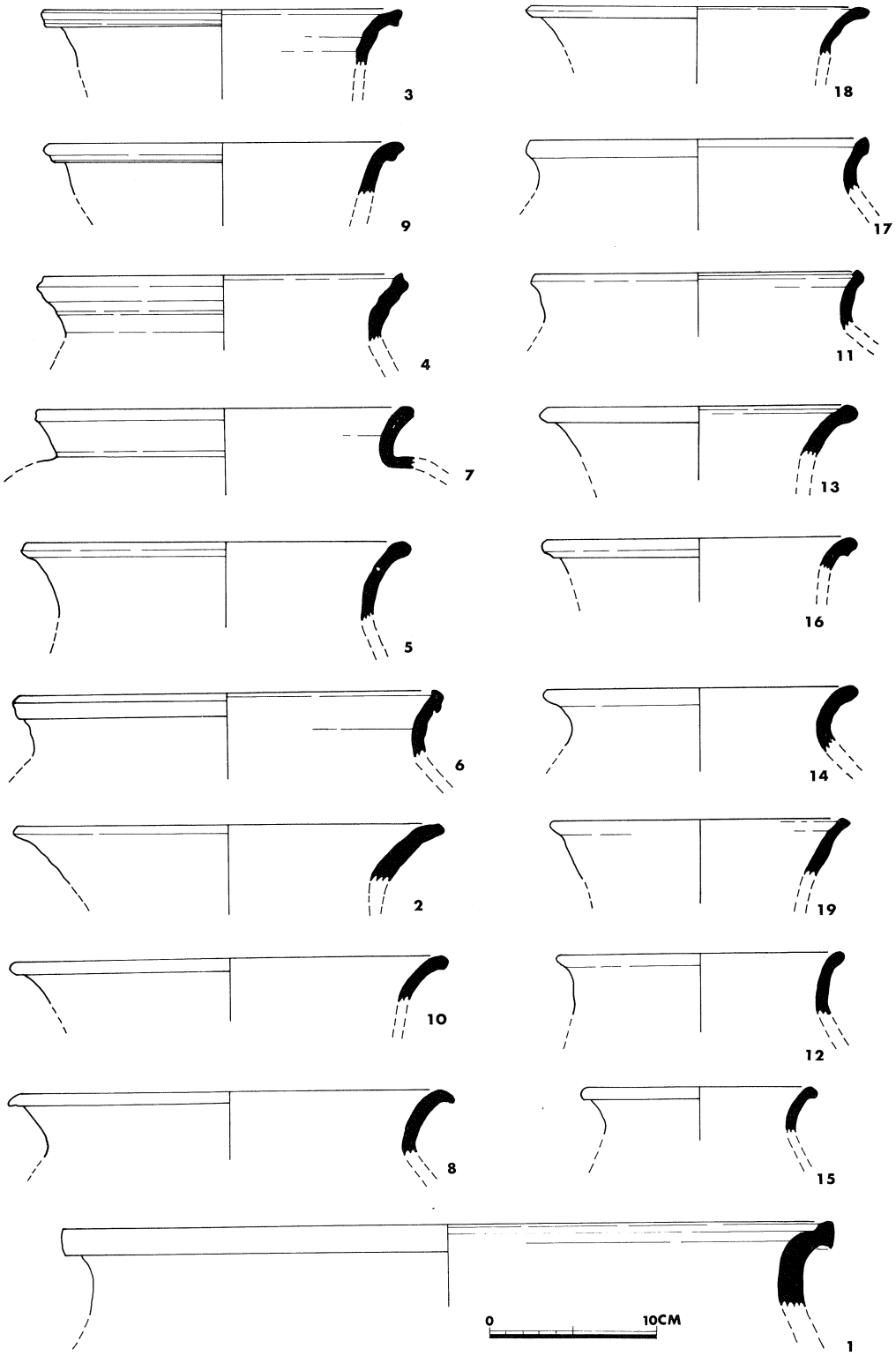
第57図　第３地区出土石製品



第58図　第３地区出土須恵器杯蓋



第59図　第３地区出土須恵器杯身



第60図　第３地区出土須恵器甕・壺

な(1・2・3・6・7)は、器高も従って低い。天井部が尖出ぎみに高くなっていると思われる（4・5・8・16・22）は、口縁部に向って全体的に丸味を有する。(21) は、明白に他の土器に後出するもので天井部中央に宝珠ツマミを図化し得るものである。口縁部は、外側に大きくふんばっている（5・22）もの、内弯ぎみに調整した（4・7・8・14・16・17）もの、しっかりした裾部はその他の大半を占める。細部についてみると口縁端部は、丸く押えたもの（4・8・16・17)、さらに外に引っぱり出したもの（5・11・18・19・22）が見られる。明確に稜を認められる（3・19・20）以外は、その退化が顕著である。(3・5・9・10・11）には、端部内面に段をもちそれらの多くは、稜の感じを継承していると考えられる。(21) には、口縁端部より短かいかえりを有する。

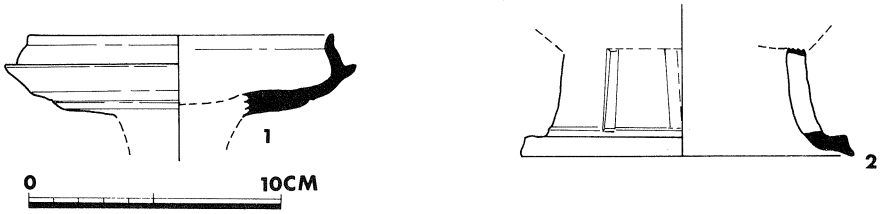
全体的に残存している土器が少くないので不明な点が多い。回転ナデを基調としているものの（4・12）などには粘土紐痕を残している。

胎土は、大量生産期の導入がすでに確認される土器群で長石・石英の礫（2～3mm）を含有しているが比較的良好である。焼成も堅緻のものが少くないが不良はない。色調としては、灰白色、暗青灰色、青灰色が主として上げられ、断面も暗紫灰色、にぶい赤褐色と化しているもの。図化した杯蓋の全ては、杯身とセット焼成されたらしくその外面には少なからずの自然釉を被る。

杯身

底部の特色を見ると尖がっていると復元できる（1・6・17・18・19）ものと丸く深いもの(19・20)以外は、普遍的な深さを成す。口径について区分すると直径10cm強の（17・18・19・20）と12cm前後と14cm以上の（9・11・13・15）と3種となる。口縁部・口縁端部を含めて立ち上がりについて詳細に目を向けると一瞥して他と異質さを思わせる（20）以外は、概して内傾し短い。(20) は、2cm程度の立ち上がり長い。その他の土器の立ち上がりは、単に直線的な内傾を示すもの（3・2・9）と内傾するものの外にふくらませた後に端部を直立させるために上に引っぱり出すもの（1・4・5・14・17・19）と内側にそり返った（8・10・12・18）土器が知られる。次に受部は、薄手と分厚いものの2種類で取り付け方法が上向き（4・5・7・18・19）と水平な（1・2・3・8・9・11・16）が作り出される。体部については、欠損が著しいので明白な事はさけたいが丸味に仕上げた（7・12・20）以外は、浅く、するどく底部に移行する。口縁部内面の段を有するのは、(20) だけである。立ち上がり、受部の細部にわたる変化は、窯別か工人差に起因していよう。

残存している限りでは、回転ナデ仕上が基本で、(15・20) では一部分に回転ヘラ削りがみられた。胎土―普通の場合、2mm程度の礫を含むが4.5mmの礫さえも含む場合がある。色調は、灰白色、青灰色が圧倒的に多い。焼成としては、ほとんどが良好品。内外の色調・自然釉、受

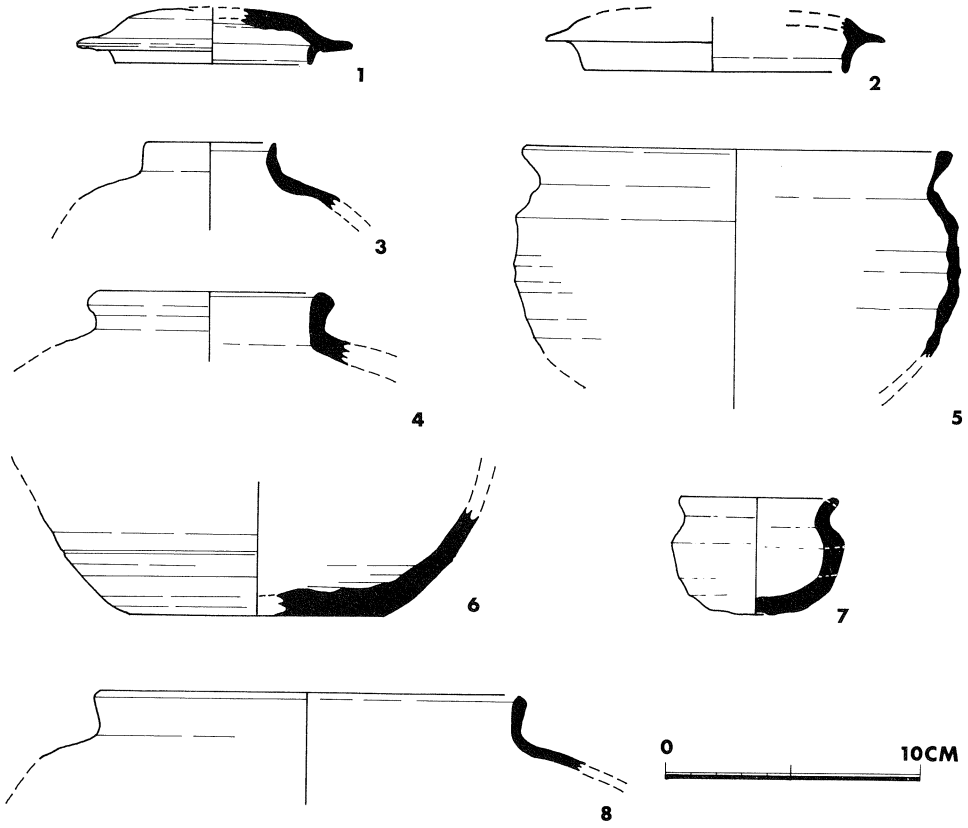


第61図　第３地区出土須恵器高杯

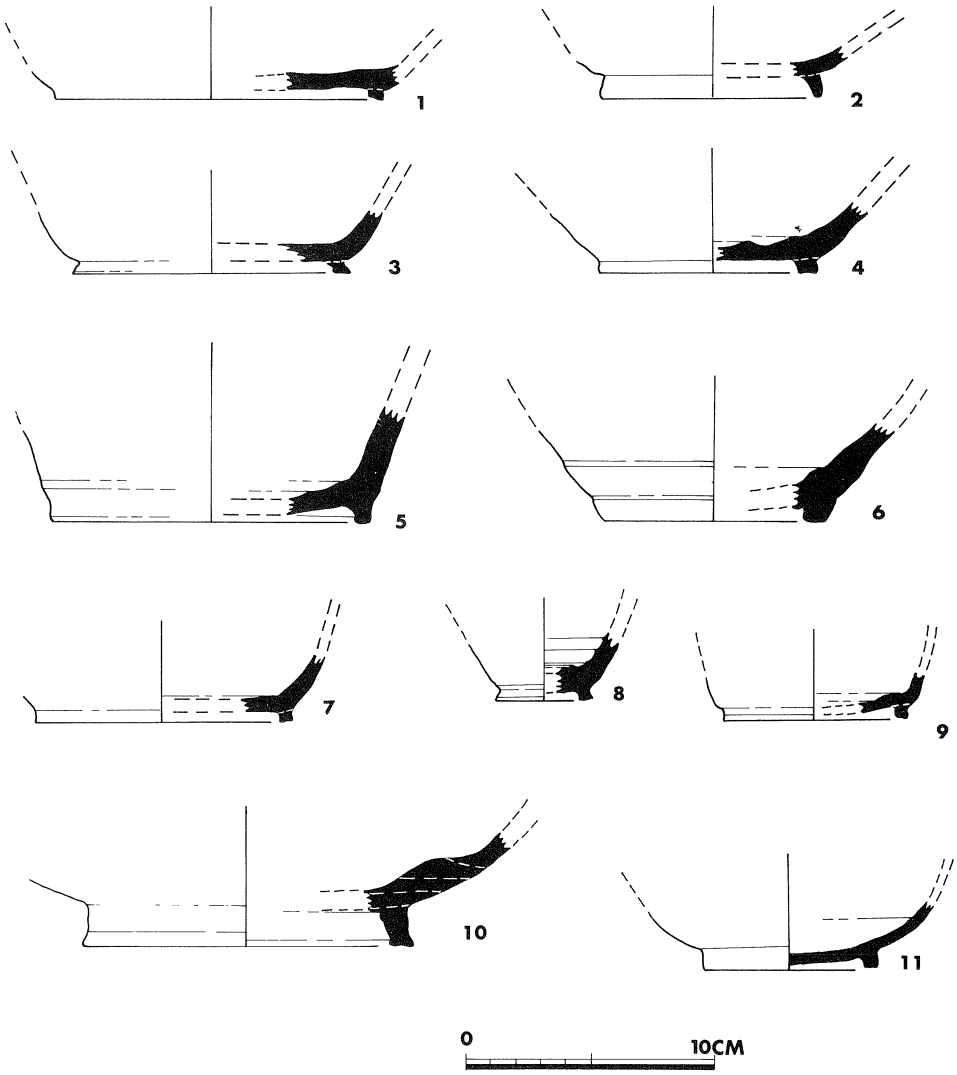
部の変色、受部の蓋部が熔着している点を考えるとセット焼成が大半であろう。

甕・壺

口縁部より下半部まで保存された土器が見い出せなかったので全体の様相は把握出来ないが



第62図　第３地区出土須恵器壺



第63図　第３地区出土須恵器

以下、口縁部の特徴だけで区別してみた。

直立ぎみな（13・22）以外は、大きく外弯している。外弯した口縁部を観察すると「く」字形に押えて凹線すら走るもの（３・10)、丸く押えただけで仕上げている（２・５・12・14・15・16・20)、(13）のように端部を内側にまき込んだもの、(22)といった直線的な仕上げ、(８・17)のごとくは、端部をさらに下方向に下げているもの、上下に押えた（１・６）と多種類にわたっている。その中でも、(１・６）は他の土器群よりも先行しよう。

技法としては、回転ナデ以外の調整はない。胎土は、最大5㎜の礫を含む土器も見られるが大半は1～2㎜のとどまっており密である。(8・10・12・19) には、自然釉を被る。

高杯

杯部のみの残存する(1)は、口径(推)11.9cm、残存高3.15cmである。立ち上がりは、内傾し端部付近で直立する。受部は、やや上向きにのび端部をまるくする。底部外面は、回転ヘラ削り調整、その他は回転ナデ仕上げ。胎土―やや密、0.5～3.5㎜の粗砂、礫を含む。焼成―良好、外面―灰色　N6/　ロクロ回転　時計方向　C―Ⅰ―99出土

(2)は、5世紀代にさかのぼり得る高杯・脚部だけで底部径13.0cm、残存高4.2cmを計測する。脚部は短かく、裾部で大きく広く。透しは、高さ3.15cm、幅3.00cmの三方に開孔されている。丁寧な回転ナデ仕上げで胎土は、2㎜程度の礫を含む。焼成―堅徴、色調―内面、青灰色(N3/)、外面・暗灰色 (N3/)、断面・暗赤灰色 (5R4/1)、ロクロ回転方向は逆時計である。C―Ⅰ―99出土。

壺

長頸壺・蓋と思われる(1・2)は共に扁平な天井部から水平ぎみの口縁部にとりつく。かえりは(1)の方がより内側で短かい。直口壺・口縁だけで全体は不明であるが (4・8) は、丸く(3)は、尖って上方に引っぱったままの調整。(3・8) は、共に器壁は薄い。

広口壺の(5)は、外上方に伸ばした口縁部を端部で押え体部の内外での粘土紐痕が目立って多い。器高4.7cmの小型広口壺も前者に類似するが口縁部が外反する点が相異する。底部にヘラ記号「X」を残存している。(3)以外の壺は、大半、時計方向のロクロ回転を示す。

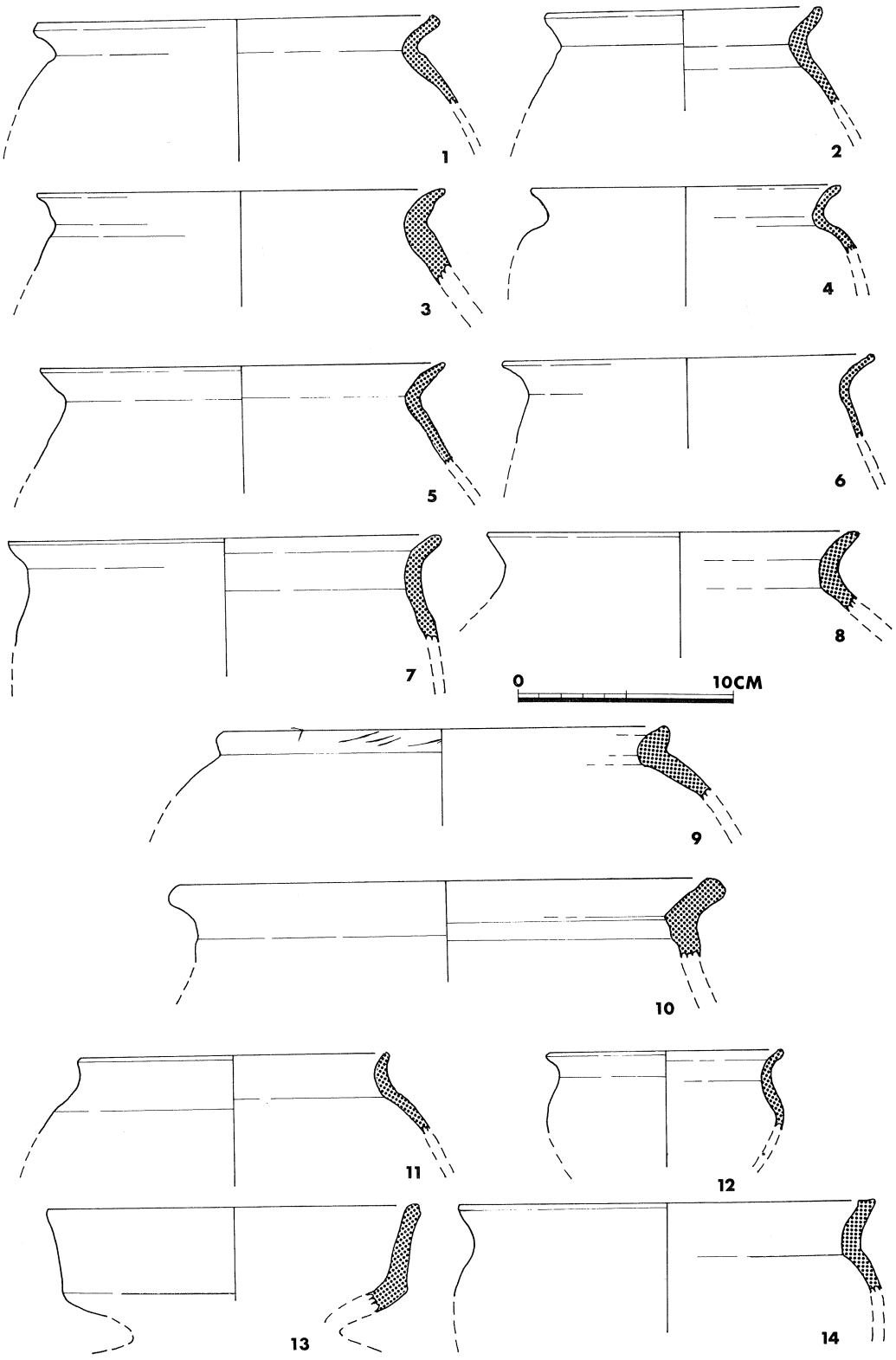
その他須恵器

高台付杯身の内、(1)は垂直に、(2)は「ハ」字形に広げた高台で共に直線的な成形に対し、(2)は曲線的な高台である。3個体共に十分な回転ナデ仕上げがみられて粘土痕を残さない。高台付壺は、その高台の付け方によって2種類に区別される。1つは、垂直ぎみで (5・6・7)、他方は外に広げたもの (4・10) であり、取り付け位置も後者の方が前者よりも内側に認められる。

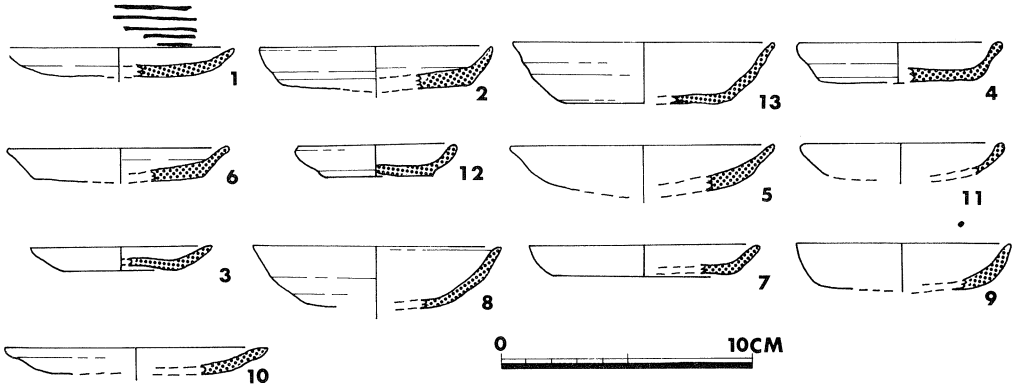
水瓶の (8・9) は、両方とも垂下の高台であるが体部への広がりは(8)の方が著しい。(8)の内面には、強いヨコナデ痕が知られる。

ヘラ記号の線刻

確認した杯身・蓋にみられたヘラ記号は、「Ⅰ」が10個体、「X」が1個体と破片ではあるが総出土須恵器の約1～2%にすぎないし、確実な器種、時期は把握出来ない。



第64図　第３地区出土土師器壺・甕

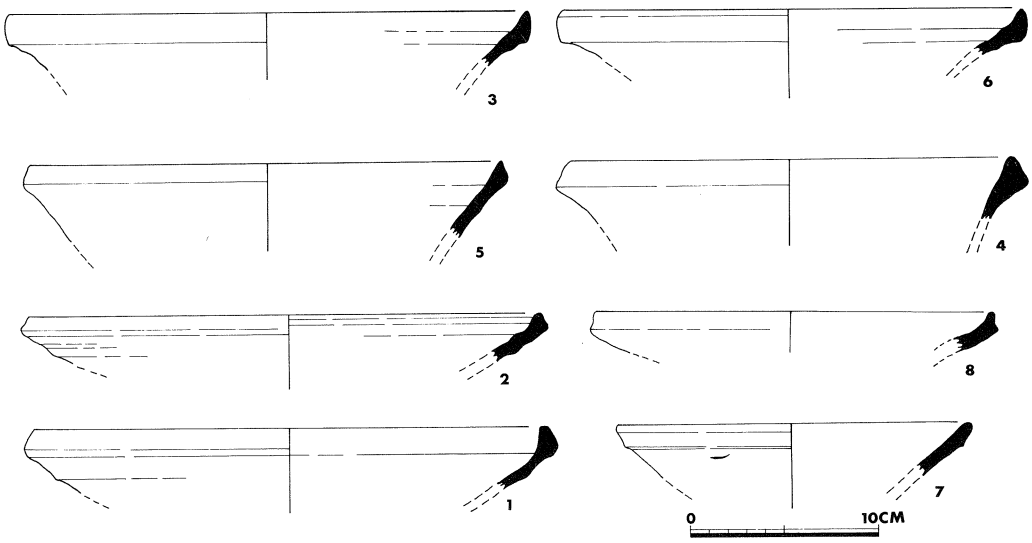


第65図　第３地区土師質皿

土師器　壺・甕

図化した総ては、破片化とローリングが顕著で全体をはかりしれないが口縁部は概ね外反している。(１・６）は、口縁端部を内側に丸く押え、他は、外上方に引っ張り出している。(１・４・６）の器壁に比して（３・８）は分厚い。(4)以外の壺は、胴下半部に最大径をもつ。

（９～14)は、中世以降に属する土器群でその意味では土師質とすべきであろうが一応、焼成



第66図　第３地区出土須恵質摺鉢・片口鉢

状態から一括して土師器とした。(9・10) は、いわゆる、湊焼・甕と呼ばれる器種で外面に平行タタキ目、内面にはハケ目を基本として仕上げる土器で2個体にもその特長を示す。

⑿は、最大幅を胴中央部にもち口縁端部は丸味を有する。⒁は、口縁端部を直線的に施し内面頸部に稜を成す。

土師質・皿

器形から大型品の (5・8・13) とその他の小型品に大別される。もちろん、時期差による形態差も考えられるが図化したものを区別すると次のようになる。屈曲する⒀と外弯する(8)になる大型品・小型品は、口縁部のタイプから (1・5・9・10・11) ような外弯型、内弯型の (4・6)、屈曲させた⑿や「ヘソ皿」と呼ばれるタイプと多種多様である。これらの全ては、ヨコナデとナデさらには、指圧整形と一次調整にとどまる土器が少くなくない。又、(1)の見込み部分には、暗文らしき手法が観察される。

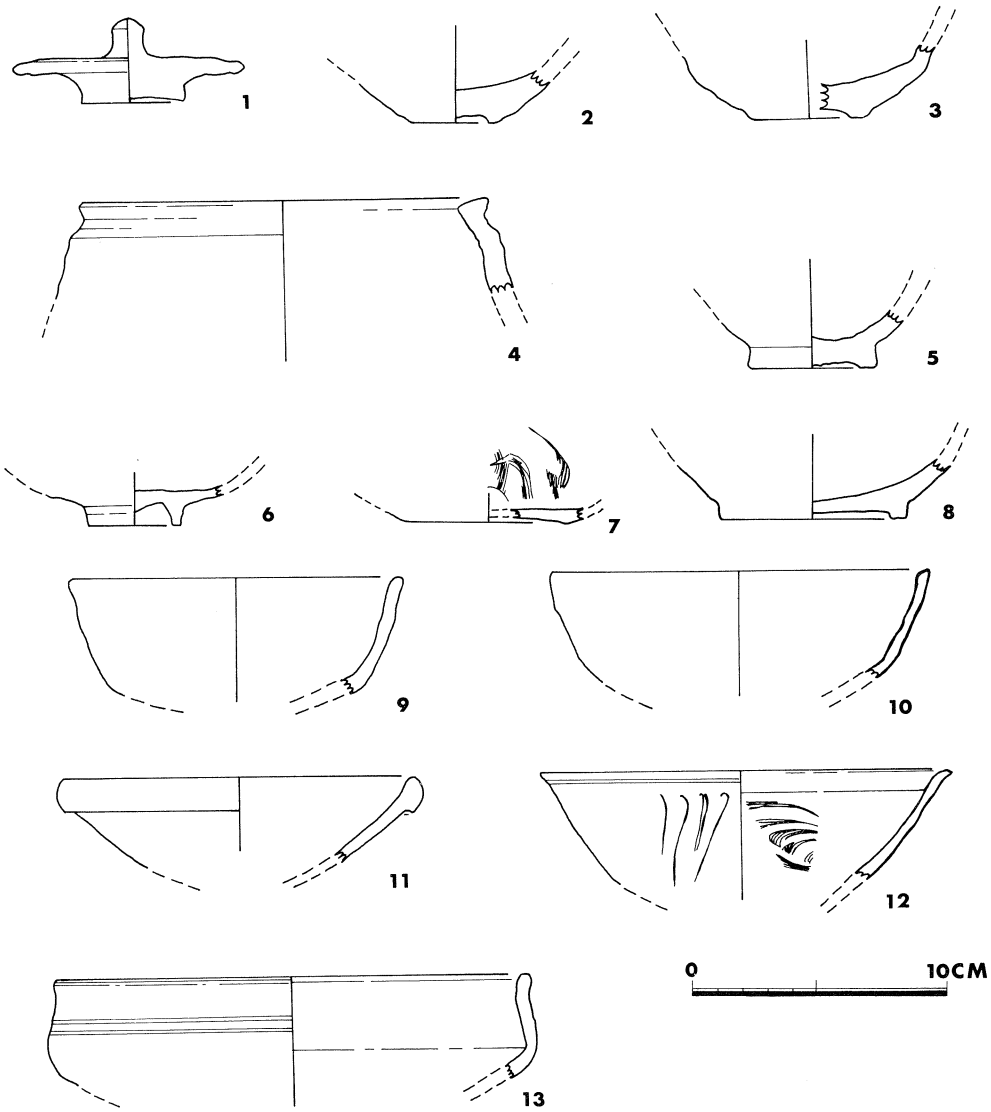
須恵質・摺鉢・片口鉢

実測図として作製した8個体は、破片化しており摺鉢か片口鉢かは不明である。口径から23cm以上の大型品とすべき土器と(7)のような小型品に類別されよう。さらに、口縁端部の断面成形から判断して大きく三つに別かれる。端部を丸くし最後に上方向に引き上げた土器 (1・3・6)、「く」字形の直線にしたもの (2・4・5・8) と外上向に引き出し丸く押え、段を成すもの(7)である。全体的に粘土紐痕が目立ち、(2・3・5・6) は、そうである。そして、全ての口縁部より2～3cmまで帯状の黒色に変色した重ね焼きが特色的に知られた。これらの土器群は、形態、テクニックからして兵庫県・神出窯跡の生産品である。

陶磁器

輸入陶磁器の特長的な土器についてのみ観察してみる。⑾は、玉縁の巨大化と同時に器肉も分厚さを増している無文の土器。玉縁中央には、沈線らしき手法と外面施釉は全体の半分にとめている白磁である。(8)の白磁は、高台も極端に低く見込に段はない。薄手作りで水平に出した口縁端に特長を有する⑿の白磁、椀は、内面に櫛を用いて花文を、外面に退化した蓮草文を文様としている。(8・11) は、⑿に多少先行するが時期差にとどまろう。

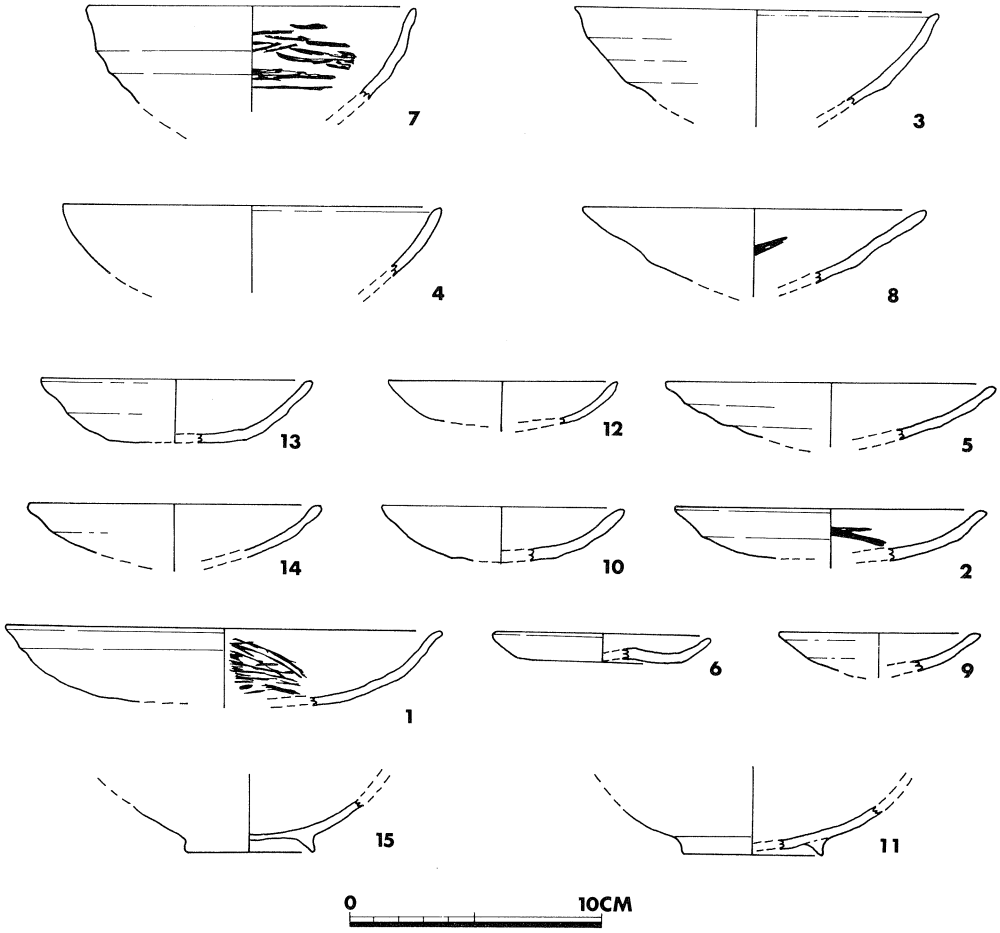
龍泉窯系青磁の皿(7)は、底部は凹レンズ状を呈し体部中位から屈曲タイプであり見込みに櫛目を描かれている。外面底部には当初から施釉をもたない。オリーブ灰色の発色をもつ⑽の青磁・椀は、丸味をもたせて外弯させている。外面口縁部付近に、ヘラ状施具によると考えられる雷文状の文様が不鮮明ながら確認される。尚、粉青が顕著である。⒀は、白磁で体部で屈曲した後、口縁は内弯し、界に2条の凹線をめぐらす香炉である。



第67図　第３地区出土陶磁器

瓦　器

（6・9・10・12・13・14）の小皿は、３つにその形態から大別出来る。ヘソ皿型の底(6)、扁平な底部から外上方に伸びる(13)、丸味をもちあわせた（9・10・12・14）でいずれも口縁端部は丸い。(14)を除外すれば、口径(復元)10cm未満に対して（1・2）といった大皿がひき立つ。



第68図　第３地区出土瓦器

小皿の比率大に類似した形態を示し内面体部下半には、荒い暗文を施す。椀の内（３・４）は、ほとんど暗文がなく外面も指圧痕がはげしく（11・15）といった三角高台に貼りついていく。(7)は、前者の椀よりも外弯が深く暗文も比較的多い。(8)は、底部から外上方向に直線的に口縁部を広く土器で(5)はさらに退化型式となる。

蛸壺・土錘

古墳時代後期の特長をそなえた土師質の蛸壺(1)は、口径3.65cm、器7.35cmを計測する。口縁部からほとんど変化のないままに尖出した底部となる。口縁近くに、径1.0位の開孔がある。

内・外面ともに指圧調整の後にナデで仕上げて0.5～2.5mmの粗砂・礫を含む。焼成―良好、色調―黄橙色（7.5ＹＲ7/8）　Ｄ―Ⅱ―53出土

最大幅を胴部に有する土錘(2)は、両端でせばまっており端部では開孔径と同数値であろう。この土師質の土錘は、焼成において堅緻でにぶい黄橙色（10ＹＲ7/3）に発色している。開孔径は3.5mmを計測する。胎土―密、焼成―良好　Ｄ―Ⅱ―52出土

長さ5.2cm、最大幅2.0cm、開孔径1.0cmを測る土錘(3)は、管玉状の形態を示す。胎土―密、焼成―良好、色調―橙色　7.5ＹＲ7/6　Ｄ―Ⅱ―54出土

２個体の土錘は、層位・形態から判断して中世以降の所産であろう。

勾玉、貨幣

Ｔ字頭勾玉と呼ばれるもので３本の線刻を有する滑石製勾玉は、全長3.6cm、幅1.4cm、厚み1.1cmを測る。頭部は1.3×1.1cmに丸く研磨し多少小さい径の尾部になる。開孔は、２方向から穿たれているが一方向に下がっている。色調―浅黄色（2.5Ｙ7/3）、Ｄ―Ⅱ―60出土

「元豊通宝」は、潤縁の中国銭で通より大部に欠損が認められる。保存状態は良好で錆は面背ともない。「字」・「郭」・「輪」は鮮明に遺存する。直径2.4cm、輪幅0.3cm、穿幅0.65cmの行書で鋳造された優品である。

鉄製品

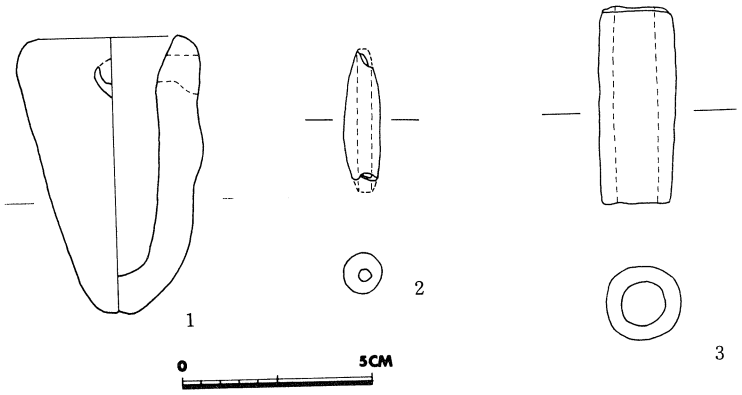
幅5.1cmの扁平な鉄製品で一方はややふくらみ、他方はフラットである。刃部らしき部分は認められないが中央において最も分厚く4mmを計る。錆は少くなく保存状態良好。Ｄ―Ⅱ―33出土。

土製品

残高4.9cm、最大幅3.1cm、厚み2.4cmを計測したこの土師質に焼成され土製品は、首より上部は破損している。行脚する僧呂を形取った袈裟を身につけ前方にみの傘を持っている。人形の両側面には型押し時のはみ出した部分をヘラケズリによって調整している。Ｄ―Ⅱ―62床土中出土。

(4) 小　　結

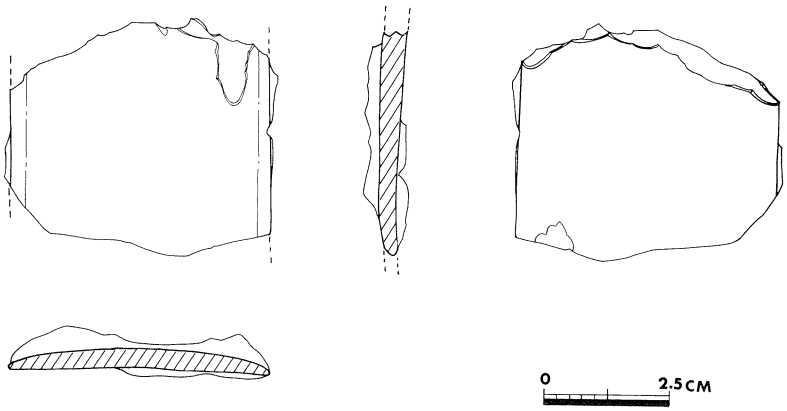
第３地区の全体をベルト状堆積した耕作土・床土・包含層は浅いながらも遺構の保存に十分役立っていた。中でも棟持ち柱建物と溝は、区画性に組み込まれ６世紀中葉を成立させたのであろう。30ヶ所の耕作用井戸は、大きく３ブロックに密集しているが既調査区に見られたよう



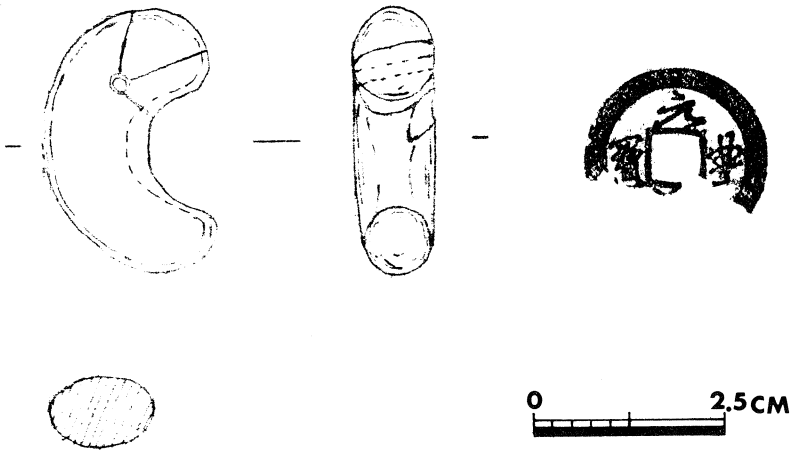
第69図　第３地区出土蛸壺・土錘

な田畑畦畔だけにとらわれていない側面を看板する。これらの異常な程の井戸は、単に数枚の田畑を潤していただけに止まらない事を想像出来る。

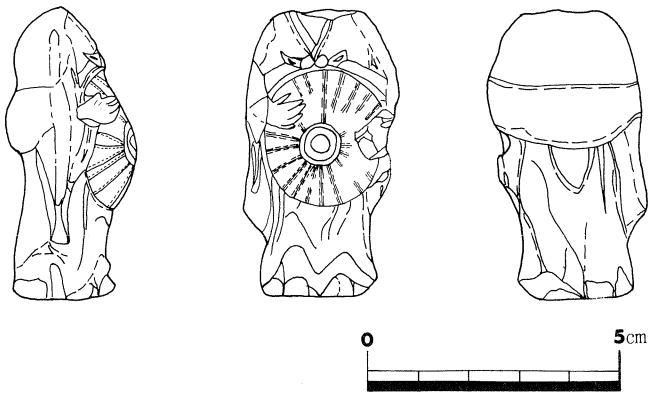
出土した古墳時代の土器群の比率、特に須恵器の出土量から一見して生活面の主流が６世紀中葉に設定してみたい。又、特記すべき遺物として、古墳時代中期のＴ字頭勾玉がある。



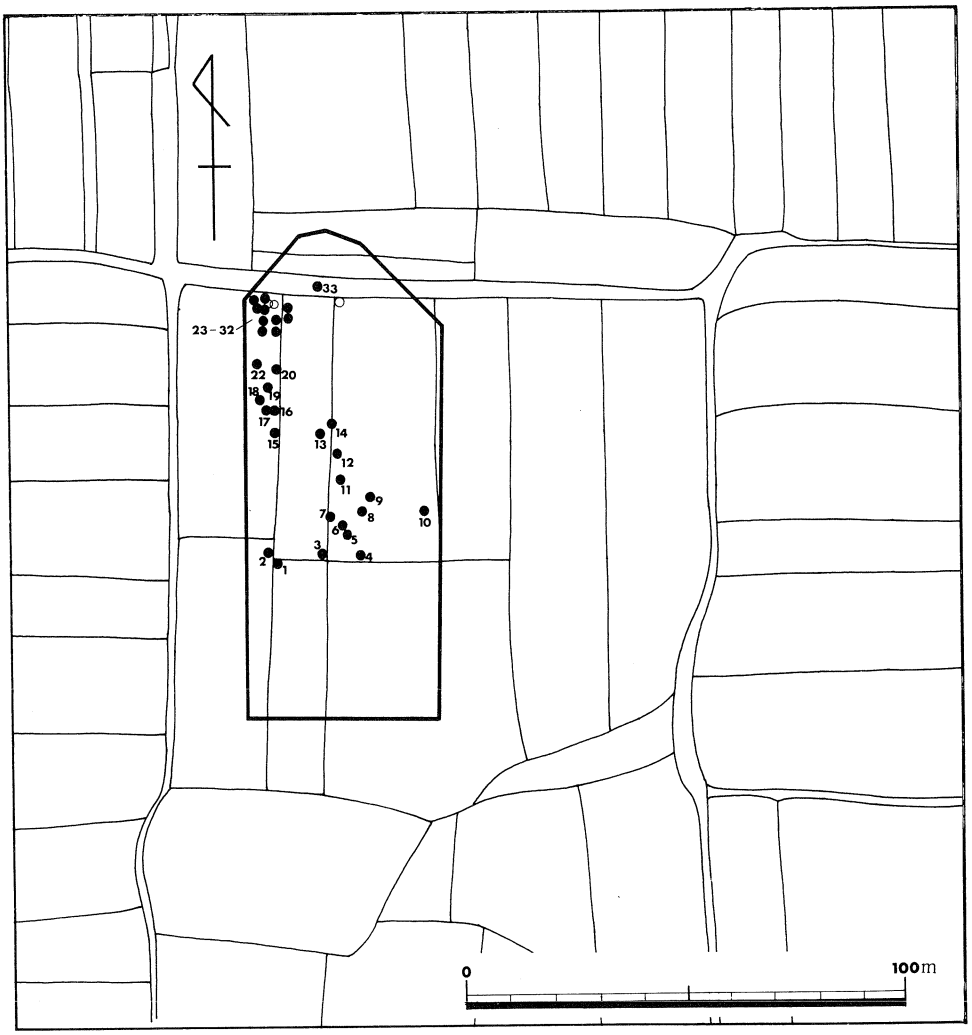
第70図　第３地区出土鉄製品



第71図　第３地区出土勾玉・貨幣



第72図　第３地区出土土製品



第73図　第３地区周辺旧状図と井戸位置図

第3地区出土、須恵器・杯蓋観察表（第58図）

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
杯蓋		1	C-Ⅱ-43	黒褐色粘質土	口径(推) 11.6 器高(残) 2.75	天井部は、ほぼ水平。口縁部にかけて段を有し、ゆるく弯曲して下る。口縁部は一部に凹面を有して下る。端部は丸い。	天井部は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密 1～2mm の粗砂を含む。	良好	灰白色N7/0	時計方向。
〃		2	D-Ⅱ-43	〃	口径(推) 11.1 器高(残) 3.1	口縁部はかるく弯曲して下る。端部は丸い。	天井部は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		やや密 2～3mm の礫を含む。	良好	内面・外よりやや白っぽい 外面・明オリーブ灰色 2.5YG7/1	時計方向。
〃		3	C-Ⅱ-61	〃	口径(推) 9.5 器高(残) 3.0	口縁部は、ゆるやかに外反に弯曲している。端部は丸く内側に凹縁を有する。天井部から稜部にかけてやや屈曲し、稜はやや角ばっている。	天井部は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密 1～2mm の粗砂を含む。	良好	灰白色N7/0	時計方向。
〃		4	C-Ⅱ-61	〃	口径(推) 10.7 器高(残) 3.85	口縁部は、段を有し、内弯している。端部は丸い。	天井部は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密 2mm位の粗砂を含む。	良好	青灰色10BG5/1	時計方向。
〃		5	D-Ⅱ-61	〃	口径(推) 10.8 器高(残) 3.5	天井部は直線的に傾斜し口縁部との境より、やや内側に屈曲し、端部は外反し、わずかに段を有し先端は鋭い。	回転ナデ調整。		密 2mm位の粗砂を含む。	良好	灰白色N8/0	不明。口縁部は釉がかり。
〃		6	D-Ⅱ-62	〃	口径(推) 9.6 器高(残) 2.1	天井部は水平に近く、口縁部にかけてゆるく弯曲して下る。口縁部は凹面を有して外反する。端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 1～2mm の粗砂を含む。	良好	緑灰色5G5/1	時計方向。
〃		7	D-Ⅱ-62	〃	口径(推) 11.6 器高(残) 2.6	口縁部はゆるく外反し、端部近くで内側へ屈曲する。端部は丸い。	天井部は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密 2～3mm 位の白い礫を含む。	良好	内面・外面 灰白色N8/0 断面・暗紫灰色 5PR3/1	逆時計方向。
〃		8	D-Ⅱ-20	〃	口径(推) 10.55 器高(残) 3.5	口縁部はなだらかに弯曲し、端部は丸い。	回転ナデ調整。		密	やや不良	内面・灰白色 10Y8/1 外面・灰色N5/0	時計方向。
〃		9	D-Ⅱ-62	〃	口径(推) 9.7 器高(残) 2.45	天井部は直線的に傾斜し口縁部は内弯しながら外下方に開き、端部は内側に段を有し、丸い。	回転ナデ調整。		密 1mmほどのわずかの粗砂を含む。	良好	灰白色N8/0	不明。
〃		10	C-Ⅱ-72	〃	口径(推) 10.8 器高(残) 2.5	口縁部は段を有し、内弯しながら外反する。端部は、内部に段を有しやや鋭い。	回転ナデ調整。		密 1～2mm の粗砂を含む。	良好	灰色N5/0	時計方向。
〃		11	C-Ⅱ-72	〃	口径(推) 12.6 器高(残) 2.85	口縁部は内弯し、端部近くて外反している。端部は丸い。稜は短く、鋭く、下方にのびている。	回転ナデ調整。		密 1～2mm の粗砂を含む。	良好	灰色N5/0	逆時計方向。

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
杯蓋		12	D-Ⅱ-43	黒褐色粘質土	口径(推) 10.6 器高(残) 2.7	口縁部は内弯し、端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 1～2mm の粗砂を含む。	良好	内面・外面 暗青灰色5B 4/1 断面・にぶい赤褐色 7.5R 4/3	時計方向。
〃		13	D-Ⅱ-61	〃	口径(推) 12.3 器高(残) 2.7	口縁部はゆるく内弯して下り、端部に至る。端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 1～2mm の粗砂を含む。	良好	暗青灰色10BC 4/1	逆時計方向。
〃		14	D-Ⅱ-62	〃	口径(推) 11.2 器高(残) 3.1	口縁部はゆるく弯曲し、端部は丸い。	回転ナデ調整。		やや密 2～3mm の粗砂を含む。	良好	灰白色N 7/0	不明。
〃		15	D-Ⅱ-23	〃	口径(推) 9.6 器高(残) 3.0	口縁部は内弯しながら外下方に開き、端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 1～2mm 位の粗砂を含む。	良好	灰白色N 7/0	逆時計方向。
〃		16	D-Ⅱ-23	〃	口径(推) 10.5 器高(残) 3.5	口縁部は内弯し、まっすぐ下る。端部は丸い。	回転ナデ調整。		やや粗	良好	灰白色N 8/0	不明。
〃		17	D-Ⅱ-13	〃	口径(推) 11.8 器高(残) 3.4	口縁部は内弯して下る。端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 2～3mm の礫を含む。	良好	緑灰色 7.5GY 6/1	逆時計方向。
〃		18	D-Ⅱ-61	〃	口径(推) 11.8 器高(残) 2.9	口縁部は内弯しながら外下方へ開く、端部は丸い。	天井部に回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密 1mm位の粗砂を含む。	良好	内面・明緑灰色 10GY 7/1 外面・緑灰色 10GY 6/1	不明。
〃		19	D-Ⅱ-41	〃	口径(推) 10.0 器高(残) 2.5	口縁部は外反して下り、端部は、やや鋭い。天井部と口縁部の境に凹線を有する。	天井部は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密 1mmほどの粗砂を含む。	良好	灰白色N 7/0	時計方向。
〃		20	D-Ⅱ-52	〃	口径(推) 10.8 器高(残) 2.8	口縁部は凹面を有し外反する。端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 1~2.5m 位の粗砂礫を含む。	良好	灰白色N 7/0	逆時計方向。
〃		21	D-Ⅱ-42	〃	口径(推) 8.6 器高(推) 1.4	天井部と口縁部の境に段を有し、口縁部は外反している。端部より、0.8cm の所にかえりを有している。	天井部は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密	良好	青灰色5B 5/1	
〃		22	D-Ⅱ-52	〃	口径(推) 10.2 器高(残) 2.6	口縁部は内弯しながら、外下方に開く、端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 1~1.5mm の粗砂を含む。	良好	灰色 7.5Y 6/1	時計方向。

第3地区出土、須恵器・杯身観察表（第59図）

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
杯身		1	C-Ⅱ-92	黒褐色粘質土	口径(推) 10.95 器高(残) 2.7	たちあがりは、内傾し、長く端部は、やや鋭い、内面の端部で外反する。受部は、水平にのび、端部は丸い。たちあがりと受部の境に凹線を有す。	回転ナデ調整。		密 2～4mmぐらいの礫を含む。	良好	灰白色N⁶⁄₈	時計方向。受部に蓋付着。
〃		2	D-Ⅱ-60	〃	口径(推) 11 器高(残) 2.35	たちあがりは、やや内傾し、長く、基部内面に沈線をめぐらす。端部は丸い。受部は、水平にのび、端部は丸い。	内底部回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密 1～2mmの礫を含む。	良好	青灰色10BG⁵⁄₄	時計方向。
〃		3	D-Ⅱ-62	〃	口径(推) 13 器高(残) 2.6	たちあがりは、やや内傾し、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。たちあがりと受部の境に凹線を有す。	回転ナデ調整。		密 2～3mmの粗砂を含む。	良好	青灰色5B⁵⁄₄	逆時計方向。
〃		4	D-Ⅱ-62	〃	口径(推) 11.2 器高(残) 2.2	たちあがりは、内傾し、端部はやや鋭い。受け部は、やや上外方に伸び、端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 1～2mmの粗砂を含む。	良好	内面・明青灰色 5PB⁷⁄₄ 外面・灰色N⁶⁄₈ 断面・紫灰色 5RP⁵⁄₄	不明。受部に蓋付着。
〃		5	D-Ⅱ-52	〃	口径(推) 12.6 器高(残) 2.9	たちあがりは、内傾し、長く、基部の外がわに段を有す。端部はやや鋭い。受部は、水平にのび、端部はやや鋭い。たちあがりと受部の境に凹線を有す。	底部回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		やや密 1～4.5mm粗砂、礫、礫を含む。	良好	青灰色5BG⁵⁄₄	逆時計方向。断面、内側にチャートが含まれている。
〃		6	D-Ⅱ-53	〃	口径(推) 12.9 器高(残) 2.5	たちあがりは、ほぼ垂直で内がわのみ端部で外反する。端部は鋭い。受部は、水平にのび、わずか凹凸があり、端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 2mmぐらいの粗砂を含む。	良好	明青灰色 10BG⁷⁄₄	不明。底部から口縁部にかけて自然釉がかり。
〃		7	D-Ⅱ-53	〃	口径(推) 12.0 器高(残) 3.2	たちあがりは内傾し、端部はやや鋭い。受部は上外方にのび、端部はやや鋭い。	底部は回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密 1.5～3mmぐらいの粗砂、礫を含む。	良好	灰白色N⁷⁄₈	時計方向。
〃		8	D-Ⅱ-61	〃	口径(推) 12.4 器高(残) 3.1	たちあがりは内傾し、長く、端部は丸い。受部は、水平にのび、端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 1mmの粗砂を含む。	良好	灰白色N⁷⁄₄	不明。
〃		9	D-Ⅱ-62	〃	口径(推) 13.6 器高(残) 1.9	たちあがりは内傾し、端部は、やや鋭い。受部は、水平にのび、端部はやや鋭い。たちあがりと受部の境に凹線を有す。	回転ナデ調整。		密 0.5～1mmの粗砂を含む。	良好	内面・外面 明青灰色5B⁷⁄₄ 断面・紫灰色 5RP⁵⁄₄	不明。
〃		10	D-Ⅱ-53	〃	口径(推) 11.7 器高(残) 2.65	たちあがりは、内傾し、端部は丸い。受部は、やや上外方にのび、端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 0.5～1.5mmぐらいの粗砂を含む。	良好	灰白色N⁷⁄₈	逆時計方向。
〃		11	D-Ⅱ-61	〃	口径(推) 13.6 器高(残) 2.6	たちあがりは、垂直にのび、端部はやや鋭い。受部は、水平にのび、端部は丸い。	底部は回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密 粗砂を含む。	良好	青灰色5B⁵⁄₄	時計方向。

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
杯身		12	D-Ⅱ-62	黒褐色粘質土	口径(推) 11.4 器高(残) 3.2	たちあがりは、内傾し、端部は丸い。 受部は、水平にのび、端部は丸い。	底部は、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。		密 1㎜ぐらいの粗砂を含む。	良好	灰色N⁵⁄₆	不明。
〃		13	D-Ⅱ-82	〃	口径(推) 13.7 器高(残) 2.21	たちあがりは、ほぼ垂直にのび、端部はやや丸い。 受部は、やや下傾気味にのびる。	回転ナデ調整。		やや密 1～2㎜の粗砂を含む。	良好	青灰色5B⁵⁄₄	不明。 受け部に蓋付着、自然釉がかり。
〃		14	D-Ⅱ-62	〃	口径(推) 10.45 器高(残) 2.6	たちあがりは、内傾し、端部は丸い。 受部は、水平にのび、端部は丸い。凹面を有す。	底部は、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整		密 1～1.5㎜ぐらいの粗砂を含む。	良好	灰白色N⁵⁄₆	逆時計方向。
〃		15	D-Ⅱ-23	〃	口径(推) 15 器高(残) 3	たちあがりは、内傾する。端部は欠損。 受部は、水平にのび、端部は丸い。	底部は、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。		密 3㎜ぐらいの礫を含む。	良好	灰白色 7.5Y⁷⁄₁	逆時計方向。
〃		16	D-Ⅱ-62	〃	口径(推) 11.4 器高(残) 2.45	たちあがりは、ほぼ垂直にのび、端部は丸い。 受部は、水平にのび、端部は丸い。	底部は、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。		密 1～3㎜の粗砂、礫を含む。	良好	内面 青灰色5PB⁵⁄₄ 外面 青灰色5B⁵⁄₄ 断面 紫灰色5RP⁵⁄₄	逆時計方向。 受部に蓋の口縁端部が付着。
〃		17	D-Ⅱ-62	〃	口径(推) 10.1 器高(残) 1.65	たちあがりは、やや内傾し、上方にのびる。端部は丸い。 受部は、水平にのび、端部は丸い。たちあがりと受部の境に凹線を有す。	回転ナデ調整。		密 1～1.5㎜ぐらいの粗砂を含む。	良好	明青灰色 5BG⁷⁄₁	不明。
〃		18	D-Ⅱ-61	〃	口径(推) 10.8 器高(残) 2.98	たちあがりは、ほぼ垂直にのび、端部は丸い。 受部は、水平にのび、端部は丸い。	底部は、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。		密 1～2㎜の礫を含む。	良好	内面 明緑灰色5G⁷⁄₁ 断面 明青灰色 5PB⁷⁄₁	時計方向。
〃		19	D-Ⅱ-61	〃	口径(推) 10.0 器高(残) 2.45	たちあがりは、やや内傾し、上方へのびる。端部はやや鋭い。たちあがり基部は内側へ大きくはり出している。 受部は、やや上外方へのび、端部はやや鋭い。	回転ナデ調整。		密 1～1.5㎜ぐらいの粗砂を含む。	良好	灰色N⁵⁄₆	不明。
〃		20	D-Ⅱ-61	〃	口径(推) 10.3 器高(残) 3.3	たちあがりは、垂直にのび、長く、端部はやや鋭い。 受部は、水平にのび、端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 1～2㎜ぐらいの粗砂を含む。		灰色N⁵⁄₆	逆時計方向。

第３地区出土、須恵器・甕・壺観察表（第60図）

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
甕		1	D-Ⅱ-61	黒褐色粘質土	口径(推) 46.0 器高(残) 5.1	口頸部は、外弯して端部に至り、さらに外方へ屈曲し、端部は、垂直な平面を有す。端部内面に浅凹線を有す。	回転ナデ調整。		やや密 礫を含む。	良好	青灰色５Ｂ5/1	時計方向。
壺		2	C-Ⅱ-93	〃	口径(推) 12.5 器高(残) 3.45	口頸部は、外弯し、端部はやや丸い。	回転ナデ調整。		密 ２～５mm位の礫を含む。	良好	内面 灰白色Ｎ7/0 外面 灰白10Ｙ8/1	逆時計方向。
壺		3	D-Ⅱ-52	〃	口径(推) 21.0 器高(残) 3.4	口頸部は、外弯したのち端部でさらに外反する。端部は、ほぼ丸く、下位に凹線を有す。	口頸外面部は回転ハケ調整のち、回転ナデ調整。他は、回転ナデ調整。	８本	密 ２mm位の粗砂を含む。	良好	青灰色５Ｂ5/1	逆時計方向。
壺		4	D-Ⅱ-52	〃	口径(推) 20.95 器高(残) 3.75	口頸部は、外弯しわずか凹凸し上外方にのびる。端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 １～３mmの礫・粗砂を含む。	良好	灰白色 7.5Ｙ7/0	逆時計方向。
甕		5	D-Ⅱ-51	〃	口径(推) 12.0 器高(残) 4.7	口頸部は、外弯して端部に至り、さらに外反する。端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 粗砂を含む。	良好	内面 明青灰色13Ｇ7/1 外面 灰白色５Ｙ8/1	不明。
壺		6	D-Ⅱ-61	〃	口径(推) 24.6 器高(残) 3.7	口頸は、外反したのち、さらに外反して端部に至る。端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 1～1.5mm位の粗砂を含む。	良好	内面・灰色Ｎ5/0 外面・灰色Ｎ5/0 断面・暗紫灰色 ５ＲＰ4/1	不明。
壺		7	D-Ⅱ-61	〃	口径(推) 21.0 器高(残) 3.7	口頸部は肩部との付け根より大きく外方へ屈曲し端部に至る。端部は丸い。	肩部内面、同心円文が見られる。他は、回転ナデ調整。		密 １～３mmの礫を含む。	良好	灰白色 7.5Ｙ7/1	逆時計方向。
甕		8	D-Ⅱ-61	〃	口径(推) 24.9 器高(残) 3.7	口頸部は、外弯し端部でさらに外反し、端部は丸い。	口頸外面部は回転ハケ調整したのち、回転ナデ調整。他は、回転ナデ調整。	８本	密 1～1.5mmの粗砂を含む。	良好	青灰色５ＰＢ5/1	時計方向。内側に自然釉がかり。
壺		9	C－Ⅱ	〃	口径(推) 19.75 器高(残) 3.1	口頸部は、外傾したのち外反し、端部に至る。端部は丸い。	口頸外面部は回転ハケ調整したのち、回転ナデ調整。他は、回転ナデ調整。	８本	密	良好	内面・灰色Ｎ5/0 外面・黄灰色 2.5Ｙ5/1 断面・明青灰色 10ＢＧ4/1	不明。全体に自然釉がかり。
甕		10	C－Ⅱ	〃	口径(推) 12.3 器高(残) 2.55	口頸は、外弯し、さらに外反して端部に至る。端部は丸い。	口頸外面部は回転ハケ調整したのち、回転ナデ調整。他は、回転ナデ調整。		密 １～２mmの粗砂を含む。	良好	内面・灰オリーブ色 7.5Ｙ4/2 外面灰黄褐色 10ＹＲ5/2 断面・褐灰色 10ＹＲ5/1	不明。内面に自然釉がかり。
壺		11	D-Ⅱ-40	〃	口径(推) 19.5 器高(残) 3.6	口頸部は、外弯したのち、内側に屈曲する。端部はほぼ丸い。	回転ナデ調整。		密 1.5～2.5mm位の粗砂・礫を含む。	良好	内面・灰色Ｎ5/0 外面・灰色Ｎ5/0	逆時計方向。

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
甕		12	D-Ⅱ-61	黒褐色粘質土	口径(推) 17.2 器高(残) 4.0	口頸部は、外弯したのち端部でさらに外反する。端部は丸い。	口頸外面部は回転ハケ調整。他は、回転ナデ調整。	12本	密 粗砂を含む。	良好	内面・灰オリーブ色 7.5Y 4/2	不明。
壺		13	D-Ⅱ-62	〃	口径(推) 18.8 器高(残) 3.1	口頸部は、外弯したのち端部で外反する。端部は丸い。	口頸外面部は回転ハケ調整したのち、回転ナデ調整。他は、回転ナデ調整。	8本	密	良好	内面・灰色N 6/0 外面・灰色N 5/0	不明。
甕		14	D-Ⅱ-62 ～63	〃	口径(推) 18.7 器高(残) 不明	口頸部は、外弯し、そのまま端部に至る。端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 礫を含む。	堅緻	灰色N 5/0	時計方向。
甕		15	D-Ⅱ-62	〃	口径(推) 13.1 器高(残) 2.75	口頸部は、外弯し、そのまま端部に至る。端部は丸い。	回転ナデ調整。		やや密 1～3mmの礫を含む。	良好	内面・灰色 N 5/0 外面・灰色N 5/0	不明。
甕		16	D-Ⅱ-52 ～53	〃	口径(推) 18.0 器高(残) 2.01	口頸部は、外弯し外面は端部でさらり外反し、外下方に稜を有す。端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 粗砂を含む。	良好 堅緻	灰色N 7/0	不明。
甕		17	D-Ⅱ-43	〃	口径(推) 19.8 器高(残) 3.0	口頸部は、外弯し、端部に肥厚を有し、先端はやや鋭い。	回転ナデ調整。		緻密 2mm位の粗砂を含む。	良好	内面・外面 緑灰色10GY 5/1 暗青灰色5B 5/1 断面 暗紫灰色5PR 5/1	不明。全体に自然釉がかり。
壺		18	D-Ⅱ-23	〃	口径(推) 20.4 器高(残) 2.9	口頸部は、外弯し、さらに端部で外反する。端部はほぼ丸い。	回転ナデ調整。		密 白色礫を含む。	良好	灰白色N 7/0	逆時計方向。
壺		19	D-Ⅱ-23	〃	口径(推) 16.8 器高(残) 3.3	口頸部は、外傾し、端部まで至る。端部は丸い。	回転ナデ調整。		やや密 1～2mmの粗砂を含む。	良好	明青灰色5B 7/1	不明。

第3地区出土、須恵器・壺観察表(第62図)

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
長頸壺蓋		1	C-Ⅱ-91	黒褐色粘質土	口径(推) 11.0 器高(残) 2.2	天井部は、ゆるく内弯し、口縁部は水平にのびる。端部はやや鋭い。内側、端部より1.7mmの所にかえりがある。	天井部は回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密 1.5～4mmの粗砂を含む。	良好	内面 灰白色N 7/0 外面 灰白色N 6/0	時計方向。
長頸壺蓋		2	D-Ⅱ-31	〃	口径(推) 10.4 器高(残) 2.25	口縁部は、外反し、端部はやや丸い。内側、端部より1.5cmの所にかえりがある。	回転ナデ調整。		密 粗砂を含む。	良好	灰白色N 7/1	不明。

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
壺		3	D-Ⅱ-52	黒褐色粘質土	口径(推) 5.0 器高(残) 2.65	口頸部は、基部より垂直にたちあがる。端部はやや鋭い。	回転ナデ調整。		密 粗砂を含む。	良好	内面 青灰色5B6/1 外面 褐色5Y7/1	逆時計方向。
壺		4	D-Ⅱ-61	〃	口径(推) 9.0 器高(残) 2.1	口頸部は、垂直にたちあがり、さらに、端部で外反する。端部は丸い。	肩部内面に、同心円文がみられる。他は、回転ナデ調整。		密	良好	灰白色N7/1	
壺		5	D-Ⅱ-30	〃	口径(推) 16.0 器高(残) 8.15	口頸は、外傾し、端部に至り、端部は丸い。肩部は、ほぼ直線的に内傾する。体部は、段を有しながら彎曲する。	回転ナデ調整。		密 1～4mm位の粗砂、礫を含む。	良好	灰色N5/0	時計方向。
壺		6	D-Ⅱ-30	〃	口径(推) 5.0 器高(残) 4.05	体部は、ゆるやかに内彎し、凹線を有す。底部は平ら。	体部外面、底部外面は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		やや密 2～4mm位の礫を含む。	良好	内面・明青灰色 5PB7/1 外面・青灰色 5B5/1	時計方向。
壺		7	C-Ⅰ-99	〃	口径(推) 6.8 器高(残) 4.7	口頸部は、外傾し、端部は、ほぼ丸い。肩部は、内傾に傾斜し、体部は、凹縁を有しながら、内彎する。底部は平ら。	体部外面の下位と、底部外面は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密	良好	内面・灰白色 N7/0 外面・灰色N5/0	時計方向。底部にヘラ記号あり½残存。
壺		8	C-Ⅰ-99	〃	口径(推) 16.8 器高(残) 2.9	口頸部は、やや外傾し、端部はやや鋭い。肩部はゆるやかに傾斜する。	回転ナデ調整。		やや密 粗砂を含む。	良好	灰色N5/0	時計方向。

第3地区出土、高台付須恵器観察表（第63図）

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
杯身		1	C-Ⅱ-61	黒褐色粘質土	高台径(推) 12.4 器高(残) 1.3	高台は、内傾気味につく。底部は、平坦であり、体部は底端部より外傾してのびる。体部上部、たちあがり、受部は欠損。高台底面に凹面を有す。	回転ナデ調整。		密 1～2mmの礫を含む。	不良	内面・灰色N5/0 外面・灰赤色 2.5YR5/2	時計方向。
杯身		2	D-Ⅱ-61	〃	高台径(推) 8.6 器高(残) 不明	高台は、底端部に垂直につく。体部は、底端部より、外傾してのびる。底部、体部上部、たちあがり、受部は欠損。高台底面はやや鋭い。	回転ナデ調整		やや密 粗砂を含む。	良好	灰白色N8/1	時計方向。
杯身		3	D-Ⅱ-61	〃	高台径(推) 11.0 器高(残) 2.5	高台は、底端部に外傾気味につく。体部は、底端部より、外傾してのびる。底部は平坦である。高台底面は凹面を有す。	回転ナデ調整。		密 1～1.5mm位の粗砂を含む。	良好	明青灰色5B7/1	逆時計方向。
台付壺		4	D-Ⅱ-61	〃	高台径(推) 8.2 器高(残) 2.9	高台は、底端部より外傾気味につく。底部外面は、平坦、底部内面は、凹凸面を有しながら傾斜している。体部は、底端部より外傾してのびる。高台底部は凹面を有す。	回転ナデ調整。		密	良好	灰白色N7/0	逆時計方向。

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
台付壺		5	D-Ⅱ-13	黒褐色粘質土	高台径(推) 12.3 器高(残) 4.7	高台は、底端部より、垂直にのびる。底部は、傾斜している。体部は、底端部より、外傾してのびる。高台底部は平坦。	体部外面は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密 3mm位の礫を含む。	良好	青灰色5B5/1	逆時計方向。
台付壺		6	D-Ⅱ-61	〃	高台付(推) 9.0 器高(残) 3.7	高台は、底端部より内傾気味につく。底部は、傾斜している。体部は、底端部より外傾してのびる。高台底部はやや丸い。	体部外面は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密 黒色礫を含む。	良好	内面・明褐灰色 5YR7/1 外面・にぶい橙色 5YR7/4 断面・にぶい橙色 5YR7/4	逆時計方向。
杯身		7	D-Ⅱ-30	〃	高台付(推) 5.2 器高(残) 2.6	高台は、底端部に、外傾気味につく。底部は、平坦であり体部は、外傾してのびる。体部上部、たちあがり、受部は欠損。高台底面は凹面を有す。	回転ナデ調整。		密	良好	明青灰色 5PB7/1	時計方向。
水瓶		8	D-Ⅱ-30	〃	高台付(推) 6.0 器高(残) 2.75	高台は、底端部に垂直につく。底部は、平坦、体部は、外傾してのびる。高台底面は平坦。	体部は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密 1.5～2mmの礫を含む。	良好	内面・外面 青灰色5B5/1 断面 紫灰色5RP5/1	逆時計方向。
水瓶		9	D-Ⅱ-61	〃	高台径(推) 7.0 器高(残) 2.8	高台は、底端部に、内傾気味につき、端部近くで、外反する。底部は、傾斜している。体部は、外傾してのびる。高台底面は平坦。	回転ナデ調整。		密	良好	灰色N5/	逆時計方向。
台付壺		10	D-Ⅱ-30	〃	高台径(推) 13.2 器高(残) 3.8	高台は、底端部より、垂直にのび、端部付近で外反する。底部は、欠損のため不明。体部は、底端部より外傾してのびる。内部にふくろみを有す。高台底面に凹面を有す。	回転ナデ調整。		密 1mm位の粗砂を含む。	良好	灰白色10Y7/1	時計方向。断面、粘土帯の痕を確認。
杯身		11	D-Ⅱ-40	〃	高台径(推) 6.8 器高(残) 2.6	高台は、底端部より、下方へ垂直にのびる。底部は、傾斜している。体部は、底端部より、外傾してのびる。高台底面凹面を有す。	回転ナデ調整。		密	良好	明緑灰色10G7/1	時計方向。

第3地区出土、土師器・壺・甕観察表（第64図）

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
甕		1	D-Ⅱ-32～33	黒褐色粘質土	口径(推) 18 器高(残) 4.1	口頸部は、外傾している端部は、角ばっている。体部は、内弯気味に下る。	体部に指圧痕残る。他は、ナデ調整。		やや密	良好	内面・にぶい黄褐色 10YR5/3 外面・明黄褐色 10YR7/6	
甕		2	D-Ⅱ-20	〃	口径(推) 12.4 器高(残) 4.3	口頸部は、外傾してのび端部でやや内弯する。端部は丸い。体部は、直線的に下外方に下る。	ナデ調整。		粗 2～3mmの礫を含む。	良好	内面・黒褐色 2.5Y3/1 外面・橙色 5YR6/6	
甕		3	D-Ⅱ-43	〃	口径(推) 18.6 器高(残) 4.4	口頸部は、外弯気味にのび、端部でさらに外反する。端部はほぼ鋭い。体部は、下外方に下る。	体部外面は、ヘラ削り。他は、ナデ調整。		密 粗砂を含む。	良好	にぶい橙色 7.5YR7/4	体部内面、粘土接合痕。

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
甕		4	C-Ⅱ-81	黒褐色粘質土	口径(推) 14.0 器高(残) 2.85	口頸部は、外傾し、端部で外反する。端部は丸い。体部は、内弯気味に、下外方に下る。	指圧及びナデ調整。		密 0.5～5mmの粗砂・礫を含む。	良好	黄色 2.5Y 7/6	
甕		5	C-Ⅰ-79	〃	口径(推) 18.3 器高(残) 4.6	口頸部は、外傾して上外方へのびる。端分はやや丸い。体部は、直線的に下外方に下る。	摩滅のため不明。		やや密 2mmの礫を含む。	良好	内面・淡黄色 2.5Y 8/4 外面・明黄褐色 10YR 7/6	
甕		6	D-Ⅱ-11	〃	口径(推) 16.6 器高(残) 3.8	口頸部は、外弯して上外方にのび、端部は、ほぼ丸い。体部は、内弯気味に下る。	摩滅のため不明。		密 1mm位の粗砂を含む。	良好	内面・にぶい橙色 7.5YR 7/4 外面・橙色 7.5YR 7/6 断面・橙色 2.5YR 7/6	
甕		7	C-Ⅰ-99	〃	口径(推) 19.55 器高(残) 4.9	口頸部は、ほぼ垂直にのび、端部で外傾する。体部は、内弯気味に下る。	ナデ調整。		密 0.5～2.5mmの粗砂と礫を含む。	良好	橙色 5YR 6/6	
甕		8	C-Ⅱ-71	〃	口径(推) 16.8 器高(残) 3.1	口頸部は、外傾して端部に至る。端部は丸い。体部は、欠損のため不明。	ナデ調整。		密 1～4mm位の粗砂、礫を含む。	良好	明褐色 7.5YR 5/8	体部外面に2条の凹線を有す。
甕		9	C—Ⅱ	〃	口径(推) 19.95 器高(残) 3.4	口頸部は、肥厚で、外傾する。端部は丸い。体部は、内弯気味に下外方へ下る。	口頸部外面、ハケ調整の後、ナデ調整。他は、ナデ調整。		密 白色礫を含む。	良好	内面・赤灰色 2.5YR 4/1 外面・にぶい橙色 7.5YR 6/4	
甕		10	D-Ⅱ-61	〃	口径(推) 24.3 器高(残) 3.6	口頸部は、外傾している。端部は丸い。体部は下外方へ下る。	ナデ調整。		やや密 0.5～4.2mmの礫を含む。	良好	内面・外面 明赤褐色 5YR 5/6 断面・にぶい橙色 10YR 7/2	
壺		11	D-Ⅱ-32	〃	口径(推) 14.0 器高(残) 3.7	口頸部は、外弯気味にのび、端部に至る。端部はほぼ丸い。体部は、内弯気味に下る。	ナデ調整。		密 1～3mm位の粗砂礫を含む。	良好	浅黄橙色 7.5YR 8/4	
壺		12	D-Ⅱ-11	〃	口径(推) 10.5 器高(残) 3.7	口頸部は、外弯気味にたちあがり、端部でさらに外反する。体部は内弯して下る。	体部外面はヘラナデ調整。内面は、指圧調整。他は、ナデ調整。		やや密	良好	赤褐色 2.5YR 5/8	
壺		13		〃	口径(推) 16.9 器高(残) 4.9	口頸部は、外傾してのび、さらに、ほぼ垂直にのび、さらに端部で、やや外傾する。体部は欠損のため不明。	ナデ調整。		やや密 礫を含む。	良好	浅黄橙色 7.5YR 8/4	
壺		14	C—Ⅱ	〃	口径(推) 19.0 器高(残) 4.3	口頸部は、外傾して、たちあがり、端部は丸い。体部は、内弯気味に下る。	ナデ調整。指圧痕体部に残存。		やや密 3×4mmの礫を含む。	良好	内面・にぶい褐色 7.5YR 5/4 外面・にぶい褐色 7.5YR 6/3	

第3地区出土、土師器・皿観察表（第65図）

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
皿		1	C-Ⅱ-61	黒褐色粘質土（上層）	口径(推) 9.2 器高(残) 1.1	口頸部は、外傾してのび端部は鋭い。底部は、平坦である。	ナデ調整。		やや密 1～1.5mmの粗砂を含む。	良好	内面・浅黄橙色 7.5YR8/3 外面・浅黄橙色 7.5YR8/4	逆時計方向。平行暗文を有す。
皿		2	C-Ⅱ-72	〃	口径(推) 9.0 器高(残) 1.55	口縁部は、内弯気味に、上外方へのびる。端部は丸い。底部は、平坦である。	ナデ調整。		密 0.5～1.5mmの粗砂を含む。	良好	内面・にぶい橙色 2.5YR8/4 外面・橙色 2.5YR8/8	不明。
皿		3	C—Ⅱ	〃	口径(推) 7.1 器高(残) 9	口縁部は、上外方へのびる。端部はやや鋭い。底部は、内弯気味である。	ナデ調整。		密	良好	内面・浅黄橙色 10YR8/4 外面・浅黄色 2.5Y8/4	逆時計方向。
皿		4	D-Ⅱ-3	〃	口径(推) 7.8 器高(残) 1.55	口縁部は、外弯気味に、上外方へのびる。端部は肥厚で丸い。底部は、平坦である。	ナデ調整。		密 0.5～1.5mmの粗砂を含む。	良好	黄橙色10YR8/6	不明。
皿		5	D-Ⅱ-62	〃	口径(推) 10.5 器高(残) 1.8	口縁部は、外弯気味に上外方へのびる。端部は丸い。底部は、外弯気味である。	ナデ調整。ヘラ削り痕が残存。		やや密 1～1.5mmの粗砂を含む。	良好	明黄褐色 10YR7/6	逆時計方向。
皿		6	D-Ⅱ-61	〃	口径(推) 8.6 器高(残) 1.35	口縁部は、上外方へ直線的にのび、端部付近で少し外反す。端部は丸い。底部は、平坦である。	ナデ調整。		密 1mmの粗砂を含む。	良好	内面・にぶい黄橙色 10YR7/4 外面・にぶい黄橙色 10YR8/3	不明。
皿		7	C-Ⅱ-80	〃	口径(推) 9.0 器高(残) 1.1	口縁部は、上外方へのびる。端部は丸い。底部は、平坦である。	ナデ調整。		密 1～2mmの礫を含む。	良好	内面・浅黄橙色 7.5YR8/3 外・橙色 2.5YR8/8	
皿		8	C—Ⅱ	〃	口径(推) 9.3 器高(残) 2.4	口縁部は、内弯気味に上外方へのびる。端部は鋭い。底部は平坦と思われる。	ナデ調整。		密 礫を含む。	良好	内面・橙色 7.5YR7/6 外・にぶい橙色 7.5YR8/4	
皿		9	C—Ⅱ	〃	口径(推) 8.4 器高(残) 1.85	口縁部は、やや内弯気味で上外方へのびる。端部はやや丸い。底部は平坦である。	ナデ調整。		密	良好	内面・赤橙色 10R8/6 外・にぶい橙色 5YR7/4	
皿		10	C—Ⅱ	〃	口径(推) 10.4 器高(残) 1	口縁部は、外弯してのび端部付近で外反する。端部はやや角ばっている。底部は、平坦である。	ナデ調整。		密	良好	浅黄橙色 7.5YR8/3	
皿		11	D-Ⅱ-52	〃	口径(推) 8 器高(残) 1.25	口縁部は、内弯気味に上外方へのびる。端部は丸い。底部は、欠損のため不明。	ナデ調整。		密	良好		

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
皿		12	D-Ⅱ-23	黒褐色粘質土	口径(cm) 6.3 器高(残) 1.2	口縁部は、内弯気味に上外方へのびる。端部は丸い。底部は、平坦であるが、底部中央で内弯する。	ナデ調整。		密	良好	にぶい橙色 7.5YR7/4	
皿		13	D-Ⅱ-61	〃	口径(cm) 10.4 器高(残) 2.45	口縁部は、内弯気味に上外方へのび、端部付近で外反する。端部は鋭い。底部は平坦である。	ナデ調整。底部、底端部に指圧痕あり。		やや密 礫を含む。	良好	橙色 7.5YR6/6	

第3地区出土、須恵質・摺鉢観察表（第66図）

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
摺鉢		1	D-Ⅱ-2	灰褐色粘質土	口径(推) 27.0 器高(残) 3.3	体部は、内弯気味に上外方へのび、口縁部は内弯してのびる。端部は丸いが、やや角ばっている。	回転ナデ調整。		密 1～5mmくらいの粗砂・礫を含む。	良好	明青灰色5B7/1	時計方向。
摺鉢		2	C-Ⅱ-61	〃	口径(推) 26.65 器高(残) 2.5	体部は凹凸を有しながら上外方へのびる。口縁部は内弯気味。端部は丸い。	回転ナデ調整。		やや密 1～2.5mmの粗砂・礫を含む。	良好	明青灰色 10BG7/1	時計方向。
摺鉢		3	D-Ⅱ-1	〃	口径(推) 27.2 器高(残) 2.9	体部は、外弯気味に上外方へのび、口縁部は垂直にのび、端部は丸い。	回転ナデ調整。		密 1～2mmの粗砂を含む。	良好	灰色N5/ 口縁部・灰色 N5/	時計方向。
摺鉢		4	C-Ⅱ-82	〃	口径(推) 23 器高(残) 2.6	体部は、外弯気味に外上方へのび、口縁部は内傾し、端部はほぼ丸い。	回転ナデ調整。		密 1mmぐらいの粗砂を含む。	良好	内面・灰白色 N7/ 外面・灰白色 N7/ 口縁部・N5/	逆時計方向。
摺鉢		5	D-Ⅱ-1	〃	口径(推) 25 器高(残) 4	体部は、外上方に直線的にのび、口縁部は内傾し端部はやや鋭い。	回転ナデ調整。		密 1mmぐらいの粗砂を含む。	良好	灰色N5/1 口縁端部付近・暗緑灰色 7.5GY3/1	逆時計方向。端部より、下1.8cmまで、黒く帯状になっている。
摺鉢		6	C-Ⅱ-81	〃	口径(推) 24.0 器高(残) 2.4	体部は、やや外弯気味にのび、口縁部は、内弯して、端部に至る。端部はやや鋭い。	回転ナデ調整。		密 1～1.5mmぐらいの粗砂あり。	良好	内面・外面 灰白色N7/ 口縁部 暗オリーブ灰色 2.5GY3/1	不明。
摺鉢		7	C-Ⅱ-81	〃	口径(推) 18 器高(残) 2.8	体部は、上外方へのび、口縁部は、外傾して、端部に至る。端部はやや鋭い。	回転ナデ調整。		密 1～2.5mmの礫を含む。	良好	内面・ 灰白色N8/1 外面 黒色N3/1	時計方向。
摺鉢		8	C-Ⅱ-87	〃	口径(推) 20.6 器高(残) 1.8	体部は、上外方へ内弯気味にのび、口縁部は、垂直にのびる。端部は鋭い。	回転ナデ調整。		密	良好	明青灰色 5BG7/1	時計方向。

第３地区出土、陶磁器観察表（第67図）

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
長頸壺蓋		1	D-Ⅰ-19	灰褐色粘質土	口径(推) 4.2 器高(残) 3.4	つまみを有し、垂直にのび端部は丸い。	ロクロによる回転ナデ調整。底部に糸切りのあとが見られる。		密	良好	にぶい橙色 7.5YR6/4 天井部 黒褐色5YR2/1	上面に釉薬がかかっている。
皿		2	D-Ⅱ-32	〃	底部径(推) 3.25 器高(残) 1.6	体部は、外弯気味に上外方へのびる。底部は、外面凹面になっている。内面は平坦。	体部最下部、底部外面は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密	良好	内面・灰白色 7.5YR8/2 外面・にぶい橙色 5YR6/4	逆時計方向。底部内面に白い釉かかる。
椀		3	C—Ⅱ	〃	口径(推) 4.2 器高(残) 2.65	体部は、内弯気味にのびさらに外傾して上外方へのびる。底部は、外面凹面になっている。内面は平坦。	体部最下部、底部外面は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密	良好	内面・オリーブ灰色 10Y6/2 外面・にぶい赤褐色12.5YR5/3	時計方向。底部内面に、緑の釉薬からかっている。
椀		4	D-Ⅱ-10	〃	口径(推) 15.8 器高(残) 3.7	口縁部は、内傾し、端部で外反する。端部は丸い。	口縁部外面は、回転ヘラ削り調整と回転ナデ調整。他は、回転ナデ調整。		密 1mmぐらいの粗砂を含む。	良好	内面・外面 暗赤褐色 7.5R3/2 断面 灰白色N7/6	不明。
椀		5	D-Ⅱ-62	〃	底径部(推) 4.8 器高(残) 1.85	高台は垂直にのび、端部は丸い。底部外面は、凸状になっている。内面は平坦である。体部は、欠損のため不明。	底部外面、体部最下部は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。		密 1～2mmの粗砂を含む。	良好	内面・灰白色 5Y7/2 外面・にぶい黄橙 10YR7/4	逆時計方向。内面、釉がかり。外面、部分的に白い釉がかり。
青磁椀		6	D-Ⅱ-2	〃	口径(推) 3.7 器高(残) 1.6	高台は、垂直に下る。端部は、平坦である。体部は、欠損のため不明。	回転ナデ調整。		密	良好	明オリーブ灰色 2.5GY7/1	不明。
青磁皿		7	C-Ⅱ-2	〃	口径(推) 6 器高(残) 6	底部内面は平坦、外面は内弯している。体部は欠損のため不明。	外面は、回転ヘラ削り調整。内面は、回転ナデ調整。		密	良好	灰白色 7.5Y7/2	不明。内面、クシガキ有す。
白磁椀		8	C-Ⅱ-81	〃	口径(推) 7.4 器高(残) 2.2	高台は、垂直に下る。端部は、平坦である。体部は、内弯気味にのびる。	底部外面、回転ヘラ削りによって凹面にしている。		密	良好	明オリーブ灰色 5GY7/1	逆時計方向。
青磁椀		9	D-Ⅱ-62	〃	口径(推) 12.9 器高(残) 4.6	体部は、外傾してのび、さらに端部付近で少し外反する。端部は丸い。			密	良好	オリーブ灰色 10Y5/2	
青磁椀		10	D-Ⅱ-41	〃	口径(推) 14.8 器高(残) 4.4	体部は、やや内弯気味にのびる。口縁端部は丸い。			密	良好	内面・外面 オリーブ灰色 5GY5/1 断面・明緑灰色 10GY8/1	
白磁椀		11	C-Ⅱ-61	〃	口径(推) 14 器高(残) 3.4	体部は、やや内弯気味にのび、口縁端部で、肥厚し外反する。端部は丸い。			やや密	良好	灰白色 7.5Y7/2	

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
白磁 椀		12	Ç-Ⅱ-61	灰褐色粘質土	口径(推) 8.05 器高(残) 4.4	体部は、やや内弯気味に上外方へのび、口縁端部で外反する。	内面は、放射状の櫛目あり。外面は、孫の手状の櫛目あり。		密 0.5～0.6mm粗砂を含む。	良好	灰白色 7.5Y 7/2	
青磁 深鉢		13	D-Ⅰ-49	〃	口径(推) 18.6 器高(残) 4.15	体部は、『く』の字のように内弯している。口縁部は、やや内傾して、端部で外反する。端部は丸い。	体部外面に2本の凹線を有す。		密	良好	明オリーブ灰色 5GY 7/1	

第3地区出土、瓦器観察表（第68図）

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
椀		1	C-Ⅱ-71	灰褐色粘質土	口径(推) 17.2 器高(残) 3.0	体部は、ゆるやかに内弯しながら、立ち上がり、口縁部で少し外反する。口縁端部は丸い。	体部外面はナデ調整と指圧。他は、ナデ調整。内面に螺旋状の暗文あり。		密 0.5mmの粗砂を含む。	良好	暗青灰色 5PB 4/1	
皿		2	D-Ⅰ-9		口径(推) 12.0 器高(残) 2.0	体部は、内弯気味に上外方へのび、口縁部に至る。口縁端部は丸い。底部は平坦である。	ナデ調整。内面に2本の暗文が見られる。		やや密 1～2.5mm位の粗砂礫を含む。	良好	内面・灰白色 N 7/1 外面・灰色N 4/1	
椀		3	C-Ⅱ-82		口径(推) 14.4 器高(残) 3.7	体部は、内弯気味にのび口縁端分に至る。口縁端部は、ほぼ丸い。底部は欠損のため不明。	外面は、指圧とナデ調整。他は、ナデ調整。		密	良好	内面・灰色N 5/0 外面・浅黄色 7.5Y 7/3 口縁端部 暗オリーブ灰色 2.5GY 3/1	逆時計方向。
椀		4	C-Ⅱ-72		口径(推) 15.0	体部は、内弯してのび、口縁端部に至る。口縁端部はやや鋭い。	ナデ調整。		密	良好	灰色N 5/0	
皿		5	C-Ⅱ-72		口径(推) 13.1 器高(残) 2.2	体部は、内弯気味に上外方へのびる。口縁端部はほぼ丸い。	体部外面は指圧とナデ調整。他はナデ調整。		密	良好	明緑灰色 10GY 8/1 断面外・明黄褐色 2.5Y 7/6 外面内・灰白色 5Y 8/2	
皿		6	D-Ⅱ-11		口径(推) 8.3 器高(残) 0.9	口縁部は、内弯気味に上外方へのび、端分はやや丸い。底部は中央で内弯している。	底部は指圧とナデ調整。他は、ナデ調整。内面シガキによる光沢あり。		密 1～1.5mm位の粗砂を含む。	良好	内面・外面 青灰色5B 5/1 口縁端部・黄色 5Y 7/6	
椀		7	C-Ⅱ-81		口径(推) 13.0 器高(残) 3.7	体部は、ゆるく凹凸面を有し、内弯気味に上外方へのび、口縁端部に至る。口縁端部はほぼ丸い。	体部外面は指圧とナデ調整。他は、ナデ調整。内面に、横状の暗文あり。		密	良好	内面・外面 灰白色N 8/1 断面 灰白色N 8/1	
椀		8	C-Ⅱ-81		口径(推) 11.4 器高(残) 2.9	体部は、ほぼ直接的に上外方へのび、口縁端部に至る。口縁端部はほぼ丸い。	体部外面は、指圧とナデ調整。他は、ナデ調整。内面に2本の暗文あり。		密	良好	灰色N 5/0	

種類	番号 写真	番号 図版	出土場所	土層	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	ハケ本数 km内	胎土	焼成	色調	備考
小皿		9	C-Ⅱ-72	灰褐色粘質土	口径(推) 8.0 器高(残) 1.5	口縁部は、外弯気味にのび、端部で少し外反する。	底部外面は指圧とナデ調整。 他は、ナデ調整。		密 硬い。	良好	にぶい黄色 2.5Y 6/4	
皿		10	C-Ⅱ-72		口径(推) 9.6 器高(残) 2.1	口縁部は、内弯気味に上外方へのび、端部に至る。 端部は丸い。	ナデ調整。		密	不好	内面 オリーブ黒色 10Y 3/1 外面 暗青灰色10BG	
椀		11	C-Ⅱ-82		底部径(推) 5.6 器高(残) 1.95	高台は、底端部に垂直につき、端部は鋭い。 底部は傾斜している。 体部は、内弯気味に上外方へのびる。 口縁部は欠損のため不明。	体部下部外面は指圧とナデ調整。 他は、ナデ調整。		粗質粘土	良好	灰色N 5/0	
皿		12	C-Ⅱ-61		口径(推) 8.9 器高(残) 1.7	口縁部は、ほぼ垂直的に上外方へのびる。 端部はやや鋭い。 底部は欠損のため不明。	外面下部は指圧とナデ調整。 他は、ナデ調整。		粗質粘土 軟らかくもろい。	良好	灰白色 2.5Y 8/2	
皿		13	C-Ⅱ-82		口径(推) 10.8 器高(残) 2.5	口縁部は、ほぼ垂直に上外方へのび、端部に至る。 端部はほぼ丸い。 底部は、平坦である。	外面下部は指圧とナデ調整。 他は、ナデ調整。		密 1～1.5mmの粗砂を含む。	不好	灰白色 2.5Y 8/2	
皿		14	C-Ⅱ-82		口径(推) 11.6 器高(残) 2.1	口縁部は、やや内弯気味に上外方へのび、端部は丸い。 底部は欠損のため不明。	外面下部は指圧とナデ調整。 他は、ナデ調整。		密	良好	浅黄色 5Y 7/3	
椀		15	D-Ⅱ-62		高台付(推) 5 15 器高(残) 2.1	高台は、やや外弯気味につく。端部はほぼ鋭く付き出ている。底部は平坦である。体部はやや内弯気味に上外方へのびる。	体部外面、底部外面は指圧とナデ調整。 他は、ナデ調整。		密 土師質の感じ。	良好	内面・灰白色 10Y 8/1 外面・明黄褐色 2.5Y 7/6	

(5) 第5・6地区試掘調査

第1—1調査地点（トレンチ）

ベルト状に堆積した5層（耕作土・床土・灰黄褐色土・にぶい黄褐色土・黒色粘質土）が地山である灰黄褐色粘質土上にみられる。地山はフラットで各層位共に多少の凸凹があるとしてもおおむね、水平層といえる。このトレンチ内では、遺構は検出されていないし、又、中央部南側において2×2m程度拡張したが須恵器、土師器、土師質土器、瓦器片の細片が少量、目につくだけであった。尚、各層は、0.2〜0.3mである。

第1—2トレンチ

東側よりも西側の方が分厚い耕作土を遺存し、第2・3層はベルト状でほぼ水平層であるが第5層である黒褐色粘質土は各所で隆起した地山によって分断されてレンズ状堆積さえ呈する所がある。中央部には、にぶい黄褐色土の落ち込みが僅かに確認されたが遺構か否かは不明として保留したい。

この試掘地点の北端からは、新大和川付け替え工事以降の築造と解される耕作用井戸を検出した。1.55m×1.35m×深さ2.9mを計測し、ほぼ垂直な掘方からは明青灰色土、明黄褐色砂質土、明緑灰色砂質土がブロックで上面を埋めつくしており下層に至っては明緑灰色粘質土、緑灰色粘質土という水平層によって埋土を構成する。この井戸を開孔した地山の変化を上層から追ってみると明黄褐色粘質土、黄灰色粘質土、緑灰色粘質土（砂質ぽい）、黒褐色土と湧水層としての緑灰色砂質土（礫混り）が層位を成す。この井戸が比較的浅いのは、おそらく微高地で、かつ、旧河道上に位置していることに起因する。

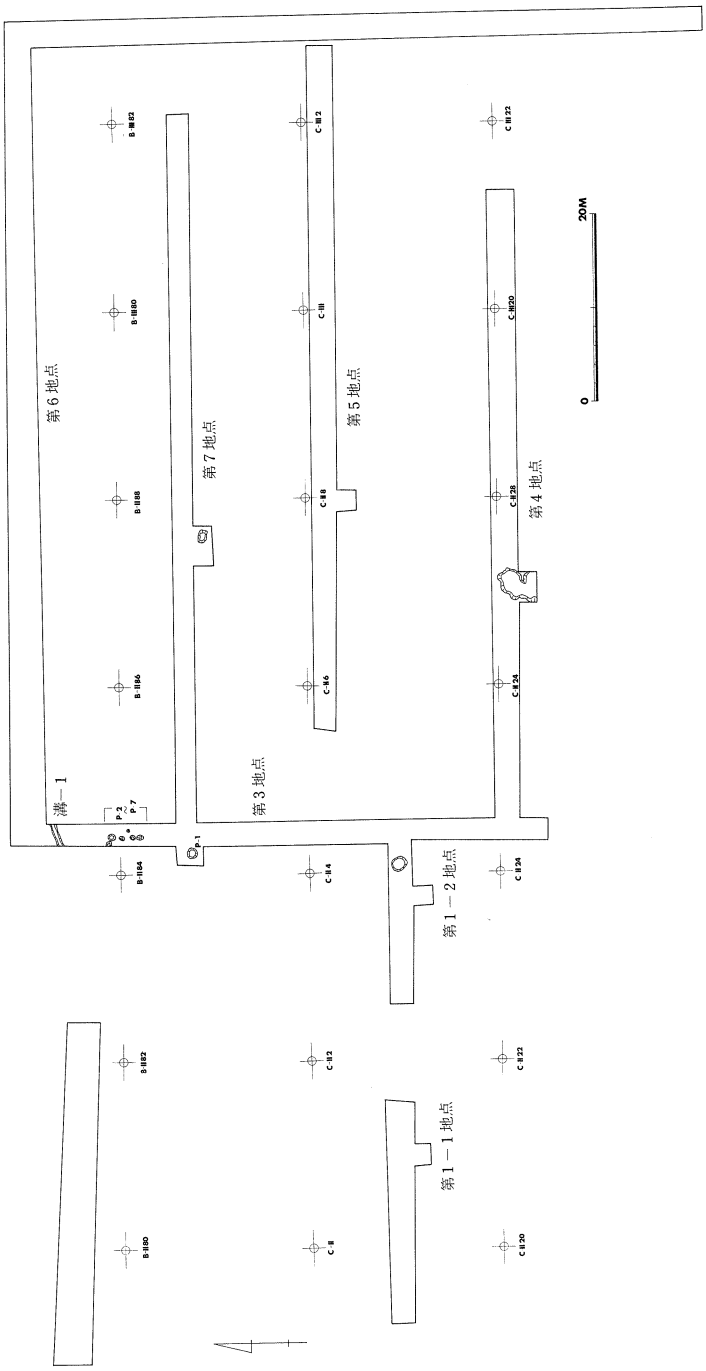
遺物としては、2×2mの拡張部における黒褐色粘質土中より土師器、須恵器片を採集したものの実測化出来る土器片は見当らなかった。

第2トレンチ

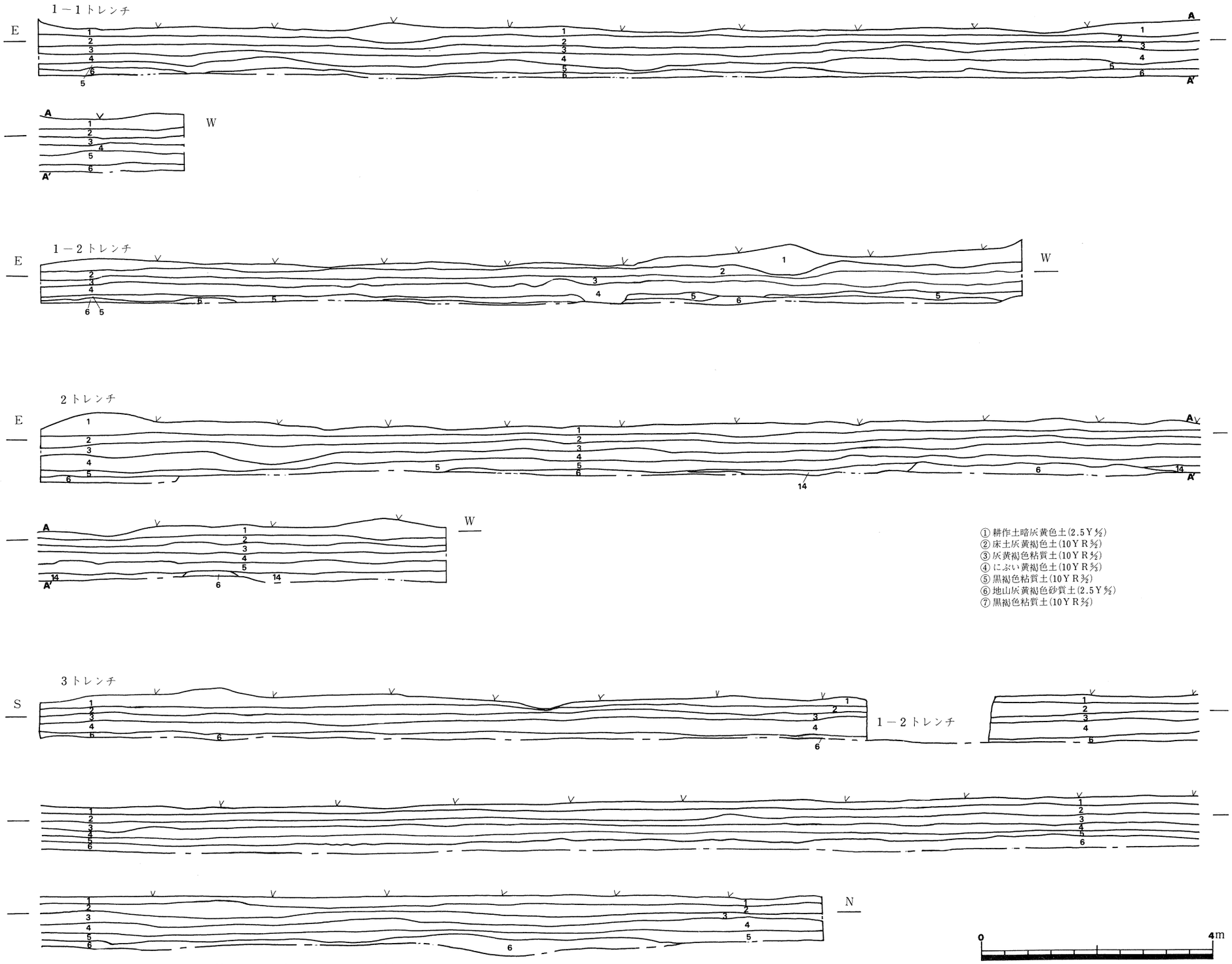
試掘調査区の北西ブロックに位置しており基本層序は、第1—1調査区に類似している。各々5層共に、厚さは同じでベルト状の水平層を成すが地山の大きな凹みがみられる。その凹みには、黒褐色粘質土（10YR2/2）が流れ込んでいたがこれまた遺構としてピックアップするには難点を有する。当トレンチ調査中では、遺構は検出されず、又、包含層でも遺物は殆ど見当らない。

第3トレンチ

第1—2トレンチの交点より南側にあっては、第1〜4層のみで第5層はない。特に第4層（にぶい黄褐色土）が分厚い北半分では、地山上に第5層（黒褐色粘質土）が0.2mの序位を成し

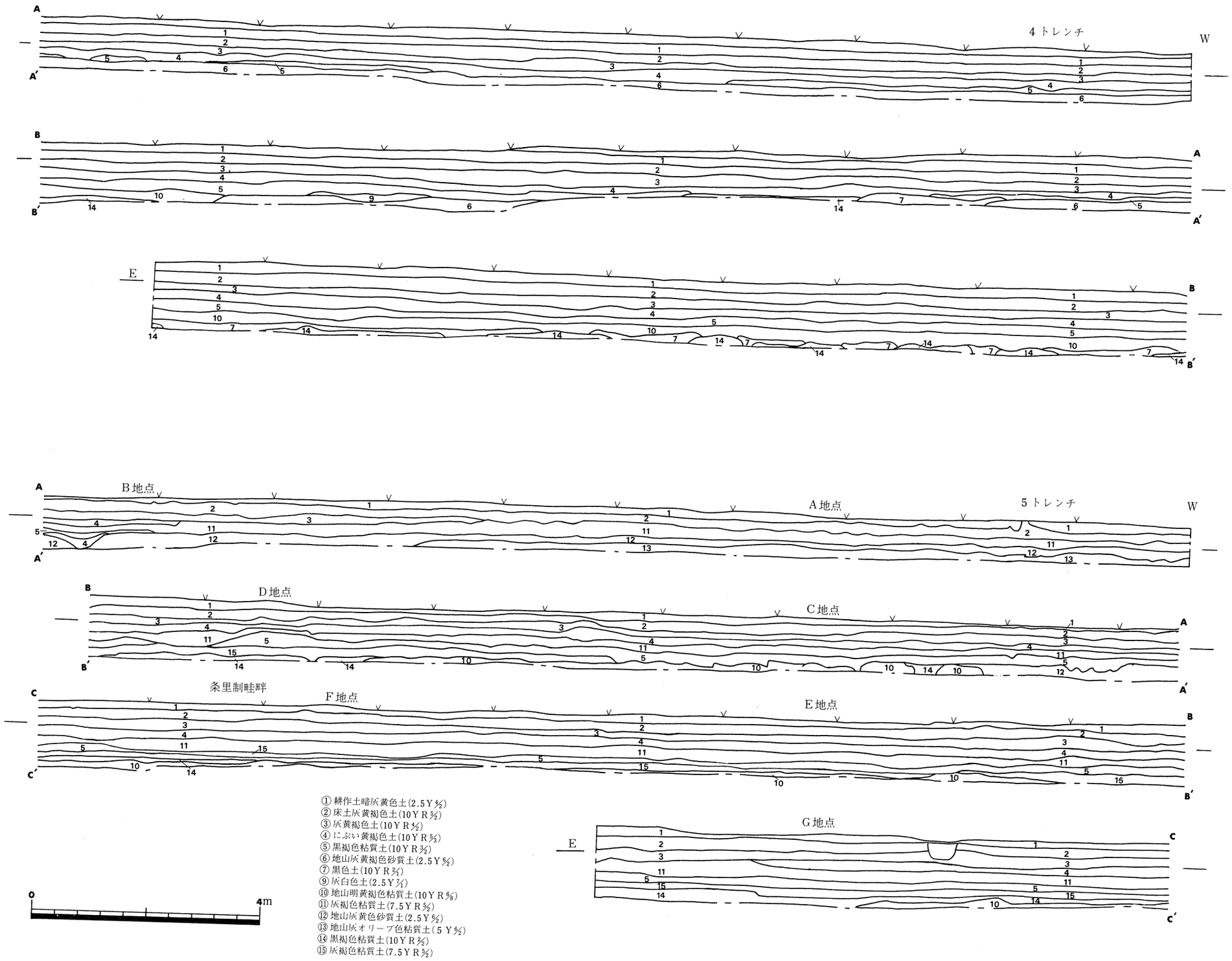


第74図　第５・６地区試掘調査地点



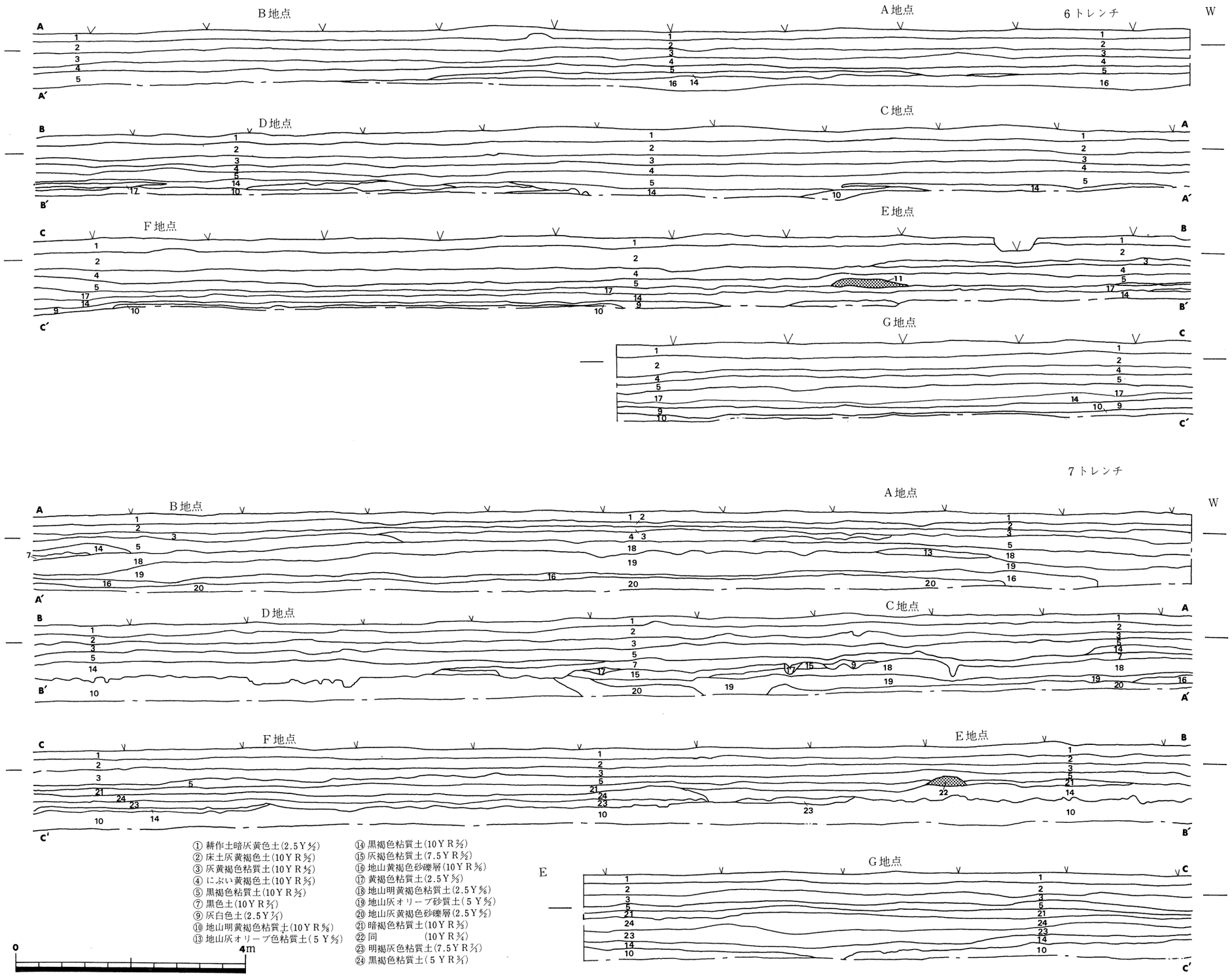
① 耕作土暗灰黄色土(2.5Y 5/2)
② 床土灰黄褐色土(10YR 5/2)
③ 灰黄褐色粘質土(10YR 5/2)
④ にぶい黄褐色土(10YR 5/3)
⑤ 黒褐色粘質土(10YR 3/2)
⑥ 地山灰黄褐色砂質土(2.5Y 5/2)
⑦ 黒褐色粘質土(10YR 3/2)

第75図　試掘トレンチ土層断面図



① 耕作土暗灰黄色土(2.5Y 4/2)
② 床土灰黄褐色土(10YR 5/2)
③ 灰黄褐色土(10YR 4/2)
④ にぶい黄褐色土(10YR 5/4)
⑤ 黒褐色粘質土(10YR 3/4)
⑥ 地山灰黄褐色砂質土(2.5Y 6/2)
⑦ 黒色土(10YR 3/1)
⑨ 灰白色土(2.5Y 7/1)
⑩ 地山明黄褐色粘質土(10YR 6/8)
⑪ 灰褐色粘質土(7.5YR 5/2)
⑫ 地山灰黄色砂質土(2.5Y 6/2)
⑬ 地山灰オリーブ色粘質土(5Y 5/2)
⑭ 黒褐色粘質土(10YR 3/2)
⑮ 灰褐色粘質土(7.5YR 5/2)

第76図　試掘トレンチ土層断面図



第77図　試掘トレンチ土層断面図

てしたことから保存状態の良好な遺構の検出が予測される。現に、このトレンチ、北端では、7ヶ所の不明土坑（pit）と溝1ヶ所を確認している。

井戸

径0.95×1.0×深さ1.1mの井戸とおぼしき遺構で層位的には、第1・2・4・5層に大別出来てブロックとして第3層の流れ込みが知られた。出土遺物としては、上層からは須恵器片を、下層からは古式土師器片を数点見つけた。完掘後、直ちに湧水が認められ井戸としての機能は十分果し得るものと確信した。それには、掘り込まれた地山の最下層が砂礫層に至っているからである。尚、蛇足になるが第3層は、井戸のくみ上げ付近をデュレーションしたものではない。上辺は、O.P.9.407mを測る。

掘立柱建物

P－1

南北に縦長な遺構は、0.56×0.23×深さ0.08mを計測し浅い。埋土は、灰褐色粘質土(7.5YR4/2）の単一層である。上辺は、O.P.10.463m。

P－2

0.32×0.30×深さ0.05mと小さく浅い不定円形のピットである。この遺構も東西にわかれてさらに深い部分がある。埋土は、単一で灰褐色粘質土（7.5YR4/2）

P－3

埋土としては、P－3と同様で不定円形を呈する。0.18×0.13×深さ0.04mとこれも極めて浅いし、又、2ヶ所に凹みが見られる。

P－4

西側に最深部をもつこのピットは、0.47×0.35×0.06mの不定円形を形成し埋土として、灰褐色粘質土（灰褐色砂質土、10YR3/2が混入する）が入る。

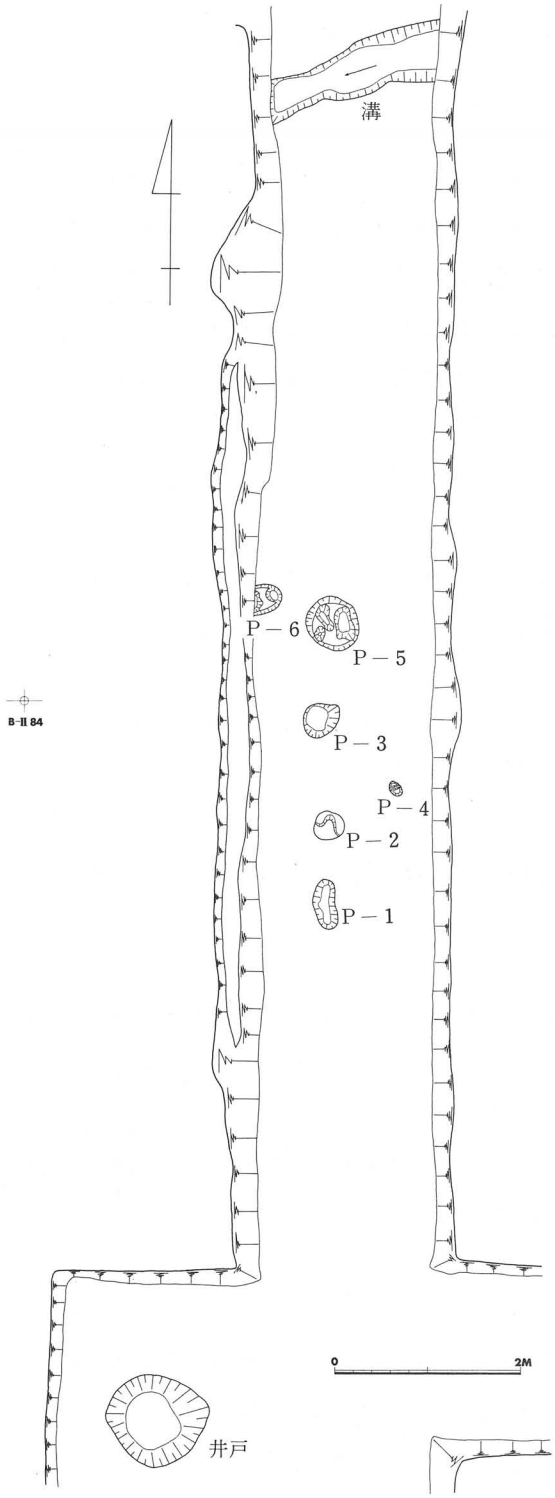
P－5

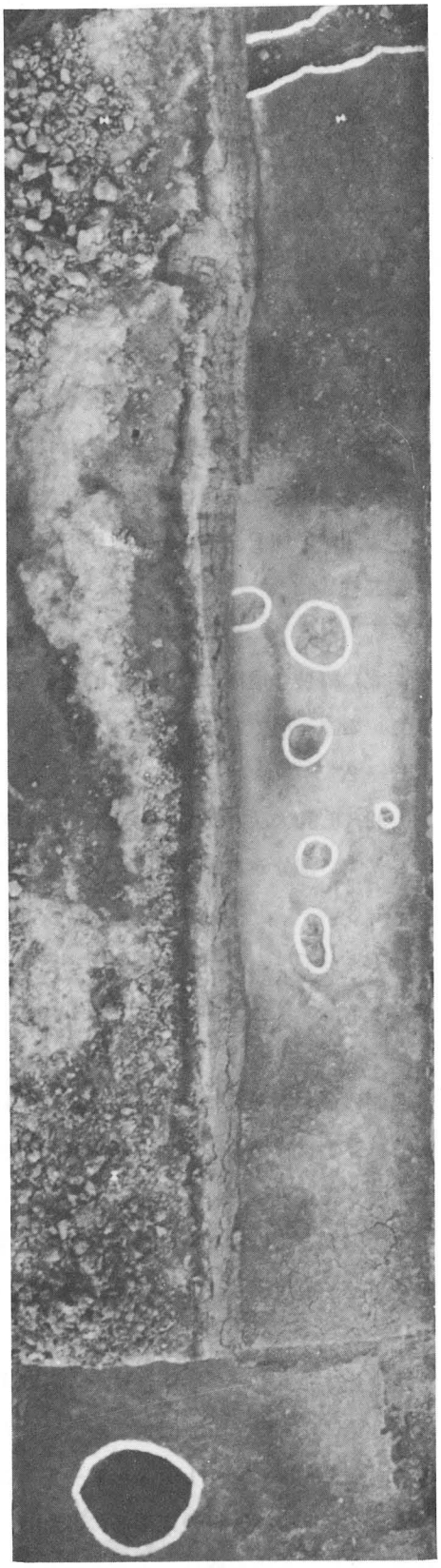
ほぼ円形なこのピットは、三ヶ所に最深部を有して灰褐色粘質土（7.5YR4/2)の埋土をもつ。このピットの規模は、0.6×0.55×0.05mを計測する。

P－6

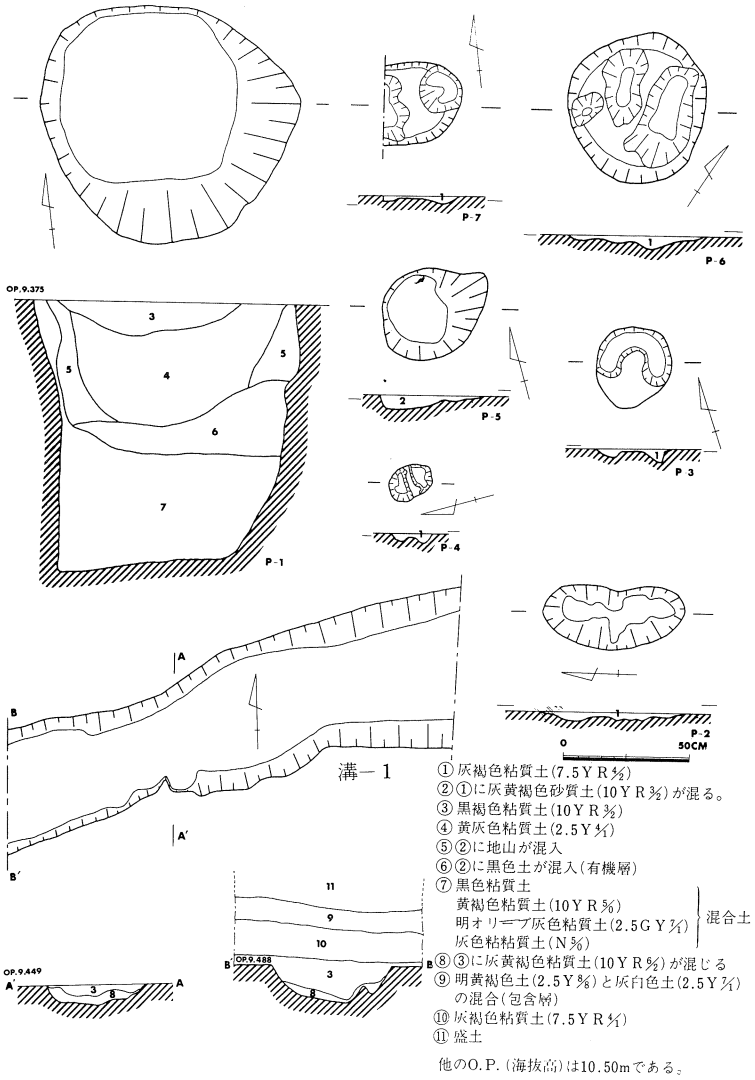
西半分は、トレンチの西壁にかかって不明だが判明している部分に3ヶ所の凹みが存在した。埋土は、他のピット群と同様に観察された。規模は、0.33×0.30以上×0.04mを計測する。

P－2～5は、P－1・2とP－4・5が0.9～1.0mとほぼ等間隔に配列して一列を成している事から掘立柱建物の東端部にあたる。尚、P－4は、棟持柱とも考えられる位置で検出される。各ピットの形態は、不ぞろいだがピット底にほぼ同一高であった。使用時期は、埋土遺物から規測して中世として、今後の本格的な発掘調査に期待したい。





第78図　第３トレンチ遺構配置図・垂直写真



第79図　第3トレンチ各遺構図

溝－1

東から西南に向って流れていたと思われる溝で幅員0.35～0.64m ×深さ0.17m 位いと比較的浅いが埋土は従来の発掘調査によって検出されたと同一の黒褐色粘質土（10YR3/2）であった。又、U字形の断面中からは、須恵器片を検出している。

出土遺物

不定形刃器

両面に各々逆方向に剝離させた横長剝片の大剝離面を残存させた素材の側辺を刃縁に利用し

たものである。刃縁は素材のうすくなった側辺（から未端にかけて）に細かな剝離調整を部分的にほどすのみである。頂部はやや厚みを残すが両側面にはネガティブな剝離面を残しており、つまみとして有効である。全体に磨滅が著しく、剝離痕の稜線、刃縁に鋭さはみられない。

第4トレンチ

西側は、地山である灰黄褐色砂質土上に耕作土、床土、灰黄褐色土、にぶい黄褐色土の4層が水平層を成している。古墳時代の包含層（第5層）は、地山上に0.1～0.2の厚みでレンズ状に堆積する。中央では、東寄りに地山が降下し前者の基準層に第5層（やや粘質土）が加わる。地山の質もその降下部において砂質土から黄褐色粘質土に変化する。段下に一部、灰白色土のレンズ状堆積がみられる。東側に至っては、第1・2・3・4・5・10層がベルト状に堆積しており下層の黒色土と黒褐色粘質土は凸凹が顕著である。この付近のO.P.は、9.20m程度である。試掘調査区の南端に位置するこのトレンチには、微高地東縁付近において不整形土坑を検出した。埋土は、黒色土と黄褐色砂質土の2層に限定される。細片ではあるが出土遺物として須恵器、土師器片が知られその時期を6世紀中頃に比定されよう。尚、第4層より上層は、古墳時代～中世期に至る幅広い混在が見受られた。中でも、第4層は瓦器の採集が多い。

前述の不明土坑は、後の発掘調査によって、SK—24と名付けられた。

第5トレンチ

A地点は、耕作土・床土・灰褐色粘質土の3層がベルト状堆積しており地山の灰黄色砂質土まで僅かに地表から0.5m前後であった。

B地点は、A地点の基本層位に追加して第3・4・5層が層序を成しはじめ第12・13層から構成された微高地は東に向って傾斜しはじめる。遺構らしき落ち込みもこの付近より西側に限定される状況にある。

C地点は、前者の層位が明確に水平層を築くが地山上面での隆起が目立って多くなる。

D地点においては、第1・2・3・4・5・11・15層の7層が細かくベルト状に堆積し地表から地山まで約1.0mを計測するようになる。地山の性質もこの付近では、明らかに明黄褐色粘質土に変化し排水能力の最悪さを思いしらされた。又、この部分には、条里制遺構(畦畔)を断面観察の結果、顕著に図化出来た。詳細な事実関係は、後述することにしたい。

E地点では、基本的な7層には変化は認められないが第11・5・15層に多少の波状的な堆積が目につく。粘質土の地山は、一部に第15層を切断さえ行っている。

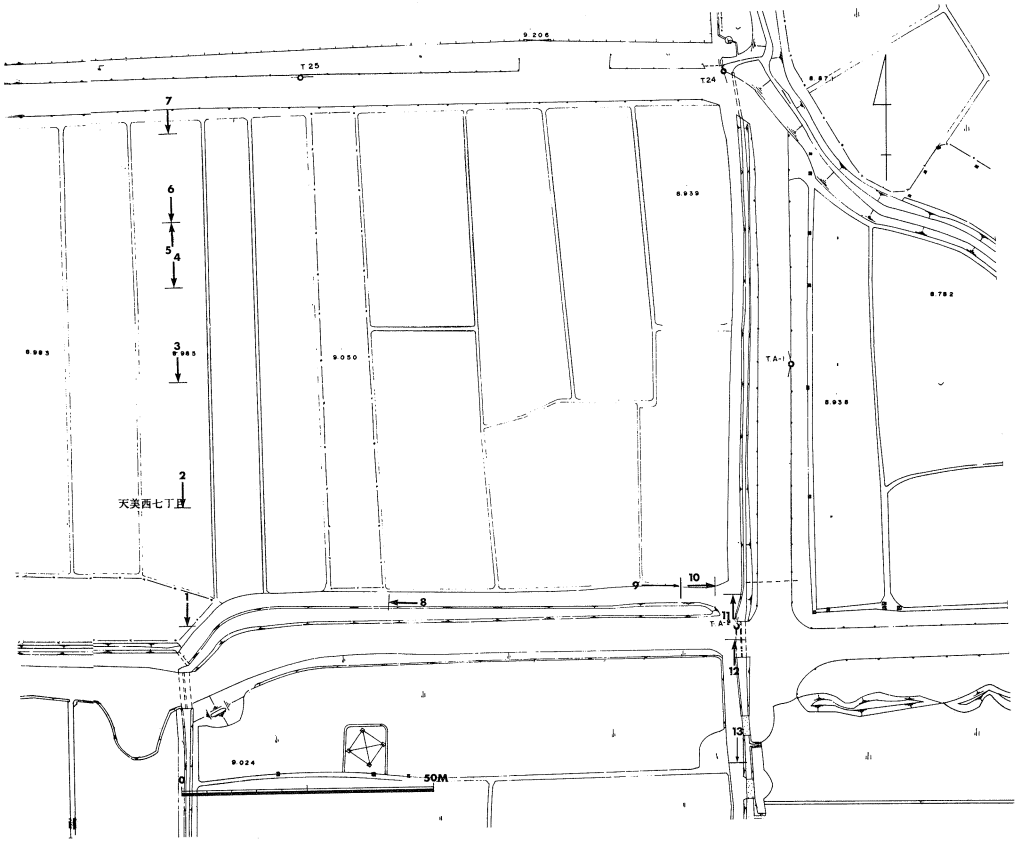
F地点は、西から継続してきた7層に加えて、第14層(黒褐色粘質土)の水平層としての堆積が目に止まり、地山の東側への低下がこの場所から増加し始める。

G地点では、一部に小攪乱が知られるが土層観察に支障はない。第4層が東端で消滅しその代りに第14層が第15層との入り込みがあるものの安定した層序となる。又、地山の大きな隆起が前者の地点を稜駕する。

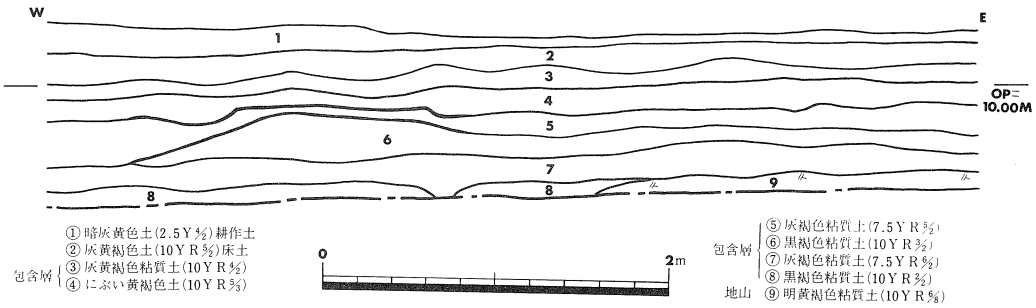
第6トレンチ

北端に走る東西トレンチで幅2mで設定した。E地点付近に浅い攪乱が見られるのみである。A地点は、黄褐色砂礫層（地山）上に耕作土、床土、中世における堆積と堆測される灰黄褐色粘質土・にぶい黄褐色土の2層と古墳時代の黒褐色粘質土の5層がほぼ同一な厚みで層位を形成していた。一部、第14層がレンズ状に地山の窪地に顔を出す。

B地点に至っては、前者の5層が基本層位として図示されているのは明白であるが第4層の厚みが他の層序に比較して薄い。AとB地点の中間において、黄褐色砂礫層（地山）から明黄褐色粘質土（地山）に変化すると同じに緩やかな段を有し、その段沿いには黒褐色粘質土のレンズ状堆積が知られた。又、段部分を境いに第5層にも変化が生じている。それは両側、微高地の砂質ぎみから粘質ぎみであるがこれはどうも下層の地山が要因していよう。さらに、土層



第80図　条里制遺構確認地点図



第81図　第5試掘地点土層断面図(条里制畦畔)

精査の折、地山に掘り込まれた柱穴らしきピットを検出している事から第16層を基盤とした地山の微高地にのみ限定して建物・溝が検出されるものと考えてよい。

C地点は、B地点と上層については大差はないが地山直上に見られた薄い黒褐色粘質土に粘質ぽさが増加している。

D地点での変化といえば第14層の複雑かつレンズ状に堆積し入り込みと第17層・黄褐色粘質土が層序しはじめた事と第10層と呼ばれる地山の隆起がはげしさが加わってきた。

E地点では、第3層が極めて薄くなり条里制畦畔上層において消滅し、第14・17層が帯状堆積として見受られるようになる。この地点では、平面としては確認されなかったが土層観察によって条里制遺構（畦畔）を認知した。尚、地表から地山上面までの深さは、1.15m を計測する。

F地点は、前地点に続いて第1・2・4・5・17・14・9層の7層が帯状の基本層位としてはめ込みがききそうである。下層の4層は、上層の3層に比して堆積が薄い。地山上面の海抜高は、O.P.9.04.0m を測った。

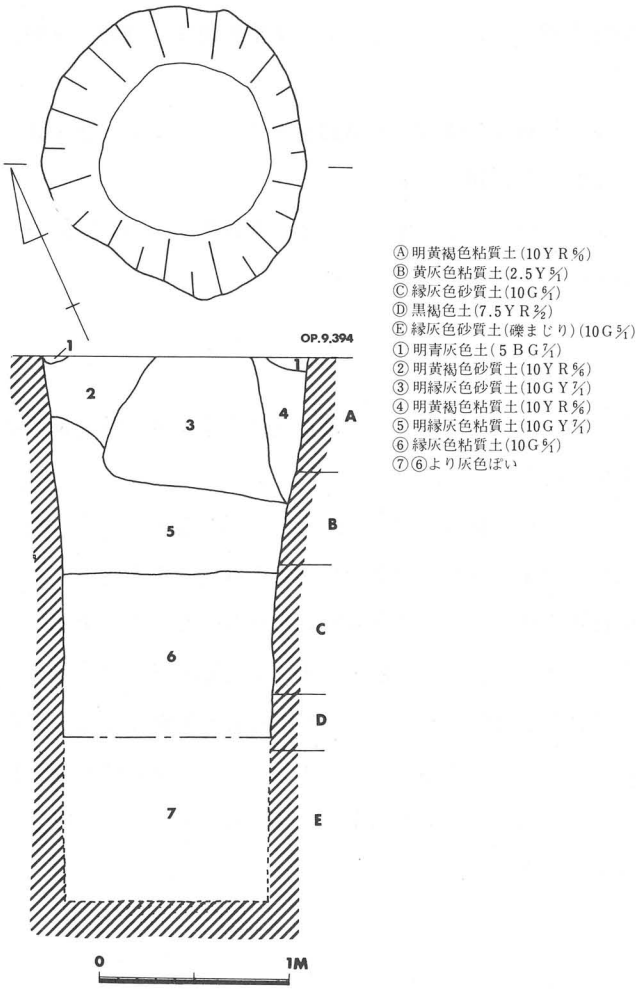
G地点は、F地点によって形成した水平層の7層が安定性を示し地表から1.20m 下に地山上面を見た。尚、トレンチ西端の微高地とは、0.4m の差を有し湧水もしみ出して低地の感は否めない。

第7トレンチ

第5・6トレンチの中間地点を設定したトレンチで古墳時代の遺構をのせる微高地がいかなる地山構成から成り立っかを知り得た。

A地点は、中世の形成層序の第1～3層は薄い水平層で0.3 m 近い古墳時代の包含層がこの地点より東側で第4層によって切断される。地山は、上層を除けば砂質土・砂礫層で排水能力

第82図　第６試掘地点土層断面図(条里制畦畔)



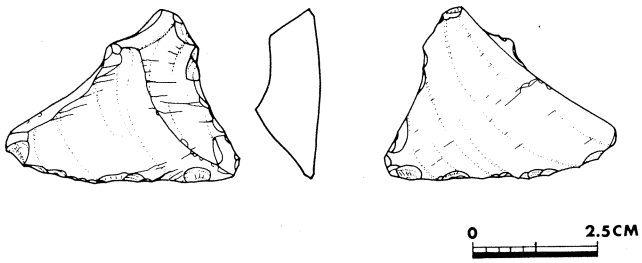
第83図　第１―２トレンチ耕作用井戸

は十分で微高地での遺構検出に期待される。地山上面は、O.P.9.60～9.80m を計測した。

Ｂ地点からは、第５・７・14層が水平層として堆積し始めると同時に地山の傾斜が目立つ。

Ｃ地点では、第１・２・３・５・７層がベルト状に堆積し第14層がレンズ状に顔を出す。特にこの付近には、小落ち込みの埋土が知られた。

Ｄ地点での特長は、第１・２・３・５・14層から成る水平層が安定し始めるのと地山の粘質土に見受けられる小さなコブ状隆起が顕著である。尚、第７層がＣ



第84図　第３トレンチ出土石製品

Ｄの中間に於いて消滅した。

このあたりから第21層が帯状に層位を成しはじめる。そして、条里制遺構（畦畔）を明白に観察した。

Ｆ地点は、前者の中間地点からベルト状層位を構成した第23層を含めて、第１・２・３・５・21・24・23・14層の８層からなる比較的薄い層序である。

東端㋐Ｇ地点は、前者の基本層位を引き継ぐ。この地点での地山の海抜高は、O.P.9.35位いで微高地の西側とは約0.5ｍの差が生じている。

条里制遺構（畦畔）

旧状図では、周辺に遺存していた畦畔が消滅していたので築造当時の条里制畦畔を推し測る目的で十分な精査の末、特に次の結果を得た。

第５トレンチでは、灰褐色粘質土上に黒褐色粘質土を削り出して上辺幅0.9を計測し畦の両側に溝と考える断面を見た。尚、上層の第４・11層に影響を与えその継続時期を暗示する。

第６トレンチでは、第17層上に第11層を盛り上げた下辺幅1.35×高さ0.25をなし東側では上層に多少の影響をもたらす。第７トレンチでは、黒褐色粘質土上に下辺幅0.75の半月型に削り出しており暗褐色粘質土とは酷似していた。畦畔の下辺高は、O.P.9.45～9.60である。考古学的にはＣ－Ⅱ－６～Ｃ－Ⅲ－２の北側のラインから存在した。復元された条里制畦畔は、Ｂ－Ⅱ－79からＣ－Ⅱ－９より東へ４～５ｍを南北ラインと出来る。条里制畦畔は、その成立した層位から判断して中世初頭前後に保留におきたい。

3．第4地区

第3地区の東方100ｍ地点に位置するＬ字形の10,000㎡に及ぶ発掘調査面積である。第5・6地区の試掘調査結果から西側微高地に対する低地部であることは推測されていたし、土地条件図からも氾濫源と続み取れた。旧地形に見られた条里制畦畔も顕著に認められた水田地帯であったが用地買収後において雑草の繁茂するところとなった。

(1) 層　　位

西壁

地山である明黄褐色粘質土に達する層位は、耕作土・床土・黄褐色土・褐色土・灰褐色粘質土・灰黄褐色粘質土の6層に細分出来た。これらの土層は、すべて多少の凸凹が生じているもののベルト層を成している。ところが、Ｂ地点では第4・5層の隆起がはげしい。又、Ｃ地点では、他の地点のように第6層に検出されると同時に、多少厚みの増した第5層以外はほぼ同一的な厚みをもつ。第6層はこのＤ地点で再度層位を形成するが全体的に薄い。

北壁―1

このセクションにおいては、耕作土・床土・黄褐色土・褐色土・灰褐色粘質土・灰黄褐色粘質土の水平層、そして、地山である。第5層は、層序の中で最も薄いが西にいくに従ってやや部厚くなる。西側半部では、地山に掘り込まれた不明土坑の埋土（黒褐色粘質土）が東側のそれに比して幅狭く、浅い。地山のO.P.高は、9.20mであった。

東壁―1

北側のＡ地点付近は、第1～7層までベルト層を構成し堆積高も類似しているが第5層だけがやや薄い気がする。地山の凹みがＡ地点より南側に見受けられその高低差が20㎝を越す場合がある。Ｂ地点では、第5層以下に多少ながら起伏が生じており、Ｃ地点に至っては第9層によって第7層は分断していた。これらの現象は、地山そのものの大きさ凸凹に要因している。

北壁―2

基本的層位は、耕作土(1)～灰黄褐色粘質土(6)に限定されるものの最近の工事によってＡ地点よりすぐ西側で削平・消滅しその代りに盛土が0.4～1.2mに及んでいる。各層ともＢ地点あたりまで起伏が著しい。Ｂ地点では、レンズ状の堆積としてＡ地点から進んできた第7層が消滅しはじめる。前述した各層の凸凹がこの付近に於いて最も顕著である。隆起の少くない安定した層位を成して地山の凸凹も見られない。ただし、Ｃ地点の両サイドには、第6層のレンズ状堆積を促す状況が見られる。従って、この付近の土層観察では、第7層は全くみられない。Ｄ地点になると各層位共に、希薄状態が増加し第7層のレンズ状堆積が図化される。

東壁－2

A地点には、耕作土(1)を掘り込んだ盛土（攪乱土）が認められる以外は良好な保存状態で耕作土も旧状を保めている。B地点では、上層から耕作土・床土・黄褐色土・褐色土が水平層として取り扱かわれるが第5層が分断されており第10層のレンズ状堆積が目立つ。C地点に一部であるが不明土坑の埋土と考えられる第7層が知られた。

D地点は、先の4層から成る基準層位に追加して第5層―灰褐色粘質土、第6層―灰黄褐色粘質土が存在する。水平な地山上面にのった層序は、南端のE地点になると各層位ともに薄くなる。これは、地山そのものの上昇に伴う事象であろう。

南壁－1

耕作土・床土・黄褐色土・褐色土・灰褐色粘質土の5層から成る基本層位を東端において確認された。この地点よりやや東寄にレンズ状の堆積として第6層が知られた。B地点では、耕作用井戸の埋土（第11・12・13層）の一部が顔を出していて床土より掘り込まれている。このあたりから灰黄褐色粘質土が帯状堆積として成しはじめた。Cにも、耕作用井戸の埋土（黄褐色粘質土）が露出しただけで下層は不明である。小さな隆起が多く土層観察されたD地点の現象は、左右4m位いである。

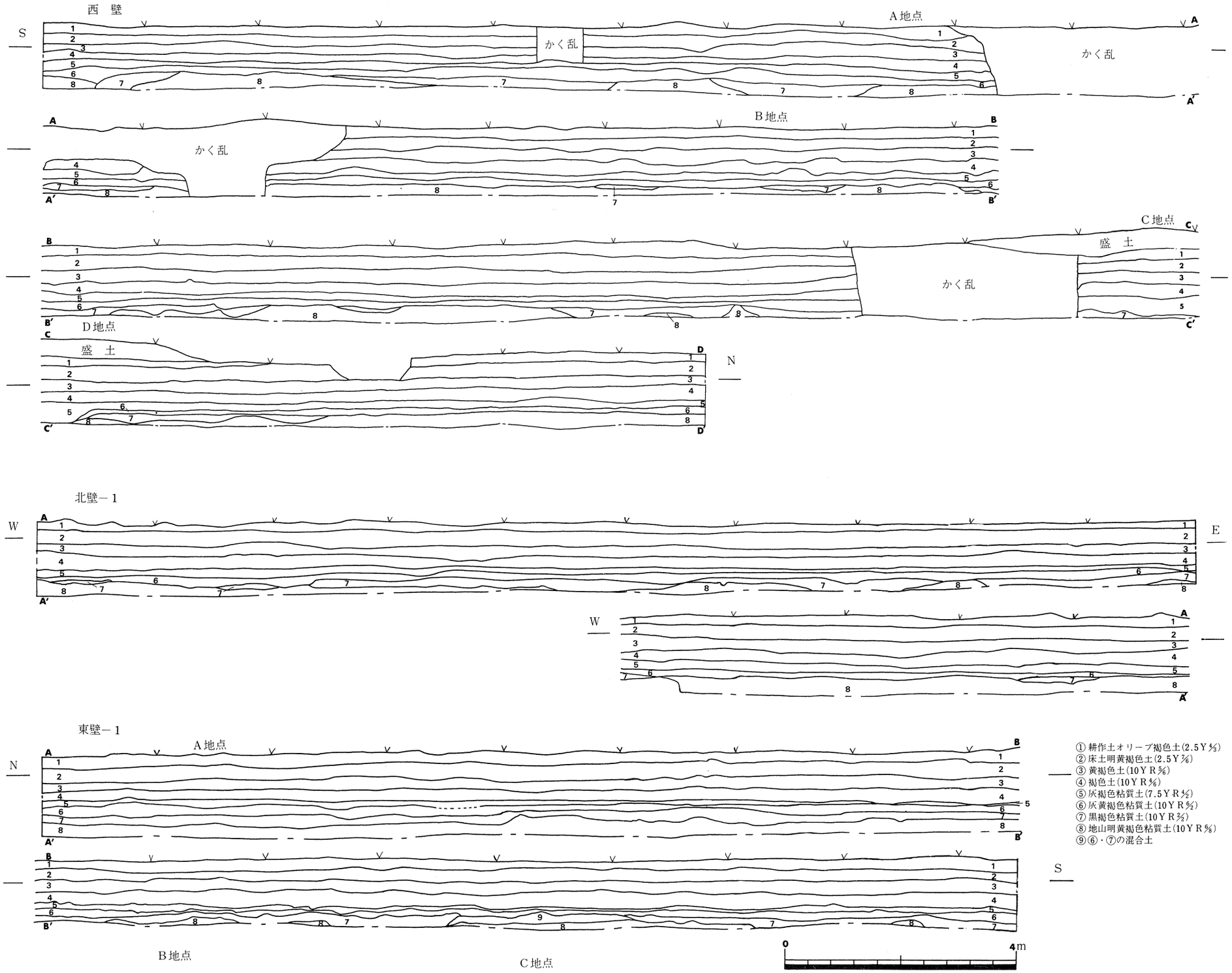
F地点では、安定した層序が左右に見られるが第1・3・5層は、第2・4層より薄い。又、この地点での特色は、第6層を掘り込んだ第5層の凹みがある。明黄褐色粘質土の地山が海抜高、O.P.9.60mに上昇したと同時に、第6層は消滅した。東側低地とは、0.2m前後の地山での降下があった。床土より掘り込まれた、H地点での耕作用井戸は、黄灰色土・明青灰色粘質土と第17層の埋土上層を確認した。これらの土層は、すべて水平層であった。

南壁－2

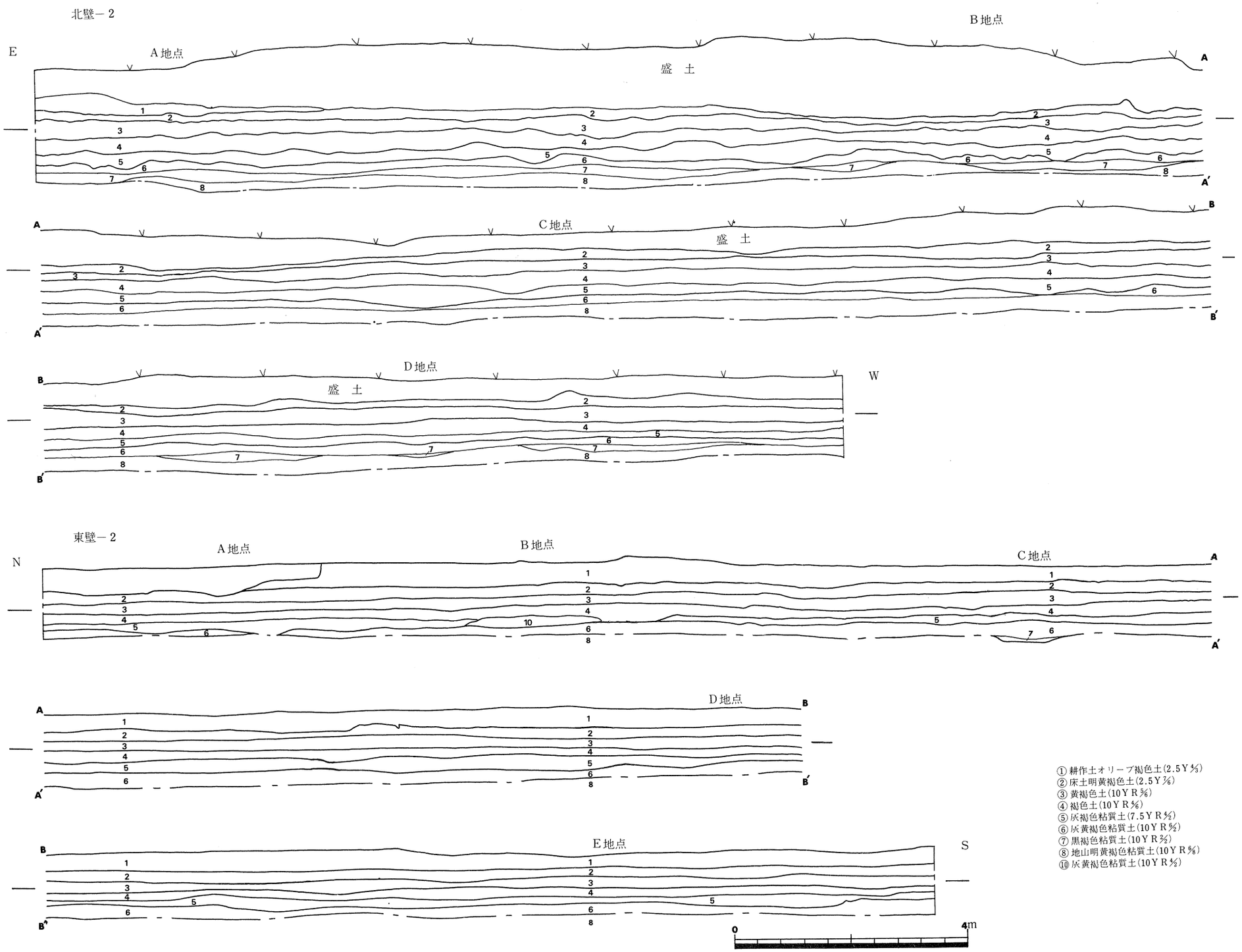
E部分においては、地山上に耕作土・床土・黄褐色土・褐色土・灰褐色粘質土・灰黄褐色粘質土の6層が基準層序として、レイアウトしたがとりわけ第5・6層は希薄であった。B地点の手前から第5・6層は、若干厚くなったものの他の層に比較してそれには及ばない。一部この付近を中心に地山の凹みが見られるが目立つたものではなくこのセクションに関してはほぼ水平面な地山を示す。

C地点では、西側に進むにつれて第3・4・5層の大きなピッチングが知られ、不明土坑の埋土が多く指摘されるようになる。尚、地山の最高地点は、O.P.9.60mの東端でその他の部分ではその数値より0.2m以上下がっていた。例の不明土坑の埋土である黒褐色粘質土は、特に地山の最深部に存在している状況である。

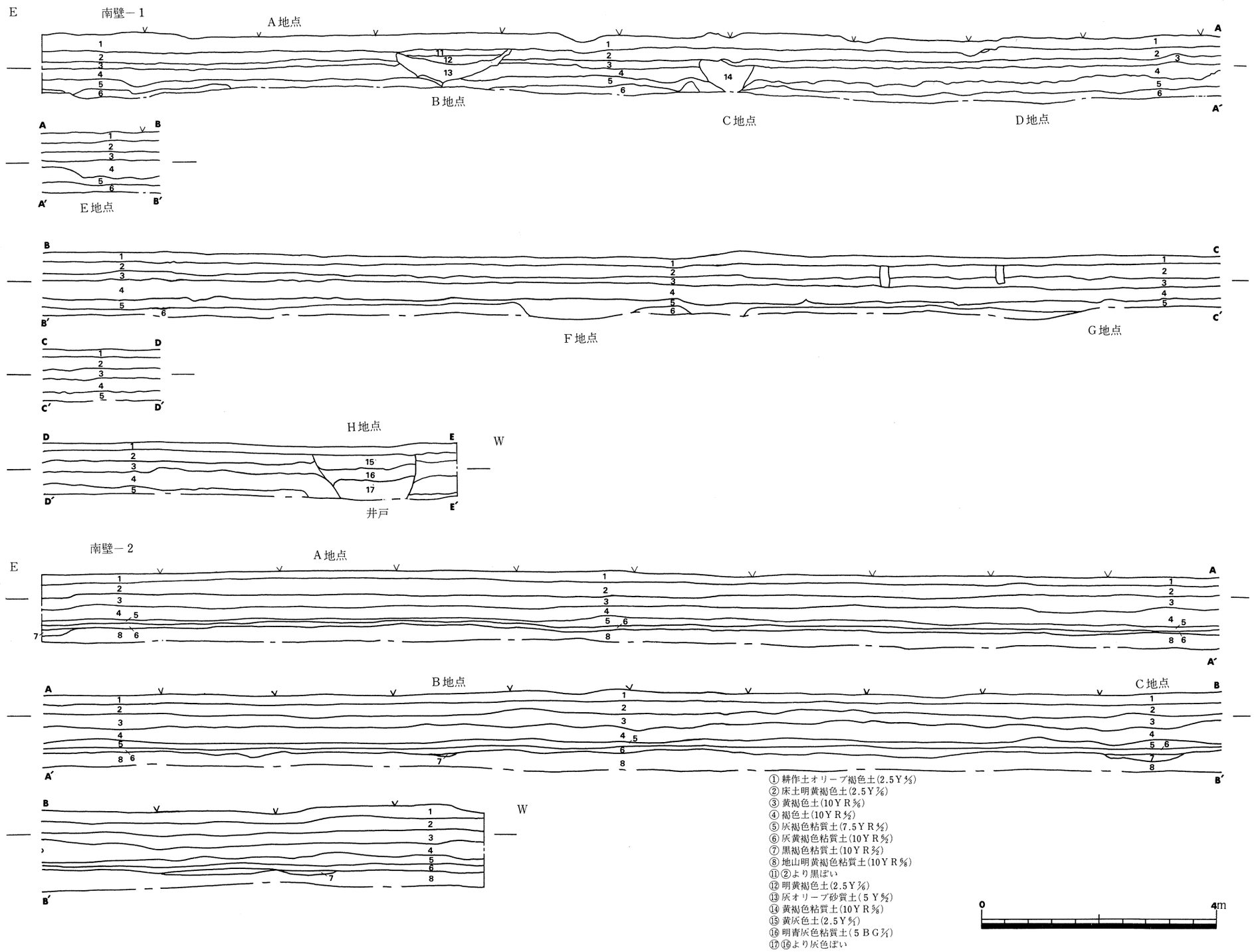
第85図　第４地区遺構配置図



第86図　西・北・東壁土層断面図



第87図　北・東壁土層断面図



第88図　南壁土層断面図

(2) 遺　　構

建物・溝等の明白な遺構は、確認出来なかったが6世紀代を中心とした水田址と推察される不明土坑200ヶ所を検出した。この遺構は、上層に耕作土・床土・黄褐色土・褐色土・灰褐色粘質土・灰黄褐色粘質土の6層によって保存されてきた。約20ヶ所の近世期の耕作用井戸は、大半が数mに及ぶ。中でも桶側井戸は、興味深いものである。さらに、発掘調査前に遺存した畦畔直下において奈良時代より継続したであろう中世の条里制畦畔を確認した。

不明土坑（落ち込み）

代表的な遺構について詳細に説明した後、若干、まとめてみたい。

不明土坑—5

長軸1.95m×短軸1.52m×深さ0.16mを測る不整円形で東西にやや尖出ぎみの平面を示す。東側はやや浅く西側に最深部を有する。埋土としては、黒色粘質土を主体に第2・3・5・7層が小さくブロックとして入り込む。底部は、凸凹がない。

不明土坑—16

一見して楕円形の平面を呈して長軸1.18m×短軸0.79m×深さ0.11mを計測した。「コ」字形の断面に第3層に黒色粘質土が流れ込む。底部は、平坦である。ただし、西側に尖頭ぎみの平面形を成す。

不明土坑—27

西側に一段下がった最深部を持っこの土坑は、ほぼ円形な上辺の平面を有する。底部は、南北軸の楕円形な平面上に第3層を中心にして第1層が流れ込む。尚、各々の傾斜は、比較的ゆるやかである。

不明土坑—17

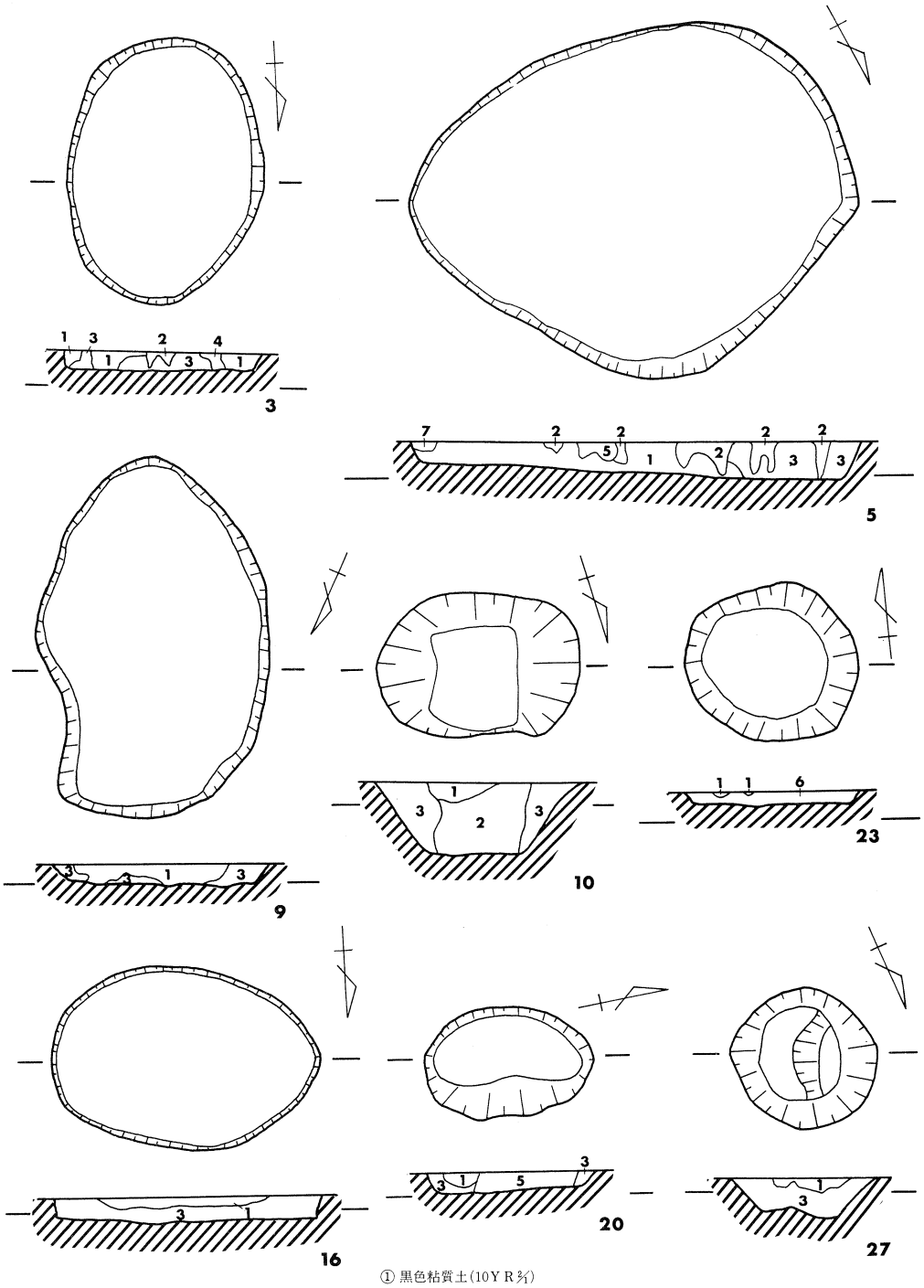
長軸約4.00m×短軸約1.9m×深さ0.2mを測るアメーバ状の平面である。フラットな底部上には、黒色粘質土を主体として第3層が僅かに入る。

不明土坑—149

「Y」字形に広がるアメーバ状平面形を成し埋土として黒色粘質土の下層で確認された。多少凸凹ぎみの底部からややゆるやかな傾斜に移行する。長軸1.35×短軸0.9×深さ0.11m

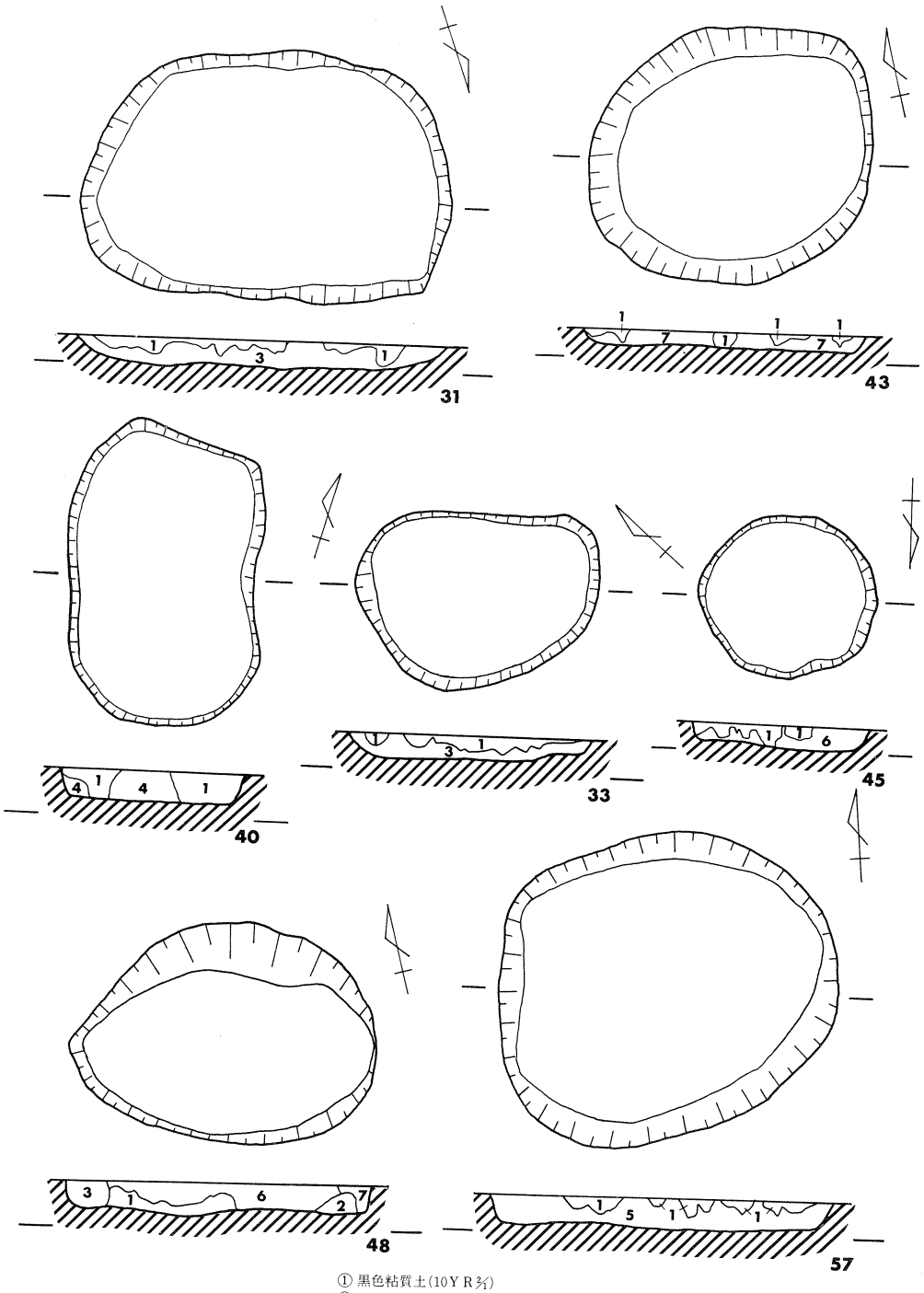
不明土坑—78

ほぼ円形な平面形内には、第6層のブロック状堆積を経た後、第5層が主に入り最後に第1層のブロックとして流れ込む。平滑な底部から上辺に向けて比較的ゆるやかな法面を形成する。長軸0.92m×短軸0.87m×深さ0.09mと浅い。



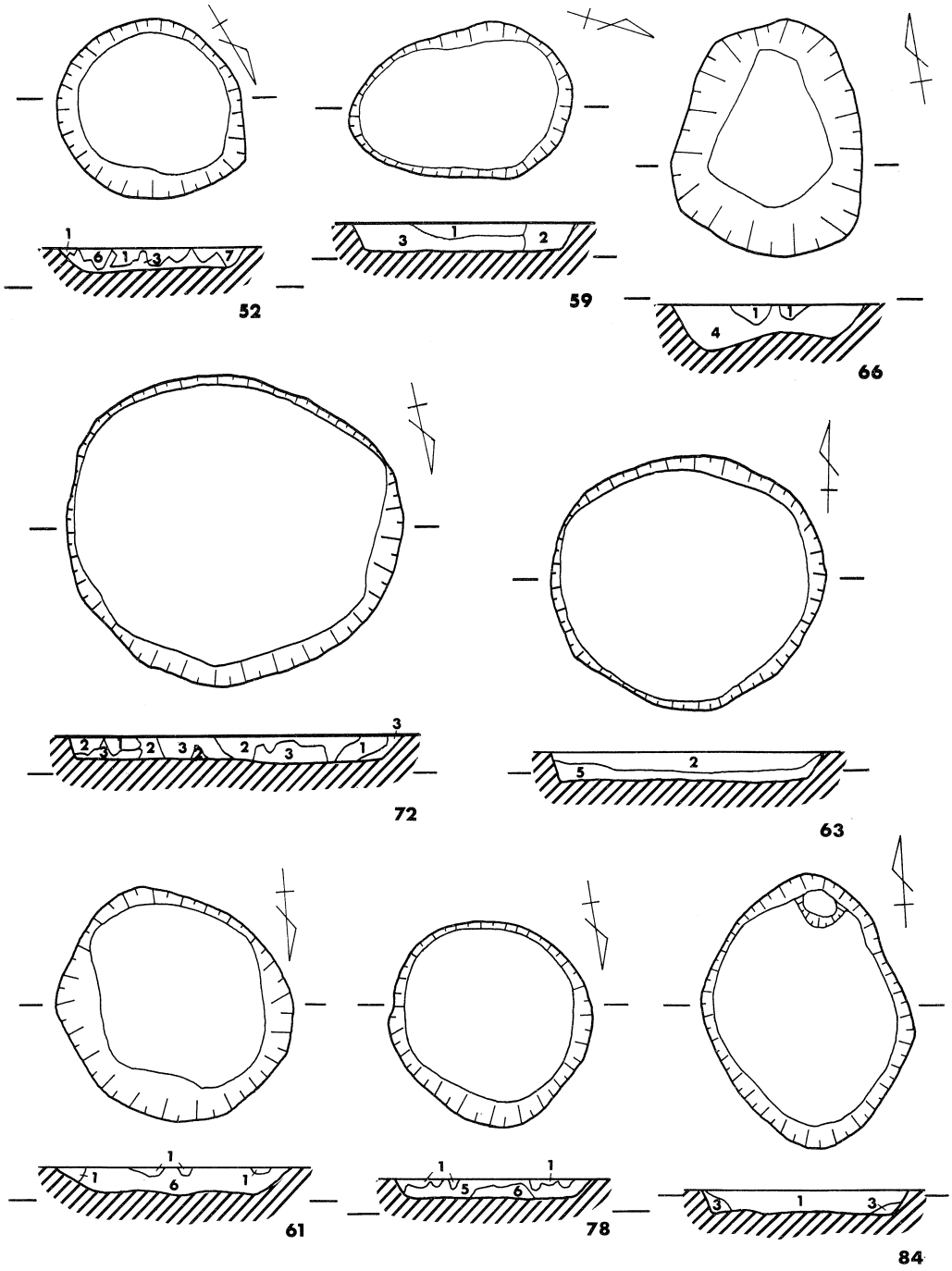
① 黒色粘質土(10YR 2/1)
② 灰白色土(2.5Y 7/1)
③ 黒色粘質土に地山(明黄褐色粘質土10YR 6/8)混入
④ 黒色粘質土と地山の混合土(5：5)
⑤ 灰白色土に地山混入
⑥ 灰白色土と地山の混合土(5：5)
⑦ 黒色粘質土に灰白色土混入

第89図　不明落ち込み遺構図



① 黒色粘質土(10YR 2/1)
② 灰白色土(2.5Y 7/1)
③ 黒色粘質土に地山(明黄褐色粘質土10YR 6/8)混入
④ 黒色粘質土と地山の混合土(5：5)
⑤ 灰白色土に地山混入
⑥ 灰白色土と地山の混合土(5：5)
⑦ 黒色粘質土に灰白色土混入

第90図　不明落ち込み遺構図



① 黒色粘質土(10YR2/1)
② 灰白色土(2.5Y7/1)
③ 黒色粘質土に地山(明黄褐色粘質土10YR6/8)混入
④ 黒色粘質土と地山の混合土(5：5)
⑤ 灰白色土に地山混入
⑥ 灰白色土と地山の混合土(5：5)
⑦ 黒色粘質土に灰白色土混入

第91図　不明落ち込み遺構図

不明土坑—175

卵形を呈し断面は、舟底型になっていた。第3層の流れ込みの後、黒色粘質土が充塡していた。南北に主軸を置き、長軸1.56m ×短軸1.18m ×深さ0.22m を計測する。

不明土坑—148

長軸1.16m ×短軸1.01m ×深さ0.15m の不整円形で法面は、緩やかに成つており、下層から第4、黒色粘質土・灰白色土の3層が埋土として確認された。

不明土坑—102

角度高い傾斜内には、小ブロックとして第3層が当初に入り後に、主流としての黒色粘質土が層位を構成せしめていた。長軸1.70m ×短軸0.82m ×深さ0.10m を測る楕円形の平面プランを形作っていた。この土坑の特長には、中央部に長軸0.38m ×短軸0.21m ×深さ0.16m の小土坑が掘り込まれていることにある。この小土坑の主軸は、大きい方の土坑のそれとは直交していた。

不明土坑—170

不明土坑—102の小土坑が中央部に存在したのに対してこの土坑は、西端に扁在していた。大土坑と伴に掘り込まれたことが第3層の入り込みが物語っており、後、これらの遺構の性格を示す黒色粘質土が層序をつくる。不整円形のこの土坑は、長軸1.28m ×短軸0.82m ×深さ（最深部）0.18m を計測する。又、底部は平らで、傾斜は外弯ぎみに掘り込まれていた。尚、小土坑も不整形で長軸0.33m ×短軸0.27m であった。

不明土坑—159

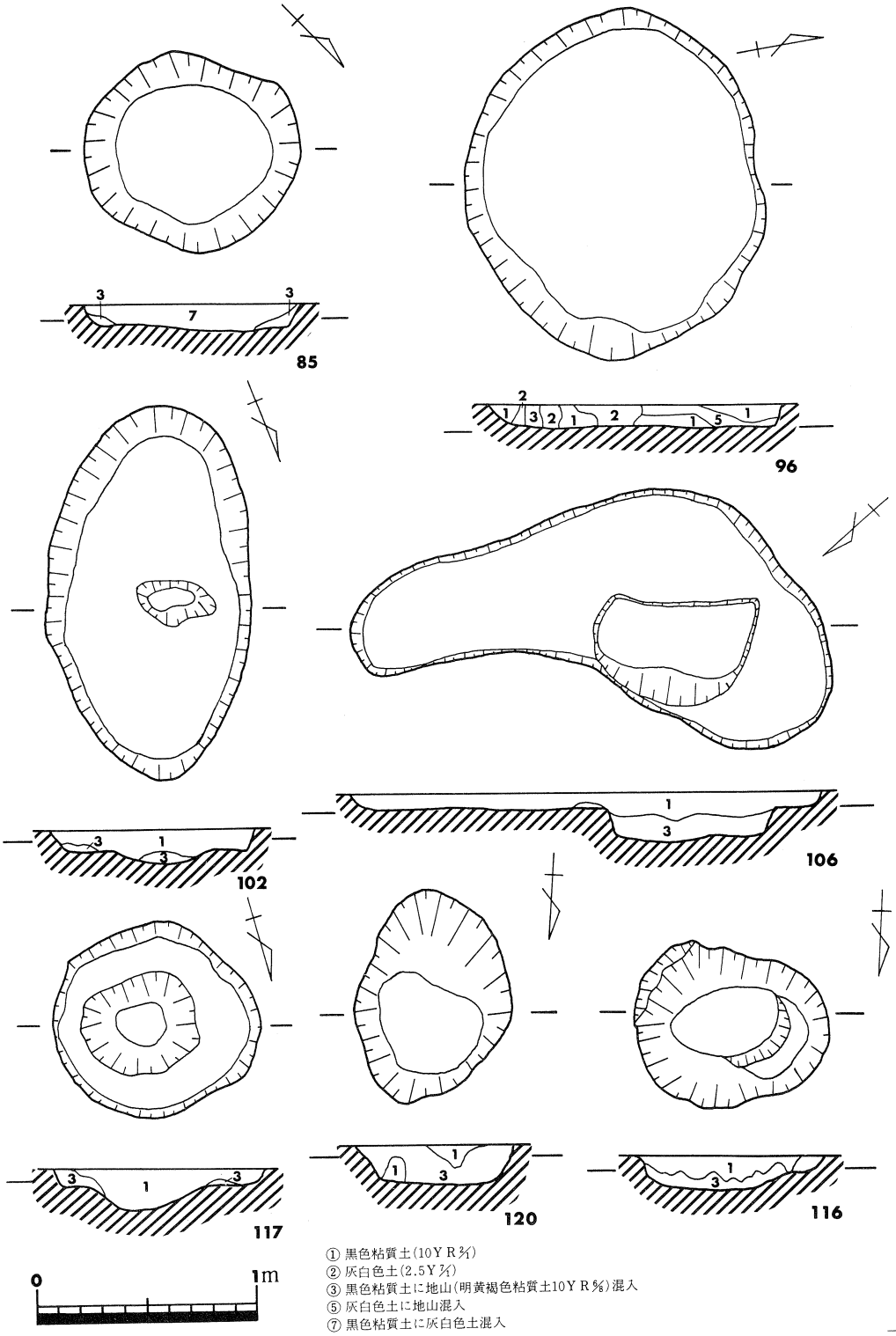
ほぼ円形土坑に、4ヶ所もの小土坑が見受けられ、内でも3ヶ所は三角形状に位置しそのほぼ中央に他の小坑がある。小土坑は、長軸0.18m ×短軸0.14m ×深さ（最深部）0.14m ～長軸0.49m ×短軸0.36m ×深さ0.16m とばらつきが生じていた。大きい方の土坑は、黒色粘質土と第4層の2層が水平層として認められ長軸1.36m ×短軸1.20m ×深さ0.10m を計測した。

不明土坑—43

この土坑の特徴は、極めて浅く0.06m にすぎないことにある。長軸1.33×短軸1.12m を測る土坑内には、第7層からなる中心層に上層にのみ見当る黒色粘質土のタッチ程度のブロック状堆積が知られた。底部には、ゆるやかなピッチが存在するもののさほど目立たない。平面形は、不整円形を呈する。

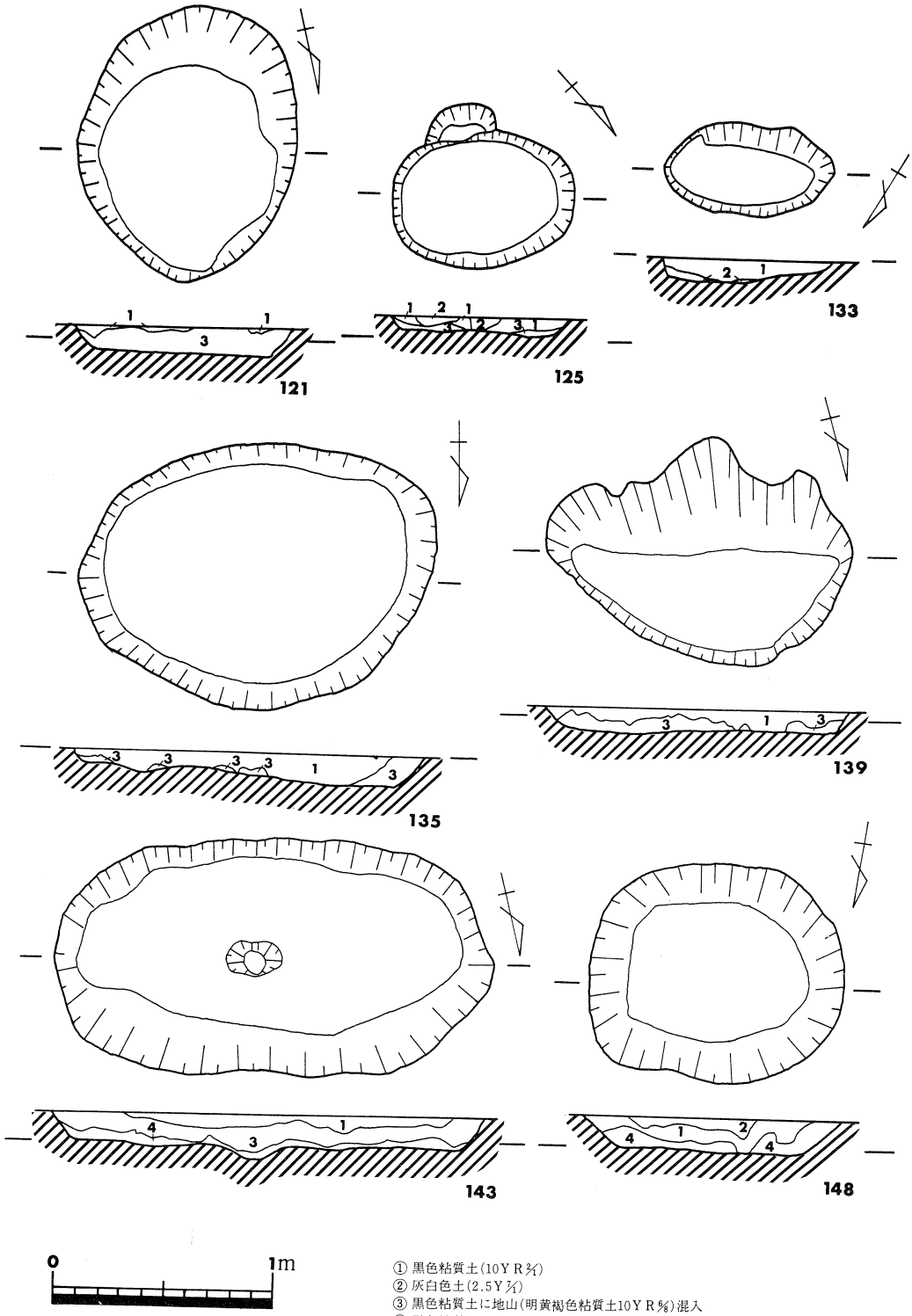
不明土坑—120

南北に主軸をおく長軸0.99m ×短軸0.68m ×深さ0.18m の不整円形を呈する。三方に比して南側の傾斜は、特に緩やかになっていた。埋土として、第3層に2ヶ所の小さな黒色粘質土のブロックが入る。底部は、平坦で地山と埋土との切り離しが顕著であった。



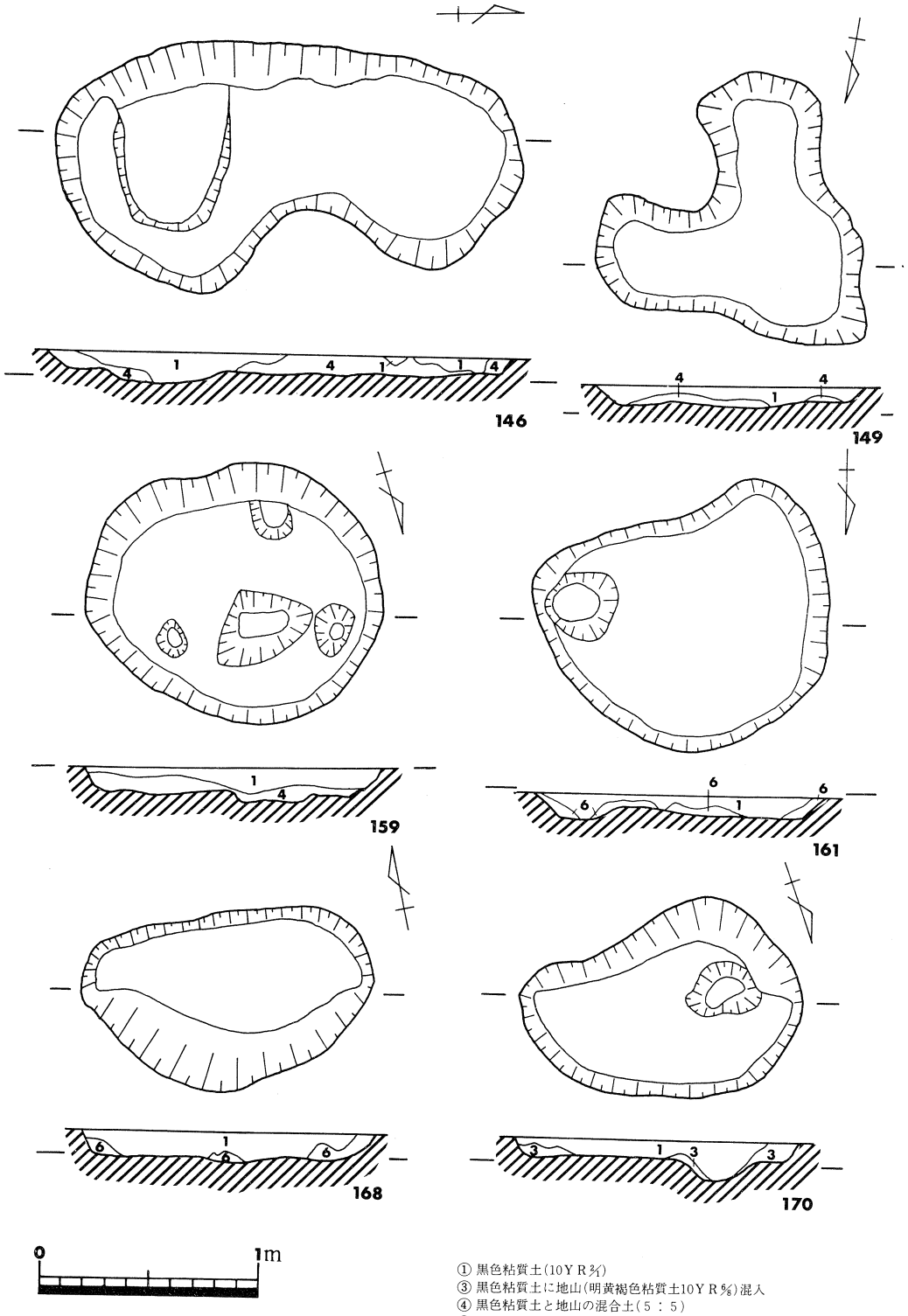
① 黒色粘質土(10YR 2/1)
② 灰白色土(2.5Y 7/1)
③ 黒色粘質土に地山(明黄褐色粘質土10YR 6/8)混入
⑤ 灰白色土に地山混入
⑦ 黒色粘質土に灰白色土混入

第92図　不明落ち込み遺構図



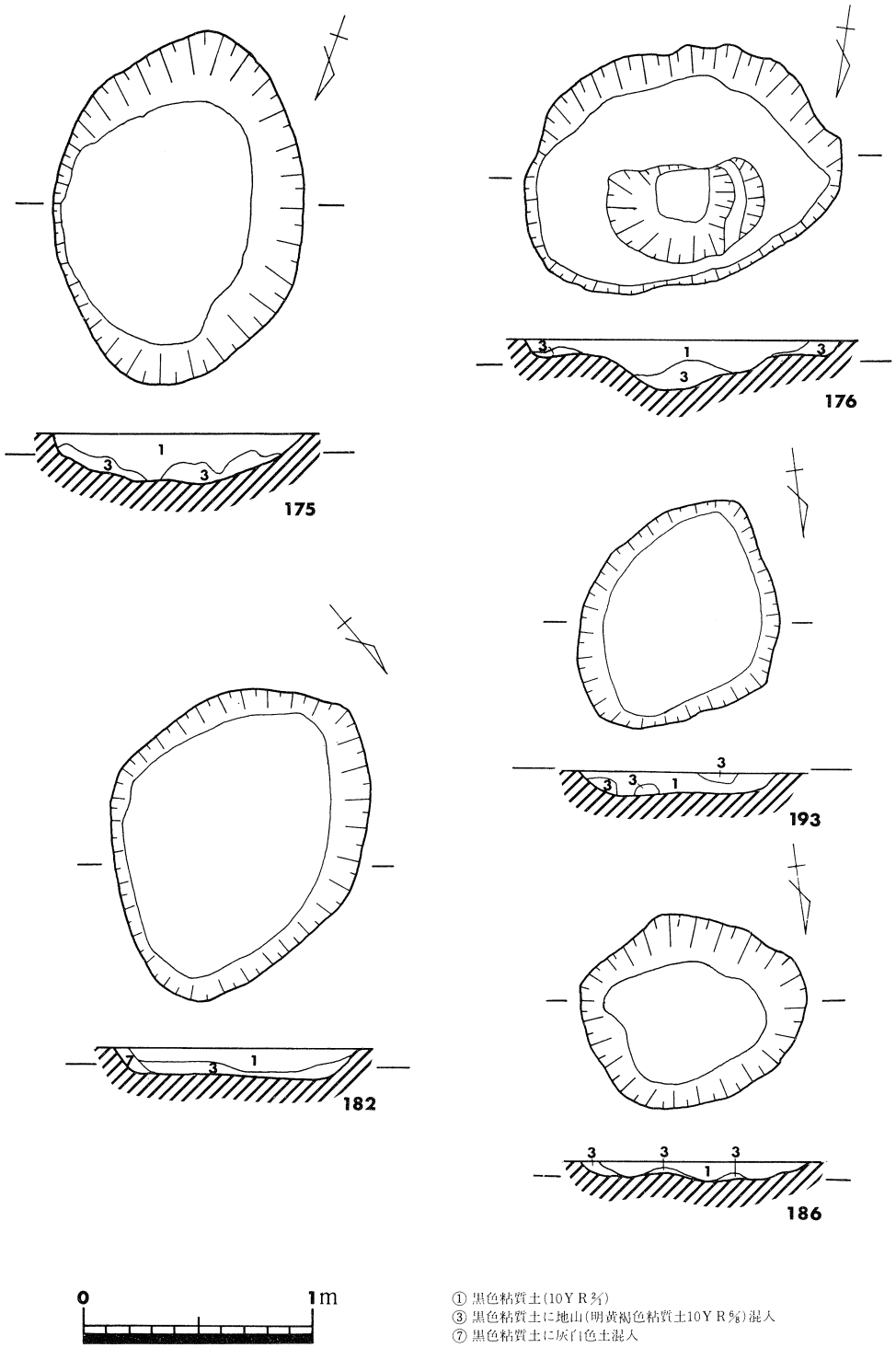
① 黒色粘質土(10YR 2/1)
② 灰白色土(2.5Y 7/1)
③ 黒色粘質土に地山(明黄褐色粘質土10YR 5/8)混入
④ 黒色粘質土と地山の混合土(5：5)

第93図　不明落ち込み遺構図



① 黒色粘質土(10YR2/1)
③ 黒色粘質土に地山(明黄褐色粘質土10YR6/8)混入
④ 黒色粘質土と地山の混合土(5：5)
⑥ 灰白色と地山の混合土(5：5)

第94図　不明落ち込み遺構図



第95図　不明落ち込み遺構図

不明土坑—10

断面が「V」字形を成すこの土坑は、側壁に沿って第3層が中央部に灰白色土と黒色粘質土が埋土として認知したがその層位から柱穴の可能性を有する遺構である。平滑な底部は、ほぼ長方形。長軸0.89m ×短軸0.62m ×深さ0.32m のスケールをもちこの種の検出遺構内では、最深を有する。

不明土坑—125

最深部が0.09m と浅いこともさることながら南西部に小土坑が張り出していた。土坑内には、黒色粘質土・灰白色土と第3層のめまぐるしいブロックの流れ込みが認められた。

低地で認知された不明土坑は、約200 ヶ所を数え、各遺構について(1)面積 (2)形態(平面形) (3)深さ・断面 (4)埋土 の4項目に区分してそれぞれ便宜上、2～4分類して容易に説明付けようとしたが残念ながらそれらの相関関係には有機的な脈絡は存在しなかった。

(1)面積はＳＫ—5以上の面積を有するＳＫ—17・18・54・97・136・156・160・177に代表される遺構でその最大面積をＳＫ—136と言える。概ね、1グループに1～2ヶ所に限定される特色がある。ＳＫ—5と同等面積の遺構は、約3分1を占有し、各々の面積は、概算で2㎡位であった。ＳＫ—16が見本となるこの程度からなる面積には、ＳＫ—5よりも若干検出数が高目である。これも、各グループでの比率はほぼ一定しているがグループＢ・Ｃは該当しない事実は、そのグループ内に保有される遺構数に関係しているようだ。この現象は、ＳＫ—27の最小面積に類似している。(2)平面形について観察するとアメーバ状、円形、不整円形、楕円形に細分したが注目すべき新事実はない。ただ、グループＡにアメーバ状平面が多い点である。さらに、土坑内に、小土坑を構成している例にＳＫ—102・107・143・176といった1ヶ所に対しＳＫ—159のように4ヶ所に及ぶ遺構すら見い出した。しかし、全体的には、微々たる事象であった。1ヶ所のみ所在する小土坑には、土坑内の中央と壁面に扁在する2タイプが感知出来た。深さについて見ると、10㎝前後、20㎝前後、30㎝前後の3形態が知らしめられたが平面形とは無関係であろう。それらの事実関係は前述した通りである。「U」字形と「V」字形の2種類に区別された壁面は、全体的バランスとしては多寡ない。最後に、黒色粘質土に第3層を含有させた埋土が全体の半数を存在し、ブロック的堆積を主流に2～3種の土層が混在している。

以上の如く、4項目については各々の遺構の相互性について追求しようとした数多くのバリエーションが頭脳に触発されたもののグループ1—7間の例証からは、重点的な関係に迫ることが不可能であった。

不明土坑内出土遺物

不明土坑内の出土遺物は、極めて少くなく遺構の性格を推し測るには若干問題点がある。出土層序は、各土坑の上層で構築後の入り込みとの信憑性が強い。

弥生式土器 (1) ＳＫ—10出土

底部付近のみの底径9.0cm、残存高4.2cmを計る壺形土器片である。平坦な薄い底部から外上方に直線的に作り出す。ローリングが顕著にめだち技法は不明な点が多い。胎土—粗、焼成—不良（保存状態による？）色調—内面・にぶい黄褐色10ＹＲ4/3、外面・明黄褐色10ＹＲ7/6

弥生式土器 (8) ＳＫ—16出土

内面底部は、丸く、外面底部は、概ねフラットだが周縁に浅い凹みがまわる。この壺形土器は、剝離によって焼成—不良といった感がある。底部径10.8cm、残存高5.5cm、色調・内面—黄灰色2.5Ｙ6/1、外面・橙色7.5ＹＲ7/6

須恵器・杯蓋 (2) ＳＫ—101出土

口径15.6cm、残存高3.6cmを測るこの杯蓋は、明瞭な稜をもち、やわらかく外弯ぎみの口縁部に移る。口縁端部はさらに外へ広き内面には、鮮明な段を呈する。外面、体部の一部に回転ヘラ削り調整が見られる以外は、すべて回転ナデ仕上げ。胎土—1～3.5mm位の粗砂・礫を含む。焼成—良好、色調—内面・灰白色Ｎ7/0、外面・灰色Ｎ5/0、ロクロ回転—逆時計

瓦器・椀 (7) ＳＫ—5出土

大きく外上方向に広き端部口縁をさらに外へ引き出す。口径17.0cm、残存高2.8cmのこの瓦器、内面の口縁付近に水平と格子目風の荒い暗文を施して磨き上げているが外面は、ヨコナデと指圧痕調整に限られる。胎土—密、焼成—良好、色調—灰色　Ｎ4/0

瓦器・皿 (5) ＳＫ—82出土

口径8.6cm、残存高1.8cmの小皿で丸味の体部から凹みをもった後、口縁部を広げ端部を丸く押える。胎土—密、焼成—良好、色調—オリーブ灰色10Ｙ4/2

瓦器・椀 (6) ＳＫ—13出土

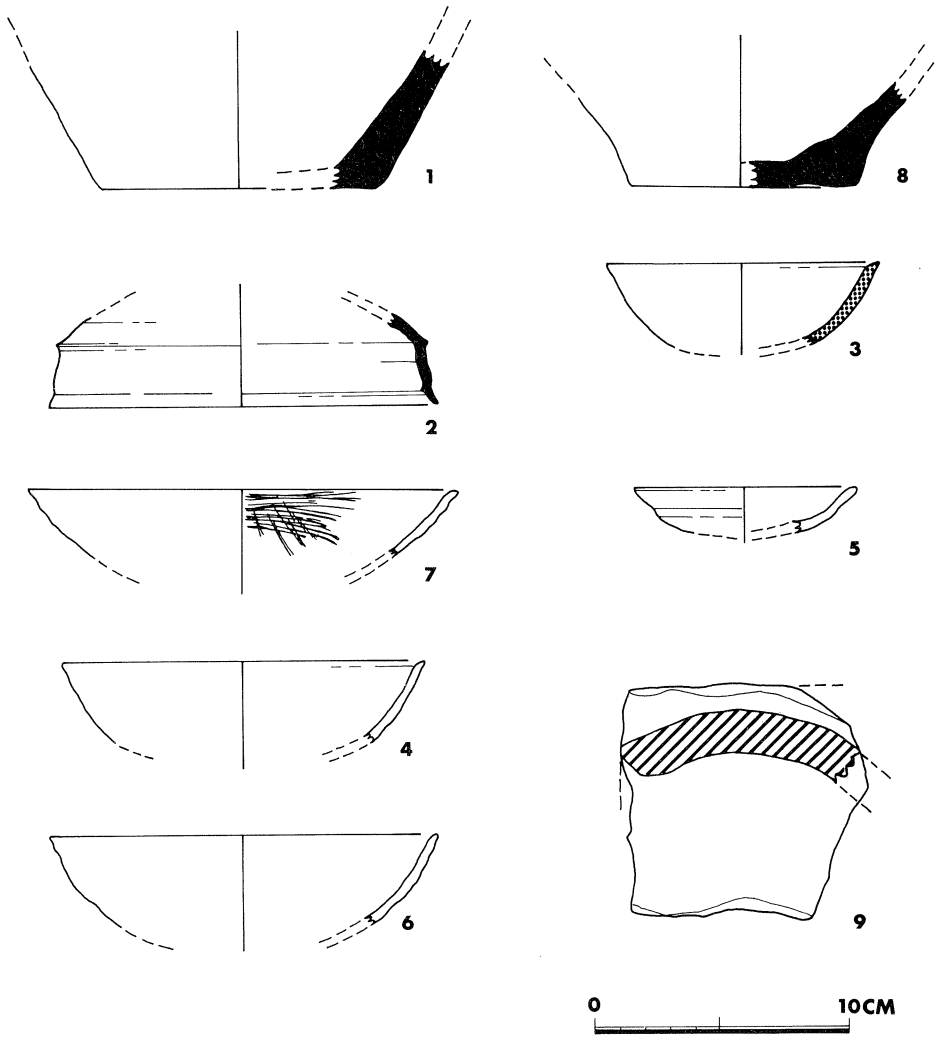
内弯の丸味をもたせ、口縁端部を丸くする。内面は回転ナデ、外面は回転ナデと指圧調整を施すが暗文はみられない。胎土・焼成は(5)に同じ、色調—青灰色５Ｂ6/1、口径15.4cm

瓦器・椀 (4) ＳＫ—53出土

(6)よりも浅い丸味を示し端部をやや水平に引き出す。技法は、(6)に類似する。色調—内面・明青灰色５ＰＢ7/1、外面・灰白色Ｎ5/0、口径14.3cm

黒色土器・皿 (3) ＳＫ—98出土

すべてナデ仕上げによって内弯させて端部をやや外に引き出したため内面に段を有する。口



第96図　第４地区出土遺物

径10.8cm、胎土―密、焼成―良好、色調―内面・暗灰色N3/0、外面・にぶい褐色7.5YR6/3

丸瓦　(9)　ＳＫ―170 出土

一枚作りによるもので外面には、縄目を残存させる。側面は「く」字形にヘラでカットしている。

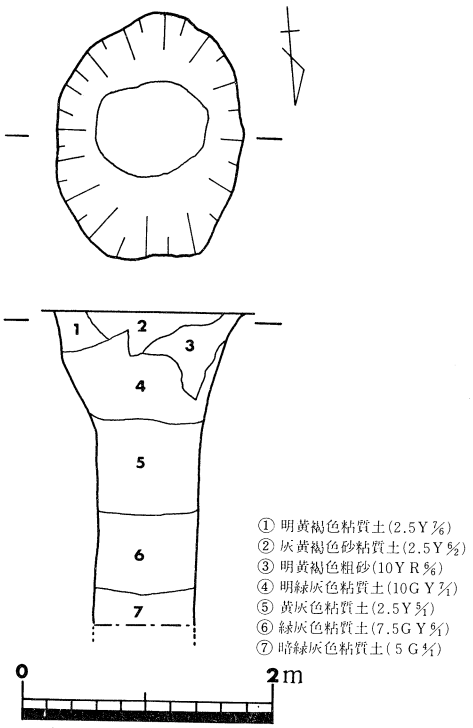
耕作用井戸

3地区の耕作地用井戸と同じ性格の井戸—19基を検出した。19基の内、素掘り井戸—18基、桶側井戸—1基である。井戸はある程度の近接をもって存在するが、3地区ほどの密集度はなく、むしろ整然とした感がある。多くの遺構上面は地山の上面において検出したものである。ただいくつかについては壁面土層の観察において土層断面であるが、今まで把握しがたかった地表面からの掘り込みを確認することができた。その構造等について、3地区の井戸と比較してさほどの相異はなく、基本的に同類であるが、その規模に関しては約2mほど深いのが認められた。また地区のほぼ中央で検出された桶側井戸は、6段の桶側と瓦積みをほぼ完全な形で残しており、同じく3地区の桶側を復元させるものである。

素掘りの井戸

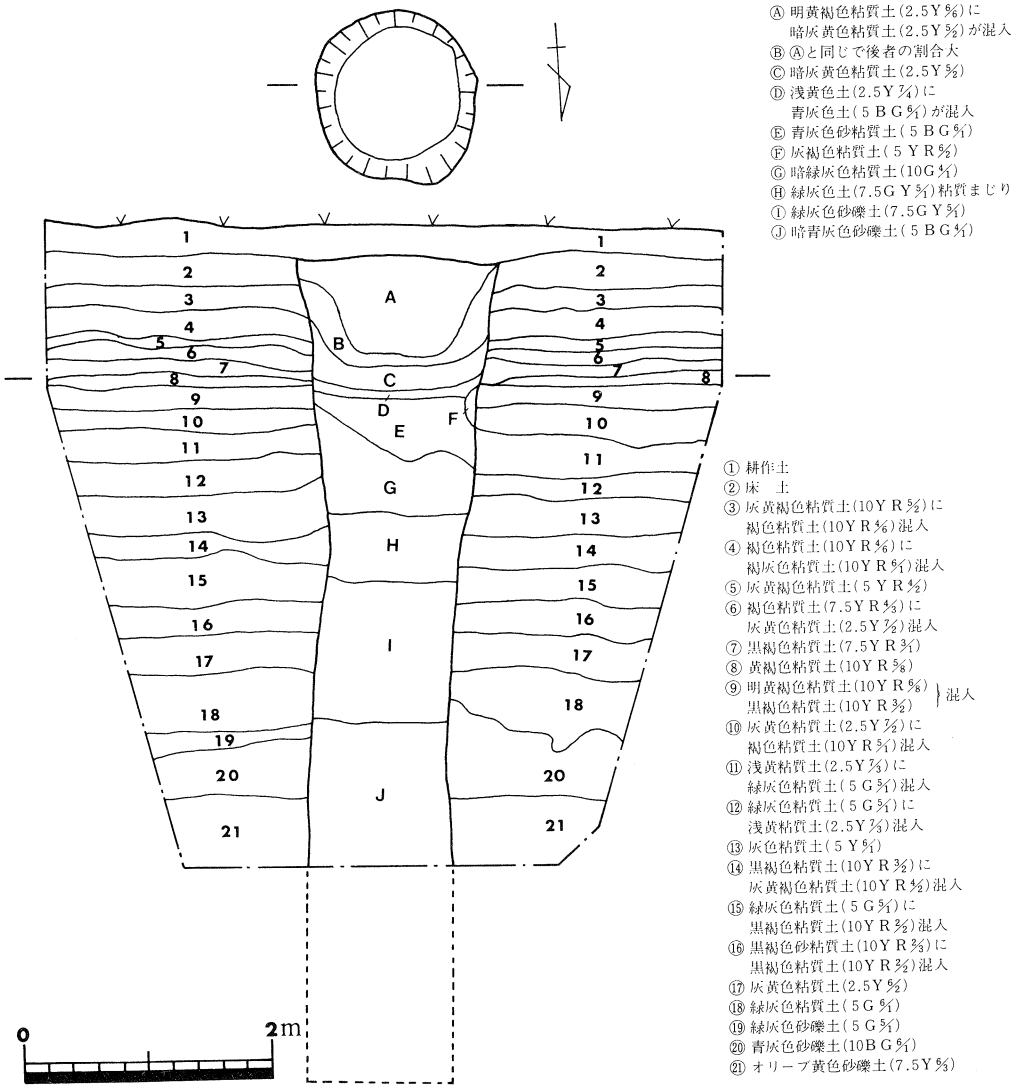
地表面からの土層断面を観察できた例においても、その上面に何ら施設は認められないが、耕作土・床土中に埋没しており、後世の耕作によって削除された可能性はある。特にE—3の埋土から出土したつるべの縄通しに使用したと思われる木製品と、3地区のE—22から出土した「にがり」といった地下水を汲上げるための遺物の伴出をみる時、そこに何らかの上部施設を設けていたと考えてもおかしくはない。

井戸の平面の多くは地山の上面で明確にしたが、その形状は不整な円形ないし楕円形である。その規模は本来の上面を土層断面で検出した例で、東西軸1.6〜3.4mを測り、1mほど掘り下がった地山上面の平面規模は最小のもので径1m前後を測るが、多くは1.6〜2mの計測値に集する。断面形にみる井戸の掘り方は、地山以下（本来の上縁より—1mほど）のそれで第3地区の井戸同様、—0.8m前後までは摺鉢形状を呈し以下ほぼ垂直に掘り抜かれており、井側の中位や底部直上に湧水の結果としての壁



第97図　井戸—1遺構図

面崩壊によるえぐれがみられる側もある。地山直上から井戸本来の上縁にかけては、摺鉢形状の延長としてその傾斜面が一定して上昇し平面規模はかなり拡大すると想定していたが、それが認められたのはE－6・7のみで、他においては垂直に近い傾斜面をもち摺鉢形状との接点で段を有する。4地区は3地区にくらべて湧水が得られる砂礫層までかなり深く、地表面から少なくても3～4m地点で湧水をみており、その湧出量も多い。したがって底部までの掘削も湧水層の深さに呼応して深く、底部までの掘削調査を中止した井戸も多いが、最も浅いもので

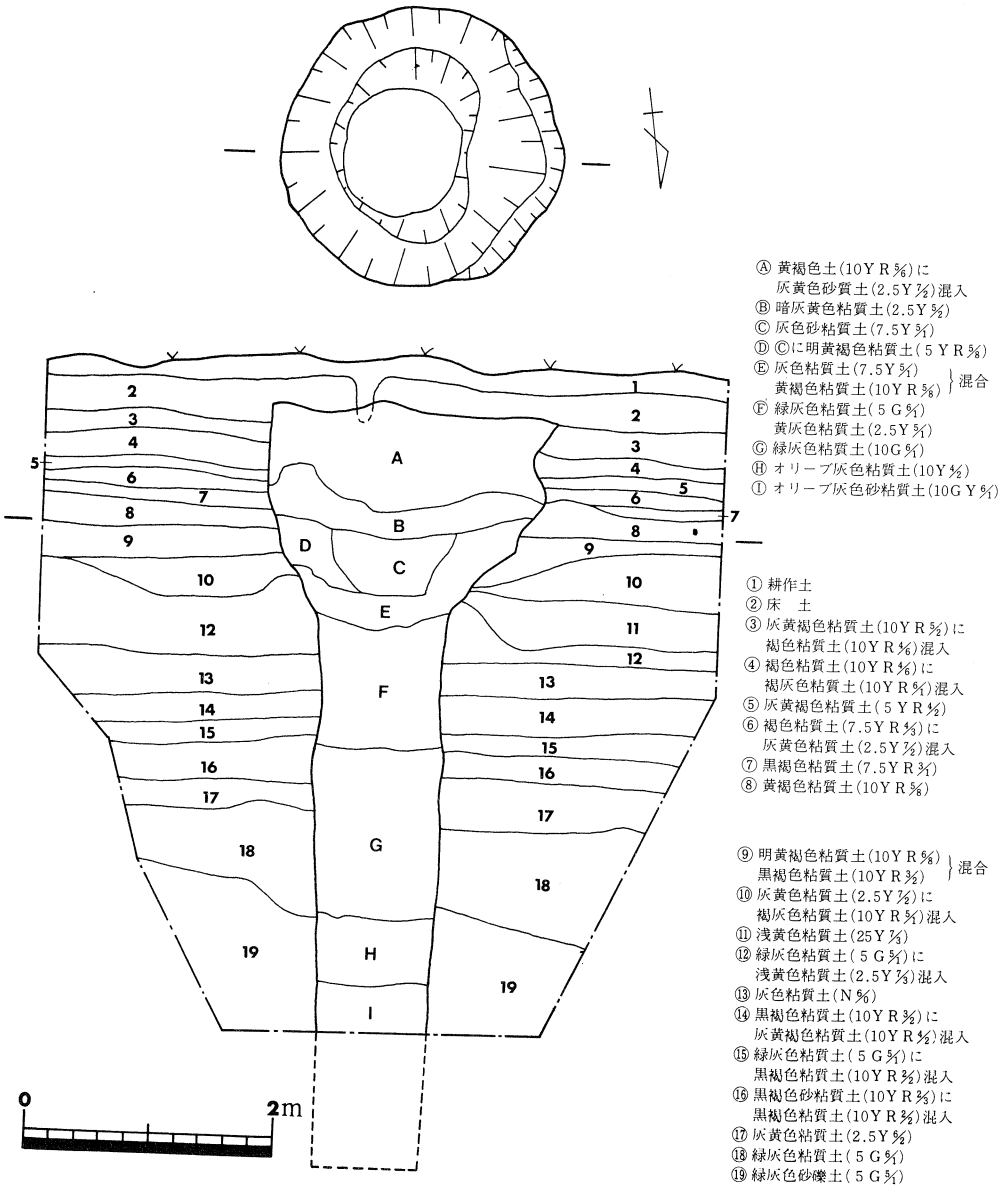


第98図　井戸－2遺構図

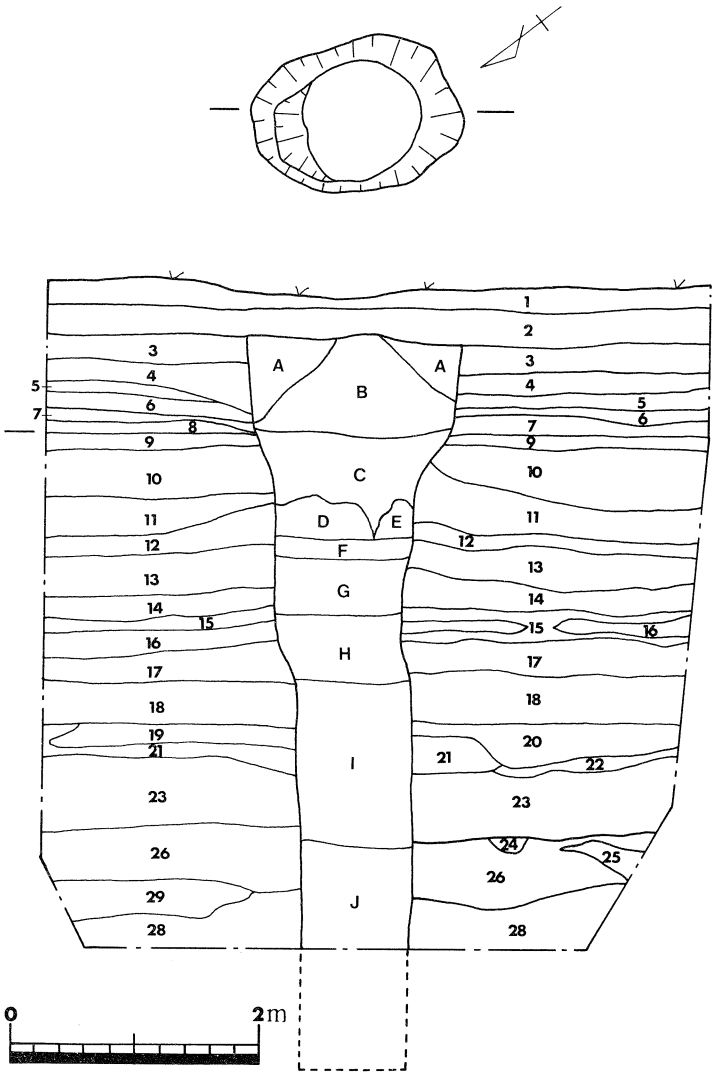
地表面から約4ｍ、深いもので7ｍほどを推定できた。

E－1（第97図）

平面形は楕円形。(長軸1.96×短軸1.48m）を測り、深さは2.5ｍまでを確認した。－0.9mまで摺鉢形状の断面で、西壁側は内弯気味の、一方南北壁は東西壁と比較して長い傾斜面を有す



第99図　井戸－3遺構図



Ⓐ 明黄褐色粘質土(2.5Y 6/6)に
暗灰黄色粘質土(2.5Y 5/4)混入
Ⓑ 黄褐色土(10YR 5/6)
灰黄色土(2.5Y 7/2) } 混合(砂まじり)
Ⓒ 黒灰黄色粘質土(2.5Y 5/2)に
明褐色粘質土(7.5 5/6)
灰オリーブ粘質土(5Y 6/2) } が混じる
Ⓓ 緑灰色粘質土(5G 5/1)
暗褐色粘質土(7.5YR 3/3) } 混合
Ⓔ 灰オリーブ粘質土(5Y 5/2)
Ⓕ 緑灰色砂粘質土(5G 5/1)
オリーブ灰粘質土(5GY 5/1) } 混合
Ⓖ 黄灰色粘質土(2.5Y 5/1)
青灰色砂質土(10BG 6/1) } 混合
Ⓗ 緑灰色粘質土(10GY 5/1)
Ⓘ 褐灰色粘質土(7.5YR 4/1)
Ⓙ オリーブ黒色粘質土(10Y 3/1)
暗緑灰色粘質土(5G 3/1) } 混合

① 耕作土
② 床　土
③ 灰黄褐色粘質土(10YR 5/2)に
褐色粘質土(10YR 4/6)混入
④ 褐色粘質土(10YR 4/6)に
褐灰色粘質土(10YR 6/1)混入
⑤ 灰黄褐色粘質土(5YR 4/2)
⑥ 褐色粘質土(7.5YR 5/4)に
灰黄色粘質土(2.5Y 7/2)混入
⑦ 黒褐色粘質土(7.5YR 3/1)
⑧ 黄褐色粘質土(10YR 5/8)
⑨ 明黄褐色粘質土(10YR 6/6)
黒褐色粘質土(10YR 3/2) } 混合
⑩ 灰黄色粘質土(2.5Y 7/2)に
褐灰色粘質土(10YR 5/1)混入
⑪ 浅黄色粘質土(2.5Y 7/3)
⑫ オリーブ褐色粘質土(2.5Y 4/3)
⑬ オリーブ灰色粘質土(10Y 5/2)
⑭ 緑灰色砂粘質土(5G 5/1)
⑮ 黒褐色粘質土(10YR 3/2)に
灰黄褐色粘質土(10YR 4/2)混入
⑯ 黒褐色粘質土(10YR 3/2)
⑰ ⑯より黒っぽい
⑱ 黒褐色粘質土(10YR 3/2)
⑲ 緑灰色砂粘質土(5G 6/1)
⑳ 緑灰色粘質土(5G 5/1)に
緑灰色砂質土(5G 5/1)混入
㉑ 緑灰色砂質土(10G 6/1)
㉒ 緑灰色粘質土(5G 5/1)に
浅黄色粘質土(2.5Y 7/3)混入
㉓ 緑灰色粘質土(5G 5/1)に
青灰色粘質土(10BG 5/1)混入
㉔ 緑灰色砂質土(7.5GY 5/1)
㉕ ㉔に礫混入
㉖ ㉓の砂質土
㉗ 緑灰色砂質土(5G 5/1)
㉘ オリーブ灰色粘質土(2.5GY 5/1)

第100　井戸―4遺構図

る。したがってこの－0.9mでの平面形は不整な楕円形で（0.94×0.74m）を測るが、長軸方向は上面で南北に対して、－0.9m地点は東西方向で直交する。以下、平面形、規模にあまり変化はなく垂直に掘り抜かれる。埋土は粘質土を多くして7層に分かれるが、摺鉢形状の部分までの上層3層（1～3）が傾斜して分離、さらに第4層に入り込んだ状態でみられた。湧水は－2.3mで達した暗青灰色砂礫層（5BG 4/1）から大量に得られ、その湧水量は調査中に壁面崩壊をきたしたほどであった。

E－2（第98図）

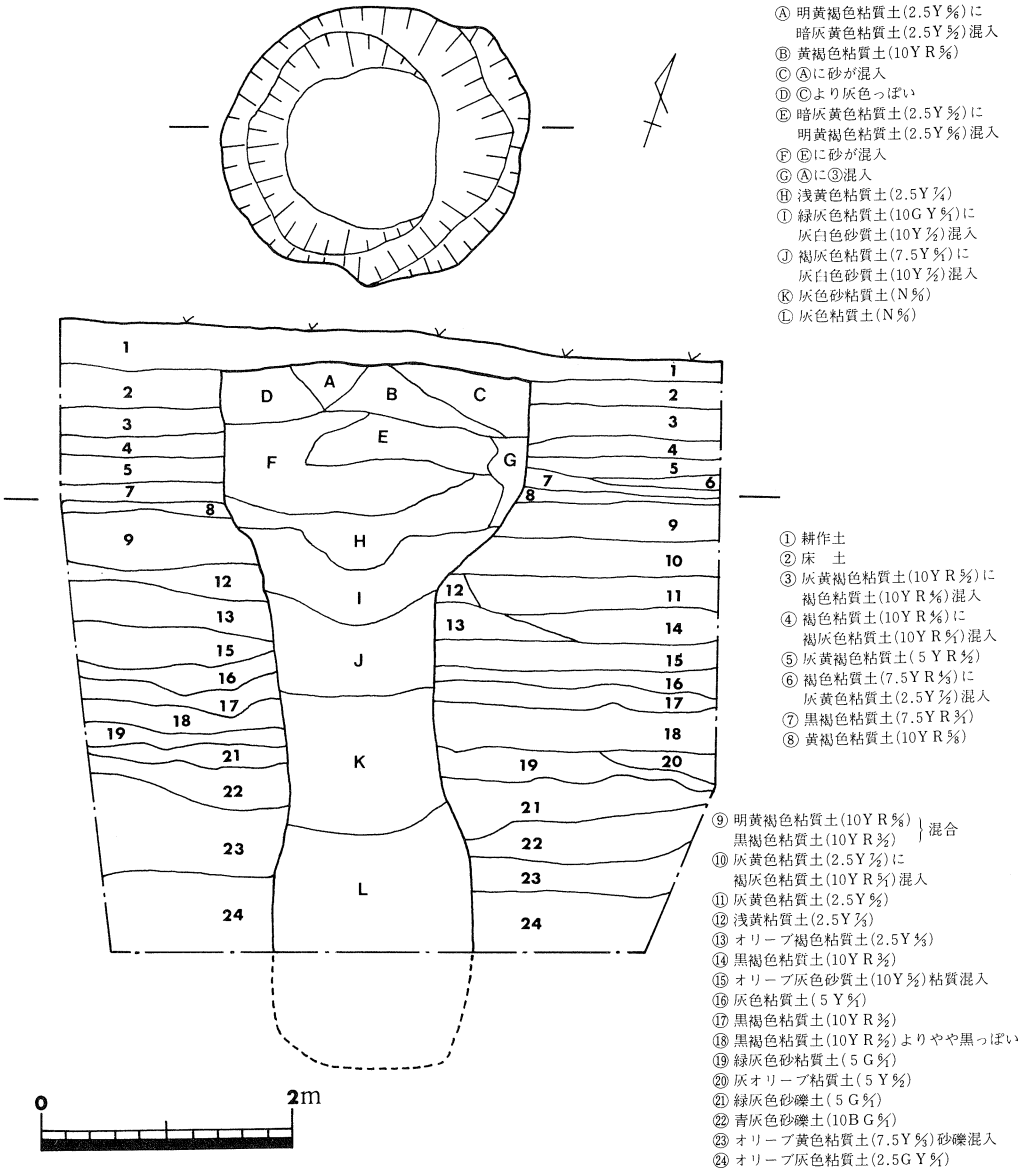
上縁の東西軸で1.6ｍを測り、深さは4.9(推定6.6)ｍまでを確認した。掘り方は－2.3ｍまでややうねりを有した急傾斜面を有して掘り抜かれてくびれる。－1ｍ地点（地山上面）で平面形は円形で（1.34×1.27ｍ）を測り、－2.3ｍ地点では（1.06×0.98ｍ）を測る同じく円形を呈する。以下、やや西側へ傾斜して掘り下げられるが、－4.9ｍ地点でその平面形・規模に－2.3ｍ地点とさして差はなく、若干の拡大があるだけである。底は不明。埋土は10層に分かれ、－0.9ｍまでの3層(A～C)が大きく落ち込み、またくびれる掘り方の－2.3ｍ直上の第7層(G)は東壁から西壁へ大きく下がって傾斜する堆積がみられる。湧水は－4.3ｍの緑灰色砂礫層(19)、青灰色砂礫層（20）の中位ほどから得られた。

E－3（第99図）

上縁の東西軸で2.26ｍを測り、深さは5.04（推定6.14）ｍまでを確認した。掘り方は、－1.04ｍまで東壁側は垂直で、西壁側は段を有して傾斜した後、内弯してえぐれ、(2.0×1.9ｍ）を測る円形になる。さらに－1.74ｍまで0.7ｍほどややうねりをもった摺鉢形状を呈して下がり、(1.52×1.08ｍ）を測る不整な楕円形の平面形となる。以下、すぼまりながら掘り抜かれ、中位ほどに内弯してえぐれる部分（長軸1.02ｍ）を有するが、ほぼ直下に下がる。－5.04ｍで平面形は円形を呈し（1.0×0.91ｍ)を計測した。底は不明。埋土は摺鉢形状の部分までにブロック状の2層も含めて5層（A～E）が落ち込んだ状態で堆積しており、以下は4層に分けられるが、中位の2層（F・G）は1ｍ前後の厚みをもった粘質土である。湧水は－4.2ｍ地点の西側へ傾斜して下がっていく緑灰色砂礫層の直下から得られた。

E－4（第100図）

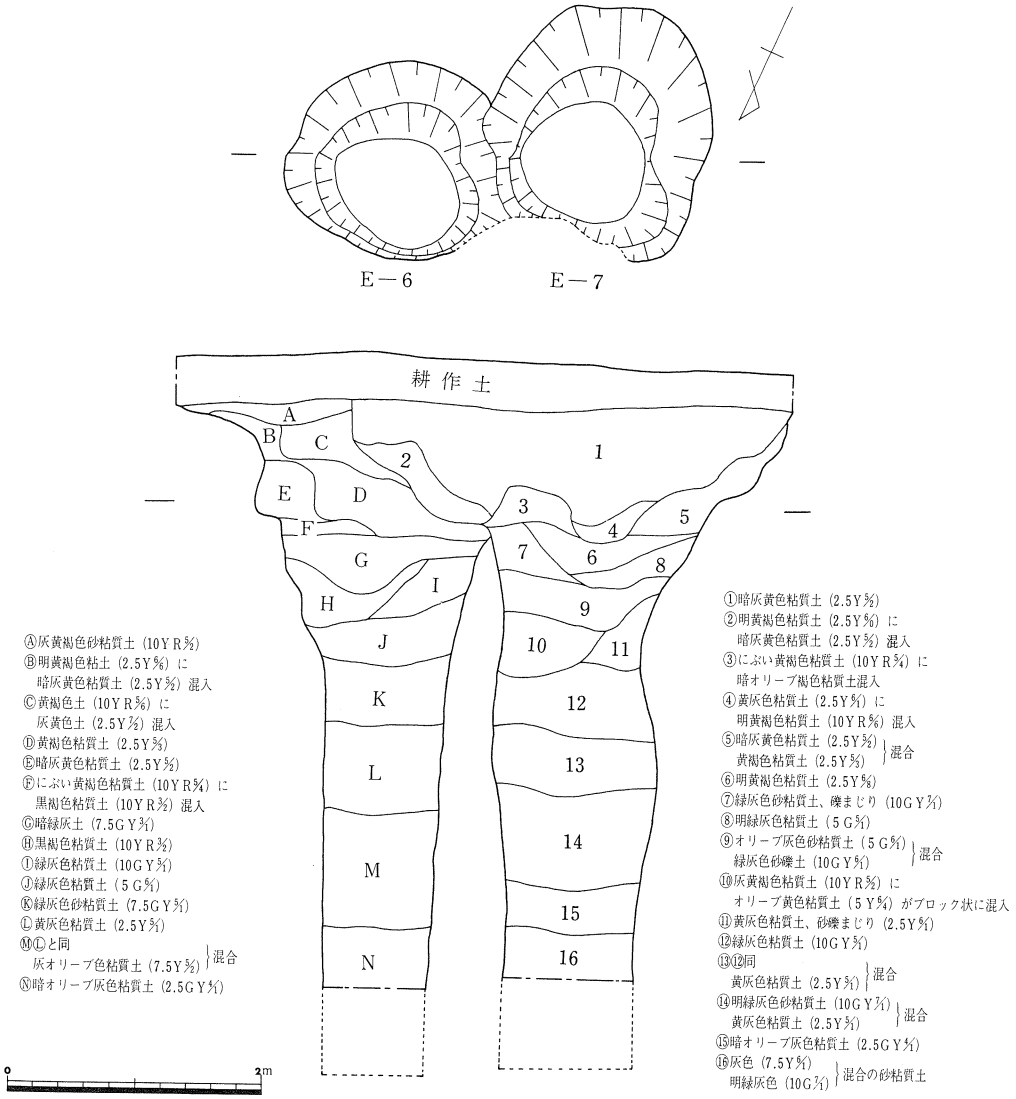
上縁の東西軸で1.68ｍを測り、深さは4.92（推定5.9）ｍまでを確認した。－0.8ｍまで垂直に近い急斜で、さらに－1.2ｍまで0.4ｍほど外弯気味の壁面傾斜を呈して掘り込まれ、(1.16×0.92ｍ）を測る楕円形になる。以下、すぼまりながら直下に掘り下げられるが、－2.6ｍ地点で西側へ屈折した後、さらに直下する。－2.6ｍ地点で平面形は円形を呈し、(0.9×0.82ｍ)を測り、－4.92ｍ地点では（0.84×0.8ｍ)を測る同じく円形になる。底は不明。埋土に単一層は少なくほとんどが混入ないしは混合土で10層に区別できた。上層でA層がドーナツ状に落ち込み、第3層（C）がF層に入り込む以外は水平層に近い。湧水は－4.4ｍの緑灰色砂層（26）の最下層、オリーブ灰色粘質土（28）その境から得られた。



第101 図 井戸－5遺構図

E－101（第5図）

上縁の東西軸で2.4ｍを測り、深さは4.72（推定5.64）ｍまでを確認した。掘り方は－1.12ｍまで垂直に下がった後、－1.82mまで0.7ｍほど東壁側では段をもち、西壁側でゆるい内弯気味の傾斜を呈し全体的に摺鉢形に近く、そこで（1.78×1.38m）を測る楕円形の平面形になる。以下、ややすぼまりながら直下に掘り抜かれるが、－3.5m地点より壁面崩壊のために大き

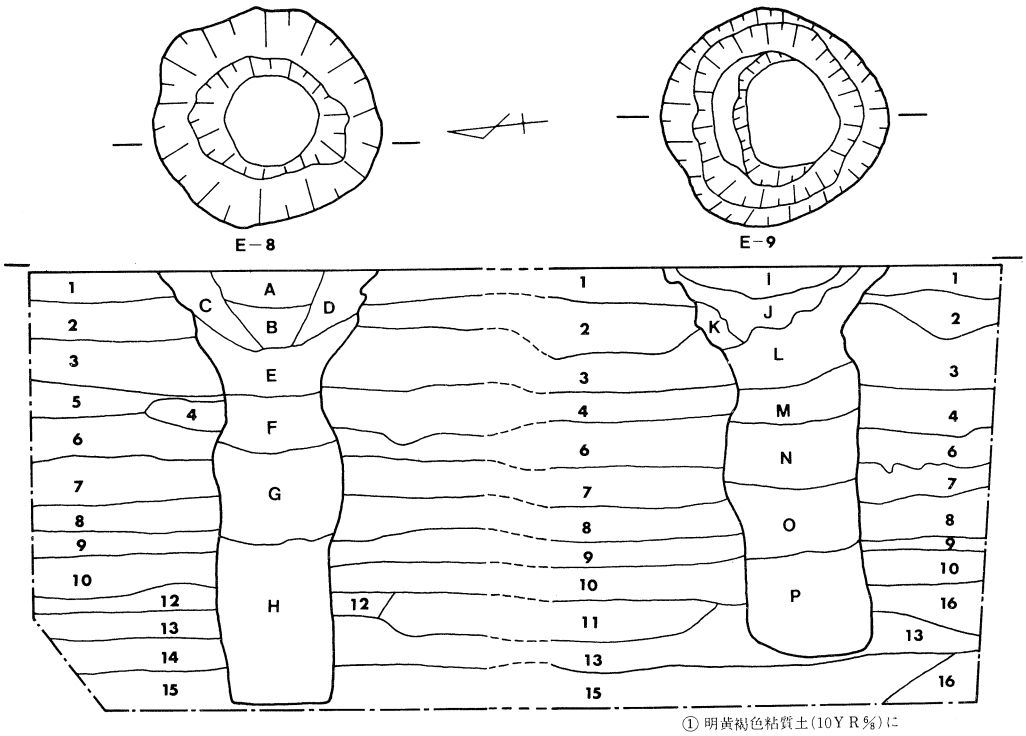


第102図　井戸－6・7遺構図

くえぐれ、特に南～東壁にかけては0.4ｍほど拡がっている。－4.72m地点で平面形は楕円形を呈し、(1.6×1.47m)を計測した。底は不明。埋土は12層に分かれるが、上層に傾斜するブロック状で混合する4層（A～D)、以下には落ち込み状に厚い堆積がみられる。湧水は－4.1ｍの青灰色砂礫、オリーブ黄色砂礫混り層（22・23）の下位から得られてた。

E－102（第6図）

上縁の西側半部から深さ1ｍほどをE－7によって、さらにE－6・7の北側はE－20（コ



Ⓐ 灰色粘質土(10Y 5/1)
Ⓑ 褐灰色粘質土(10GY 7/1)に明緑灰粘質土(10GY 7/1)混入
Ⓒ 褐灰色粘質土(10YR 5/1)鉄分含む
Ⓓ Ⓒの砂粘質土
Ⓔ Ⓓより黄色っぽい
Ⓕ 橙色粘質土(7.5YR 5/8)
Ⓖ 褐灰色粘質土(7.5YR 5/1)
Ⓗ 緑灰色粘質土(10GY 5/1)下層一砂礫混入

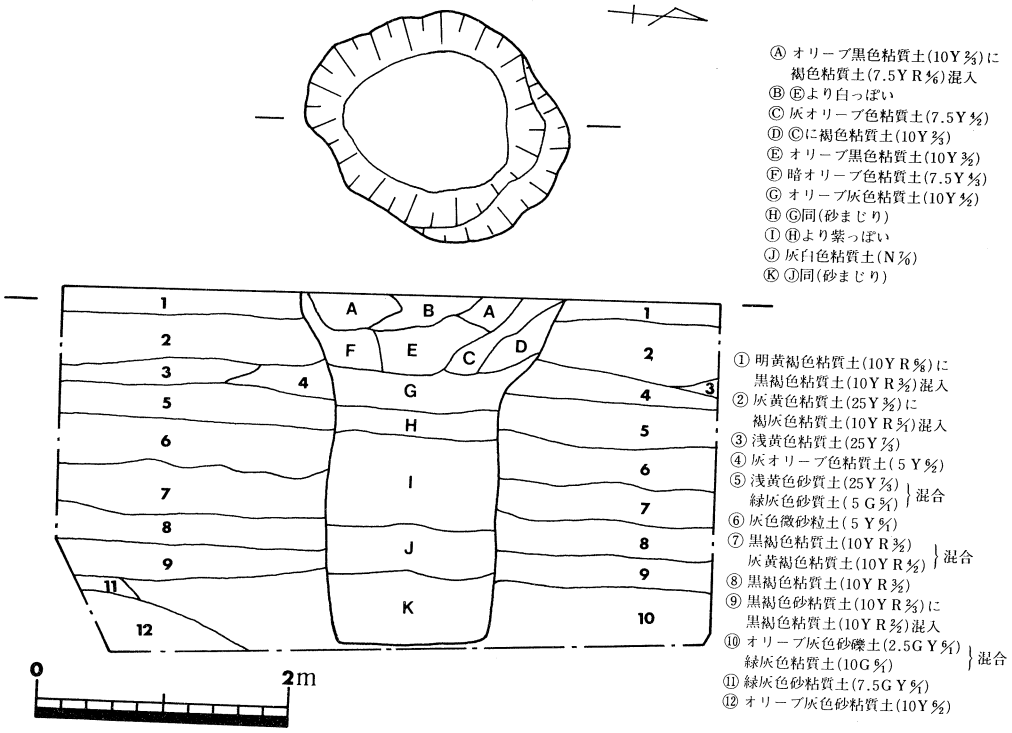
Ⓘ 黄灰色粘質土(2.5Y 5/1)
にぶい黄色砂質土(2.5Y 5/4) } 混合
Ⓙ オリーブ灰色粘質土(10Y 5/2)砂まじる
Ⓚ オリーブ灰色粘質土(2.5GY 5/1)
Ⓛ 灰色粘質土(7.5Y 5/1)
Ⓜ 緑灰色粘質土(10G 5/1)
Ⓝ Ⓜより灰色っぽい
Ⓞ 緑灰色粘質土(5G 5/1)
Ⓟ 同　砂質土

0　2m

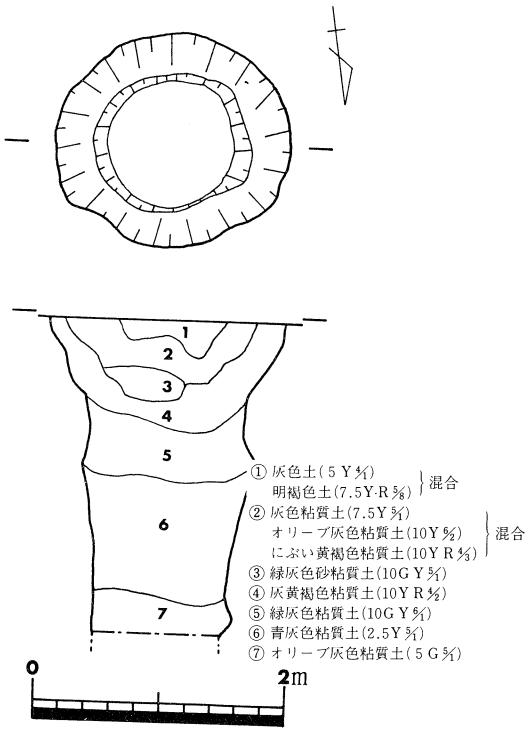
① 明黄褐色粘質土(10YR 5/8)に黒褐色粘質土(10YR 3/2)混入
② 灰黄色粘質土(2.5Y 7/2)に褐灰色粘質土(10YR 5/1)混入
③ 浅黄色粘質土(2.5Y 7/3)に緑灰色粘質土(5G 5/1)混入
④ オリーブ色砂粘質土(5Y 5/4)
⑤ オリーブ黄色粘質土(7.5Y 5/3)に砂礫混入
⑥ 緑灰色砂質土(5G 5/1)
⑦ 黒褐色粘質土(10YR 3/2)に緑灰色粘質土(5G 5/1)混入
⑧ 黒褐色粘質土(10YR 3/2)
⑨ 黒褐色粘質土(10YR 3/2)に灰黄褐色粘質土(10YR 5/2)混入
⑩ 緑灰色粘質土(7.5GY 5/1)
緑灰色砂質土(10G 5/1) } 混合
⑪ 緑灰色粘質土(5G 5/1)
⑫ 緑灰色砂質土(5G 5/1)砂礫混入
⑬ 緑灰色砂礫土(5G 5/1)
⑭ オリーブ灰色砂質土(10Y 5/2)砂礫混入
⑮ オリーブ黄色砂礫土(7.5Y 5/3)
⑯ オリーブ灰色粘質土(2.5GY 5/1)

第103図　井戸−8・9遺構図

ンクリート井戸）によって切られて存在する。深さは4.68（推定5.4）mまでを確認した。掘り方は−1mまで東壁側で2段状の掘り込みを呈し、(1.66×1.56m）を測る不整円形になる。さらに−2mまで1mほど東壁側で同じく段を有して傾斜し、摺鉢形状を呈しており、ここでの平面形は上部に準じる不整円形であるが、(1.34×1.18m）を測りその規模は縮小される。以下、すぼまりながら直下に掘り抜かれ、−4.68m地点では（1.06×0.82m）を測る楕円形になる。底部は不明。埋土は14層に分かれ、特に摺鉢形の部分までにブロック状の堆積層9層(A〜I）



第104図　井戸—10遺構図



第105図　井戸—11遺構図

が集中する。

E—7（第102図）

上縁の東西軸で3.4mを測り、平面規模は4地区で最大の井戸。深さは4.5(推定5.24) mまで確認した。掘り方は—1mまで内弯気味の傾斜面が階段状を呈し、(2.1×1.7m) を測る不整な楕円形の平面形になる。さらに—2mまでやや外弯気味の壁面傾斜を有した摺鉢形状の断面形を呈し、(1.4×1.1m) を測るくびれをもつ不整な楕円形になる。その後、—4mまでゆるく内弯して下がり壁

面は外側にややえぐれ、以下ほぼ垂直に掘り抜かれる。−4.5m 地点で平面形は円形を呈し、(0.96×0.96m) を計測した。埋土は16層に細分でき、摺鉢形状の部分までに単一層ないしブロックで細かく傾斜あるいは落ち込んで11層が堆積する。

湧水は井戸−6・7ともに地層が連続する隣接したE−5と同じ青灰色砂礫層の下位から得られており、深さ約−4mも一致する。E−7における壁面の内弯は湧水による壁面崩壊と思われるが、とすればかなりの水位上昇があったことになる。一方、E−6においてはそのような痕跡は認められず、使用時期による湧水量の相異、使用期間の長短によるものか。

E−8 (第103図)

平面形は不整円形。(長軸1.84×短軸1.76×深さ3.4m) を測る。−0.9m まで段を有した後、ゆるく弯曲した傾斜面をもって摺鉢形状の断面を呈し、(0.76×0.72m) を測る円形になる。そして−2mまで壁面は内弯してえぐれており最長軸1.2mを計測した。以下、北壁面でやや内弯気味であるが、ほぼ垂直に底部まで掘り抜かれる。底部は (0.8×0.74m) を測る円形で、平坦。埋土は8層に分かれ、摺鉢状の部分までに、中央と壁面側に分離する4層 (A〜D) が落ち込み、また最下層 (H) は1.45m の単一層である。

E−9 (第103図)

平面形は不整円形。(1.8×1.72×3.2m) を測る。−0.65m までは段を有して斜めに内側へ下がり歪な摺鉢形状を呈し、(1.08×1.0m) を測る不整な楕円形になる。以下、中軸をやや南側に傾むけて掘り下がるが、北壁側の−1〜2m、南壁側の底部直上はえぐれており中位で最長軸1.05m を計測した。底部は (0.93×0.82m) を測る隅丸方形を呈し、底面はやや丸味をもつ。埋土は8層に分かれ、いずれも落ち込みあるいは内弯状の堆積である。

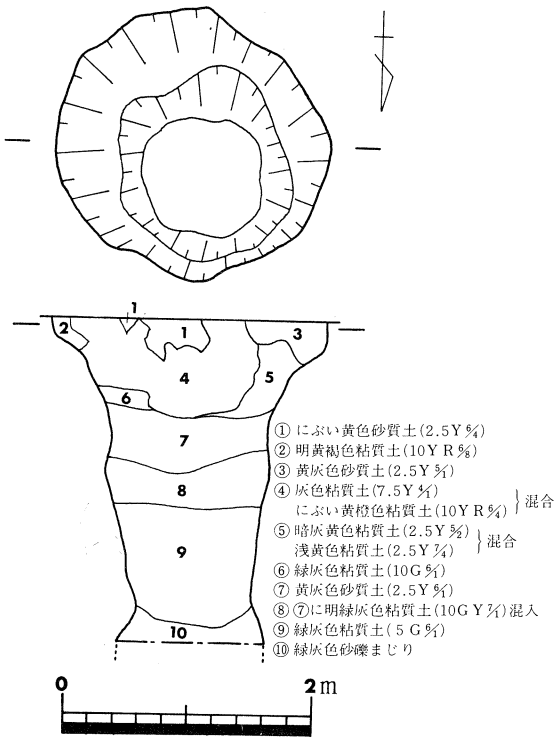
湧水はE−8・9ともに、−2.7〜3mの緑灰色砂礫層から大量に湧出した。

E−10 (第104図)

平面形は不整な楕円形。(2.1×1.69×2.8m) を測る。−0.9m まで弯曲した傾斜面を有した摺鉢形状で、(1.35×1.13m) を測る楕円形の平面形を呈する。以下、やや内弯気味にふくらんで直下に掘り抜かれる。底部は平坦で、その規模・形状にさほどの変化はない。埋土は11層に区別したが、その内6層 (A〜F) は摺鉢状の部分にブロックで混合するもので、下層2層 (J・K) は北壁側でやや落ち込む状態であった。湧水は −2.2mのオリーブ灰色砂礫層から得られ、約12時間で−1.6m まで (1.2m ほど) の水位上昇がみられた。

E—11（第105図）

平面形は円形。(1.89×1.72m）を測り、深さは2.5mまでを確認した。－0.6mまでうねりを有した壁面傾斜で摺鉢状を呈し、(1.25×1.1m)を測る円形の平面形になる。以下、直下した後、－1.0～1.4mまでコブ状に突出する壁面のえぐれがみられ最長軸1.4mを計測した。さらに－2.5mまでやや外弯気味の壁面を有してすぼまりながら掘りかれる。－2.5m地点では（1.04×1.0m)を計測する円形の平面形を呈する。埋土は7層に分けられ、いずれも落ち込んだ状態にあり特に摺鉢形の部分までの4層（1～4）は上面からの落ち込みでその落差が大きい。湧水は－2.1m地点のオリーブ灰色砂礫層から得られ、－1.0～1.4m地点でのコブ状のえぐれは水位上昇によるものであろう。



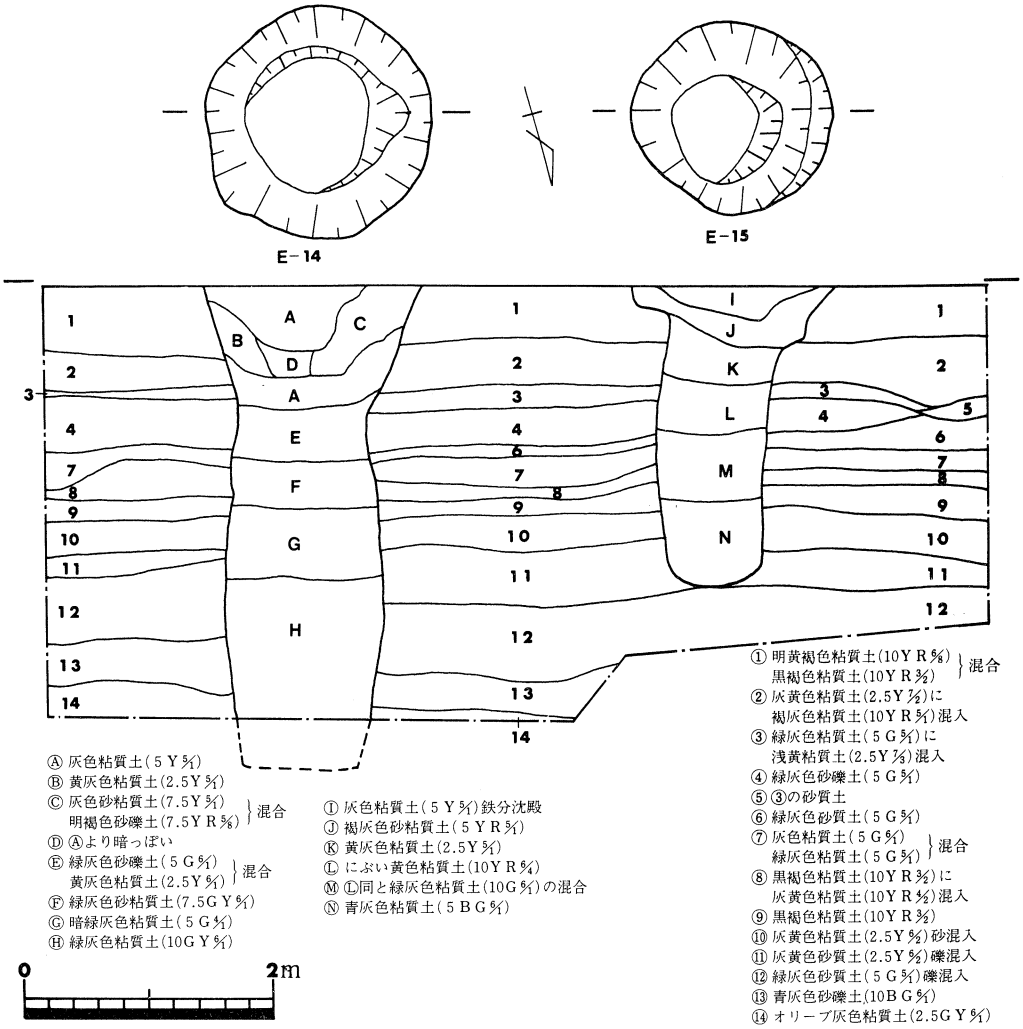
第106図　井戸—13遺構図

E—13（第106図）

平面形は不整円形。(2.25×2.05m）を測り、深さは2.6mまでを確認した。－0.9mまで上面からわずかに直下した後、うねりを有した外弯気味の傾斜で摺鉢形に近く、(1.6×1.9m)を測る不整な楕円形になる。その直下より壁面はゆるく内弯して外側へふくらみ最長軸1.52mを測り、以下－2.3mまですぼまりながら掘り抜かれ、(1.06×1.02m）を測る不整円形を呈する。その後、再び壁面は内弯してえぐれて下がり、－2.6m地点で長軸1.32mを計測した。埋土は10層に分かれるが、摺鉢状部分までに第4層(4)を基本に5層（1～3・5・6）がブロック混入で集中し、壁面崩壊にある埋土はいずれも中央部で落ち込む。湧水はオリーブ灰色砂礫層より得られ、上面より2.2mの深さで湧出する。

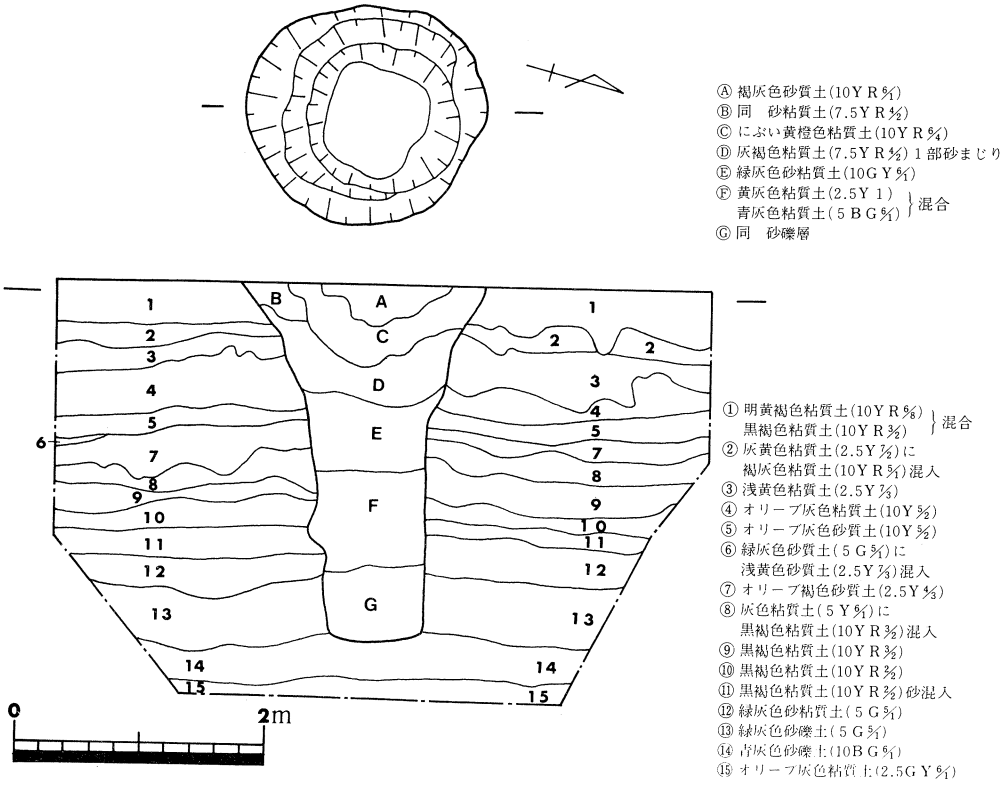
E—14（第107図）

平面形は円形。(1.85×1.8m)を測り、深さは3.5(推定3.9)mまで確認した。－1.0mまで摺鉢



第107図　井戸—14・15遺構図

形状の断面で、(1.1×1.0m）を測る不整円形の平面形を呈する。以下、壁面はゆるく内弯して掘り抜かれ、−2.5m地点で最長軸1.25mを計測したが、再びすぼまる−3.5m地点では(1.2×1.07m）を測る円形になる。埋土は8層に分かれ、摺鉢状の部分までは灰色粘質土（A）に上・下をはさまれて3層（B〜D）が落ち込んでブロック混入するが、以下4層はほぼ水平層といえる。湧水は−2.1mの灰黄色砂質土（礫まじり）層⑪より得られたが、井戸の掘削は以下2層の砂礫層（12・13）、さらに直下の粘質土⑭に達しており、十分な湧水と貯水をそなえていた。



第108図　井戸—16遺構図

E—15（第107図）

平面形は円形。(1.63×1.54×2.4m）を測る。—0.2～0.5mにかけて東壁側で垂直な一段、西壁側で傾斜する2段を有して掘り込まれ凸形状を呈し、(0.85×0.8m）を測るやや角ばった円形になる。以下、東壁側は弓形にゆるく内弯してややすぼまりながら掘り下げられる。底は(0.8×0.75m）を測る不整円形で、丸底に近い。埋土は6層に分かれ、凸形状の掘り方までの上層2層（I・J）は西壁側へ傾斜して下がり、以下4層（K～N）もやや弯曲気味の均一な堆積層である。湧水はE—14から連続する灰黄色砂質土（礫まじり）層より得られたが、E—14と異なり湧水をみた地点で井戸の掘削は終了されている。

E—16（第108図）

平面形は不整円形。(1.92×1.75×2.85m）を測る。—1mまで内弯気味の傾斜面が段を有して内側へ下がり摺鉢形状を呈し、(1.25×1.2m）を測る円形の平面形になる。以下、すぼまりながら直下に掘り抜かれるが、南壁の—1.7～2.2m地点に壁面崩壊のえぐれた部分がある。底

は（0.85×0.8m）を測る隅丸方形に近い平面形で、平坦である。埋土は7層に分かれ、特に上層で大きく落ち込む埋土がみられた。湧水は－2.3mの緑灰色砂礫層の下位より得られた。

E－17（第109図）

平面形は楕円形に近い。(1.85×1.7m）を測り、深さは3.65（推定5.0）mまでを確認した。掘り方は東壁側で－0.3mまで段を有し、西壁側は－0.9mまで内弯気味の傾斜面を有して掘り込まれ、(1.05×0.95m）を測る楕円形になる。以下、ほぼ垂直に掘り抜かれるが、西壁の－2～2.6m地点は内弯してえぐれ、さらに－3.1m地点より壁面は大きく内弯していく。埋土は9層に分かれ、－0.6mより上層には中央で柱状に埋まる混合砂粘質土（G）を3層（H～J）がドーナツ状に囲み、以下はいずれも粘質の単一層である。湧水は－3.2mの緑灰色砂礫層(11)の下位より得られたが、井戸は－5mまでの掘削が推定される。

E－18（第109図）

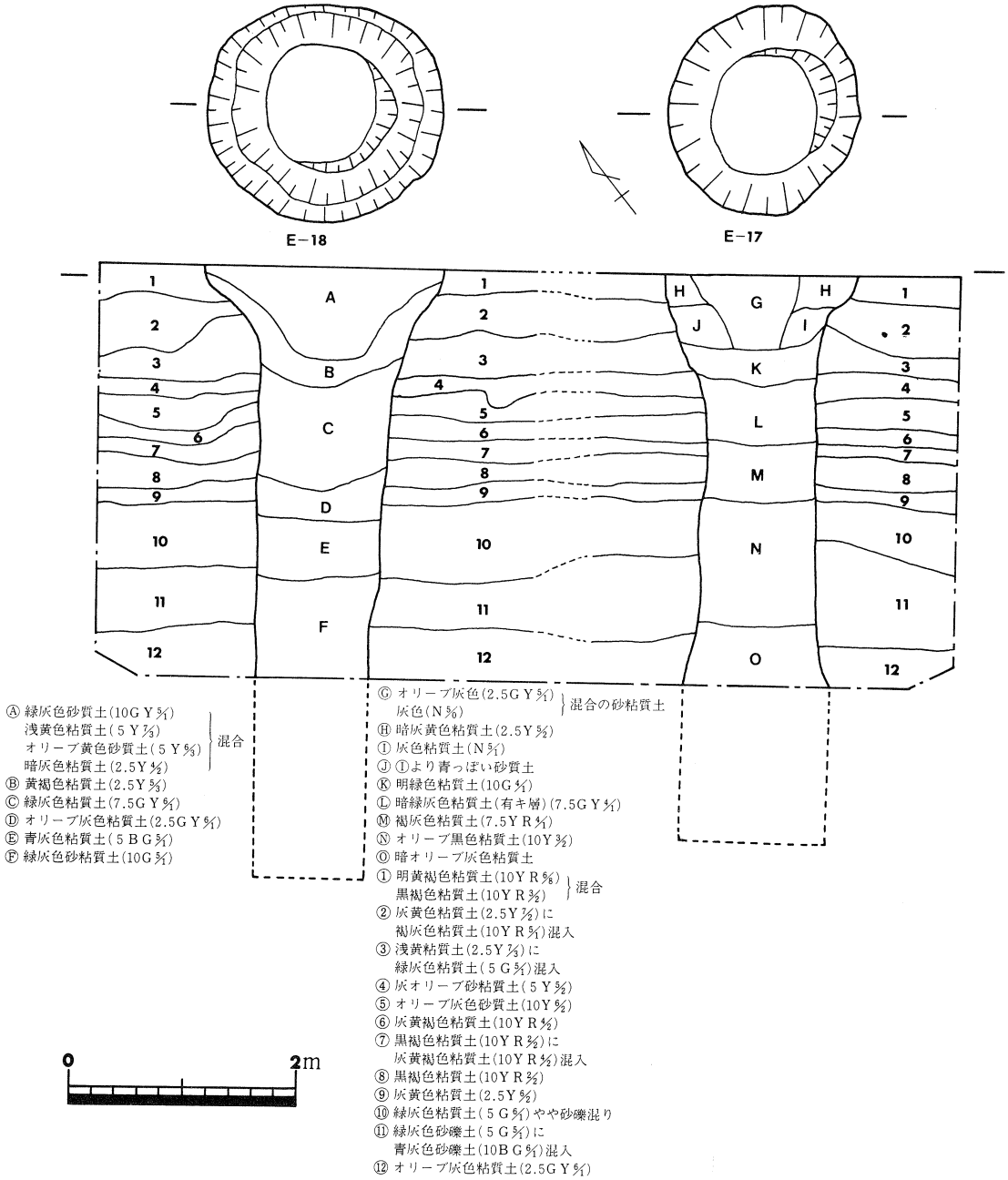
平面形は円形。(2.1×1.9m）を測り、深さは3.6（推定5.4）mまでを確認した。－0.2mまで直下した後、－0.8mまで外弯気味の傾斜面を有した摺鉢形状を呈し、(1.2×1.1m）を測る不整円形の平面形になる。以下、垂直に掘り抜かれるが、－2.7mより南壁側は内側へ外弯気味にせり出して直下する。－3.6m地点では（1.05×1.0m）を計測した。埋土は6層に分かれ、最上層（A）は4層がブロックで入る混合層で上面から大きく落ち込み、それは以下の層にもみられる。湧水はE－17から連続した緑灰色砂礫層で得られ、同じくさらに－5mまでの2m以上の掘削がある。

E－19（第110図）

平面形は不整円形。(1.65×1.6m）を測り、深さは3.6（推定4.4）mまでを確認した。－0.95mまで西壁側で段をもった内弯気味の傾斜面で下がり、摺鉢形に近い形状で、(1.0×0.95m）を測る不整円形を呈する。以下、－1.5mまで直下した後、壁面は－2.8mまで1.3mほど内弯してえぐれ、再び垂直に掘り抜かれる。－3.6m地点の平面形・規模は－0.95m地点のそれとほとんど差はなく、本来、垂直な掘り方であったと考える。埋土は8層に分かれるが、落ち込んだ状態の堆積が多くみられる。湧水は－3.15m地点の青灰色砂礫層(14)の下位より得られたが、壁面崩壊の－1.5～2.8mまでの水位上昇が想定できる。

桶側井戸（E－12）（第111図）

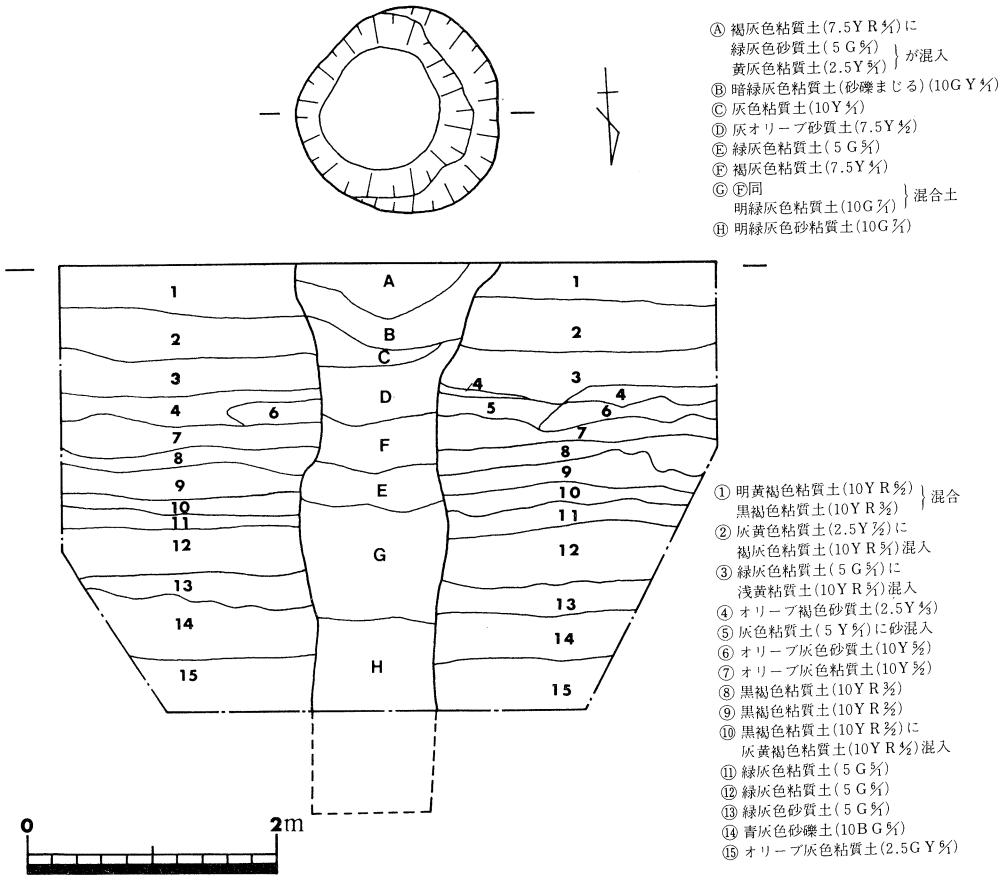
4地区の中央部において比較的集中する素掘りの井戸群の中にあり、上端に瓦（塼）積み1



第109図　井戸—17・18遺構図

段、桶側—6段を重ねた桶側井戸をほぼ完全な形で検出した。並行して調査された第3地区の桶側井戸（E—8）と、その規模を若干異にするが構造等は全く同じであり、むしろ桶側残存ともいうべき第3地区の桶側井戸を復元する手がかりと成り得た。

E—12は旧地形の畦畔の直下に埋没して存在するが、畦畔中央部に沿って設けられた水路が



第110図　井戸—19遺構図

井戸の直上を通過しており、井戸の上端部は破壊されている。そして井側の中には、この水路から流入した汚泥が詰っていた。したがってこの井戸はいったん放棄された時点で埋め房されることはなく、蓋をして保存されていたものである。

掘り方

瓦積み1段を残す（地山）上面で、平面形は端整な円形を呈しその規模に（長軸1.38×短軸1.37m）を測る。—0.2～0.25mにかけて内弯状の壁面傾斜があり段を有する。さらに—1.1mほど垂直に近い急傾斜面を呈して下がり、平面形は同じく円形を呈するが規模において（1.19×1.18m）を測り上縁よりやや縮小される。以下、5.6mの深さまでは垂直に掘り抜かれる。掘り方と桶側の隙間は、一段目の桶側との間で15～20cmを有するが、以下においてはわずかに5～10cm程度しかない。この掘り方が明らかに桶側の規模・構造によって規定されていることに

なる。さらに掘り方と桶側のわずかな隙間には、部分的に地山（壁面層）を混入させる所があるが、基本的には灰色砂（礫まじり）を中心として詰め込まれてあった。

湧水は－2.4m、桶側3段目の中位から南側へ大きく落ち込んでいくオリーブ灰色砂礫層(11)(自然流路か)からすでに得られる。しかしこの井戸における主要な地下水の湧出はその量からしても、一約4m地点からの明青灰色砂礫層(14)である。

桶側構造

土圧等による板の倒壊や歪みもほとんどなく、6段の桶側を完全に遺存させる本来の姿のままを調査できた。桶側は6段を検出したが、その構造・規模は基本的に同じであり、すなわちある程度の規格のもとに細部において若干の相異がみられる。

組まれる桶側板の数は、1段目—24枚、2～4段目—25枚、5・6段目—27枚で底の桶側ほど多く使われる。しかしその規模は、1段目で上端径103cm、下端径113cm、2段目－104cm・113cm、3段目－105cm・115cm、4段目－106cm・115cm、5段目－106cm・115cmを測り、さらに桶側の高さは97cm前後（1cm以上の差はない）を計測した。桶側井戸が一定の桶側の積み重ねによって組み立てられる構造であるために、必然的に各桶側は下方へ「ハ」の字形に広がる形状と同一規模を保っている。ただ底部にあたる6段目は、その上端径に107cm、下端径に110cmを測り、上段の桶側のような下方への広がりはさほどなく垂直に近く、第3地区の底部桶側と同じことがいえる。さらに6段目の桶側板の下端部は、内・外面からの削り出しによって尖がらせてあり、桶側を底の灰色砂土中に打ち込むようにして埋設していた。桶側の外側には1～3cm幅の竹を4本寄り合わせたたがを4条しめ回している。それは2条を10～25cmの間隙に近接させて、桶側の上方と下方に30～40cmほど離して2段みられるもので、等間隔を保っていた第3地区の桶側と異なる。湧水を吸収するための吸水孔を有する板は、すでに1段目の桶側から組み込まれている。1段目より吸水孔を有する板11枚—吸水孔14ヶ所、2段目～5枚—6ヶ所、3段目～12枚—16ヶ所、4段目～10枚—21ヶ所、5段目～16枚—34ヶ所、6段目～21枚—52ヶ所を数える。湧水の量が多い底部へ向う桶側ほど、吸水孔を有する板と共に吸水孔の数は多くなる。調査中に上方地層から湧水らしい湧水をみることはなく、12段目の桶側に施された吸水孔は不用な感を覚えるが、一方ではわずかな湧水（あるいは地表面からの雨水や流水の浸透）も無駄にしない井戸の利用ともいえる。

桶側の積み重ねは、上段の桶側を下段の桶側に回る最上段のたがの上に置くようにして重ねられている。その重ね幅はすなわち桶側上端から最上段のたがまでの長さに等しく、1～2段目で5cm、2～3段で12cm、3～4段で6～9cm、4～5段で7～10cm、5～6段で8～11cmを測る。桶側の全長は5.4mを計測する。

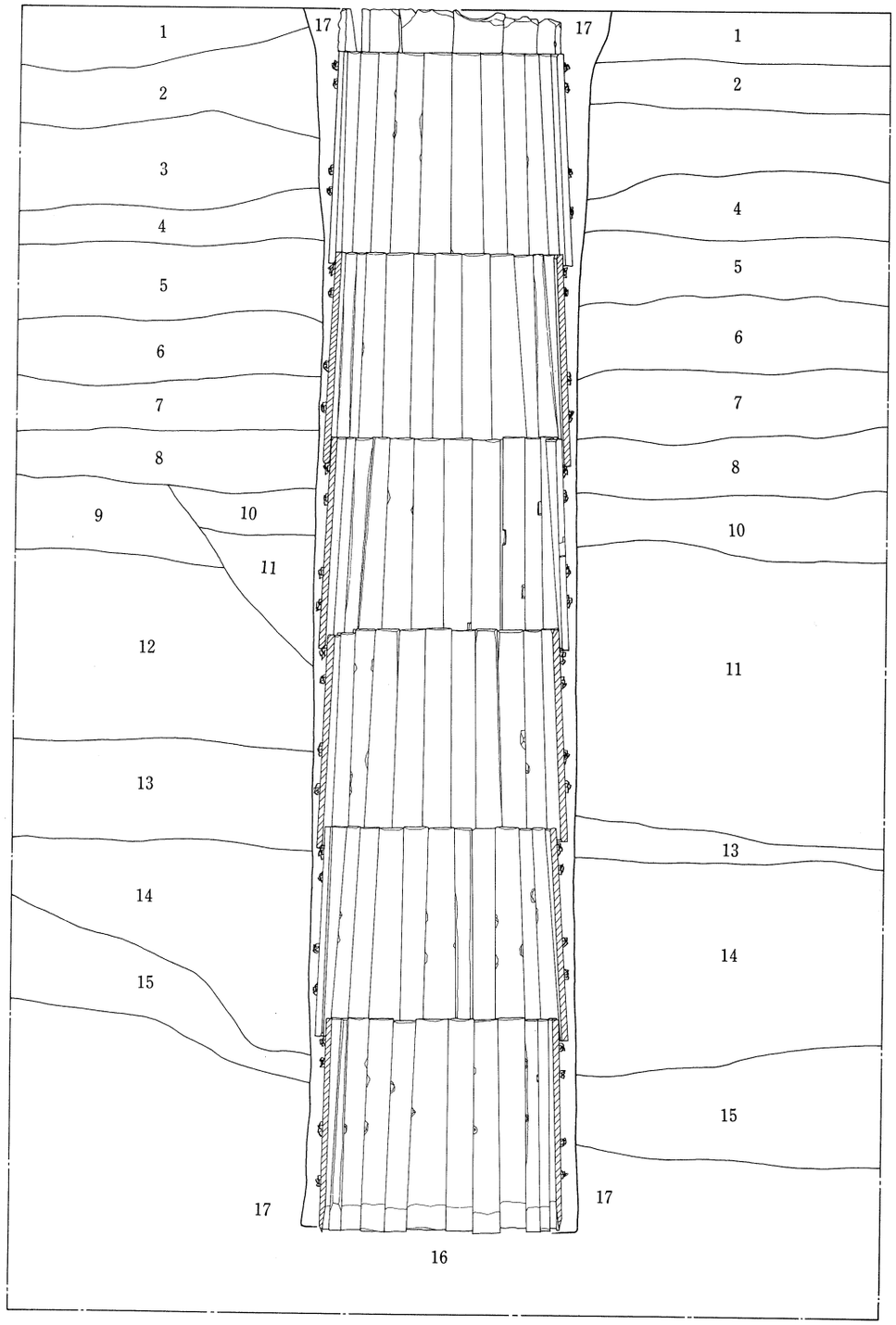
桶側板の加工

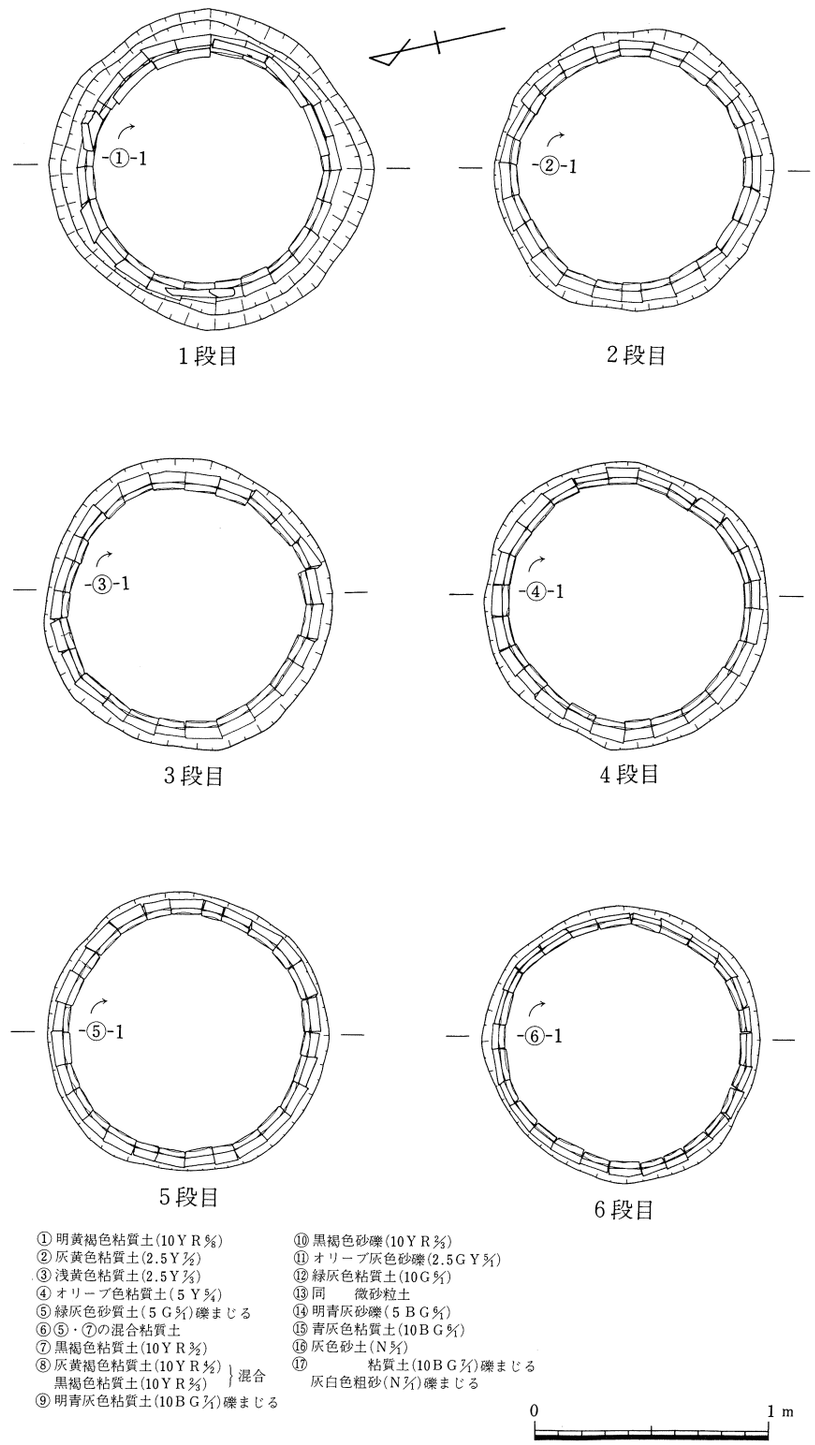
4地区の桶側は3地区のものと比較して、径を小さくする上に使用される板が多いため、より小幅の細長い長方形の板として製材されている。長さは前述したように97cm前後を測り、その差に1cmはない。上端の外側幅は10～15cmを測り、そして1cmほどの差をもって、内側の幅を狭く、下端の幅を広くする例が多い。各桶側には、この他に桶側を調整するための幅10cm未満を測る極端に細い板、上端幅の方が広かったりほぼ垂直に近い板も数枚つづ含まれる。

全ての桶側板に共通する加工として、内側の上・下端角と外側の上端角における面取りがある。内側のそれは角の全辺に渡って、幅1～2cmほどを細長い半月状に削りとる。外側の上端角の面取りは上端の左右角に集中するもので、細長い三角形状に削りとらせる。この上端左右角にみられる面取りの切り口は、各板が接合する側面部で一致しており、各板で三角形状の面取りは隣合わせの板を接合した時に三角形状が2つ結ながった細長い菱形状になる。つまりこの面取りが、各板の製材時に行なわれたのではなく、桶側を組んだ時に板の接合部をセットにして削ったことを示す。一方、6段目の桶側板だけにみられる加工が、下端部を尖端させることである。板の下端部を内側で9～10cm、外側で2～4cmの長さに渡って手斧で削り取って、薄い刃縁状に尖がらせるものである。手斧の削り（刃）幅に6.0cmを測る。底部にあたる6段目を土中に打ち込んで固定させるための加工で、本来は鋭かったであろう刃縁状の下端部はつぶれている。

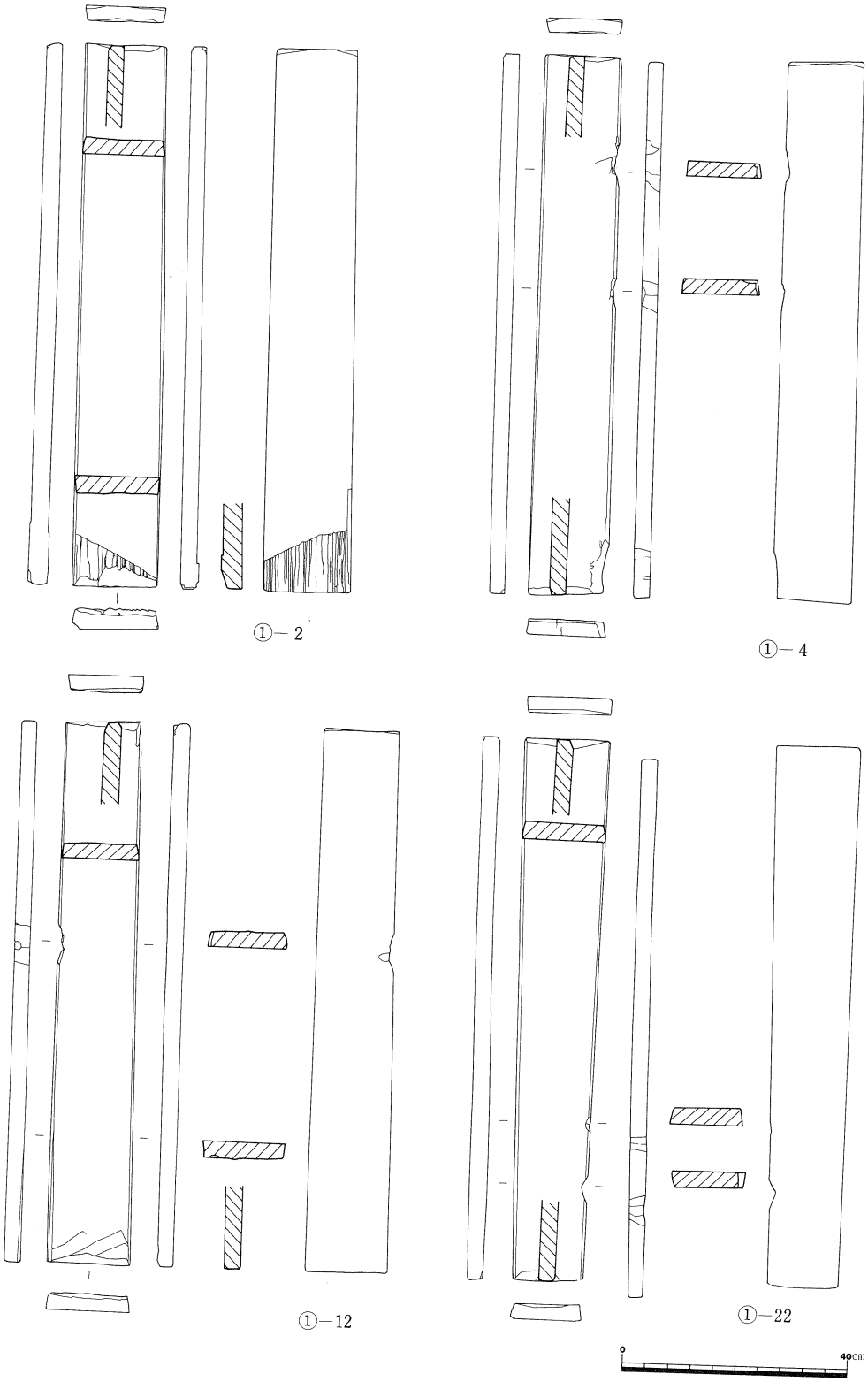
製材時の工具については、その加工痕からみて第3地区の桶側と全く同じで、鋸、鉋、斧、手斧である。繰り返すことになるがその製材過程は、①鋸で原材より板が裁断される。のこびきには端部近くで省略され、以下を裂くものがある。②鉋で側面を斜めに調整して、円形の接合を整える。③斧で側面に三角形、台形、半月状の切り込みを入れて、1～6ヶ所の吸水孔を設ける。④手斧あるいは鉋によって、角、下端面を削り取って面取りないし下端部を尖端させる。

材料の調達において、手斧痕を残す廃材利用が第3地区の桶側と同傾向を示す。廃材は全ての桶側に含まれており、1段目より2・7・10・10・7・12枚を数え総数48枚に及ぶ。手斧痕は片面のみに残っており全て桶側の内側へ向けられ、外側には製材時の新しいのこびき痕を残している。手斧の削り幅には7.0cmと12cmを測る例があり、後者は3地区の桶側の廃材にみられる手斧痕と等しく同一廃材とも思える。この手斧痕はまた、6段目の桶側の下端面に残る幅6cmの手斧痕と比較して、刃幅、残存状況からいっても明らかに新旧が認められる異なった加工痕である。吸水孔で興味あるものとして、長方形を呈する例があり中には未穿孔で吸水孔の役目を果たさないものがいくつかある。その加工は他の吸水孔における斧による切り込みとは異なり、ノミによる穿孔ないし加工である。この吸水孔はおそらく「ほぞ穴」を有する廃材の合理的な再利用といえるであろう。

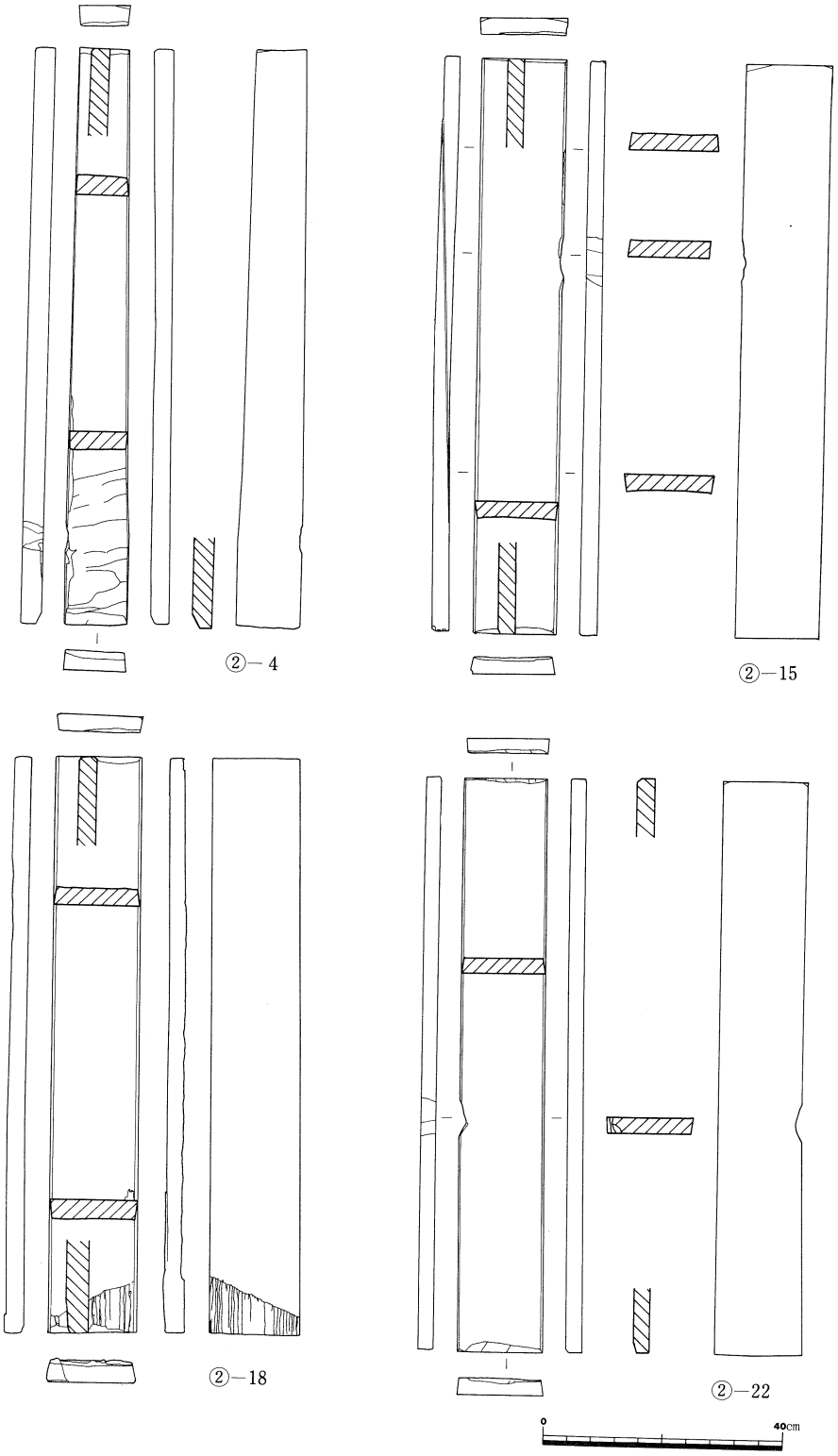




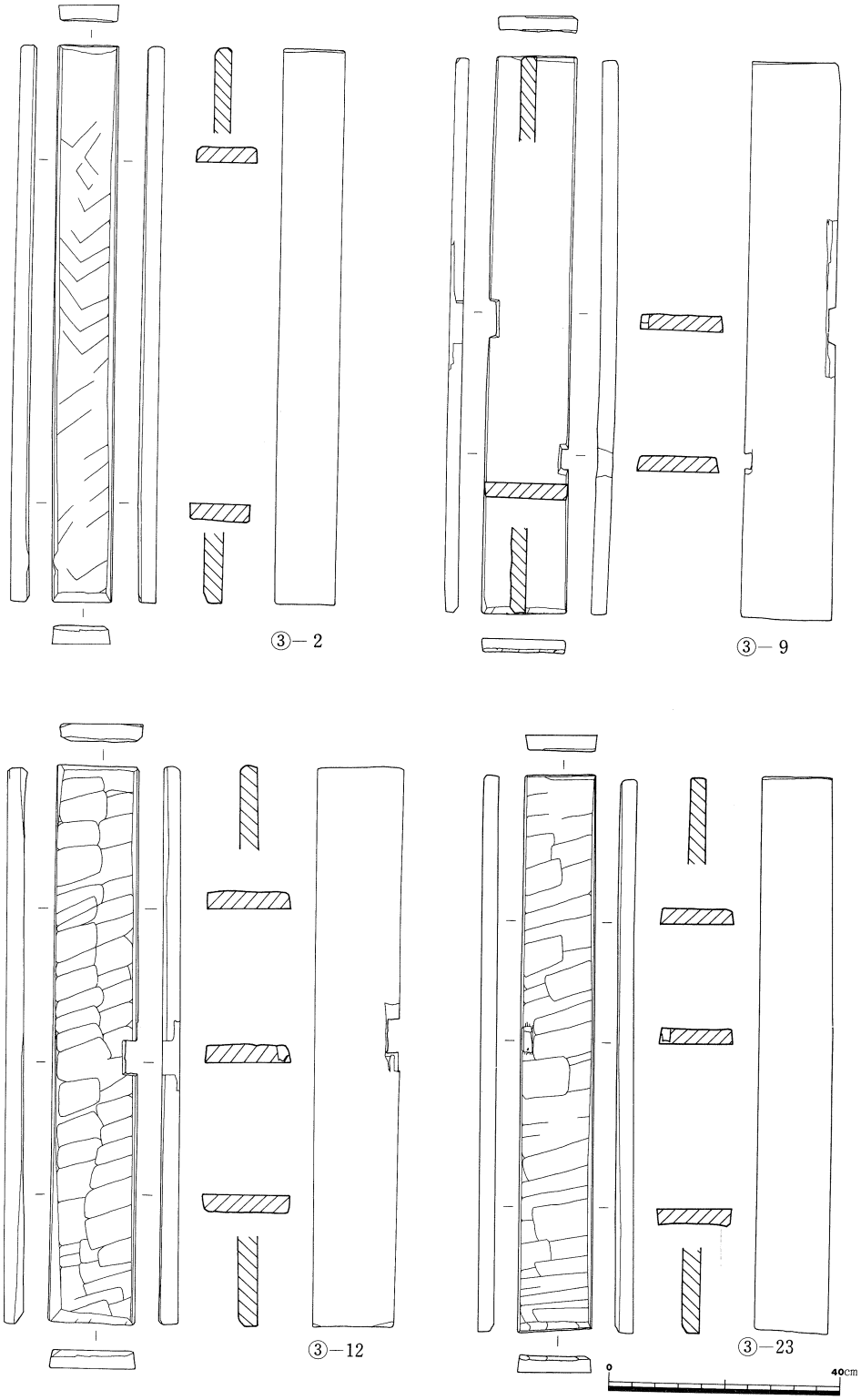
第111図　桶側井戸(E—12)実測図



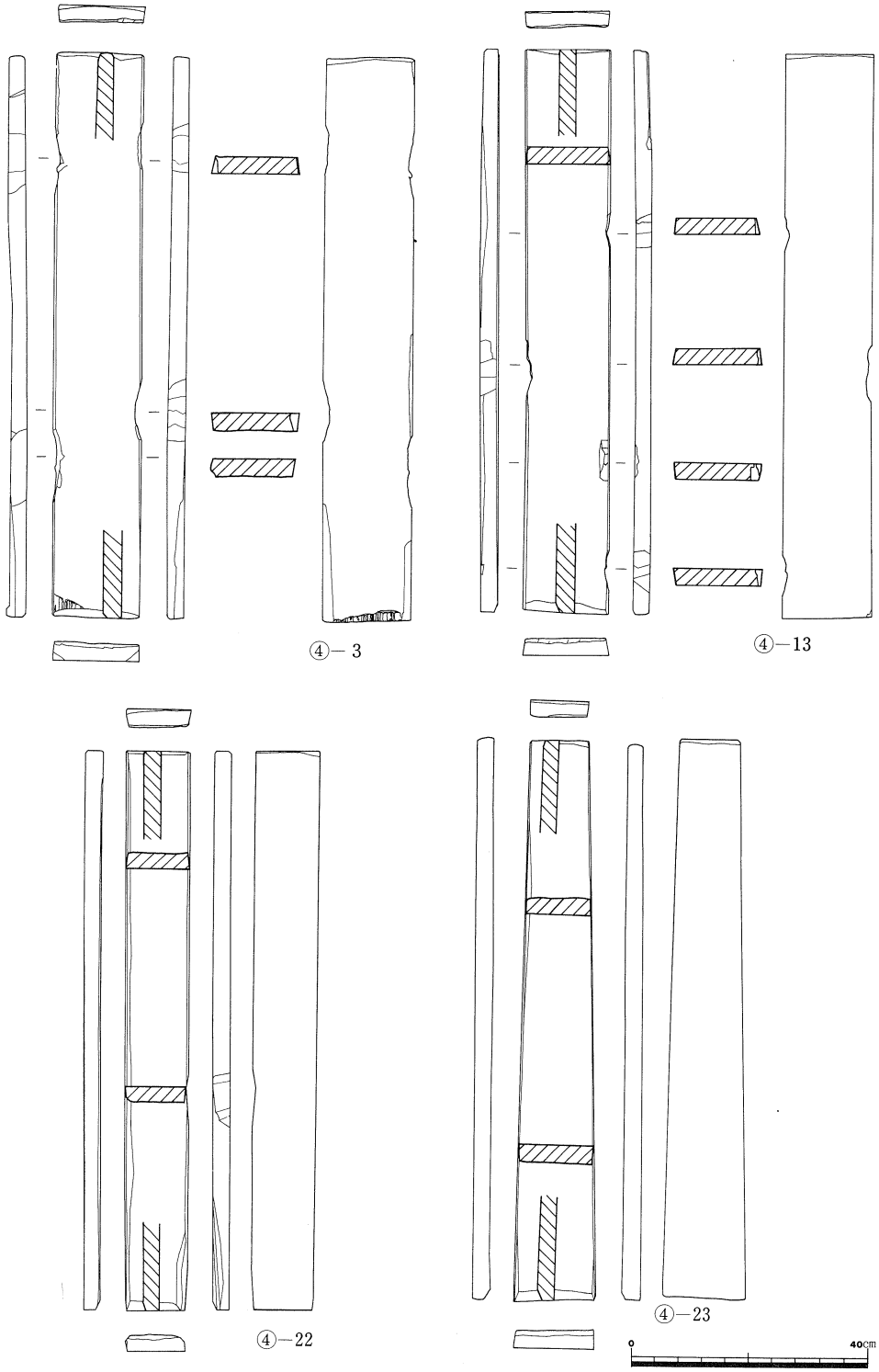
第112図　1段目桶側板実測図



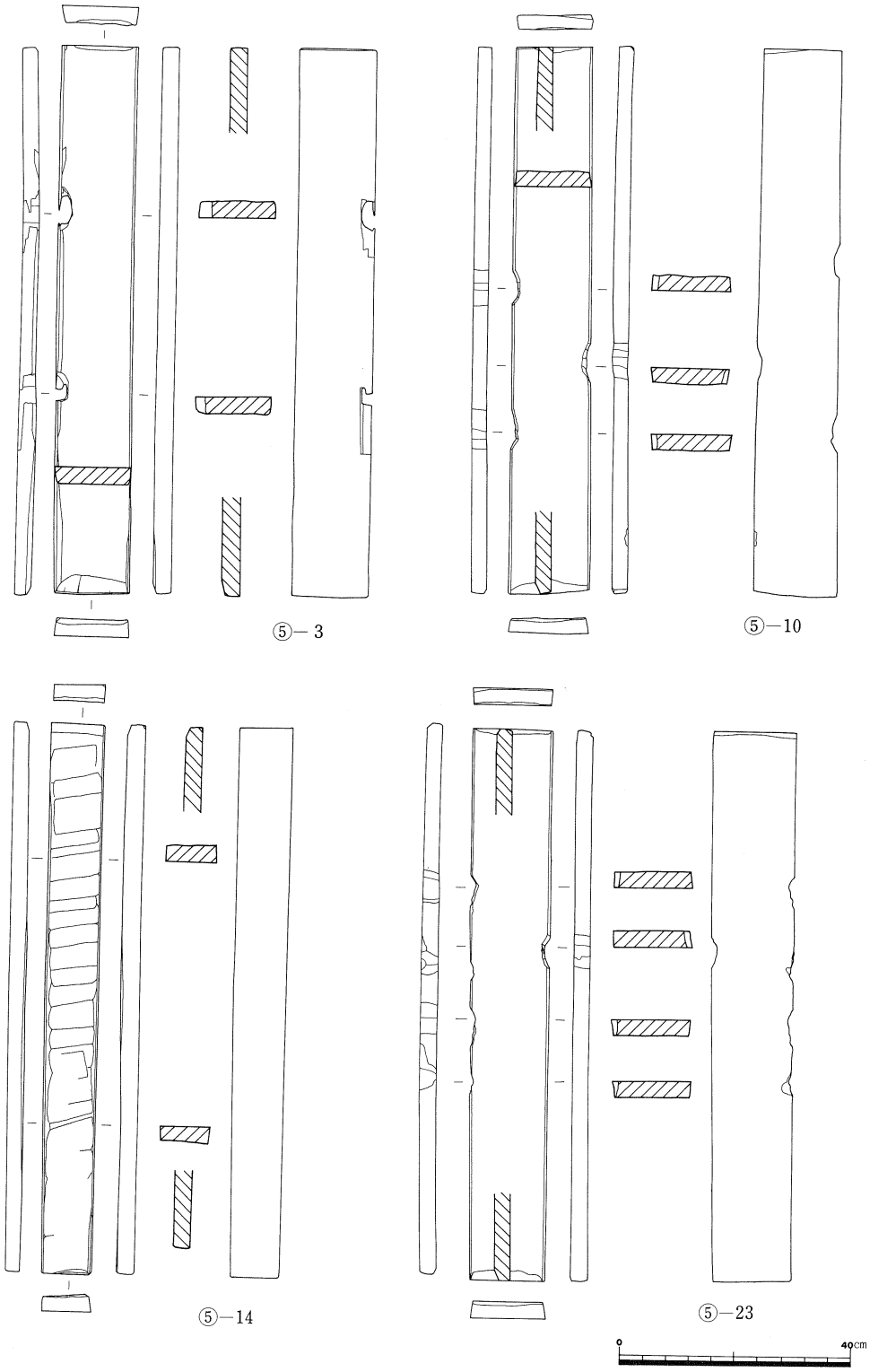
第113図　２段目桶側板実測図



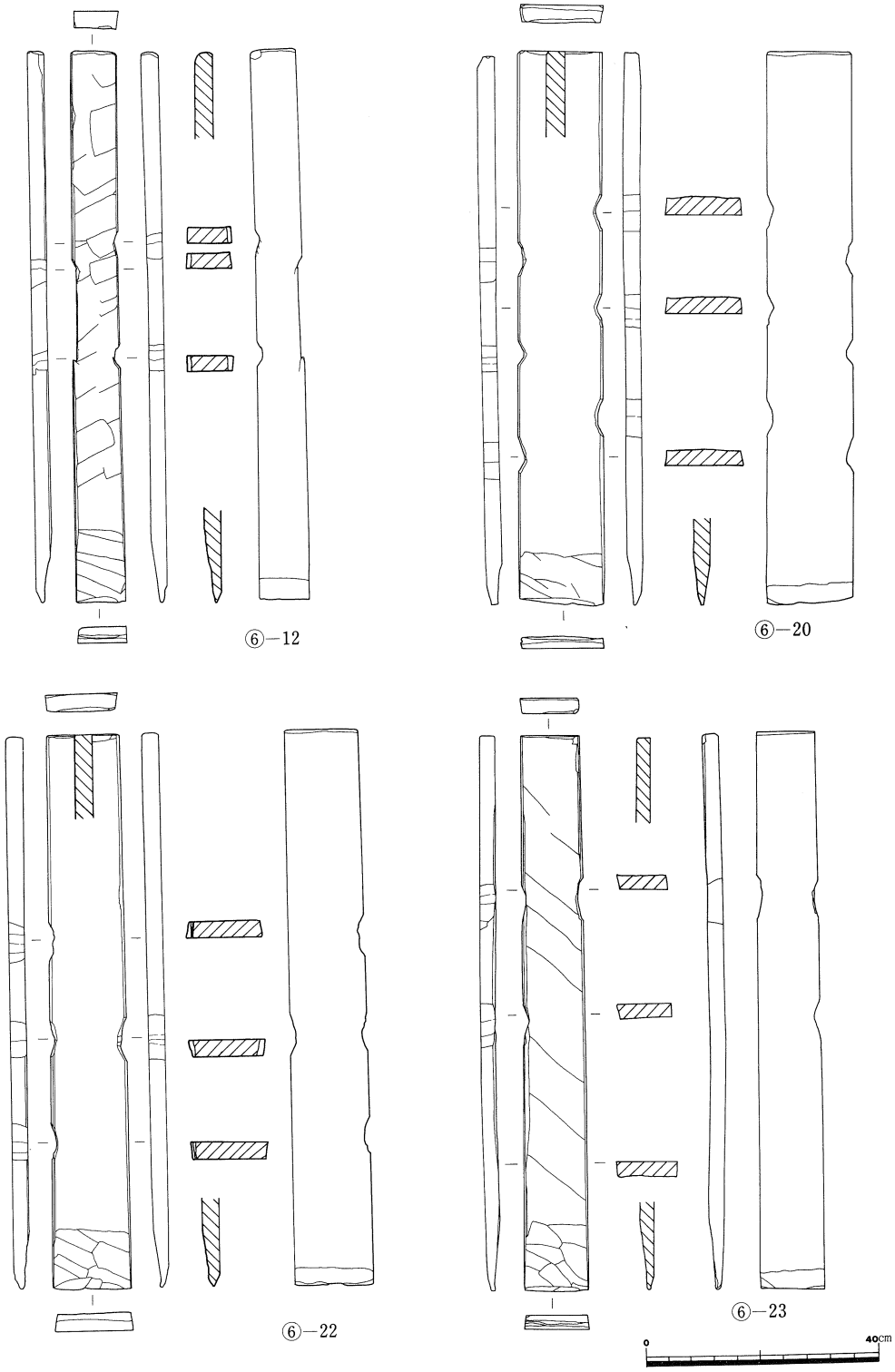
第114図　3段目桶側板実測図



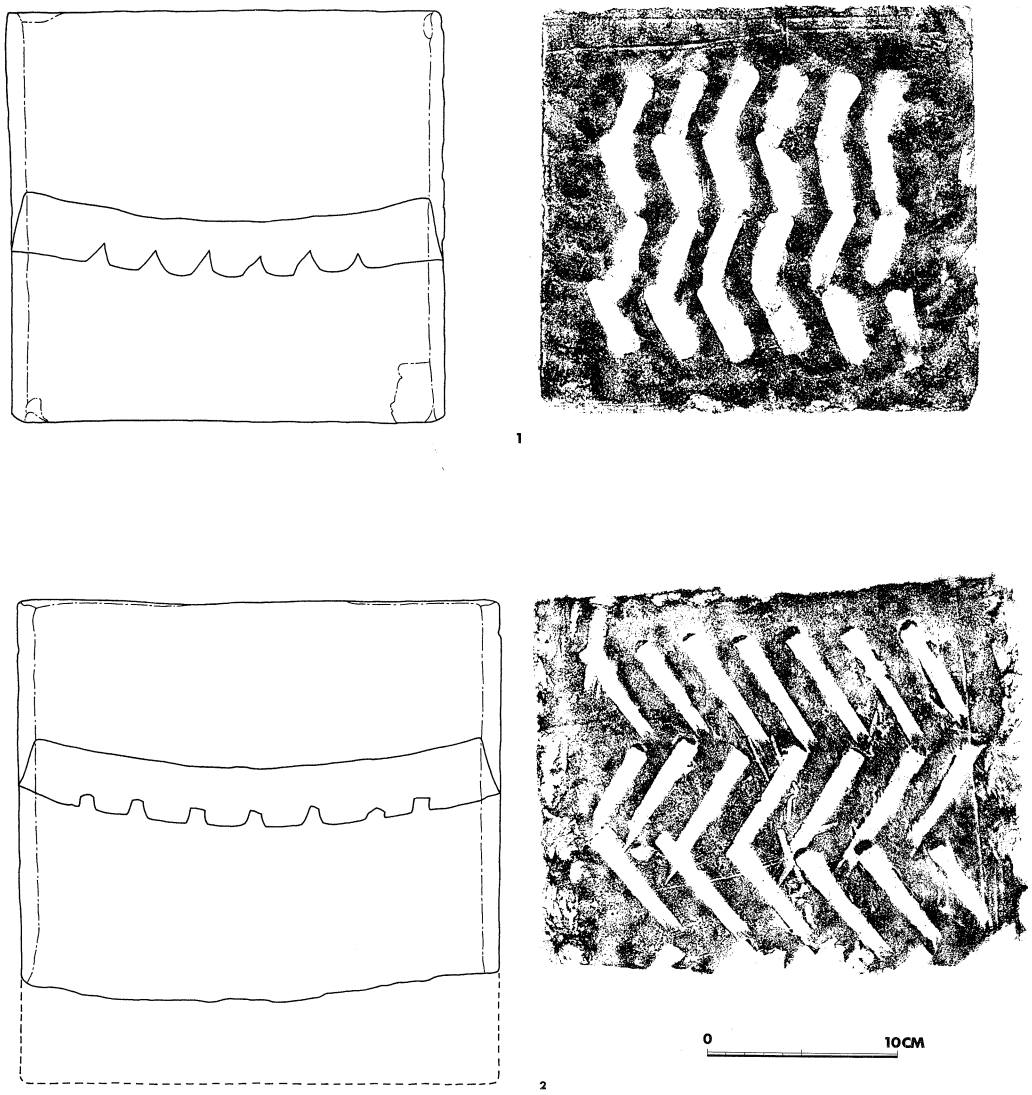
第115図　4段目桶側板実測図



第116図　5段目桶側板実測図



第117図　6段目桶側板実測図



第118図　E—12出土遺物・瓦

瓦積み（第118図）

桶側井戸の1段目に地表まで4段積みにして水のくみ上げを行っていたもので直径1.01m上に1周13枚の瓦をめぐらしていた。(1)は、長さ21.6cm、幅22.6cm、厚み3.0cmの外面に端部を丸くした「ハ」字形のクサビを並列に差し込む。(2)は、長さ(推)25.3cm、幅25.3cm、幅3.1cmと(1)より大ぶり。クサビが直線的で「ハ」「ノ」字形を組み合せて彫る。色調・胎土・焼成には、屋瓦と遜色ない。

条里制遺構（畦畔）

条里制畦畔の存在、築造施行時期、現代の条里制畦畔との関係について明白にすべく、旧地形の記載された田畑の畦畔を中心に10ヶ所について土層観審した結果、報告した６ヶ所で明確な痕跡を把握した。（第119・120図）

セクション―８　条里制畦畔上面にいたるまでに盛土・耕作土・灰黄褐色砂質土・床土・黄褐色土・褐色土の６層がほぼ水平層として層序を成していたが北側に耕作用井戸と第11層によって多少乱れていた。畦は、２時期に築造され、第５層・灰褐色粘質土、第６層・灰黄褐色粘質土を基盤として盛り上げていた。上辺幅１.６ｍ、下辺幅2.30ｍ、全高0.32ｍを計測し、北側に幅1.56ｍ、深さ0.18ｍの溝を確認した。尚、セクション共に、地山は明黄褐色粘質土である。

セクション―９　大辺幅2.48ｍの凸レンズ状に変形した畦畔は、北側にも崩れていた。畦畔は、第５層を築造して灰褐色粘質土（５ＹＲ⅘）として層位を示し上層には盛土・床土・黄褐色土・褐色土がベルト状に堆積する。その下層には、地山までの間層として灰褐色粘質土と古墳時代と考えられる黒褐色粘質土の２層が同じくベルト状堆積として認められた。

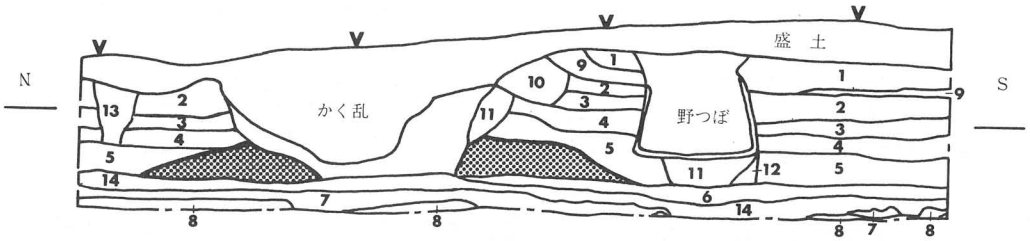
セクション―10　畦畔の中央と右上に攪乱が図化されてしまったが畦畔復元に支障はない。畦畔は、第５層を基本土層として形成したもので下辺幅4.00ｍ、上辺幅2.30ｍ、高さ0.35ｍと確認された畦中では腰高い。その上層には、第１～４が下層には、第６・７・14層が層位を呈する。又、セクション―８・９は東西畦を、セクション―10・11はロータリー部分を、セクション―12・13は、南北畦を堆し測るのに十分役立つた。

セクション―11　畦畔の土層構成や上層位も前者と同様であるがその下層が第６層の一層のみに限定される点に相異がある。セクション―８・12・13でもそうであるが下層を整形せずに畦畔を作り出す。下辺幅2.04ｍ、上辺幅1.46ｍ、高さ0.26ｍを計測した。

セクション―12　畦畔を上下する層序は、セクション―11と大差ないがその形態がレンズ状、かつ、褐灰色粘質土に変化してしまていた。

セクション―13　褐灰色粘質土の畦畔は、下辺幅1.26ｍ、上辺幅０.９ｍ、高さ0.22ｍを測り第４層を基盤としている。第９層のレンズ堆積以外は、帯状堆積で畦畔は、第５層上面にのせ西側からの第４層を東側で切断させて深さ0.25ｍの溝として形成した。ただし、幅は、Ｅ側の最近の水路によって攪乱を受けたため復元出来ない。尚、下層には、第５・６層が極めて薄く層位を成す。特に、このセクションにおいて顕著であったのは、最近の畦畔との関係が明白な事実である。それは、他の５セクションにも共通していることで正に、垂直関係に存在すると断言してよい。

セクション10



①

〃同

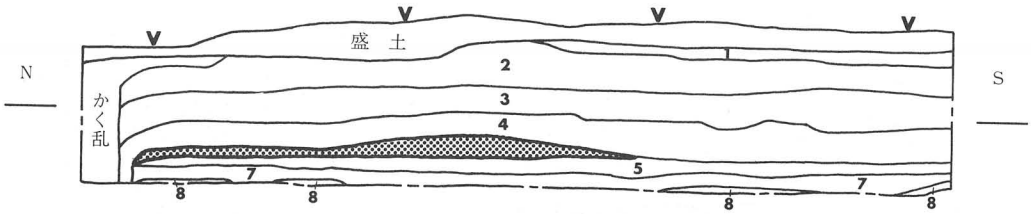
⑧
⑨

⑩

〃同

⑬
⑭杭痕・黄灰色土（2.5Y 5/1）
⑮にぶい黄褐色砂質土（10YR 5/4）
条里畦―⑤より暗ぽい

セクション9

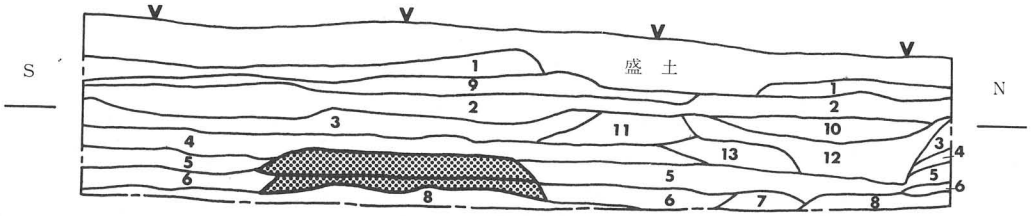


①

〃同

⑧
条里畦―灰褐色粘質土（5YR 4/2）

セクション8



①

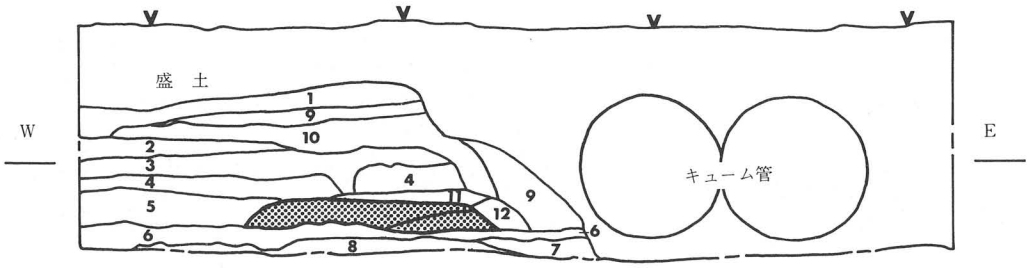
〃同

⑧
⑨灰黄褐色砂質土（10YR 4/2）
条里畦―⑤・⑥より褐色ぽい

⑩浅黄色粘質土（2.5Y 7/4）
⑪③より灰白ぽい
⑫灰色砂粘質土（10Y 5/1）
⑬明灰黄褐色粘質土

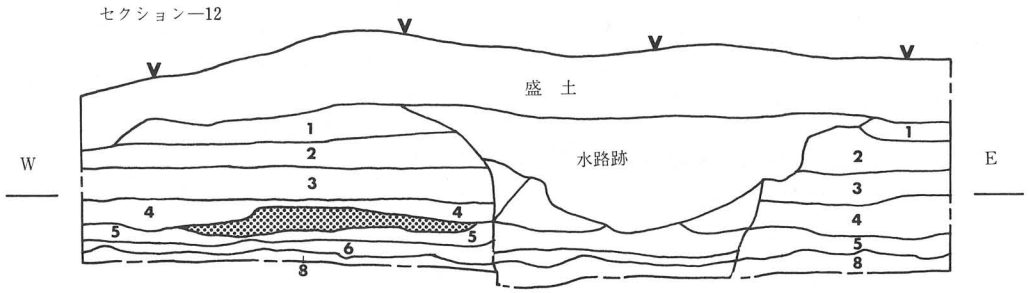
第119図　条里制遺構土層断面図（S－8～10）

セクション—11



①耕作土オリーブ褐色土（2.5Y 4/3）
②床土明黄褐色土（2.5Y 7/6）
③黄褐色土（10YR 5/6）
④褐色土（10YR 4/6）
⑤灰褐色粘質土（7.5YR 4/2）
⑥灰黄褐色粘質土（10YR 5/2）
⑦黒褐色粘質土（10YR 3/2）
⑧地山明黄褐色粘質土（10YR 6/8）
⑨①より白ぽい
⑩黄褐色土（2.5Y 5/4）
⑪④より灰色ぽい
⑫⑤より灰色ぽい
条里畦—⑤より褐色ぽい

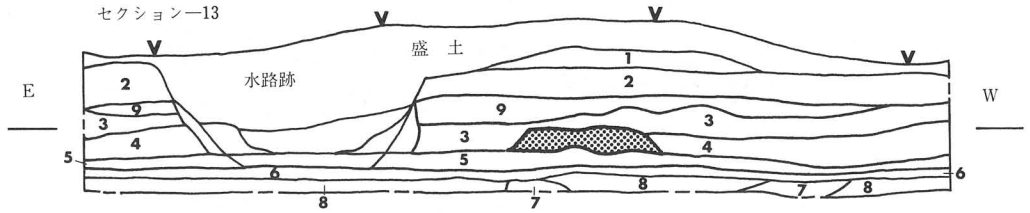
セクション—12



①
〃同上
⑧

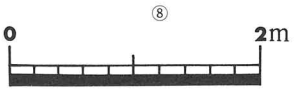
条里畦—褐灰色粘質土（7.5YR 5/1）

セクション—13



①
〃同上
⑧

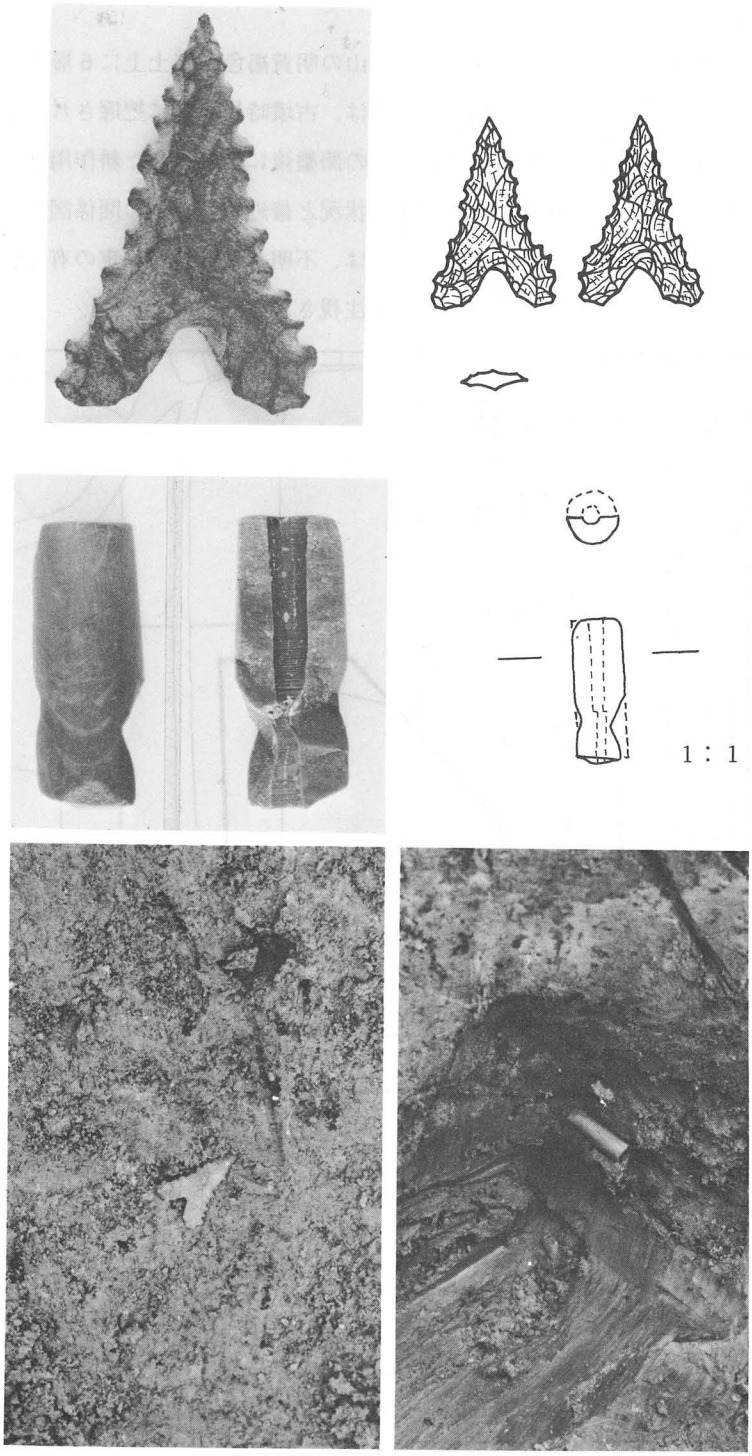
⑨灰黄褐色粘質土（5YR 4/2）
条里畦—褐灰色粘質土（7.5YR 5/1）



第120図　条里制遺構土層断面図（S—11～13）

(3) 出土遺物

調査区域全体の第1～6層からなる水平層からは、著しくローリングを受け、風化した土師器・須恵器・瓦器・黒色土器・瓦類等を検出したが特記して図化出来たのは、数例のみであった。　**石鏃**　全長2.55cm×最大幅1.65cmは、サヌカイト製で3mmと薄く仕上げる。ステップ・フリーフレキングを併用して両側面には、鋸歯状のトリミングによって調整した優品である。　**滑石製管玉**　2方向から直径1～2mmの穿孔しその時点でのドリル調整した微細なピッチが知られる。中央部で縦に半裁しているが残存長1.9cm×直径0.7cmを計測した。色調―灰オリーブ色（5Y4/2）



第121図　第4地区出土遺物・出土状態

(4) 小　　結

第4地区の大半の基準層位は、地山の明黄褐色粘質土上に6層から構成された水平層が認められ、それらの層位に包括され遺構は、古墳時代後半に把握される水田址と考えられる不明土坑、中世期の条里制畦畔、新大和川の開鑿後に掘削された耕作用井戸が上げられる。特に、下図に記した如く、耕作用井戸の検出状況と最近の畦畔との関係図で半折型の地割に各々1ヶ所づつ設定している。出土遺物としては、不明土坑の時期決定の有力資料に須恵器・杯身、古墳時代中期に存在しよう滑石製管玉が注視される。

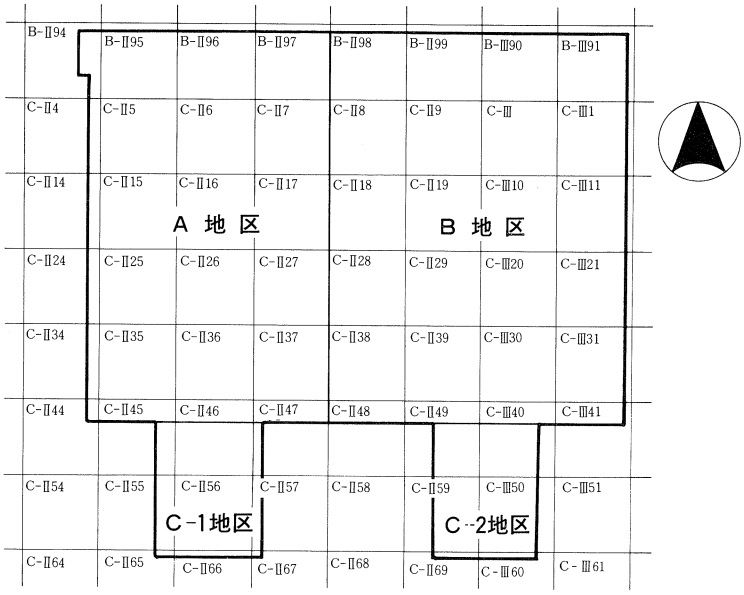
第122図　第4地区周辺旧状図と井戸位置図

4．第5地区

(1) 地区設定〔第123図〕

第5地区の地区割は大和川・今池遺跡全域の地区割に従って実施した。大和川今池遺跡の地区割は真南北を基準とし大区画を一辺100mの正方形として、縦軸は北から順にアルファベット大文字A、B、C……、横軸は西から順にローマ数字Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ……と呼んでいる。よってそれぞれの大区割は、例えば、C－Ⅱ、E－Ⅳと表わされる。大区画の内部は一辺10mの正方形に百等分し、北西隅を0として東へ1、2、3……と数え9で東端となって、西端へもどりまた10から数える。このようにして小区画すべてに番号を与えてゆき、南東隅は99となっている。それぞれの区画線の交点には杭を打ち込んで示し、北西隅の杭にその小区画を代表させている。

第5地区は大区画ではB－Ⅱ、B－Ⅲ、C－Ⅱ、C－Ⅲの4区画にわたっており、小区画ではB－Ⅱ94に始まって計53区画に吸ぶ。さらにこの小区割は必要に応じて一辺5mの正方形に四等分し、それにはアルファベット小文字a・b・c・dを与えた。また第5地区の場合、調査の便宜上A地区、B地区、C－1地区、C－2地区の4地区にわけた。A地区・B地区は汚泥処理棟本体のそれぞれ西半・東半にあたり、C－1地区・C－2地区は汚泥処理棟に接続する管廊部で、それぞれの地区は第123図に示したとおりである。

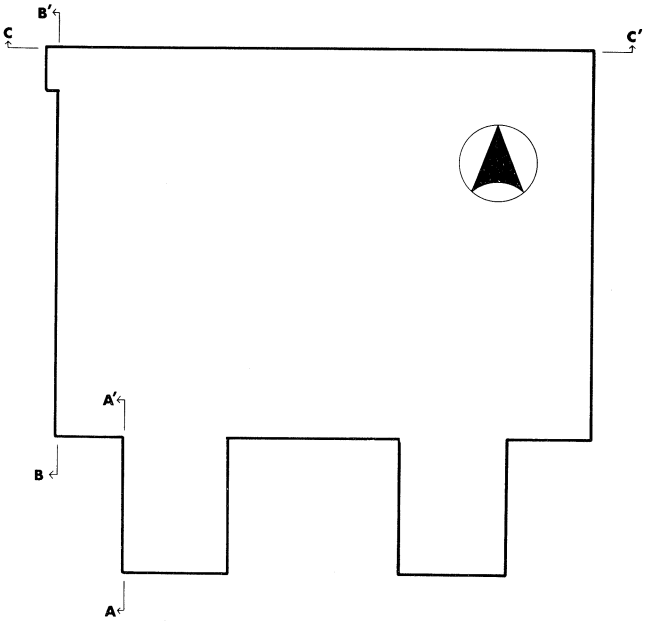


第123図　第5地区地区割図(1：1000)

(2) 層　　序〔第125図〕

大和川・今池遺跡は泉北丘陵から上町台地につづく洪積段丘中位面の東縁に立地し、東側には旧西除川の氾濫原・谷底平野がひろがっているが、現在、遺跡の周辺は一面の水田となっている。現地表面の標高はO.P.＋10m～11mで、南側が高く北側にゆくほど低くなっているが、これは今池処理場建設に伴なう盛土によるもので、盛土をのぞいた水田面の標高は一様に10.2m前後の値をとる。

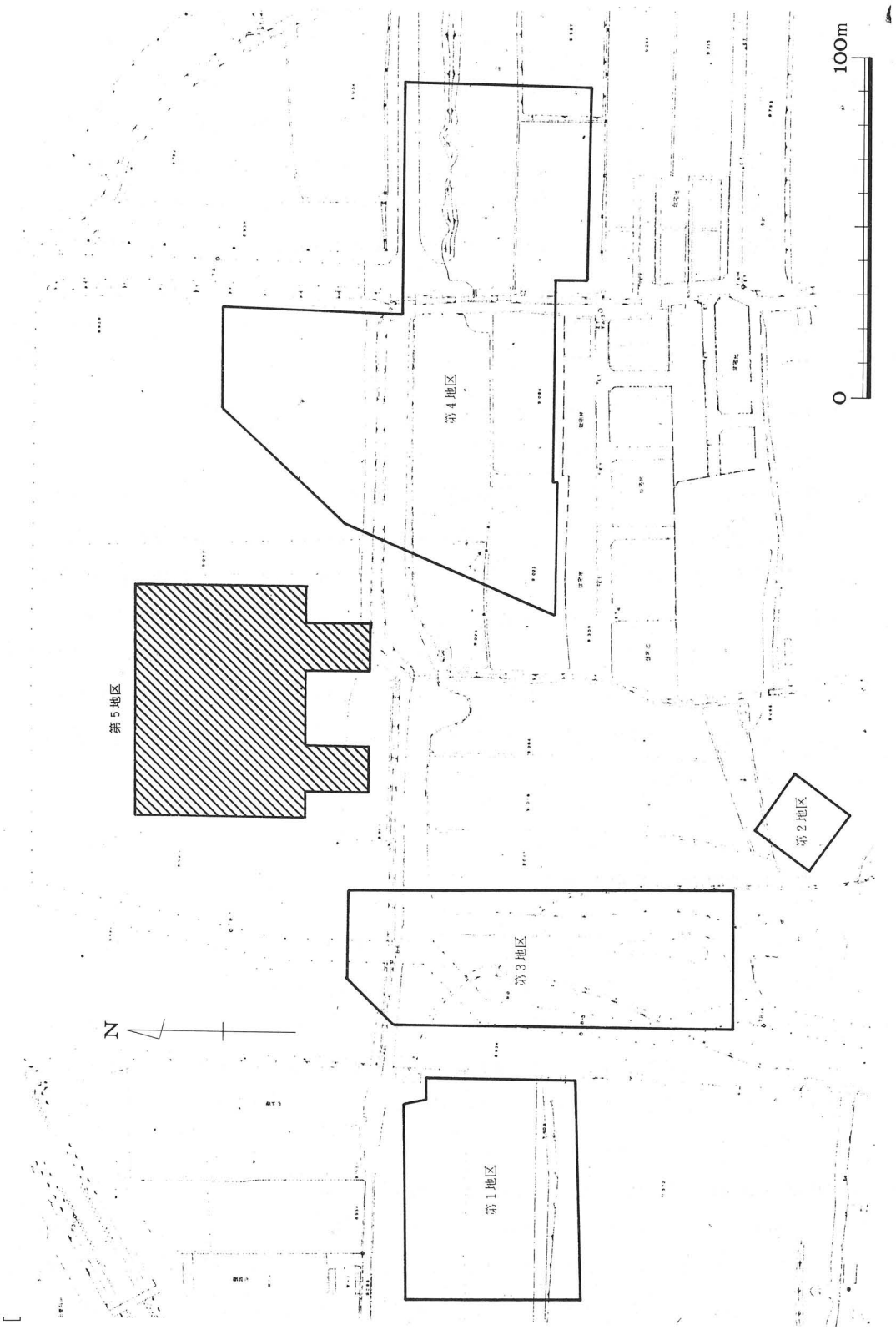
次に、西壁及び北壁の土層をとりあげ、第5地区の基本的層序を述べる。第1層～第3層はそれぞれ盛土・耕土・床土で地点によって厚さは異るが、床土の下面はO.P.＋10.0m前後の値をとる。第4層～第9層はいずれも中世の遺物を包含する堆積層で、第4層・第5層は全域を被い、第6層～第9層も地山の低くなったB地区を中心にかなり広く堆積している。第4層灰黄褐色土（10YR 4/2）は瓦器・土師器・瓦などの小片を包含するが、全般に出土量は少い。第5層黒褐色粘質土（10YR 3/2）は約



第124図　セクション位置図（1：1000）

1．盛土
2．耕土（暗灰黄色土　2.5Y 4/2）
3．床土（黄褐色土　2.5Y 5/4）
4．灰黄褐色土（10YR 4/2）
5．黒褐色粘質土（10YR 3/2）
6．黒褐色粘質土（10YR 2/2）
7．黒褐色粘質土（7.5YR 2/2）
8．黒褐色粘質土（5YR 2/1）
9．灰黄色粘質土（2.5Y 6/2）
10．黒褐色粘質土（10YR 2/2）
11．黒褐色粘質土（10YR 3/1）
12．灰黄褐色粘質土（10YR 5/2）
13．灰黄褐色粘質土（10YR 3/2）
14．黒褐色粘質土（2.5Y 3/2）
15．黄褐色粘質土（10YR 5/6）
16．にぶい黄褐色砂（10YR 5/4）
17．褐色砂礫（10YR 4/4）
18．明黄褐色砂礫（10YR 6/6）
19．褐灰色砂礫（10YR 6/1）
20．褐色砂（10YR 4/6）
21．灰黄褐色砂（10YR 5/2）
22．黄褐色砂礫（2.5Y 5/4）
23．灰黄褐色砂（10YR 4/2）
24．灰黄褐色粘質土（10YR 4/2）
25．灰黄褐色粘質土（10YR 5/2）
26．褐灰色礫（10YR 5/1）
27．明褐色粘質土（7.5YR 5/8）
28．明黄褐色砂質土（10YR 6/8）
29．緑灰色粘質土（5G 6/1）
30．緑灰色砂質土（5G 6/1）
31．青灰色シルト（5BG 6/1）

第126図　大和川・今池遺跡第5地区遺構配置図



第126図　第５地区位置図

20cmの厚さで堆積しており、古墳時代に属する須恵器・土師器も包含されているが、瓦器・瓦なども出土し、やはり中世の所産であることが知られる。第6層黒褐色粘質土(10YR2/2)・第7層黒褐色粘質土(7.5YR2/2)・第8層黒褐色粘質土(5YR2/1)は色調がわずかに異るだけで大差ない堆積層であり、いずれも遺物をほとんど含まないが、瓦器片などがごく少量包含されている。第9層灰黄色粘質土(2.5Y6/2)は地山と包含層の混合土で、やはり遺物はほとんど含まれていない。

第10層～第13層は条理畦畔に関連する堆積でこれについては別に項を設けているのでここでは触れないでおく。

第14層黒褐色粘質土(2.5YR3/2)は地山の凹んだところに部分的に堆積しているのみであまり広がりは認められないが、古墳時代の須恵器・土師器を包含している。

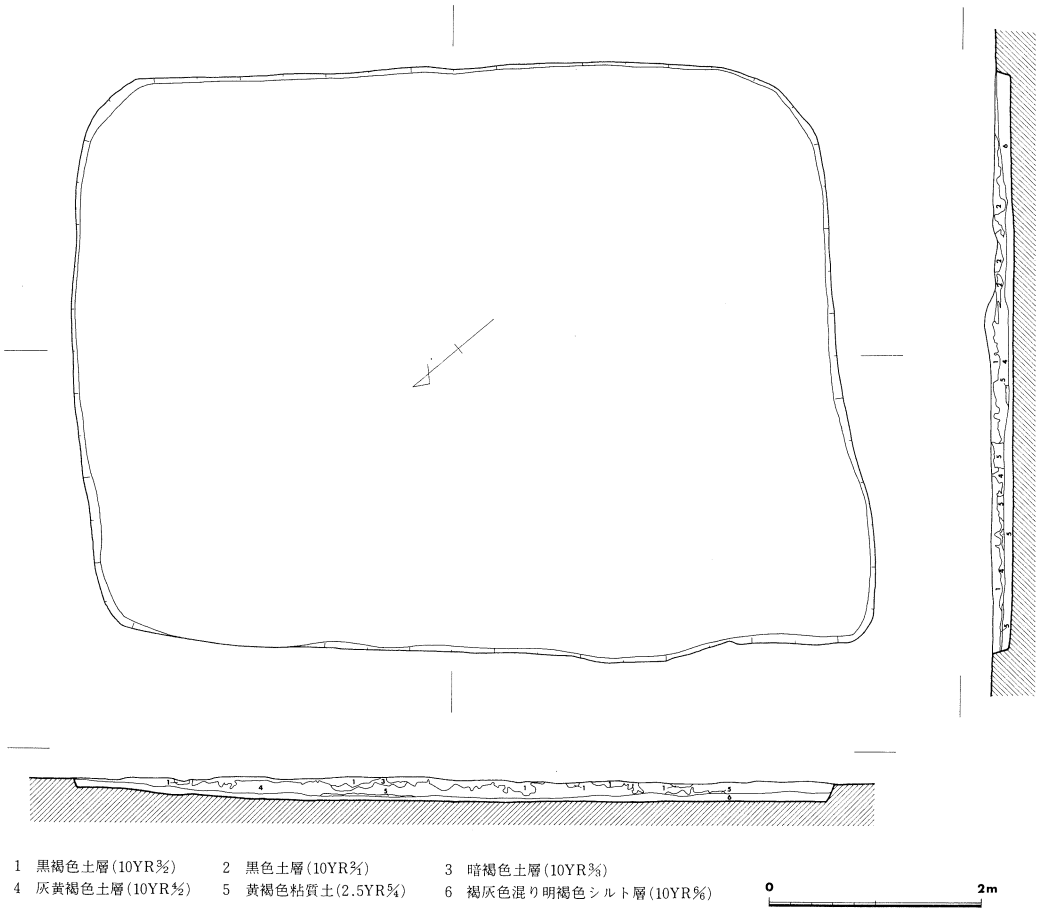
第15層黄褐色粘質土(10YR5/6)以下が地山で、古墳時代の遺構は主としてこの面で検出したが、第15層自体かなり削平をうけていると考えられ、後述する掘立柱建物(SB02)の中央でも地山にへばりついた状態で瓦器片が出土しているのはその証左と言える。地山下の堆積は西壁では単純だが北壁では複雑である。西壁では第15層の下には第24層灰黄褐色粘質土(10YR4/2)があってこれは北壁東側にもみられる。その下は第27層明褐色粘質土(7.5YR5/8)が堆積している。一方北壁の場合、西側では第15層の下にかなりの砂礫層が堆積している。第16層にぶい黄褐色砂(10YR5/4)～第23層灰黄褐色砂(10YR4/2)がそれで、各層の状況はまちまちだが、全体として溝もしくは流路状をなしている。

(3) 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代に層すると考えられる遺構はその大部分をA地区において検出した。竪穴住居・掘立柱建物・柵列・井戸・土壙などがあり、地山面で検出したものがほとんどを占める。古墳時代のプライマリーな包含層は、前述のように土層断面では一応認められるものの、調査区域内におけるひろがりは意外と少なく、C-Ⅱ15区やC-Ⅱ45区に部分的に認められるにすぎない。各遺構のところでも述べるが、地山はかなり削平をうけていると考えられ、地山面のひくいところに堆積したものが現在残っていると考えてよかろう。

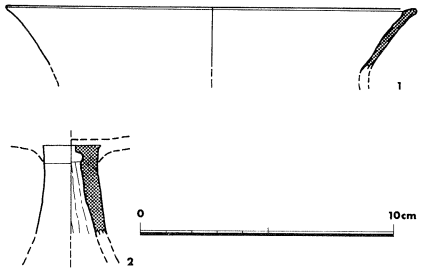
竪穴住居(SB01) 〔第127・128図; 図版24、図版46－3・4〕

C－Ⅱ25区・C-Ⅱ26区で検出。平面形はやや歪んだ隅丸長方形で、長辺は西側で7.2m、東側で6.8m、短辺5.5mで、西隅が若干張り出した形態をとる。主軸はN-45°-E、地山面で検出したが地山自体がかなり削平をうけていると考えられるので本来の切り込み面は確認できない。検出面からの深さは壁面付近で15cm前後、中央で20cm前後である。埋土は2層に大別でき



第127図　SB01実測図

る。上層は第1層黒褐色土(10YR3/2)と第4層灰黄褐色土(10YR4/2)を主体とし、その間に黒色土(10YR2/1)、暗褐色土(10YR3/3)、黄褐色粘質土(2.5Y5/4)がブロック状に混っている。下層は第6層褐灰色混り明褐色シルト(10YR6/6)で地山上に一様に堆積しており、張床の可能性もある。なお、第6層上面においても地山面においても柱穴・周溝などは認められなかった。



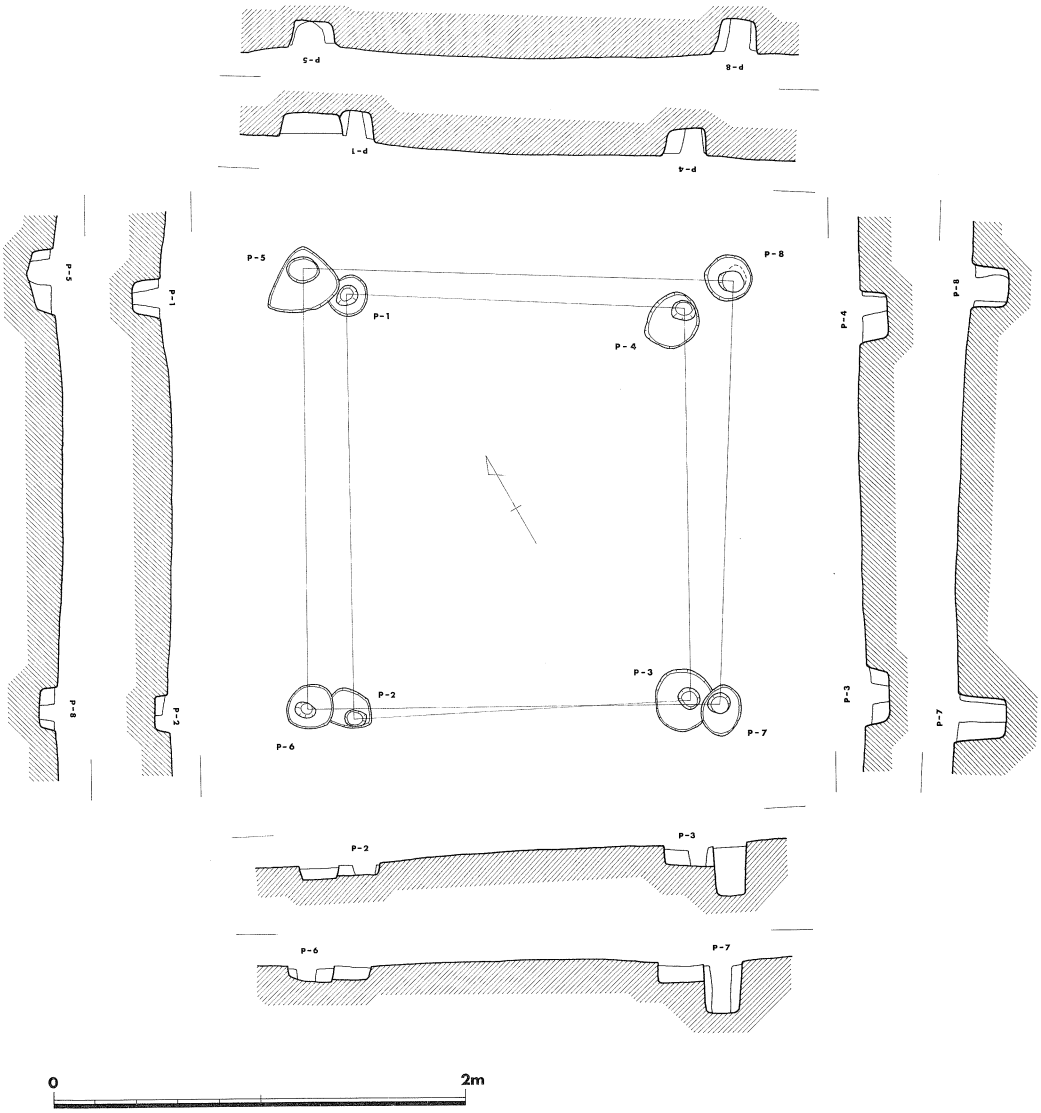
第128図　SB01出土土師器

出土遺物は全般に少い。検出面及び埋土上部の黒褐色土からは瓦器片数点、須恵器杯身1点が出土しているが、これは混入と考えられる。そのほかの遺物はすべて古墳時代に属すると思われる土師器で、床面にすわった状態のものはなく、いずれも浮いた状態で出土している。甕形土器(1)は口縁部のみの破片で、弱く外反し端部は内側に丸く肥厚する。内外面とも表面剝離著しく調整不明。口径16.0cm、胎

土は砂粒をほとんど含まずこまかい。焼成良好、色調は灰白色を呈す。高杯形土器(2)は脚部の破片で、脚部最小径2.1cm、内面にしぼり目を残す。胎土には0.5～2.0mmの砂粒を含み、焼成良好、にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。

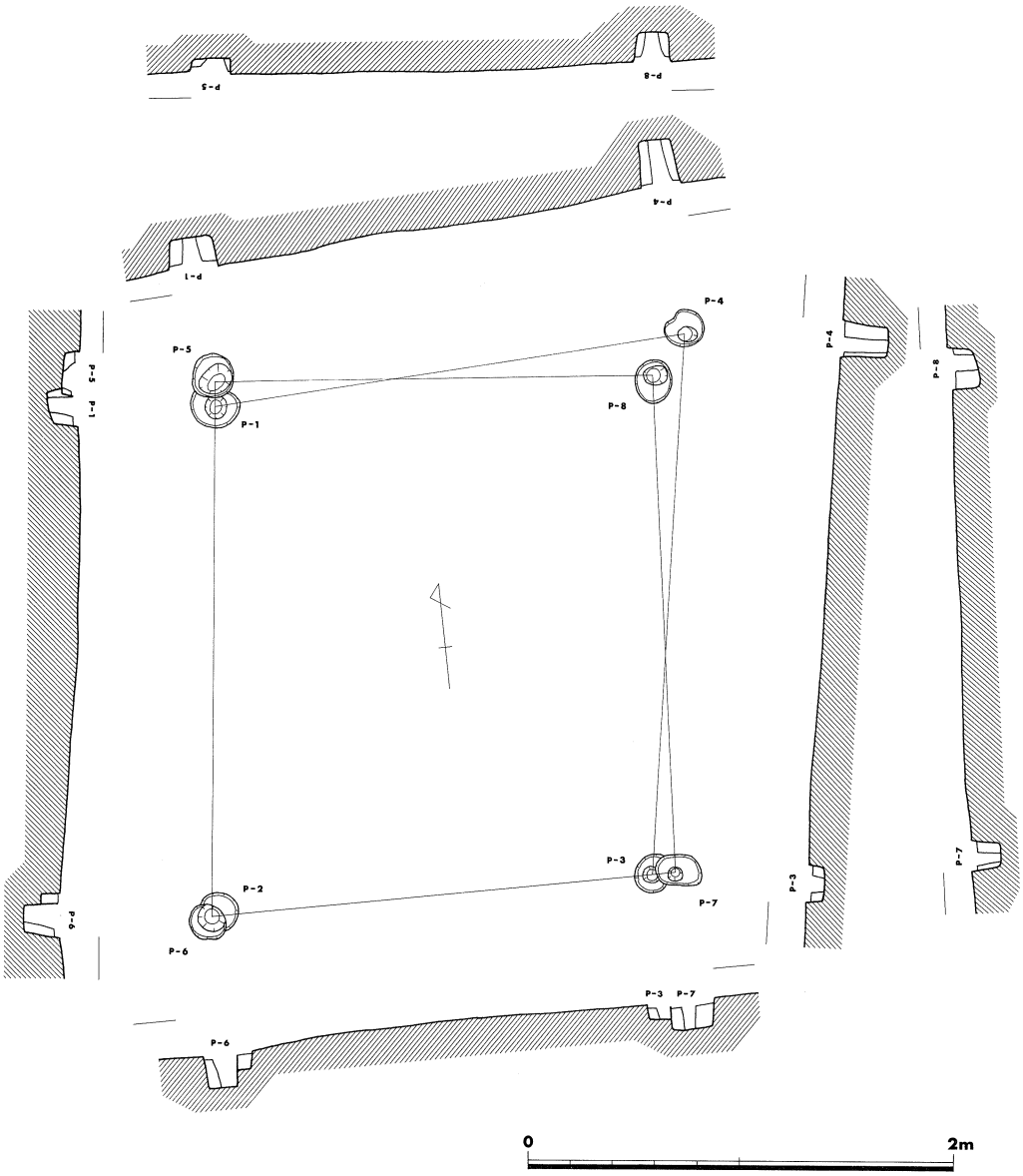
掘立柱建物(SB02) 〔第129図; 図版25〕

C－Ⅱ6区で検出。SB01の北西約20mに位置する。地山面において検出したが、中央地山面にへばりついた状況で瓦器片が出土していることからもわかるように、地山がかなり削平され



第129図　SB02実測図

ていると思われ、本来の切り込み面は不明である。建物は1間×1間の掘立柱建物で、ほぼ正方形の平面形をもち、1回の建替が認められる。旧い時期の建物は柱間寸法が東辺(P-3～P-4)1.95m、西辺（P-1～P-2）2.08m、南辺（P-2～P-3）1.64m、北辺（P-1～P-4）1.6mを測り、主軸はN-32°-Eである。新しい時期の建物は若干規模が大きくなっており、柱間寸法は東辺（P-7～P-8）2.08m、西辺（P-5～P-6）2.16m、南辺（P-6～P-7）2.00m、北辺（P-5～P-8）2.08mを測り、主軸はかわらない。切り合い関係は3ケ所で認められる。



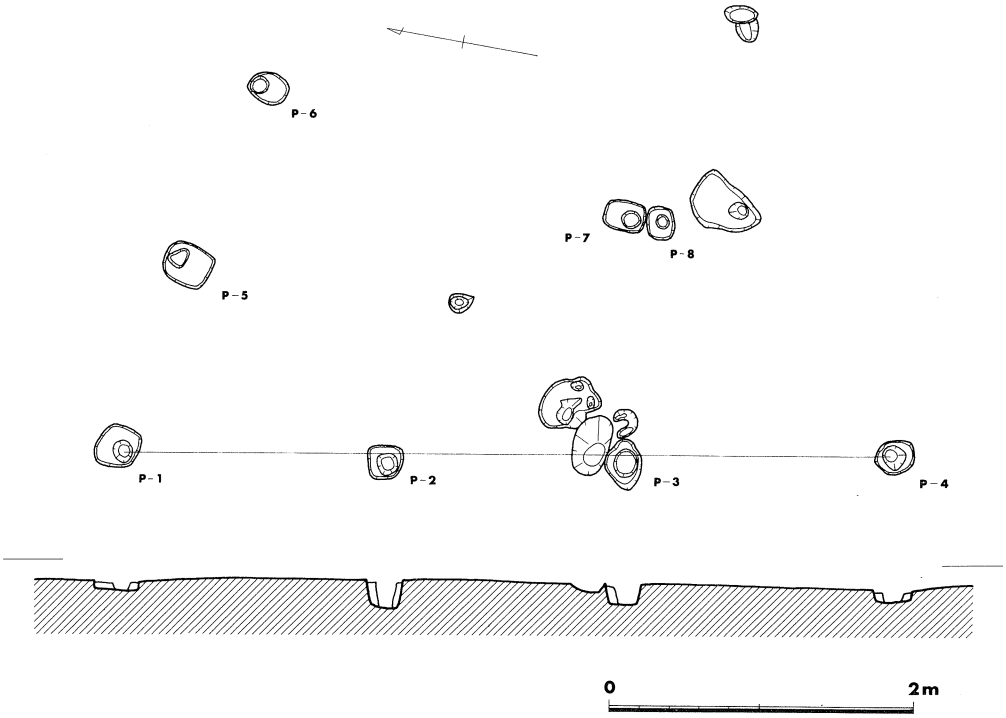
第130図　SB03実測図

それぞれの掘方は径20cm～30cmの不整円形で、深さは5cm～30cmとまちまちである。柱穴はおおむね径10cmくらいで、必ずしも掘方中央に位置するとはかぎらない。なお、掘方埋土内から遺物の出土はなかった。

掘立柱建物（SB03）〔第130図; 図版26〕

C-Ⅱ16区で検出。SB01とSB02の中間に位置する。SB01やSB02同様、地山面において検出したが、本来の切り込み面は不明と言わざるを得ない。1間×1間の掘立柱建物である点はSB02と同様だが、平面形は南北にややのびた長方形を呈し、やはり1回の建替が認められる。旧い時期の建物は東辺（P-3～P-4）2.58m、西辺（P-1～P-2）2.40m、南辺（P-2～P-3）2.05m、北辺P-1～P-4）2.25mを測り、主軸はN-6°30′-Eである。新しい時期の建物は東辺（P-7～P-8）2.37m、西辺（P-5～P-6）2.55m、南辺（P-6～P-7）2.20m、北辺（P-5～P-8）2.07mで、主軸はかわらない。切り合い関係は3ケ所で認められる。

掘方・柱穴もSB02とほとんどかわらず、掘方は径20～30cmの不整円形、柱穴は径10cm前後のものである。なお、掘方埋土内からの遺物の出土はなかった。



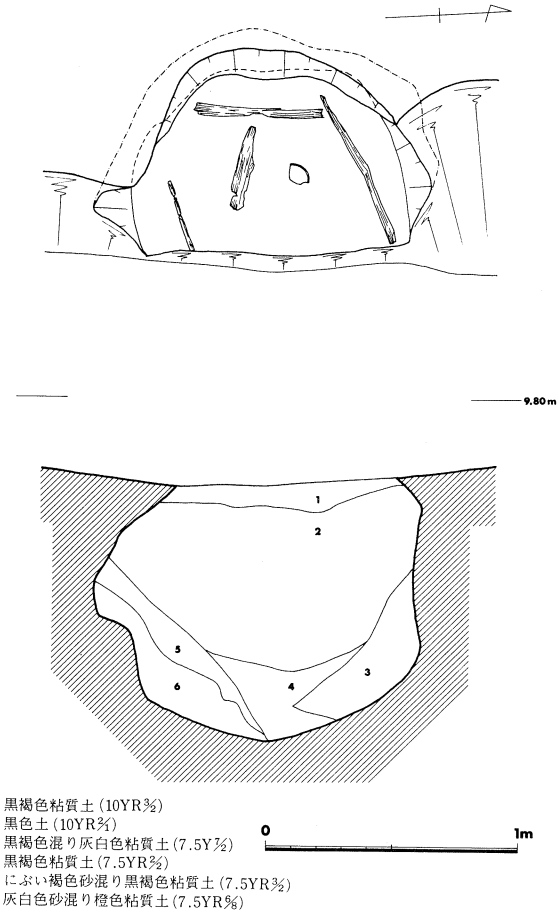
第131図　SA03実測図

柱列（SA03）〔第131図；図版26〕

B-Ⅱ95区で検出。P-1～P-4の4つのピットからなる。いずれも地山面で検出したが、地山自体が削平をうけており本来の切り込み面が不明確なのはSB01・SB02・SB03と同じである。それぞれのピットの深さも10cm～20cmとかなり浅いものもあって、上述の推定を裏づけるものと言える。柱間寸法はP-1～P-2が1.75m、P-2～P-3が1.55m、P-3～P-4が1.75m、主軸はN-10°-Eで、すぐ西側に位置するSE01・SE02とほぼ平行関係にある。

P-1、P-5、P-6も一直線にならぶが、SA03とは直交せず約70°で交わる。柱間寸法はP-1～P-5が1.3m、P-5～P-6が1.25mとSA03よりやや小さい値をとる。またP-7はSA03と直交する位置にある。P-3～P-7の柱間寸法は1.55mである。

それぞれの掘方は径20cm前後の不整円形で、柱穴はおおむね10cmくらいである。深さは上述のとおり10cm～20cmと浅いものもある。



第132図　SE01実測図

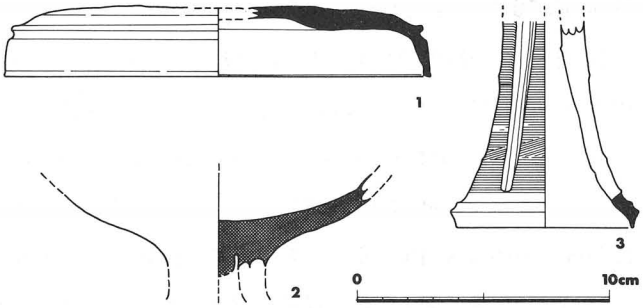
井戸（SE01）　第132・133図；図版27、図版43－1・2〕

B－Ⅱ94区で検出。排水溝で東半分を失っている。地山面において検出した素掘りの浅い井戸で、平面形は径1.1mの円形で深さ約1mを測る。内壁はかなりえぐれていて上部はオーバーハングしており、最大径は1.3mと検出面での直径を凌駕している。

井戸内の埋土は最下層に灰白色砂混り橙色粘質土（7.5YR6/8）があってその上に黒色～黒褐色の粘質土が堆積しており、この中に遺物が包含されている。出土遺物には土師器・須恵器・木片などがあるが、長脚一段透し須恵器高杯（3）は埋土上部から出土したものである。

須恵器杯蓋（1）は口径16.5cm、稜径16.3cm、器高5.6cmを測る大型品で、広く平坦な天井部とまっすぐ下に伸びる

口縁部からなり、意識的につくりだされた稜がそれらを界している。稜線下が一旦凹んでまっすぐ下にのびる口縁部は端部がやや外反し端面は平坦に近い。内外面ともヨコナデでていねいに仕上げる。天井部は前述のように広く平坦でヘラケズリが施される。表面剝離が進んでいるので明確にし得ないが、ヘラケズリは回転を伴わないものである可能性もある。天井部内面は中央がやや凹み、指頭圧痕・ナデがみられ、そのほかはヨコナデを施す。下側が凹み、上に界線をめぐらせた稜は先端を丸くおさめている。胎土は砂粒を含むが精良で、焼成良好、内外面とも灰白色(5Y7/1)を呈す。



第133図　SE01出土須恵器・土師器

土師器高杯(2)は脚部径3.8cm、現存高3.95cmを測り、杯部と脚部を連続して成形し杯底部に粘土を充塡しており、充塡した粘土が脚柱内に突出している。杯部はゆるく上方にのびるが口縁部を欠失している。胎土は砂粒を含むが精良で、焼成良好、外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面灰白色(10YR8/2)を呈す。

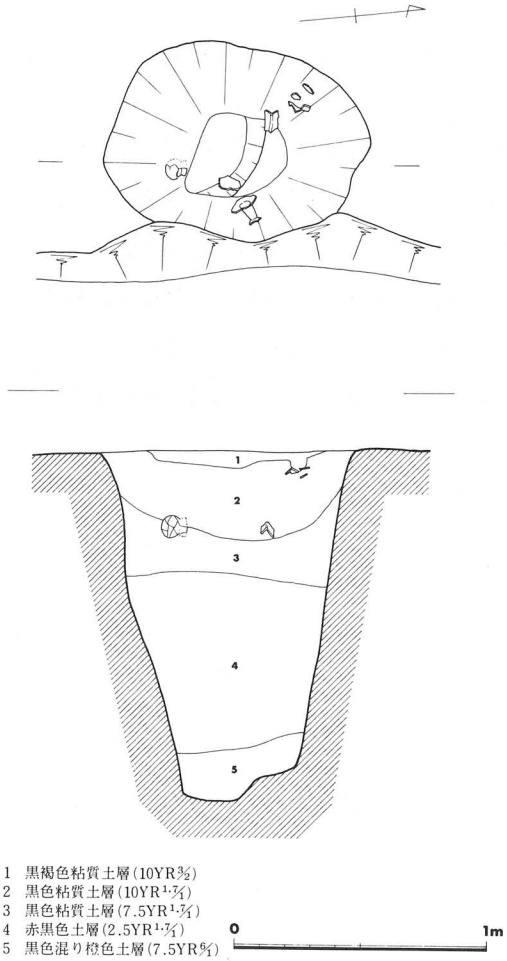
須恵器高杯(3)は脚底部径7.3cm、現存高8.0cmを測る。長脚化した脚部はゆるやかに外反して下外方へのび、裾部近くで段をつくり端部付近で下方に屈曲して内傾する。透しは一段で幅狭く三方に配置されており外側は面取りがなされている。外側から切り込んでいるため脚内部にはみだした粘土が認められる。外面はカキメ(11/cm) を施し、端部や内面はヨコナデで仕上げる。胎土は砂粒を含むが精良で、焼成良好、内外面とも灰色(N5/0)を呈す。

井戸 (SE02) 〔第134・135図; 図版28・29、図版43－3～5〕

B-Ⅱ94区で検出。SE01の北約2mに位置し、SE01と同様の素掘り井戸で、やはり地山面において検出した。平面形は径約90cmの円形で深さ約1.4mを測り、壁面はかなり切りたっていて垂直に近く、底部は南側を二段に掘り下げている。

井戸内の埋土は最下層に地山の土と黒色土の混った土があって、それより上には黒色～黒褐色の粘質土が堆積しているのはSE01と同様である。出土遺物は第2層黒色粘質土(10YR1.7/1)・第3層黒色粘質土(7.5YR1.7/1)に多く、第2層に土師器小片が、第2層下部から第3層にかけて大きな破片が包含されていた。なお須恵器は出土していない。

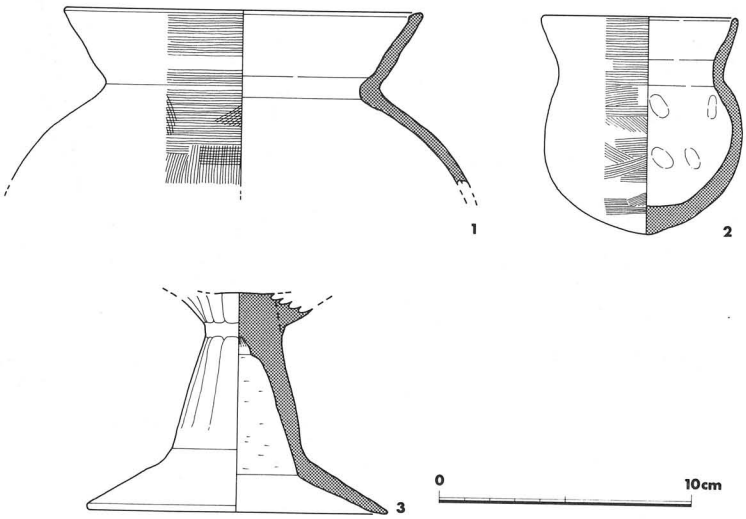
土師器甕(1)は口径14.2cm、現存高6.9cmを測り、上外方へのびる口縁部は端部が内側に丸くふくらむ。頸部より「く」の字形に屈曲する体部と頸部の接合部は内側にふくらんで段を有する。



第134図　SE02実測図

肩はあまりはらない。口縁部から頸部、体部上半までは横方向のハケメが施され、体部下半では横方向のハケメの上から部分的に斜方向・縦方向のハケメが施される。内面は表面剝離が著しいが、口縁部にはヨコナデが観察される。胎土には金雲母・砂粒を含むが精良で、焼成良好、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)、内面灰黄色(2.5Y7/2) を呈す。

土師器小型丸底壺(2)は口径 7.8cm、器高8.6cm、体部最大径7.85cmを測るほぼ完形の土器で、左右非対称のプロポーションをもち全体に肉厚で粗雑なつくりである。ごく弱く内弯しながら外に開く口縁部は端部を丸くおさめ、体部はやや縦長の球形を呈し、体部最大径は口径をわずかに越える程度である。底部は特に厚くつくられており厚さ1.1cmを測る。口縁部及び体部上半には横方向のハケメ (13本/cm)、体部下半には不定方向のハケメがみられ、内面は口縁部がヨコナデ、体部はユビ



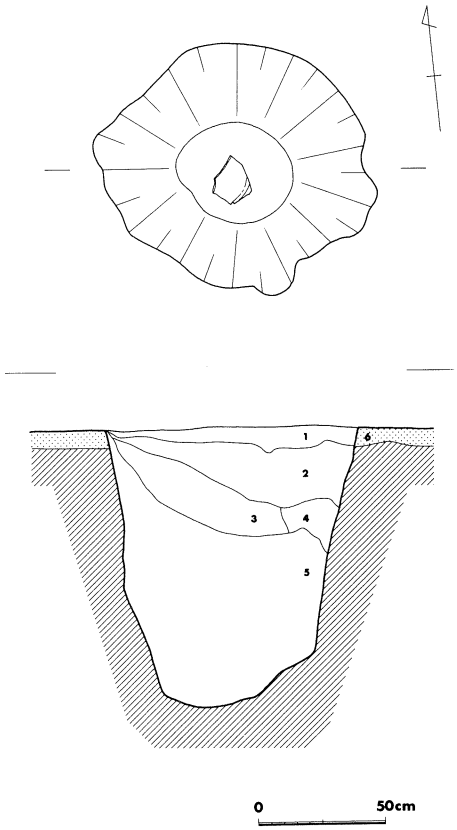
第135図　SE02出土土師器

オサエが施されている。胎土には金雲母・砂粒を含むが精良で、焼成良好、外面褐灰色（10YR5/1）、内面黄灰色(2.5Y4/1)を呈する。

土師器高杯(3)は脚底径11.9cm、脚柱最小径3.25cm、現存高8.4cmを測り、杯部は失われていて脚部のみが遺存している。中ふくらみになった脚柱部は屈曲して下方へラッパ状にひろがり、端部は丸くおさめる。杯部は脚柱部とは別に成形し、脚柱上端部側面に粘土をはりつけて接合している。脚柱部外面は縦方向のヘラミガキ、ラッパ状にひろがった脚部では内外面ともヨコナデで仕上げている。脚柱部内面には横方向のヘラケズリが観察されるが、上端部のヘラケズリの及んでいないところにはわずかにシボリメが残っている。胎土には金雲母・砂粒を多く含むが精良で、焼成良好、内外面ともにぶい橙色(2.5YR6/4)を呈す。

井戸（SE03）〔第136図；図版30・31〕

C-Ⅱ15区で検出。SB03の西約5mに位置し、SK10・SK29とはそれぞれ三角形の頂点をはなす位置関係にある。この井戸は地山上に堆積した包含層にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）の上から切り込んでいる。平面形は径1mの円形で深さ約1.1mを測り、SE01・SE02同様素掘りである。かなり切りたった壁面は底部付近でゆるやかな傾斜にかわり、平坦面は比較的少い。埋土は黒色～黒褐色の粘質土が主体をなすが、第3層明黄褐色粘質土(10YR6/8)が西側から斜帯状にはいりこんでいる。出土遺物は埋土上部にはまっくなく、底部付近で木片少量と底部についた状態で土師器甕体部の破片が出土したのみである。



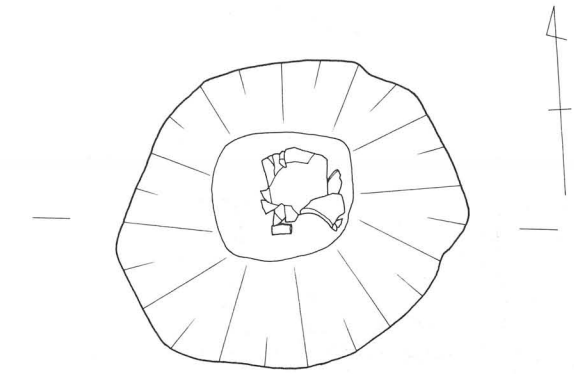
1 黒褐色粘質土(7.5YR3/2)　2 黒褐色粘質土(5YR3/2)
3 明黄褐色粘質土(10YR5/6)　4 2と3が混る
5 黒色粘質土(10YR1.7/1)　6 にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)

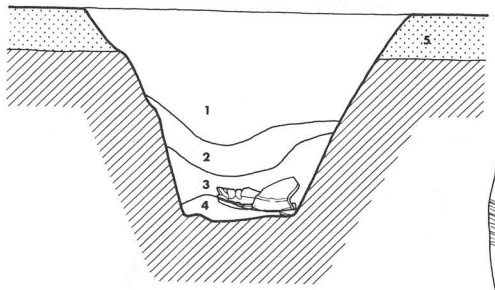
第136図　SE03　実測図

土壙（SK10）〔第137・138図; 図版31、図版43－6〕

C－Ⅱ15区で検出。SE03の北西に位置し、地山上に堆積した包含層から切り込んでいるのはSE03と同様である。平面形は径約90cmの不整円形で、深さ約55cmを測り、壁面は傾斜があまり強くなく断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。埋土は上の二層が黒色粘質土、下の二層が灰褐色土の混った黒色粘質土・灰黄褐色土で、底面についた状態で土師器甕が出土した。

土師器甕は口径13.0cm、体部最大径21.2cm、現存高18.5cmを測り、体部下半から底部にかけて欠失している。頸部はゆるやかに外反して上へのび、上端近くで内弯し端部は内側に丸くふくらませて、上端は内傾斜面をなす。体部はほぼ球形を呈し、「く」の字形に屈曲して口縁部につながる。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は左上から右下へのハケメが施されるが部分的に縦方向のハケメ、右上から左下へのハケメも認められる。体部内面は屈曲部の稜の下方にユビオサエが残っているが、それらの上からヨコナデが施されているところもみられる。胎土は金母雲・黒雲母を含み、

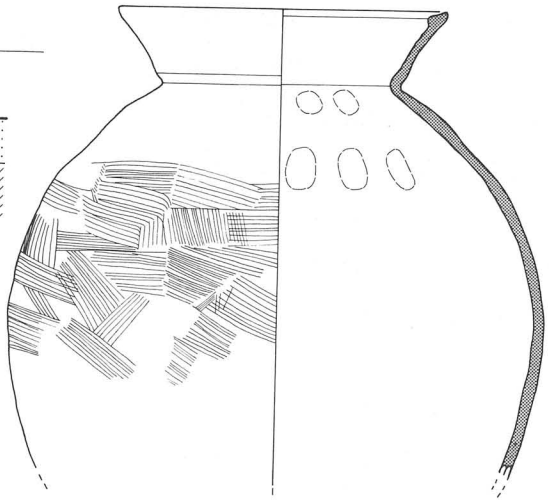




1 黒色粘質土(7.5YR2/1)
2 黒色粘質土(7.5YR1.7/1)
3 2に灰褐色土が混る
4 灰褐色土混り灰黄色粘質土(2.5Y7/2)
5 にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)

0 50cm

第137図 SK10実測図



0 10cm

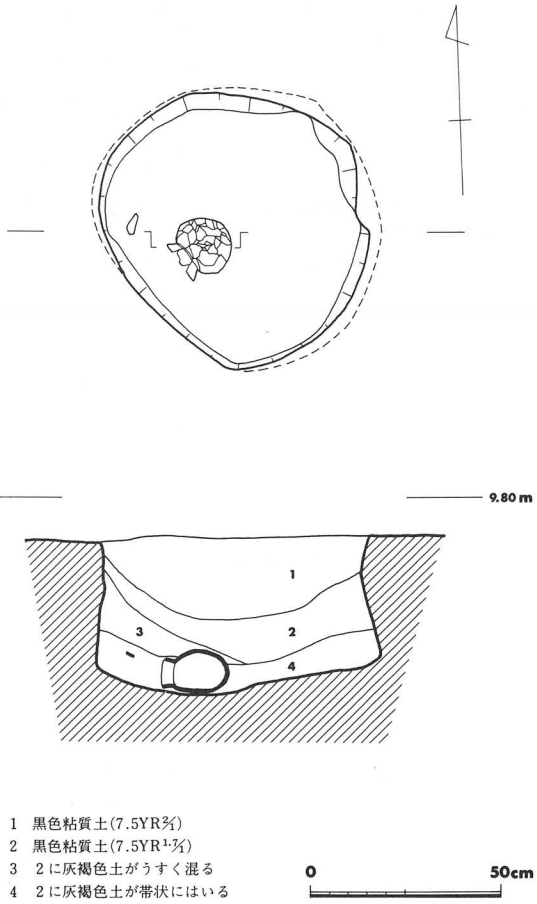
第138図 SK10出土土師器

焼成良好、内面暗灰黄色(2.5Y 4/2)、外面黒褐色(7.5YR 3/2)を呈す。

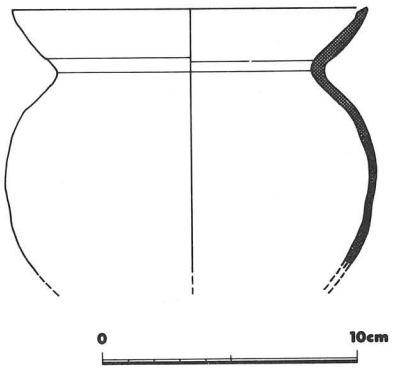
土壙(SK29) 〔第139・140図; 図版32、図版44－1〕

C-Ⅱ15区で検出。SE03の西、SK10の南に位置し、両者とはちがって地山面から切り込んでいる。平面形は径約70cmの不整円形で、深さ約50cm、壁面は垂直もしくは内側にえぐれていて、底面は平坦に近い。埋土は四層あって第1層～第3層は黒色粘質土を主体とし、第4層は黒色粘質土に灰褐色土が帯状にはいり込んでいる。底面についた状態で土師器壺が出土した。

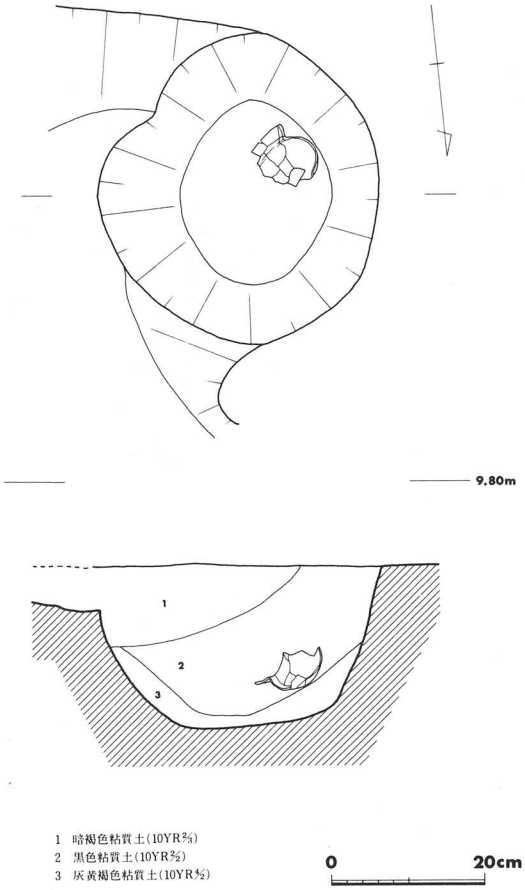
土師器壺は口径14.0cm、体部最大径14.6cm、現存長10.4cmを測る。口縁部は短く内弯し、端部は内側に丸くふくらませて上部は内傾斜面をなす。体部は口縁部から「く」の字形に屈曲し、肩が若干はった球形を呈する。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はヨコハケののち右上から左下へのハケメを施す。胎土は母雲・砂粒を含むが精良で、焼成良好、外面暗灰黄色(2.5YR 4/2)、内面にぶい黄色(2.5Y 6/4)を呈す。



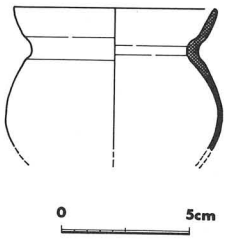
第139図 SK29実測図



第140図 SK29出土土師器



第141図　SK35実測図



第142図　SK35出土土師器

土壙（SK35）〔第141・142図; 図版33、図版44－2〕

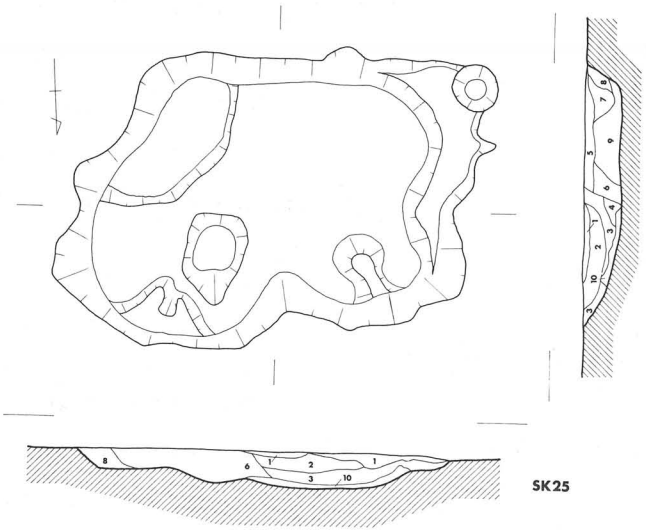
C－Ⅱ26区で検出。SB01の東側に位置する大型の不定形土壙SK25の南西隅にあって、長径41cm、短径37cmの楕円形の平面形をもち、深さは約20cmを測る。埋土は上に暗褐色～黒褐色の粘質土があって下に灰黄褐色粘質土(10YR4/2)がうすく堆積している。第1層暗褐色粘質土(10YR2/3)はSK25の埋土と一連のものと考えられる。出土遺物は土師器小型丸底壺1点で、第3層灰黄褐色粘質土の上面に、横向きに口縁部を南東に向けて出土した。上半部は失われている。

土師器小型丸底壺は体部下半及び底部を欠失している。口径8.0cm、体部最大径8.6cm、現存高5.6cmを測り、全体に薄手のつくりで、口縁部は内弯しつつ短く上方にのび端部は丸くおさめる。体部はやや偏平な球形で、「く」字形に屈曲して口縁部とつながる。口縁部と体部の接合部は外側をユビヨコナデを施して凹ませ、内側はややふくらんでいる。表面剝離が著しいため調整は明確でないが、口縁部内外面にはヨコナデを施している。胎土は砂粒を含むが精良で、焼成良好、外面浅黄橙色(10YR8/4)、内面浅黄橙色(10YR8/3)を呈す。

不定形土壙〔第143～146図; 図版35・36、図版44－5・6〕

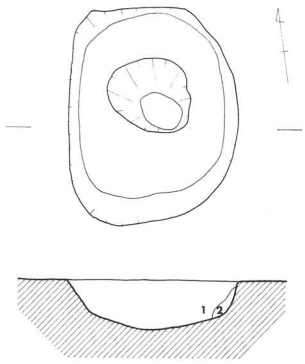
不定形土壙には様々な大きさ形態のものがあるが、大きなものは6m×4.5m(SK24)から小さいものは数10cmのものまである。埋土は黒色～黒褐色の粘質土が主体を占め、地山土の再堆積と考えられる黄褐色系の粘質土がはいり込むことが多い。堆積状況は様々だが、上面も内部も黒褐色系の粘質土があって黄褐色系の粘質土が帯状にはいり込む場合と、上面の半分を黒褐

1　黄色砂混り淡黄色砂礫土(2.5Y 8/3)
2　黄色砂混り黒褐色粘質土(2.5Y 1/3)
3　明黄褐色混り暗褐色粘質土(5YR 3/2)
4　淡黄色砂質土(2.5Y 8/3)
5　淡黄色砂礫混り黒褐色粘質土(10YR 3/2)
6　黄橙色砂礫土(10YR 7/8)
7　灰黄色砂礫土(2.5Y 6/2)
8　灰黄色砂礫混り黄褐色粘質土(10YR 5/6)
9　灰色粘質土(5Y 7/2)
10　淡黄色粘質土(2.5Y 8/3)
11　暗褐色粘質土(10YR 3/3)
12　灰褐色混り黒褐色粘質土(5YR 3/1)



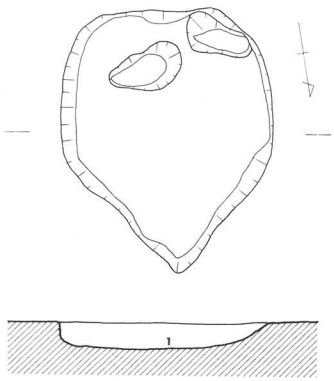
1　黒褐色粘質土(5YR 3/1)
2　黒色粘質土(7.5YR 3/1)
3　黒色粘質土(10YR 2/1)
4　明黄褐色粘質土(10YR 6/6)
5　灰黄褐色砂礫(10YR 6/2)
6　明黄褐色土(2.5YR 7/6)
7　黒褐色砂質土(10YR 3/2)
8　黄色砂礫(2.5Y 7/6)
9　褐灰色砂礫(10YR 5/1)
10　灰黄褐色砂礫(10YR 6/2)

第143図　不定形土壙実測図(1)



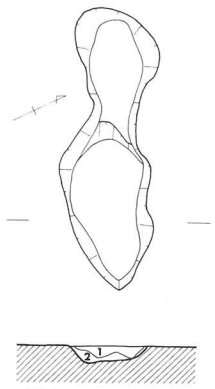
SK05

1 暗灰黄色土(2.5Y 5/2)
2 黒色粘質土(7.5YR 1.7/1)



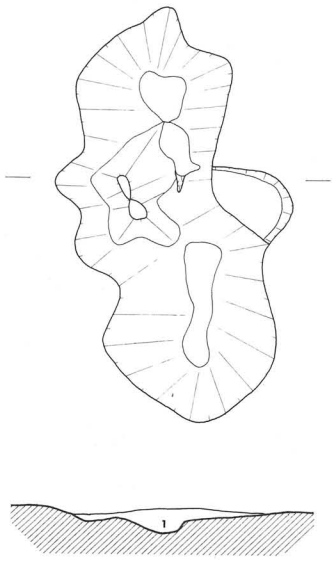
SK08

1 黒褐色粘質土(10YR 3/2)



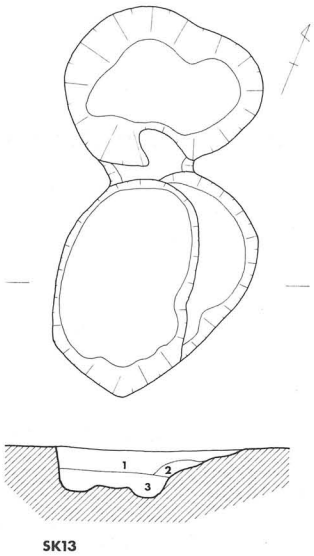
SK12

1 赤黒色土(10R 3/1)
2 黄橙色土(10YR 7/6)



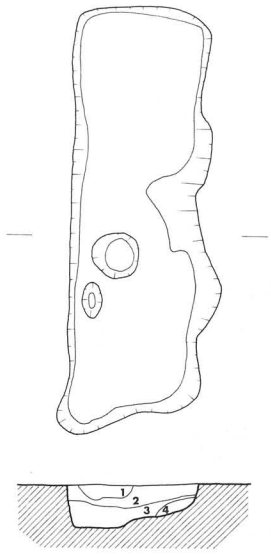
SK36

1 黒褐色粘質土(10YR 3/2)



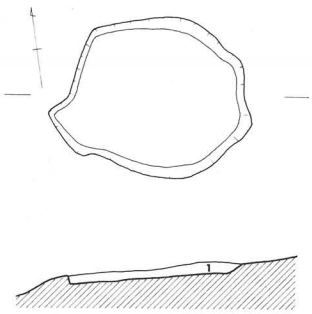
SK13

1 黒褐色粘質土(10YR 3/2)
2 黄褐色砂質土(10YR 5/8)
3 灰黄褐色粘質土(10YR 4/2)



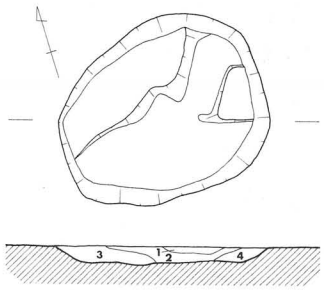
SK30

1 にぶい黄褐色粘質土(10YR 5/4)
2 褐色粘質土(10YR 3/4)
3 灰黄褐色粘質土(10YR 4/2)
4 明黄褐色粘質土(10YR 5/6)



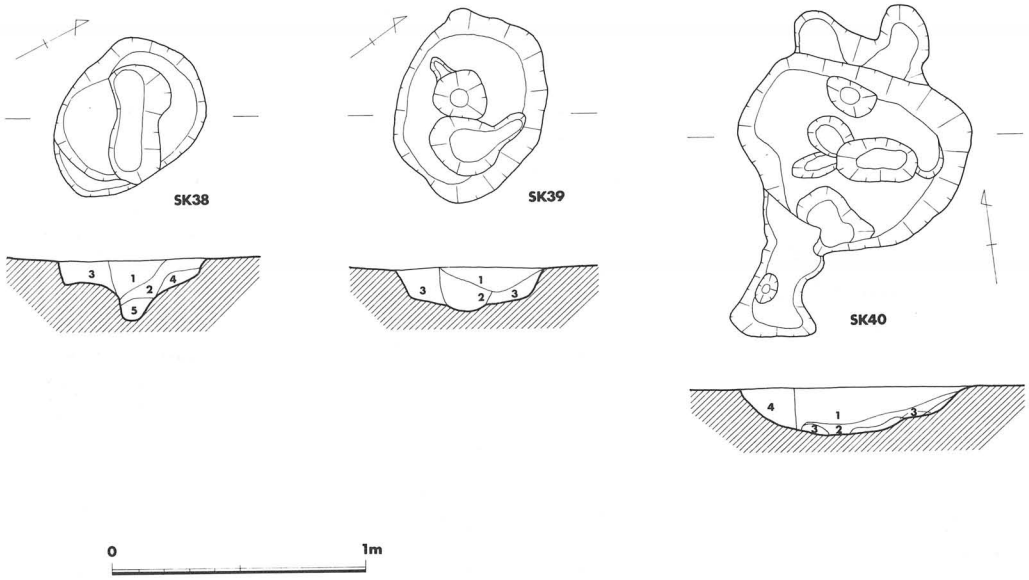
SK15

1 黒色混り暗褐色砂質シルト(10YR 3/3)



SK31

第144図　不定形土壙実測図(2)



第145図　不定形土壙実測図(3)

色系の粘質土が占め残り半分に黄褐色系の粘質土が堆積する場合がある。この場合、黄褐色系の粘質土が黒褐色系の粘質土の下にはいってゆくことが多く地山との区別が困難なこともしばしばである。遺物はほとんど包含されておらず、SK25から須恵器杯身2点が出土したのは稀な例である。

SK05　B-95・B-Ⅱ96区で検出。長径90cm、短径70cm の楕円形で、深さ約20cmを測る。底面は平坦で、埋土は暗灰黄色土（2.5Y 5/2）が主体を占める。この土は中世の遺物包含層のうち第4層灰黄褐色土(10YR 4/2)と同質であり、またSK05は古墳時代に属すると考えられる不定形土壙SK06を切っている。なお、出土遺物はなかった。

SK08　B-Ⅱ96区で検出。長径約1.05m、短径約0.8mの卵形を呈し、深さは約10cmで底面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土(10YR 3/2)一層で、出土遺物はなかった。

SK09　C-Ⅱ5区で検出。長さ約4m、幅約1mの不定形・大型の土壙で、埋土は五層にわかれる。上半には主として黒褐色粘質土(10YR 2/1)が、下半には黄褐色系の粘質土が堆積しており、出土遺物はなかった。

SK12　B-Ⅱ96区で検出。長楕円形を東西に二つつないだような形態で、長さ1.1mを測る。東側が一段深く掘り下げられており底面は平坦に近い。埋土は二層で上層が赤黒色土(10R 2/1)、下層が黄橙色土(10YR 7/6)、遺物は包含されていなかった。

SK13〔図版35〕　C-Ⅱ16区で検出。SB02のすぐ南西に位置する。不整円形を南北に二つつないだような形態で、長さ1.55mを測る。中央のくびれたところは浅くなっているが、両側

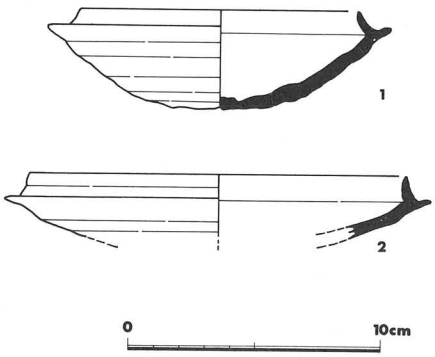
は深さ15～20cmを測る。埋土は三層あって上から黒褐色粘質土(10ＹＲ3/2)、黄褐色粘質土（10ＹＲ5/8)、灰黄褐色粘質土（10ＹＲ4/2）となっている。出土遺物はなかった。

SK15　C－Ⅱ５区で検出。平面形は長径70cm、短径60cmの不整円形で、深さ約５cmと全体的に浅い。地山面が西側にゆくほど低くなっているため、底面も西側が低くなっている。埋土は一層で黒色混り暗褐色砂質シルト(10ＹＲ3/2)が堆積している。出土遺物はなかった。

SK24〔図版36〕　C－Ⅱ27区で検出。試掘第４トレンチに北側の一部がひっかかっている。形態は北東側が内側にはいり込み部分的に突き出た方形で、南北約６ｍ、東西約５ｍの大型不定形の土壙である。深さは30～40cmだが、中央に島状に突き出た部分がある。埋土の堆積状況は複雑で、上部には第５層淡黄色砂礫混り黒褐色粘質土(10ＹＲ3/2)や第11層暗褐色粘質土（10ＹＲ3/3）のように黒褐色系の粘質土があるが、下半は黄褐色系の粘質土・砂質土が堆積している。出土遺物はなかった。

SK25　C－Ⅱ26区で検出。SK24の南西に位置しSK24に一部接する。南北2.3m、東西3.5m、深さ約30cmのいびつな平行四辺形を呈する。上面では西側に黒褐色粘質土(５ＹＲ3/1)、東側に明褐色土（2.5ＹＲ7/6）がみられたが、明褐色土が黒褐色粘質土の下へはいり込んでゆく。

須恵器杯身(１)は口径11.0cm、受部径13.6cm、器高4.0cmを測り、低く内傾度の大きいたちあがりは端部が細く尖り気味におわり、受部は上外方へのび端部は丸くおさめる。たちあがり、受部は内外面ともヨコナデで仕上げる。底部はやや尖り気味で、右回りのヘラケズリの範囲は比較的狭い。底面中央には「×」のヘラ記号がみられる。胎土精良、焼成良好、内面灰白色（10Ｙ6/1)、外面灰色（10Ｙ5/1）を呈す。須恵器杯身(２)は口径15.0cm、受部径17.0cm、現存高2.55cmを測る大型品で、内傾し細く尖り気味の端部をもつたちあがり、外上方へのび丸くおさめた端部をもつ受部など(１)と共通する点が多い。受部の上面は平坦でたちあがりとの境界には一条の凹線がみられる。たちあがり部内外面、受部にはヨコナデを施し、底部外面にはヘラケズリがみられる。



第146図　SK25出土須恵器

SK30　C－Ⅱ26区で検出。SB01のすぐ東側に位置する。長さ1.7m、幅約50cmの長方形の平面形をもつ。埋土は四層あって上半には主として褐色粘質土(10ＹＲ4/4)、下半には主として灰黄褐色粘質土(10ＹＲ4/2)が堆積している。出土遺物はなかった。

SK38　C－Ⅱ56区で検出。平面形は長径70cm、短径50cmの楕円形で深さは浅いところで約

10cm中央の深いところで約25cmを測る。中央に東西にやや長く深い部分があって南北はテラスになっている。埋土は五層にわかれ黒褐色～暗褐色の粘質土が堆積している。

SK39　C-Ⅱ56区で検出。長径75cm、短径60cmの楕円形の平面形をもち、深さ約15cmを測る。底部は比較的平坦で中央が若干凹む。埋土は三層認められるが、第2層灰黄褐色粘質土混り黒褐色粘質土(10YR2/2)は土壙の中央に柱状に堆積している。出土遺物はなかった。

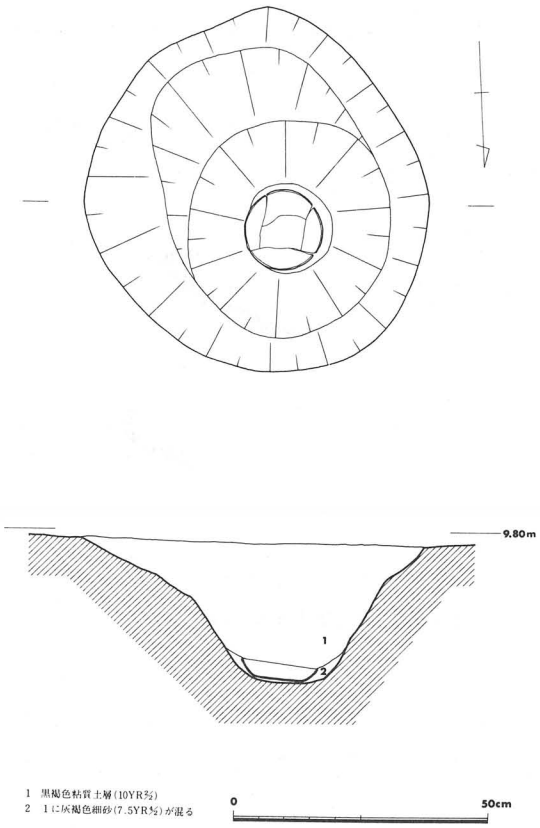
SK40　C-Ⅱ56区で検出。径約90cmの不整円形に足を付加したような形態を呈し、不整円形の部分は比較的深く、深さ約20cmを測り、付加部は浅くなっている。埋土は上部に黒褐色粘質土(10YR2/2)があり、下部に黄褐色系の粘質土がみられる。出土遺物はなかった。

(4) 歴史時代の遺構と遺物

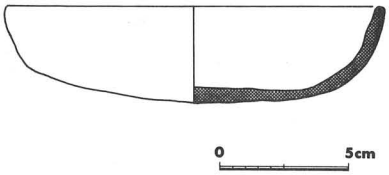
歴史時代に属する遺構としては、土壙、杭列、耕作用井戸、条理畦畔などがある。不定形土壙にも歴史時代と考えられるものがあるが、これは第3節の不定形土壙のところで一括してとりあげた。SK05は明らかに中世のものと考えられるし、またSK38・SK39も後述するように奈良時代の可能性がある。

土壙（SK41）〔第147・148図; 図版34、図版44－3〕

C－Ⅱ56区で検出。調査区域の南端付近でみつかっており、竪穴住居、掘立柱建物、井戸などの古墳時代遺構の集中する地区とはやや離れている。地山面において検出したが地山自体が削平されている可能性もあるので、本来の切り込み面は明確でない。平面形は径約70cmの不整円形で深さ約25cm、壁面は上半部がかなりゆるやかになっており、中央から下は傾斜が強くなっていて、全体としてすり鉢形を呈する。底部は平坦面が少なく、径15～20cm程度である。埋土は二層で第1層黒褐色粘質土(10YR2/2)が大部分を



第147図　SK41実測図



第148図　SK41出土土師器

占め、第2層灰褐色細砂混り黒褐色粘質土(7.5YR4/2)は底部にうすく堆積しているのみである。底部中央には土師器皿が上向きに置かれており、第2層は土師器皿の口縁部まで堆積していた。

土層断面を観察すると第1層黒褐色粘質土の中央に柱状に粘質の強い部分がみられるので、この土壙は柱穴の可能性もある。とすれば土師器皿は柱をうけるような位置におかれていたことになる。

土師器皿は口径15.0cm、器高3.85cmを計り、やや丸みをおびた平底となだらかにたちあがる口縁部からなる。口縁部は内弯しつつ上へのび、端部は丸くおさめる。口縁部内外面はヨコナデを施すがヨコナデが2・3段に及ぶため小さな稜をつくっている。底部は表面剝離が著しく明確でないが、ナデを施している部分が認められる。胎土は砂粒を含むが精良で、焼成良好、内面橙色(7.5YR7/6)、外面浅黄橙色(2.5YR8/4)を呈す。

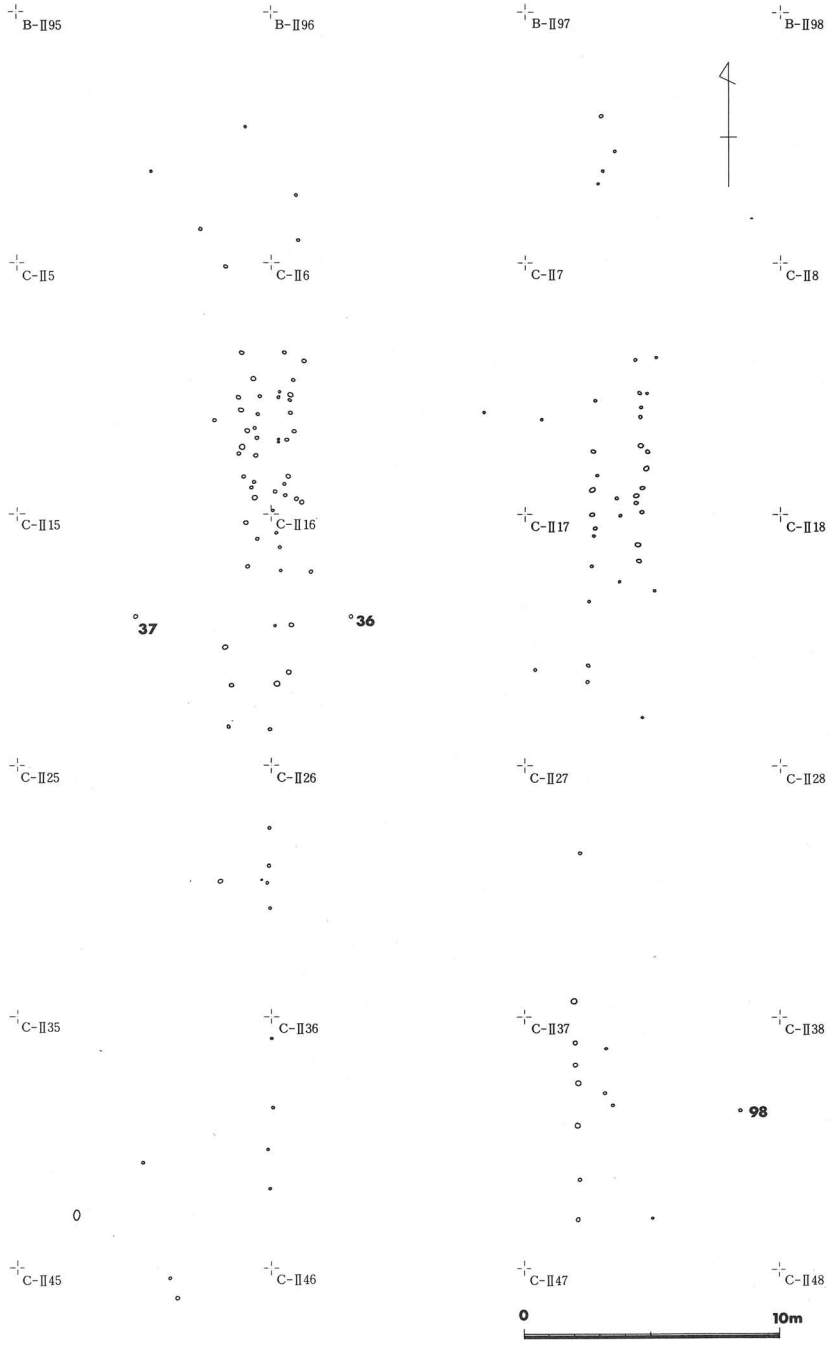
杭列（SA01・SA02）〔第149図; 図版37〕

中世包含層の上面で二列の杭跡を検出した。SA01はB－Ⅱ96とC－Ⅱ46を結ぶライン上に位置する。このうち南半のC－Ⅱ26以南では杭跡が一列に並び、各杭跡の間隔も50cm～2mと比較的広いのに対して、北半のC－Ⅱ16以北では杭が幅約2mの間にやたらと打ち込まれており、数も圧倒的に多い。SA02はB－Ⅱ97とC－Ⅱ47を結ぶラインの東約2mに位置し、全体の状況はSA01とよく似ている。南半のC－Ⅱ27以南では一列に整然と並ぶ列があるのに対し、北半のC－Ⅱ17以北ではいくらかのバラツキはあるもののほぼ二列に並ぶようであり、その間隔は約2mである。

SA01とSA02の間隔は約12mで両者は平行して南北に走っており、その方位は真北にほぼ等しい。個々の杭跡は径5～20cmの円形で、大きさは様々だが、径10cm前後のものが最も多い。斜に打ち込まれているものは少なくほとんどがまっすぐ打ち込まれていた。杭先が地山面まで達っしているものも少ない。なお、C－Ⅱ16区の杭跡36、C－Ⅱ15区の杭跡37、C－Ⅱ37区の杭跡98の上面からは銅銭が出土している。このうち杭跡36、杭跡37出土の銅銭は小片で種類は不明だが、杭跡98からは「至和元宝」が出土している。

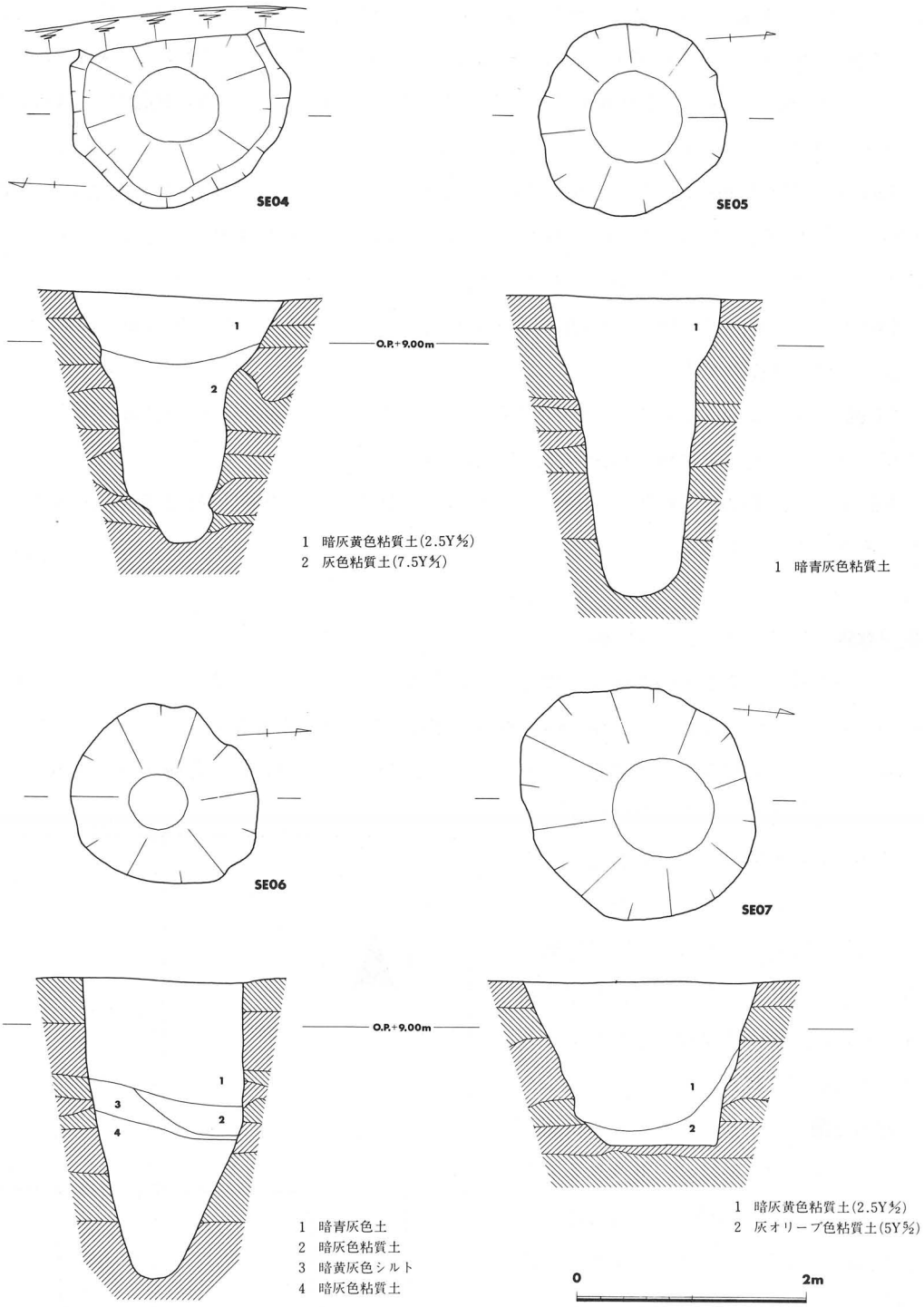
耕作用井戸〔第150図; 図版37・38〕

耕作用井戸はC－1区で1基、C－2区で6基の計7基を検出した。これらの井戸は径1.5m～2mの円形の平面形を持ち、深さは3～4m、すべて素掘りでおおむね床土の下の層から切り込んでいる。



第149図　SA01(左)・SA02(右)実測図

SE04〔図版38〕　C－Ⅱ57区で検出。径約2ｍの円形の平面形をもつ素掘り井戸で、地山面からの深さ約2㎝をはかる。



第150図　耕作用井戸実測図

SE05〔図版38〕　C-Ⅱ49区で検出。径約1.6mの円形の平面形をもち、地山面からの深さ約2.6mをはかる素掘り井戸である。激しい湧水をみる暗灰緑色砂質シルトまで掘り下げている。

SE06〔図版38〕　C-Ⅱ49区で検出。SE05のすぐ南側に位置する。平面形は径約1.5mの円円形で、地山面からの深さ約2.6mをはかる。やはり素掘り井戸で、SE05同様激しい湧水のある暗灰緑色砂質シルトまで掘り下げている。

SE07　C-Ⅱ59区で検出。SE06の南約8mに位置し、すぐ西側にはSE08が、南側にはSE09、SE10が並ぶ。平面形は径約2mの円形で深さは約1.4mと他の耕作用井戸に比較して半分以下の深さしかもたない。底部は平坦である。ここではにぶい黄色砂から湧水がある。

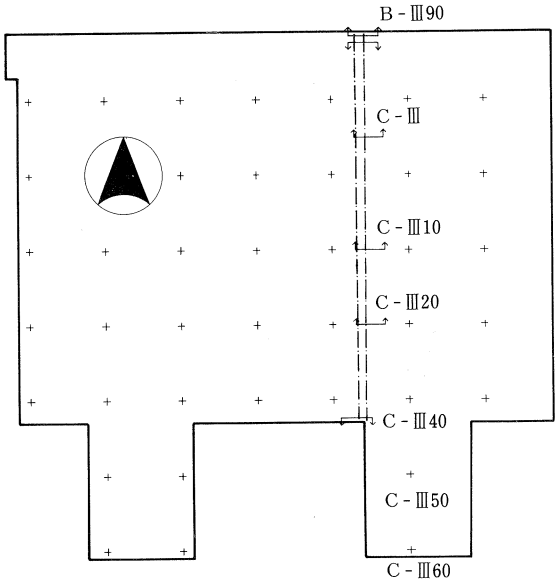
SE08　C-Ⅱ59区で検出。SE07の西約4mに位置する。平面形は径約2.5mの円形で、他の井戸と同様素掘りである。

SE09　C-Ⅱ59区で検出。SE07の南約4mに位置する。平面形は径約1.5mの円形を呈し、素掘り井戸であることは他の耕作用井戸と同様である。

SE10　C-Ⅱ69区で検出。SE09のすぐ南側に位置する。平面形は径約2.5mの円形で、大型の素掘り井戸である。　(大野)

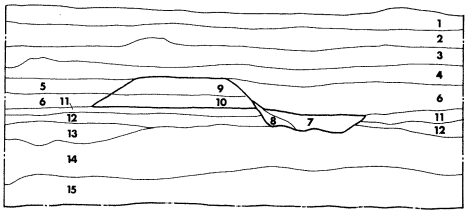
条里畦畔〔第151・152図; 図版39〕

本遺跡周辺には東西・南北方向に軸をもつ条里制遺構が整然とした姿で広がっている。本遺跡内でもそれが確認されるが、現行畦の直下に施行当初の畦畔が存在するかどうか、また施行時期はいつか等の問題も、本調査のポイントの一つであった。特にC－Ⅱ89～D－Ⅱ89ラインに沿う現行の南北方向の条里畦畔は、C－Ⅱ79～B－Ⅱ79までの間存在せず、それが過去において存在していたのかどうかも確認する必要があった。その為、推定されるラインに直交して土層観察用の畦を3本設け、周囲の壁面と合わせて6ケ所の土層観察を行った。



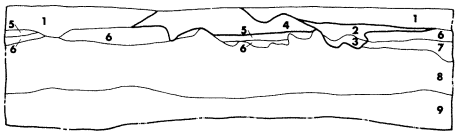
第151図　条里畦畔位置図(1：1000)

北壁土層①　最っとも明瞭に確認し得た。ここでの畦畔はC－Ⅱ9ラインより東4mの地点に中軸をもち、幅115cm、高さ24cmを測る。層位的には第4層（遺物包含層第1層）下に位置している。色調は周囲の土層とほとんど変らないがや



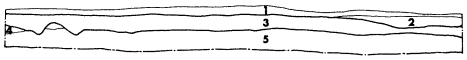
北壁土層図①

1　耕土(暗灰黄色土2.5Y4/2)
2　床土(黄褐色土2.5Y5/4)
3　灰黄褐色土(10YR4/2)
4　黒褐色粘質土(10YR3/2)
5　黒褐色粘質土(10YR2/2)
6　黒褐色粘質土(7.5YR2/2)
7　黒褐色粘質土(5YR2/1)
8　灰黄色粘質土(2.5Y5/2)
9　黒褐色粘質土(10YR2/2)
10　黒褐色粘質土(10YR3/1)
11　灰黄褐色粘質土(10YR5/2)
12　灰黄褐色粘質土(10YR3/2)
13　黒褐色粘質土(2.5Y3/2)
14　黄褐色粘質土(10YR5/6)
15　灰黄褐色粘質土(10YR4/2)



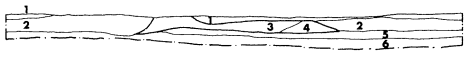
北壁土層図②

1　黒褐色粘質土(7.5YR2/2)
2　黒褐色粘質土(5YR2/1)
3　灰黄色粘質土(2.5Y5/2)
4　黒褐色粘質土(10YR3/1)
5　灰黄褐色粘質土(10YR5/2)
6　灰黄褐色粘質土(10YR3/2)
7　黒褐色粘質土(2.5Y3/2)
8　黄褐色粘質土(10YR5/6)
9　灰黄褐色粘質土(10YR4/2)



東西畦①

1　黒褐色粘質土(10YR3/2)
2　灰褐色土(7.5YR5/2)
3　褐灰色土(7.5YR5/1)
4　にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)
5　黒褐色粘質土(10YR2/2)

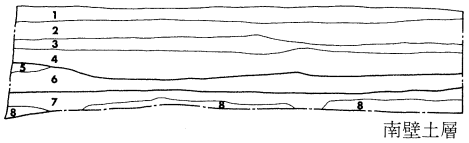


東西畦②

1　黒褐色粘質土(10YR3/2)
2　褐灰色土(7.5YR5/1)
3　灰褐色粘質土(7.5YR4/2)
4　②に⑤が多く混る
5　灰黄褐色粘質土(10YR5/2)
6　暗灰黄色粘質土(2.5Y5/2)

東西畦③

1　黒褐色粘質土(10YR3/2)
2　褐灰色土(7.5YR5/1)
3　灰黄褐色粘質土(10YR5/2)
4　黒褐色粘質土(10YR2/2)
5　にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)



南壁土層

1′　耕土(暗オリーブ褐色土、2.5Y3/3)
2　床土(にぶい黄褐色土、10YR5/3)
3　床土(にぶい黄褐色土、10YR5/4)
4　①に③が混る
5　暗褐色粘質土(10YR3/3)
6　黒褐色粘質土(10YR3/2)
7　灰黄褐色土(10YR4/2)
8　明黄褐色粘土(10YR6/6)

0　2m

第152図　条里畦畔実測図(L＝O.P.＋9.60m)

や濃く、土質はより堅緻であった。畦畔には2層の層位が認められ、2回に分けて盛り固めたことが考えられる。畦畔の東側には、幅88cm、深さ14cmの溝がある。溝内の第8層は第10層が第7層に混入したもので、畦畔の築土が溝内に流入したものと思われる。ところで、このセクションでは西側の溝はみあたらなかったが、次の反対側のセクションでは、逆に西側に溝があり、東側の溝はなくなっている。これは、元来溝に浅深があり、さらに後世に削平されたため、深部のみが残存して観察されたものであろう。

北壁土層②　幅146cm、残存高22cmを測る。北壁土層①同様C－Ⅱ9ラインより東4mの地点に中軸をもち、前述の如く西側に幅105cm、深さ20cmの溝が認められる。畦畔上部は機械掘削時に削除されているが、北壁土層①同様2層あったものと思われる。溝内にも2層の堆積層が認められる。

東西畦①　ここでは明確に検出できなかったが、C－Ⅱ19～C－Ⅱ39ラインの東5m地点で第3層灰褐色土（7.5YR5/1）が少し落ち込み、第2層がその上に新たに堆積していた。

東西畦②　C－Ⅱ19～C－Ⅱ39ラインより東5mの地点で、幅162cm、残存高10cm畦痕を検出した。畦は、東端に第2層と第5層の混合土を含むが、ほぼ1層である。上部は、削平を受けた後第1層が堆積したものとみえ、中央部が凹んでいる。西側には、第2層が落ち込んでいる部分があり、これが溝跡にあたるものとも思えるが、明確でない。

東西畦③　C－Ⅱ19～C－Ⅱ39ラインの東5m地点付近で、第2層に高まりがみられた。しかしながら、明瞭に畦としてとらえられなかった。

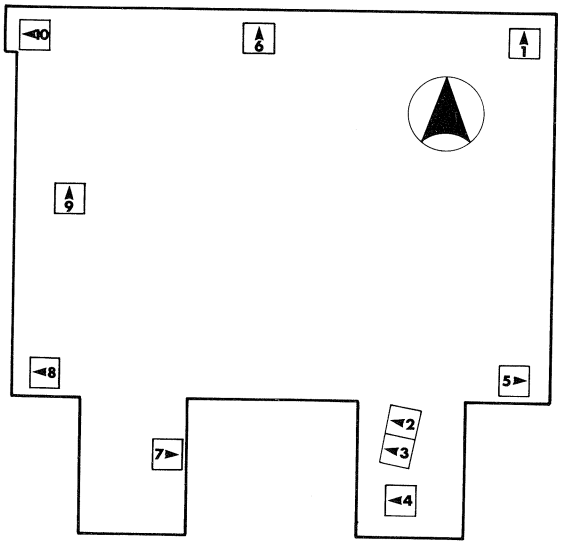
南壁土層　推定ラインが丁度C－2地区にかかり、全容を把握するに至らなかった。しかし第6層に高まりがみられ、高まりの頂部に第5層が部分堆積していた。

以上個別に観察結果を述べたが、明瞭に条里畦と認められたものは、北壁土層①・②と中央部に相当する東西畦②だけであった。しかしながら、他の個所でも土層の高まりが確認されており、それがほぼ推定ライン上に並ぶことから、いずれも不明瞭ながら条里畦の痕跡としてよいと考える。従って、この部分の条里畦畔が過去に存在していたことは疑いないであろう。時期については、条里畦を挟む左右の土層に中世の土器が包含されていることから、奈良時代に施行されたものではなく、中世のものと考えられる。本遺跡は、全域にわたって遺構面がかなり削平されていることが確認されており、施行当初の畦が検出できなかったことも、その理由に拠るものと考えられる。なお、確認された条里畦畔の方位はほぼ真北を示す。

（川口）

(5) 地質調査〔第153～157図；図版40〕

井戸の掘削状況、地山下の土層堆積状況を把握するため地質調査を実施した。調査は4m×



第153図　地質調査位置図（1：1000）

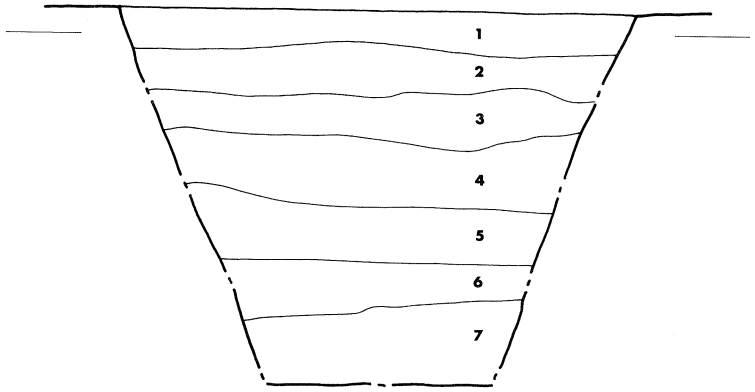
4mの方形でG.L.－4mまでユンボで掘削し、土層断面を精査するものである。その結果、各調査地点で細部ではちがいはあるものの、基本的な土層堆積状況を把握することができた。

まず上部に黄褐色～灰褐色の粘質土が1m前後堆積している。これが「地山」と呼んでいる層で、砂礫を若干含み堅緻な堆積層である。その下は主としてシルトがあるが、それにかわって粘質土があったり、また砂と互層になっている地点もある。厚さは1m～2mと変化が多い。植物遺体を多量に含んで黒褐色～暗褐色を呈するシルトが各地点でみられ、その上面のレベルはO.P.＋7.7m前後が多い。シルトの下には砂礫が50cm～1mの厚さで堆積しており、湧水は主としてこれらの層からのものである。崩壊性に富み湧水によって短時間で崩壊する。砂礫の下には緻密な青灰色～緑灰色の粘土が一様にみられる。

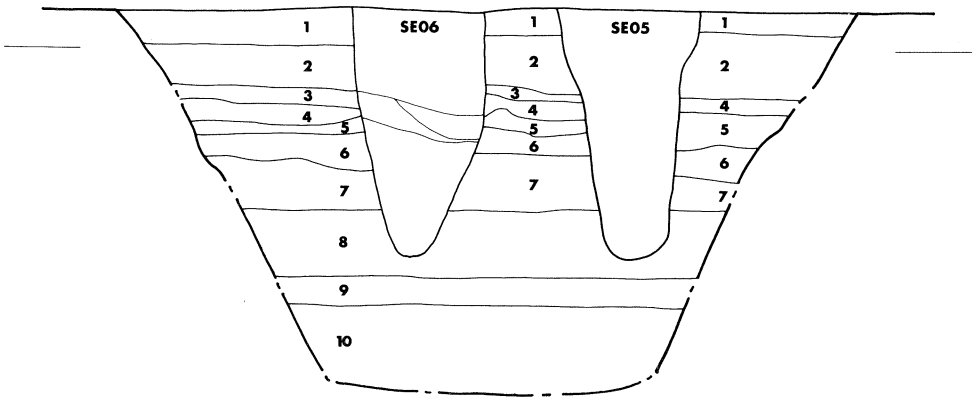
古墳時代の井戸は上部の黄褐色系の粘質土内にとどまっているが、井戸の営まれている地点にはいずれも砂が間層として及んでおり、現在でも若干の湧水をみた。近世の耕作用井戸はSE08以外は下の砂礫まで掘り込んでおり、その深さは地山面から約3mをはかる。以下、順を追って各調査地点の所見を述べる。

第1地点　調査区域の北東隅、B－Ⅱ91区・C－Ⅲ1区に設定。上部約1mには黄褐色～暗灰色の粘質土があって、その下にはシルトが約1m堆積し、さらに細砂～砂礫と続く。植物遺体を多量に含むのは第3層暗褐色シルトで上面のレベルはO.P.＋8.2mと比較的高く、厚さも40～50cmを計る。また第6層暗青灰色砂礫からは激しい湧水があった。砂礫の下は緻密なシルトで上面のレベルはO.P.＋6.0m前後である。

第2・第3地点　C－Ⅲ50区にSE05とSE06の東半分を断ち割るよう2ケ所連続して設定した。層序は上部に黄褐色～灰黄褐色の粘質土があり、続いてシルトが堆積しているが、第6層暗褐色シルトには植物遺体が含まれていて第1地点の第3層と対応する。第6層の上面のレベルはO.P.＋8.1mである。これらの下には青灰色のシルト～砂礫が厚く堆積していて、第8層暗灰褐色砂質シルト・第9層青灰色砂礫からは激しい湧水があった。SE05・SE06はともに第8層まで掘り下げていて、底面のレベルはO.P.＋6.8m前後である。最下層は暗青灰色粘土

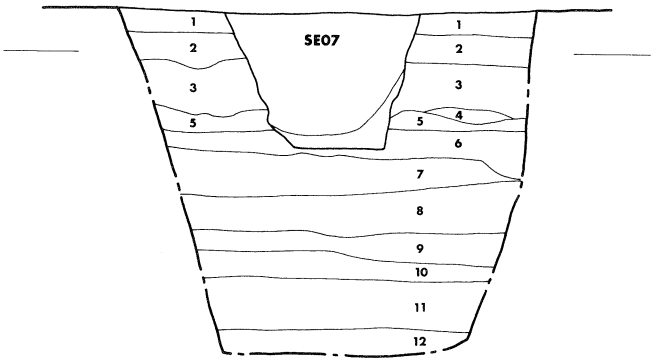


1　黄褐色粘質土
2　暗灰色粘質土
3　暗褐色シルト
4　暗灰緑色砂質シルト
5　灰褐色細砂
6　暗青灰色砂礫
7　暗青灰色シルト

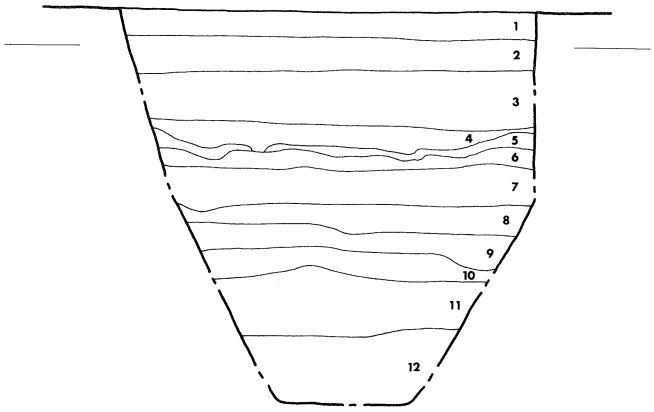


1　青褐色粘質土
2　灰黄色粘質土
3　暗青灰色粘質土
4　灰褐色粘質土
5　青灰色砂質シルト
6　暗褐色シルト
7　青灰色砂質シルト
8　暗灰緑色砂質シルト
9　青灰色砂礫層
10　暗青灰色粘土

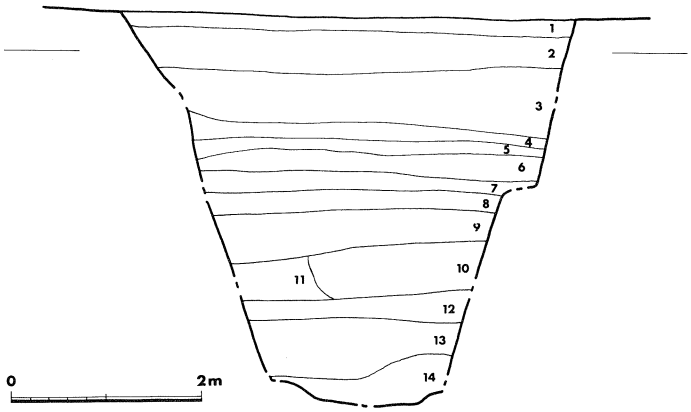
第154図　地質調査第１、第２・第３地点



1　黄褐色粘土(10YR5/6)
2　明黄褐色粘土 (10YR6/6)
3　灰黄色粘土(2.5Y6/2)
4　暗褐色粘土(10YR3/3)
5　灰黄褐色細砂(10YR5/2)
6　にぶい黄色砂(2.5Y6/3)
7　緑灰色シルト(7.5GY5/1)
8　オリーブ灰色細砂(5GY5/1)
9　暗褐色砂礫(10YR3/4)
10　褐色砂礫(10YR4/6)
11　青灰色砂礫(5BG5/1)
12　オリーブ黒色粘土(7.5Y3/2)



1　黄褐色粘土(10YR5/6)
2　明黄褐色粘土(10YR6/6)
3　灰黄色粘土(2.5Y6/2)
4　黒褐色粘土(10YR3/2)
5　オリーブ灰色砂質シルト(2.5GY5/1)
6　オリーブ灰色粘土(5GY4/1)
7　黒色有機質土(10YR2/1)
8　青灰色シルト(5BG6/1)
9　オリーブ灰色砂(2.5GY5/1)
10　緑灰色微砂(10GY5/1)
11　緑灰色砂礫(10GY5/1)
12　暗オリーブ灰色粘土(2.5GY4/1)



1　黄褐色粘質土(10YR5/6)
2　明黄褐色粘質土(10YR6/6)
3　灰オリーブ色粘質土(5Y5/3)
4　灰オリーブ粘質土(5Y5/2)
5　暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)
6　灰オリーブ色粘質土(5Y4/2)
7　黒褐色粘質土(10YR3/2)
8　淡オリーブ灰色粘質土(5GY4/1)
9　緑灰色シルト(10G5/1)
10　緑灰色シルト(6G5/1)
11　青灰色砂質シルト(5BG5/1)
12　青灰色シルト(5BG5/1)
13　緑灰色粘質シルト(5G5/1)
14　オリーブ灰色粘土(2.5GY5/1)

第155図　地質調査第4、第5、第6地点

で上面のレベルはO.P.＋6.3mを計る。

第4地点　C－Ⅲ50区・C－60区にSE07の東半分を断ち割るように設定した。層序は地質調査第2・第3地点と基本的に同じで、上部に約1mの厚さで黄褐色～灰黄色の粘質土があり、続いて植物遺体を包含する層が若干みられ、その下はシルト・砂礫となる。植物遺体包含層は上面のレベルがO.P.＋8.4m、厚さは20cm前後である。第6層にぶい黄褐色砂からは湧水がみられ、SE07はこの層まで掘り下げているが、底面のレベルがO.P.＋8.0mとSE05・SE06とは1m以上のひらきがある。砂礫の下にはオリーブ黒色粘土があり、上面のレベルはO.P.＋6.1mである。

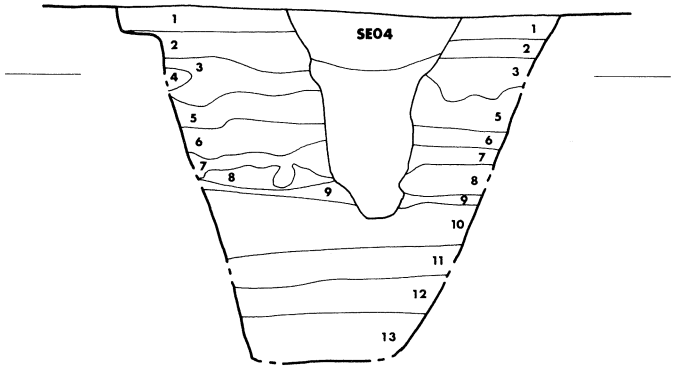
第5地点　C－Ⅲ41区に設定。基本的層序は他の地質調査地点とかわりない。植物遺体を包含しているのは第7層黒色有機質土で、上面のレベルはO.P.＋7.7m、厚さ約40cmである。なお第11層緑灰色砂礫からは湧水をみた。最下層は暗オリーブ灰色粘土で、上面のレベルはO.P.＋6.0mである。

第6地点　調査区域の北端中央B－Ⅱ97区・B－Ⅱ98区に設定した。基本的層序は他の地質調査地点と同様で、上部に黄褐色の粘質土があり、シルト・粘土と続く。植物遺体を包含するのは第7層黒褐色粘質土で上面のレベルはO.P.＋7.7m、厚さ約30cmである。なお、本地点では湧水をもたらす砂礫層がみられない。

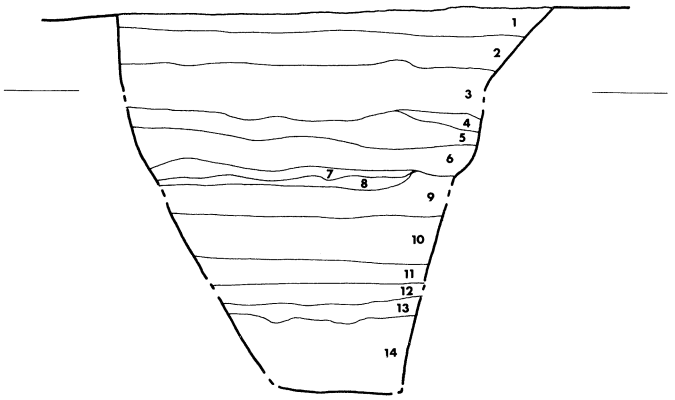
第7地点〔図版40〕　C－Ⅱ56区・C－Ⅱ57区にSE05の西半分を断ち割るように設定した。上部には黄褐色～灰褐色の粘質土が各々20～50cmの厚さで堆積し、O.P.＋7.7mまで達している。その下はシルト・砂礫・粘土と続くが、第9層黒褐色粘質土は植物遺体を含み、各調査地点で検出している植物遺体包含層と対応するものと考えられる。上面はやや凹凸があり、レベルはO.P.＋7.7m、厚さ約10cmと他地点と比較して薄い。第12層青灰色砂礫からは湧水があり、また第13層は緻密な緑灰色粘土で、上面のレベルはO.P.＋6.4mを計る。

第8地点　A地区の南西隅、C－Ⅱ35区に設定する。層序は他の調査地点と基本的にかわらない。第1層～第3層は黄褐色～灰褐色の粘質土で、続いてシルト・砂礫が堆積している。植物遺体を包含するのは第11層・第12層だが特に第11層に多い。上面のレベルはO.P.＋7.65m、厚さ40～50cmである。第15層緑灰色シルトは砂礫の下にあって、上面のレベルはO.P.＋約6.5mである。

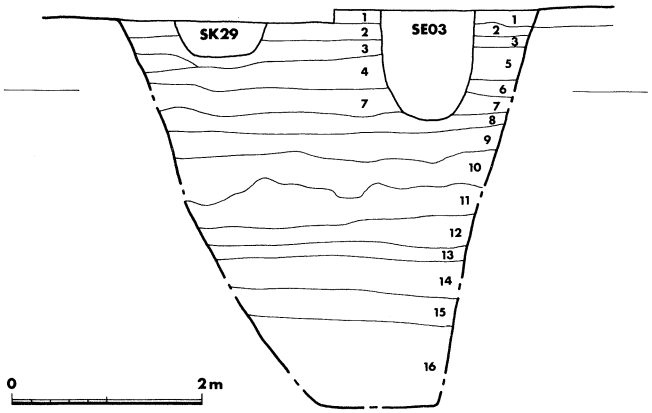
第9地点　C－Ⅱ15区にSE03とSK29の南半分を断ち割るように設定。上部には黄褐色～明黄褐色の粘質土が4層にわたって堆積し、その厚さは1mに及ぶ。東端近くでは砂が間層としてはいりこんでいて、これがSE03の湧水層となっている。続いて黒褐色～緑灰色の粘質土と砂が互層に堆積しており、その下は第12層黒褐色粘質土で植物遺体を含む。上面のレベルはO.P.＋7.5m～7.7mで、第5地点～第8地点と近似する。厚さは20～30cmを測る。以下は主として緑灰色のシルトが堆積しており、最下層は青灰色粘土で上面のレベルはO.P.＋6.5mである。



1 黄褐色土(10YR5/6)
2 明黄褐色シルト(10YR6/6)
3 明黄褐色粘質土(2.5Y6/6)
4 黄褐色砂質土(10YR5/8)
5 緑灰色粘質土(5G5/1)
6 黒褐色粘質土(2.5Y3/2)
7 暗緑灰色砂(7.5GY4/1)
8 灰色粘質土(5Y4/1)
9 黒褐色粘質土(10YR3/2)
10 緑灰色シルト(5G5/1)
11 灰オリーブ色砂礫(7.5Y4/2)
12 青灰色砂礫(5BG5/1)
13 緑灰色粘土(10G5/1)

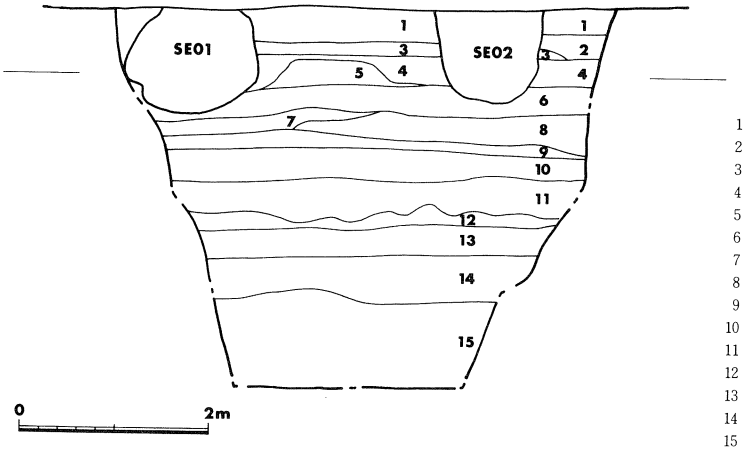


1 にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)
2 明黄褐色粘質土(10YR6/6)
3 灰オリーブ色粘質土(5Y5/2)
4 明褐色砂(7.5YR5/6)
5 緑灰色砂質シルト(5G5/1)
6 黄灰色粘質土(2.5Y5/1)
7 オリーブ灰色砂(5GY5/1)
8 オリーブ灰色シルト(10Y5/2)
9 暗オリーブ灰色シルト(5GY4/1)
10 黒褐色粘質土(5YR2/1)
11 暗灰色粘質土(10YR3/4)
12 オリーブ灰色シルト(10YR5/2)
13 暗緑灰色砂礫(7.5GY4/1)
14 緑灰色シルト(10G5/1)



1 暗褐色粘質土(10YR3/3)
2 黄褐色粘質土(10YR5/8)
3 明黄褐色粘質土(10YR6/6)
4 明黄褐色粘質土(10YR6/8)
5 にぶい黄褐色粗砂(10YR4/3)
6 灰黄褐色砂(10YR4/2)
7 黄褐色砂質土(10YR5/8)
8 緑灰色粘質土(7.5GY5/1)
9 灰オリーブ色砂(7.5Y4/2)
10 黒褐色粘質土(7.5YR3/2)
11 緑灰色粘質土(7.5GY5/1)
12 黒褐色粘質土(10YR3/3)
13 にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)
14 緑灰色シルト(5G5/1)
15 緑灰色砂(5G5/1)
16 青灰色粘土(5BG5/1)

第156図　地質調査第7、第8、第9地点



1 明黄褐色粘質土(2.5YR7/6)
2 明黄褐色砂質土(10YR)
3 明黄褐色粘質土(10YR7/6)
4 黄橙色シルト(10YR7/8)
5 明オリーブ灰色シルト(5GY7/1)
6 明黄褐色粘質土(2.5Y7/6)
7 明黄褐色粘質土(2.5Y6/6)
8 緑灰色砂礫(緑灰色粘土混)(5G3/1)
9 緑灰色粘質土(10GY5/1)
10 黒褐色粘質土(10YR3/2)
11 暗オリーブ灰色粘質土(2.5GY5/1)
12 黒褐色粘質土(10YR3/2)
13 黒褐色腐食土(5YR2/1)
14 緑灰色シルト(10G5/1)
15 緑灰色粘質土(5G5/1)

第157図　地質調査第10地点

第10地点〔図版40〕　B－Ⅱ95区にSE01・SE02の東半分を断ち割るように設定。上部は明黄褐色～黄褐色の粘質土が堆積し、SE01・SE02はともにこの層内にとどまっている。下には第8層緑灰色砂礫があり、その下は緑灰色系のシルトがみられる。植物遺体を包含するのは第13層黒褐色粘質土で上面のレベルO.P.＋7.4mとやや低くなっており、厚さ約30cmである。その下にはシルトが一層あって第15層緑灰色粘土に至る。上面のレベルはO.P.＋6.6mを測る。

（大野）

(6) 包含層出土遺物

遺物は、灰黄褐色土と黒褐色粘質土に含まれている。その包含量は、遺構の検出された調査区域西側から東側に向って減少しており、調査区域の東側から出土した遺物はほんの僅かしかなかった。

またこれらの層は単一時代の遺物包含層ではなく、各層とも縄文時代から近世に至る遺物を含んでいる。しかし、包含状態をみると、灰黄褐色土は中世以後の遺物がほとんどであるのに対して、黒褐色粘質土は中世以前の遺物を多く含んでいることがわかる。

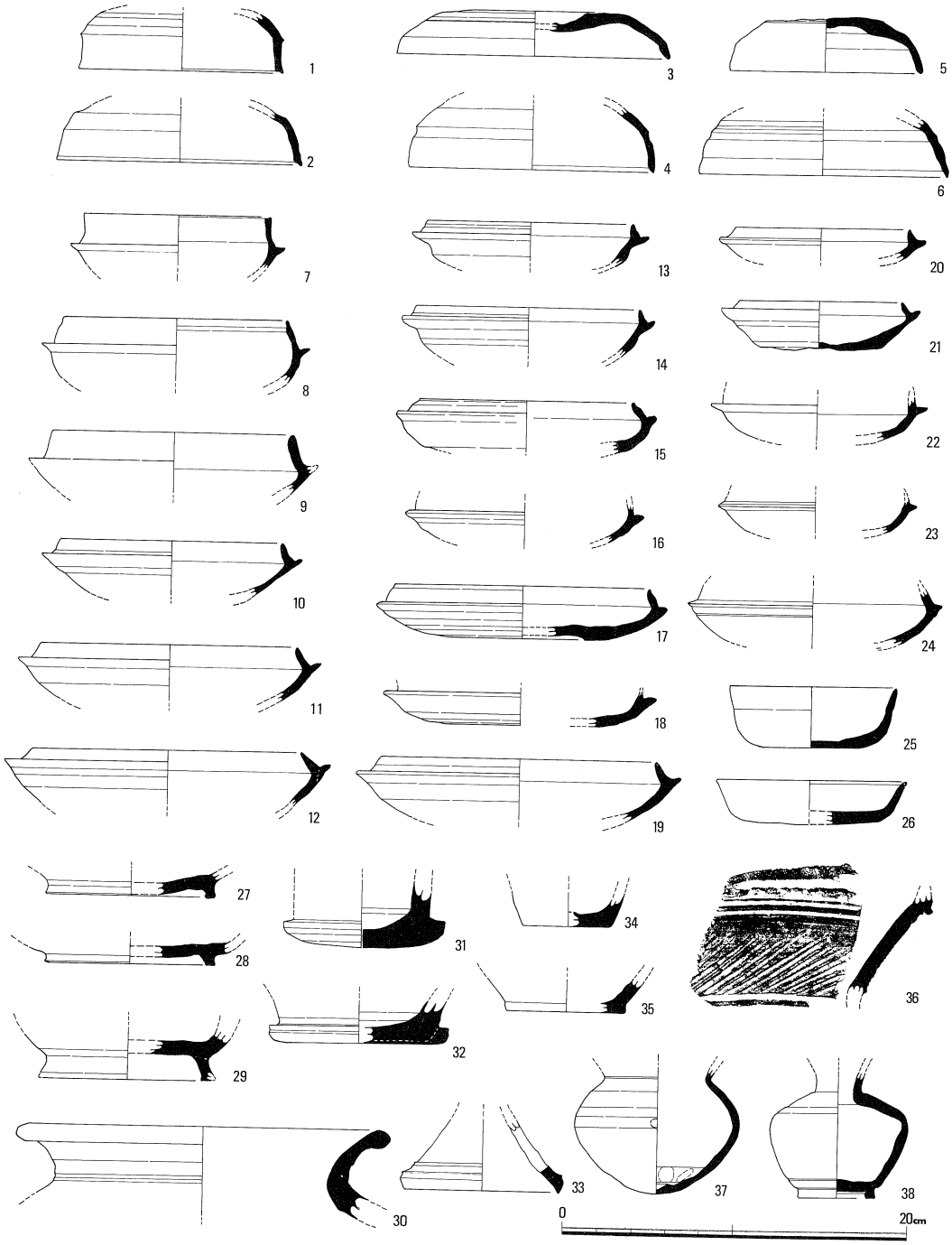
出土した遺物には、土器・石製品・鉄製品・銅銭などがあり、以下各遺物について観察し得たことを記述したい。

1．土　器

須恵器、土師器、瓦質土器、陶磁器などが出土しているが、すべて細片であり、器面の摩滅も著しく、優良な資料はほとんどない。特に陶磁器は、細片で、数も極く僅かであり、図化できるものはなかった。磁器には青磁、青白磁などがみられる。

須恵器〔第158図；図版44～46〕

器種には、蓋杯、高杯、壺、瓶、甕、擂鉢などがあり、量的には蓋杯が最も多い。時期は陶邑窯の編年に比定すると、Ⅰ型式第5段階あるいはⅡ型式第1段階のものを初現として、各時



第158図　包含層出土須恵器実測図

期のものが見られる。

杯蓋(1～6)　細片化しており図上復元できるものは僅かである。(1)は口径が12cmと比較的小さいのに対して、器高は高い。口縁部は直下に下り、端部は内傾する段を有する。稜は短く形だけのものとなっている。出土土器のなかでは比較的古い時期のものである。(2・4・6)は口径14.5cm前後で、口縁部はゆるやかに内弯し、端部は内傾する段を有する。稜は退化しており、天井部と口縁部の境はわずかに浅い凹線によって区画されているにすぎない。(3)は口径が16cmと大きいのに対して、器高は低く扁平で、天井部中央は凹んでいて、未調整のままである。口縁部はゆるやかに内傾した後、屈曲して外下方に下り、端部は単に丸く終わる。稜は全くみられない。(5)は口径11.2cmと小さく、天井部はヘラ切り未調整のままである。口縁部は内弯し、端部は丸い。この他、宝珠つまみの一部も出土している。

杯身(7～29)　たちあがりの有するもの(7～24)、たちあがりがなくなり、平底の底部から直線的に口縁部が上外方にのびるもの(25・26)、又後者の形態のものに高台が貼り付けられているもの(27～29)がある。(7)は口径が11cmと小さいのに対して、たちあがりは比較的長く直立しており、端部は内傾する段を有する。受部は断面三角形を呈している。(8・9)は口径が比較的大きく、たちあがりは内傾気味に立ち上がる。口縁端部は(8)が不明瞭ではあるが内傾する段を有し、(9)は単に丸くおさめている。受部は短く上外方へのびる。(11・12・17・19)は口径15cm以上と、最大の口径を測る。たちあがりは比較的短く内傾し、端部は丸くおさめ、段を成すものはない。底部にヘラ記号を有するもの(17)がある。(10・13～16・24)は口径が12.3cmと小さくなり、器高も低い。たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。(20～23)は口径10cm以下と最も小型化したもので、たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。底部はヘラ切り未調整。(27～29)は高台付の底部破片で、(27・28)は高台が低く、ほぼ直立していて、接地面は平らである。(29)は高台が比較的高く、外方に開き、接地面は平らである。

高杯(33)　脚部破片。脚部は外反して下り、端部を屈曲させる。端部外面には断面三角形の凸帯を有する。スカシ窓は三方向にある。

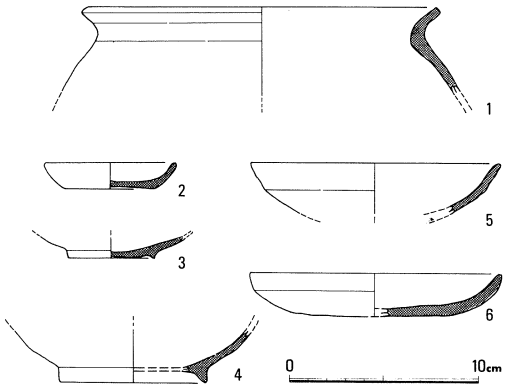
壺(34・38)　いわゆる瓶子と呼ばれるもので、(38)は直立した高台を貼り付けている。高台の接地面は平らで、又底部には糸切り痕はみられない。(34)は平底のもので、底部に糸切り痕がみられる。

甕(37)　体部は上半部に最大径をもち、底部はやや尖り気味である。円孔は最大径をもつ上半部に穿されている。

甕(30・36)　(30)は口縁を折り曲げて端部を被厚にしたもので、肩部と頸部の境に一条の凹線が施される。(36)は口縁端部が面を成し、外面には一条の凸帯が巡る。凸帯直下に三条、頸部下端に二条の凹線が施され、その間には斜めの凹線状の文様が施されている。

擂鉢(31・32)　(31)は丸味をもつ底部で、底部には貫通する小円孔が穿たれている。(32)は底部が平面を成し、円孔などは穿たれていない。

土師器〔第159図; 図版46〕



第159図　包含層出土土師器実測図

細片化しており、図上復元できるものはごく僅かである。器種には椀、皿、甕などがあり、時期は中世のものである。

椀(3～5)　(3)は高台径4.5cmを測り、高台は断面三角形を呈し、低い。(4)は高台径7.5cmを測り、高台はゆるく外反して、比較的高い。(5)は口縁部が上外方へ開き、端部は丸く終る。口縁部と底体部との境で稜を成す。

皿(2・6)　(2)は口径7cmを測る小型のもので、凹んだ底部から、体部が内弯気味に立ち上がり、端部は丸く終わる。(6)は口径13.2cmを測り、平らに近い底部からゆるく内弯して端部に至る。端部は丸い。

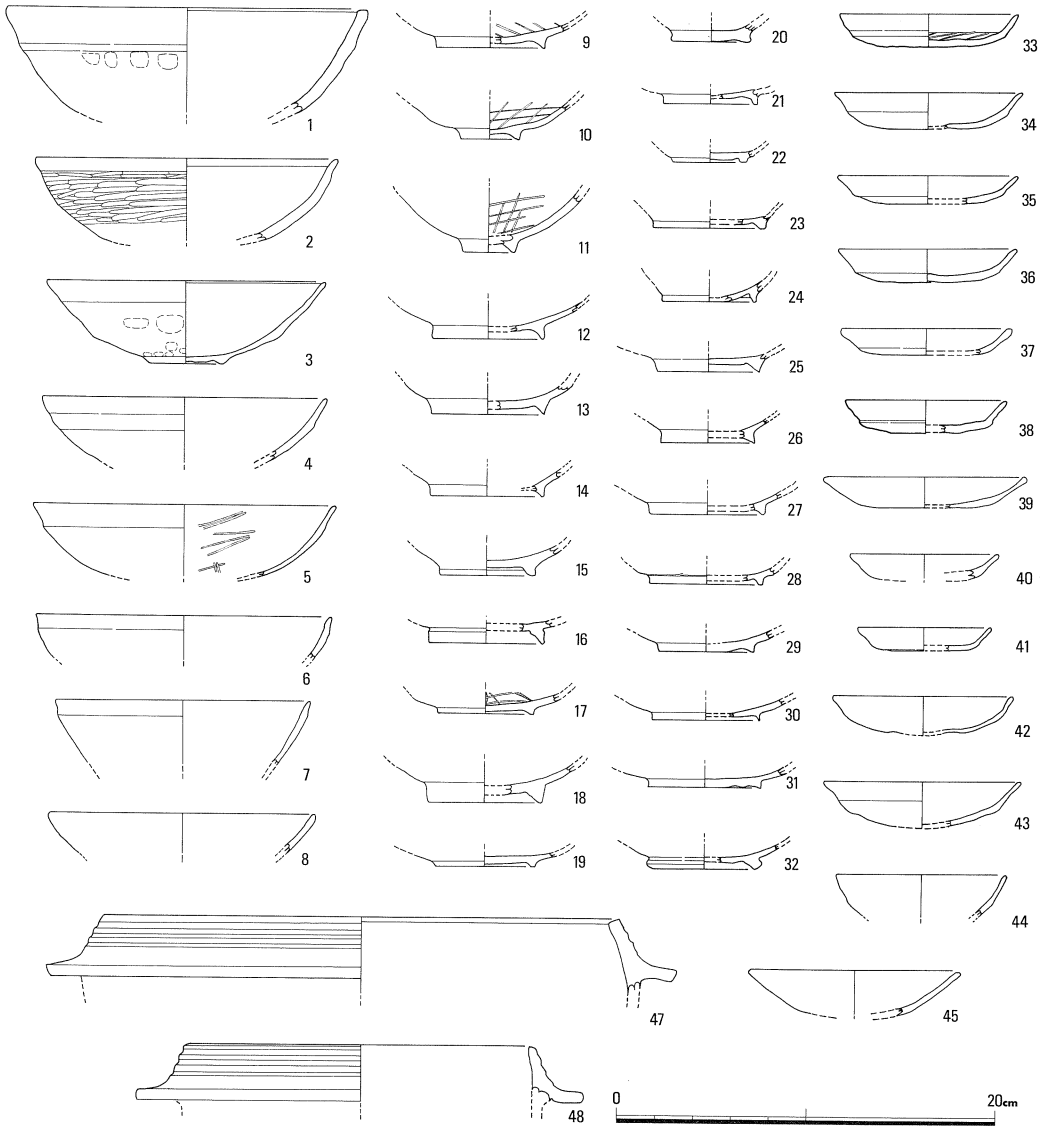
甕(1)　口径18.4cmを測り、口頸部はわずかに内弯気味である。端部は面を成す。

瓦器・瓦質土器〔第160図; 図版45・47〕

細片化しており、表面も摩滅が著しいために詳細はよくわからない。色調は浅黄色、灰色を呈するものが多く、全体的に炭素の吸着は不十分である。

椀(1～32)　(1)は大型のもので器壁も厚い。口縁は端部付近で内弯し、端部は面を成す。口縁部内外面は横ナデ調整されており、体部外面には指押えの跡が残る。(2)は内弯して立ち上がった後、端部付近で外反する。端部は丸い。口縁部内外面は横ナデ調整されており、体部外面は横方向のヘラ磨きが施される。(3)は器高が低く、体部はゆるやかに立ち上がって、端部は丸く終わる。口縁部内外面は横ナデ調整、見込み部分にはナデ調整が施され、体底部外面は指押えの跡が残る。又口縁端部内面直下には、細いヘラ磨きが巡る。高台は低く、断面⌣型を呈している。(4～7)は口縁部内外面が横ナデ調整されており、体部との境でゆるい稜を成す。(18)は高台高が1.05cmと高く、作りもしっかりしており、断面三角形を呈する。(9・12～16・25～27・32)は高台が比較的高く、作りもしっかりしているが、(18)に較べやや粗雑な感じをうける。高台の形は、(15・27・32)が端部を平面に仕上げ、その他は断面三角形を呈する。(17・19・21～24・28～31)は高台が低く、作りも粗雑である。高台の形は(30・31)が断面三角形を呈し、その他は端部が面を成す。

皿(33～44)　口縁部内外面は横ナデ調整、内底面はナデ調整が施され、底部外面には指押



第160図　包含層出土瓦器・瓦質土器実測図

えの跡が残る。(33・34・38・43)は内底面に暗文が施されており、(33・38・43)は平行、(34)は不定方向の暗文が施される。特に(33)は暗文を施す内底面と、口縁部を隔するように一条の沈線が巡り、又口縁端部内面直下にも一条の沈線が巡っている。器形は口縁と底部との境で稜を成すもの(33～38)と、稜を成さずゆるやかなカーブを描くもの(39・42)がある。(40・41)は最も径が小さく、浅いものである。

羽釜(46・47)　口縁部外面に三条の凹線を施し、口縁端部は面を成している。鍔はやや下向きで、端部は(46)が面を成し、(47)が丸く終わっている。口縁部外面は横ナデ調整されているが、その他の部分は器面剝離のため不明である。　(足立　俊)

包含層出土須恵器観察表1

挿図番号 図版番号	出土場所 層位	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
158－1 44－7	C－Ⅲ10－b 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) 杯蓋	口径(推)12.0 稜径(推)12.0 口縁高 2.0 現存高 3.5	口縁は高く垂直に立ち、端部近くで外反し、端部は段状の内傾斜面をなす。 口縁部と天井部の境界は小さく突出して稜をなす。天井部は上内方へ内弯し、ヘラ削りによる稜線を有す。	口縁、稜、及び内面には横ナデ、天井部にはヘラ削りを施す。	胎土 精良、砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面 } 灰白色 外面 } (2.5Y 7/1)
158－2 46(下)－11	C－1地区 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) 杯蓋	口径(推)14.4 稜径(推)12.4 口縁高 1.8 現存高 3.3	口縁は上内方へ伸び、端部は厚く丸味をもちつつ、器内面上内方へ内傾斜面を形成する。 天井部と口縁部との境界の稜は退化してなく、わずかに凹んでいる程度である。天井部は欠失。	口縁及び器内面には横ナデ、天井部にはヘラ削りを施す。	胎土 精良、砂粒及び若干の金雲母を含む 焼成 良好 色調 内面、緑灰色(5G 5/0.5) 外面、灰色(N 5/0)
158－3 44－8	C－Ⅱ5－c 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) 杯蓋	口径(推)16.0 器高 2.65	口縁は低く内傾したのち、天井部はさらに内傾して上内弯し、天井部中央は凹む。 口縁端部は丸く肥厚し、器壁は天井部で厚くなる。口縁部と天井部とを界する凹線や稜はみとめられない。	口縁内外面共に横ナデ、内面天井部には不定方向のナデを施す。 天井部外面には中心から外側へ向けて左回りのヘラ削りを施す。	胎土 精良、砂を含む 焼成 良好 色調 内面、青灰色(5B 5/1) 外面、暗緑灰色 (5G 4/1)
158－4 44－9	B－Ⅱ97－d 地山直上層 杯蓋	口径(推)14.4 稜径(推)13.6 口縁高 2.4 現存高 3.85	口縁は上内方は内弯し、端部は内傾斜面をなし、明確な稜線を有する。 天井部と口縁部との境界の稜は短く、凹面を有しているがほとんど外方へ突出しない。	口縁には横ナデを施す。口縁部と天井部との境界の稜は回転の横ナデによるものである。 天井部は左回りのヘラ削りが施されており、その後、横ナデにより調整する。	胎土 精良、若干の金雲母を含む 焼成 良好 色調 内面、灰白色(N 7/0) 外面、灰 色(5Y 5/1)
158－5 44－10	C－Ⅱ18－b 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) 杯蓋	口径 11.2 口縁高 1.65 天井高 0.3 器高 3.3	口縁は上内方へ内弯し、さらに内傾してゆるい凹面を有して天井部となる。 天井部はヘラ起こしののち未調整のため凹凸が激しく、天井端部は粘土のはみだしが付着したままとなっている。内面は上内方へ内傾し、天井部中央は凹んでいる。	口縁及び器内面には横ナデを施し、天井部中央には仕上げのナデと指頭圧痕がみとめられる。 天井部はヘラ起こしのまま未調整。	胎土 精良、砂粒を含む 焼成 良好。 色調 内面、灰 色(10Y 5/1) 外面、緑灰色 (7.5G Y 5/1)
158－6'	西壁精査中出土 杯蓋	口径(推)14.3 現存高 3.45	口縁部は横ナデによる凹みを有しながら上内方へ内弯し、天井部との境界は一条の凹線によって区切られる。 口縁内面は内傾斜面を有す。	口縁部と天井部の境界に幅0.35cmの凹線が施される。口縁及び内面には横ナデが施される。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、オリーブ灰色 (2.5G Y 5/1) 外面、灰白色(10Y 7/1)
158－7 45－1	C－Ⅱ9－c 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) 杯身	口径(推)11.0 受部径(推) 12.5 たちあがり高 1.8 現存高 3.05	たちあがりは高く垂直に立ち、端部は浅い凹面を有し、弱い斜面を形成する。 受部は上外方へ内弯して伸び、端部は丸く上面は平坦で、断面三角形を呈す。 内面はたちあがりの内傾度が少なく、底体部もゆるく下内方へ内弯する。	内外面共に横ナデを施す。たちあがり端部上端に一条の浅い凹線を施す。	胎土 精良、砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面、灰 色(N 5/0) 外面、灰 色(N 4/0)
158－8 45－2	C－Ⅲ1－a 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) 杯身	口径(推)13.0 受部径(推) 14.8 たちあがり高 1.6 現存高 3.65	たちあがりは高く内傾し、端部は丸く段状の内傾斜面を形成する。受部は上外反して伸び、端部は丸く、受部とたちあがりとの境界は凹線にて区別される。底体部は下内方へ内弯し、器壁はやや厚くなる。	たちあがり及び体部上半には横ナデを施し、受部上面及びたちあがりと受部との境界には一条の凹線を施す。	胎土 精良、若干の金雲母と細砂を含む 焼成 良好 色調 内面、灰 色(N 5/0) 外面、灰 色(N 4/0)
158－9 46(下)－2	C－Ⅱ15－d 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 杯身	口径(推)14.0 たちあがり高 1.8 現存高 3.5	たちあがりは高く、器壁も厚く、上内方へ伸びた後、端部は丸く終わる。受部とたちあがりとの境界は凹線によって区切られ、底体部は下内方へ伸びる。	器面全体に横ナデを施す。受部とたちあがりとの境界には一条の凹線が施されている。	胎土 精良、砂粒及び若干の金雲母を含む 焼成 良好 色調 内面、灰白色(N 7/0) 外面、灰 色(7.5Y 5/1)
158－10 46(下)－5	中央南北畦 杯身	口径(推)13.0 受部径(推) 15.35 たちあがり高 0.9 現存高 3.2	たちあがりは内傾度大きく、上内方へゆるく内弯するが、中央部をユビでナデたため、弱い稜線を有し、内面では上内方へゆるく外反する。受部は上外方へ伸び、端部は丸く上面はやや平坦な面をなし、たちあがりとの境界は凹線によって区切られる。	たちあがり内外面及び受部には横ナデを施す。 たちあがりと受部の境界には一条の凹線が施され、底体部にはヘラ削りが施されている。	胎土 精良、砂粒及び金雲母を含む 焼成 良好 色調 内面、灰黄色(2.5Y 7/2) 外面、灰白色 (10YR 7/1)

包含層出土須恵器観察表 2

挿図番号 図版番号	出土場所 層　位	法　量(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
158－11 45－3	C－Ⅱ36－a 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 杯身	口径(推)15.0 受部径(推) 17.8 たちあがり高 0.9 現存高　3.3	たちあがはやや外反気味に上内方へ伸び、端部は丸くおわる。 受部はやや上方へ外反して伸び、端部は丸く終わるが、粘土のはみ出しが付着し、上面は丸みを持つ。受部とたちあがりとの境界は凹線によって区切られる。 底部にはヘラ削りを施す。	たちあがり内外面及び受部には横ナデ、内底面にはナデを施す。たちあがりと受部との境界には一条の凹線がみられ、外底面には右回りのヘラ削りが施される。	胎土　精良 焼成　良好 色調　内面、青灰色(5B5/1) 外面、灰　色(N5/0)
158－12 46(下)－3	C－Ⅱ36－a 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 杯身	口径(推)15.6 受部径(推) 19.2 たちあがり高 0.8 現存高　3.2	たちあがりは内傾度大きく、上内方へ伸びて端部は丸く終わる。受部は上外方へわずかに外反して伸び、端部は丸く、上端はやや面をなし、たちあがりとの境界は凹線によって区切られる。	たちあがり内外面、受部及び器内面には横ナデ、底部にはヘラ削りを施し、たちあがりと受部との境界には一条の凹線が施されている。	胎土　精良 焼成　良好 色調　内面、青灰色 (10BG5/1) 外面、灰　色(N5/0)
158－13	C－Ⅱ26－d 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 杯身	口径(推)12.0 受部径(推) 13.8 たちあがり高 0.75 現存高　2.6	たちあがりは内弯して上内方へ伸び、中央部は横ナデにより凹面を有し、端部は丸く厚みをもって終わる。 受部は上外方へするどく外反し、端部は丸味をもって終わるが上面はほぼ水平である。たちあがりと受部の境界は浅い凹線で区切られる。	たちあがり内外面、受部、器内面には横ナデを施し、底体部にはヘラ削りを施す。たちあがりと受部との境界には一条の凹線をいれる。	胎土　精良、砂粒を含む 焼成　良好 色調　内面、灰白色(N7/0) 外面、オリーブ灰色 (2.5GY5/1)
158－14	C－Ⅱ26－d 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 杯　身	口径(推)13.0 受部径(推) 14.8 たちあがり高 0.6 現存高　2.9	たちあがりは短く内傾した後、上内方へ伸び、端部は丸く終わる。受部は外反して伸び、端部近くで上内弯し、丸く終わる。たちあがりと受部との境界は凹線によって区切られる。	たちあがり内外面、受部、器内面及び体部上方に横ナデが施される。底体部にはヘラ削りを施す。	胎土　精良、砂粒を含む 焼成　良好 色調　内面、灰　色(N5/0) 外面、灰　色(N5/0)
158－15 46下－4	C－Ⅱ5－a 暗褐色粘質土 (10YR3/3) 杯身	口径(推)12.4 受部径(推) 15.0 たちあがり高 0.7 現存高　3.05	たちあがりは内傾度が大きく上内方へ内弯して短く伸び、端部は丸く粘土のはみだしが付着している。 受部はわずかに上外反して伸び、端部は肥厚して丸く終わる。たちあがりとの境界は凹線によって区切られる。	たちあがり内外面、受部及び器内面には横ナデ、底体部にはヘラ削りを施し、たちあがり端部はみず引き後未調整である。	胎土　精良、砂粒を含む。 焼成　良好 色調　内面 外面　灰　色(N5/0)
158－16	B－Ⅱ96－b 灰黄褐色土 (10YR4/2) 杯身	受部径(推) 14.0 現存高　2.15	受部は外反した後、上外方へ伸び、端部は丸く厚みをもち、上面はやや丸みを持つ。受部とたちあがりとの境界は凹線によって区切られ、内面ではたちあがりと底体部との境界はゆるく内弯する。	受部及び器内面には横ナデ、たちあがりと受部との境界には一条の凹線を施す。	胎土　精良、砂粒を含む。 焼成　良好 色調　内面、灰色(5Y5/1) 外面、灰色(7.5Y5/1)
158－17	C－Ⅱ5－c 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 杯身	口径(推)14.8 受部径(推) 17.0 たちあがり高 1.1 現存高　3.1	たちあがりは上内方へ内弯し、上端にて横ナデによる凹面を有し、端部は丸く終わる。受部は短かくゆるく外反して伸び、端部は肥厚して丸く、上面もやや丸みをもち、たちあがりとの境界は凹線によって区分される。底体部は厚く中央が凹んでいる。	たちあがり内外面、受部及び器内面には横ナデ、受部とたちあがりの境界には一条の凹線を施す。外底面中央にはヘラ記号があり、左回りのヘラ削りが施されている。	胎土　精良、金雲母及び砂粒を含む 焼成　良好 色調　内面、灰白色(7.5Y7/1) 外面、緑灰色 (10GY5/1)
158－18	B－Ⅱ96－c 灰黄褐色土 (10YR4/2) 杯身	受部径(推) 16.0 現存高　2.2	受部は上外方へ外反し、端部は厚く丸味をもって終わり、上面もやや丸みをもつ。たちあがりと受部との境界は凹線によって区切られる。底体部はヘラ削りによる稜を有する。	受部及び器内面には横ナデ、底体部にはヘラ削りを施す。	胎土　精良、砂粒を含む 焼成　良好 色調　内面、灰黄色(2.5Y7/2) 外面、灰白色(5Y7/1)
158－19	C－Ⅱ36－a 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 杯身	口径(推)16.0 受部径(推) 19.0 たちあがり高 0.85 現存高　3.6	たちあがりは上内方へ内傾し、端部は丸く終わる。受部は上外方へ外反して伸び、端部にて丸く、上面は厚く丸みをもつ。たちあがりと受部との境界は一条の凹線にて区切られる。底体部はヘラ削りによる稜線を有する。	たちあがり内外面、受部及び器内面に横ナデ、外面底体部にはヘラ削りを施す。	胎土　精良、砂粒を含む 焼成　良好 色調　内面、灰　色(N5/0) 外面、オリーブ灰色 (5GY5/1)
158－20	B－Ⅱ96－b 灰黄褐色土 (10YR4/2) 杯身	口径(推)10.0 受部径(推) 12.0 たちあがり高 0.6 現存高　1.9	たちあがりは上内方へ大きく内傾して低く伸び、端部は細く終わる。受部は上外方へ外反して伸び、端部は丸く、上面は平坦である。たちあがりと受部との境界はわずかに段を有する。	たちあがり内外面、受部及び器内面に横ナデを施す。	胎土　精良、砂粒を含む 焼成　良好 色調　内面、灰白色(5Y7/1) 外面、黄灰色(2.5Y5/1)

包含層出土須恵器観察表 3

挿図番号 図版番号	出土場所 層　位	法　量(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
158－21・ 45－4	C－Ⅲ31－c 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 杯身	口径(推) 9.2 受部径(推) 11.5 たちあがり高 0.6 器高　2.9	たちあがりは上内方へ大きく内傾し、端部は細く丸く終わる。受部は上外方へ直線的に伸び、端部は丸く上面は平坦である。受部と口縁との境界は凹線によって区切られる。 底部は凹凸が激しく、体部との境界はヘラ起こしのまま未調整である。	たちあがり内外面及び受部には横ナデを施し、底部はヘラ起こしのまま未調整である。たちあがりと受部との境界には一条の凹線を施す。	胎土　精良、金雲母、砂粒を含む 焼成　良好 色調　内面、緑灰色 (1　(10GY5/1) 外面、灰　色(10Y5/1)
158－22	C－Ⅱ19－a 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 杯身	受部径(推) 12.5 現存高　2.7	受部は上外反し、やや丸味をもって端部となり、上面はやや面をなす。たちあがりと受部との境界は一条の凹線により区切られる。底体部は丸く、調整不良により凹凸がある。	たちあがり内外面、受部及び器内面に横ナデ、受部とたちあがりとの境界には一条の凹線を施す。	胎土　精良、砂粒を含む 焼成　良好 色調　内面、灰　色(N5/0) 外面、灰　色(N5/0)
158－23	杯身	受部径(推) 11.4 現存高　2.15	受部は上外反して伸び、端部は丸く、断面三角形を呈す。	たちあがり内外面、受部及び器内面には横ナデを施し、受部とたちあがりを分ける凹線は認められない。	胎土　精良、砂粒を含む 焼成　良好 色調　内面、灰　色(N5/0) 外面、灰　色(N5/0)
158－24	杯身	受部径(推) 14.8 現存高　3.4	受部は短かく「く」の字形に屈曲して伸び、端部は丸味を持ち、断面三角形を呈す。受部と底体部の境界は段を有し、明確な稜線にて区別される。	たちあがり内外面、受部及び器内面に横ナデ、底体部には左回りのヘラ削りを施す。	胎土　精良 焼成　良好 色調　内面 外面　} 灰色(7.5Y5/1)
158－25 46(下)－10	B－Ⅱ97－c 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 杯身	口径(推) 9.6 器高　3.6	口縁は内弯して上内方へ伸び、上端にて横ナデによる凹面を有し、端部は丸く終わる。口縁部から大きく内弯する底部は平坦に仕上げる。	口縁及び内面には横ナデを施し、底部はヘラ起こしのまま未調整。	胎土　精良、金雲母を多く含む 焼成　良好 色調　内面、灰オリーブ色 (5Y5/2) 外面、暗オリーブ灰色 (5GY4/1)
158－26	C－Ⅱ16－b 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 杯身	口径(推)11.0 器高　3.1	口縁は上外方へ伸び、端部にてさらに開き、丸く終わる。底部は平坦で厚い。	口縁部及び器内面に横ナデ、底部にヘラ削りを施す。	胎土　精良、若干の金雲母と砂粒を含む 焼成　良好 色調　内面、灰色(5Y6/1) 外面、灰白色(7.5Y7/1)
158－27 46(下)－7	B－Ⅱ95－c 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 杯	高台径(推) 10.0 高台高　0.8 現存高　1.2	底部にはりつけた高台は、断面方形で幅0.65cmと厚く、端部は平坦に仕上げる。内面には粘土のはみ出しが付着し、段をなす。	高台内外面共に横ナデ、内底面にはナデを施す。	胎土　精良、砂粒を含む 焼成　良好 色調　内面、灰　色(N7/0) 外面、灰　色(10Y5/1)
158－28 46(下)－6	C－Ⅱ37－a 灰黄褐色土 (10YR5/2) 杯	高台径(推) 10.0 高台高　0.5 現存高　0.9	高台は断面台形で比較的背が低く、端部は平坦で幅0.5cmと厚い。粘土のはみだしが外面へ付着し、外底面はほぼ水平に伸びる。	器面全体に横ナデを施す。	胎土　精良、砂粒を含む 焼成　良好 色調　内面、灰白色(N7/0) 外面、灰　色(10Y5/1)
158－29 46(下)－8	B－Ⅱ96－b 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 杯	高台径(推) 10.0 高台高　1.3 現存高　2.65	高台は高く断面長方形で外へふんばり気味にはりつけ、端部は平坦に仕上げる。内外面には粘土のはみ出しが、付着する。底部はほぼ水平で体部は高台を境にして大きく上外方へ伸びる。器壁は0.85cm厚い。	器面には全体に横ナデを施す。体部外面にはヘラ削りが先におこなわれている。	胎土　精良、砂粒を含む 焼成　良好 色調　内面、灰白色(10Y7/1) 外面、灰白色(7.5Y7/1)
158－30 46(下)－1	C－Ⅱ25－c 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 甕	口径(推)20.4 現存高　5.25	口頸部は短く上外方へ外反し、口縁端部にて丸くふくらむ。肩部は下外方へ伸び、頸部との境界にて一条の凹線を施す。	口頸部内外とも横ナデ、肩部と頸部との境界には一条の凹線を施す。	胎土　精良、金雲母、砂粒を含む 焼成　良好 色調　内面、灰白色 (10YR7/1) 外面、オリーブ黒色 (10Y3/1)

包含層出土須恵器観察表4

挿図番号 図版番号	出土場所 層位	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
158－31 44－4	B－Ⅱ96－a 黒褐色粘質土 (10YR3/2) すり鉢	底径 9.4 現存高 4.0	厚い円板状の底部を有すが、左右の基部の厚さは不均等で、底面はやや丸く仕上げる。体部は底部からまっすぐ上方へ伸び、内底面はゆるく内弯する。底部中央には径0.3cmの小孔を穿つ。	器内面及び体部外面には横ナデ、外底面にはヘラ削りを施す。	胎土 精良、0.1cmの砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面、灰色(10Y5/1) 外面、灰色(N6/)
158－32	C－Ⅱ17－c 黒褐色粘質土 (10YR3/2) すり鉢	底径(推)10.4 現存高 2.6	幅約1.0cmの厚い円板状の底部を有し、底面は平坦で、基部のはりだしは水平に近く、器壁は全体的に厚い。体部は上外方へ伸び、内底面はゆるく内弯する。	体部外面及び基部のはり出し端面にはカキ目、外底面にはヘラ削りを施し、器内面は横ナデで仕上げる。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰色(7.5Y5/1) 外面、灰白色(2.5Y7/1)
158－33 46(下)－9	B－Ⅱ96－a 灰黄褐色土 (10YR5/2) 高杯	脚底径(推) 9.0 現存高 4.2	幅0.4cmの長方形の三方透しをもち、脚部はやや外反してくだり端部を上下に突出させ、下方に屈曲し段をなす。端部に断面三角形の突帯を有し、透しは内外面共に粘土はみ出しによるもりあがりがみられる。	透しの幅は0.4cmでヘラで切り込まれる。脚部外面にはカキ目、脚端部には横ナデを施す。	胎土 精良、砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面、灰 色(N4/) 外面、灰 色(N5/)
158－34	C－Ⅱ5－d 灰黄褐色土 (10YR5/2) 壺	底径(推) 5.2 現存高 2.05	ややあげ底気味の底部に上外方へ伸びる体部をつける。	外底面には糸切り痕が残る。	胎土 精良、0.1cmの砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面、灰色(2.5GY5/1) 外面、灰色(N5/)
158－35 46(下)－12	B－Ⅱ96－c 灰黄褐色土 (10YR5/2)	底径(推) 7.0 現存高 1.9	底部は平底で外底面がはり出した後、外反して上外方へ伸びる。内面は横ナデにより凹凸が生じる。	底部のはり出した部分には横ナデ、はり出し部と体部の境界には二条の沈線をいれ、内面は横ナデで仕上げる。	胎土 精良。 焼成 良好。 色調 内面、灰色(N5/) 外面、灰色(10Y4/1)
158－36	C－Ⅱ17－c 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 甕		頸部は上外方へ伸び、口縁端部に突帯を有し、上方に屈曲して段を有す。	口縁端部には突帯を有し、その直下に幅0.15cmの凹線を一条、幅0.22cmの凹線を二条いれる。頸部には右上から左下へ向けて幅0.35cmのヘラによる凹線を施し、さらに幅0.22cmの凹線をいれる。	胎土 精良、砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面、灰白色(N7/) 外面、明青灰色 (5PB7/1)
158－37 45－5	C－Ⅲ10－c 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 甕	基部径(推) 7.6 体部最大径 (推) 9.8 現存高 7.5	体部は腹のはった球形を呈し、底部は丸底だがやや尖り気味で、内面には指頭圧痕による凹凸がある。口頸部は失われていて不明。 透しは径0.8cmで外側から内側に向けて穿たれており、内側には粘土がはみ出している。	体部は横ナデで仕上げ、内面は底部中央に指頭圧痕、器内面には横ナデを施す。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰白色(2.5Y7/1) 外面、灰白色(5Y7/1)
158－38 45－10	C－Ⅱ6－d 地山上面 壺	高台径(推) 4.3 高台高 0.6 基部径 2.8 体部最大径 7.9 現存高 7.4	頸部は弱く外反しながら上外方へ伸びるが、大部分は失われている。体部は頸部から大きく屈曲し、なだらかに肩部にいたり、肩部はかなりはっていて体部最大径は上1/4にある。高台は断面方形で底体部の境界にはりつけている。	頸部、体部、底部には横ナデを施すが、体部下半にはヘラ削りが残っている。	胎土 精良、砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面 外面 } 灰色(N5/)

包含層出土土師器観察表

挿図番号 図版番号	出土場所 層位	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
159－1 46(上)－2	C－Ⅱ36－a 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 甕	口径(推)18.4 頸部径(推) 17.25 現存高 4.65	口縁は上外方へゆるく外反し、端部は平坦で上内方へ斜面を形成す。 口縁内面は下内方へ伸び、頸部にて下方へ外反して厚味を増し下外方へ伸びる。	内外面共に表面剝離著しく、詳細は不明。	胎土 粗、金雲母を含み砂を多く含む 焼成 良好 色調 内面、明黄褐色(10YR6/6) 外面、明黄褐色(10YR6/8)
159－2	B－Ⅱ96－d 灰黄褐色土 (10YR4/2) 皿	口径(推) 7.0 器高 1.4	口縁は上外方へ伸び、端部は丸い。 底部は平坦であるが、中央にいく程、ややあげ底になる。 口縁と底部との境界で器壁の厚さを増す。	内外面共に表面剝離著しく、詳細は不明。	胎土 やや粗、砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面、橙粒色(7.5YR6/6) 外面、淡黄色(2.5YR8/4)に橙色(7.5YR6/6)混り
159－3 46(上)－6	B－Ⅱ96－b 黒褐色粘質土 (10YR3/2及び10YR3/3) 椀	高台径 4.5 高台高 0.4 現存高 1.1	高台は低く、上外方へ外反して伸びる。全体的なつくりが右よりで底部中心が右にくる。 端部の厚さも左右不均等で右側端部は0.3cmと細く、左側端部は0.45cmで丸味をもつ。	高台及び体部に横ナデ、内面にはナデを施す。	胎土 精良、金雲母を含む 焼成 良好 色調 内面、にぶい黄色(2.5Y6/4) 外面、にぶい黄橙色(10YR6/4)
159－4 46(上)－8	C－2地区 壁面精査中出土 椀	高台径(推) 7.5 高台高 0.8 現存高 2.7	高台は断面三角形でやや外側へ伸びる。 高台内面は上内方へ内傾して外底面に到る。 底部へいく程、器壁は薄くなる。	内外面共に表面剝離著しく、詳細は不明。	胎土 精良、金雲母を含む 焼成 良好 色調 内面、灰色(5Y5/1) 外面、橙色(7.5YR6/6)
159－5 46(上)－5	C－Ⅱ5－d 灰黄褐色土 (10YR4/2) 椀	口径(推)13.2 現存高 2.7	口縁は上外方へ開き、端部は丸く終わる。 底体部は下内方へ伸び、口縁との境界にて稜線を有す。	内外面共に表面剝離著しく、詳細は不明。	胎土 精良、金雲母を含む 焼成 良好
159－6 46(上)－1	C－Ⅱ46－a 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 皿	口径(推)13.2 現存高 2.42	口縁は上外方へ内弯して伸び、端部は丸く終わる。 底部はよわく下方へ内弯して伸び、口縁との境界では稜線を有す。 口縁は弯曲している。	底部に指頭圧痕が残っている他は表面剝離著しく、詳細は不明。	胎土 精良、金雲母を多く含む 焼成 良好 色調 内面、橙色(5YR7/6) 外面、にぶい橙色(5YR7/4)

包含層出土瓦器・瓦質土器観察表 1

挿図番号 図版番号	出土場所 層位	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
160－1 47(上)－4	B－Ⅱ96－b 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 椀	口径(推)19.0 現存高 5.65	口縁は上外方へ外反し、端部付近で内弯する。 口縁端部は、平坦である。	口縁外面、端部、及び器内面には、横ナデを施す。 体部外面には、指頭圧痕がみとめられる。	胎土 精良、砂粒及び若干の金雲母を含む 焼成 良好 色調 内面、灰 色(10Y 4/1) 外面、灰 色(10Y 5/1)
160－2 47(上)－1	C－Ⅱ46－b 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) 椀	口径(推)16.0 現存高 4.4	口縁は外反して上外方へ開き、端部にて丸味をもつ。 口縁端部内面はわずかに内傾斜面を呈し、稜線を有する。	体部には、左から右にかけて横方向のヘラ磨きが左回わりに施され、その後横ナデを施す。 又、口縁内外面にも横ナデを施す。	胎土 精良、若干の金雲母を含む 焼成 良好 色調 内面、灰 色(5Y 5/1) 外面、灰 色(5Y 5/1)
160－3 45－6	C－Ⅱ17－a 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 椀	口径(推)14.6 高台径(推) 3.9 高台高 0.35 器高 4.4	口縁は上外方へ外反し、端部は丸い。 高台は低く、端部は丸味をもち、全体的に退化した感じがあり、外底面と高台端面との高さの差はほとんどない。 器面は全体的に凹凸がある。	器表面全体に横ナデがみとめられるが、その後体部にはユビオサエを施す。 内面は全体に横ナデを施すが、その後ヘラ磨きが口縁端部に1本、体部には4本、円弧を描くように施され、又、底部にも縦方向のヘラ磨きが3本施されている。	胎土 精良、砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面、灰 色(N 5/0) 外面、灰 色(N 5/0)
160－4	C－1地区 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) 椀	口径(推)14.9 現存高 3.5	口縁は上外方へ向けて開き、端部は丸い。 器表面は凹凸がある。	口縁には幅0.15cmのヘラ磨きが左から右に向けて施され、体部にはユビオサエを有する。 内面全体に横ナデを施す。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1) 外面、暗オリーブ灰色(2.5GY 3/1)
160－5 47(上)－2	C－Ⅱ26－c 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) 椀	口径(推)16.0 現存高 3.8	口縁は上外方へ外反して開き、端部は丸い。 体部は下内方へ内弯し、外面には凹凸がある。 外面口縁端部には、一部粘土のはみ出しが付着している。	内外面共にヘラ磨きが施されている。 外面体部にはユビオサエを有する。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰 色(7.5Y 5/1) 外面、灰 色(10Y 4/1)
160－6	C－Ⅱ6－a 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 椀	口径(推)15.6 現存高 2.35	口縁は上方へ外反し、端部は丸いがやや尖り気味である。 体部はゆるく内弯し、内面口縁部は厚みを増し、ふくらんでいる。	内外面共に表面剥離著しく詳細は不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰 色(7.5Y 4/1) 外面、灰 色(10Y 5/1)
160－7	A地区床上直下 灰褐色粘土 椀	口径(推)13.4 現存高 3.4	口縁は外反して伸び、端部にて丸く厚みをもつ。 体部は下内方へ伸び、口縁と体部との境界にて明確な稜線を生じる。	口縁内外面共に横ナデが施されている。 内面には円弧を描くようにヘラ磨きを施す。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面 } 灰白色(10Y 7/1) 外面 }
160－8	C－Ⅱ6－d 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 椀	口径(推)14.0 現存高 2.15	口縁は上外方へ伸び、端部は丸い。	内外面共に表面剥離著しく詳細は不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、暗オリーブ灰色(5GY 4/1) 外面、オリーブ灰色(10Y 5/1)
160－9 47(上)－7	C－1地区 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) 椀	高台径(推) 5.7 高台高 10.6 現存高 1.1	高台はほぼ垂直に立ち「く」の字に屈曲して体部となる。 高台は断面三角形を呈し内面は大きく内傾する。 底部は中央に向けゆるく下方するが、底部の厚さは 0.2cmから0.45cmと不均等である。	高台外面には横ナデ、内面にはユビオサエを施した後に横ナデで調整している。 内面には幅 0.2cmの暗文が斜めに入いる。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、オリーブ黒色(10Y 3/1) 外面、灰白色(10Y 8/1)
160－10 47(上)－6	C－Ⅱ17－c 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 椀	高台径(推) 3.0 高台高 0.6 現存高 1.8	高台はゆるく土外方へ伸び、体部は強く外反したのち、上外方へ内弯する。 高台は断面三角形を呈し、内面は大きく内傾する。	高台及び体部外面に横ナデを施す。 内面には幅 0.1cmの暗文が右上から左下への斜めと円弧とに施されている。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰 色(5Y 5/1) 外面、灰 色(5Y 5/1)

包含層出土瓦器・瓦質土器観察表 2

挿図番号 図版番号	出土場所 層位	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
160－11 47(上)－11	C－Ⅱ6－d 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 椀	高台径(推) 2.7 高台高 0.7 現存高 3.0	高台はゆるく上外方へ伸びたのち体部にて「く」の字形に屈曲し、さらに上外方へ内弯する。 高台の幅は1.0cmと厚いが端部が細い為、断面三角形を呈し、内面が大きく内傾する。	器外面体部にはユビオサエが施されている。 内面には幅0.15cmの暗文が円弧と右上から左下への斜めとに施す。 高台には横ナデを施す。	胎土 精良。 焼成 良好 色調 内面、灰色(7.5Y5/1) 外面、灰白色(10Y5/1)
160－12	C－Ⅱ6－b 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 椀	高台径(推) 5.8 高台高 0.7 現存高 1.6	高台は上方へ内弯して立ち「く」の字形に屈曲して体部となる。 高台の端部は丸味を有し、内面は上内方へ内弯し断面三角形を呈する。	高台には横ナデが施されているが、他は表面剥離著しく詳細は不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰白色(5Y7/1) 外面、灰色(7.5Y4/1)
160－13	C－Ⅱ36－a 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 椀	高台径(推) 6.0 高台高 0.85 現存高 1.65	高台は上外方へ伸び体部は上外方へ内弯する。 高台の内面は上内方へ伸び端部は細く、全体的に断面三角形を呈す。 高台は後から外底面に貼りつけており、その際の調整不良の為に高台と外底面との間に段が生じている。	内外面共に表面剥離著しく詳細は不明。	胎土 精良、金雲母を含む 焼成 良好 色調 内面、灰白色(10YR7/1) 外面、浅黄橙色(10YR8/3)
160－14	B－Ⅱ96－C 灰黄褐色土 (10YR4/2) 椀	高台径(推) 6.0 高台高 0.6 現存高 1.15	高台は垂直に立ち、上外方へ伸びる。 高台の内面は上内方へゆるく内弯し、端部は細く、全体的に断面三角形を呈す。	内外面共に表面剥離著しく、詳細は不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、明黄褐色(2.5Y7/6) 外面、淡黄色(2.5Y8/4)
160－15	B－Ⅱ96－C 黒褐色粘質土 (10YR3/2及び10YR2/3) 椀	高台径(推) 5.0 高台高 0.3 現存高 1.4	高台は不整な形をしており厚さも不均等であるが全体的に厚い。	内外面共に表面剥離著しく、詳細は不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰オリーブ色(5Y5/2) 外面、灰白色(5Y8/2)
160－16	C－Ⅱ6－d 灰黄褐色土 (10YR4/2) 椀	高台径(推) 6.0 高台高 0.8 現存高 1.0	高台は垂直に立ち、体部との境界は凹線によりくぎられる。 高台端部は丸く、内面は上内方へ内弯し、高台は全体的に厚手で断面三角形を呈する。 高台はあとから外底面にはりつけており、調整不良による段が生じている。	高台と体部との境界に凹線が施されている他は、表面剥離著しく詳細は不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、にぶい黄色(2.5Y6/4) 外面、灰オリーブ色(7.5Y5/2)
160－17	C－Ⅱ26－b 灰黄褐色土 (10YR4/2) 椀	高台径(推) 2.5 高台高 0.3 現存高 0.9	高台は低く、外面は上外方へ外反して伸び、内面は上内方へ伸び、端部は細い所からやや平坦なものと不均等である。 高台外面と体部との境界には稜線を有する。 外底面は調整不良のため、凹凸がある。	高台は内外面共に横ナデが施され、器内面には不定方向の暗文が施されている。	胎土 精良、金雲母を含む 焼成 良好 色調 内面、灰色(N5/0) 外面、灰色(N5/0)
160－18	B－Ⅱ96－d 黒褐色粘質土 (10YR3/2及び10YR2/3) 椀	高台径(推) 6.0 高台高 1.05 現存高 1.8	高台は高く、外底面との接合部が1.1cmと広く、端部は細い為に断面三角形を呈す。 高台外面は上外方へ伸びた後、体部へ「く」の字形に屈曲して上外方へさらに伸びる。 高台内面は大きく内傾して、外底面との境界に稜線を有し、外底部は底部中央部へ向ってやや下降しつつ、厚味を増す。	内外面共に表面剥離著しく、詳細は不明。	胎土 精良、若干の金雲母を含む 焼成 良好 色調 内面、浅黄色(2.5Y7/4) 外面、淡黄色(2.5Y8/4)
160－19 47(上)－9	C－Ⅱ5－C 灰黄褐色土 (10YR4/2) 椀	高台径(推) 5.3 高台高 0.3 現存高 0.6	高台は低く、上外方へ外反して伸び、体部との境界にて段を有する。 高台端部は平坦で、内面は内傾して外底面へ到る。 器壁は体部から底部へ近い程、厚くなる。	底部に横ナデを施すほかは、内外面共に表面剥離著しく詳細は不明。	胎土 精良、金雲母を含む。 焼成 良好 色調 内面、オリーブ灰色(2.5GY5/1) 外面、灰オリーブ色(5Y5/2)
160－20	B－Ⅱ96－d 灰黄褐色土 (10YR4/2) 椀	底部径 4.2 現存高 0.8	底部は「く」の字形に屈曲して上方へ伸び、端部は丸い。 外底面は上内方へ内弯した後、再び下内方へ伸びる。	底部外面に横ナデが施されているが内面は表面剥離著しく詳細は不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰色(10Y5/1) 外面、灰白色(10Y7/1)

包含層出土瓦器・瓦質土器観察表 3

挿図番号 図版番号	出土場所 層位	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
160－21	B－Ⅱ95－b 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 椀	高台径(推) 5.0 高台高 0.5 現存高 0.6	高台は低く、上外方へ外反する。 高台端部は丸く、上内方へ内弯する。	内外面共に表面剥離著しく、詳細は不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰オリーブ色 (7.5Y 5/2) 外面、灰 色 (7.5Y 5/1)
160－22	B－Ⅱ96－c 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 椀	高台径(推) 3.8 高台高 0.25 現存高 0.4	高台のつくり方は雑で、端面の幅、高さが不均等である。 高台をつくる際に粘土接合部が未調整である為に段を有する。	内外面共に表面剥離著しく、詳細は不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰 色(7.5Y 5/1) 外面、灰 色(5Y 5/1)
160－23	B－Ⅱ96－d 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 椀	高台径(推) 6.0 高台高 0.35 現存高 0.7	高台は低く、上外方へ伸び端部は平坦で内面は上内方へ伸びて、外底面との境界にて段を有す。 高台の巾は 0.7cm と広いが全体的に器壁は薄い。	内外面共に表面剥離著しく、詳細は不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰 色(5Y 5/1) 外面、灰 色(7.5Y 5/1)
160－24 47(上)－10	B－Ⅱ96－b 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 椀	高台径(推) 5.0 高台高 0.35 現存高 0.8	高台は低く上外方へ外反して伸び、端部は丸く、内面は上外方へ内弯し、外底面との境界は凹線にて区切られる。	内外面共に表面剥離著しく、詳細は不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰 色(2.5Y 4/1) 外面、灰 色(10Y 4/1)
160－25 47(上)－12	C－1地区 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) 椀	高台径(推) 5.4 高台高 0.7 現存高 0.9	高台は上外方へゆるく外反して伸び、端部は細く、内面は上内方へ大きく内傾するため、断面三角形を呈す。	内外面共に表面剥離著しく、詳細は不明。	胎土 精良、若干金雲母を含む 焼成 良好 色調 内面、黒褐色 (10YR 3/1) 外面、灰黄褐色 (10YR 5/2)
160－26	B－Ⅱ96－c 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 椀	高台径(推) 5.0 高台高 0.7 現存高 1.2	高台はやや上内方へ立った後、上外方へ強く外反する。 高台端部は細く、内面は低く内傾し断面三角形を呈す。	内外面共に表面剥離著しく、詳細は不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、にぶい黄橙色 (10YR 7/2) 外面、橙 色 (7.5YR 7/6)
160－27	B－Ⅱ96－b 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 椀	高台径(推) 6.0 高台高 0.6 現存高 1.0	高台はほぼ垂直に立った後「く」の字形に屈曲して伸びる。 高台端部は丸く、内面は上内方へ伸びて外底面に至る。	内外面共に表面剥離著しく、詳細は不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰 色(7.5Y 4/1) 外面、灰 色(10Y 5/2)
160－28	C－Ⅱ5－b 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 椀	高台径(推) 6.0 高台高 0.4 現存高 0.8	高台は低く上外方へ外反して伸びた後、上外方へ内弯して体部となる。高台内面は上内方へ伸び、端部はやや丸味を持つ。高台はあとから底部にはりつけており、外底面と高台との間に段を生じている。	高台内外面共に横ナデが施されるが、他は表面剥離著しく、詳細は不明。	胎土 精良、砂粒を含む。 焼成 良好 色調 内面 } 明黄褐色 外面 } (2.5Y 7/6)
160－29 47(上)－8	B－Ⅱ95－b 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 椀	高台径(推) 5.0 高台高 0.4 現存高 0.9	高台は低く上外方へ外反して伸び、内面は上内方へ伸びて外底面へ至る。 端部のつくりは不均等であるが、ほぼ平坦な面をつくり、外底面は下内方へ伸びる。	内外面共に表面剥離著しく、詳細不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、オリーブ黄色 (5Y 6/3) 外面、灰オリーブ色 (7.5Y 6/2)
160－30 47(上)－5	C－Ⅱ6－d 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 椀	高台径(推) 5.7 高台高 0.4 現存高 1.0	高台は低く垂直にたって上外方へ外反して伸びる。内面は内傾度が小さく、そのため高台は細く小さい。高台が小さい割には器壁は厚い。	高台に横ナデを施すほかは、内外面共に表面剥離著しく、詳細不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰 色(5Y 6/1) 外面、灰白色(2.5Y 8/2)

包含層出土瓦器・瓦質土器観察表4

挿図番号 図版番号	出土場所 層位	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
160－31	B－Ⅱ95－a 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 椀	高台径(推) 6.0 高台高 0.45 現存高 0.8	高台は低く垂直にたったのち、上外方へ外反して伸びる。内面は内傾度大きく、高台をほとんど有しない。	高台には横ナデを施す。器内面には部分的に方向の定まらないナデがみられ、これらのナデののち平行線暗文を施す。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰色(7.5Y 5/1) 外面、灰白色(10Y 7/1)
160－32	C－Ⅱ37－6 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) 椀	高台径(推) 5.4 高台高 0.65 現存高 1.2	高台は外方へ張り出してつくられており、高台から体部へは「く」の字形に屈曲して上外方へ伸びる。 高台端部は幅0.5cmと厚く平坦で、内面は上内方へ傾斜して伸び、内底面との境界では浅い凹みが生じる。	内外面とも表面剥離著しく詳細は不明。	胎土 精良、金雲母を含む。 焼成 良好 色調 内面、浅黄色 (2.5Y 7/4) 外面、にぶい黄橙色 (10YR 7/2)
160－33 45－7	C－1地区 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) 皿	口径(推) 9.5 器高 1.8	口縁は上外方へ外反したのち内弯して端部に至り、丸味をもって終わる。口縁上端は平坦ではなく、波をうち、底部は丸底に近い平底であり、中央部がやや突出している。 底部から口縁にかけては傾斜度が異なるため稜線が生じる。	口縁内外面は横ナデ、器内面の口縁部部及び口縁と底部との接点に一条の沈線が施されている。 内面にはナデを施し、仕上げナデがみられる。このナデの後、放射状に幅0.1cmの暗文を施す。	胎土 精良、若干の金雲母を含む 焼成 良好 色調 内面、灰色(N 5/0) 外面、灰色(N 5/0)
160－34 45－8	C－1地区 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) 皿	口径(推)10.0 現存高 1.95	口縁は上外方へ外反して伸び、端部にて丸く終わる。底部は下内方へ内弯して伸び中央部に凹面を有す。口縁部と底部との境界に稜線を生じている。 底部は丸底に近い平底である。	口縁部外面には横ナデ、外底面中央の凹みはユビオサエによるものである。 内面全体に不定方向の暗文が施される。	胎土 精良、金雲母を含む。 焼成 良好 色調 内面、灰色(N 5/0) 外面、灰色(10Y 5/1)
160－35	皿	口径(推) 9.5 現存高 1.5	口縁は上外方へやや外反して伸び、端部にて丸く終わる。 底部と口縁部は稜をもって境界とし、底部は平坦であるが、内下方へゆるく内弯して伸びる。 底部の器壁はやや厚味を増している。	底部に内弧状に沈線が三条施されているほかは表面剥離著しく、詳細は不明。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面灰オリーブ色 (7.5Y 6/2) 外面、灰色(5Y 5/1)
160－36 45－9	C－Ⅱ36－a 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) 皿	口径(推) 9.5 器高 1.8	口縁部は上外方へ伸び端部にてやや厚みを増して、丸く終わる。底部と口縁部とは稜をもって境界とし、底部は平底であるが丸底に近く、下内方へ内弯して伸び中央部にユビオサエによる凹みを有す。 全体的に器壁は厚い。	内外面共に口縁部には横ナデ、外底面中央にはユビオサエが施されている。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面、灰色(N 7/0) 外面、灰色(N 5/0)
160－37	C－Ⅱ5－c 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 皿	口径(推) 9.0 現存高 1.4	口縁は上外方へ外反して伸び、端部にて厚みを増して丸く終わる。底部は下内方へ内弯して伸び、底部と口縁部との境界に稜線を生じる。	内外面とも表面剥離著しく詳細は不明。	胎土 良好 焼成 良好 色調 内面 } オリーブ黒色 外面 } (7.5Y 3/1)
160－38	C－Ⅱ37－a 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 皿	口径(推) 8.4 器高 2.8	丸底に近い平底で上外方へ開く口縁を有し、口縁部端は丸く終わる。 口縁部と底部との境界は一条の浅い凹線によって区切られる。底部の器壁は厚い。	口縁部内外面共に横ナデ、内底面には平行線暗文を施す。	胎土 精良 焼成 良好 色調 内面 } 黄灰色 外面 } (2.5Y 5/1)
160－39	B－Ⅱ97－a 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 皿	口径 10.8 器高 1.65	口縁は上外方へやや外反して伸び、端部にて厚味を増して丸く終わる。 底部は下内方へ内弯して伸び器壁は厚くなるが、底部中央ほど細くなる。	口縁部内外面共に横ナデが施されるほかは、表面剥離著しく詳細不明。	胎土 精良、砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面 } 灰色(N 5/0) 外面 }
160－40	B－Ⅱ95－C 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 皿	口径(推) 8.0 現存高 1.35	口縁は上外方へ外反して伸び端部にて肥厚して丸く終わる。 底部は下内方へ内弯して伸び器壁は厚みを増す。	内外面共に表面剥離著しく、詳細不明。	胎土 精良、砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面、オリーブ黒色 (5Y 3/2) 外面、オリーブ灰色 (10Y 4/2)

包含層出土瓦器・瓦質土器観察表 5

挿図番号 図版番号	出土場所 層位	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
160－41	B－Ⅱ97－d 灰黄褐色土 (10YR5/2) 皿	口径(推) 7.0 現存高 1.25	口縁は上外方へやや外反して伸び、端部は丸く終わる。 底部と口縁部は稜をもって境界とし、底部は平底で器壁はやや厚みを増す。	内外面共に表面剝離著しく、詳細は不明。	胎土 精良、砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面、灰黄色(2.5Y7/2) 外面、灰白色(2.5Y8/2)
160－42	西壁精査中出土 黒褐色土上面 皿	口径(推) 9.5 現存高 2.95	口縁部は弱く外反しつつ上外方へ伸び、端部は丸くおさめる。 口縁部と底部の境界には小さい稜をもたせ、底部はやや丸く仕上げる。	内外面共に表面剝離著しく、詳細不明。	胎土 精良 焼成 良好
160－43 47(上)－3	C－Ⅱ37－b 灰黄褐色土 (10YR5/2) 皿	口径(推) 10.4 現存高 2.3	口縁は上外方へ外反して伸び、端部にて丸く終わる。底部は下内方へ伸び丸底である。	口縁部内外面共に横ナデ。内底面に平行線暗文を施すほかは表面剝離著しく、詳細不明。	胎土 精良、砂粒及び金雲母を含む 焼成 良好 色調 内面、オリーブ灰色(2.5GY5/1) 外面、灰色(N5/1)
160－44	C－Ⅱ5－c 灰黄褐色土 (10YR5/2) 皿	口径(推) 9.0 現存高 2.2	口縁は上外方へ伸び、端部は丸く終わる。 底部は下内方へ伸びる。	内外面共に表面剝離著しく、詳細不明。	胎土 精良、金雲母を含む 焼成 良好 色調 内面、灰色(5Y5/1) 外面、灰白色(2.5Y8/2)
160－45	C－Ⅱ5－a 灰黄褐色土 (10YR5/2) 皿	口径(推) 11.1 現存高 2.35	口縁は上外方へ伸び、端部にてやや肥厚し、丸く終わる。 底部は下内方へ伸びる。	内外面共に表面剝離著しく、詳細不明。	胎土 精良、砂粒を含む。 焼成 良好 色調 内面、褐灰色(7.5YR5/1) 外面、にぶい橙色(7.5YR7/4)
160－46 47(上)－14	C－Ⅱ37－c 灰黄褐色土 (10YR5/2) 羽釜	口径(推) 27.2 つば径(推) 33.2 現存高 4.1	口縁部は凹線による段を有しながら上内方へ伸び、端部は内傾斜面を有す。 つばは上方へ向けてつけられており、端部も面を有す。	口縁部外面は横ナデを施した後、幅0.35cmの凹線を三段にわたって施す。 内面は表面剝離著しく、詳細は不明。	胎土 精良、金雲母及び砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面、灰黄色(2.5Y6/2) 外面、灰色(7.5Y4/1)
160－47 47(上)－13	B－Ⅱ97－c 灰黄褐色土 (10YR5/2) 羽釜	口径(推) 18.0 つば径(推) 23.6 現存高 3.0	口縁部は凹線による段を有しながら上内方へ伸び、端部は平坦面を有す。 つばはやや上方へ向けてつけられており、端部は丸く終わる。 内面はやや下外方へ伸びる。	口縁部には幅 0.3cmの凹線が三段にわたって施されているが、表面剝離著しいため、詳細不明。	胎土 精良、金雲母をわずかに含む 焼成 良好 色調 内面・外面 オリーブ黒色(10Y3/1)

(渡邊・大野)

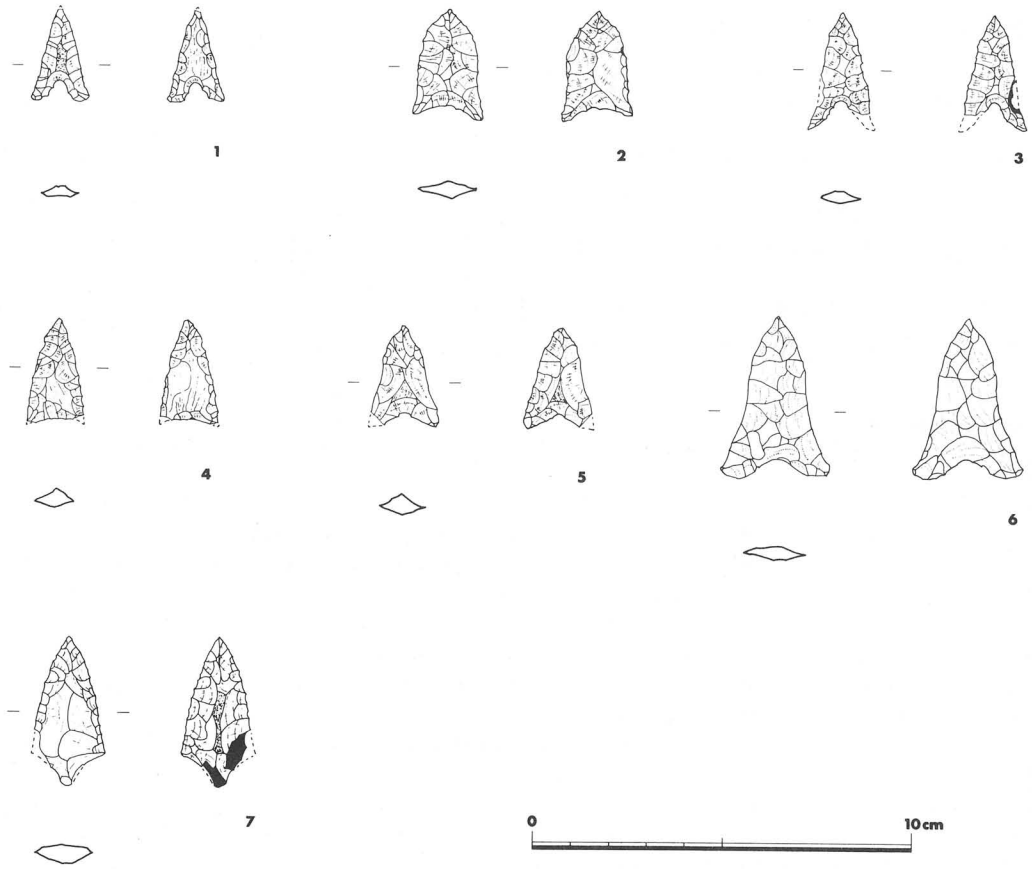
2．石器（第161図・図版47）

第5地区の調査で出土した石器は石鏃7点のほかはすべてサヌカイトフレイクである。遺構に伴うものはなく、すべて包含層から出土している。

石鏃には凹基無茎式のもの6点、凸基有茎式のもの1点という比率になっており、凹基無茎式のものは形態や基部のつくりでいくつかのタイプにわけることが可能で、長身三角形でワタクリの深いもの（1・3）、ワタクリは基部全体に及ぶが浅いもの（2・4・5）、肩が張って五角形を呈するもの（2）、大型で足が大きく外へ開くもの（6）などがある。

石器観察表（※は現状計測値）

挿図番号 図版番号	出土場所 層　位	形　態 材　質	法量(cm・g)	特　　徴
161－1 27(下)－1	C－Ⅱ46－a 地山直上	石　鏃 凹基無茎式 サヌカイト	長　2.4※ 幅　1.5※ 厚　0.3※ 重　0.8※	縦長の三角形を呈し、側縁は直線をなす。基部のワタクリは小さいが鋭い。比較的薄手で軽い。A面には風化面、B面には第1次調整面を残す。
161－2 27(下)－2	C－Ⅱ18－a 黒褐色粘質土	石　鏃 凹基無茎式 サヌカイト	長　2.9 幅　1.85 厚　0.5 重　2.3	基部は全体に小さく凹み、足は若干外側に開く。側縁は肩が張って急に先端に向う。左右の均整がとれていない。 第1次調整面は残さないが、全体に粗雑なつくりで、表面の風化が進んでいる。
161－3 27(下)－3	C－Ⅱ37－a 黒褐色粘質土 (10YR3/2)	石　鏃 凹基無茎式 サヌカイト	長　3.05 幅　1.65 厚　0.3 重　1.0※	長身三角形でワタクリ大きく、足は外側へ開き気味になる。断面菱形。 第1次調整面を残さず、全体にていねいなつくり。
161－4 27(下)－4	C－Ⅱ35－b 黒褐色粘質土 (10YR3/2)	石　鏃 凹基無茎式 サヌカイト	長　1.8※ 幅　1.45※ 厚　0.55 重　1.8※	基部は小さく凹む程度で、全体に長めの三角形を呈す。断面はややゆがんだ台形で、肉厚。 A面には一部、B面にはかなり大きく第1次調整面を残す。
161－5 27(下)－5	C－Ⅱ37－a 黒褐色粘質土 (10YR3/2)	石　鏃 凹基無茎式 サヌカイト	長　2.7 幅　1.8※ 厚　0.55 重　1.9※	基部はあまり大きく凹まず、足はやや外側に開く。側縁は直線でなく中央がやや凹み、先端が尖るため、五角形鏃に似たプロポーションを呈する。断面菱形で肉厚。 A面、B面とも一部第1次調整面を残す。剝離面が大きく粗雑な感じをうける。
161－6 27(下)－6	C－Ⅱ35－b 黒褐色粘質土 (10YR3/2)	石　鏃 凹基無茎式 サヌカイト	長　4.25 幅　2.9 厚　0.35 重　3.4	長身、薄手で先端は尖り、側縁はなだらかに弧を描いて足は外側へ開く。 表面の風化著しく、乳白色を呈す。剝離面大きい。
161－7 27(下)－7	C－Ⅱ27－a 黒褐色粘質土 (10YR3/2)	石　鏃 凸基有茎式 サヌカイト	長　3.95 幅　1.9※ 厚　0.5 重　3.9※	均整のとれた縦長三角形の身に茎がつく。全体に肉厚。つくりはていねいで、第1次調整面をほとんど残さない。

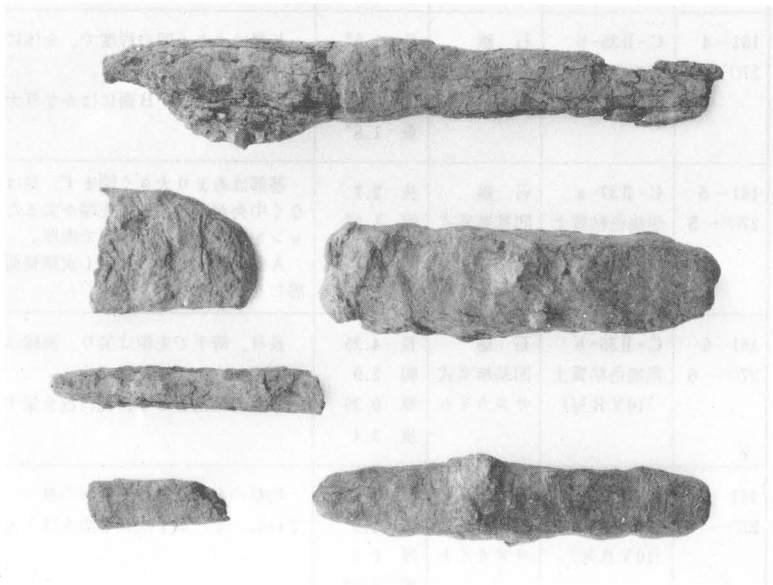


第161図　石器実測図

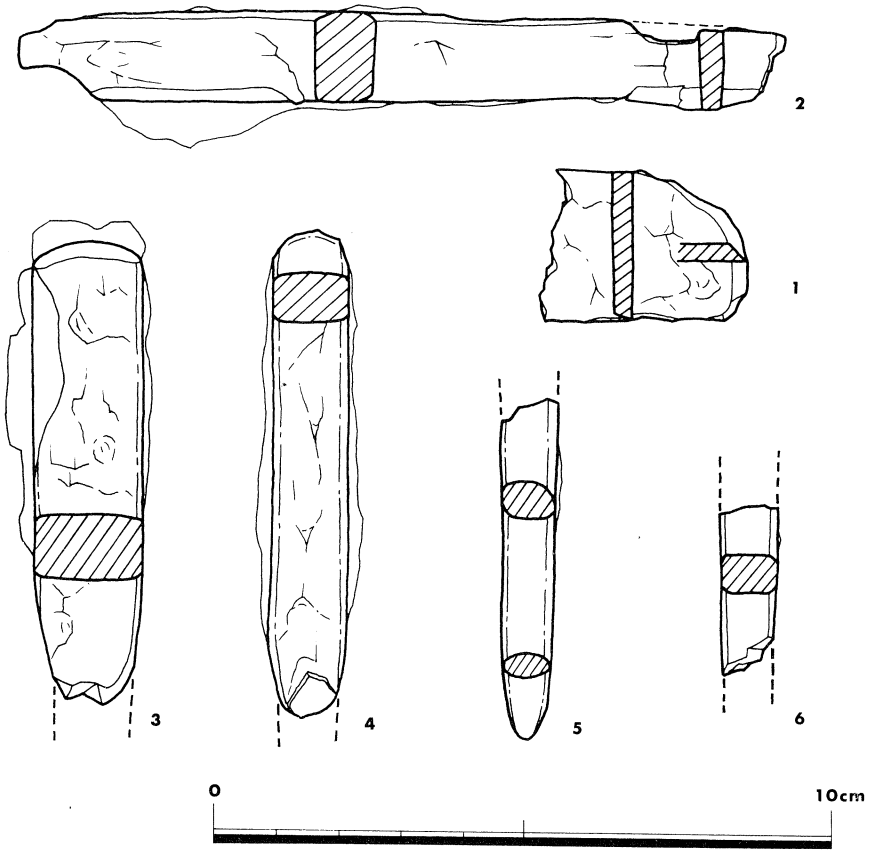
3．鉄製品

〔第162～164図〕

鉄製品は、灰黄褐色土から1個（1）、黒褐色粘質土から5個（2～6）出土しており、鉄片を含めた総重量は130gを計る。又この他、鉄滓も灰黄褐色土から1個（第167図―1）、黒褐色粘質土から2個（第164図―2・3）出土している。



第162図　鉄器



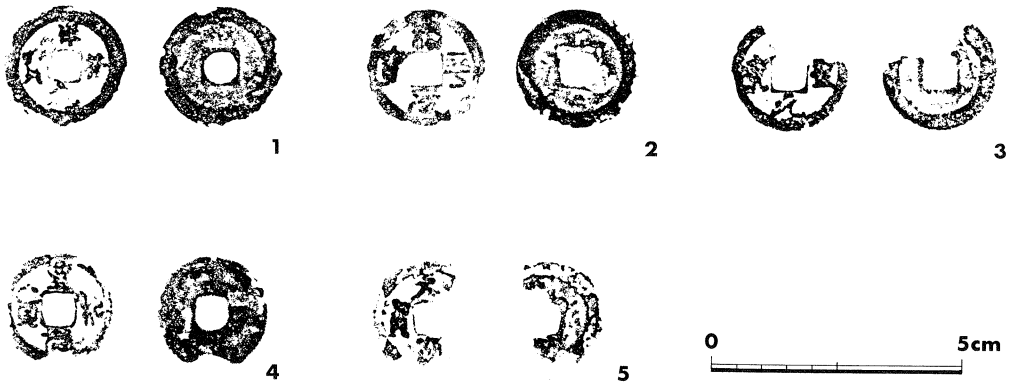
第163図　鉄製品実測図

（1）は、鎌の刃先状のもので、現存長 3.3cm、最大幅 2.5cm、厚さ3mmを計る。重量は6.1g。（2）は、刀子状のもので、現存長12.3cm、最大幅 1.5cm、厚さは最大部で9mm、最小部で4mmを測る。重量は34.5g。（3）は、現存長 7.5cm、最大幅 1.8cm、厚さは最大部で 1.1cmを測り、先細りになっているようである。重量は49.0g。用途は不明。（4）は現存長8cm、最大幅 1.2cm、厚さ8mmを測る。重量は24.8g。用途は不明。（5）は、現存長 5.5cm、最大幅9mm、厚さは最大部で6mmを測る。重量は 4.8g。先端が尖っており釘と考えられる。（6）は、現存長 2.8cm、幅9mm、厚さ6mmを測る細片。重量は 3.6g。用途は不明。

鉄滓の重量は（1）が43.8g、（2）が25g、（3）が62.6gをそれぞれ計る。

4．銅銭〔第165図・図版47〕

銅銭は計6枚出土している。いずれも包含層より出土したものだが、至和元宝はＳＡ02の杭跡98の上面より出土したものである。ほかにも杭跡36、杭跡37からも銅銭が出土しているが、小片で種類は不明である。なお、これらの銅銭は鋳なおしたいわゆるビタ銭であろう。



第164図　銅銭拓影図

銅銭一覧表

挿図番号 図版番号	出土地区・層位	直径(cm)		備　　考
1 47(下)－8	C-Ⅱ35-b 灰褐色土	2.4	祥符元宝（北宋、1008）	
2 47(下)－9	C-Ⅱ18-a 灰黄褐色粘質土	2.4	治平元宝（北宋、1064～1067）	南北アゼ壁面精査中出土
3 47(下)－10	C-Ⅱ45-a 灰黄褐色土(10YR½)	2.3	天聖元宝（北宋、1023）	
4 47(下)－11	C-Ⅱ37 杭跡98	2.2	至和元宝（北宋、1054）	
5	C-Ⅱ16-a 杭跡36	2.3	天禧通宝（北宋、1017～1021）	

(7) 小　　結

第5地区の調査成果を簡単にまとめておきたい。

古墳時代に属する遺構には竪穴住居1棟、掘立柱建物2棟、井戸3基、柵列1、土壙多数などがある。これらの諸遺構はＡ地区中央部に竪穴住居、掘立柱建物2棟、井戸1基、土壙2基がまとまり、北方やや離れて井戸2基と柵列がある、という配置になっている。不定形土壙はＡ地区の北端から東側へぐるっとまわった半環状の分布を示す。これらの諸遺構は南から北へ細く長く伸びる微高地上に立地するが、微高地が幅約30mとかなり狭いため南北に長く配置さ

れたかたちとなる。東側はなだらかに低くなってゆき微高地との比高は30～50cmになるが、遺構は皆無と言ってよい。西側も低くなっており、第6地区の調査においても遺構はほとんど検出されていない。

古墳時代の諸遺構はあまり遺物を出土しておらず、時期決定が困難なものも多い。ＳＢ01は下層からは土師器のみが出土しているが上層からは瓦器片とともに須恵器片を出土しており、混入と考えられるが、時期幅を考慮しておく必要があるかもしれない。ＳＢ02・ＳＢ03はともに1間×1間の小規模な掘立柱建物で、柱穴も小さく時期決定の遺物を得ていないが、ともに同一場所で1回の建替があり、一定期間存続したことがうかがえる。この場合、ＳＢ02の主軸がＳＢ01のそれに極めて近いことは、これらがある時期には同時存在していたことを示唆している。

一方、井戸、土壙からは若干の遺物の出土をみている。ＳＥ02からは土師器甕・小型丸底壺・高杯ほか土師器片が出土しているが、須恵器はまったく含まれていない。隣接するＳＥ01からは大型で広く平坦な天井部をもつ須恵器杯蓋が出土しているが、上層からは時期の下る須恵器高杯脚部の出土もあって、最終的に埋った時期を示しているものと考えられる。土壙内の土器は土壙底にすわっているものがあり、ＳＫ10・ＳＫ29などがその例である。ＳＫ10出土の土師器甕やＳＫ29出土の土師器壺は、全体のつくりや調整がＳＥ02出土土師器と共通しており、布留式でも新しい段階に位置づけることができる。またＳＥ01出土須恵器杯身もこれに近い時期のものと考えてよかろう。

次に住居・建物と井戸・土壙の関連についてみておこう。井戸は人間の生活にとって水を得る手段として不可欠のものであり、住居・建物と井戸が無関係に存在したとはとうてい考えられない。ＳＢ01出土土器は細片でかつ表面剝離著しいが、甕の口縁部は布留式の新しい段階土のものと考えておきたい。とすれば、上述の諸遺構は若干の時期の前後はあるにせよ、須恵器出現と相前後する時期から六世紀前半くらいまでの所産とみることができよう。これらの諸遺構の性格は、大きく言えば集落の範疇にはいろうが、住居と考えられるものが竪穴住居ＳＢ01の1棟しかなく、ほかにはみられないこと、掘立柱建物は小規模で倉庫とは考えられず、納屋風の簡単なものと考えられること、など一単位の住居群とは若干趣を異にしていることが認められる。

次に奈良時代の遺構について述べる。奈良時代の遺構として確実なのは土壙ＳＫ41があげられる。ＳＫ41はすり鉢形を呈する土壙であるが、前述したように中央に柱状に粘質の強い部分があり、その直下に土師器皿が置かれていて、柱穴の可能性をもつものである。これを柱穴と理解するならば組み合うピットは古墳時代の不定形土壙の項で扱ったＳＫ38・ＳＫ39であり、一辺約5ｍの掘立柱建物を復元できる。この場合、残る一つのピットは不定形土壙ＳＫ37の中

註－1

に位置することになる。主軸はN-21°-Eで真南北よりはるかなりずれる。

柱をうける位置に土器類を置くのは類例がいくつか知られており、「地鎮祭」[註—2]に関連するものと考えられている。

註—1　本報告書で掘立柱建物として扱わなかった理由を述べておく。まず第一に、いかに奈良時代とはいえ、柱間寸法が5mというのは大きすぎるのではないかということである。平城宮跡の諸殿舎でも柱間寸法が5mを越えるものは知られていないようである。管見のかぎりでは滋賀県美園遺跡でやはり1間×1間の建物で5.0m×4.0mの規模のものが報告されている。第二に、建物の規模に比較して掘方が不定形であり、柱穴も小さい。第三に、SK41に置かれていた土師器皿が、割れてはいるものの柱や上部構造の重みをうけていたとは考えにくい状態にあった。

※林　博通ほか『美園遺跡発掘調査報告』（滋賀県文化財保護協会　1975）

註—2　ここで建物の主軸が真南北からかなりずれることを指摘したのは、本地域の歴史的環境による。本遺跡は現在も堺と松原市の市界にまたがるが、この市界は古代においても河内国と摂津国の国境であり、それは難波宮の京中大道の延長線とも平行する。現時点では難波宮からまっすぐ南下する古道の存否を考古学的に立証できていないが、かりにあったとすればそれはこの建物の付近を通ることになり、古道と道が、例えば方位などにおいて、なんらかの関連を有する可能性がある。

Ⅳ　結　　語

(1)　第３・４・５地区及び第５・６地区試掘調査のまとめ

立地・位置

丁度、４ヶ所の発掘調査区域は、地質学的には洪積段丘中位と旧西除川の氾濫源の境界に立地し、検出された各時代の遺構群とは相関関係に存在する。即ち、溝・掘立柱建物群は洪積段丘中位上に、水田跡と考察される第４地区の不明土坑は氾濫源内において確認した事に注目したい。第３・５地区は南北関係に、第４地区はその東に調査区域を設定した。

層　位

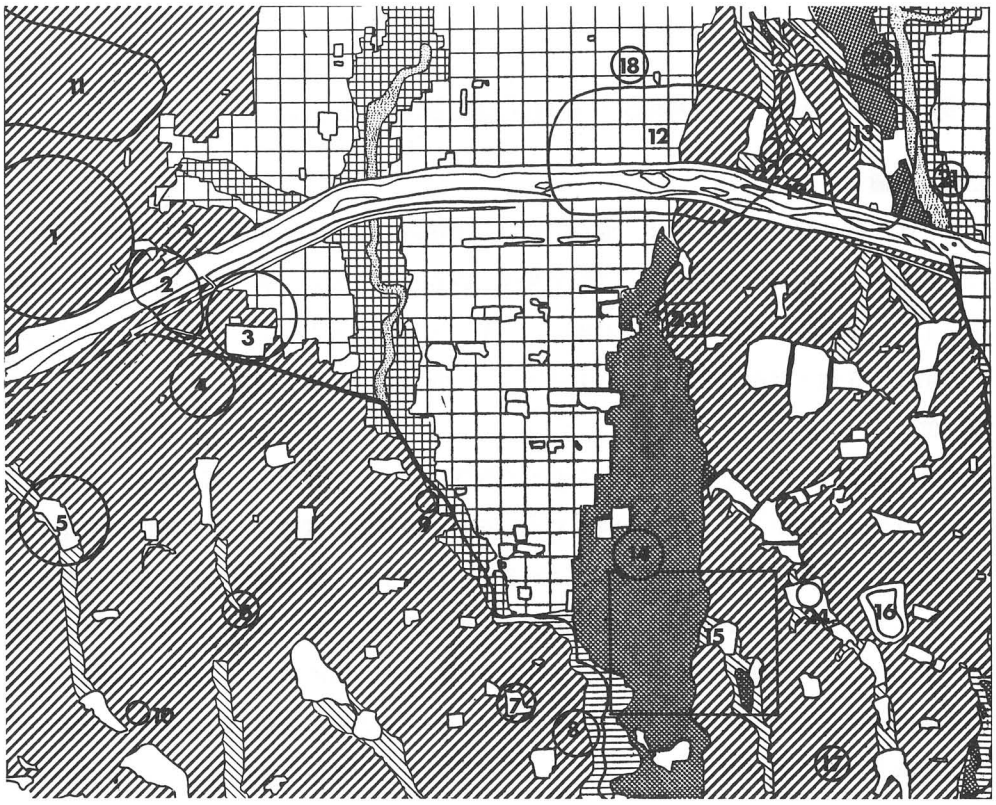
各地区の層位は、先に述べた旧地形と重大な関係にある。第３地区と第５地区の西半部は、ほぼ同一質の水平層が３～４層に大別出来るがそれらの層位の基盤としての地山に変化がある。というのは、第３地区と第５地区の鞍部は明黄褐色粘質土で、第５地区の微高部は、黄褐色砂質土であった。低地の第４地区と第５地区の東半分は、ベルト状に構成された６層が安定性を示し不明土坑や条里制畦畔の保存に十分な役割を果し得た。大和川・今池遺跡の場合、おしなべて、黒褐色粘質土が帯状堆積として図化でき、かつ、その層に包蔵される遺物の多寡が下層の生活遺構の有無に繋がると考えて過言ではない。ただ、本遺跡の地山は、平均20～30cmの後世の削平・耕作土化が顕著に知られる。

遺　構

溝　第３地区ＳＤ－２は、第１地区検出のＳＤ－１と平行し、ＳＤ－２と直交して接続していると復元できるもので一瞥して掘立柱建物群を囲繞すると同時に、方画的に、計画的に設定されたことが推測される。第３地区ＳＤ－１・３は、一直線で同地区ＳＤ－２に直結する。これらの検出された溝群は、一応に、西は依羅池又は、窪地へ、東は低地へとよどみ状態で流出していたことが溝中の層位から考えられる。尚、第５地区西半分の遺構群中に、溝の存在を知り得ていないのは多分に東側に隣接する低地の影響が大であったのであろう。第３トレンチの北端検出の溝は、南から形成されてきた生活遺構群を画すると思われる位置に立地する。これらの数本の溝は、その使用年代幅を６世紀前半～中葉を中核として把握できる。

建物・井戸

２者の遺構は、溝とユニット関係に存在するもので立地においても微高地を必然的に選定している。第３地区の掘立柱建物は、妻通りより外に柱を有する、いわゆる棟持ち柱で１間×１間の小規模ながら正方形の平面形を呈する。第５地区のＳＢ－１・２の掘立柱建物は、共に１



洪積段丘中位

沖積段丘

台地段丘上の凹地ノ浅い谷

自然提防

旧天井川の微高地

谷底平野

氾濫平野

0　2.5KM

1．住吉遺跡
2．依羅池
3．大和川今池遺跡
4．北花田遺跡
5．今池遺跡
6．南花田遺跡
7．河合西遺跡
8．河合遺跡
9．栄光廃寺
10．新金岡遺跡
11．住吉遺跡第７地点
12．瓜破遺跡
13．長原遺跡
14．上田町遺跡
15．円比紫薗宮跡
16．大塚山古墳
17．観音寺跡
18．瓜破北遺跡
19．長吉野山遺跡
20．小若江遺跡
21．友井東遺跡
22．瓜破廃寺
23．三宅遺跡
24．樋野ヶ池窯跡

第165図　大和川・今池遺跡周辺土地条件図及び遺跡図

時期内での2回の建て替えが見られるが主軸・規模を継承していた倉庫である。これらの掘立柱建物は、柱痕から10cm前後の柱で建て上げられ、その腐食期内を考慮すると10年単位が妥当し思われる。

第5地区のＳＢ—04と呼ばれる掘立柱建物は、梁間2間×桁行1間（4.8m×5.1m）で住居に相当する建物である。構成するpitは、ＳＫ—37・38・41とＳＫ—38・39の中間にある束柱と思わるpitさらに、ＳＫ—38・41の直線上に位置するpitである。束柱の2ヶ所の柱穴は、四隅の柱穴よりも小さく浅いが埋土は同一であった。ＳＫ—38・39・41は、長径70cm前後、短径50～70cmと不整ながら円形を保ち、柱痕底も深さ25cmと一定であった。それらのpitは、全て、2段底で断面から考えても柱痕を示し、各々のpit内の埋土は、黒褐色粘質土を基本層位としていた。主軸は、大きく西に振って、N44°Wである。そして、ＳＫ—41の柱穴底部から地鎮祭としての性格が考えられる様な土師器・皿の出土状態を見い出した。その出土遺物から掘立柱建物の築造時期を平城宮ＳＫ—219に類似する時期に当て嵌められよう。

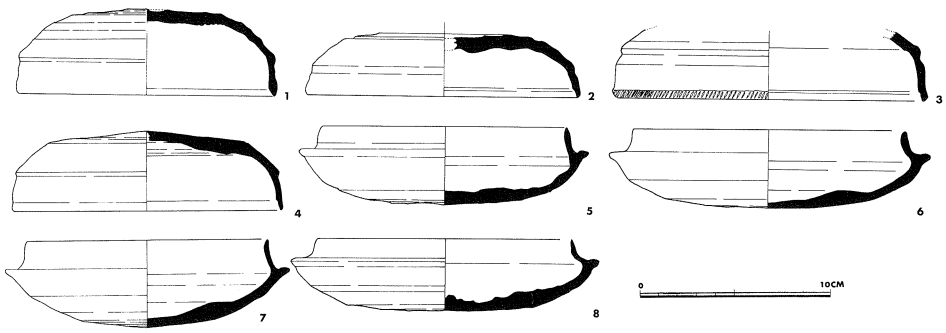
隅丸長方形の38.5㎡を計測した第5地区ＳＢ—01の竪穴式住居跡は、N—45°—Eに主軸を持った支柱を建てない垂木のみで住居空間を作り出している。

第5地区ＳＢ—1、2は、布留式土器、2段階でＳＢ—3はそれらに相前後する時期が設定でき、第3地区の掘立柱建物は6世紀中葉と考えられる。この決定には、主軸とデポから躊躇なしに行えた。

建物に隣接して検出された井戸は、径約1m、深さ1～1.4mとほぼ同一規模で底部の地山は砂質土と変化していて湧水層の役目を果している。その他に、ＳＫ—10・29は前述の遺構よりも小規模ながら井戸としての機能は十分効果を達していたと考えられる。

不明土坑・条里制遺構・耕作用井戸

第4地区で検出した約200ヶ所に及ぶ不明土坑をその検出条件からグルーピング、面積、平面形、断面、埋土について分析したが際立った相関関係にはほど遠い。ただし、その性格付け



第166図　松原市樋野ヶ池須恵器窯出土遺物

には、立地条件、埋土分析から判断して微高地に生活した人々を経済的に支えた水田耕作地であることは、歴然とした。

第５地区の中央部で消滅していた大畦は、Ｂ－Ⅱ－79とＣ－Ⅱ－69に復元されその他の10数ヶ所の土層断面から幅・上辺1.6m、下辺2.3m、高さ0.32mである事が良好な保存部分において判明した。その畦畔位置から最近の畦畔直下に存在しこの周辺の条里制復元の危険性を極めて少くなくしている。形成時期は、ともかく遺存した畦畔を平安時代前後の遺構と思われる。

耕作用井戸の検出位置は、第４・５地区については大畦に沿っており半折型又は、長地型の田畑の１枚につき１ヶ所は検出される。素掘り井戸が大半でいわゆる、桶側井戸は第３・４地区で各１ヶ所のみである。第４地区検出の耕作用井戸は、全て約５～６ｍに及んでいるに対し、第３地区の大部分は約２～３ｍにすぎないのは旧河道上に立地し、湧水層を最浅部でとらえている。尚、これらの井戸は、槹木を有する井戸で三国ヶ丘台地とその周辺地域に限定される。

遺　物

本遺跡の素地が出土石器・土器から判断して南側に隣接している北花田遺跡と何らかの関連に導びかれるもので本遺跡での生活を復元出来る考古学的な事実はない。第３・４・５地区を含めて６世紀中葉の須恵器が出土土器の比率を大にしている。中でも、５地区・ＳＥ－１出土の杯蓋は、船橋Ｏ－Ⅱに酷似するが口径や口縁端部には相似するが布留式土器と共伴する事は興味深い。又、蛸壺の検出は、第１地区出土例と合せて河内湾への生活空間の広がりが知られる。以上の出土土器の内、須恵器については泉北古窯跡群から搬入にとどまらずに松原市上田町所在の樋野ヶ池窯跡からの需要が考えられる。

青磁の雷文椀は、15～16世紀代に属し、龍泉窯系の青磁・皿(7)は、12世紀中頃～13世紀、(８・11・12）の白磁は、11世紀中頃～12世紀初に所在するもので全て優品といえる磁器群である。これらの遺物は、瓦器・瓦類も含めて、小字各の「観音堂」「堂ノ西」「薬師堂」「堂ノ前」「堂ノ北」を付加して中世寺院址に関係した付属建物に伴うものと考えておきない。

須恵質の片口鉢・摺鉢は、兵庫県神戸市の神手窯から供給された遺物で備前焼に代替される雑器として最近注目されつつあるとともに交流経路に対しても注目しておきたい。

本遺跡内での生活形成・構造については、後述するとして、当遺跡が洪積段丘中位の窪地を北流した小河川に隣接して古墳時代以降の生活構成を成し得た傾向にあることは、遺跡分布地図で明白に説得されるものである。これは、西側に設定された依網池がその代表例である。

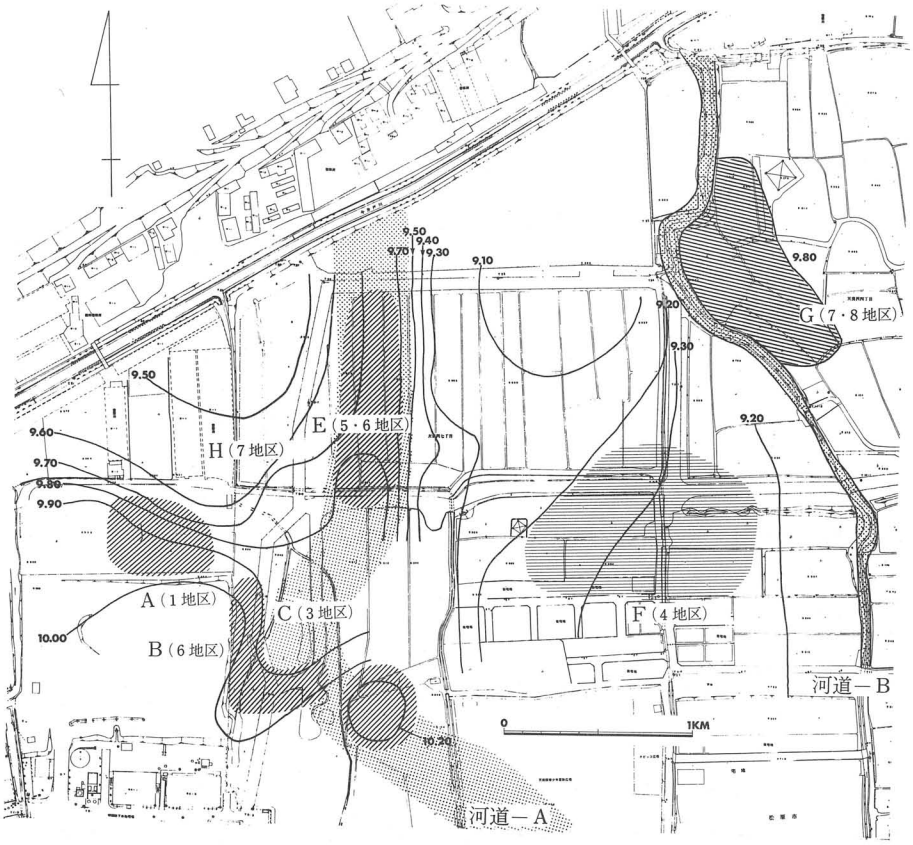
今後の本遺跡、及び周辺遺跡での十分な発掘調査に期待して筆を置く事にする。(森村)

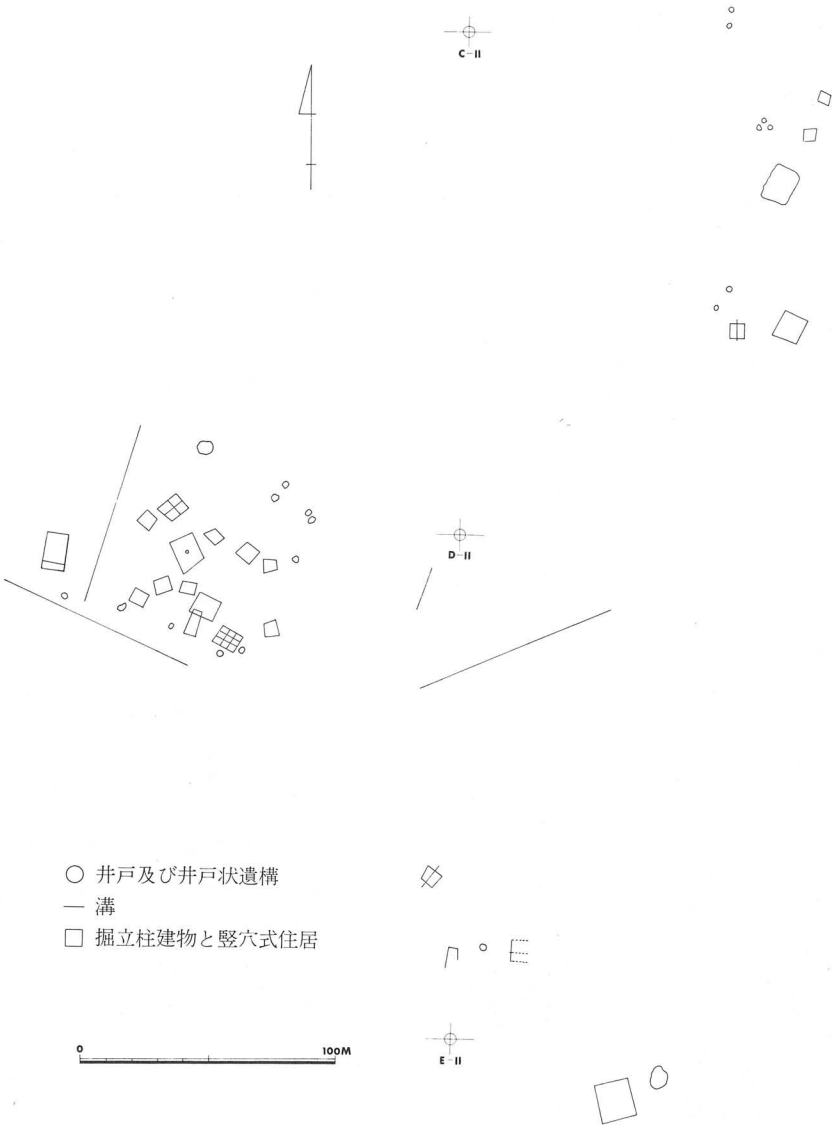
(2) 大和川・今池遺跡集落の立地条件と消長

集落の立地条件

河内平野の西部に立地した大和川・今池遺跡は、「泉北台地」から東除川とともに北流した西除川の氾濫源と洪積段丘中位にまたがる大遺跡である。その氾濫平野は、「大和川低地」に総称される部分で大和川に大きく影響されている。

南部の狭山池より端を発した西除川は、洪積段丘中位を北流しながら谷底平野なるものを形成し段丘西縁を抉り今池遺跡の手前において川幅約40～50m、自然提防幅約400～500mで、又、北流しはじめる。従って、古墳時代の中・後期の生活空間は、氾濫を避けた微高地に選定されており、O.P.9.80～10.00mに立地していたことが復元される。弥生時代には、段丘中位縁辺に





第168図　大和川・今池遺跡遺構全体図(1980.3現在)

生活し得るほど水の管理が十分でなく本遺跡の南に位置する北花田遺跡のような中河川の氾濫から安定した生活・耕地の確保、すなわち安定した経済性をのぞむ必要からより海抜高の高い奥まった位置を撰択したのであろう。同条件で、同じ歴史的背景に成り立っている遺跡に、近くでは四ッ池遺跡・瓜生堂遺跡・若江遺跡・西岩田遺跡が類例として列挙出来る。

前述したように本遺跡の巨視的な立地と遺跡について触れてみたが遺跡内での詳細な旧地形

の復元を発掘資料や地籍図、航空写真から判断してみたい。一見、本遺跡は、後世の条里制遺構が整備されて以来、正に平坦地のごとく変容しているが古墳時代の旧地形は、極めて変化に富み、その変化が生活空間の制限と重要な因果関係にある。当遺跡は、3ヶ所の微高地と低地の1ヶ所から遺跡として構成しているといっても過言ではない。西側の第167図のA・B微高地は、河道—Aによって堆積された沖積地形でその堆積土、いわゆる6世紀前・中期の生活面は黄褐色砂質土を基盤としていてO.P.9.80～10.00mに形成されている。A微高地の北側は、やや低地に向っているが多少・北側に舌状にして伸びていた可能性がある。ただし、レポート現在においてはA微高地には、図示した斜線部分が1つの集団ブロックを成していた。前者の東側には、新旧西除川の付け替え付近より（天美南6丁）西流し天美西6丁目、天美西小学校西側、天美青少年運動広場を経て本遺跡内の河道—Aへと繋がって北流し微高地として遺存していた。その河道幅は、約30～40mで深さ2.0～2.5mに達していた。上層は褐灰色砂質土（10YR5/1）と明褐灰色砂質土（7.5YR7/1）が0.4m、下層は橙色・灰褐色・明黄褐色・紫灰色砂質土を基調として各層に2～5cmの円礫を多数含有していたので生活面での排水能力には、遜色ない。O.P.9.70～9.90mで帯状の限定された面積である。蛇足になるがAとE微高地間にはHの鞍部が存在する。この部分は、発掘調査時でも雨天後の排水能力が悪いのは、低地と地山の土質に要因している。

Fと呼ばれる氾濫源内に立地し建物・溝等の生活遺構はなく、微高地に居住した人々を経済的に支えた水田址が多数確認されたようにそれよりも0.5～0.8m程度の低地となっていた。

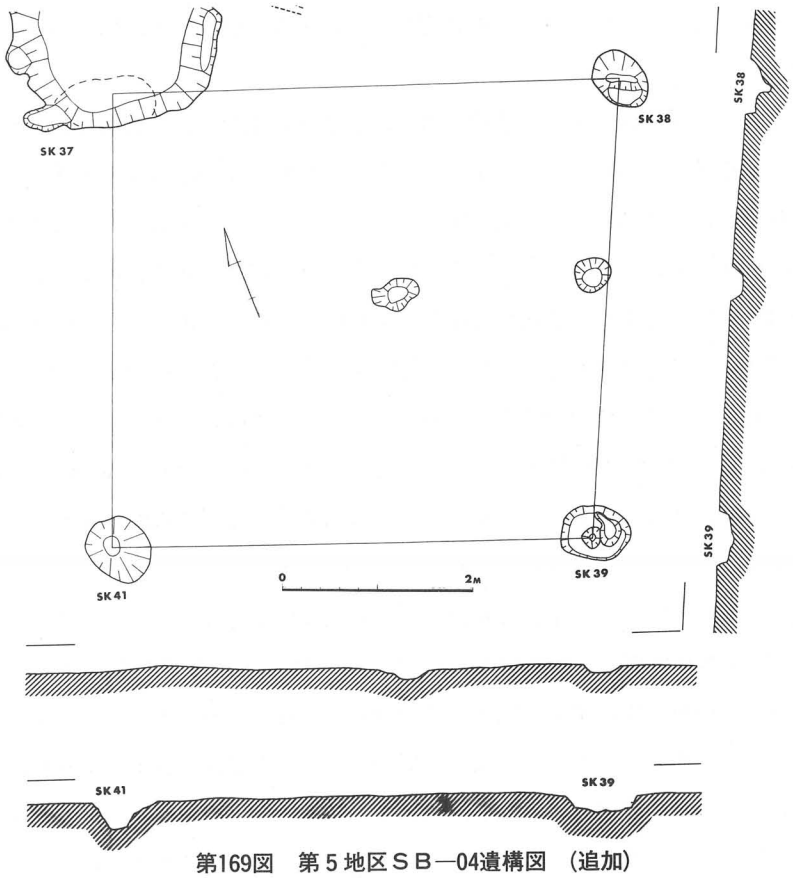
基盤も耕地に適して黄褐色粘質土で東側には河道—Bが水を供給していたのであろう。耕地のO.P.は、9.20～9.30mとほぼフラットに地形を成す。河道—Bは、河道—Aのルート上にも立地した「角ノ池」の西方から北流する幅5m前後の小河川でG地区の自然提防に沿って流れていて江戸時代中期に措写された「大和川開鑿前地方図」（大依羅神社所蔵）にも表現される古墳時代以降現在に至る長い使用例である。河川の流れにもさほど変化はない。G地区遺構群は、旧西除川と河道—Bの自然提防上に営まれたものでその比高は、O.P.10.00mに達し、西側とは0.8m、東では0.3～0.5mの比高差が知られる。この部分の発掘調査面積が希少であるが河道ルートから推測してG地区は図示より南東に拡大する。G地区も前者の遺構と類似したストリップに構成されており、これまた、東側に耕地として最適な低地を控える。前述のように旧地形を子細に検討すると各種遺構群と相関関係にあることが一瞥して記憶できる。この相関関係は、新大和川開鑿後、水田耕作地の水位の低下が狭山池分水貫行例とあいまつてフォマンな供給を得るためはねつるべの構成による素掘り又は、桶側井戸を田畑1枚に各1ヶ所を原則的に掘削している。しかし、表示のC地区（第3地区）には、30ヶ所以上の耕作用井戸が密集していた。この事例は、旧河道上に設定し、他の場所での4～6mに達する湧水層に対し2～3mで井戸と

しての機能を十分果し得ていた。

古墳時代の1地区と3地区（A・B地区）で検出された溝は、掘立柱建物群を方形区画的に配置されているのは旧地形と生活面の黄褐色粘質土と基盤となる空間の広さが必要としたに違いない。又、遺構群の中で掘立柱建物とユニットされている井戸又は、井戸状遺構は、0.3～2.0mの砂質土又は、砂礫層に達する地質を考えて開鑿している。このことは、E（5）地区には、該当しないのは幅狭い微高地と生活面の優秀な排水能力にあろう。

集落の消長

4ヶ所の微高地と2本の河道と2ヶ所の低地から構成された大和川・今池遺跡は、古墳時代中期・後期にかけて築造された生活遺跡であることは発掘調査によって明白となりつつある。ところで、それらが地形といかなる関係に存在するかは前述したので次は、地形の時期的な推移との関係に於いて有機的かを推してみた結果、説得力に豊んだ成果を得た。旧河道上（D―E地区）すなわち河道―AとG（7―4）地区の両者は、空間的には恵まれなかったものの微高地の高さや生活面の排水能力、河道との関係から含み、この地域での最適地を選地しているのは5世紀中葉～5世紀後半期にかけてである。極少の面積で3～4の建物群で単位集団を組



第169図　第5地区ＳＢ―04遺構図　（追加）

織していたと見られる。これに次いで、やや排水能力の劣ったA(1)・B(3・6—2)地区に生活構成を営むことになる。この2群はともに比較的広い面的空間を必要としたことが5世紀代の前者と比較され、その群成時期を6世紀前半〜後半期に向けられる。この時期的に面的な継続・重復のない所にも問題点を残すものの特定継続時期の形成過程を明白に判断するには、有力な資料である。

本調査で把握できる遺跡の範囲は、東西400m、南西300mに及ぶ中で5世紀代の建物は3棟程度が共同所有の井戸と組み合わさって生活空間を繰り広げていたにすぎないことが本遺跡内の5世紀中葉から後葉にのみ存続した傾向がある。ところが、約半世紀の期内を置いて5〜6棟を単位とした集団構成が営まれるに従って個有管理の井戸と単位集団の共有管理下での大型井戸を掘削するに至る。数棟の円孤を描いた配列や共用所有の大型井戸は、集団内での「広場」の必要性が経済的かつ単位集団構成上に起因してきたものでその意味で前代に比してより一層の空間利用が必然となったのである。これらの事象は、構成員の単位集団内での自立性が目立つと同時に組織長を中心とする集団内の団結力が必要となる政治的背景に注目してすくべきである。

ところで、今池遺跡のような時期別による生活エリアの移動する現象は、堺市四ッ池遺跡[註—1]・八尾市八尾南遺跡[註—2]・鳥取県青木遺跡[註—3]にも酷似している。立地も古墳時代の遺構は、石津川・三光川の自然提防上を好地とし、5世紀代の生活空間は今池遺跡同様に狭少に対し6世紀代には遺物に対する個有エリアを占有しているようである。大和川・今池遺跡における各地区の遺構存続時期は次の通りである。1地区—陶邑Ⅱ型式第2〜第4段階、2地区—布留2式と陶邑Ⅲ型式第1・2段階、3地区—陶邑、8地区—陶邑Ⅰ型式第4、5段階。Ⅱ型式第3段階、第5地区—布留2式4平城宮Ⅶ、6地区— 布留2式、7—4地区—布留2式

この事実は、必ず同一エリアにおいて¼〜½世紀しか存続して居住せずたとえ次期に居住したとしてもその時間的空間は大きい。これは又、集落内の5世紀代は3つの単位集団によって構成されていた組織が½世紀の空白期の後、ただ1つの集団組織に変遷している。それは、おそらく、立地条件内での面積比である。又、四ッ池遺跡の場合、今池遺跡と異なり井戸とのユニット関係が知られないのは低地という条件と小河川の利用が物語っている。

とりわけ、種々の項目内での問題点の他に、前代の生活エリアに重復して集団生活を必要としない不可解な点は和泉市大園遺跡・高石市水源池遺跡・四ッ池遺跡にも見受けられる事象であり地鎮にからむ行為かもしれない。

上述した安定した生活・構成・経済性を基盤とした「組織力」は、安定的な余剰生産物を確保する手段として小河川の灌漑すなわち、管理体制が十分組織化されるに従って洪積段丘中位

を北流した小河川の氾濫が減少する起因となったことは周知の事実であり、段丘上のダム状に堰止められた溜池がその代表例としたい。それが、洪積段丘縁辺後背地には、弥生時代に居を構えていた北花田遺跡から大和川・今池遺跡への段丘縁辺に進出させた一要因であり、それに付加要因として、竪穴式住居から高床の掘立柱建物という建築構造上の改革も上げられる。もちろん、掘立柱建物を基調として集落構成の遺跡では生産基盤の移動すなわち肥沃度の低下に脈絡される。

最後の問題点として、本遺跡の古墳時代における動向にある。5世紀前半から中葉(後半)期の布留式土器をかけて生活した集団が、6世紀中葉(前半)から6世紀末葉（D地区南側に拡大する）の次期との空白期が通観して考えられる。空白期は、主として百舌鳥古墳群の築造に直接、間接をとわずに影響していたと推察されるのは、次に上げる遺跡の発生・消滅期が大和川・今池遺跡の空白期に合致する。その遺跡とは、百舌鳥・陵南北遺跡・陵南遺跡・土師遺跡・堺環濠都市遺跡(下層)、とその洪積段丘中位西縁の大仙遺跡・一条通り遺跡である。

尚、大和川、今池遺跡の第8地区は、百舌鳥古墳群終末期にあたろう。

地鎮祭にかかる土器の出土例

いわゆる、建築物の築造に伴う行為として有形・無形の供養が考えられる「地鎮祭」が考古学的な事象に取り上げられる発掘例を得た。

本遺跡第1地区、ＳＢ—04の掘立柱遺物・柱穴—3より検出された須恵器・有蓋高杯蓋部で柱痕に落ち込むような納入された出土状態で埋土は黒色土と地山の混入土であった。その出土遺物は、陶邑—Ⅱ型式第3～4段階に比定される。他の一例は、第5地区・ＳＢ—04のＳＫ—41と呼ばれる掘立柱建物の柱穴の最深部より検出されたもので位置から考え柱の直下に埋納した状態であった。口径10cm強を計り得る土師器杯で平城宮Ⅶに属すると考えられる。類例として、弥生時代には、瓜生堂遺跡・Ｈ地区[註—4]、高床倉庫の柱穴内から高杯、若江北遺跡も同建築物で甕形土器を検出している。岸和田市土生遺跡[註—5]の掘立柱建物の柱穴より正立の状態で上田町2式の土師器・壺を見い出している。今後、建造物の基盤又は、掘方、柱穴中での遺物出土状況に十分注意し例証されることを切望したい。

註

註—1　四ッ池遺跡調査会『四ツ池遺跡』昭和51年3月

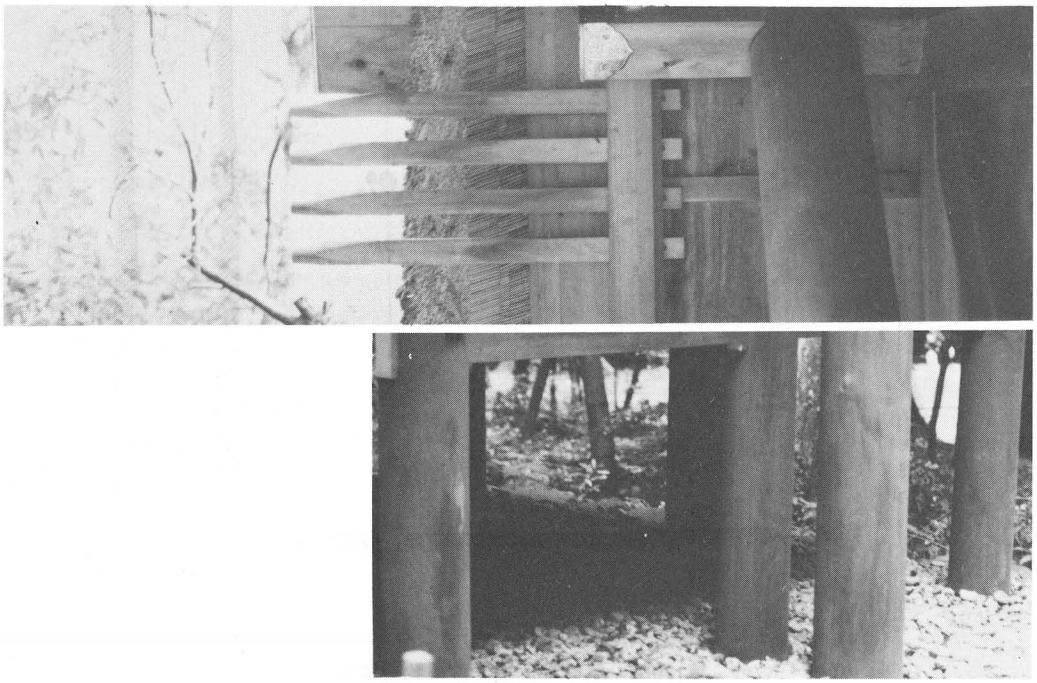
註—2　『八尾南遺跡発掘調査資料』1978　八尾市教育委員会・米田敏幸氏から御教示を得た。

註—3　船越元四郎他『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、鳥取県教育委員会・清水真一氏から御教示を得た。

註—4　大阪文化財センター・小野久隆氏から御教示を得た。

註—5　岸和田市教育委員会・近藤

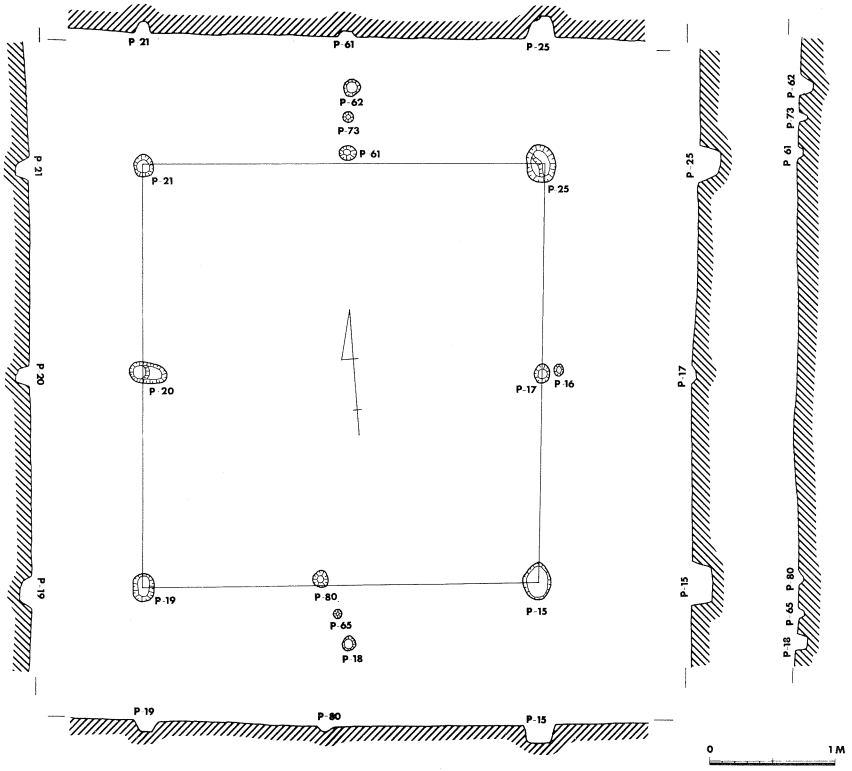
(3) 棟持柱をもつ掘立柱建物



伊勢神宮御稲御倉

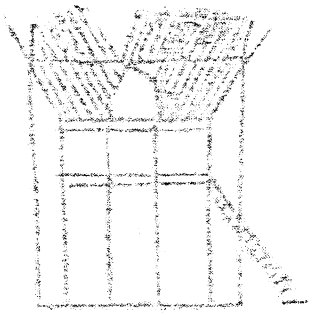
最近の数多くの発掘例によって各時代の掘立柱建物に関する研究が著顕に進展しつつある。古代の神社建築の代表例、いわゆる「神明造り」と呼ばれる高床式建築物には、出雲大社・伊勢神宮・内宮に遺存している建築構造に梁間通りより外側で棟を支えた棟持柱が周知される。考古学的に知られる広義の高床式建築を表出した例として伝香川県出土銅鐸、唐古遺跡出土大型壺形土器、茨城県出土・家型埴輪が線刻を中心に棟持柱を有する築造物を表現すると合せてその性格は、高床式倉庫に考察されている。以上の様な弥生・古墳時代での建築変遷を論述した「高床式建築考」が網干善教氏によって発表されている。ところで、本遺跡で検出された2例の掘立柱建物について若干、紙面をさき古墳時代の棟持柱保有の古代建築物について触れてみたい。

第3地区ＳＢ01、南西端において検出された1間×1間の棟持柱の掘立柱建物は、梁間通りより外側へ1.27m前後のけばらの出がある。桁行間2.95m×梁間間3.2mを計測し床面積は、944㎡の掘立柱建物で柱穴掘方は、14cm～34cmとばらつきが知られるが柱の太さは径10cm程度であった。第6地区ＳＢ03、検出の掘立柱建物は、桁行・梁間は共に2間で3.36×3.20mを計測



第170図　第6地区掘立柱建物遺構図

した。棟持柱痕は、各2本づつ有し必ずしも一直線上には並んでいないのは、おそらく、柱の曲った素材を意味している。この柱、けばらの出は約0.5mで両方とも合致している。主軸は、棟木通りから判断してN—5°—Eであった。柱穴内より検出された出土遺物から推測して前者を6世紀中頃、後者は、布留2式に比定される。そして、建築物の性格は、共に倉庫と考えられるが6地区のそれは井戸の存在、床面積から住居かもしれない。尚、6地区のSB02も同種類の掘立柱建物であるがグループとしては、第2地区の5世紀中葉の遺構群に属する。



第171図　伝香川県出土銅鐸

切妻造りの棟木を両端でかつ、通り外で支持した棟持柱は、旧香川県出土の銅鐸、唐古遺跡出土の第4式の大型壺形土器片に写実的に表現された高床式建築は、弥生時代に起源を求める。

古墳時代に入って茨城県出土と伝える家型埴輪の遺例と鳥取県青木遺跡CSB35の2例が選定されて後者は青木Ⅸ期一新に属する。その他には、古代神殿形式の1つでもある神明造が伊勢神宮・仁科神明宮等として神社建築として遺存する。

この種の切妻造は、弥生時代のそれは倉庫としての性格から古墳時代には住居としての性格を持つ建築物も現われる。青木遺跡の例などは床面積を31.5㎡に及ぶ住居としても大型化している。伊勢神宮御稲御倉・外幣殿は地上より1.4m高に床張りした2×3間の倉庫としての性格にもかかわらず両建物とも束柱は存在していない事から考古学的な調査に於いて判定される建物の性格付けに検討を要する。

さらに、この棟持柱を必要とした建物は、他の同期の建物とは、大和川・今池遺跡の2例、青木遺跡に於いても性格の是非をとわず隔絶した位置に存在する。これは、物と構成員が共に単位集団内で特異な存在を意味している。試行によっては、この類の建物には「広場」ともいえる空間が構成されていることに注目される事から構成員の共用使用建築物、たとえば、集会所や共同作業農具倉庫と考えるのは憶測の域を出しないものの一考としておく。最後に、弥生時代の高床式倉庫の性格からの変遷が見届けられ、今後の資料の増加に期待して筆をおく。

・網干善教「高床式建築考」近畿古文化論改　橿原考古学研究所　昭和38年2月
・船越元四郎他「青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ」C・D地区　青木遺跡発掘調査団　1977.3
・伊藤延男「古建築のみかた」—かたちと魅力—　昭和42年11月
・大阪文化財センター「瓜生堂」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1980.3
「A地区、第1・2号方形周溝の最上層の青灰色砂層より棟持柱と思われる線刻された弥生時代中期の壺の小片で1間×1間の高床式倉庫と考えられる」

(4) 竪穴式住居の復元

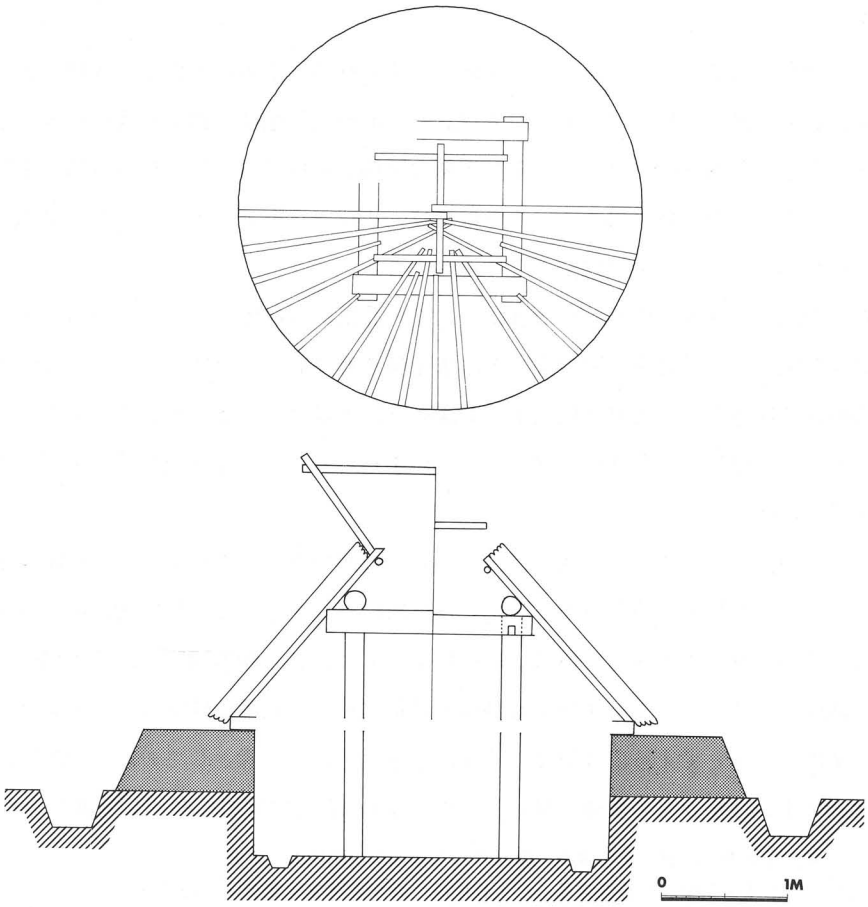
本遺跡の第５地区で検出されたＳＢ01竪穴式住居に居住した生活環境について古代のイマジネーションをふくらますと同時に組立方法や居住性について復元した。

復元場所のスペースや諸条件から円形竪穴式住居のオーソドックスな型式を復元したので本遺跡内検出の住居を復元したものではないことは了解ねがいたい。尚、全国の復元例は、159棟[註－1]に達している。

復元場所　　大阪府松原市天美西７丁目263-1

　　大和川・今池遺跡調査会現場事務所前

復元期間　　昭和54年８月15日～昭和55年８月30日



第172図　復元住居図

組立方法

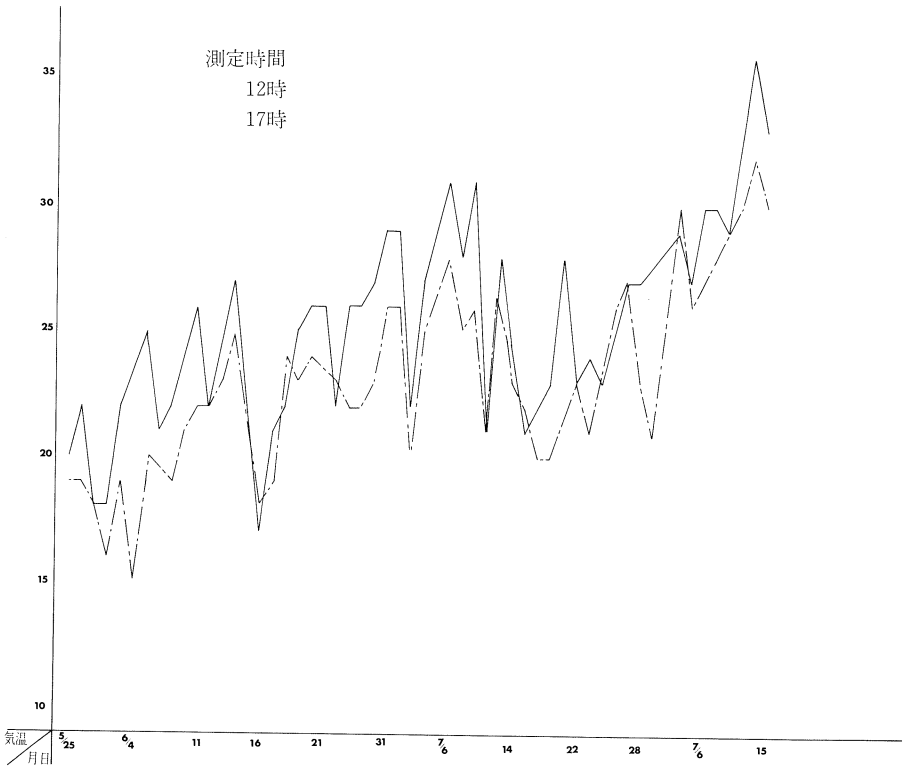
① 建てる場所の草刈、径2.8m、深さ0.5mについてスコップとバチで掘削開始、掘削された排土で周堤を築く。その際、掛矢でたたきしめる。場合によっては多少、水を含ませ、藁を入れる箇所もある。

② 人夫さん4人で1日がかりで掘削後、周堤の仕上げ。サヌカイト製石斧と木把で50×50×10cmの掘削を行った結果、約25分必要とする。両者の重量は、650gで固定には生蔓や縄でも十分使用出来た。

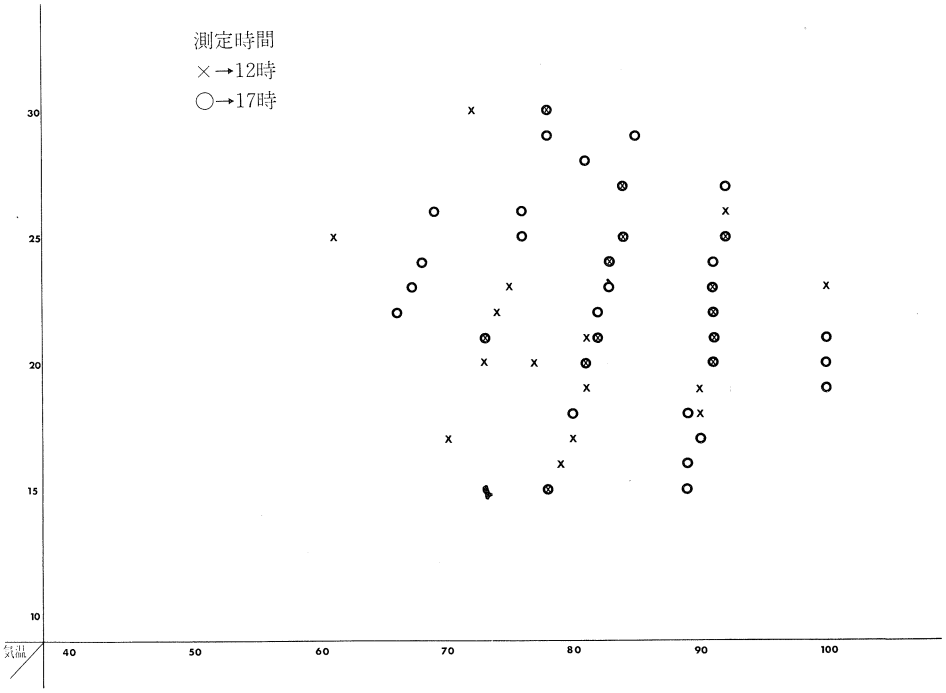
③ 周壁面に羽目板を深さ10cm、幅15cmの溝を掘って立て防水、虫を兼ねて焼板とした。藁2束 焼成した。ただし、羽目板を前傾させないためにも周堤付近で垂木、又は、周堤に打ち込んだ杭に結ぶ方法も行った。ちなみに、サヌカイト製不定形刃器で藁一把、厚さ1cm未満の板材は約2～3分で切断可能。

④ 支柱・垂木・又首を湯に通した蔓でしばる。茅は小口をたたき調整し30～40cm間隔で内側の垂木と結ぶ。最後に周溝をめぐらしあくまで屋根の分のみ排水するようにする。

必要日数　13日　必要人数　52人　作業時間　9時より17時　（2時間休憩）



第173図　復元住居外気温表



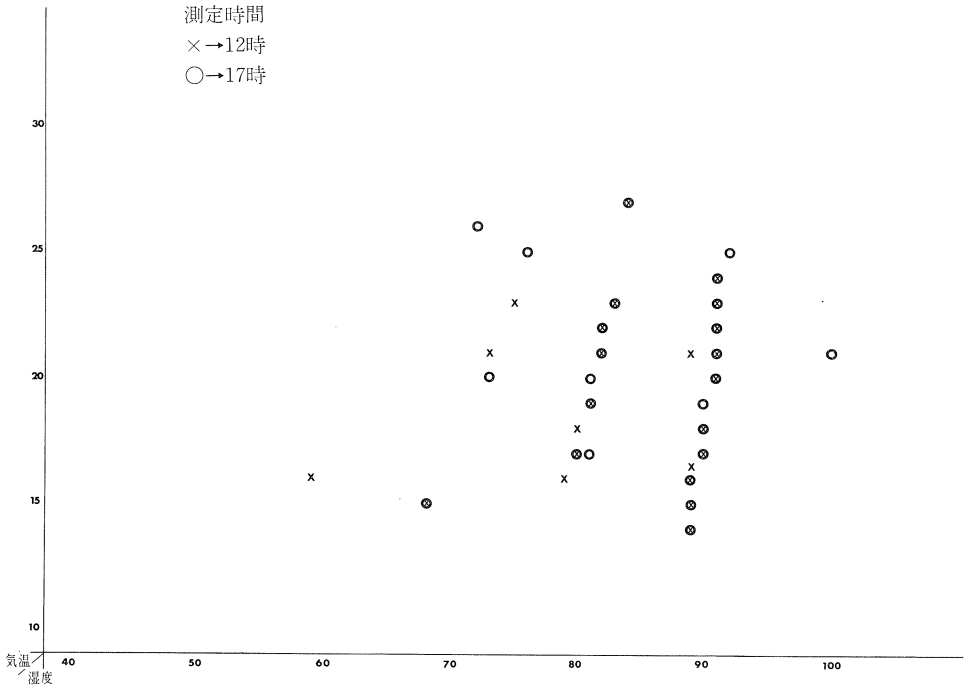
第174図　復元住居内部上層気温及び湿度表

材料

茅―115束　丸太φ15cm　h＝2m　8本　丸太φ4～8cm　h＝3m　樹皮付き55本
クヌギ又はナラ原木φ6～7cm　h＝2m　15本　竹φ2～5cm　h＝3m　60本
杉皮　0.4×1.8m　5枚　藁 200×2巻　カスガイ　3寸 100本　平横隅金 100個
金折　50個　蔓 400m

居住性からみて

今、我々が感受している居住性から復元する事は避けねばならない。気温及び湿度計を支柱に下部（床面より30cm上）・上部（床面より1m上）にとりつけて毎日測定した。表にした期間は7・8月である。但し炉に火を入れての測定ではない。住居内下部の気温・湿度表から判断して気温には、10度強の差が生じていると同時に湿度から3つにグルーピングされる。その大半は80～90％の湿度がみられグループからはずれたロットは、雨天、乾燥期が如実に現わされる。上部も同じく大別して3グループすなわち70・80・90％前後の湿度・気温は下部の温度差より多少大きい。さらに、12時と17時での気温・湿度条件にはさきほど差はない。これは、茅



第175図　復元住居内部下層気温及び湿度表

葺き屋根が一定室温を保持していることをうかがえる。これは、後世の藁葺屋根へと発展していく起因にもなろう。多湿さは、復元住居の掘り下げの深さに影響しているし、床面での防湿施設を考える必要がある。2日間について炉を入れ火を断やさずに実験した結果、上・下部の関係なしに、18度、65～70％と居住性に富んでおり、薄暗いものの炉は夜の照明にもなっている。火を断やさないかぎり安眠は出来る。[註—2] 又、3日間の集中豪雨にもかかわらず現場事務所での雨もりはあったが復元住居では見受けられない。

生活空間として、周壁や垂直柱の条件では160 cmの身長の人間なら4人は十分生活し得る空間である。安眠と雨よけと考えれば以外と居住性に富み、昼は室外で生活すれば家に対する存在感する存在感は推し量る。

復元住居の維持で最大の難点は、防虫作業である事は各施設（博物館等）での心痛であるが炉を入れ煙りを茅葺きに送り込めば屋根の維持は半世紀間は十分である。

より多く復元された住居が形態の復元にとどまらず当時の人々の居住性から発展して家の存在感を復元住居を通じて歴史やイマジネーションの端にしたいものです。

註—1　「古代家屋復元実態調査」『埋蔵文化財ニュース』13　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 1978.3.20

註—2　実験には、大阪文化財センター　技師　小野久隆氏　調査員　古園哲朗氏の協力を得た。

註—3　枚方市文化財研究調査会　技師・宇治田和生氏の御教示によると「昭和55年12月21日、炉心から2.5 m離れたところに床面より1.2 m高に温湿計をセットして観察した結果、焚火をすると室外が10度以下でも室内は常時20度前後に保たれ湿度は40%位い。一酸化炭素濃度10ppm以下で7～8人程度はまずまず快適に暮せる」との事である。

追記

(3)　棟持柱をもつ掘立柱建物

- 脱稿後、堺市教育委員会の発掘調査による「陵南遺跡」1980に於いて2間×3間の同種に類似する建物1棟を検出した。柱穴の内、根石をからませたこの建物は、陶邑Ⅰ型式4～5段階に属し、同期の掘立柱建物とは隔離されていた。

  この項目について、樋口吉文氏より御教示を得た。

- 鳥越憲三郎氏の報告によるとタイ西北部のアカ族の「高床式穀倉」が酷似している。しかも、約4.5mのこの棟持柱建物は、梁間通りから1.5m外に出す。「高床式家屋」と一対をなして隣接しており、その建築尺度が「肘尺」の使用であることも合せレポートしている。(朝日新聞「文化」1981.3.11)

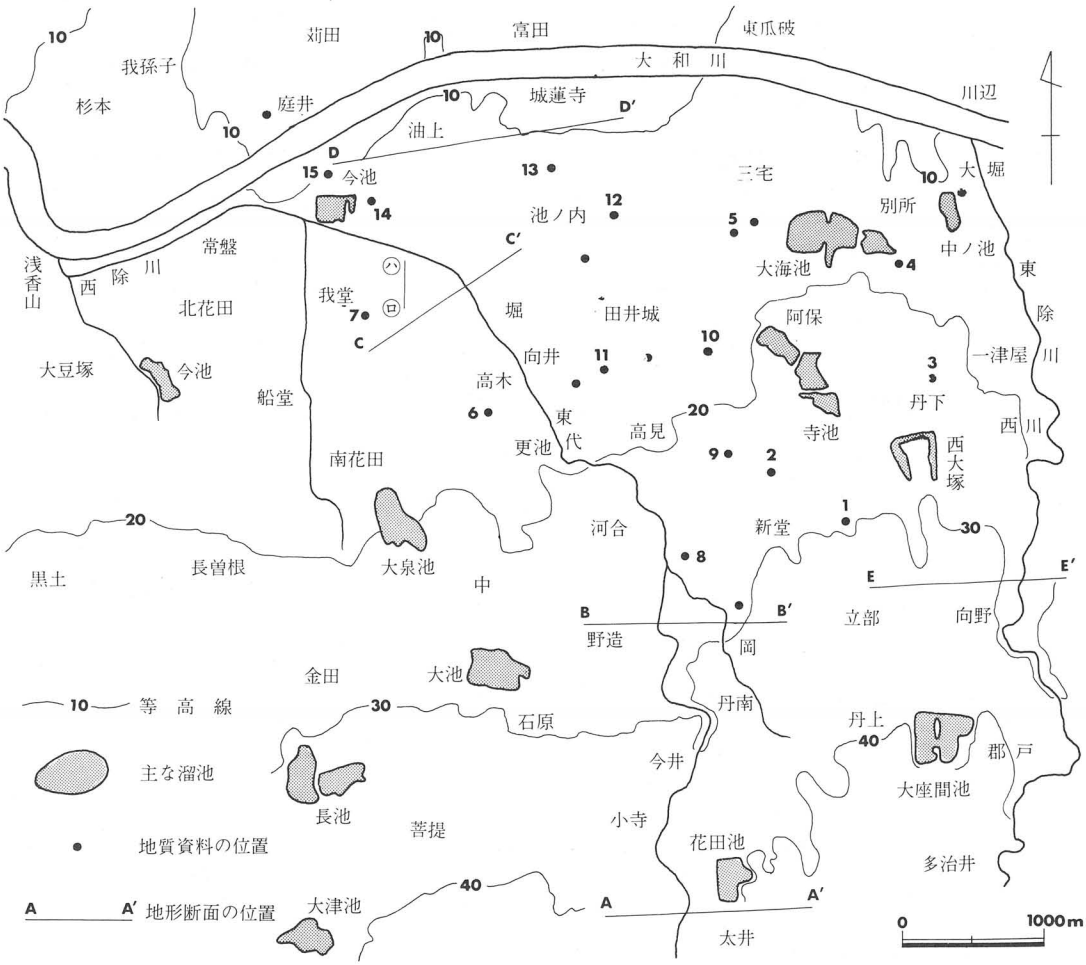
V. 研　究　編

1. 大和川・今池遺跡付近の地理的環境

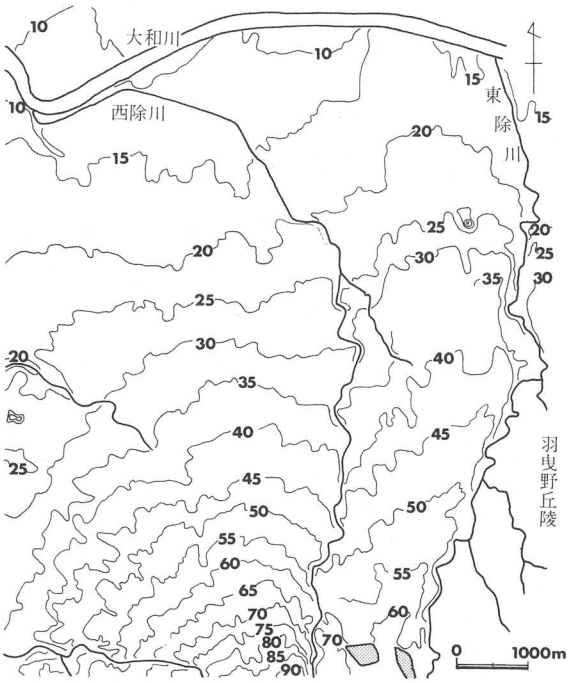
日　下　雅　義

狭山池から流下した西除川が、大和川と合流する地点に近い今池遺跡周辺には、歴史時代における地形環境と人間史との関係を知るうえで、きわめて興味ぶかい問題が数多く存在する。

その一つは、「依網池」がこのあたりに築造されたと考えられること、つぎは段丘面の開発に重要な役割を果し、また西方の「住吉大社」に至る水路の一部が、この付近を通過していたらしいこと、そして最後は、大和川のつけ替えにともなう諸問題である。衆知のとおり、古市大



第 176図　地域の概念図



第178図　等高線図

溝の開さくや狭山池の築造については、従来、さまざまな分野から研究がなされてきたが、当地域におけるこれらの問題については、これまでのところ、あまり研究されていない。ここでは、はじめに地域の微地形と表層地質について、若干の考察を行なったのち、以上の3点について検討を加えつつ、今池遺跡付近の地形環境を描出してみたい。

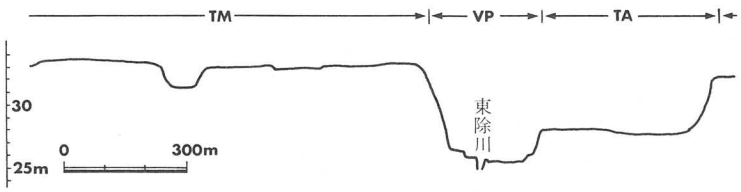
調査にあたっては、空中写真の判読、大縮尺の地形図に対する読図、地質資料の蒐集と検討のほか、野外では工事現場、発掘現場において露頭を観察するとともに、150cmの検土杖を用いて新しく調査を行なった。また『古事記』『日本書紀』『住吉大社神代記』をはじめとする古記録、古地図などを利用するとともに、1万分の1空中写真から条里型土地割を検出した。

1．地域の地理的性格

1〕　地形の特色

地域の南東には、標高150m前後を示す羽曳野丘陵が、南北方向に走っており、それを刻んで東除川が北流する。それに対し、地域のほぼ中央部を北流するのは西除川であり、狭山池より上流部は、天野川と呼ばれている。

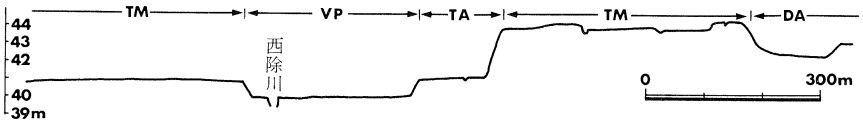
かつて、この地域一帯は、規模の大きい扇状地をなしていたが、その後における地殻構造運動と河川の侵食作用とによって、いくつかの面に分離され、現在みられるような複雑な地形を示すに至った。東除川は、流域全体を通じて下方侵食が著しいが、西除川のばあい、それが割合少なく、標高17～18mを境にして、下流部は天井川を形成している。



第179図　東西地形断面図(E－E′)　地点は第212図参照

(1) 中位段丘　この地形面は、西除川の左右両岸に、広域にわたって分布する。まず西除川右岸についてみると、上流部の多治井付近で面の標高は45～46m、下流部の大和川左岸堤付近で15～16mとなっている。平均傾斜は1000分の6前後であり、河床傾斜約1000分の4を示す東除川ぞいには、上流部に高いガケがみられる。たとえば、多治井付近では、谷底平野の標高が38mを示すため、ガケの高さは約8mとなっている(第214図参照)。そして若干北よりの向野付近でも、谷底平野のレベルが25m、左岸の段丘面が32mとほぼ同じ傾向を示す。

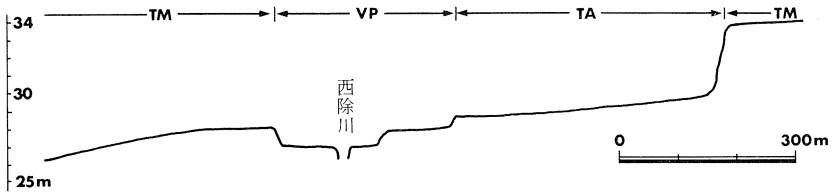
以上に対し、下流部の西川付近では、中位段丘面のレベルが22～25m、谷底平野面が19m前後となっている。ここでは近鉄南大阪線付近を境にして、中位段丘面が北に向かって3mあまり急に低下するため、ガケの高さは南部で5m、北よりの部分では3m足らずを示す。そして、一津屋以比では、東除川を境にして西側が中位段丘、東は氾濫原となっている。



第180図　東西地形断面図(A－A′)

この段丘面の両端は、帯状をなして南北にのびる沖積段丘を隔てて、西除川に移行する。太井付近の東西地形断面は図215に示したとうりである。すなわち、西除川にそう谷底平野のレベルは約40mであり、右岸の沖積段丘面との比高が1m、そして沖積段丘と中位段丘とのそれは、約3mとなっている。花田池は、中位段丘と沖積段丘が接するところにつくられたものである。北部の岡付近では、中位段丘と沖積段丘との比高が約5mであり、大海池西方でもほぼ同じ値を示している。このようにして、西除川右岸において中位段丘の西を限るガケの高さは上流部・下流部ともほぼ等しいのである。この点が東除川左岸のばあいと異なる。

つぎに、西除川左岸に展開する中位段丘につい述べてみたい。共通していえる点は、河川ぞいの低地すなわち谷底平野と中位段丘面との比高が、きわめて小さいことである。すなわち、上流部の太井付近においても、左岸のガケの高さは2m足らずであり、現河床との比高の点のみからみると、中位段丘と呼ぶのは、あまり適切ではない。しかしながら、この面が地域南部の高松、中茶屋、土師、そして大和川以北の我孫子、長居などの集落をのせる面と、スムーズに連続すること、それから後述する表層地質の性格から、これを中位面と解することにした。



第181図　東西地形断面図(B－B′)

このようにして、西除川左岸のガケが小さかったため、古くから西方の水田への灌漑は比較的容易であったのである。たとえば、野遠付近では、左岸に1m余のガケはもつものの、400mばかり西方では、中位段丘のレベルの方が谷底平野面より若干低くなっている(第216図参照)。そして高木、我堂付近では、中位段丘面を限るガケは存在せず、西除川にそう氾濫原のほうが、中位面より若干高くなっているのである。西除川右岸においては、この面はほぼ北に向かって傾斜しているが、左岸では北北西方向をとっており、大泉池、今池付近を中心に、中央部がたわみ込む傾向を示している。

(2) 低位段丘　低位段丘は、東除川左岸の郡戸付近から向野にかけて、わずかに存在するにすぎない。この地区において、中位段丘面と低位段丘との比高は5～6m、谷底平野面との比高は3～4mとなっている。この面には樫山の集落が立地しており、中位段丘面と接するところに樫山池、新池などが築造されている。

(3) 沖積段丘　まず東除川左岸のばあい、郡戸の東において、前述の低位段丘に付着して、また下流部では向野の北部、一津屋付近にこの面が点在する。郡戸の東のものは、標高が31.5～32mで、谷底平野面との比高はほとんどなく、中位段丘面とのそれは2～3mを示す。向野北部のものは、東除川のつくるかつてのメアンダーの腕曲部に、とり残されたようなかたちで存在する。

一津屋の南、近鉄南大阪線との間に位置するこの面は、標高が上流側で21.8m、下流側で19.2mとなっている。そして谷底平野との比高は1～2m、中位段丘面とのそれは2m足らずである。

以上に対し、西除川右岸には、この地形面が広域に展開する。花田池以南において、それの幅は100m前後であるが、高見の東では700mあまりに達する。面の標高は花田池付近で約40m、三宅の西方で約10mとなっている。面の傾斜は、中位段丘面にほぼ等しく、起伏はほとんど存在しない。また西の谷底平野との間に一定の比高をもつため、洪水に対して安全であり、古くから最良の生産地域をなしてきた。花田池付近において、比高は約1m、今井付近で1.5～2mとなっているが、高見以北では、氾濫原を限るガケがあまり明瞭ではない。

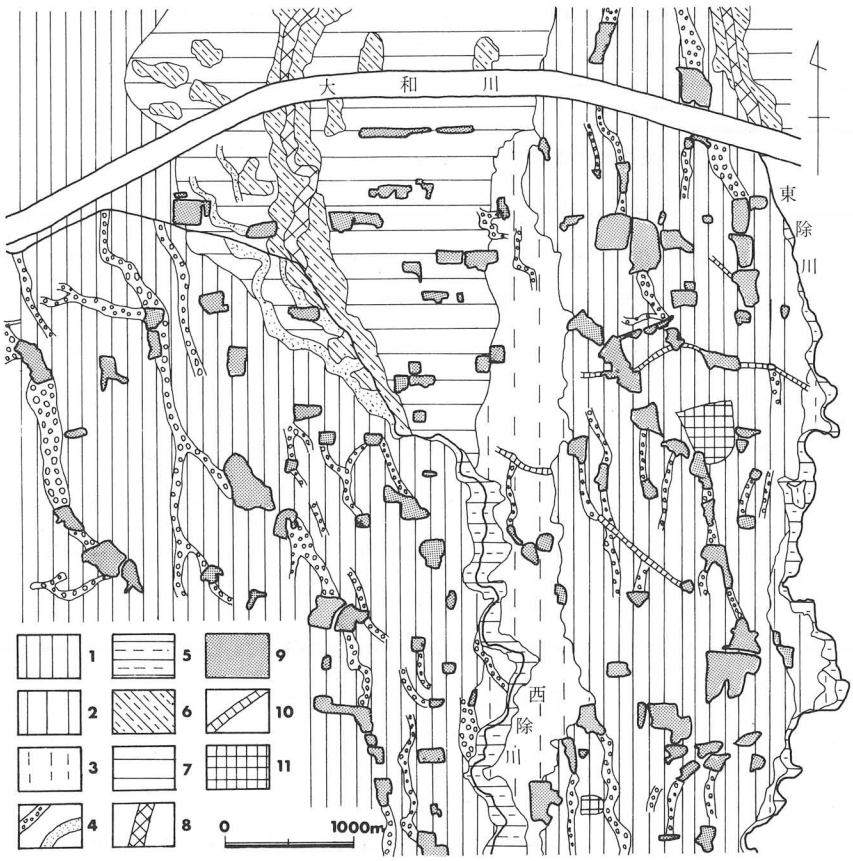
(4) 開析谷と旧河道　この地域には、段丘面や氾濫原をわずかに切り込む凹地が、数多く存在する。これらのなかには、2000年以上にわたる永い歴史をもつものと、比較的新しい時代に河川の氾濫や溜池の決潰によって形成されたものとがある。ここでは段丘面を刻むものを開析谷、氾濫原に存在する河跡を旧河道として、異なった表示を行なった。

まず、西除川右岸の中位段丘面に存在する開析谷について述べてみたい。ここの開析谷は段丘面の傾斜にほぼ平行して走っており、それのほとんどが今なお最底部に細流をとどめている。そして、これらの細流はいくつかの溜池を連らねているが、その源は狭山池にあり、ここで一

坦貯えられた水が、大鳥池や大満池を経て段丘面上に導かれたものである。たとえば、花田池の東には「黒姫山古墳」を挟んで、2本の開析谷が平行して北に向かっている。西方のものは小規模であるが、東の開析谷は舟渡池からずっと連なるものであり、深さは最大3.5m以上に達する(第215図参照)。いずれにも中位段丘から沖積段丘に下りるところに溜池が築造されている。

東方の大座間池から「大塚陵墓参考地」の西を通って、阿保付近に至る開析谷は、西除川右岸の中位段丘面上最大のものである。このラインには阿湯戸池、上ノ池、今池、鶴見ヶ池、海泉池などが存在する。幅はもっとも広いところで100m余に達し、深さも阿湯戸池の下流では2m以上となっている。この谷は古墳時代以前から存在しており、古代においてかなり改変されたものと考えられる。

さらに、下流部の大海池や中ノ池北方にも、開析谷が存在する。とくに中ノ池北部のものは、深さが2.5～3mに達するため、等高線にもそれが明瞭にあらわれている。そして両者とも大和



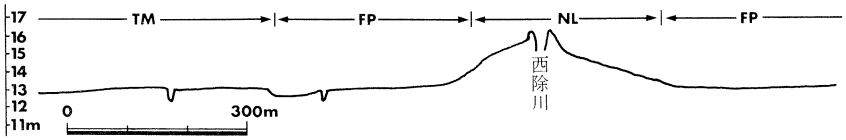
1．中位段丘
2．低位段丘
3．沖積段丘
4．旧河道
5．谷底平野
6．自然堤防
7．氾濫原
8．天井川
9．溜池
10．人工水路
11．墳丘

第181図　地形分類図

川のつけ替え以前においては、大和川以北にみられる開析谷と連続していたことが知られる。

西除川左岸のばあいは、最大傾斜線にほぼしたがって、北地西方向をとるものが多い。もっとも西方において、下沢池、今池などを連ねるものは、幅がもっとも広く、西除川にそう谷底平野の幅に近い。つぎに、大池、大泉池、守屋池などを立地させる開析谷は、連続性がもっとも大きい。これは17世紀の中葉に描かれたと考えられる絵図（狭山池流域図）の(B)ルートにあたると考えてよい。大和川の改修以前には、この谷が「依網池」に流入していたのである。さらにその東にも、池を連ねる開析谷が断片的に存在する。なお、西除川の現流路付近において、中位段丘と沖積段丘が接する地点、および沖積段丘面に存在する開析谷は、比較的新しい時代に発生した洪水によって、一瞬の間に形成された可能性がつよい。

更池から高木をへて我堂の東に至る間にも、河跡が認められる。これは氾濫原面に刻印された、歴史の新しいものである。氾濫原面を下刻している様子は第218図（断面C）に明瞭にあらわれている。



第182図　東西地形断面図（C－C′）

(5)　谷底平野　　ここには、東西両除川にそって、幅のせまい谷底平野が発達している。東除川ぞいのばあい、大和川左岸堤に近い大堀付近にまで、この地形が認められるが、西除川ぞいでは、河合付近でそれが終っている。いずれも洪水時には、下方および側方への侵食が激しかったらしく、河跡の集合した地形面をなしている。

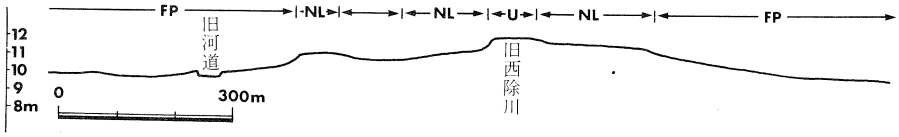
このような激しい洪水を発生させた原因としては、気象条件のほかに、西除川のばあいは陶器山丘陵における古代の須恵器生産、中位段丘面における大規模な開田、狭山池の築造とたび重なる破堤などがあげられる。これに対し、東除川のばあいは、主として羽曳野丘陵の開発と〝東除げ　から送り込まれた狭山池の除水に関係する面が多い。いずれにせよ、ここは歴史時代を通してもっとも不安定な地形面をなしていたのである。

(6)　自然堤防　　これは、かつての東西両除川の流路を中心に形成されたものであり、連続性のより大きいものと、西除川下流部の氾濫原に独立して点在するタイプとに分けられる。前者のばあい、大和川以北において、旧東除川が形成したものがあげられる。これは低位段丘の東に接しており、ここに川辺、長原などの集落が立地する。

これに対し、旧西除川ぞいのものは、東代付近から堀、城蓮寺の西を通って、大和川以北に至っている。その範囲は、西除川が東西にせまる段丘崖から開放されて、氾濫原を形成する部分にほぼ一致する。段丘面、沖積平野ともに、20m の等高線あたりを境にして、北部では傾斜

が緩くなっている。これは構造運動によるところが大きく、そのことが西除川左岸に段丘崖を形成させず、またこの地点から下流部に自然堤防を発達させた主要因をなすと考えられる。

自然堤防の幅は300～400m であり、ほぼ中央部にかつての流路の跡が残されている。堀付近において、自然堤防の長軸に直交して切った断面は図219 に示したとうりである。このあたりでは、西除川の河床は周辺の低地より約250cm高くなった天井川をなし、左右両岸に自然堤防を付着させている。自然堤防の堆積量は、左岸が多く、若干はなれたところに河跡が存在する。やや下流部の油上付近において、自然堤防を東西に切る断面は図218 に示したとうりである。ここでも旧西除川の流路付近がもっとも高く、比高は200～250cmを示している。



第183図　東西地形断面図(D－D′)

ところで、この地域において、自然堤防を形成した時期としては、陶器山丘陵を中心に須恵器生産が行なわれ、また狭山池の築造によ って段丘面の開田が進行した6世紀後半から7世紀末ころにかけて、および近世が考えられる。洪水に関する古い記録は少ないが、たとえば、

「元和六申年、狭山池西除川切込、砂入ニて、古来之地所ヨリ五六尺置砂ニて、秋雨之時分ハかわき不申、夏中相成候へハ、地床まてかわき、例年満作ニ取入候年稀御座候」

（明和8年　城蓮寺村明細帳）

この文書は、17世紀前半のころ、西除川が右に切れ、洪水堆積物が一瞬にして150～200cmも堆積したこと、そして付近の耕地の条件を悪化させた事実をよく示している。すなわち、従来の水田のなかに、洪水堆積物によって新しく生まれた畑地では、排水不良・乾燥というきびしい現象が頻繁にあらわれるようになり、収穫高が著しく減少したのである。

このようにして、洪水はしばしば旧西除川の左右両岸を襲い、多量の堆積物を周辺部にもたらしたが、農民はその都度農耕に適するように、土地改変を行なったものと思われる。すでに述べたように、現在、自然堤防の部分は、まわりの氾濫原より200cmあまり高く、河川敷はさらに40～50cm高くなっているが、これも自然のままを示すものではない。そのことの一面は、つぎの文書からも知ることができる。

「此場所宝永二酉年大縄ニて御渡被遊、戌亥両年引ならし開発仕候、惣普請人足六千余相掛り荒開仕、百姓小前へ割付候処、『銘々ならし』壱反歩ニ付三四拾人も相掛申候、」

（寛保3年　城蓮寺村　村方盛衰帳）

後述するように、宝永元年（1704）に行なわれた大和川のつけ替えによって、城蓮寺村の農地が消滅した結果、それの代替地として、旧西除川の河川敷が与えられたが、ここは地味が瘠せ

ており、しかも起伏が大きかったため、開発、整地に多大の労力を要したのである。自然堤防に限らず、現景観として認められる平野の微地形には、人為的に改変された部分が多い。

(7) 氾濫原　氾濫原は、西除川右岸の高見付近を頂点として、北方にラッパ状に展開している。これは旧西除川が形成したものであるが、河川の規模が小さいため、流路ぞいをのぞくと、歴史時代を通じて割合平穏な環境におかれていた。この地形面の東縁は、上流部において沖積段丘に接し、下流部は5mあまりのガケをもって中位段丘に移行する。

これに対し、西方は地形的特性を全く示さないで、段丘中位面に漸次うつっているのである。そしてその間に旧西除川ぞいの自然堤防のほか、かつての河間州が成長したと解される微高地、および河跡が存在する。

(8) 人工流路　河川の侵食作用によって形成された開析谷は、いずれも最大傾斜線にほぼ平行して走っている。これに対し、人工流路と考えられるものは、傾斜に斜交もしくは直交しているのである。いずれも西除川右岸にみられるが、その一つは、大座間池の北にある新池から北西に向かうものである。これは標高37mのところから32mに至り、ここで南北方向をとる自然の開析谷と合して一坦消滅する。平均幅20m前後であり、深さは開析谷よりかなり小さい。なおここには、今なお細流がみられる。

このラインについては、古道と水路の二通りの解釈がなされている。ここでは微地形の性格から水路と解するが、水路に平行して道路が走っていた可能性も考えられる。

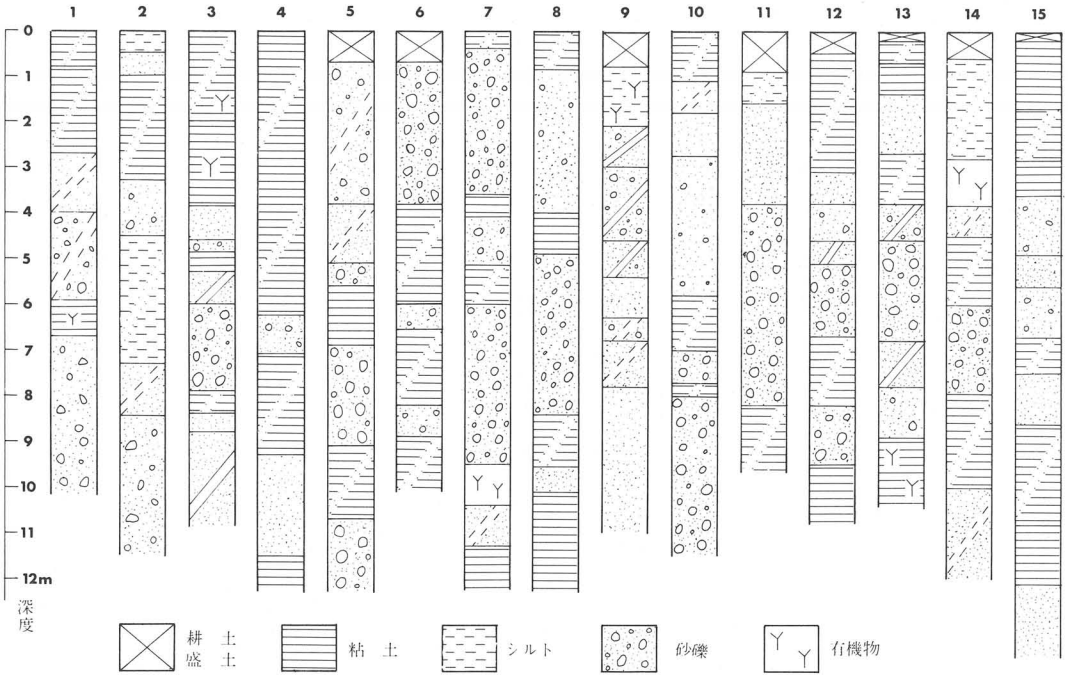
つぎに、新堂の西において、沖積段丘面を西ないし西北西に向かい、新見付近に至るものがある。このばあいは、南側に道路が走っており、水路は断続的となっている。

最後は、一津屋の若干南において、東除川の左岸から中位段丘面を横切って西に向かうものである。これの平均幅は15～20mであり、三角池、西池、弧池、鶴見ヶ池などを結んでいる。この人工水路については、後で詳しく論じたい。

2〕 表層地質の地域性

(1) 中位段丘　段丘面の起伏は、開析谷の部分をのぞくと比較的単調であるが、それを構成する表層物質は、きわめて多様性に富む。これは槙尾川右岸の段丘化した扇状地面のばあいに類似する。すなわち、ここにおいても自然の営力、また人間の働きによって、かなりの数にのぼるかつての開析谷が消滅したといえるのである。このようにして、起伏が減少する一方において、この地域に慢性的に働いている構造運動や、河川の下方侵刻によって、段丘崖の高さが増大し、あるいはガケの後退が生じた。つぎに、若干の地域をとりあげ、表層地質の性格について、簡単な考察を行なってみたい。

①（第220図参照）は浅い開析谷を塞き止めてつくった松室池に当る。ここでは厚さ290cm



第184図　地質柱状図（柱状番号は第212図参照）

1～7　中位段丘　　8～10　沖積段丘　　11～15　氾濫原

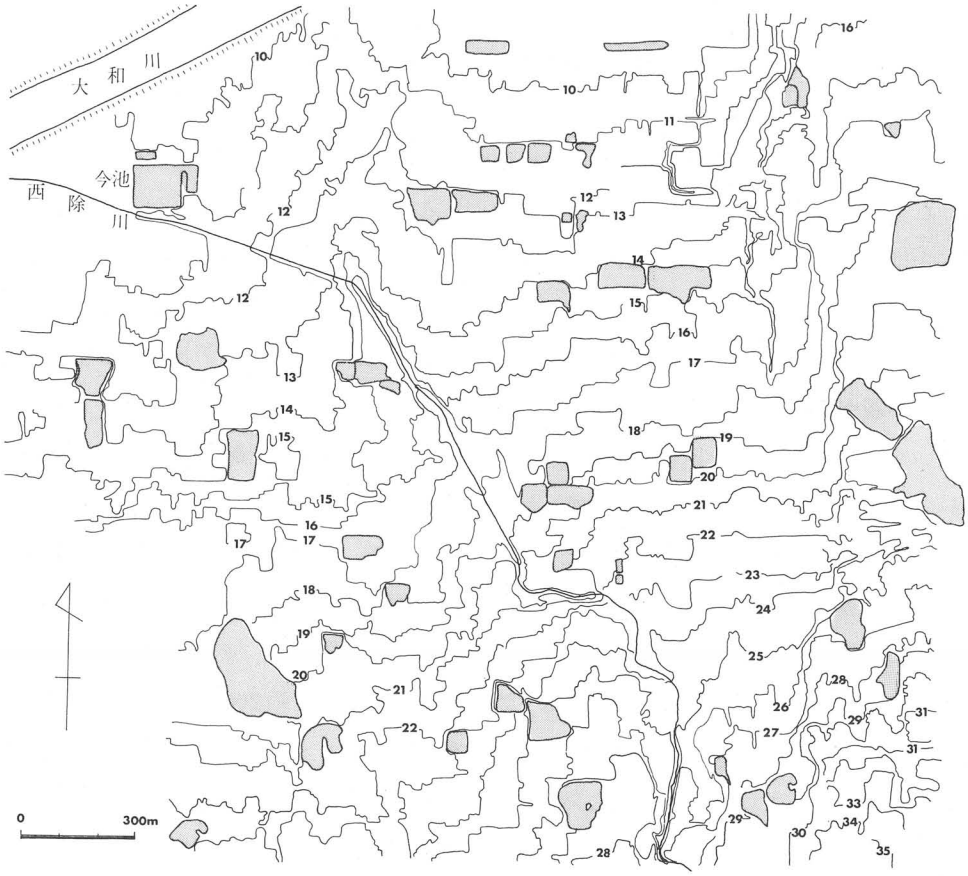
の盛土の下に、約270cmの青緑灰色をした砂質粘土が堆積する。これの上層部約80cmは、池床を埋積したものと考えられる。そしてその下部を占める砂質粘土層は、池築造以前に開析谷を埋めた二次堆積物であろう。なお－270～－400cmのところに堆積する暗青灰色をしたシルト混り砂層および暗青灰色をしたシルト混り砂レキ層は、堆積年代のより古い段丘構成層と考えられる。②は、かなり深い開析谷を塞き止めてつくった下ノ池にあたる。この地点では、暗灰色をしたシルト層が約50cm、そしてその下方は45cmの淡灰色の中砂層となっているが、ここは段丘崖に近いため、二次堆積物と池床堆積物を合わせても、厚さ100cmに満たない。なお－100cm以深の砂質粘土層はよくしまっており、段丘層と解される。

③も①、②と同様池敷（西池）にあたる。しかしながら、この池は地表景観として検出しうる開析谷とは連続していない。ここでは150cmの盛土の下に、厚さ200cmの砂混り粘土層が堆積するが、これは暗青茶ないし暗青灰色をなし、きわめて軟弱である。その下は厚さ185cmの均質でよくしまった粘土層である。ここでは二次堆積物の厚さは、約200cmであり、南北方向をとる埋積谷の存在が考えられる。④は、大海池の東方に位置する。ここのばあいも、地表景観からは全く検出しえないが、埋没谷の存在が考えられる。すなわち、深さ約6mまでは淡黄灰ないし暗青灰色をした砂混り粘土層をなすが、N値は10以下であり、二次堆積物と解される。したがって、西池付近からこの地点に至る谷が埋没している可能性が大きい。いずれにせよ、

大井川扇状地の例など考えると、現景観として検出しうる開析谷の数は、ウルム氷期に形成されたものよりはるかに少なく、また断片的すぎるのである。

⑤は、中位段丘西端のガケに近いところに位置する。ここでは厚さ70cmの表土のすぐ下に黄褐色をしたシルト混り砂レキ層が堆積している。これは中位の固さを示すが、段丘層が二次堆積物かは不明である。以上に対し、西除川左岸のばあいは、2例にすぎないため、全般的な傾向は把握しにくいが、たとえば⑥では地下60～70cmのところからN値40前後を示す密度の大きい砂レキ層が存在する。また⑦においても、約40cmの表土の下は密な砂レキ層となっている。

(2) 沖積段丘　沖積段丘面の地質資料は、4地点ある。西除川右岸の谷底平野に接する⑧では、深さ85cmまでが砂混りシルト、その下に暗黄灰ないし黄灰色のレキ混り粗砂層が、3mあまりにわたって堆積する。これらは、完新世において旧天野川が堆積した物質と解される。⑩の地点では、約80cmの盛土の下に、厚さ130cmの暗灰色のシルト層が堆積する。これは腐植物を混入しており、きわめて軟弱である。そしてその下部は暗青灰の粘土混り粗砂、砂レキなどが深さ7.7mまでつづいている。これらはN値30以下であり、沖積層と考えられる。それ以深



第185図　今池付近の等高線図

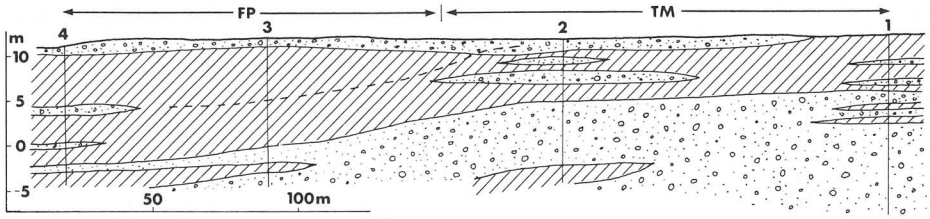
は粗砂層であるが、N値は50をこえている。

⑩の地点においても、地表下180 cmまでは軟弱な砂質粘土ないしシルト混り砂となっている。そしてその下に砂ないしレキ混り砂が深さ5.8 mまでつづく。これは黄灰ないし淡青灰色を呈しており、N値は30以下である。ここでは沖積層の厚さが5.8 mと考えられるが、これによって、中位段丘西方のガケ下に、かなり深い谷が存在することが推定されるのである。

(3) 氾濫原　田井城の少し南に位置する⑪地点では、90cmの盛土の下に、厚さ70cmの暗黄灰の砂混りシルト、220 cmの淡黄灰色の粗砂が堆積する。そしてその下は暗青灰色のきわめて硬い砂レキ層となっている。これからもわかるように、この地点における沖積層の厚さは約3 mである。なお、この地点の東約300 mのところに位置する中央小学校では、沖積層の厚さが4.8 mとなっている。

⑫の地点では、約50cmの盛土の下に砂を交えた粘土が厚さ260 cm堆積する。そしてその下に約200 cmにわたって砂、レキ混り砂が堆積し、密な砂レキ層に移行している。ここでは新しい時代の堆積物の厚さは約4.5 mと考えられる。標高が10 mあまりで、氾濫原のほぼ中央部に位置する⑬では耕土、床土が20cm、その下は厚さ50cmの灰褐色をした砂混り粘土、70cmの粘土、130 cmの暗青灰色の砂混り粘土と続いている。これらは沖積層であり、より古い地層は深さ3.8m以深にみられる。

最後に、西除川に近い⑭では、堆積物は全般的に細かく、そして深さ205～310cmのところに未分解の有機物が堆積するが、今のところこれの堆積年代は不明である。



第186図　南北地形断面図

(大阪府南部流域下水道事務所資料より)

(4) 西除川左岸の南北断面について　ここでは、我堂の東方において、南北約1.100 mにわたってのびる地層断面について若干の検討を行ない、中位段丘と氾濫原との境界線を決定したいと思う。すでに述べたように、この地区では、地表の形態から中位段丘と沖積低地とを区別することは不可能である。したがって、これまでの研究では西除川のコース付近が、両者の境界とされてきた。

本研究においては、更池から今池をへて庭井に至る間の境界決定が、一つの大きい課題となった。何故ならば、ここに今池遺跡が存在し、またその付近に「依網池」が位置していたと考

えられるからである。幸い、㋑から㋩に至る間に合わせて10地点のボーリングがなされており、それらから柱状断面を作成することが可能であった。まず㋑～㋺間についてみると、ここでは粘土・砂レキ、砂が複雑な互層をなしており、一定の傾向は認められない。ところが、㋺～㋩間では地層の堆積状態がかなり単調となる(㋑、㋩地点省略)。まず①の地点は標高が12.47mで、深さ6.5mまでは粘土層が厚く堆積し、そのなかに砂レキのレンズを2枚挟んでいる。この粘土層はよくしまっており、より古い時代の堆積物と考えられる。

つぎに、②の地点では粘土層の厚さは7.2mとなり、表層に厚さ約50cmの砂レキをのせ、その下にシルト混り砂、レキ混り砂などを挟んでいる。以上に対し、③の地点では粘土層の厚さが12.3mに達する。もっとも、この粘土層は上部と下部において、全く均質なものではない。すなわち、深さ1～5mまではシルト混り粘土が主体をなすが、N値はすべて10以下で、きわめて軟弱である。これに対し、5m以深では粘土が主体となり、一部にシルトを含む程度であるが、N値は10以上を示し、かなり硬い。同様にして、④においても軟弱な粘土層が5～5.5mの深さまでつづいているのである。そこで、ここではN値の小さい軟弱粘土層の厚さに基づいて、段丘と沖積地を区分することにした。

なお、地表近くに厚さ1m前後にわたって推堆する砂レキないしレキ混り砂層は、新しい時代に発生した洪水による堆積物と考えられる。第217図をみると明らかなように、ここは旧河道の部分にあたるのである。

第187図　旧河道の地籍図

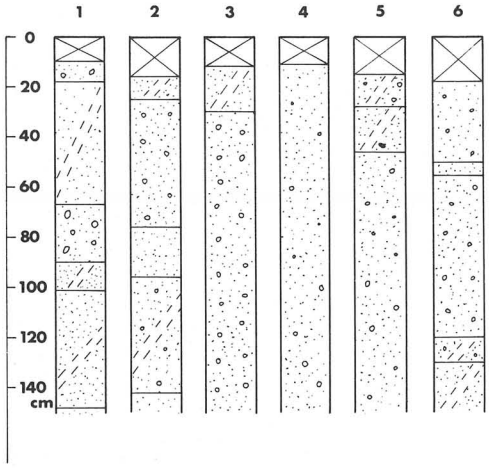
―富田新田付近―

(5) 旧西除川の河床堆積物　すでにふれたように、かつての西除川は我堂の東から油上の東を通って、ほぼまっすぐ北に向かって流れていた。旧流路にそう自然堤防および天井川の部分は、周辺の氾濫原のレベルより200～250cm高くなっているため、土地はよく乾燥している。地元の古老の話しによると、地下水位は深さ3～4mのところにあるらしく、畑地のなかに点々とみられる〝はねつるべ〟の残骸が、かつての面影をよく物語る。西除川つけ替え以後約250年間は、ほぼ同じ地形環境を示したものと考えられるが、当時の様子は、つぎの記事から伺い知ることができる。

「御代地ハ狭山西除川床ニて開発仕候処、地形高ク荒砂畑ニて用水之便無御座、五日旱続候ヘハ、井水ヲはねつるヘニて汲上ヶ生立申候然共、土用過ヨリ井水涌不申候ニ付、毎年旱損仕候」

すなわち、西除川の河川敷は、粗砂が多く、数日間の日照りによって土地が乾燥するため、〝はねつるべ〟によって井戸から水を汲みあげた。しかしながら、それには限度があり、毎年のように旱損を生じたのである。河川敷の部分は、今なお〝大川〟あるいは〝ひらき〟と呼ばれており、細分された畑地では大根、ほうれん草、しゅんぎく、ねぎなどが栽培されている。

ここが廃川となった頃、開墾と整地が大規模に行なわれたため、表層部はかなり攪乱されているが、150cmの検土杖を用いて調べてみることにした。調査を行なったのは字「富田」付近である。この地点において、当時の川幅は50m前後であったと考えられる。現在は旧河川敷の中心を道路が走っており、天井川をなす部分とまわりの自然堤防の部分との境界には、平均45～50cmの比高がある。



第188図　西除川旧流路の地質柱状図

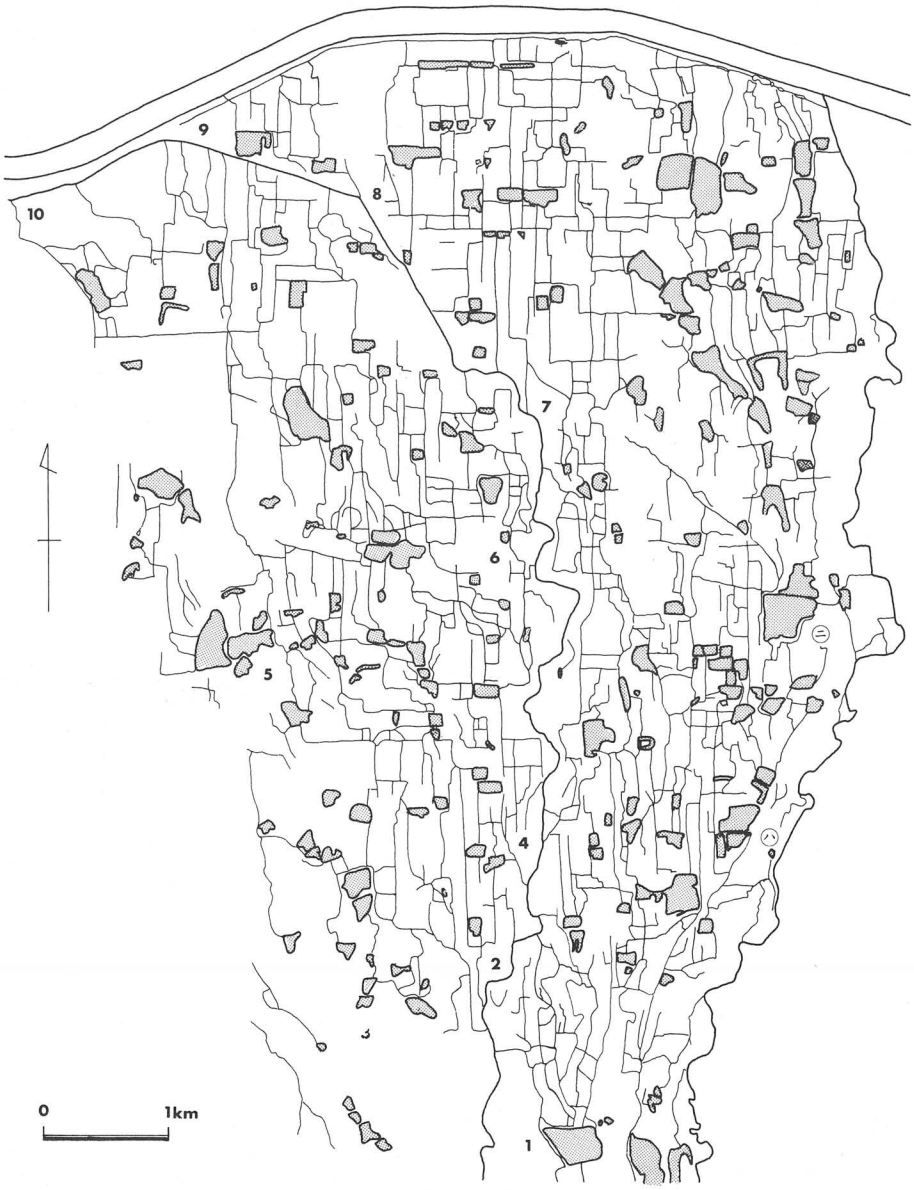
旧河川敷の部分は③と④にあたるが、たとえば③において、耕土は厚さが12cm、そして深さ12～30cmは、暗黄色をしたシルト混り砂であり、それ以深は小レキを混入した粗砂となっている。①は自然堤防の部分に位置する。ここでは耕土の厚さが10cmで、その下に小レキを含む粗砂が堆積する。そして－18～－67cmのところは黄灰色をしたシルト混り砂となっており、その下に小レキを含む粗砂層がレンズ状にはいっている。

調査地点が少なく、しかも深度が限られているため、詳細を論じることはできないが、いずれにせよ、周辺の氾濫原がシルト混り粘土を主体とするのに対し、自然堤防帯をなすこの地区が、粗粒物質によって構成されていることがよくわかる。

3〕　水系

当地域は、瀬戸内気候区の東端に位置し、降水量が少ないこと、段丘地形が広く発達していること、河川の規模が小さいことなどの理由により、溜池がきわめて多い。

中位段丘面の溜池は、平坦部に立地するものと段丘面を開析してできた浅い谷に位置するタイプに大別される。前者のばあいは、方形をなすものが多く、規模も大きい。これの例としては舟渡池、大座間池、大海池、西除川左岸では大池、北池などがあげられる。これに対し、後者のばあいは微地形の特徴にしたがって、南北方向に長くのびるものが多い。大島池、阿湯戸池、今池、稚児ヶ池、上ノ池、西除川左岸では下沢池とそれの下流部につらなる今池などがその例としてあげられる。



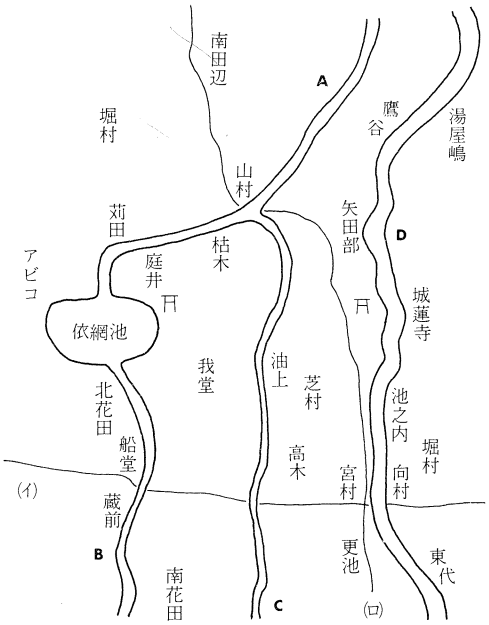
第189図　現在の水利系統図

低位段丘や沖積段丘は、起伏が乏しいため、まわりを堤塘によって囲まれた溜池がほとんどである。ただし、東除川左岸の樫山池は中位段丘と低位段丘、西除川右岸の花田池は中位段丘と沖積段丘の接するところに位置するため、一部分は築堤がなされていない。

氾濫原にも溜池がかなり存在するが、このばあいは、東西に長くのびる形態をもつものが多い。その例としては、西除川右岸に接する今池、近鉄南大阪線かわちあまみ駅の東にある弁天池、大和川左岸堤に近い長池などがあげられる。

水路のばあいは、先行する自然の微起伏に従がったものと、条里制にもとずき、人為的に区画されたものとが、複雑に交錯している。きわめて概略的に述べると、西除川右岸の沖積段丘と氾濫原、および西除川左岸の中位段丘面上に、方形をなした水路が比較的多く分布する。

ところで、当地域の近世における水系を示すものとして「狭山池流域図」がある。これは17世紀中葉ころに描かれたものと考えられ、またきわめて広域を示すため、精度に問題が残る。しかしながら、この地図と現存する地名、微地形を比較対照することによって、当時の有様をある程度推定することが可能である。これをみると、西除川と東除川との間に3本、そして西除川左岸に2本の流路が描かれている。



第190図　17世紀ころの水系
「狭山池流域図」より

もつとも東のものは、大満池の北から中位段丘面に導かれ、舟渡池、笠田池、大座間池などを連らねたのち、「大塚陵墓参考地」のすぐ西を通って別所に至っている。これは第225図の①から㋺に至り、㋩、㋥、㋭を経て㋣に達するものであり、現在の微地形からも、それを辿ることができる。あとの2本のうち、1本は大満池の北樋から、他のものは大満池の若干上流部から分岐し、ほぼ平行して北流する。前者は中位段丘の西端のガケに近いところを通るものであり、後者は沖積段丘上を流れていたと解される。

西除川左岸のばあい、東よりのものは、轟池のすぐ下流部の余部付近から左に分岐している。これは原寺と菩提の間を通って中の東に至り、さらに高木、油上の西を北に向かうものである。このルートは、現地形と対比することがかなり容易である。すなわち、第225図の②付近から⑥の西に至り、さらに⑧の西方を北に向かっていた。現在、このルートぞいには国分池、新池などがあり、凹池、水路も断続的にみられる。

もっとも西よりの水路は、狭山池北西部の大阪層群よりなる丘陵地に発源する。これは丈六、北村の西を北に向かい、金田と中の間を北にすすんだのち、北花田付近において「依網池」に注いでいる。このルートも現地形に比定することが可能である。すなわち、これは③付近から⑤に至り、大和川と西除川が接する⑨の地点に向かうものである。剣池、菅池、守屋池などはこのルートを連ねてつくられた溜池であり、水路もほぼ連続している。以上「狭山池流域図」に対し、若干の考察を行なってきたが、この絵図には、数多くの省略があり、またラインの太さ

が当時の水量そのままを反映するわけでもない。たとえば、西除川右岸のもっとも東の水路が細すぎるし、轟池と「依網池」を結んでいたはずのルートが描かれていないのである。

大依羅神社所蔵の「狭山池分水図」をみると、大和川つけ替え以前において、轟池下流右岸に9～10ヵ所、同左岸に13～14ヵ所の樋が存在していたらしい。右岸のばあい田井（太井）、高見、向、池ノ内などの村へ灌漑するものがそれであり、左岸では余部、小寺、今井、河合、清水、高木などに導く樋があげられる。なお、宝暦年間（1751～1763）以降における西除川よりの取水口は、合わせて15ヵ所である。

文化12年（1815）の「狭山池水下分水図」をみると、大満池の東樋から導き出された水は、中位段丘上の舟渡池からまつすぐ北に向かう水路が有力である。また西除川からは、左岸へ7本、右岸へ6本の分岐がみられる。

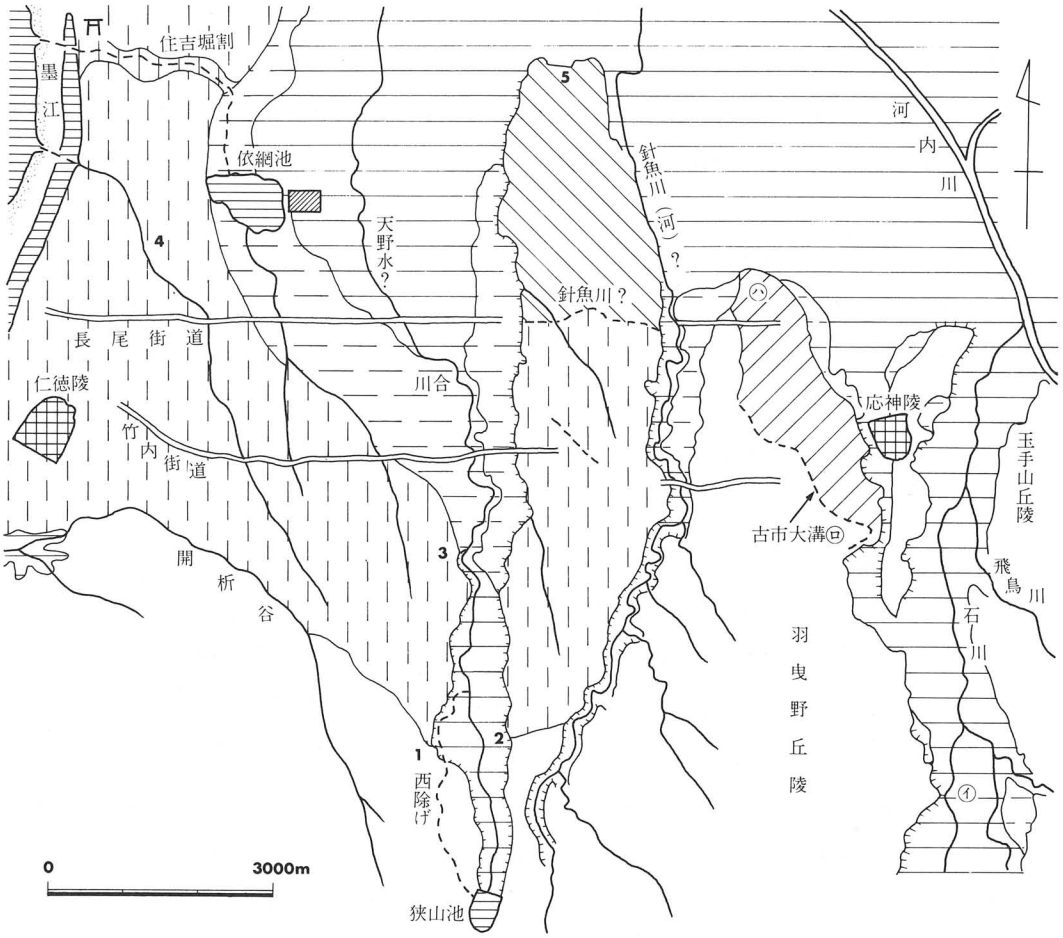
このようにして、西除川右岸の中位段丘面は狭山池→大鳥池、狭山池→大満池の二つのルートをへて灌漑された。また西除川右岸の沖積段丘の上流部は大満池より、そして下流部は西除川より樋をもって灌漑されたといえる。これに対して、西除川左岸では、一部は陶器山丘陵から流下する水、大部分は西除川の水を塞き止めた水が導かれたのである。もっとも、段丘面を中心とするこの地域の灌漑にとって、大小の溜池がきわめて大きい役割を果したことはいうまでもない。

2．生活空間の地域的展開

1〕　段丘面における溝渠の掘削と開田　―『住吉大社神代記』から―

石川左岸には、自然灌漑の困難な中位段丘および下位段丘が、広域にわたって展開している。これは3つの系統に分けられるが、その一つは、羽曳野丘陵の北に連なるもので、「日本武尊陵」（第227図㋺）付近から北の「城山古墳」（第227図㋩）に至るものである。東西最大幅2.2km、南北延長は4kmに達する。つぎは東西両除川の間に、南北に細長くのびるもので、南は狭山池付近から北は大和川以北の瓜破付近にまで達している。東西幅は2km足らずであるが、南北延長は12km前後を示す。3番目は西除川以西に位置するもので、これも狭山池付近を頂点とし、北に向かって扇状にひろがっている。そして西の「仁徳天皇陵」と東の今井を結ぶ線付近では、その幅が7.5kmに達するが、それ以北では幅が狭くなり、大和川が東西に切るところで2.5km、大阪城付近では1.5kmとなっている。

これら段丘面のうちで、灌漑がもっとも困難であったのは第1の段丘面であり、西に向かうにしたがって、それが容易であったと考えられる。このようにして、河川による自然灌漑が困難であったこの地形面では、それを克服するために、古くから溜池や用水路が築造された。それの代表的なものが「感玖の大溝」、「針魚の大溝」（針魚川）、「依網池」、「狭山池」、「住吉堀割」などである。



自然灌漑が容易だったところ

「針魚川」の開鑿によって灌漑が可能となったところ

簡単な井堰により灌漑が可能だったところ

「住吉堀割」によって灌漑が可能となったところ

「古市大溝」によって灌漑が可能となったところ

「狭山池」の築造によって灌漑が可能となったところ

第191図　古代における水利系統推定図

（小規模な開析谷にもとづく灌漑はのぞく）

第227図は5～7世紀における当地域の景観を推定したものである。これをみると明らかなように、自然灌漑が容易であったのは、石川ぞいの氾濫原および現在の西除川、東除川にそう

谷底平野と下流部の氾濫原であった。さらに沖積段丘も、簡単な井堰をつくることによって、灌漑が可能となったものと考えられる。

ところで、『仁徳紀』には、「感玖の大溝」によって4万代（約66.6ha）の田を開いたとある。この大溝によって開田された範囲としては、石川左岸の中、低位段丘面が考えられるが、図上計算によると、段丘面の広さは300ha以上に達する。そこで、この範囲内の一部が、大溝の築造によって開田されたと考えたい。したがって、「上豊浦」、「下豊浦」などは、石川にかかる河南橋付近から、北方の「城山古墳」付近に至る間のどこかに存在したものと思われる。もっとも、これは「感玖の大溝」を古市大溝に比定し、しかもこれを灌漑目的でつくったとの見解にたつばあいのことであり、ほかに水運を目的として掘削したとする立場もあり、また、わずか4万代程度の開田のために、なぜこのような規模の大きい溝渠をつくらねばならなかったのかという素朴な疑問も生ずる。

(1) 地名の現地比定　『住吉大社神代記』には、以下のような記載がある。すなわち、

「我が田我が山に、潔浄水を錦織・石川・針魚川より引漑はせて……」

「仍りて御田に引漑がむと欲し、針魚をして溝谷を掘り作らしめむと思召す。大石小石を針魚、掘返して水を流し出でしむ。亦、天野水あり、同じく掘り流す。水の流れ合ふ地を川合と云ふ。」

ここにみる「針魚川」には、2つの解釈がなりたつ。その一つは、これを現在の東除川の前身をなした小流と解するものであり、つぎは針魚氏によって新しく掘削された用水路を指すとする考え方である。当時、羽曳野丘陵西斜面の水を集めて北流する小河川が、すでに存在していたことは間違いないが、ここでは後者の見解をとりたい。すなわち、北流する従来の小河川から、段丘面上に水を導くために新しく掘削したものがここにいう「針魚川」なのである。

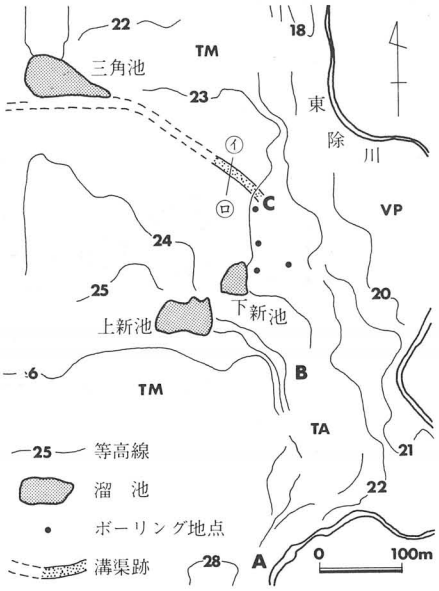
つぎに「天野水」とあるが、これは天野山に源を発し、現在の狭山池、大満池付近を通ったのち、北野田付近からほぼまっすぐ北に流れて河合に至り、さらに堀付近から城蓮寺の西を北流していた、かつての天野川にあたる。そして「川合」は現在西除川左岸に接して存在する「河合」を指すと解することができる。そこで、新しく掘削された「針魚の大溝」のルートが問題となるが、ここでは、微地形のところですでに述べた第二の人工流路がこれにあたると解したい。すなわち、東除川左岸の西川（旧西川村）付近から西に向かい、寺池の北に至るものがそれである。

第228図をみると、「針魚の大溝」の痕跡は標高23～23.5mを示す中位段丘面に位置する。ここは南から北に向かつて緩く傾斜する面が、26～27mのレベルから、22～23mのレベルに移行する傾斜変換線にあたる。中位段丘の東は沖積段丘となっており、中位面との比高は上流部で約3m、下流部のⒸ地点で1mあまりとなっている。そしてさらに東の東除川ぞいには、標高

19～19.5mを示す谷底平野が発達する。

このようにして、現在は「大溝」の痕跡が残存する地点と東の河床との比高は3m以上に達するが、現河床は、古代のそれをそのまま示すものではない。上流域の開発にともなって、側方侵食による川幅の拡大と河床低下が進行したものと考えられるが、東除川のばあい、慶長年間（1596～1615）における東除げの開さく以降、それが急速化したといえる。

5～6世紀ころの河床のレベルは、現在の沖積段丘面より若干低く、19.5～21.5mくらいであったと考えられる。そこで、水は約450m上流のⒶ地点付近からとり入れ、段丘崖下をⒷからⒸに導き、ここで中位段丘面上に塞き上げたものと思われる。Ⓐ地点では、小さな井堰をつくるのみで、比較的容易に、水を導き入れることができたものと思われる。また Ⓒ地点の比高は1mあまりに達するが、これは右側に堤をつくる一方、中位面を切り込むことによって、通水は可能であったと考えてよい。



第192図　東除川左岸の微地形と溝渠の推定図

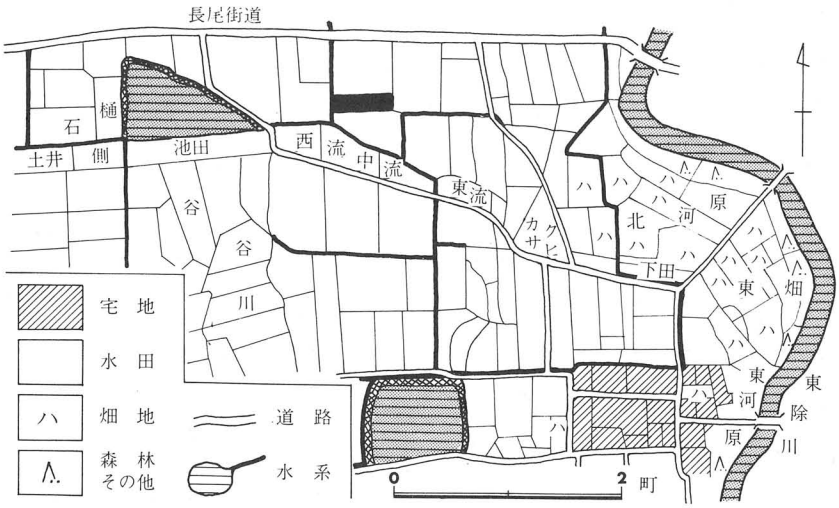
TMは中位段丘　TAは沖積段丘　VPは谷底平野

「感玖の大溝」のばあいは、比高6mを示す中位段丘面に水を導くため、延々3,000m余に及ぶ水路が新しくつくられたが、ここではわずか450mで、それが可能であったのである。なお、Ⓒ地点西方の小字は「塚廻り」となっているが、ここは水路が迂廻する地点にあたり、またかつてこのあたりに小さい塚が存在し、一時的にこの溝が周濠をなしていたのかもわからない。

(2)　土地割と小字名による裏付け　　第229図は明治10年（1878）の地租改正にともなってつくられた地引絵図である。これをみると、東除川ぞいから西北西ないし西に向かう、一連の細長い土地割が認められる。この特殊な形態を示す土地割が、古代のものだとする確証はないが、①段丘面上は、洪水にさらされることがないため、土地景観がながく保存されうること、②より新しい時代において、このような大規模な溝渠が掘られたという記録が見つからないこと。などの理由により、これを『住吉大社神代記』に出てくる「針魚川」の一部をなすと考えることができる。

一連の細長い水田の幅は15～25mであり、南から北に傾斜する地表面に斜めないし直交する方向で切っている。水路を暗示させる小字名としては「東流」「中流」「西流」などがあり、「土井側」の西約1000mのところには、「長溝」という小字名も存在する。小字「カサクヒ」は、沖

積段丘から中位段丘に移るところに存在するが、これは「カサク樋」あるいは「カサ杭」のことであろう。前者のばあい、この地点に樋をもうけ、中位段丘の東端に沿って、下流部の水田に水を導いたと解することができるが、この考え方はあまり適当ではない。



第193図　旧西川村の地籍図

ところで〝かさ(嵩)〟は、「高いところ」、「かさなり」などの意味をもつ。すでに述べたように、この地点は中位段丘縁辺の「高いところ」にあたるため、沖積段丘からこの面まで3尺あまり嵩上げする必要があった。また水路をここで左に屈曲させる必要があり、沢山の杭を打って、堤の右への崩壊を防いだと考えるべきであろう。そして、ここから約450 m南のⒶ地点までの間においても、右側には杭打ちと築堤がなされたはずである。これに対して、左岸は中位段丘のガケに接していたため、それの必要はなかった。なお字「カサクヒ」の東に細長い土地割と「岸下」、「岸根」などの小字名が存在するが、これは当時の水路敷や堤防を示すものではなくて、沖積段丘の東を限るガケ下を意味するわけである。

西方の小字「石樋」は、その南に接する「土井側」に関連づけると、ここに井堰と樋をつくり、北へ潅漑用水路を派生させていたと解することができる。なお「谷」、「谷川」という小字名もみられるが、ここは北に向かう自然の開析谷にあたり、周辺部より若干低くなっている。他方、東の東除川ぞいは、谷底平野の地形をなすが、畑地や森林が多いこと、「河原」、「北河原」「東河原」などの小字名がみえることなどからも、ここが洪水の頻発するところであったことがよくわかる。

伝統的な集落は、沖積段丘上に立地しており、近年になって幼稚園や一般住宅が、若干の盛土を行なって、河川ぞいの低地に進出しつつある。図上計算によると、この大溝渠を掘ることによって、潅漑が可能となった面積は、中位段丘だけでも550 ha余に及ぶ。これは「感玖の大

溝」の推定される灌漑域の1.5位以上に達するのである。

(3) 表層地質に対する若干の考察　微地形や土地割にあらわれた景観、小字名などによって、ここが「針魚の大溝」の跡である可能性が、かなり強まった。最後に、表層地質の点から検討を加えてみたい。ここでは、㋑—㋺断面において6地点、Ⓑ、Ⓒ間で4地点をえらび150cmの検土杖を打ち込んだ。

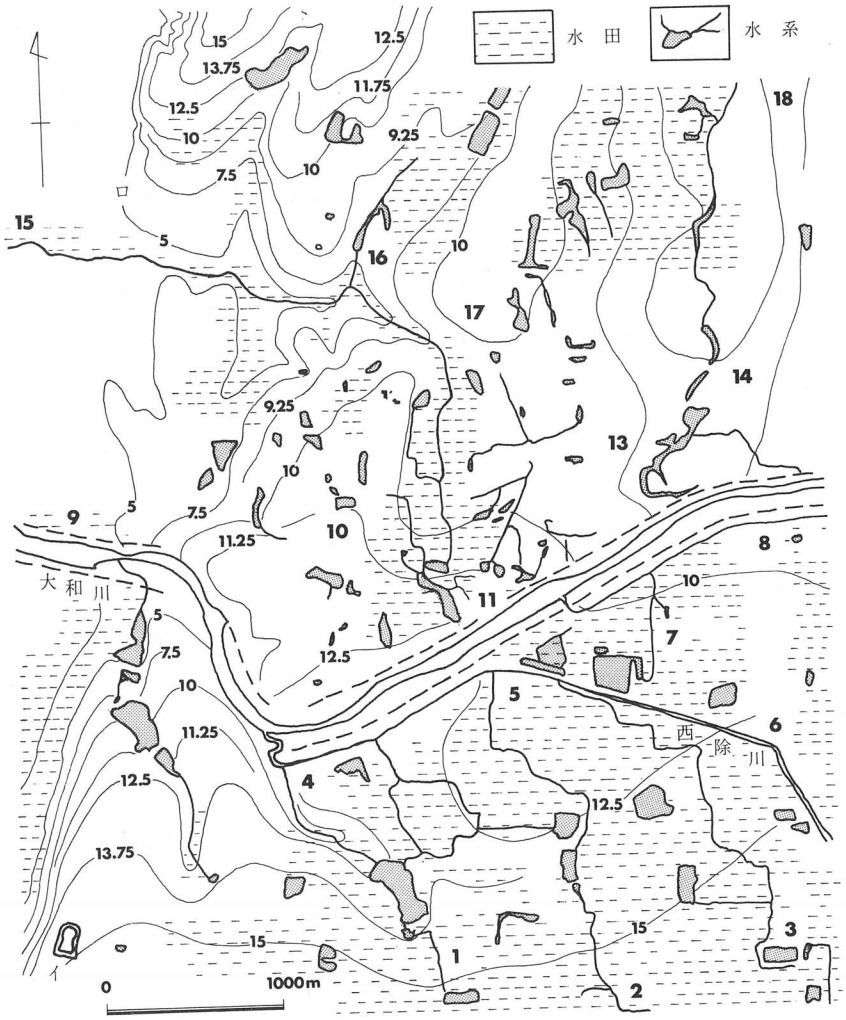
㋑の地点、すなわち小字「東流」では、水田の南北幅が13.4mである。北の畦畔から3.1m南の地点では、35cmの耕土の下は黄灰色のシルト質細砂が、深さ150cmまでつづいており、よくしまっている。これに対し、南の畦畔（道路）から1.4m北へ寄った地点では、耕土25cmの下は、褐色混り黄灰色のシルト質砂層をなし、チャートの小礫を所々に混入している。そして深さ150cmまでは、全般的に軟らかく、深さ100cmのところから木炭の小片を検出した。これが洪水あるいは人為による二次堆積を物語る有力な証拠となった。そしてさらにこの地点から2mおよび4m北寄りの地点においても、表層地質はほぼ同じような傾向を示した。これに対し、南部の㋺付近すなわち小字「塚廻り」では、2地点とも、小字「東流」の最北のものと同様、耕土20cmの下はよくしまった、そして均質なシルト層をなしていた。

以上の事実から、つぎのような解釈が可能となる。すなわち、この地区における中位段丘の表層は、よくしまった黄灰色のシルトよりなっている。小字「東流」において、水田の幅は13.4～15mを示しているが、シルト層を切り込んでつくられたかつての大溝の幅は6～8mであり、現景観として認められる水田の広さの半分前後である。もっとも、長さ150cmの検土杖を用いた調査からは、溝渠底の堆積物を検出することができなかったため、ここではシルト層の硬さの差異、層相の諸特徴、木炭片の存在などから、埋没する溝渠の存在を推定したにすぎない。少なくとも、このあたりでは、溝渠底は、現地表面から150cm以深、すなわち—200～—250cmのところに存在すると考えられる。

地元では、今なおこの付近を「流れ」という名で呼んでおり、小字名、土地割の形態などから、水路の想定は可能である。しかしながら、この地区は上流部、すなわち南から運び込まれた物質で厚くカバーされており、また埋没した溝渠の幅と地上の畦畔の位置が大きくずれている点などから考えると、この水路は割合古い時代すなわち7世紀ころに、その機能を失なったものと考えざるをえない。

(4) 上町台地を横断する溝渠　—「住吉堀割」—　つぎに、天野水（川）左岸の中位段丘、すなわち上町台地面の掘削について述べてみたい。上町台地を刻む大溝すなわち「住吉堀割」も、ほぼ同じ時期に「針魚の大溝」と何んらかの関係をもって掘削されたと考えられる。自然のプロセスのみからみると、この地区もその後における変化が少なかったはずであるが、天野水（西除川）右岸の地とは異なり、上町台地においては、昭和20年ころまでに、区画整理その他

による表面の人為的地形改変がほとんど完了しているため、空中写真や現景観から、当時の様子を推定することは不可能に近い。そこで、ここでは地形改変以前に作成された地形図を中心にして、考察を試みたい。



第194図　明治初期の景観

第230図は明治20年（1888）測量の2万分の1地形図から等高線、水系、および水田をぬき出したものである。地形測量の精度の点で、若干問題は残るが、これによって、明治初期の景観を、かなり詳細に把握することができる。

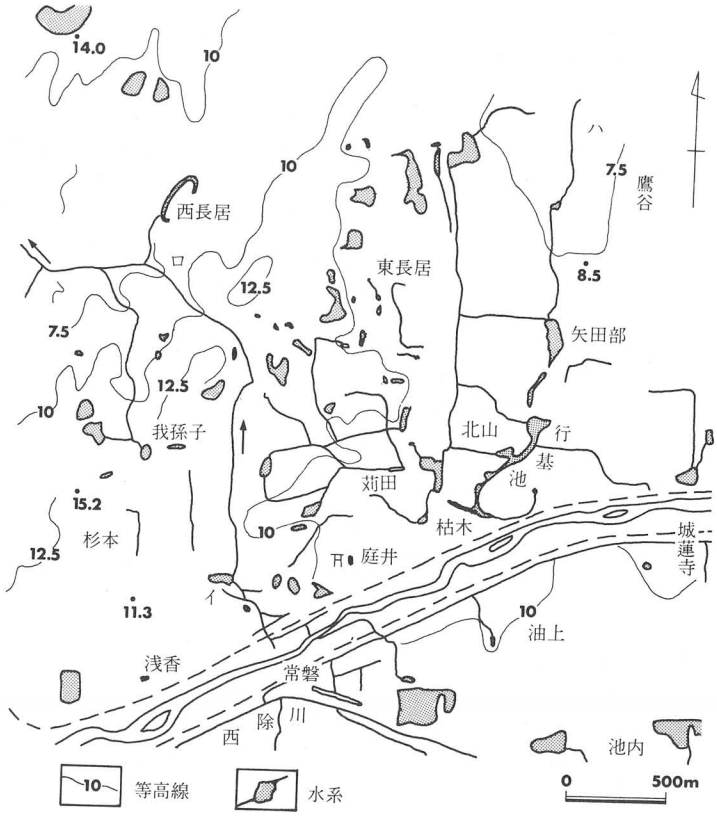
これをみると、大和川以南では、西方の浅香山をのぞくと、中位段丘から氾濫原にかけて、水田が広く展開していることがよくわかる。それに対し、大和川以北では、水田は溜池の下流部や水路ぞいにほぼ限られている。つぎに等高線をみると、上町台地の西縁を限る㋑―㋺ライ

ンにそって、急崖が存在することがよくわかる。そして大和川以南においては、標高13.75 mのところから北に向かう自然の谷が存在し、そこに数個の溜池がつくられている。そして浅香山以東においても、①から④に向かう規模のかなり大きい開析谷が存在する。

他方、大和川以北では、㋺の北東部付近から南ないし南南西に向かう自然の谷が存在する。注目すべきことは、南北方向をとる上町台地（中位段丘）を東西に切る深い谷が存在することである。それは、5 m、7.5 m、および9.25 mのコンターが、東に大きくくびれていることから知ることができる。さらに10 mの等高線は、南北に分離されている。この横谷は、自然の侵食作用の結果とは、とうてい考えられないのである。

つぎに水路についてみると、⑪から⑰の南を通って⑮に至るラインがはっきり示されており、この水路にそって水田が存在する。段丘面の開田は、この水路に負うところが大きいといえよう。

第231図は大正10年（1922）測量の2.5万分の1地形図から、等高線と水系のみをぬき出したものであるが、これは精度が高い。この地図では、西長居において、区画整理によって微地形が若干改変されているが、それ以外のところは、自然のままに近い景観をとどめている。明治初頭の地図に比べると、浅香の西に溜池が新しくつくられており、杉本付近では従来のものが消滅している。



第195図　大正初期の景観

等高線をみると、7.5 mおよび10 mのラインが、東南方向にくびれており、12.5 mのラインが南北に分離している様子がよくわかる。水路は㋑から鞍部を通って㋺に至り、そこから西に向かつているが、これは明治期のものと一致する。微地形の性格から判断すると、水は㋑から北東部の㋩の方向に流れるはずである。すなわち、中位段丘㋑から東の氾濫原に下り、旧天野川のつくる自然堤防の脇を北に向かうのが自然の姿とい

える。

ところで、このような自然の法則にさからった水路、すなわち「住吉堀割」の掘削を傍証する記録は、今のところ見つかっていないが、これも、当地域における溝渠の開さくおよび段丘面の開田の一環として行なわれたと考えることができる。すなわち、当地域では、東の川の水を北西に流して段丘面にあげるという一連の工事が行なわれた。石川の水は「感玖の大溝」によって段丘面に導かれた。この水は「針魚川」に至ることなく、北に向かったが、「針魚の大溝」より導かれた水は、段丘西方の河合に至り、「天野水」を合わせたのち、その水の一部をここから北西に流して、一坦「依網池」に注ぎ、さらにそこから「住吉堀割」を用いて住吉大社の前面にまで導かれたらしい。そこで、つぎに中継点となったと考えられる「依網池」をとりあげてみたい。

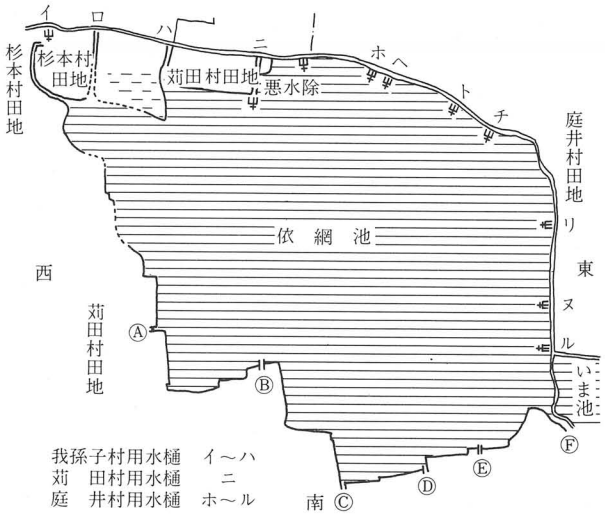
2〕　「依網池」の築造

「冬十日に、依網池を造る。十一月に、苅坂池、反折池を造る。」

（日本書紀　崇神天皇　62年）

狭山池と同様、「依網池」に関する記事も、『記』・『紀』にしばしばあらわれている。しかしながら、「依網池」のばあいは、池の景観を現在にとどめていないため、それの所在地や輪郭を知ることが、かなりむずかしい。

従来の研究をみると、大阪市住吉区庭井町から堺市常盤町に至る付近一帯を、「依網池」の範囲とする見解が大勢を占めている。しかし、それをこの地域の西方約1.5kmのところ、すなわち東浅香山町付近に比定する立場もある。



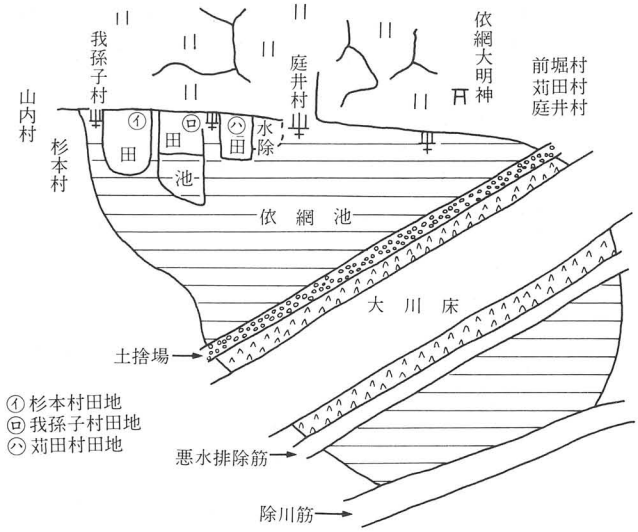
第196図　依網池古図

つぎに池の規模については、『河内志』に示された数値「広三百余畝、或日依網池」をそのまま踏襲するものが多いが、松原市史はこれを30haとしている。いずれにせよ、両者の間に、大きい開きがある。池の築造年代については、5世紀初頭とする点で、見解がほぼ一致しているように思われる。ここでは、古代における「依網池」の立地環境の考察を中心に、以上の諸点についても、検討を加えて

いきたい。

池の立地環境について　池の所在地を解明するために、3つの方法がまず考えられる。その一つは、池が存在したころに描かれた古地図に対する検討である。第226図をみると、15世紀中葉ころにおいて、「依網池」が北花田の北方において、庭井と我孫子を結ぶ線の南に存在することがよくわかる。そして池の北東角に「大依羅神社」がみえる。

第233図は大和川のつけ替えが行なわれたころ、すなわち宝永年間(1704～1711)に描かれたと推定される。これをみると「依網池」付近の様子がかなり詳細にわかる。まず、池の北東角に「依網大明神」が鎮座し、その西方は水田になっているらしい。そして東から苅田、庭井、我孫子、杉本、山内の各村がつづいている。新大和川は、「依網池」のほぼ中央を切って東北東から西南西に向かい、除川筋（現在の西除川）が、池の南を限っている。悪水排除筋、すなわち落堀川は、改修当時から、すでにつくられていたようである。

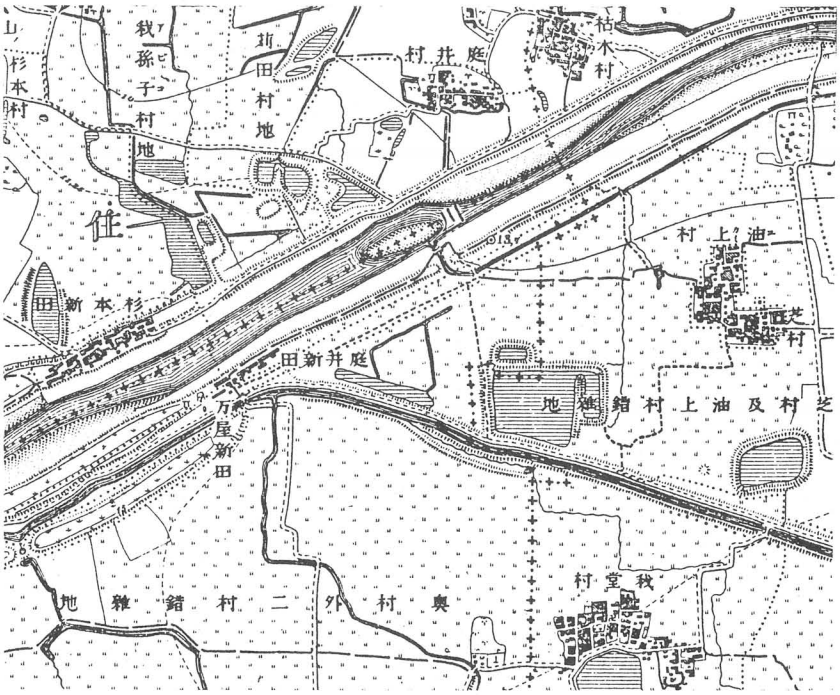


第197図　大和川池中貫通見取図

（推定　宝永年間1704～1711）

つぎは、現存する地名から、池のおおよその範囲を推定する方法である。第234図は明治20年測量の2万分の1地形図である。これには西除川が大和川に接近する地点付近に、「庭井新田」、「万屋新田」、「杉本新田」など、近世における新田開発を思わせる地名がみられる。これは、大和川がここを通過するに至った際、かつての池沼が排水され、耕地化されたところを指すといえる。第236図には若干の小字名を示したが、これをみると、ほぼ同じ場所に「依羅池開」、「見付畑池開」など、新しく造成した土地を思わせる地名が存在する。「末池」は池の名残りを思わせるし、「川向堤下」は、大和川のつけ替えにともなってつくられた西除川の新しいルートの右岸堤との関連が考えられる。

最後に考えられるのは、微地形と表層地質の性格から池の所在を推定する方法である。大和川つけ替えの際、この地区では大規模な地形改変たとえば、掘削、採土、盛土などが行なわれたため、当時の地形的な特色を把握することは、きわめて困難といえるが、概略的にみると、「依網池」が立地していたのは、中位段丘（上町台地）の東端にあたる。ここは南の狭山池付



第198図　明治期の地形図

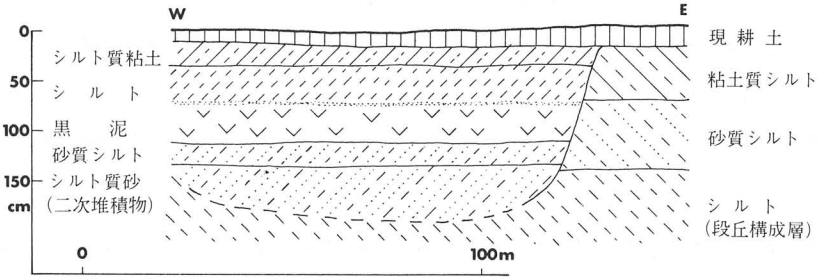
近から北の大阪城付近にのびる段丘面が緩くたわみ込んだ部分にあたるため、東につづく氾濫原との境界部には、ガケが存在しない。地表面は、南と西が若干高く、したがって北東に向かって緩く傾斜していたと考えてよい。そのことは、文明年間（1469～1487）に描かれたと伝えられる「依網池古池」の東および北に堤防がはっきり示されており、その上が道路として利用されていたらしいことからも裏づけられるわけである。（第232図参照）さらに地形図や空中写真からも、そのことが知られる。

表層地質の性格については、検土杖を用いて調査を行なった。（第236図参照）。当地域では、近年住宅地や学校建設にともなう盛土が激しいため、調査しうる地点が限定されたが、大和川以北では3カ所において可能であった。調査地点の構成層は、ほぼ同じ傾向を示していた。まず①で耕土35cmの下 145cmまでは、乳灰～灰褐色のシルト質粘土よりなっている。そして－145～－150cm付近は細砂を少量混入していた。

つぎに、②は「大依羅神社」の東約 200mの地点にあたる。ここでも耕土25cmの下方 150cmまでは、乳灰色のシルト質粘土層であり、きわめて硬い。いずれも大阪層群と考えられる。なお①の地点は、大和川の右岸堤から70～80mのところにあり、つけ替えの際、表層が若干移動された可能性がある。

大和川左岸の③地点では、耕土15cmの下は、－15～－75cmがあずき色をしたシルト質粘土な

いしシルトとなっている。この層は何回か攪乱された可能性がある。その下の −75〜−112cmは黒泥であり、−112〜−135cmは乳灰色をした軟かい砂質シルト、そしてその下はシルト質砂層となっている。これとほぼ同じ傾向は、③地点の西につづく試掘地点およびボーリング調査地点においても認められた。



第199図　依網池によって水没した開析谷（③地点）

以上に対し、④地点では、耕土22cmの下は、褐色をおびた灰色の粘土質シルト、黄褐色の砂混りシルト、緑青灰色のシルトと深さ 150cmまでつづいている。そして④地点の東のものも、ほぼ同じ傾向を示しているのである。このような、表層地質の場所的な差異は、この地域の地表面が、あまり平坦なものではなかったことを暗示させる。

表層地質の特性、および西除川以南に認められる微地形から、われわれはつぎのような解釈を行なうことができる。すなわち、池築造当時、この地域には南から北に向かう2本の開析谷があった。まず、東のルートは、地表景観および小字「末池」、および「内野」付近などで行なったボーリング調査からほぼ確認しうる。ただし、「末池」付近の西の限界付近は住宅地となっており、確定しえないため、南からの谷を延長させることにした。小字「依羅新開」付近の開析谷の位置は、最近まで残されていた「依羅池」を一つの目安とした。なお地元の古老の話しによると、この池の中心部の深さは3〜4 mに達していたらしいが、これは、開析谷の残存を暗示させるし、また湖面の人為的縮小によって、水深が増大したことも無視しえないのである。

一方、西方の開析谷は、西除川以南の段丘面において、連続性がより大きいものの池の延長部にあたり、17世紀中葉の古地図に示されている水路に該当する。小字「川辺」は開析谷の存在を暗示させるが、「依羅新開」付近の開析谷の位置は、東のばあいと同様、明治20年の地形図によっている。昭和36年ころまでは「升池」がわずかに残っていたが、この付近一帯も盛土がなされているため、検土杖による調査は全く不可能であった。

小字「見付畑池開」付近や、2つの開析谷の両サイドでは、土地が相対的に高かったため、常時滞水するわけではなく、水位の変動によって水没と陸化をくり返していたものと考えられ

る。①およびその東方において、耕土の直下に硬い大阪層群のシルト層が伏在することがそれを傍証する。なお③地点において、深さ112～150cmのところに堆積する砂質シルトおよびシルト質砂層は、開析谷を埋積する二次堆積物であり、その上層を占める厚さ35～40cmの黒泥は、まぎれもなく「依網池」の池沼堆積物といえる。

大和川左岸の常盤地区は、現在きわめて平坦な地表面を呈しているが、これは池築造後における若干の堆積、18世紀初頭における開墾、昭和36年以降における区画整理などによって、改変された結果である。

池の輪郭と水深　これまでの考察によって、「依網池」の立地した地理的環境は、ほぼ明らかとなった。つぎに、湖岸線について少し詳細に検討してみたい。

昭和36年撮影の1万分の1空中写真をみると、今池の北西角付近から北にのびるラインを境にして、東西で土地割の形態が著しく異なることがよくわかる。すなわち、このライン以東は、割合整然とした土地割が南北方向をとって走っている。それに対して、この線の西では、N15°Wに向かうより短かい土地割となっているのである。大和川以北における「依網池」の輪郭は、かなり加工されたかたちで残存する二つの池の配列状態、および「大依羅神社」と池との位置関係からほぼおさえることができる。

第232図には、「いま池」（今池）が明確に示されており、これが「依網池」の東限を知る大きな決め手となる。そして、これは空中写真より描きうるラインにほぼ一致する。また第233図に「依羅大明神」、「大川床（大和川）」、「除川筋（西除川）」が描かれているため、これらを合わせて判断することにより、池の東および北のラインはほぼ確定しうるのである(第233図参照)。

これに対し、西方は大和川の河川敷の占める割合が大きく、他の部分は操車場、住宅団地、道路敷などとなっているため、現景観から旧湖岸線を決定することは不可能といえる。したがって、第236図に示した西の湖岸線は、文明期および宝永期の絵図を参考にして、推定したものにすぎない。

ところで、第233図をみると西除川が「依網池」の南限を限るように示されているが、微地形の特徴をより詳細に検討すると、当時の湖岸線は、西除川の南にまで広がっていた可能性がつよい。わずかな比高を示すガケを辿ると、旧湖岸線は第236図に示したようになる。なお、湖岸線以南の開析谷は、今なお細流をとどめており、小字「川向堤下」付近には規模の小さい、かつての河口州らしいものが存在する。これは東の開析谷から運び込まれた土砂によるものらしく、第232図のE、F間にみられる突出部がそれにあたるといえよう。

このようにみてくると、「依網池」の満水時における輪郭は、第236図に示したものに近かったと考えられる。図上計算すると、その面積は60～61haにも及ぶが、築造当時の規模がこのよ

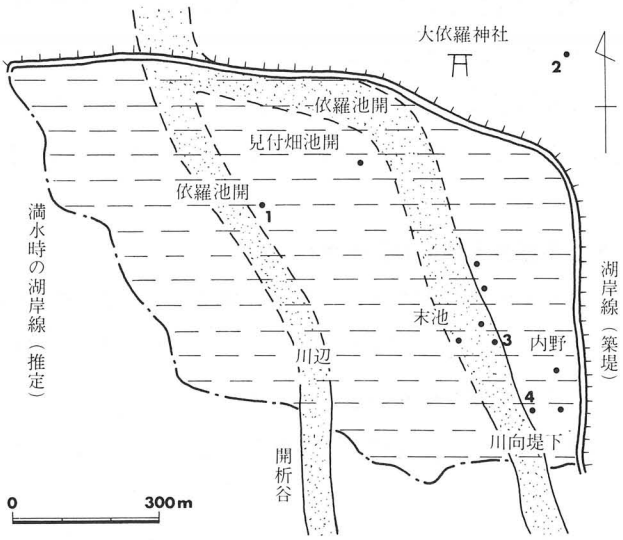
うな広いものであったとは断定しえない。また平坦地に位置するため、水位のわずかな変動によって、その面積は大きく変化したものと考えられる。さらに、池底にかなりの起伏があったため、池敷総面積約60ha、実際の水面はその半分前後の30haくらいであったと考えるべきかもわからない。いずれにせよ、「河内志」に記された 300畝は、あまりにも小さい値だといわざるをえない。

すでに述べたように、「依網池」は、北東に向かって緩く傾斜する段丘面に、低い堰堤を築いてつくられたものであるため、開析谷の部分をのぞくと、水深は小さいものであったはずである。ところで、池の水深を間接的に示す史料は2つあり、その一つはつぎの記事である。

「水渟る　依網池に　蓴繰り……」　　（日本書紀　応神天皇　13年）

これは、「依網池」において“ジュンサイ”を手繰っている情景を示す。沈水植物であるジュンサイ（沼縄）は、水深100～200cmの所に生育するのがふつうであるため、これにより、「依網池」築造間もない頃には、この程度の深さを示す部分が湖岸に広く存在したことが推定される。

「依網池古図」には、ヨシがほぼ全域に、また中央やや北よりのところにジュンサイもしくはスイレンが描かれている。挺水植物に属するヨシが生育するのは水深 100cm以下といわれているため、15世紀末ころには、東側の開析谷が左に屈曲する部分を除くほぼ全域にわたって、水深 100cm以下の所が広がっていたと考えてよい。狭山池とは異なり、この地では小さい分流（人工的水路も含む）からの水が注入されるに過ぎなかったため、池に運び込まれる土砂は少なく、したがって、南の湖岸線の一部や開析谷をのぞくと、池の埋積は、あまり進まなかったと考えてよい。水深は樋の開閉によって上下し、また水草の枯死と堆積によって池底は徐々に高められていったのである。前述した黒泥が凹地に集中して堆積し、①地点のような微高地にはそれがあまり認められなかったのは、以上のような理由による。



第200図　依網池復原図

（丸印は試掘およびボーリングを行なった地点、地名は小字名である。）

「依網池」築造のころ　　この池が築造されたころ、天野水（天

野川）は、第230図の⑥すなわち堀付近から⑧、⑭を通って、⑱に向かっていたらしい。もっとも当時は、現在みられるような顕著な自然堤防は、発達していなかった。そして段丘面には、①から④をへて⑨に向かうもの、②から⑤をへて⑪に向かうものなどの自然流があった。そして段丘面の起伏は、現在よりかなり大きかったものと考えられる。

ところで「依網池」が築造された目的については、狭山池に連なる潅漑用水を、一時的に貯えるところにあったとする説がある。このばあいは、『日本書紀』崇神天皇62年の記載内容を前提としたときにのみ可能な解釈である。狭山池の築造年代については、3世紀を下らないという説と6世紀以降とする考え方がある。仮りに後者の考え方をとるにしても、「依網池」の築造年代を5世紀初頭とする見解との間に矛盾を生ずることになる。

微地形の性格、したがって土木技術的にみるならば、一つの河川を完全に塞き止めてつくった狭山池のほうが、緩傾斜でしかも細流をわずかに流す段丘面につくられた「依網池」より、はるかに難工事であったといえる。「依網池」の築造を、狭山池に従属させて考える必要はないのである。

「依網池」は東の中位段丘から導いてきた「針魚の大溝」、「天野水」、および「天野水」以西の中位段丘面を流下する自然水を、一時的に貯わえることを目的として狭山池より早い時期に築造された。その時期は5世紀の中葉前後と考えられる。これは、河内、和泉地方のより高燥な段丘面の開発がはじまる時期にほぼ一致する。すなわち、「針魚の大溝」の掘削や、「依網池」の築造は、段丘の下流部（北よりの部分）を開拓するためになされた。そして、狭山池は上流部の潅漑の必要にせまられた6世紀末から7世紀初頭にかけ築造されたと解したい。いうまでもなく、氾濫原と中位段丘では、開発の難易度が大きく異なり、また中位段丘においても、北よりの下流部と南よりの上流部では、開発の緊急性と難易度にかなりの差があったはずである。そのことが両池の築造年代に150年あまりのズレを生じさせたと考えるしだいである。

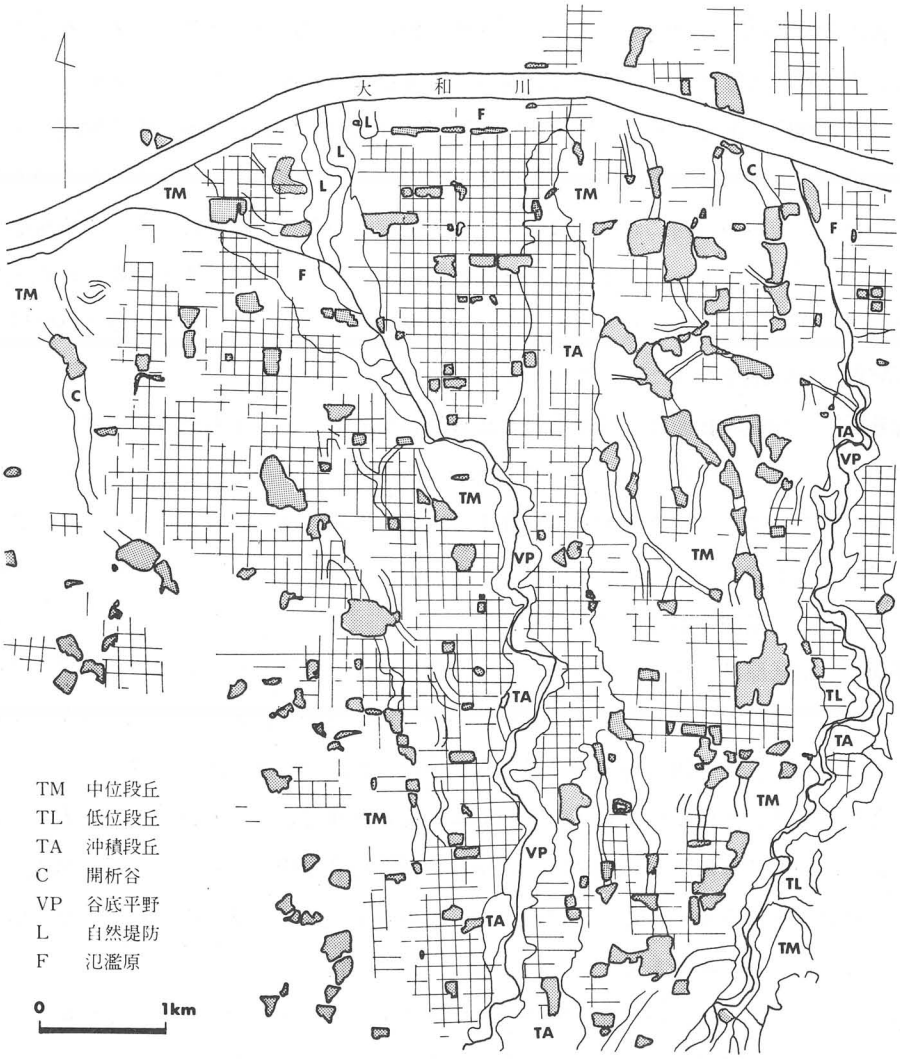
3〕条里型土地割の分布から

これまで、池溝の築造と段丘の開発について、若干の考察を行なってきた。つぎに、昭和36年撮影の1万分の1空中写真から、条里制に基づくと思われる画一的な土地割を検出し、古代における開発空間を推定してみたい。

地表景観として現存する条里型土地割の起源については、近年さまざまな研究分野から異論がとなえられている。たしかに、土地割そのものの性格から、それの施行年代を判断することはむずかしい。また段丘上のものであっても、一坪内の土地割は、経営方式や所有者の交替など人為的要因によって、変更されることが多いはずである。しかしながら、坪界そのものは、継続性がかなり大きかったものと考えてよい。ここでは、ほぼ1丁四方で土地割が整然と走り、

その内部も長地型、半折型、およびそれに近い形態を示すもののみを、ほぼ同時代に、統一的に施行された土地割と解し、起源そのものではなくて、それの分布傾向を微地形との関係から論じたいと思う。

地形の性格からみると、丘陵地および高位段丘にはこの種の土地割は全く存在しない。これは、当時このようなところでは開発が不可能であったからといえる。それに対し、中位段丘、低位段丘、および沖積段丘では、それがかなり多く見られる。沖積段丘の一部をのぞくと、この面では、少なくとも過去1500年間くらいの間に、激しい洪水にさらされることはなかったと考えてよい。したがって、これらの面において、この種の画一的な土地割が存在しない部分は、



第201図　条里型土地割の分布と微地形

最初から土地割が施行されなかったか、あるいはその後人間の働きによって消滅したかのいずれかと考えざるをえない。

これに対し、谷底平野および自然堤防の地形を示すところでは、たとえこの種の土地割が施行されたとしても、その後における河川の侵食または堆積作用によって、ほとんど消滅して了ったはずである。つぎに、氾濫原のばあいは、何回となく洪水に見舞われたと思われるが、東西両除川の規模が小さいため、破壊エネルギーはあまり激しいものではなかった。この点が、石川流域や大和川の現流路以北の地形環境、したがって土地割形態と大きく異なる。

中位段丘面　西除川以東の中位面では、この種の土地割は3つのグループに分かれて存在する。その一つは、黒山地区であり、阿弥ノ新池と笠田池を結ぶ線の西方にあたる。土地割の南限が、狭山池の北樋から中位面に導かれた水路の地点より下流部（北部）にある点は注目される。なお土地割が欠除するのは開析谷、溜池、集落などの立地するところである。

つぎは丹上地区である。ここでは大座間池周辺にひろがっており、東の樫山地区、すなわち下位段丘面にもみられる。最後は、「長尾街道」以北の大海池周辺に分布するものである。

以上に対し、西除川以西においては、条里型土地割がかなり広範囲に、そして不規則に分布している。こちらのばあいも、この種土地割の南限は、「西除げ」の水が最初に段丘上に導かれる北野田以北に位置する。もっとも、西除川左岸のばあいは、この地点以南は高位段丘および大阪層群の丘陵地をなすため、開発が不可能であったといえる。

沖積段丘面　沖積段丘面は、元来潅漑が比較的容易であり、しかも洪水の危険が少ないため、開田にもっとも適していたといえる。この面では西除川右岸の花田池付近から三宅にかけて、ほぼ全域にわたってこの種の土地割が存在する。松池以南にはみられないが、これは狭山池および大満池の破堤によって消滅した可能性もある。花田池以北のばあい、整然とした土地割がみられないのは、溜池の部分にほぼ限られている。

氾濫原面　氾濫原は、河合付近を頂点とし、北方にラッパ状をなしてひろがっている。この面にも条里型土地割が広く分布する。土地割がみられない所は、大和川左岸の城蓮寺付近、西除川の旧流路ぞい、西除川の現流路に近い高木付近、および今池以西である。

城蓮寺以東には、大和川つけ替えの際の築堤、排水路建設によって消滅したと考えられるところがある。現旧西除川ぞいの消滅は、河川の堆積と侵食作用による。そして今池以西において、この種の土地割が見られないのは、すでに述べたように、土地割施行時ここが「依網池」の池敷になっていたためである。

このようにみてくると、段丘面の開田に狭山池の果した役割の大きさがよくわかる。一方、段丘面において、この種土地割の統一的施行をさまたげたのは開析谷であり、ここは主として溜池の築造場所となった。また溜池の下流部では、破堤によって一坦施行された土地割が消滅

した可能性もある。低地のばあいは、施行後における洪水との関係が大きい意味をもつといえるのである。

われわれは、古代の開発を考えるばあい、開発可能空間の描出とそれぞれの地形面におけるその後の環境変化の程度について、周到な調査を行なう必要がある。従来、土壌特性から、開発地域の変化について論じられた例がいくつかあるが、土性は微地形や地下水に微妙に対応するものであり、それらの条件が自然のプロセスあるいは人為によって大きく変化すれば、土性も自ずから変るはずである。したがって、過去約2000年間にわたって、地形変化のあまり生じなかった地域の研究結果を、他の場所に普遍化することは、避けなければならないであろう。

4〕大和川つけ替えに関する問題

従来の大和川は、国府付近で石川を合わせたのち、北ないし北西方向に流れていた。北河内の水害防止と開墾を目的として“川違え”が行なわれたのは、宝永元年（1704）のことである。これによって、新しいルートに沿う地域では、さまざまな問題が生じた。ここでは、新しいルート決定の背景について若干の私見を述べるとともに、つけ替え後に生じた問題にもふれてみたいと思う。

ルートについて　新大和川は、船橋から西ないし西北西に流れて東瓜破に至り、ここから西に方向をかえて富田に達する。そして、今度は西南西に方向をかえて浅香山に達したのち、北西にかなり鋭くまがって大阪湾に流入している。

途中、船橋、大堀間および東瓜破、庭井間は、氾濫原を通過しており、前者のばあい標高は14～17m、後者は7～9mとなっている。これに対し、大堀、東瓜破間および庭井以西は中位段丘を切って流れる。このようにして、新しいルートは築堤のみの部分と掘り割りと築堤よりなる部分が交互になっており、前者は延べ8,000m、後者が約4,500mに達する。

地形条件のみからみたばあい、これは最良のルートということはできない。それは富田付近から下流部についていえることであるが、何故このようなルートをとらねばならなかったのであろうか、疑問の残るところである。地表面の傾斜や起伏の程度から考えたばあい、第230図の⑧付近から⑬の西を通って⑰付近に至り、ここから⑮に抜けるルートがもっとも自然である。すなわち⑧、⑰間は傾斜にあまり逆らうことなく、そして⑰以西には、小規模ながら「住吉堀割」が古くからつくられていたのである。

城蓮寺付近から「住吉堀割」に向かわなかった理由の一つとしては、つぎのようなことが考えられる。すなわち「住吉大社」門前をはじめ、このルートぞいには庭井、枯木、苅田、宇山など、古くからの集落があり、通過が不可能であったためである。大和川つけ替え直前には、流域にあたる各村から反対運動が生じている。したがって、新しい大和川は、反対のもっとも

少ないルートを選んだといえよう。つぎの理由は、浅香山④以西に、段丘を深く刻む規模の大きい開析谷がすでに存在していたことである。したがって、そこまでの間約 3,000 m を築堤、掘削すれば、水を大阪湾にたやすく落しえた。これは積極的な理由といえる。つまり、この区間では、自然の開析谷に連結させるため、約 3,000 m 間を、地形に逆行させたわけである。

つけ替えにともなう諸問題　このようにして、大和川は自然の傾斜に逆行させるかたちで新しいルートをとったため、上流側では、自然排水が不可能となった。そこで左岸に落堀川をつくったが、その様子はつぎの記事から容易に理解される。

「右川筋川下地高ニ御座候ニ付、毎度水湛、中略　宝永五子年村方申合、当村ヨリ浅香谷口まで廿七丁之間、平均六尺掘立申候ニ付、……」

（延享元年　城蓮寺村明細帳）

これは、つけ替え後40年たった時に書かれたものであるが、これによって、城蓮寺村付近の下流部において地盤がより高くなっていたため、しばしば湛水が生じたことがよくわかる。また“浅香谷口”ということばは、ここに先行する開析谷が存在していたことを暗示させる。なお排水条件をよくするため、深さ6尺（約 1.8 m）まで掘り下げられたとあるが、掘り下げの程度は西ほど大きかったはずである。

三宅村は、中位段丘上に立地するが、西方の氾濫原に展開する水田は、大和川つけ替え後しばしば浸水するようになった。

「領内西手者地下リニ而、新大和川出来以後ハ悪水指つかへ、洪水之節者水損場所も御座候、……」

（宝暦十年　三宅村明細帳）

この地域は、旧西除川のルートから離れており、従来は絶好の水田地帯をなしていたが、大和川つけ替えによる環境変化がこのようなかたちで災害を発生させるに至ったのである。

南北にのびる二つの中位段丘に挟まれ、しかも旧西除川のルートに近い城蓮寺村では、その被害がもっとも湛大であった。すなわち、西除川右岸のすべての水が、この一角に集中したわけである。

「当村ヨリ西東共地高ニて御座候故、小時之雨ニも御田地ハ不及申上、居宅迄水湛申候、……」

「大和川東西之堤ニせかれ、南表狭山西除川、東除川間凡壱万八九千石程之悪水落込申候ニ付、御田畑者勿論、居村へ洪水入、……」

（寛保3年　村方盛衰帳）

「右大水之節難儀仕候故、御代地之内へ居村引越住居仕候、……」

（寛保3年　村方盛衰帳）

断片的な記録ではあるが、われわれは、これらから城蓮寺村における水害が水田に限らず住宅にまで及び、移転さえも余儀なくされた事実を、感じとることができる。このようにして、微地形の特色から判断しうる地域の実態は、古い記録によって裏づけることが可能である。

3．今池遺跡地区の地形環境

当地域は、北を大和川の左岸堤、東を旧西除川ぞいの微高地、そして南を現西除川によって限られた、東を底辺とする二等辺三角形のほぼ中央部に位置する。標高は 9.5～11 m であり、西ないし西北に向かって緩く傾斜している。条里型土地割が、割合整然と残っており、地域のすぐ南を長尾街道が東西走する。

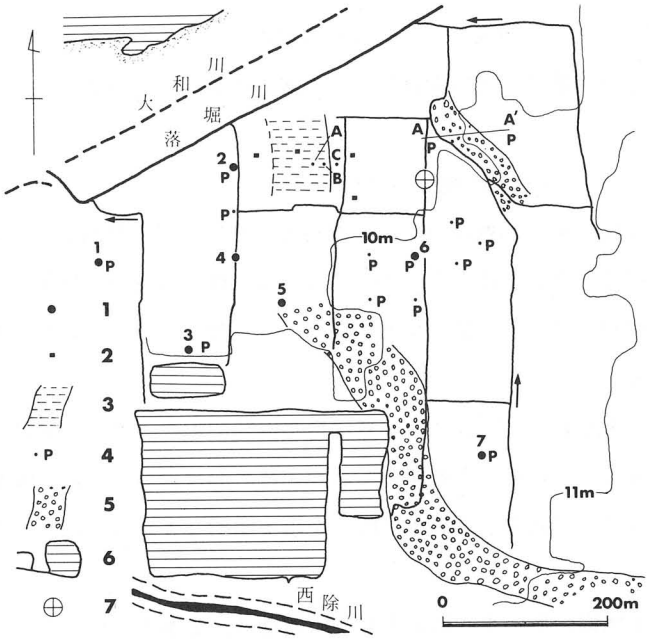
微地形　第217図において、油上集落が立地する部分は自然堤防であり、西方の低地より50～100cm 高くなっている。中央部には氾濫原が展開しており、この面は西方において漸次段丘に移行する。すでに述べたように、氾濫原と西の中位段丘を限る明瞭なガケは認められないが、境界は今池付近に位置する。

地表景観としての微地形や土地割の形状から推定される旧河道は、2 本ある。その一つは、旧西除川と現西除川の分岐点付近からこの地点までやってきて、今池の北東角をかすめて北西に向かうものである。つぎは油上の北西部において、長さ 150 m くらいの範囲にのびる規模の小さいものである。10 m の等高線をみるとわかるように、これは周辺部より若干低くなっており、河跡の西端に細流をとどめている。

表層地質　この地域では、今池の東端に接する南の旧河道付近を境にして、それ以東では、旧河道の部分をのぞくと、表層は全般的に細粒物質によって構成されている。それに対し、今池の北側には、粗い物質がきわめて不規則に堆積しているのである。

たとえば、今池東方の天美西小学校の地点（第238図の⑦）では、深さ 350cm付近までは暗黄灰～暗青灰色の砂混りシルト、暗褐色の有機質土、暗青灰色のシルト混り細砂となっている。つぎに 2 つの旧河道のほぼ中間に位置する⑥地点では、地表から深さ 150cmまでは暗褐色の砂混り粘土、－150～260cmは暗青灰色の粘土混り砂、そしてその下部に厚さ 130cmの暗黒灰色の腐植土が堆積している。図中にＰを付したところでは、いずれも同じような堆積相を示し、長期間にわたって、穏やかな環境が継続したことを物語る。

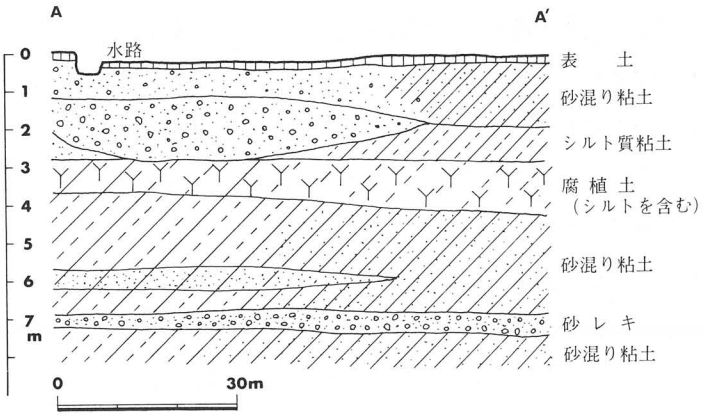
以上に対し、今池北西方の①では、耕土30cm、暗茶褐色の砂質粘土80cmの下は、青灰色の砂レキ層である。中間的な性格を示すのが④、⑤である。すなわち④地点では、表層の細粒物質の厚さが 340cmで、その下は砂レキ層となっている。旧河道の延長部に位置する⑤においては、厚さ20cmを示す耕土の下は、砂層が深さ 250cmまでつづき、その下は淡褐色ないし青灰色の砂レキ層となっている。ところが④の北約 100 m のところに位置する②の地点では、深さ 280cm



第202図　今池遺跡付近の地理的環境

まで粘土層が堆積する。この粘土層は上方が暗褐色、下方が青灰色をなし、その下は厚さ約70cmの腐植土となっている。

以上のような事実から、段丘層と東の沖積層との境界線が、④地点付近を中心にして北北西—南南東方向に走っていることが、ほぼ明らかになった。そして、このライン以東では、深さ250～350cm付近に、ピート層が広域にわたって展開することも知られるに至った。なおこの層の東限は確認しえなかったが、北は大和川の河床をこえて右岸の阪南高校付近にまで達している。



第203図　旧河道の地層断面図（A—A′）　位置は第238図参照

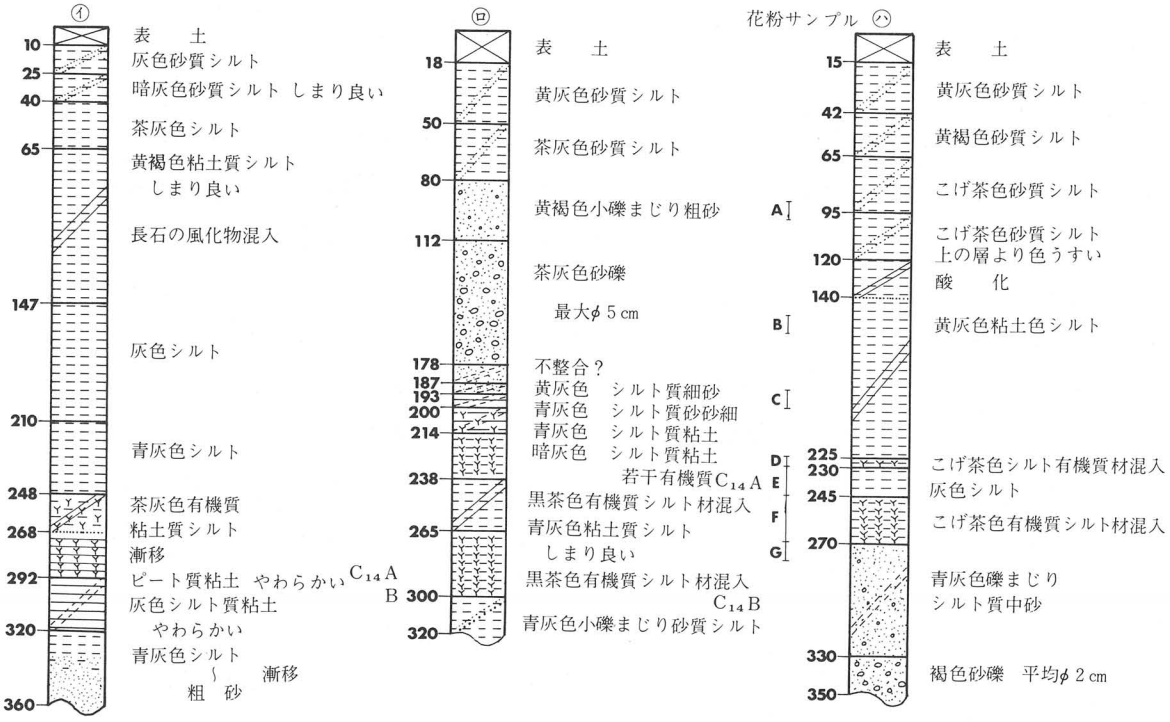
旧河道の堆積物　まずはじめに、A—A′断面について述べてみたい。旧河床の東方、すなわちA′付近には、穏やかな地形環境のもとに堆積したと解される細粒物質が深さ7m付近まで続い

ている。すなわち、耕土の下深さ 180cmまでは、黄褐色の砂混り粘土層であり、若干のシルトを混入している。そしてその下には、さらに粒径の小さい暗青灰色をしたシルト質粘土が、厚さ90cmにわたって堆積しているのである。これらは、自然堤防から後背湿地にうつる地点のような静水域に堆積した物質といえるであろう。

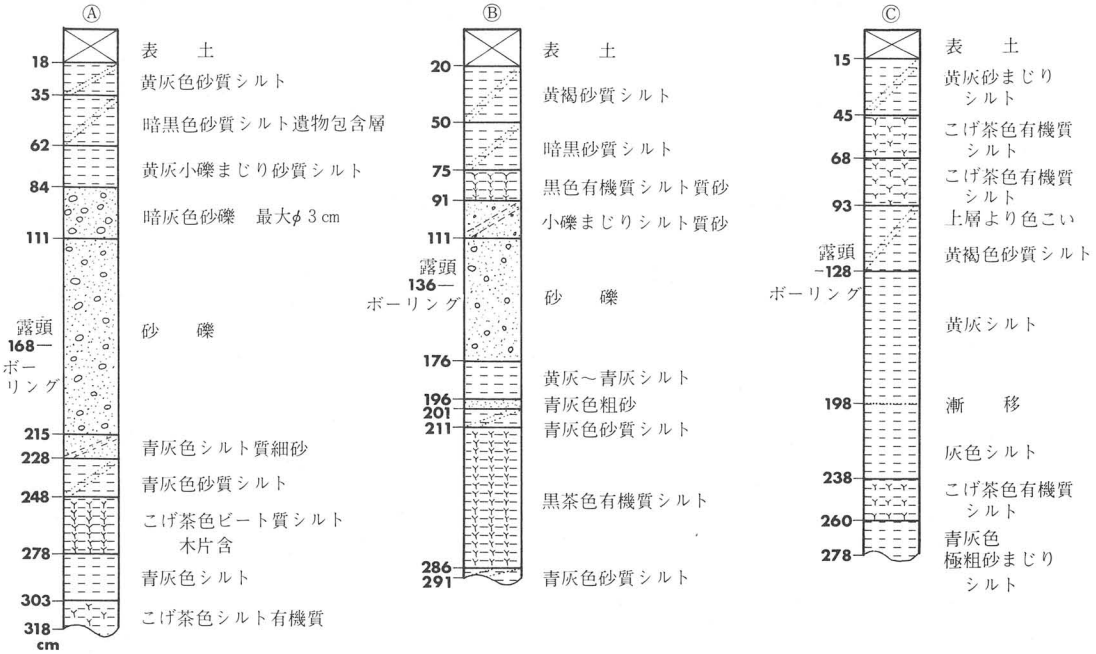
これに対し、西方の水路に近いところでは、粗い河床堆積物が、かなり厚く堆積している。すなわち、耕土20cmの下に、50～70cmにわたって黄褐色のレキ混り砂が堆積し、その下方は深さ 240cmまで、黄灰色の砂レキ層となっている。ここでは、洪水の際侵食されたためか、下部のピート層の厚さは100～110cmと若干薄い。これは旧西除川の一つの分流をなしていたと考えられるが、分流としての機能を失なってからかなりの年数が経っているためか、地表景観からは延長 150 m あまりの区間しか、それを検出しえない。

つぎは、広範囲にわたって発掘調査を行なった結果、検出しえた埋没河跡である(第238図参照)。河跡が埋没する地点には、長地型の土地割が南北方向に整然と走っており、地表景観からそれを検出することは、全く不可能である。

われわれは、深さ 4 m前後のピットを数多く掘ったが、そのうち㋑、㋺、㋩の 3 点地点については、第238図に示したところである。これによると、もっとも西方の㋑地点では、約10cmの



第204図 今池地区の地質柱状図 (ピットの観察結果より)



第205図　今池地区の地質柱状図

（露頭観察と検土杖による。場所は㋺㋩の中間）

表土の下は深さ約 250cmまでがシルト層となっている。また㋩の地点においても、深さ 245cmまでは若干砂を混入したシルト層である。いずれも、穏やかな環境下における堆積物といえる。

以上に対して、㋺の地点では深さ80cmから 180cmにかけて、黄褐色の小レキ混り粗砂および茶灰色の砂レキ層が堆積する。そして深さ178～187cmのところで不整合面と考えられる層相を発見した。したがって、ここでは、シルト層が静かに堆積する環境下において、突然洪水が到来し、一定の侵食を行なうと同時に、粗い物質を一度に堆積させたものと考えられる。

この埋没河跡の東限をおさえるため、ピットの露頭観察と検土杖による試錐を行なった。その結果、㋺にもっとも近いⒶ地点では、砂レキ層が －80～－215cmまで厚さ 130cmにわたって堆積していた。これは㋺の地点よりかなり厚い。つぎにその東のⒷ地点では、砂レキ層の厚さが80cm程度となり、Ⓒ地点では、それが全く消滅していた。以上の事実から、埋没河跡の東の限界はⒷ、Ⓒ両地点の間、そして西の限界は㋑、㋺両地点の間に位置することが明らかとなった。仮りに西の限界線を㋑、㋺のほぼ中間にひくと、川幅は約70ｍとなるが、厳密には45～90ｍの間のいずれかにあたるわけである。なお河床の最低部は －220cm、洪水堆積物のトップは－80～－90cmということができる。

ところで、この砂レキ堆が、細長く続く河床堆積物なのか、和泉国槙尾川右岸などにおいて

検出しえたシュートバーのように紡錘形をなすものなのか、今のところはっきりしない。層相から判断するかぎり、洪水の方向は N10° W前後である。なお、これは地表景観から検出しうる南の旧河道とは、連続しないものと解される。何故ならば、両者の形成年代に大きい開きがあると考えられるからである。この砂レキ層の下部は、遺物を含まない青灰色のシルト層となっているため、洪水発生の上限を知ることはできないが、上部に存在する遺物から判断すると、洪水発生の下限は5～7世紀と考えられ、南部のものよりかなり古い。

埋没遺構　ここでは、従来の考古学的研究成果のうち、過去の地形環境推定に、手掛りが与えられるもののみをとりあげ、若干の考察を行なってみたい。

イ）掘立柱建物　これは、第238図の④の西方において集中してみられる。ここでは耕土・床土の下に暗灰ないし黒褐色をした遺物包含層があり、その下は黄灰色シルトの地山となっている。6世紀中葉の須恵器を大量に含む包含層の厚さは20～30cmであり、建物は、深さ60cm前後を示す地山の上面で検出された。

ここは中位段丘の東の端にあたり、居住環境として比較的秀れていたものと思われるが、このほかに、段丘から東の氾濫原に移る②付近からも、わずかに掘立柱建物が検出されている。そして遺物包含層の厚さは、西の段丘部より、若干大きい。両遺構から判断すると、④地点西方の段丘面を中心に、居住が継続的に行なわれており、その時期は5世紀から6世紀にかけてと思われる。

ロ）溝・水路　掘立柱建物の集中するⒶ地点すなわち中位段丘面において、N26° E方向をとる溝が、断続的に40m近くのびている。これはこの地域の最大傾斜面に従っており、幅は100cm前後、深さは10～20cmを示す。住居群のなかにおいて、排水の機能を果していたものと思われる。なお、この水路の南端において丁字型で接し、ほぼ東西方向に流れるもう1本の水路がある。これは規模、連続性ともに大きいが、やはり排水路として用いられていたものであろう。なおこの地区では、ほかに断片的なものが、8か所で検出されている。

ハ）井戸・井戸状遺構・溜池　Ⓐ地点において、井戸状の遺構が5基検出されている。その規模は直径が100～300cm、深さは20～40cmとなっている。深さの違いは地層の地域的差異を反映するものであり、いずれも豊かな湧水がみられる砂層に達している。ほとんどの井戸は須恵器、土師器などを混入する暗褐色のシルト層によって埋積されており、遺物の年代から判断すると、井戸が掘削または使用された時期は6世紀前葉から中葉と解される。ほぼ同じ時代か、若干早いころに掘削されたと考えられる井戸は、②地点付近においても数基検出されている。

以上に対し、ⒷおよびⒸの地点では、近世に築造された井戸が検出されている。前者すなわち段丘と氾濫原の境界部にあたる地点の井戸は、直径が130～150cm、深さ350～500cmとかなり規模が大きい。ここでも湧水は多い。つぎに氾濫原に位置するⒸ地点では、深さ500～700cmま

で掘り下げられており、地下水は 400cm前後の深さのところから湧き出していた。これらはいずれも灌漑を目的として掘られたものと思われる。

二）条里遺構　検出された遺構は、かなりの数にのぼるが、ここではもっとも信頼性の大きい1例のみをとりあげてみたい(第238図参照)。これは⑥の地点を通って南北にのびるラインに沿うもので、坪ざかいをなしている。現在この付近は盛土されているが、昭和36年の空中写真をみると、南北方向をとる道路の東側に平行して走る水路もみられる。発掘結果によると、幅 200cmを示す現在の道路の下に、幅100～110cm、高さ約20cmの畦畔と解される微凸地が存在する。これは同時代において、同じ性質をもつ周辺の土壌を盛り上げてつくったものであるためか、色調・粒度組成などに大差はないが、埋没畦畔と解される微凸地の輪郭は確認しうる。畦畔を構成するものは灰褐色のシルト層であり、これは若干明るい色調を示す小レキおよび、粘土を混入するシルト層によって約60cmカバーされている。ここでは、かつての畦畔が埋没されたのち、再度同じ地点に土地割が再現した事実を知ることができるが、遺物からその正確な年代をおさえることは不可能であった。

地形環境の変化　この地域における洪水堆積物、および掘立柱建物、溝などの埋没時期を検討した結果、この地域において、6世紀前半ころ地形環境に大きい変化が生じた可能性が濃くなった。当時旧天野川の主流は、堀付近からまっすぐ北に向っていたと思われる。このころ発生した洪水によって、分流の一つが高木付近で西に溢れ、今池の北東角付近をかすめて北に流れるようになったと考えられる。これによって付近一帯に多量のシルトを堆積させたが、それだけでなく、中付近から我堂付近、金田付近から浅香山に至る中位段丘上の開析谷ぞいにも洪水が発生し、傾斜の緩くなる今池付近に多くの土砂を堆積させたものと考えられる。このような大洪水が発生した原因としては、気象条件のほかに、上流部において5世紀中葉から開始された須恵器生産、および5世紀後半からはじまったと考えられる中位段丘面での開田があげられる。

5世紀ころまでは、この地域を北北西から南南東に向かう東おちの低いガケあり、そのラインの西側で居住が行なわれ、東側では地表水の不足を補なうために井戸をつくって農耕が営なまれていたと考えられる。ところが、6世紀に発生した大洪水によって住居、溝、井戸などが一瞬にして埋没すると共に、ガケもほとんど消滅して了ったものと思われる。

この地域の起伏を消滅させたもう一つの大きい営力は、条里制にもとずく土地の再編成である。これによってガケは完全になくされ、微地形にしたがっていた従来の水路や道路も、整然としたものに改められたのである。中世から近世にかけても旱抜時には、井戸が新しく掘られ、また洪水によってそれが埋没した。そして18世紀初頭における大和川つけ替え以降は、新西除川の右への破堤による浸水、土砂による埋積、および落堀川の排水不良による滞水が頻発する

ようになったと考えられる。

本稿では、広域にわたって発掘が行なわれた今池遺跡を中心とし、西除川下流域における古代のさまざまな歴史地理的問題について検討を加えてきた。明らかになしえた事項を要約すると以下の通りになる。

① 当地域は、9つの自然地形型と3つの人為地形型に分けることができる。もっとも広域に展開するのは中位段丘であり、それを縁どるようにして低位段丘と沖積段丘が存在する。低地の微地形は、上流側の谷底平野と下流域に広がる氾濫原とに大きく分けられ、氾濫原には自然堤防が旧河道にそって、あるいは孤立して存在する。河跡のうち段丘上に分布する開析谷は、形成の歴史がより古く、氾濫原にみられるものはそれが新しい。人為地形としては溜池、溝渠、古墳などがあげられ、溜池はほぼ全域、溝渠と古墳は西除川右岸の中位段丘面にみられる。

② 表層地質は、きわめて多様性に富む。西除川右岸の中位段丘のばあい、砂レキ層よりはシルトの占める割合がたかく、開析谷を埋積する軟弱で、厚いシルト層もみられる。西除川ぞいの氾濫原では、沖積層の厚さは4～5mと考えられる。

③ 中位段丘上の溜池は、平坦部に立地するものと開析谷を堰き止めたものに大きくわかれる。前者は一般に規模が大きく、方形をなすが、後者の多くは最大傾斜線に沿って細長くのびている。そして氾濫原に位置するものは、逆に東西に長くのびるものが多く、大部分は方形をなしている。

④ 水路は、自然の微起伏にしたがったものと条里制にもとずき、東西南北に整然と走るものとに分かれるが、両者は複雑に交錯している。

⑤ 地形の面から潅漑の難易度についてみると、中位および低位段丘は河川からの自然潅漑が困難であり、沖積段丘は簡単な井堰をつくることによって、それが可能であった。そして自然潅漑が容易であったのは、氾濫原と谷底平野である。

⑥ 『住吉大社神代記』にみられる「針魚川」は、東除川左岸の西川付近から中位段丘面を横切って西方の寺池付近に至る人工水路にあたると考えられる。これは微地形、表層地質、小字名などから裏づけることができる。

⑦ 「依網池」は、狭山池の西から大阪城付近にまでのびる中位段丘のほぼ中央部の東端に、潅漑を主目的としてつくられた。当時ここには南から北にのびる2本の開析谷があり、水深は一定しなかった。ただし、『日本書紀』の記載内容、16世紀中葉の古地図などから判断すると、平均水深は2m以下であったものと思われる。

⑧ 段丘開発の歴史からみると、「依網池」が築造されたのは、5世紀中葉ころであり、狭山池はそれより約150年おくれて、6世紀末から7世紀の初頭ころにつくられたものと考えられ

る。

⑨　条里型土地割は、西除川左岸の中位段丘面、沖積段丘および氾濫原に分布するが、これは歴史時代における地形環境の地域的特色をよく反映している。

⑩　地形条件からみたばあい、大和川の新しいルートは適当なものとはいえない。このような不自然なコースが選ばれた理由としては、城蓮寺付近から苅田を経て住吉に至る間に、古くからの集落が多く存在していたため、そこを通過させるのが不可能であったことおよび浅香山付近には、南東から北西に向かう規模のかなり大きい開析谷がすでに存在していたため、これに連絡すれば新しい河川の掘削範囲は、若干少なくて済んだことなどがあげられる。

⑪　新しい大和川のルートが、最大傾斜線に直交ないし、わずかに逆行するかたちでつくられたため、つけ替え後は上流側の城蓮寺を中心に、内水災害が頻発するようになり、激しい時には家屋のたちのきさえも余儀なくされた。

⑫　今池地区では、5～6世紀ころ西側の段丘上に掘立柱建物をつくって、居住が行なわれた。東の低地では地表水のほかに井戸を掘って地下水も利用しながら農耕が営なまれていた。ところが6世紀の前半ころ、この付近に大洪水が発生し、建物のほかに水路、井戸いずれも一瞬にして放棄されるに至った。付近一帯には土砂が堆積し、中位段丘と氾濫原を限る段丘崖はほとんど消滅してしまったのである。

⑬　このような洪水を発生させた主要因としては、上流部の丘陵地帯における須恵器の生産、段丘面における大規模な土地開発などをあげることができる。

〔付　記〕

本研究をすすめるにあたり、堺市教育委員会の森村健一技師および大依羅神社宮司の桜谷喜久麿氏にいろいろとご教示いただいた。また現地調査の際には立命館大学の原秀禎（助手）、高橋学（大学院生）、青木哲哉、大竹陽二、高嶋新治、高田正敏、外山秀一、野々村拓也、前葉和子（以上学部学生）の諸君の協力を得た。記して感謝の意を表したい。(1980.2)

〔補　足〕

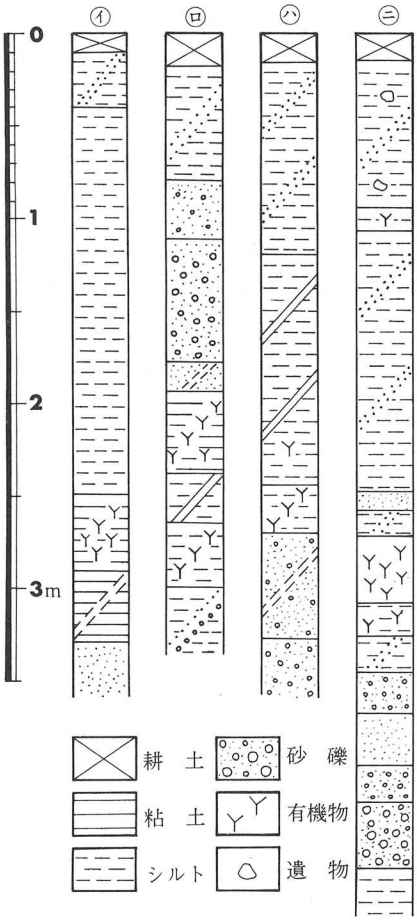
「日本アイソトープ協会」に依頼してあった年代測定結果が出たので、若干補足しておきたい。われわれは、松原市天美西七丁目（考古学関係者による発掘現場）において、より深いピットを掘り、地下約 300cmのところに堆積する泥炭層から資料を採取した。得られた ^{14}C年代は、37,800ＹＢ．Ｐ．以上となっている。（Ｎ－3812、3813）この値から、以下のような推定が可能である。

① この地層は、ウルム氷期以前の静水域に堆積した。

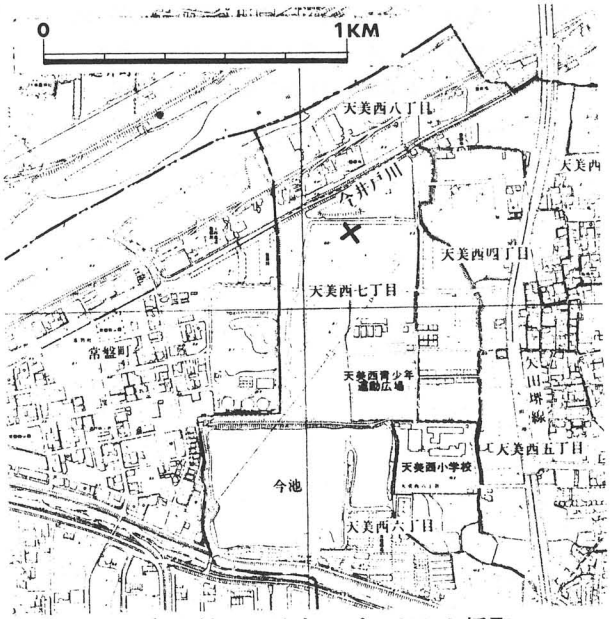
② ここはその後、砂礫層（段丘層）によって一担カバーされたのち、河川の侵食をうけた。

③ 泥炭層の上部に堆積しているのは、より新しい時代の河成堆積物である。

やや古い年代を示すものであるが、この数値は、今後のこの地域における地理学や考古学の研究に、貴重な指標を与えるものと考えられる。（昭和55年９月）



サンプリングは㋥の深さ270～310cmのところ(ピート層)で行った。



×印を付した地点のピットから採取

参考文献

① 『住吉大社神代記』

② 文　史衛　朝鮮三国の移民集団による畿内地方の開拓について　歴史学研究374、1971　PP. 15—32

③ 亀田隆之　日本古代用水史の研究　吉川弘文館　1973

④ 「古事記祝詞」　日本古典文学大系1　1974

⑤ 「日本書紀」上　日本古典文学大系67　1974

⑥ 松原市役所　松原市史　第四巻　1974

⑦ 「日本書記」下　日本古典文学大系68　1975
⑧ 松原市役所　松原年代記（近世）　1975
⑨ 丸山竜平　河内の開発における二つの画期　—溝渠の築造と県・屯倉の成立をめぐって—　日本史論叢5　1975　PP. 41—76
⑩ 古代を考える会　丹比道の検討　古代を考える8　1976
⑪ 山尾幸久　日本国家の形成　岩波書店　1977
⑫ 大阪府　大阪府史　第1巻　1978
⑬ 野上丈助　河内における池溝開発についての覚書　羽曳野史3　1978　PP. 1—15
⑭ 大和川・今池遺跡調査会　大和川・今池遺跡発掘資料　その1（1978）　その2（1979）　その3（1979）　その4（1979）
⑮ 大滝末男　水草の観察と研究　ニユー・サイエンス社　1978
⑯ 松原市　松原市史　第三巻　1978
⑰ 大和川・今池遺跡調査会　大和川・今池遺跡　—第1地区発掘調査報告書—　1979
⑱ 原　秀禎　古代の「古市大溝」に関する地理学的研究　人文地理31—1　1979　PP. 28—45
⑲ 日下雅義、岡　義記、豊田兼典、原秀禎、高橋　学　大園遺跡東助松地区の完新世後期における古環境の復原　「大園遺跡東助松地区発掘調査報告書」　1979
⑳ 狭山池および東西両除川については、近刊予定の拙著「歴史時代の地形環境」（古今書院）を参照されたい。

2．松原市域における条里

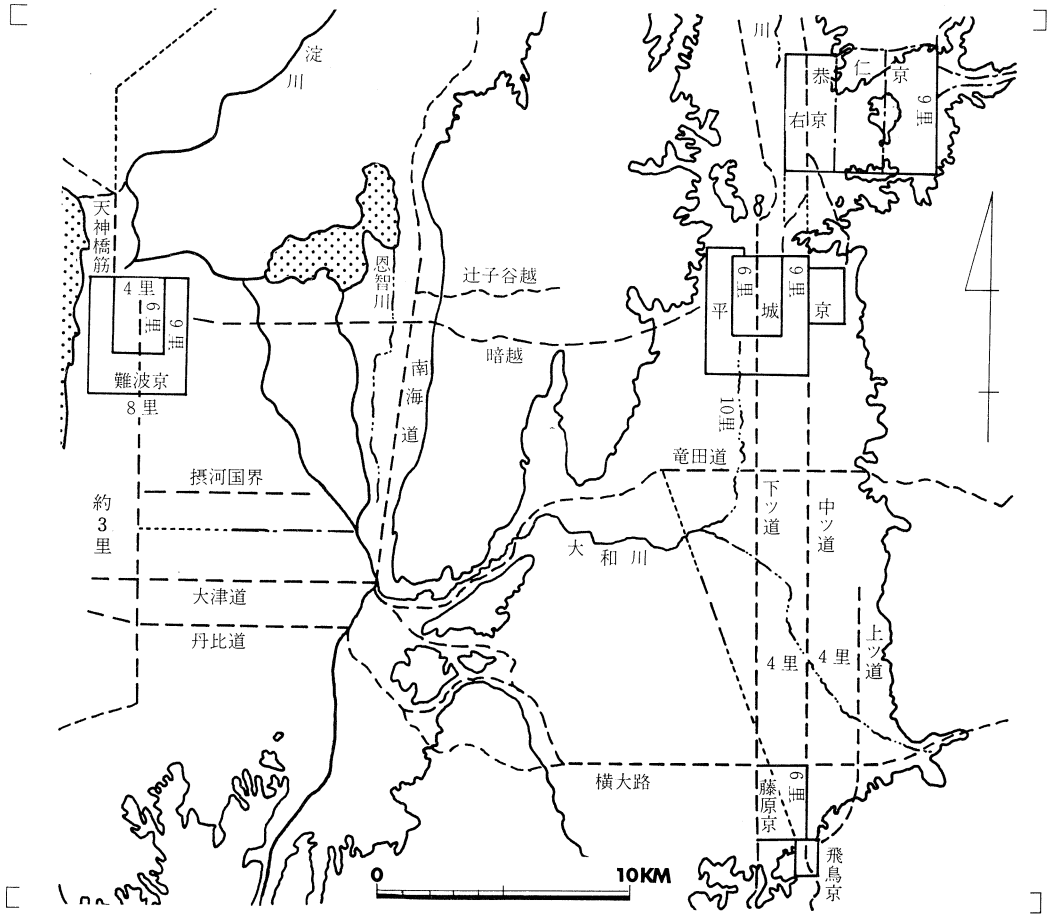
出　水　睦　巳

1．松原市と条里

この地域の条里制の研究は、古くは天坊幸彦氏のものがあるが、戦後は由井喜太郎氏の「河内国条里の研究」（ヒストリア13号）があり、特に大越勝秋氏の『河内国条里関係史料集』が昭和28年に、その補遺が翌年に出され昭和33年には補遺続が出されている。の「河内国における条里遺制補遺」（『社会科研究』九号～十三号）などの研究があり、昭和35年の「大阪府下（摂・河・泉）の条里制坪名帳」は大越勝秋氏の条里関係史料や小字の中の坪名の集成などを行なったもので、なかでも基礎的な面での資料作りは大きな成果である。昭和40年代に入って桑原公徳氏の河内国内に於ける条里遺構の研究は高く評価されている。最近では足利健亮氏の摂河泉の古道計画の研究の中で、松原市内の条里の研究がおしすすめられているのが注目される。また古代を考える会の「丹比道の検討」の中でも発表されている。また谷岡武雄氏は大阪府教育委員会より出された「挟山遺跡発掘調査概要」の報告書の中で丹南郡の条里を複原されている。同様に大津道以南の丹南郡では丹比道を境として、その北と南とで坪並のタイプが異なっていると指摘した服部昌之氏の研究がある。幸い桑原公徳・足利健亮の両氏は松原市史編さん委員であるので、松原市域の条里研究の成果が特に期待される。

2．松原市の小字図

松原市の条里の状況をみるのであるが、条里制が古代のものであるので、市域を旧郡ごとに分けて史料にみえる条里坪付、残存する小字坪名から天平十四年の班田図のように、地図上に条里区画を復原するのである。残存する坪名から里（さと）（六町四方）内の坪（一町四方）の数え方を復原し、さらには古代、中世の条里関係の文書にあらわれる条・里地名と現在の地名などから条および里の呼称法を復原する必要があった。この基礎資料である小字名調査は、まだ市史編さん委員だった昭和43年ごろ、足利氏の進めで松原市内に於ける条里研究の基礎作業として市域内に残る小字坪名を確実に地図上に転記することから初めた。まず最初に農業団体の土地台帳や農業委員会や市の地籍図から小字名・地番をひろい出した。昭和43年作製の縮尺三千分の一の都市計画地図上に地番を写し、小字名と境界を示して松原市内全域の小字図を作成した。これをさらに昭和43年作製の縮尺一万分の一の一枚地図上に転写した。また旧村ごとの江戸時



第206図　古代における主要道路図

代の絵図に小字名のあるところはそれにしたがって、まとめあげたものが松原市史資料集第4号『松原における小字名と小字図』である。

この中から条里に関係あると思われる小字名を旧郡の村ごとにひろい出してみると下のごとくである。

松原市の条里制関係坪名

旧丹北郡

我堂村　一ノ長、一ノ長水先

池内村　天ノ坪、

堀　村　一ノ坪、

油上村　五ノ坪、上五ノ坪、五ノ坪田、

芝　　村　　五ノ坪、上五ノ坪、五ノ坪田、

三 宅 村　　藤條、西藤條、一里山、

一津屋村　　中ノ坪、壱丁、壱丁田、

小 川 村　　四ノ坪、五ノ坪、五之坪、

若 林 村　　一ノ坪、市ノ坪、三ノ坪、九ノ坪、十ノ坪、

高 見 村　　八ノ坪、

新 堂 村　　七ノ坪、七之坪、

東 代 村　　十三、

向 井 村　　八ノ坪、八之坪、九ノ坪、

旧八上郡

河 合 村　　八ノ坪、九ノ坪、

旧丹南郡

丹 南 村　　坪落、

3．松原市の条里

松原市の条里制坪名の確認によって、条里の坪付の形式や条里の方向の二点を究明することが出来る。特に向井村の八ノ坪と九ノ坪の連続の並び方と、その周辺の堀村の一ノ坪と油上・芝村の五ノ坪の位置から坪付が千鳥式で、西南隅の一ノ坪を基点として東方に千鳥式に数え、西北隅の角で36坪で終わるから、条里の方向は条は東へ里は北へのびていることがわかる。これは東の東除川流域の若林村にもおよび、川北の九ノ坪と十ノ坪の並び方と一ノ坪（市ノ坪）の位置から向井村付近の坪付の形式と同じであることがわかる。

しかし河合村の八ノ坪と九ノ坪の並び方と新堂村の七ノ坪の位置から坪付の形式は明らかに向井村や若林村の坪付の形式と異なった東南隅を第1坪の基点とし、北方に千鳥式に数えて西南隅の36坪で終わる形式である。また東代村の十三ノ坪と高見村の八ノ坪の並び方は一里に36坪のところ6坪足らずの30坪のために、やや変則的な坪付の形式となっているが基本的には河合村の坪付形式と同じである。これはむしろその北側に一直線の長尾街道が通っているためこのように制約を受けているためである。このように松原市の中央部を通る長尾街道（大津道）を堺界線として、異なった二つの坪付の並び方によって二つの条里があることが確認出来るのである。

丹北郡の条里史料として有名な延久4年（1072）の石清水文書の太政官符がある。

壱処　字矢田庄　丹北郡

第207図　松原市北部条里制

墾田陸町捌段

壱条矢田部拾参坪伍段　篠原里参拾参坪陸段　北参条駅家里拾玖坪陸段　楯原中里里外捌坪壱町　同里弐拾玖坪壱町　田井里捌坪壱町　同里参拾坪陸段　野中里拾捌坪捌段　北肆条井塞里弐拾捌坪渠段

右、同符稱、同前勘奏稱、件墾田、承平六年以後相傳公験已以炳焉、而奉寄宮寺之由、雖無所見、国司与判又及数十代、可被裁許者、同宜、奉勅、件庄宜仰彼國、停止相傳田、令免除本田者、

（中　略）

河内國玖箇處

壱処　錦部郡

田弐拾陸町玖段

壱処　古市郡

田柴町玖段陸拾歩

壱処　安宿郡

田弐町弐段佰捌拾歩

壱処　讃良郡

田捌町伍段佰捌拾歩

壱処　若江北条

田陸町参佰歩

壱処　志紀北条

田柴町佰陸拾歩

壱処　同　南条

田壱町弐段弐佰肆拾歩

壱処　八上郡

田捌町壱段弐佰捌拾歩

壱処　交野南条

田柴町柴段佰捌拾歩

（後　略）

4．松原市の条里　(1)――大津道以南の条里

この文書によると丹北郡の一条矢田部から北四条井塞里が丹北郡矢田庄の範囲であり、丹北郡の一条に矢田部・篠原里があり、北三条には駅家里・楯原中里・田井里・野中里があり、北

四条に井塞里があったことが知られている。矢田部はいうまでもなく東住吉区の矢田部でありこの線上に篠原里があればこの条里は丹北郡の一条にあたるわけだ。松原市全域の小字名図をみると、我堂の南西隅に字篠原がある。これが篠原里の名残りと思われるのは、この字篠原は堺市の境界線に接する河内国丹北部と摂津国住吉郡との国境でもあることによる。丹北郡の一条はこの国境線より始まることになる。

近年この国境線についてもう一つの考証がなされた。近年難波宮および難波京の発掘調査が進められたことにより、難波京の正中線が明らかになり、難波宮より飛鳥への古道のルートが大いに究明された。

仁徳紀に高津宮から丹比邑に至る大道を作り、また推古紀21年に飛鳥京より難波までの大道の設置が出ている。作大道置於京中、自南門直指之至丹比邑。　　又自難波至京置大道。
このこととあいまって上町台地上にすべて台地に沿い南々西方向の道路が多い中にあって、それらと方向を異にする正南北道路が四天王寺の東方上に残され、かつそれに沿って「大道」という地名を指摘され、朱雀大路にさかのぼる可能性を示唆されたのは藤岡謙二郎氏である。

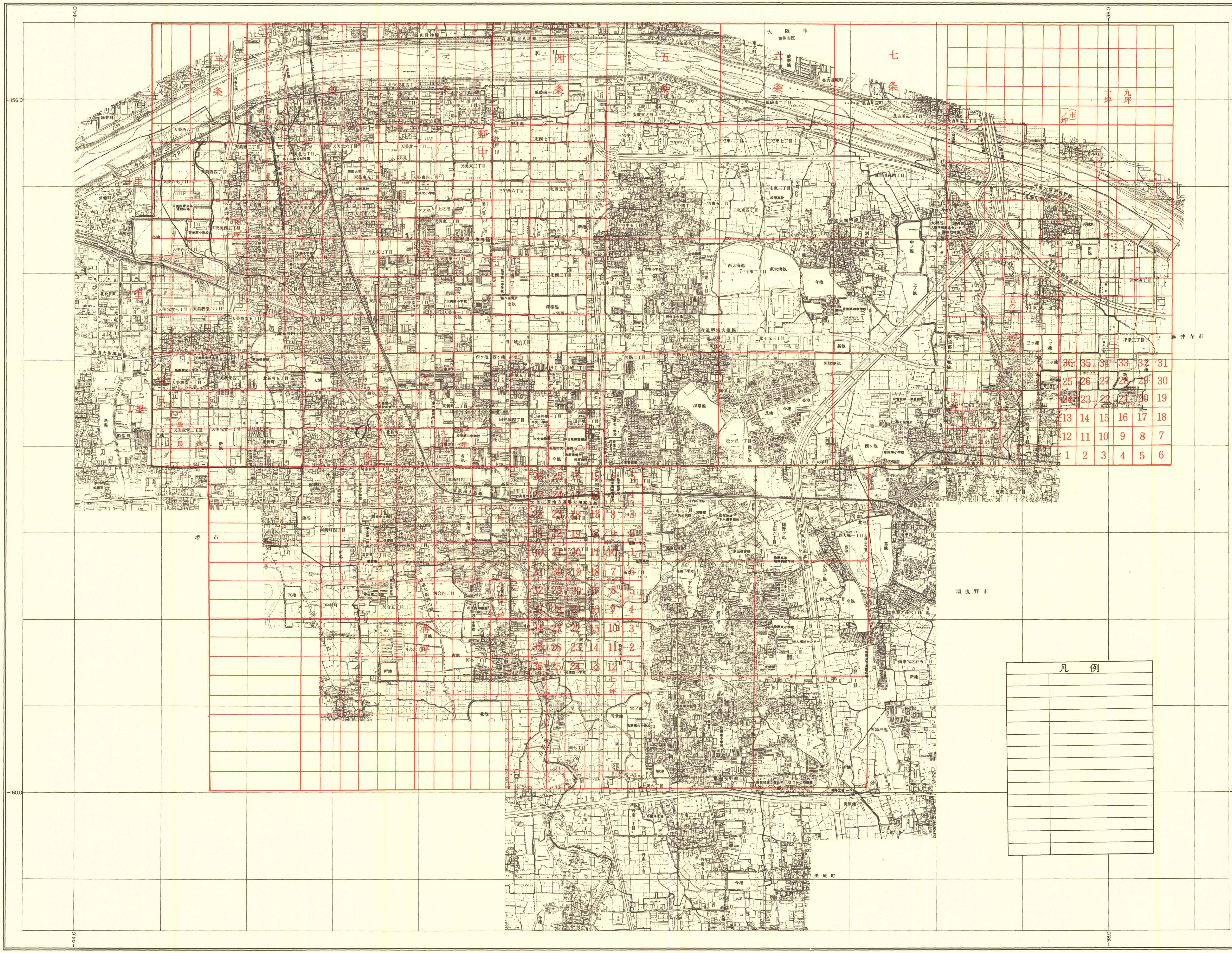
さらに難波宮の正中線を推定され、難波京域のさらに南へ延長すると松原市と堺市の境界線につながるから、古代その位置に正南北の一直線の存在を確認され、大津道（長尾街道）と丹比道（竹内街道）とも直交していると明示されたのは岸俊男氏である。さらに足利健亮氏は難波京から南海道へ達する朱雀大路を丹比道と直交させて河内・和泉両国の国境上から草(日)部駅に通じ和泉国府に至ったとする説を発表された。

これは古代大和における飛鳥京の正中線が中ッ道であり、藤原京は中ッ道と下ッ道の線上線を基礎に造営プランが作られていることと、平城京の正中線が下ッ道につながっていることを考え合せてみると道路の重要性がみられる。

このようなことから難波京の正中線の大道を境に河内国丹北郡と摂津国住吉郡との国境となった。大津道も河内国衙を通り難波京正中線と直交していて、坪付形式と字篠原から条里復原図を作れば、条は難波京正中線で始まり、里は大津道(長尾街道)で始まる。石清水文書にある丹北郡の「一条篠原里」は丹北郡一条一里にあたる。つぎに「北三条駅家里」は西除川畔の向井付近にあたる。古代の西除川は水量も多く川幅もずっと広かったにちがいない。江戸時代に布忍付近の西除川を数多くの歌が詠まれている。

夕だちに大水出れば布忍川はばは何丈何尺かある　　秀　綱
夕だちに大水出れば布忍川浪はしはにてはばも知られず　　浄　久

まして古代にはもっと困難なる場所であったと想像され、この三条一里には大津道（長尾街道）は河内と和泉の国衙を結ぶ幹線道路であり、さらに南海道の主要路にあたり駅家がこの地におかれたのではないだろうか。大字向井もさることながら、字向井側、字追分があり、大字



第208図 松原市(丹比・丹南・八上郡)条里復元図

清水に字正殿、字馬取淵があり、大字高見もすべて大津道筋に残されていることも西除川をはさんで駅家の名残りの地名として重視される。『続日本後紀』承和8年（841）には

以河内国丹比郡駅家院倉八宇屋二宇、遷建当郡日根野為正倉。

とあるのはこの北三条の駅家のことであろう。このように都が飛鳥京より藤原京へ、平城京へ平安京へと遷るにしたがい、難波京との二つの都城を結ぶ幹線交通路としての意味を喪失するに至ったものと考えられる。しかし廃駅となっても大津道（長尾街道）は南海道の一区間であることはまちがいではないが、『日本紀略』延暦15年（796）には

南海道駅路迥遠、使令難通、因廃旧路通新道。

とあり、「南海道駅路は旧路を廃し、新道を通ず」の史料から駅家の変化もうなずけるものである。また丹比道（竹内街道）の西除川付近の石原に行基が布施屋をもうけたと行基年譜に出ているのも駅家と同様に幹線道路であっても通行人の困難さを考えざるをえない。「北三条田井里」は田井城の西北辺と推定する。大津道の南側にある大字東代は、もと東田井と呼ばれていたことが文禄三年（1954）の検地帳によって知られている。「北三条野中里」は大字池内の字野中付近にあたり、北三条楯原中里は三条の最北端の里を示し、さらに摂津国住吉郡との間に12坪の里外地を有していたことが確認出来る。住吉大社宮司解の天平元年（729）には

依託宣移徒河内国丹治比郡楮原里、故号住道里住道神

とあるによれば、住道里並に住道神は摂津郡より河内国丹北郡楮原里に移り来たとする。これは住吉郡大字喜連の西辺に楯原神社があったと伝えられているので、楮原は誤りで楯原といわれている。「北四条井塞里」は田井城・西瓜破の線であるが、今井戸川（大和川の北岸では今川と呼ばれている）筋にあたるところに井塞里があったと考えられる。このようにして五条は、大字阿保・大字三宅・大字東瓜破と、六条は大字別所、七条は大字一津屋・大字川辺・大字長原、八条は大字小川・大字大堀、九条を大字若林となっている。あとは志紀郡まで里外地となっている。

5．松原市の条里 (2)——大津道以南の条里

延久4年（1072）の石清水文書の太政官符によって丹北郡の条里が復原することが出来たが大津道（長尾街道）以南はどのようであろうか。坪付形式のときにもふれたように大字河合の八ノ坪と九ノ坪の並び方と大字新堂の七ノ坪の位置から、坪付形式をみると東南隅から第1坪を基点として、北方に千鳥式に数えて西南隅の第36坪で終わる形式を示している。また大字東代の十三ノ坪と大字高見の八ノ坪の並び方は一里が36坪であるところ大津道（長尾街道）に接するため6坪足らずの30坪しかない里外地のために、やや変則的な坪付となっているが基本的には大字河合や大字新堂の坪付形式と同じである。この里外地坪付によって、この条里は大津道

と平行している丹比道（竹内街道）を基点として始まっていることとなる。かかる坪付形式に基ずいて条と里の界線を引いてゆくと、大津道以北の丹北郡のものより2町東へずれている。ただこの条里についての条里史料が見つかっていないので、どこから初まっているのか、何条何里か明らかでない。

ただこの大津道と丹比道間の条里に関して岸俊男氏の有名な論文がある。つまり「この東西に並走する二道路間の距離は1908メートルで、大和の上・中・下の三道路が正しく4里の間隔を保っているのに対して、両道路の場合にはそのような計画性はないようだ。条里からみれば、6町で1里の条里制では2里と里外地の5町分となっていて、6町1里の完数になっていない」と書いておられる。この点について松原市史の足利健亮氏が注目され、3000分の1の地図で実測すると1908mで、条里制の坪が17個あり、109m条里で計算すると1853mとなるが実際には55m長い1908mとなる。そこで同氏と私が巻尺ではかると、確かに平均112mという非常に長い南北条里の距離があり、東西方向の条里を計ると109m条里であった。これは106mで割ると18で割り切れるから、要するに106m条里の18倍であるという倍数距離である事実によって、この竹内街道と長尾街道の起原が非常に古いという傍証の一つが得られた。

106m条里のことは丹北郡の大字城連寺付近にもみられるが、この二道路のような正確な結論が出されていない。あるいは大和のように大津道の北方に東西方向にもう一本の古道を想定する意見もある。また西除川流域の竹内街道以南の条里についての地割方向も、南北線がかなり西の方にふって、坪の形も正方形でなくやや菱形に近いものとなっているが、竹内街道付近で修正されて、長尾街道間までに正南北線となり坪の形も正方形となっているのは、これら丹比郡の地割の古さを物語る一部分ではないだろうか。

6．松原市の条里 (3)——丹比道以南の条里

大津道（長尾街道）の北側の条里と南側の条里とでは、その坪付形式が異なっていたように丹比道（竹内街道）の北側とその南側の条里の坪付形式が異なっているだろうと思われながら坪名の少なさゆえ、大字丹上に残る唯一の小字名の六ノ坪・五ノ坪の並び方より大津道以南の坪付形式と同じ条里であると大越勝秋氏は考えられた。しかし近年美原町史の服部昌之氏は「古代の直線国境について」の中で大津道以南の丹南郡では、丹比道（竹内街道）の線を境として、その北と南とで坪並のタイプが異なるものといわれている。また大阪府教育委員会が出した『挟山遺跡発掘調査概要』の中で、挟山遺跡付近の古代条里制遺構を執筆した谷岡武雄氏は丹比道以南の丹南郡の条里にもふれ、その復原図も示された。

これによると丹比道以南地域における条里坪名は少なく、その復原は容易ではないといいながら大字丹上に残る小字名の坪名から、西から東へと四ノ坪・五ノ坪と並んでいる唯一の坪名

から、丹北郡や古市郡と同一型の坪付形式とされた。この坪付形式に基ずいて復原すると、丹比道と一致して南北線も丹比道以北の条里と共通するが、大津道以北の条里のものより東へ2町ずれることになる。また服部昌之氏の『美原の歴史』の中で、美原町の字図より抽出した坪名を一万分の一の地図上に転記して条里復原図を作成されている。これによると大字今井にも五ノ坪の小字名が見つかり、丹北郡の坪付形式にのるものであった。しかし何条・何里と復原出来るがみつかっていない。

7．丹比郡の分割　(丹北郡・丹南郡・八上郡の建郡)

丹比郡の初見は『続日本紀』の文武4年（700）の道照の死を伝える部分である。また『河内国西琳寺縁起』に養老6年（722）に丹比郡余戸郷の僧知蔵が公験を受けたとあり、寧楽遺文に天平14年に丹比郡野中郷の存在がたしかめられ、天平20年（748）に丹比郡の侠山郷と天平勝宝2年（750）には河内国丹北郡三宅郷・河内国丹北郡野中郷・河内国丹北郡野下郷と初めて丹北郡がみえる。これが正しければ丹比郡が丹北郡に改称されたか、丹南、丹北に分割されたかと推定しなければならないが、しかし、それ以後の六国史や延喜式にも丹比郡で一括されている。そして延久4年（1072）の石清水文書に丹北郡と初めて八上郡が出ている。丹南郡においては承安2年（1173）の佐伯景弘持経者注進状に丹北郡・丹南郡が出ている。もっとも『和名抄』の丹比郡の分註に「太知比、丹南となり、丹北となる」と記るされているが、これは後の書き入れの可能性もあり、これだけでは分割の時代を明らかにすることはできない。前田家本の『日本霊異記』には「丹南郡」とあるが、真福寺本は「丹治北郡」、その他は「丹治比郡」と日本古典文学大系に書かれているので決め手にならない。

吉田東伍の大日本地名辞書や日本地理志料等にも、丹比郡が丹南・丹北に分かれ、丹北郡よりさらに八上郡が分かれたが、その分置年紀が詳らずと記している。しかし前にものべたように大津道・丹比道の二道の起源がかなり古く、それに沿って平地での条里が施行されたとすれば、丹比郡が丹南・丹北両郡への分割はかなり早い時期だと考えられよう。それは道照・行基等の狭山池を初め池や水路の土木事業によって、水田の開拓と人口増加により、さらに西部の曠野が開墾されたことにより、八上郡が分割されたと考えられる。

8．松原市の条里のまとめ

松原市域における条里をまとめてみると、ところどころに条里以前の地割が残こされていたり、大字図をみると東西線が目につく。これは大津道や丹比道による影響の大きいことによるとおもわれるが、条里施行はこれらの道を基準におし進められたように考えられる。このため大津道・丹比道・芽渟道から条里の起点ではないかと考えさせる。

ここで大きな問題は郡単位の条里の考え方である。丹北郡の条里は大津道より以北であることは延久4年（1072）の石清水文書の大政官符で明らかであるが、丹比道の以北の条里と以南の条里はどう考えればよいか。谷岡武雄氏は全部丹南郡の条里と考えられて、丹比道の以北と以南で分けられている。私もこの大津道以南の条里を丹南郡と考えているが、一部松原市域付近で丹北郡が一部丹比道まで含まれていたと考える。それは承安2年(1173)の佐伯景弘持経者注進状によると大津村以南の松原は丹北郡になっているし、松原村・更池村・東田井村(東代村)の文禄3年(1594)の検地帳が丹北郡になっている。この地域が延久4年の太政官符も北三条・北四条となっているので、南三条・南四条を推察したいし、また太官符には志紀北条・志紀南条の存在のためである。また八上郡の条里は西除川以西の地域である。坪付形式からみると大津道以南の条里である。

また久安2年（1146）僧頼円田地売券によると

在八上郡野遠郷萩原里卅五坪元内西一

とあり、弘安9年（1286）の金剛寺文書の田井庄大饗天野一切経田里坪付注進案に

田井御庄大饗郷天野一切経田里坪付事

合

本新坪付

隼人窯里廿一坪ノ二反卅歩浮田里四ノ五反

新二坪付

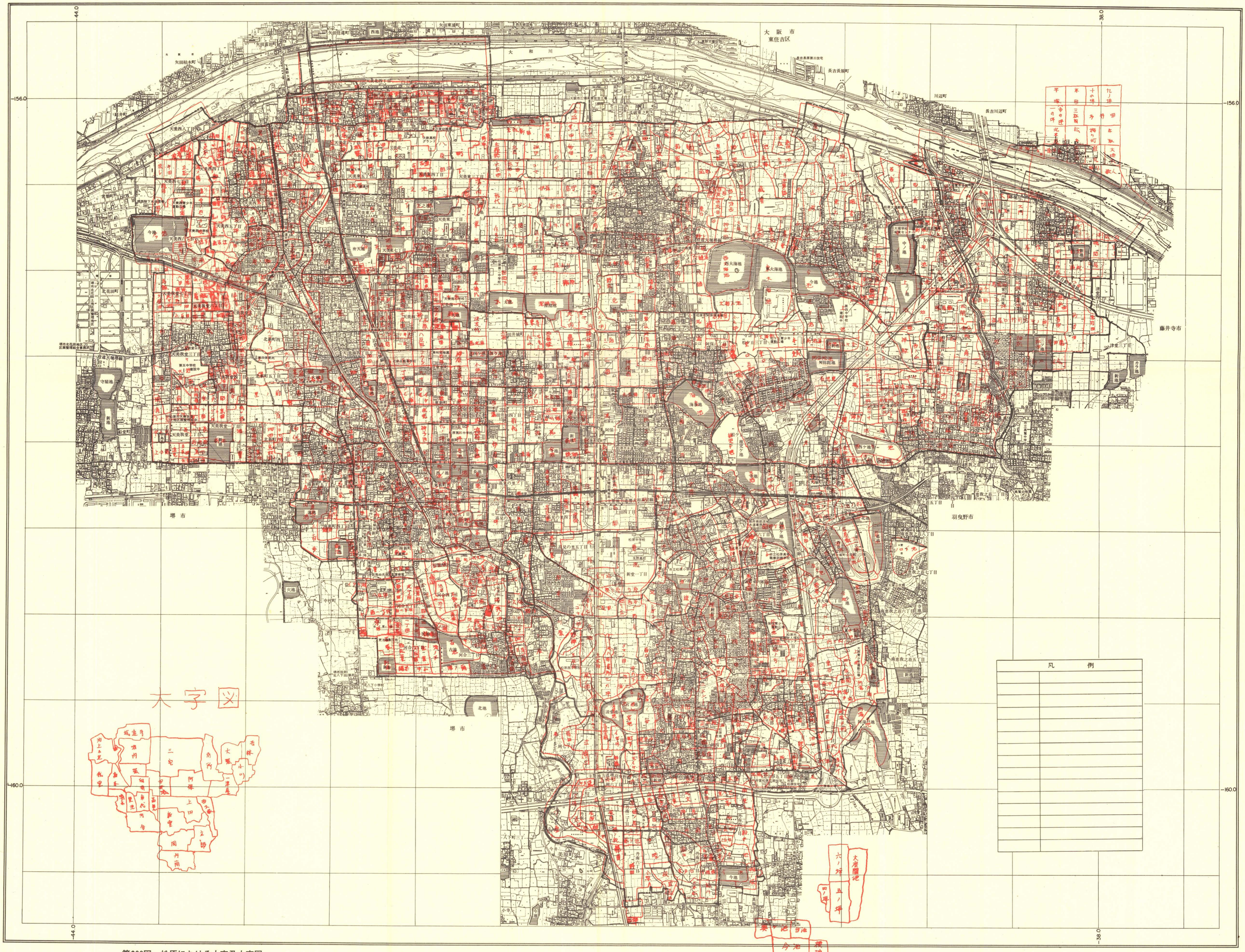
浮田里三坪三百歩同四ノ二反六十歩

とあるごとく何条何里が使われていない。この地域は使わなかったのか。またはこの時代には条里制がくずれてくる時代であろうか。応永元年（1394）の西琳寺文書の

丹北西条羽咋郷内参町内

となるのも同様な変化の現れであろう。

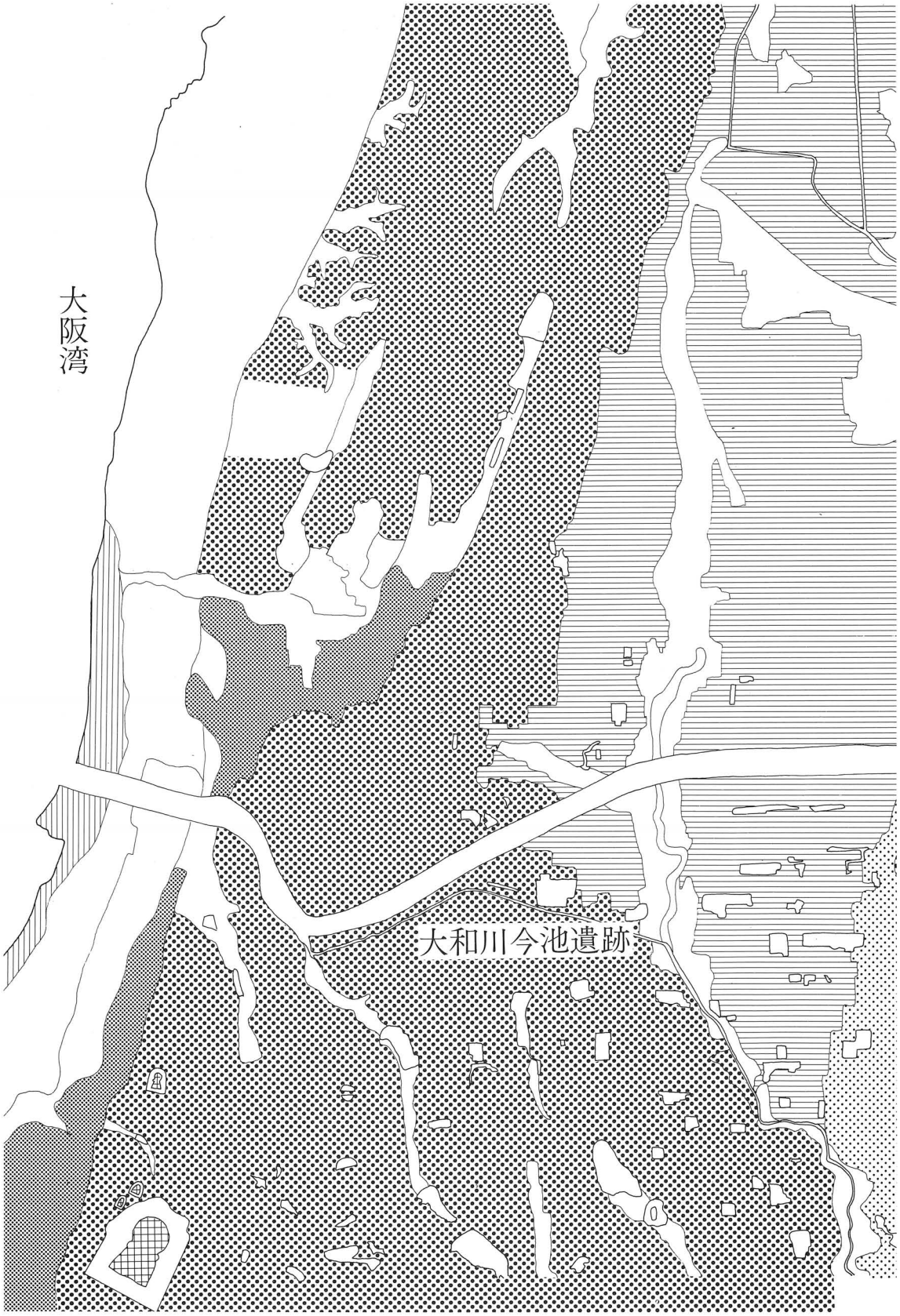
なお条里地割を丹比郡全体からみれば、河南丘陵の地形からくるためか、瓜破・長吉・太田の水田の地割は長地形の地割であるが、三宅・田井城・高木は長地形もみられるが半折形もみられ、長地形と半折形が半々位みられる。また丹南・河合では河南丘陵地帯にあるためか、半折形地割が卓越しているとみとめられる。



第209図　松原における大字及小字図

図　　版

図版1

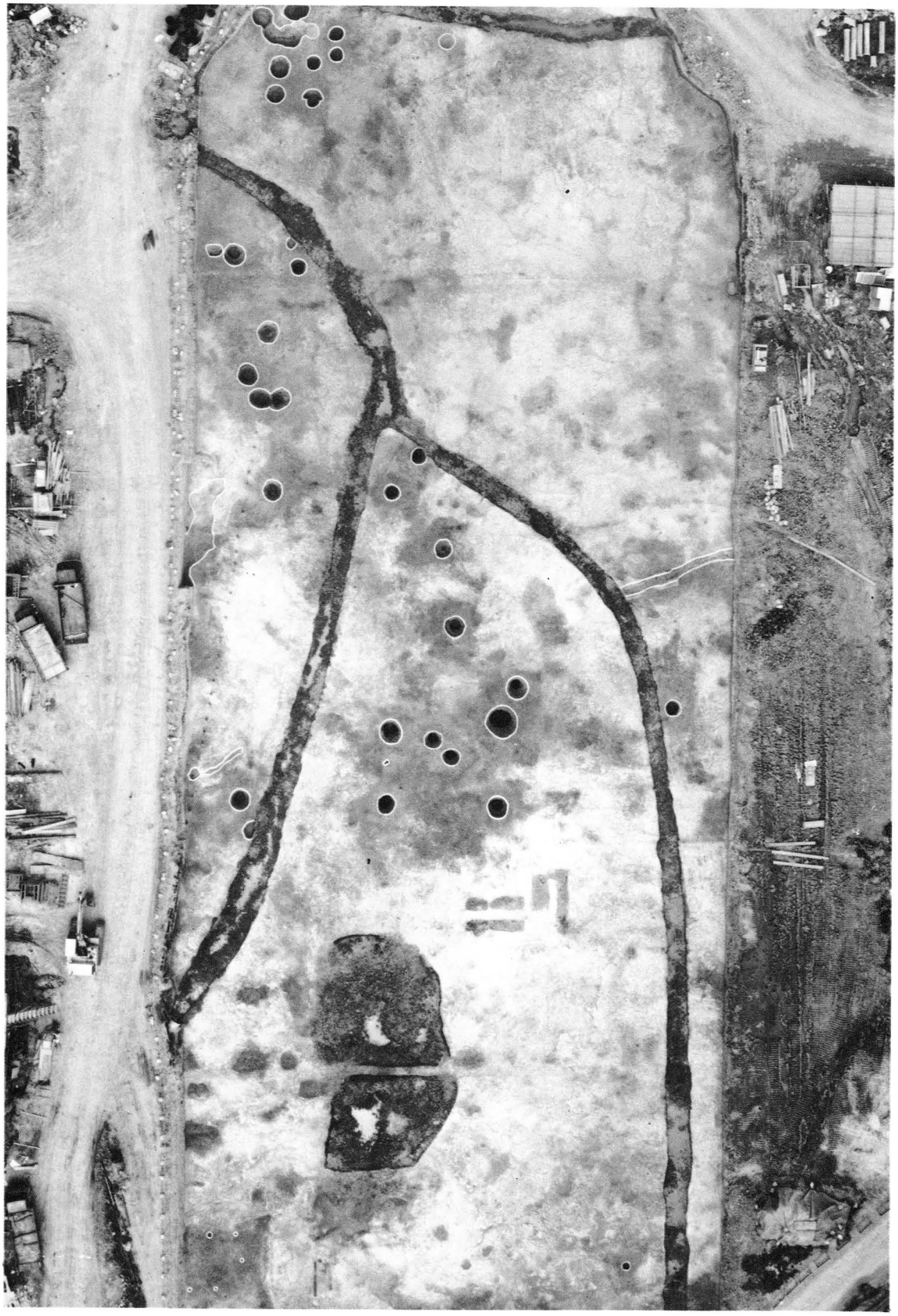


大和川・今池遺跡周辺土地条件図

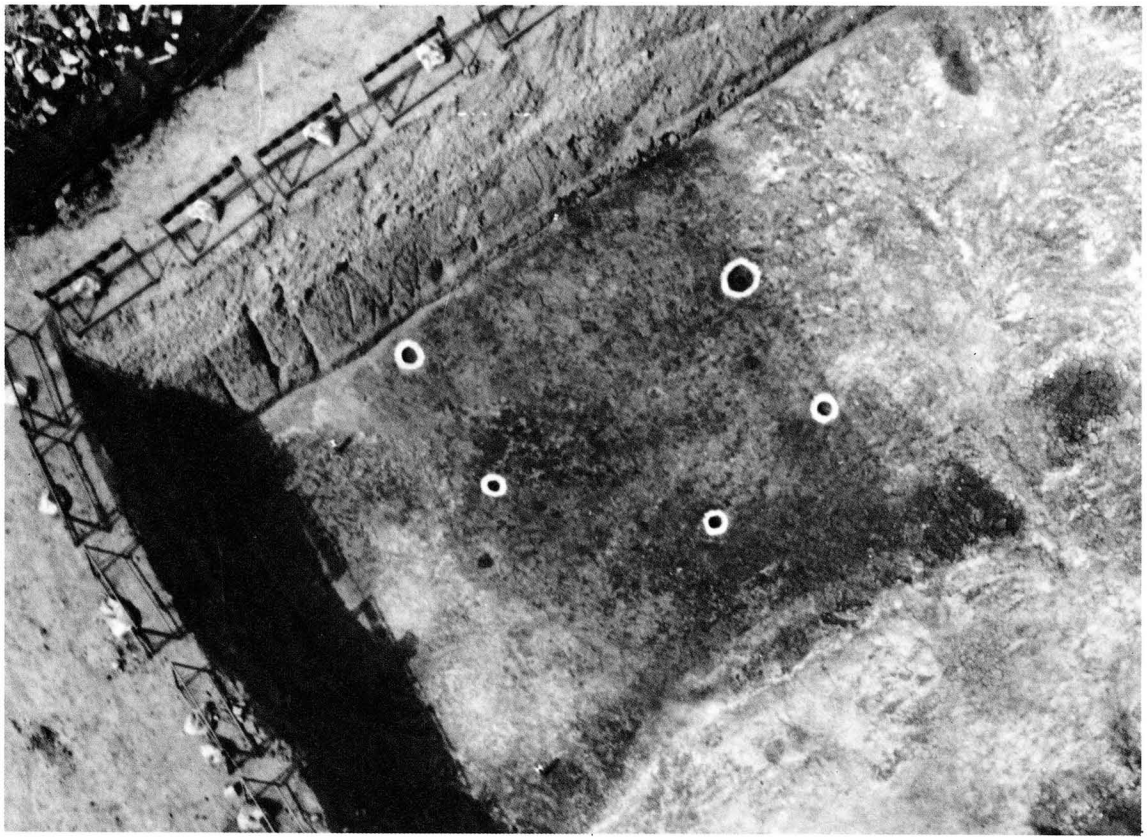
図版2

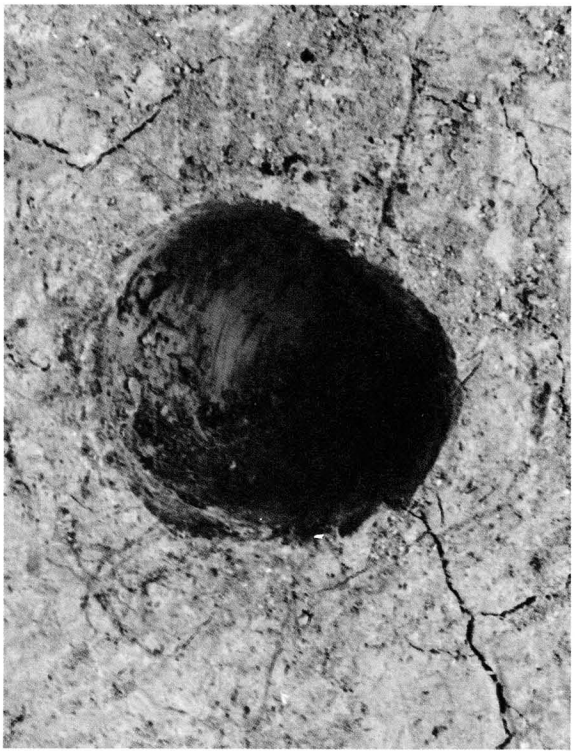
大和川・今池遺跡周辺航空写真

大和川・今池遺跡旧地形航空写真

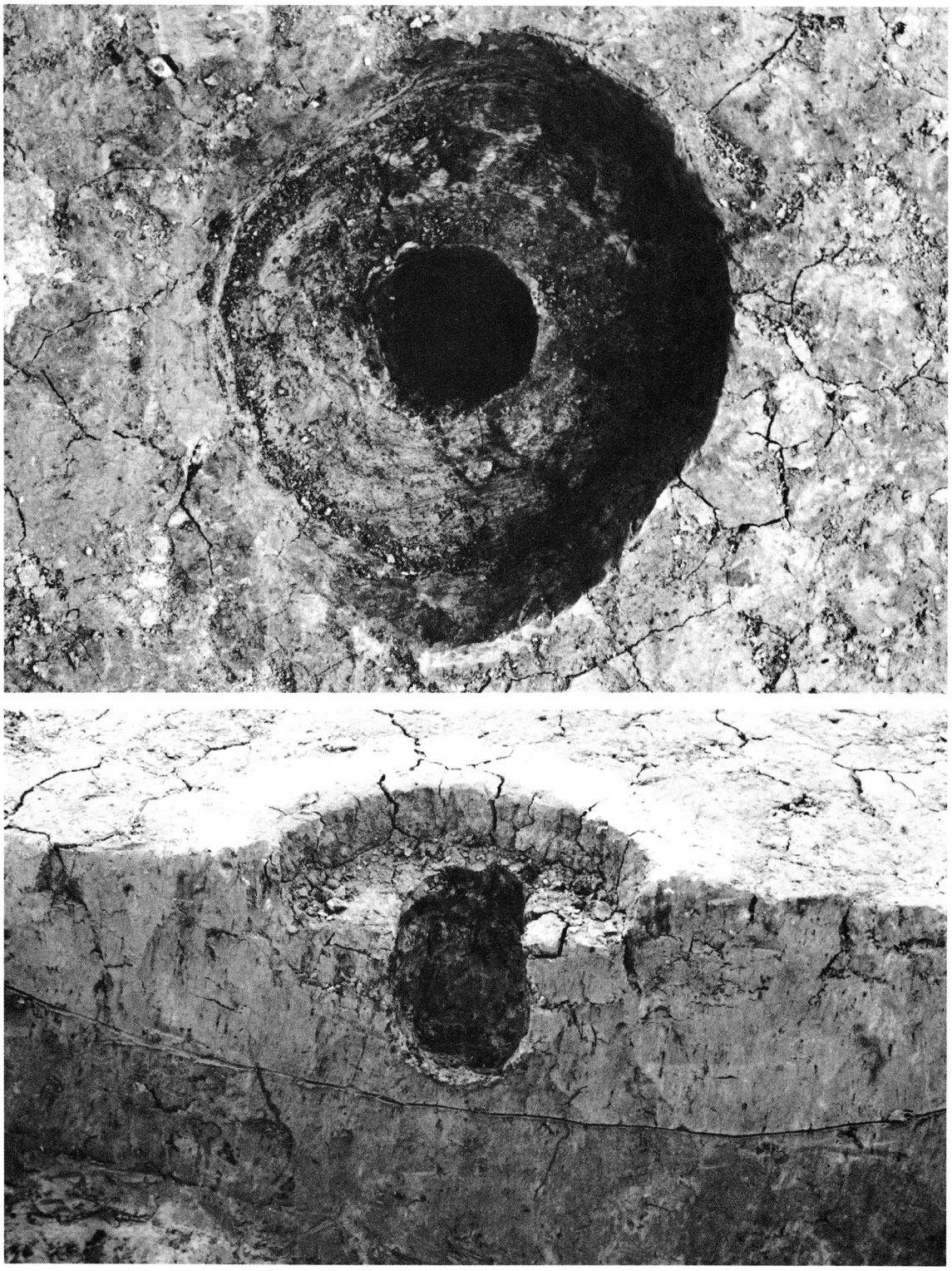


第3地区　遺構全体写真

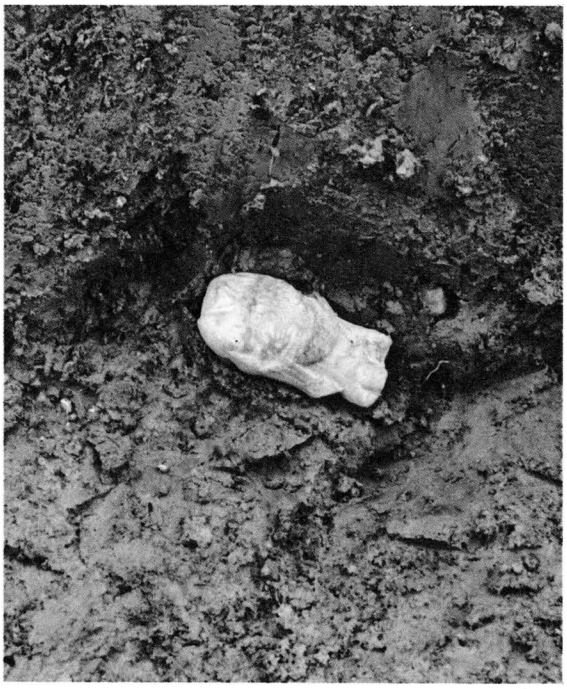




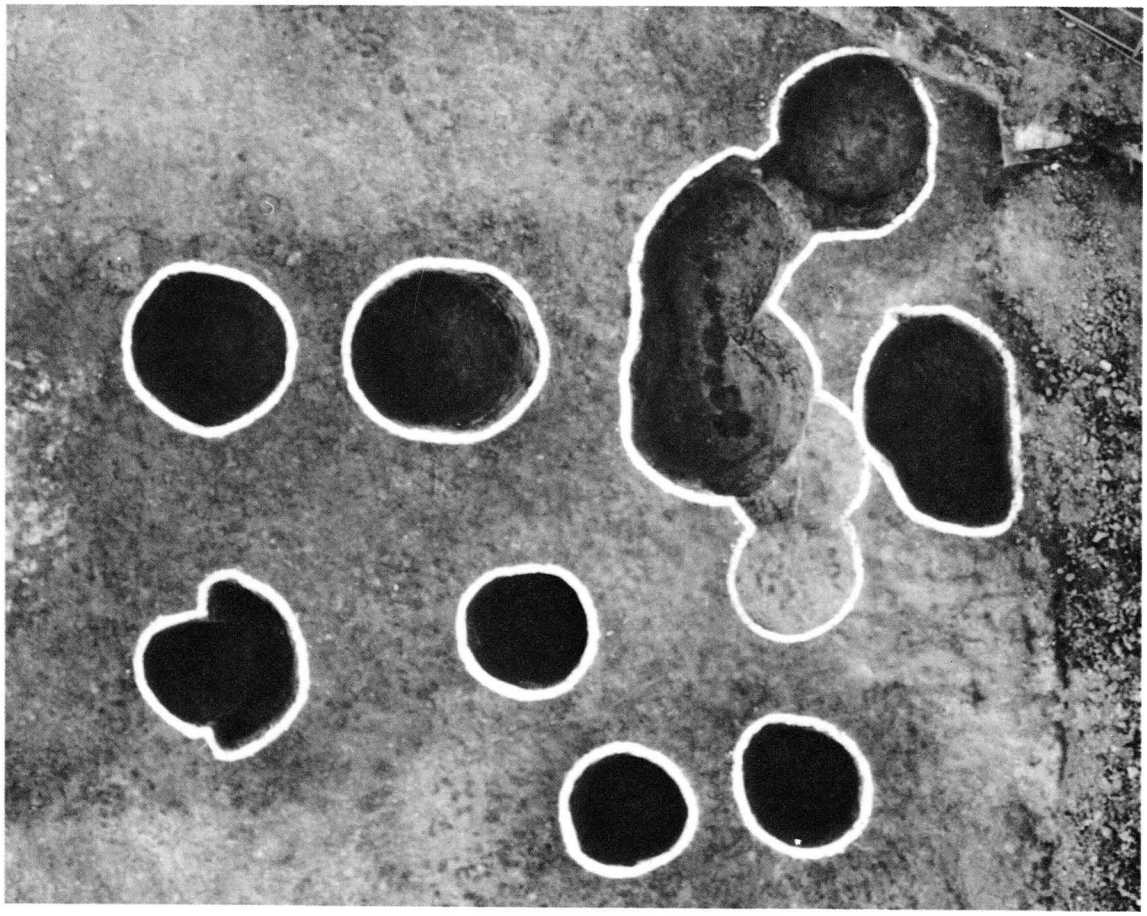
第3地区　掘立柱建物全景　柱穴　P－3，4

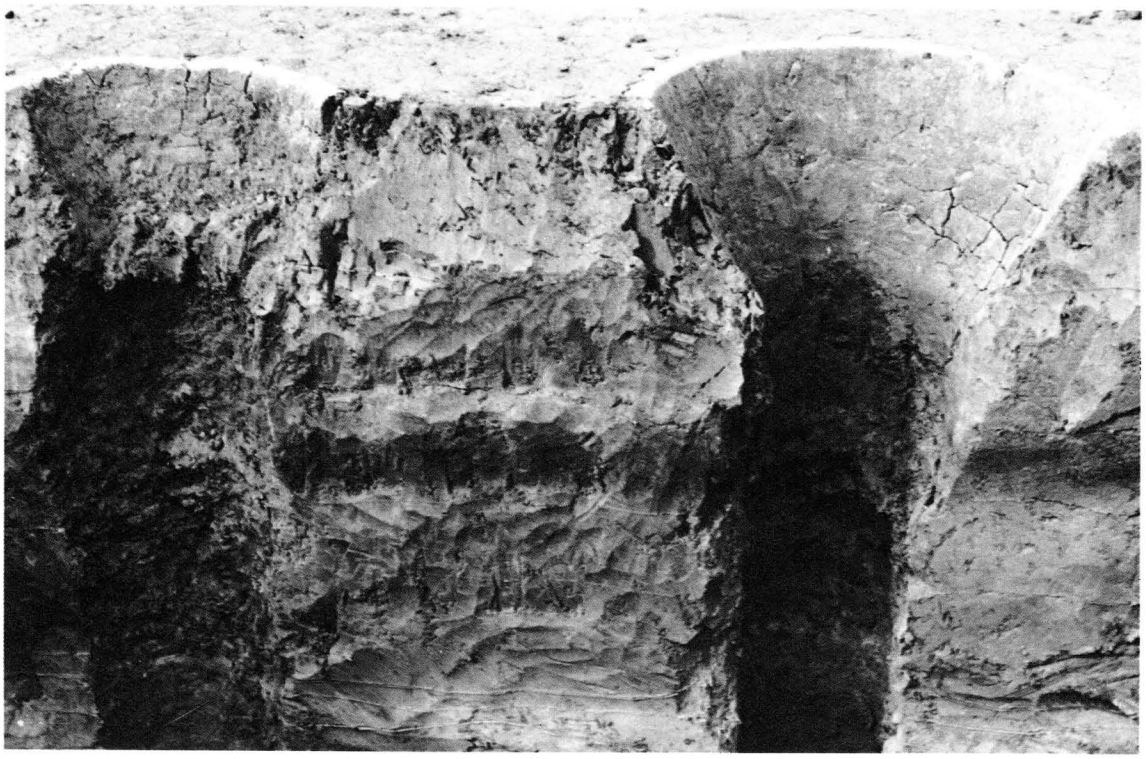


第3地区　掘立柱建物　柱穴　P－2　上：平面　下：断面

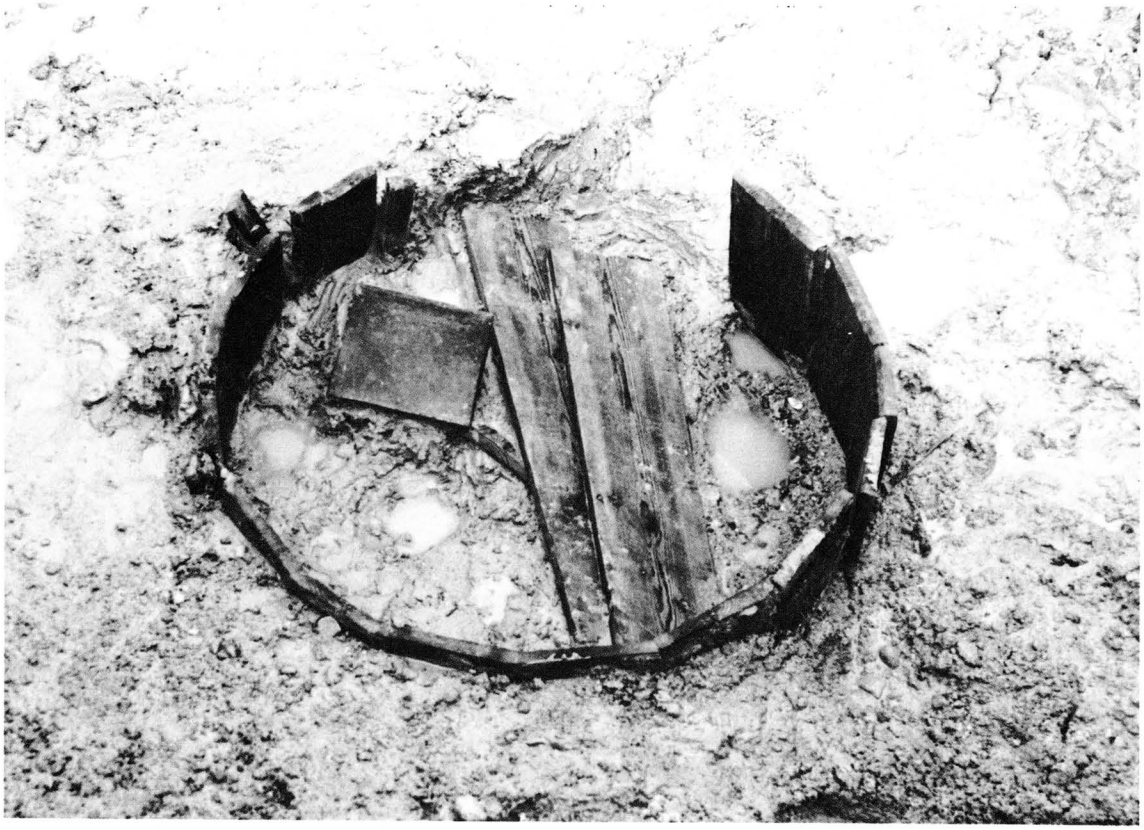


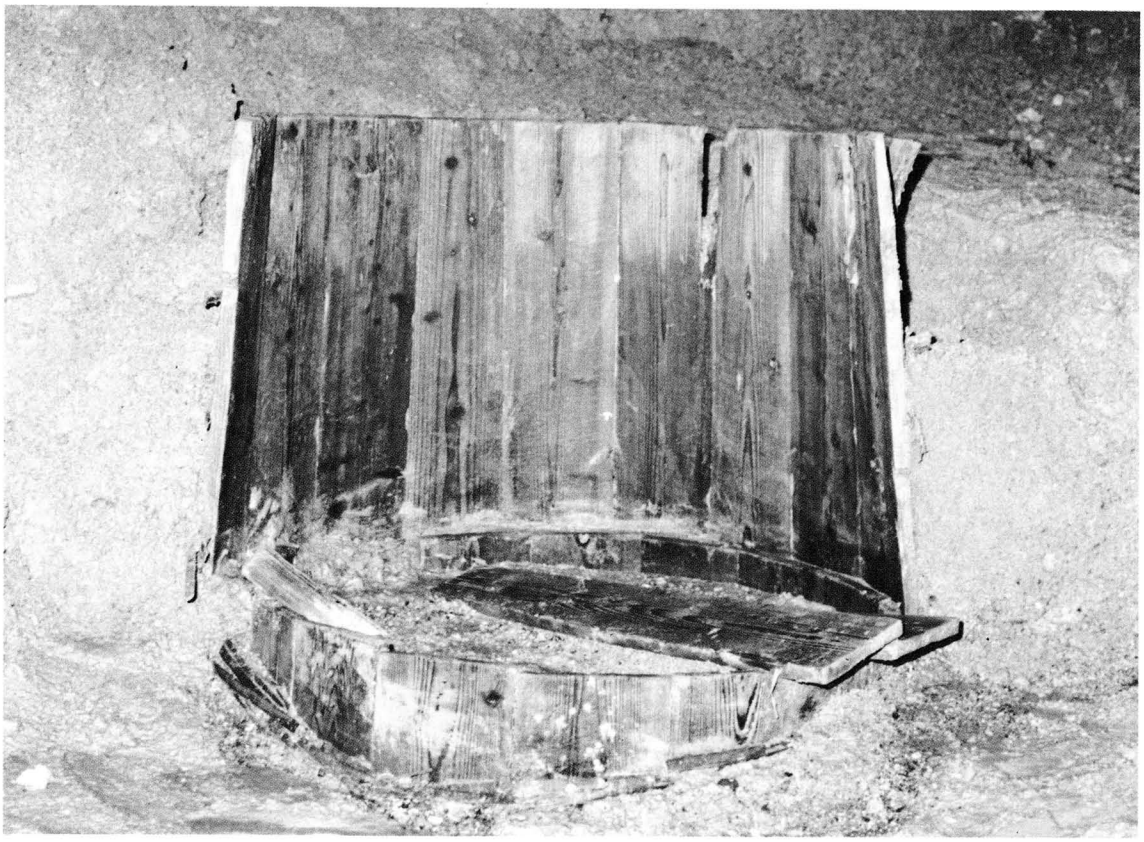
第3地区　上左：滑石製勾玉　右：土製人形　下：P－8出土　土師器　高杯出土状態



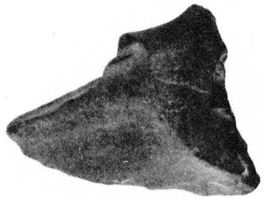


第3地区　上：耕作用井戸(E)—23～35　下：E－1,2断面



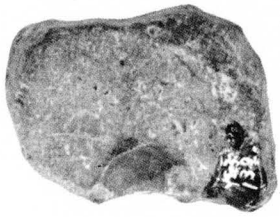


第3地区　E－8　上：平面　下：断面

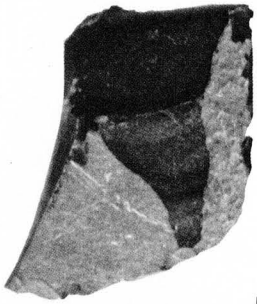


8

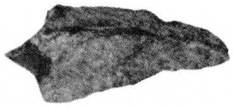
6



4

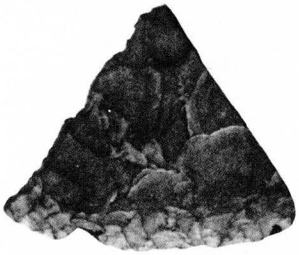


5



1

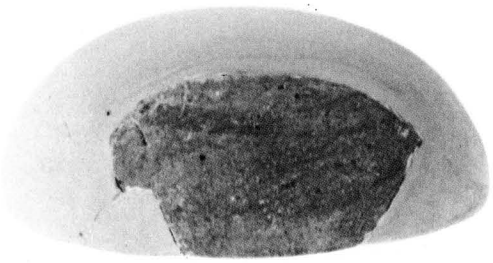
7



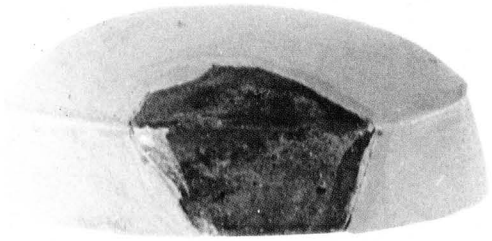
3

2

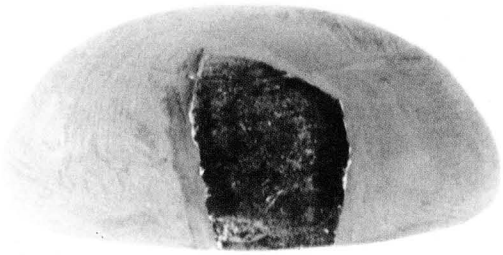
第３地区　試掘調査出土石器　第３地区（１～７）　試掘地点（８）



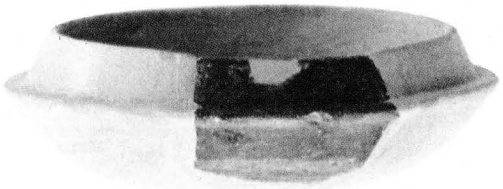
16



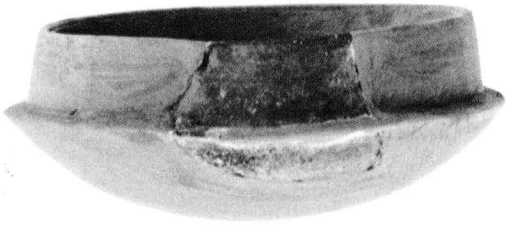
11



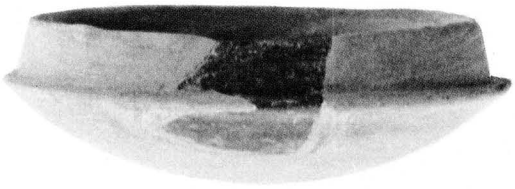
17



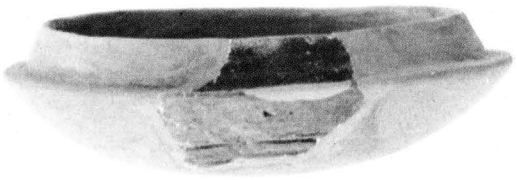
4



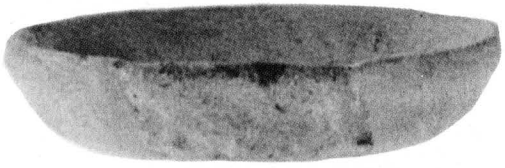
20



7

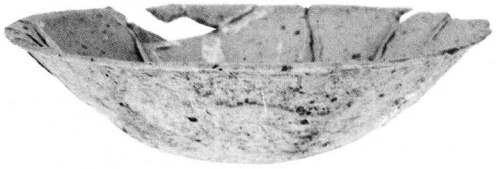


18

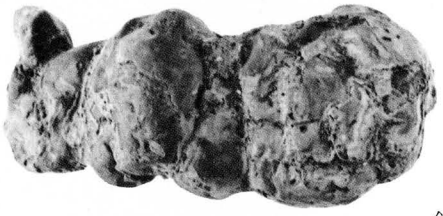


土師質－4

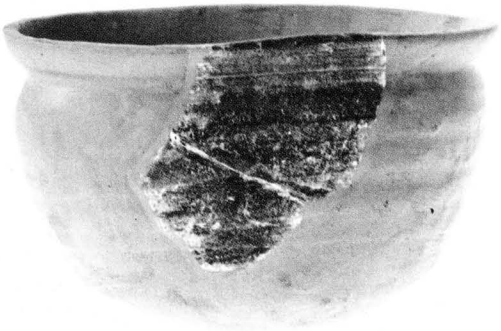
第3地区　出土遺物



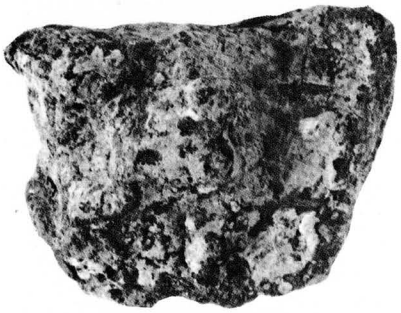
P－8



鉄滓



5

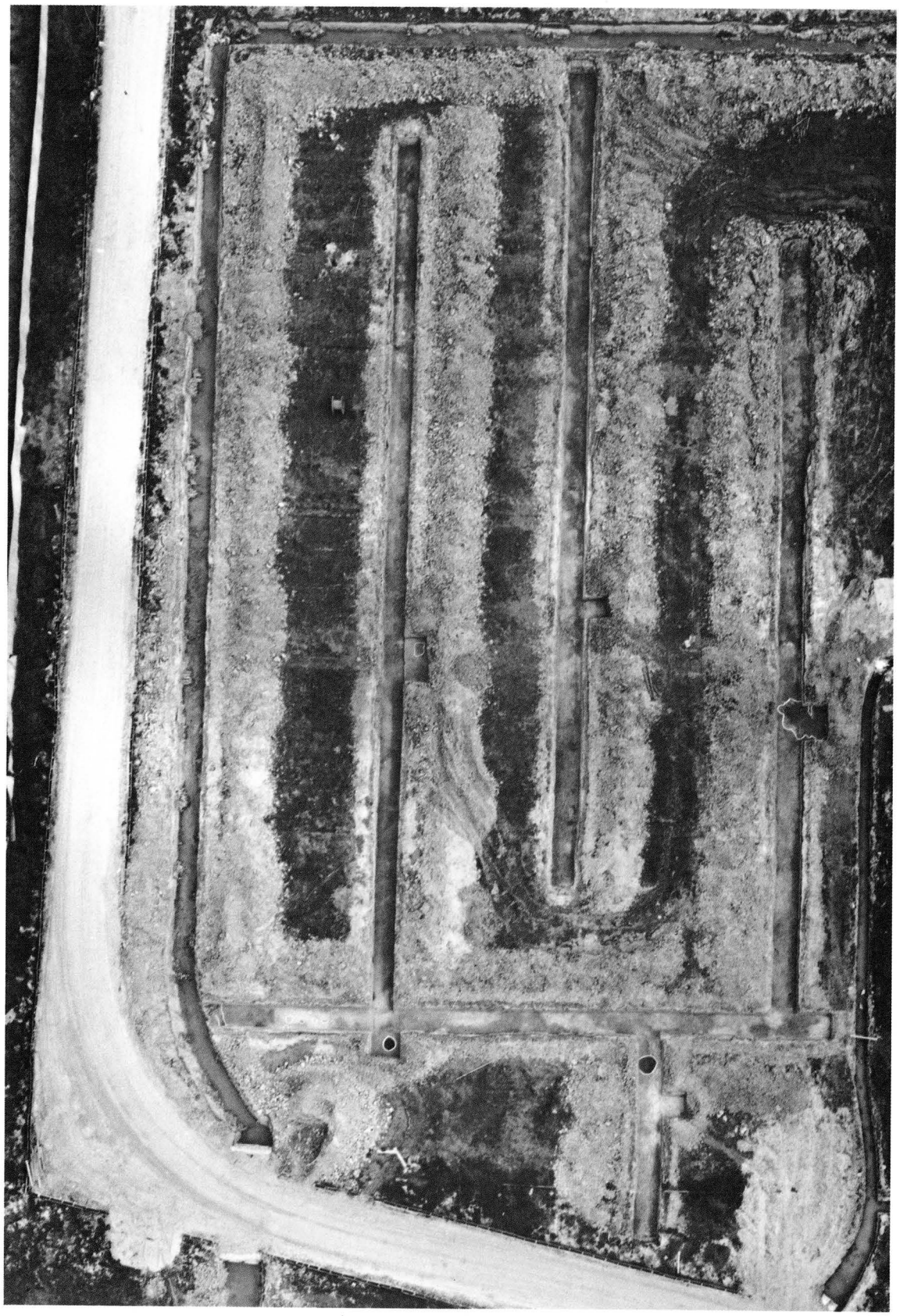


鉄滓

7

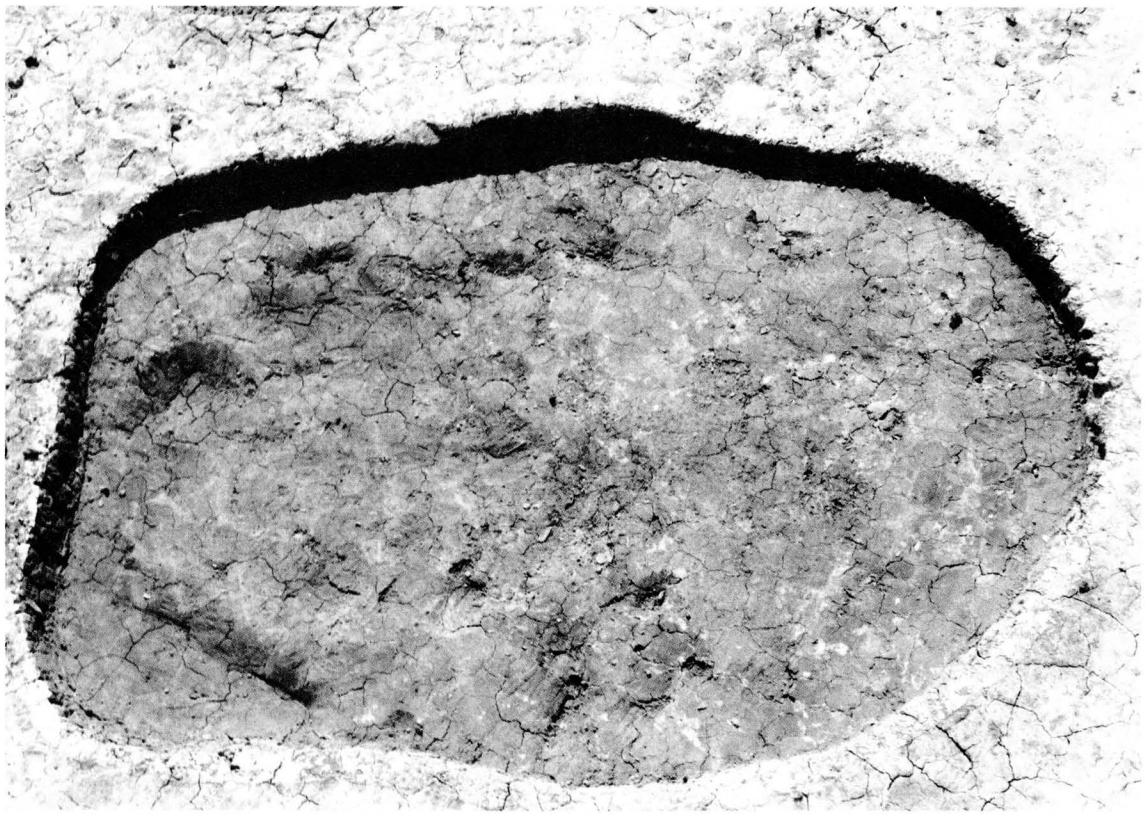
土師質－2

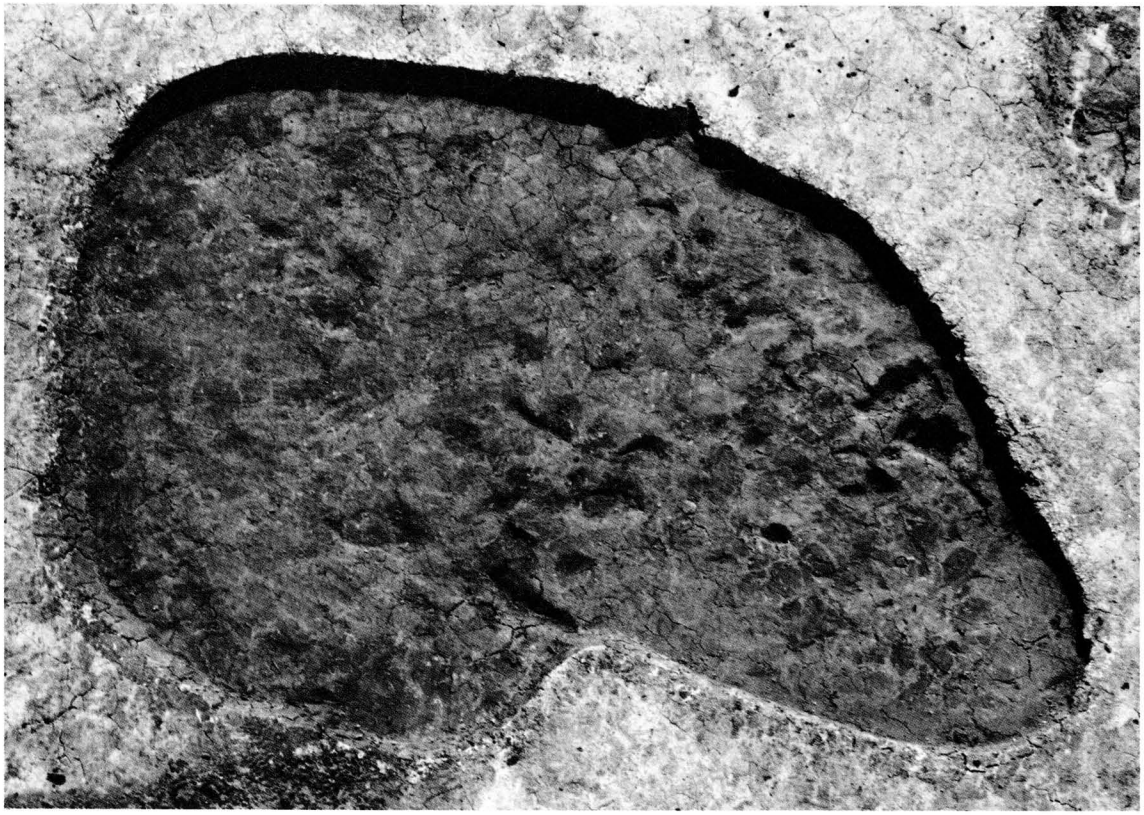
第3地区　出土遺物



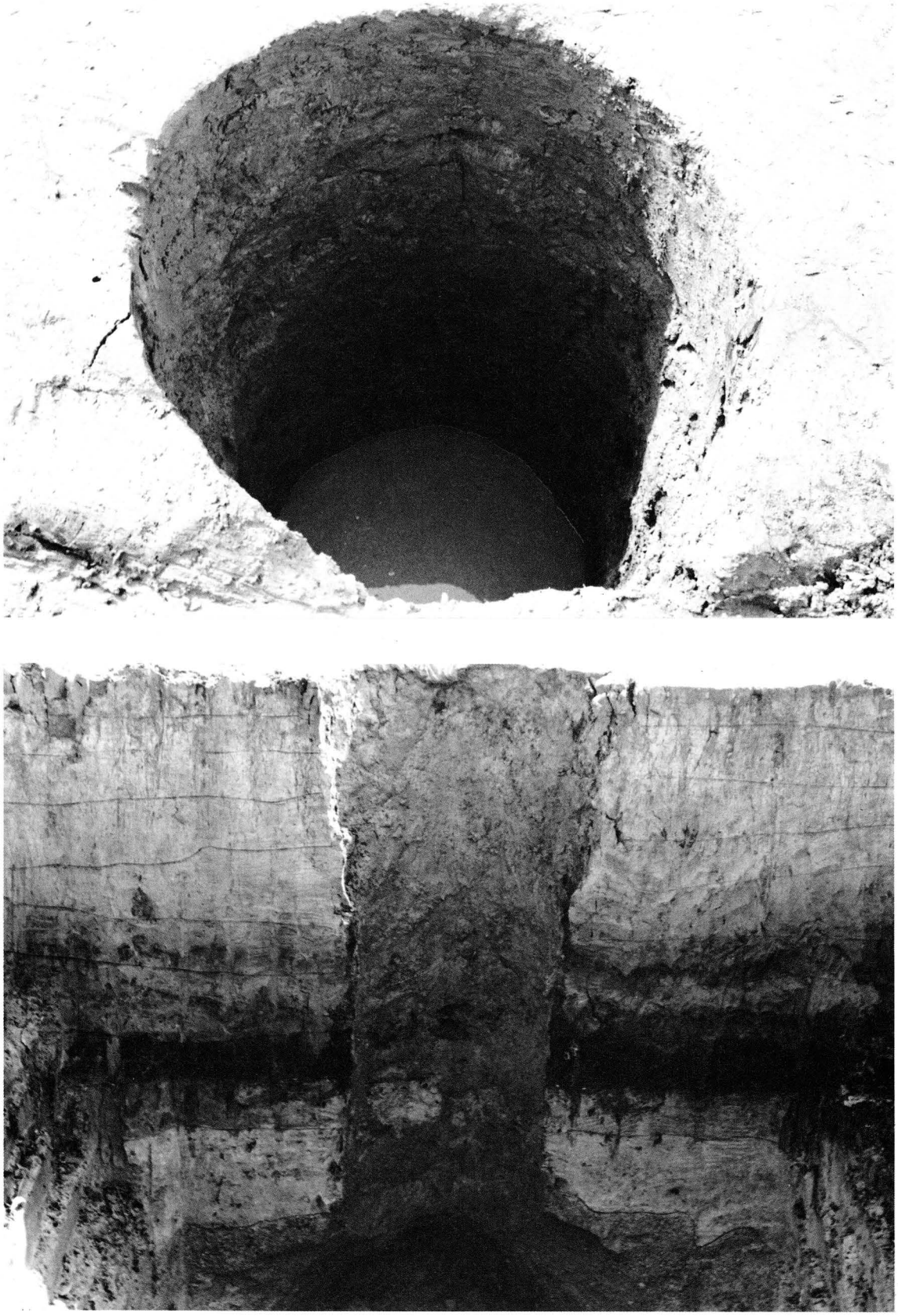
試掘調査地区　全景航空写真

第4地区　全景航空写真

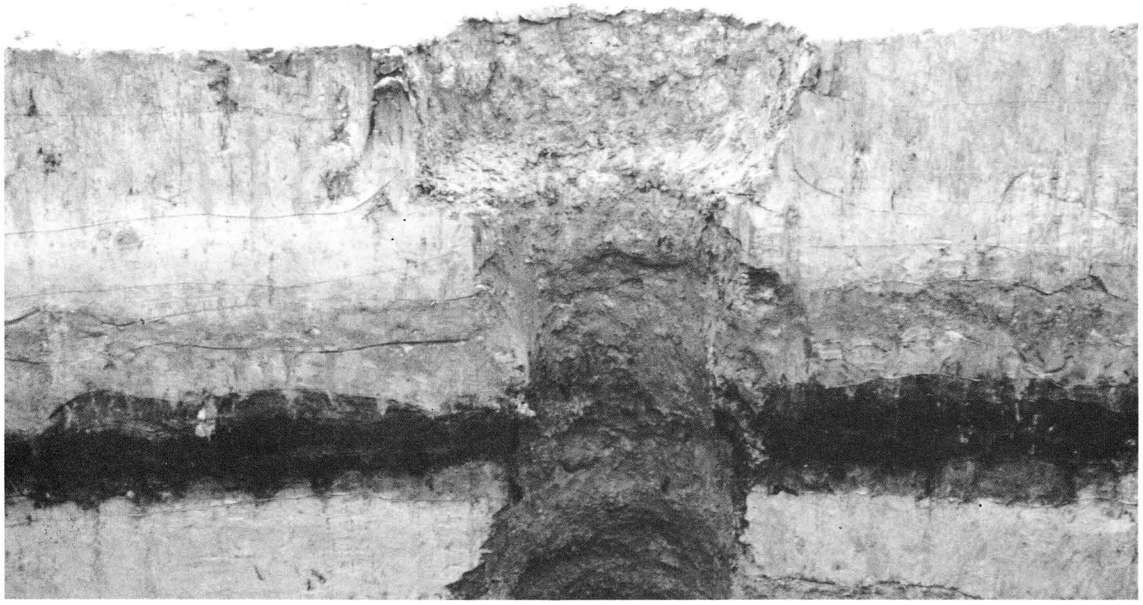




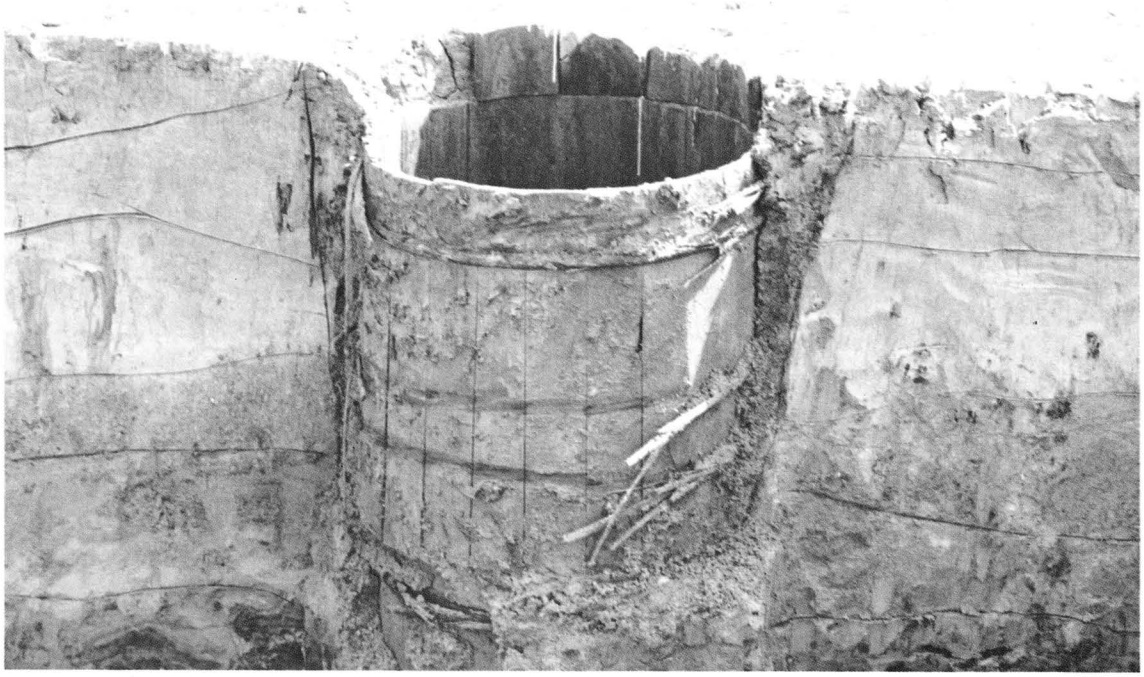
第4地区　P—81，77

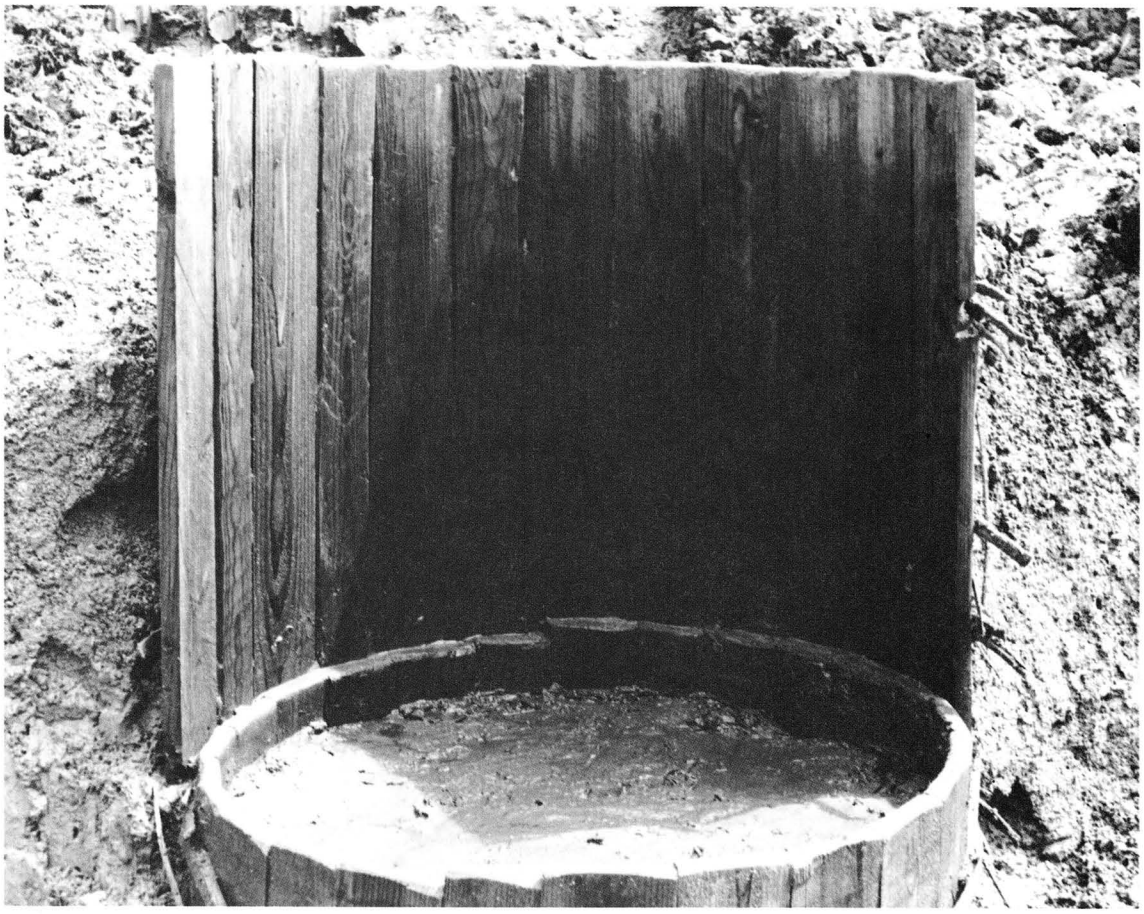


第4地区　E－2　上：平面　下：断面

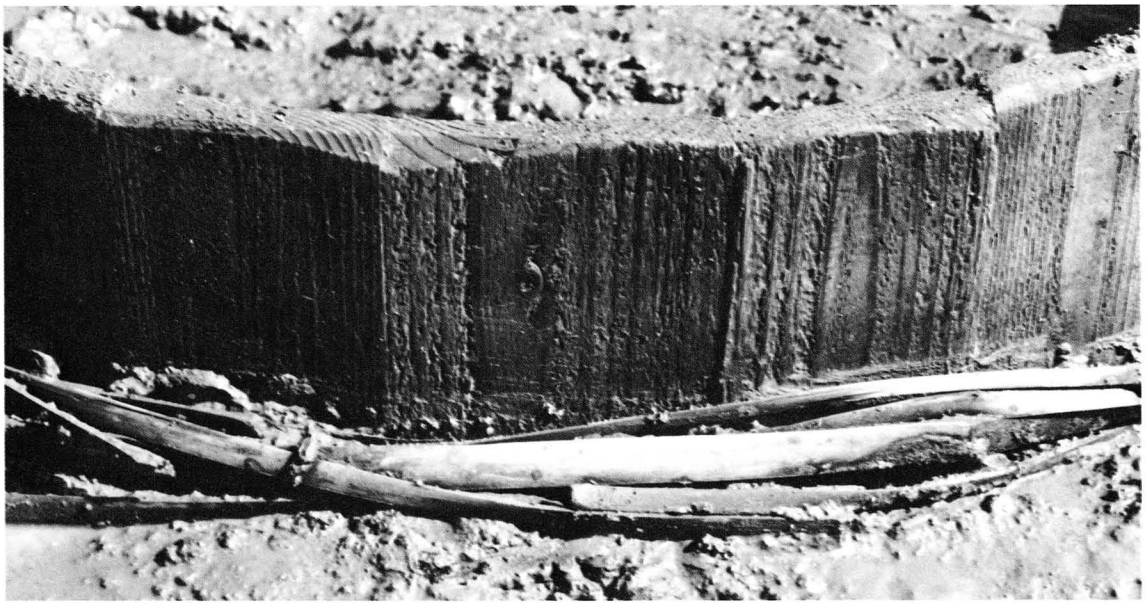


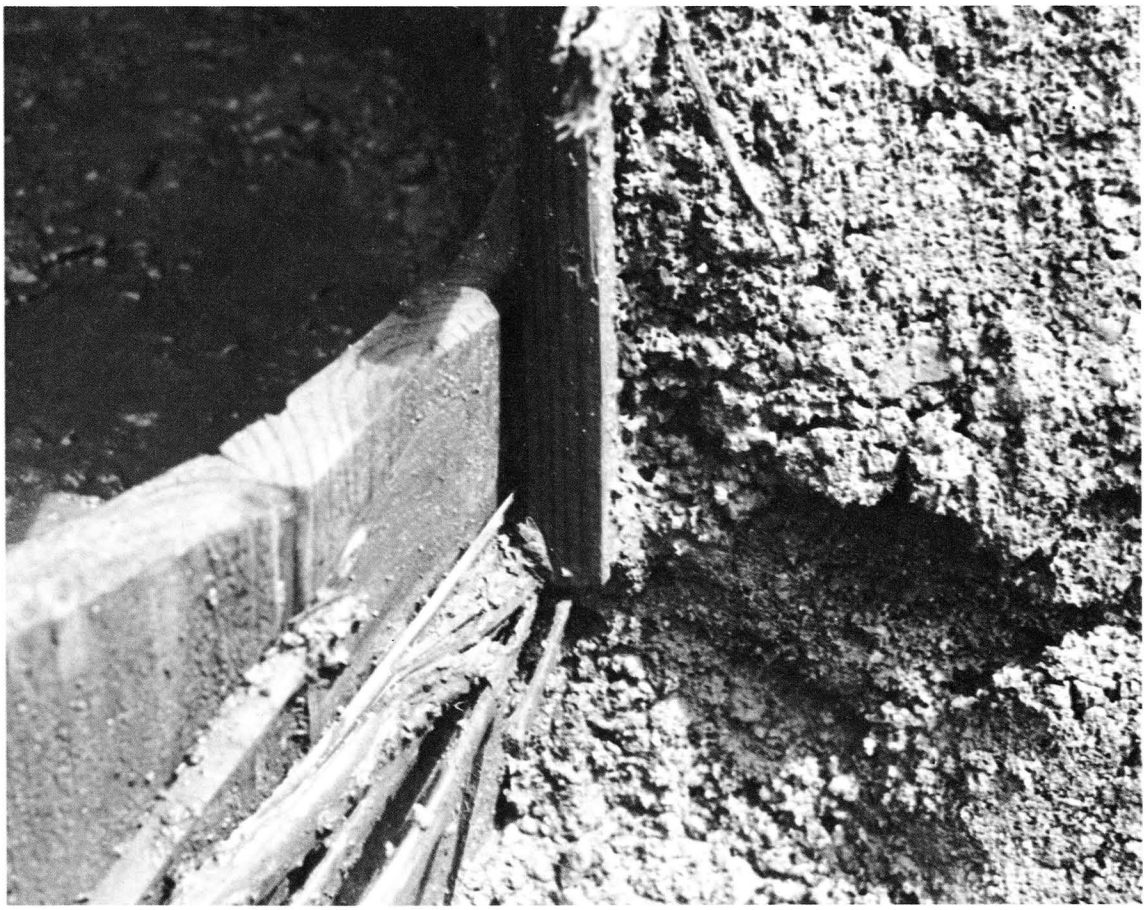
第4地区　上：E—16　平面　下：E—17　断面



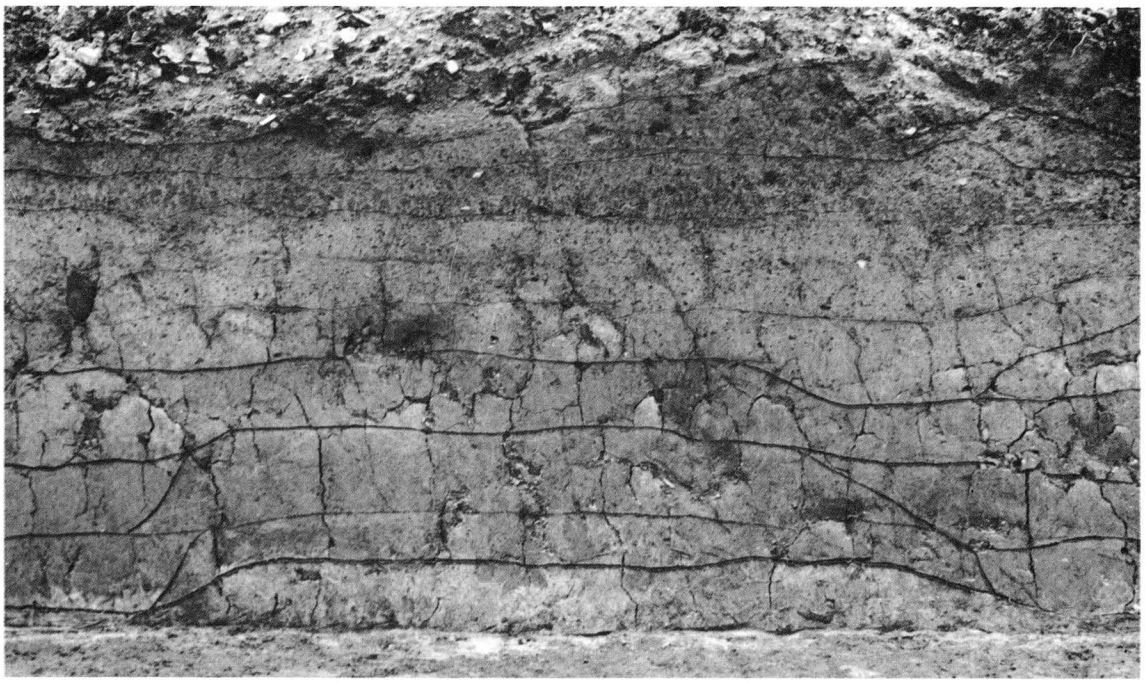


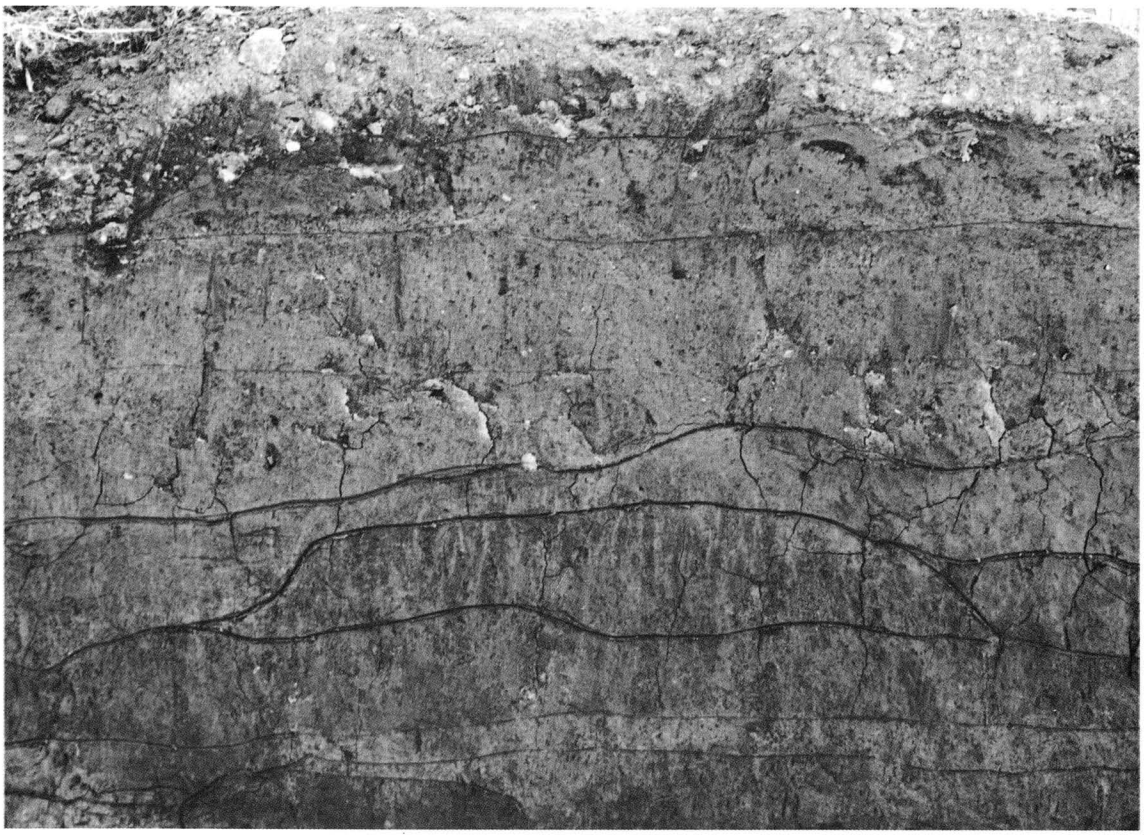
第４地区　Ｅ―12　桶側井戸　１段目の断面



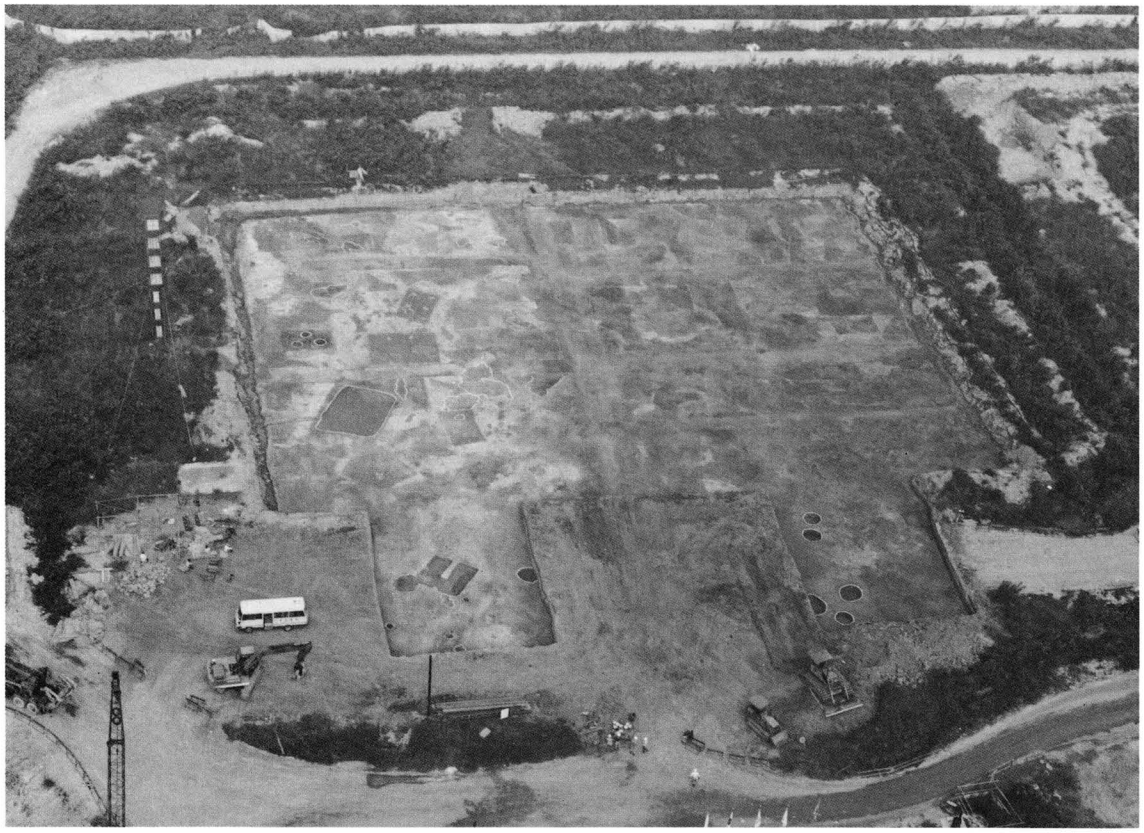


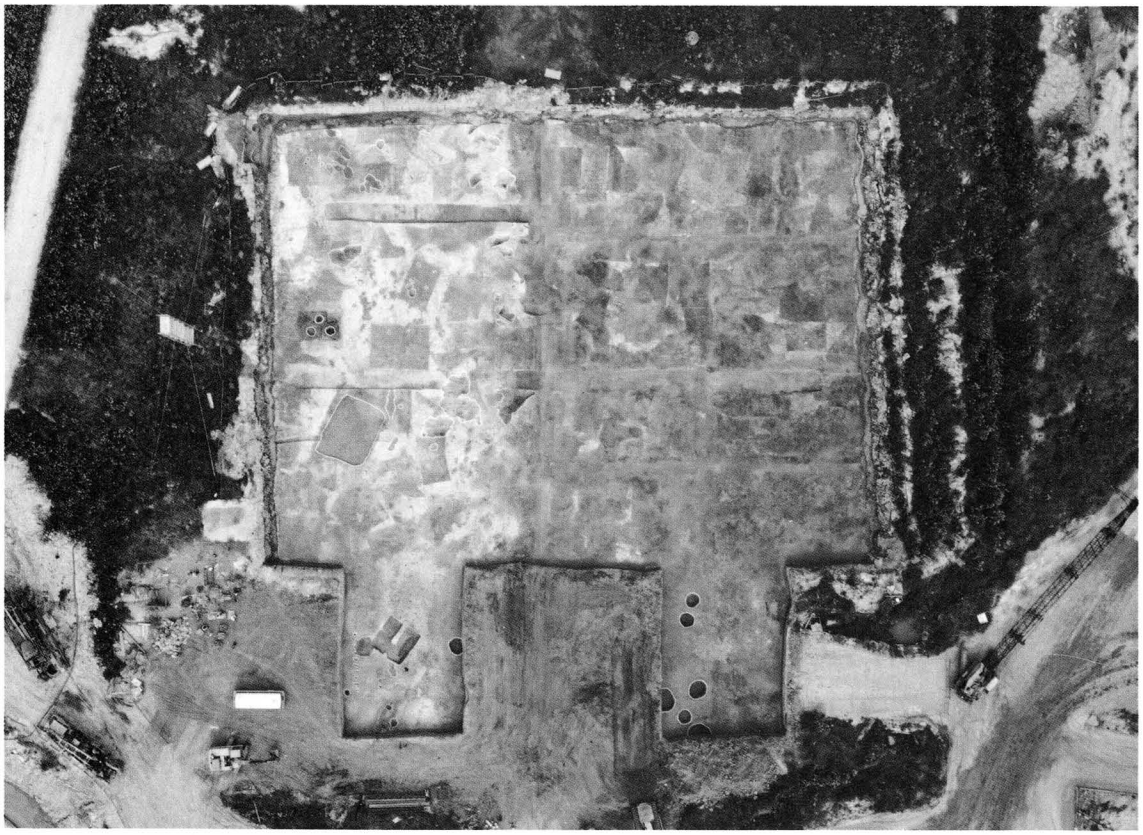
第4地区　E—12　桶側井戸とタガ





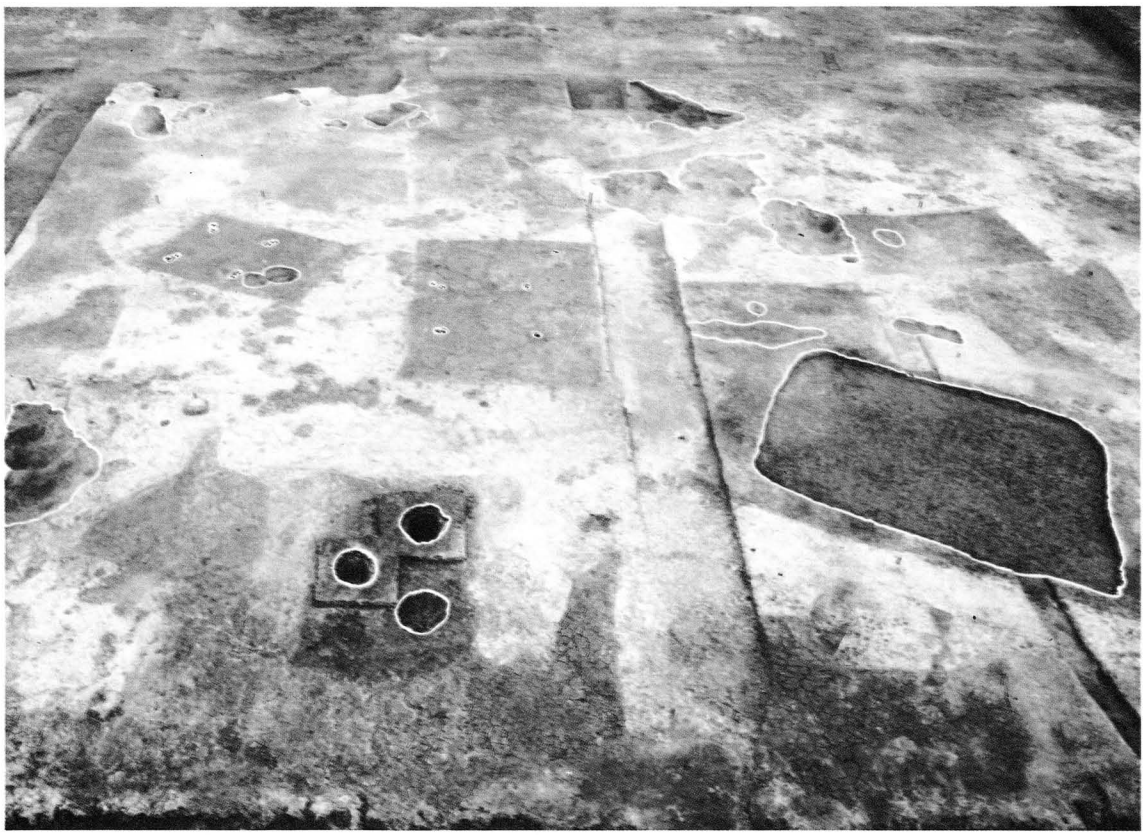
第４地区　条里制遺構　畦畔



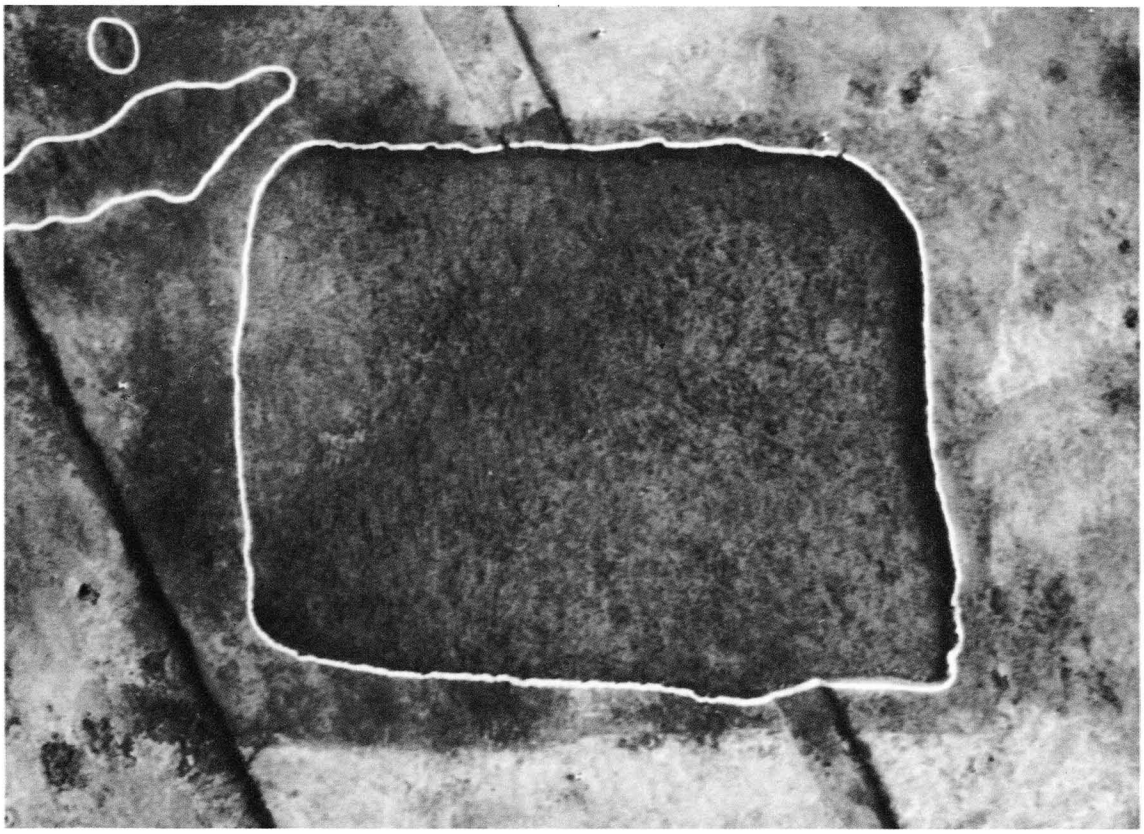


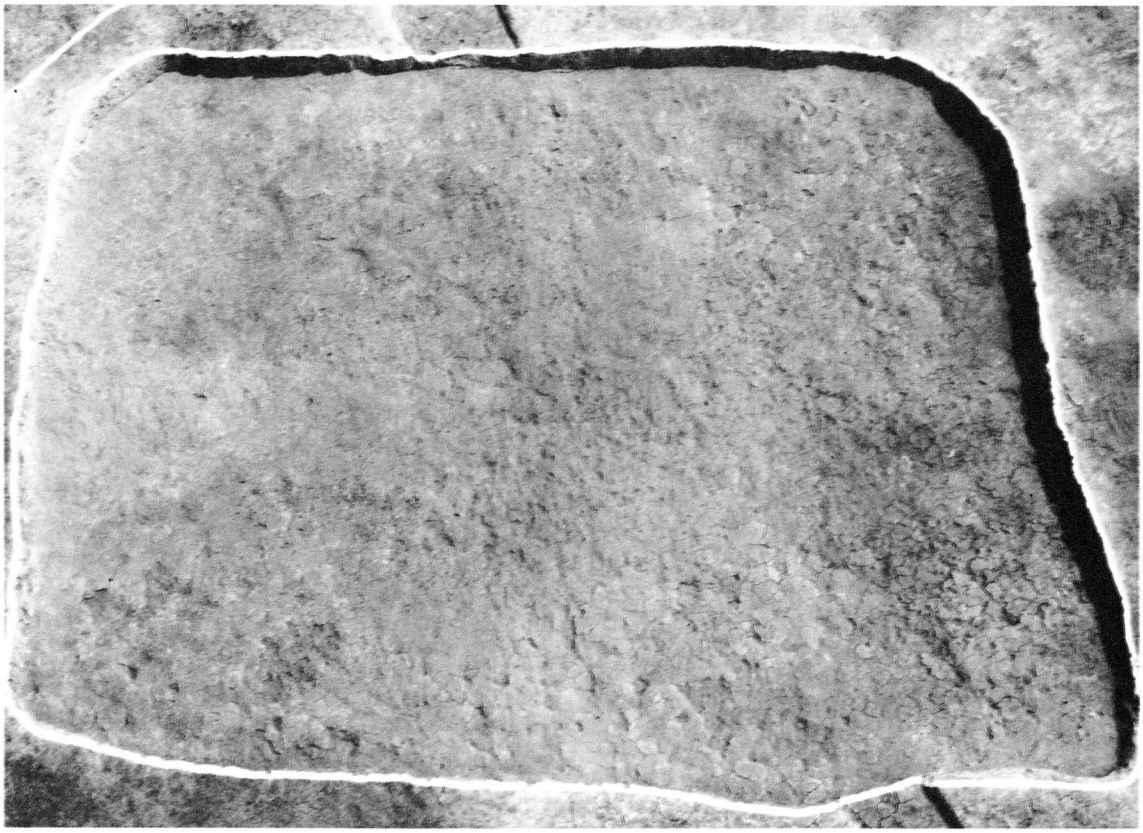
上：第５地区斜航空写真　下：第５地区垂直航空写真

第5地区西半垂直航空写真

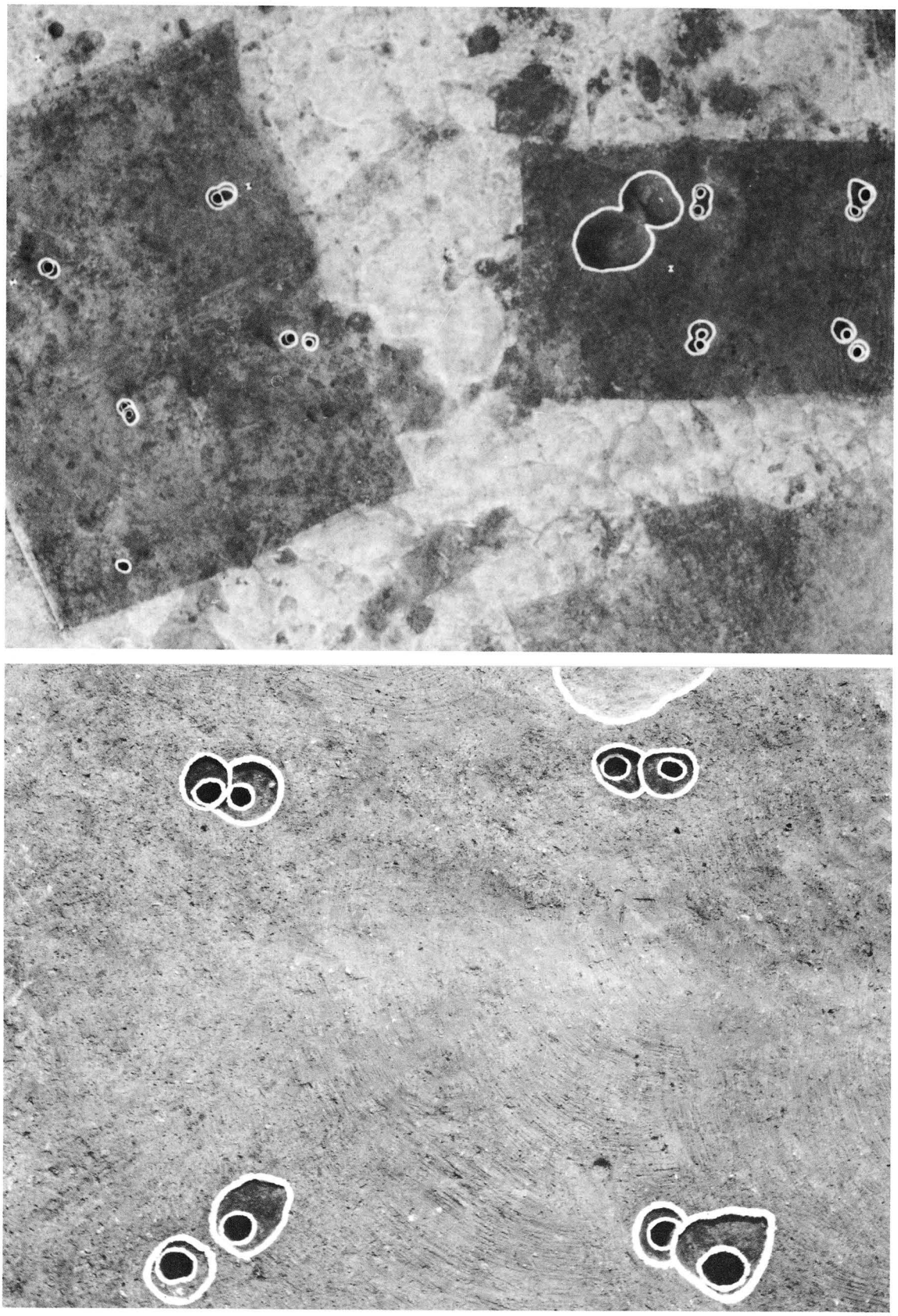


上：A地区全景(西より)　下：C-1地区全景(東より)

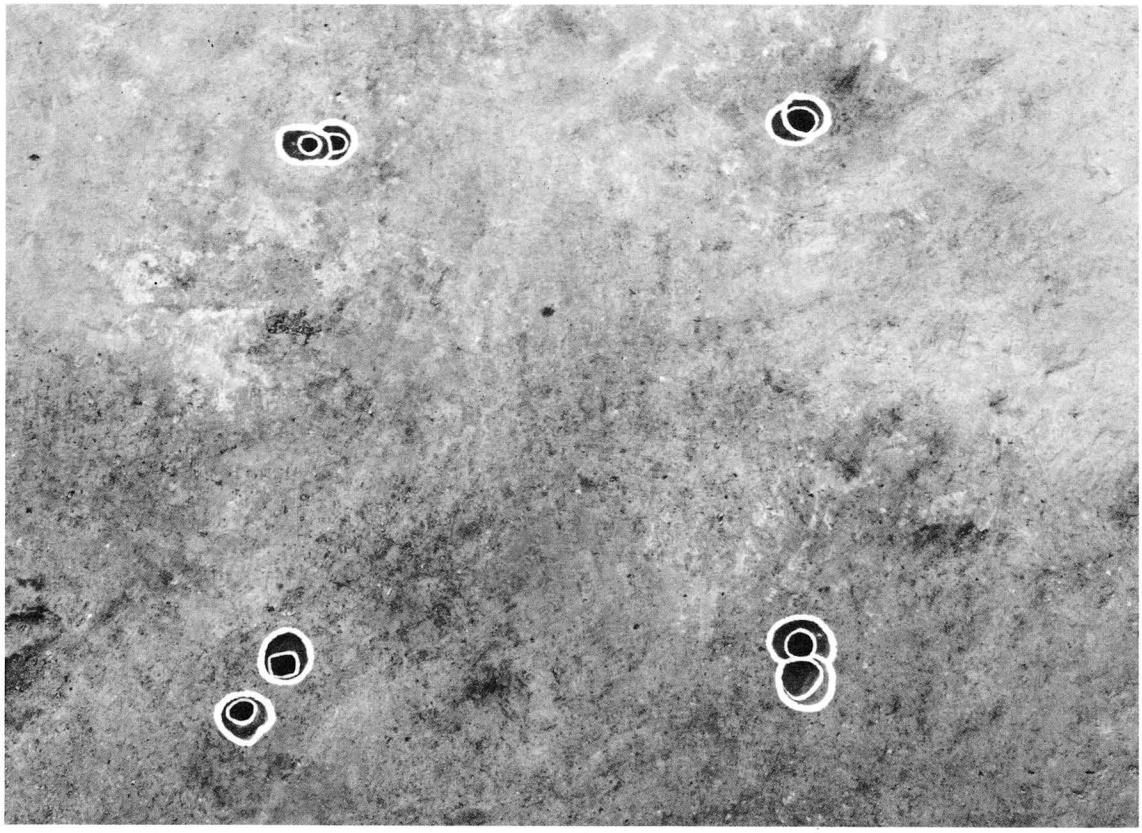


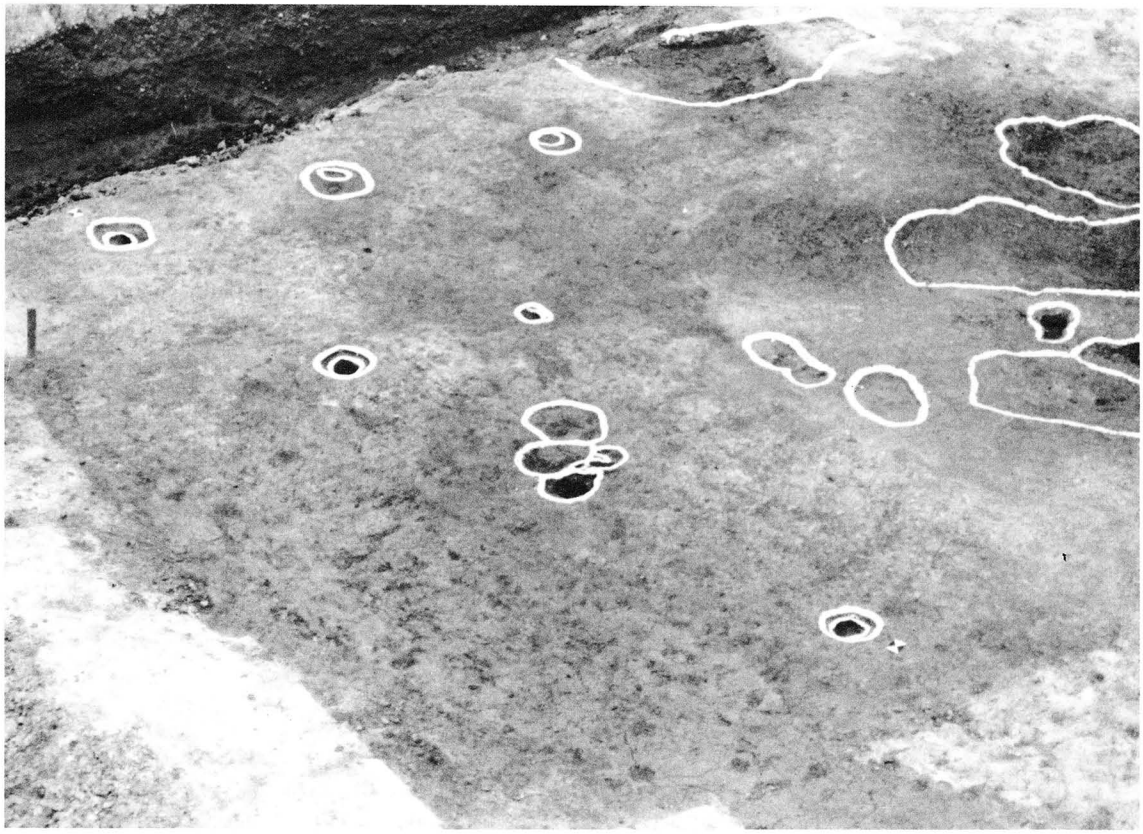


下：ＳＢ01(垂直)　下：ＳＢ01(西より)

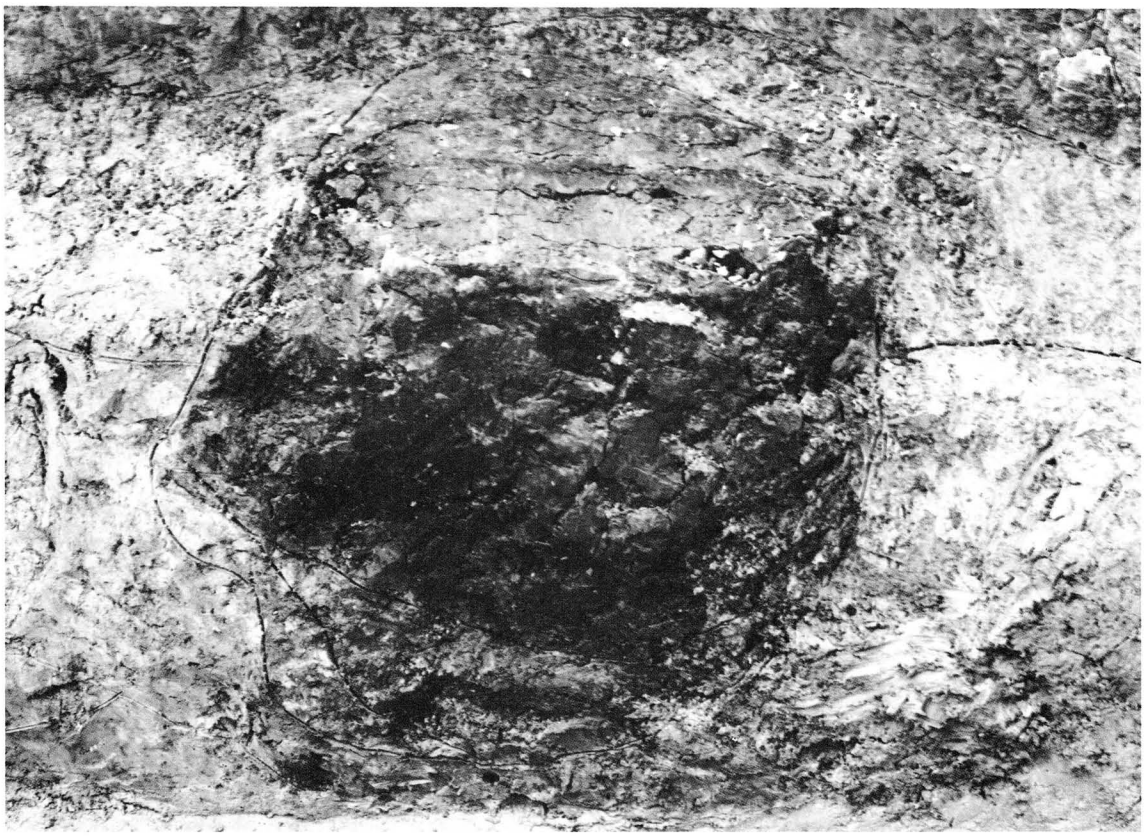


上：ＳＢ02・ＳＢ03(垂直)　下：ＳＢ02(北より)

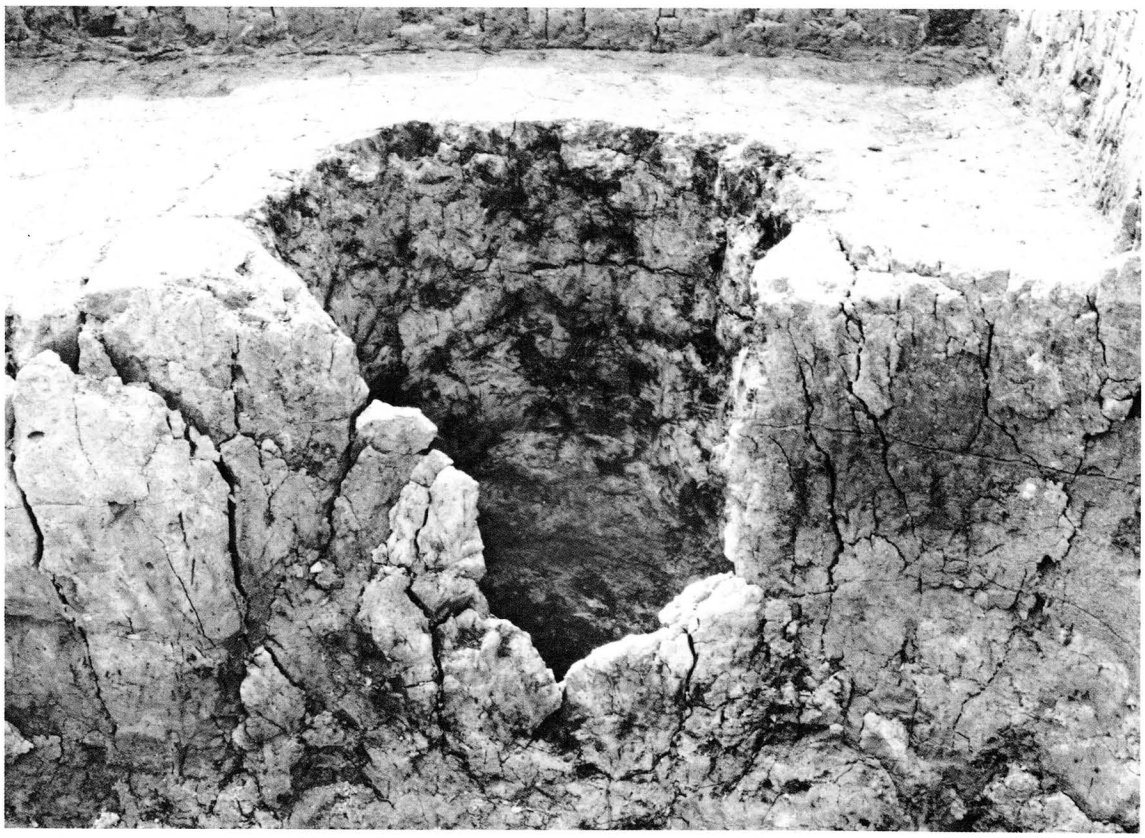




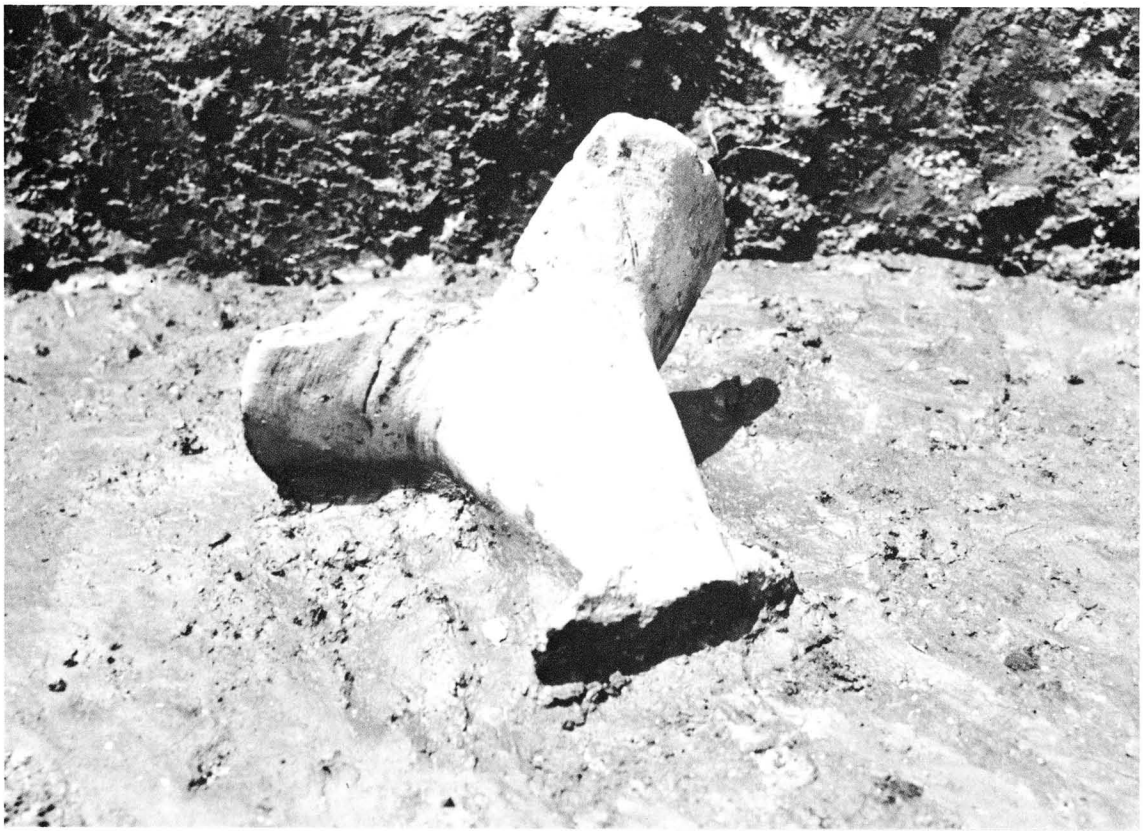
上：ＳＢ03(北より)　下：ＳＡ03(南西より)



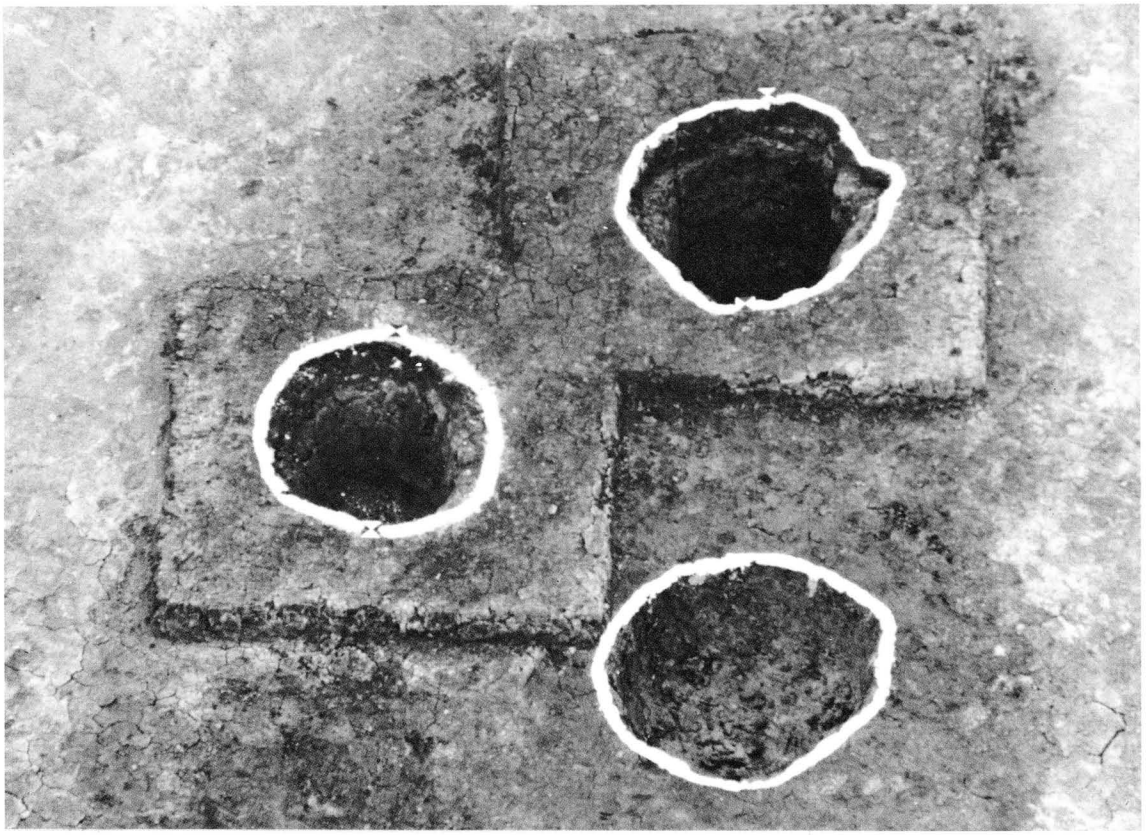
上：ＳＥ01(掘削前)　下：ＳＥ01(東より)

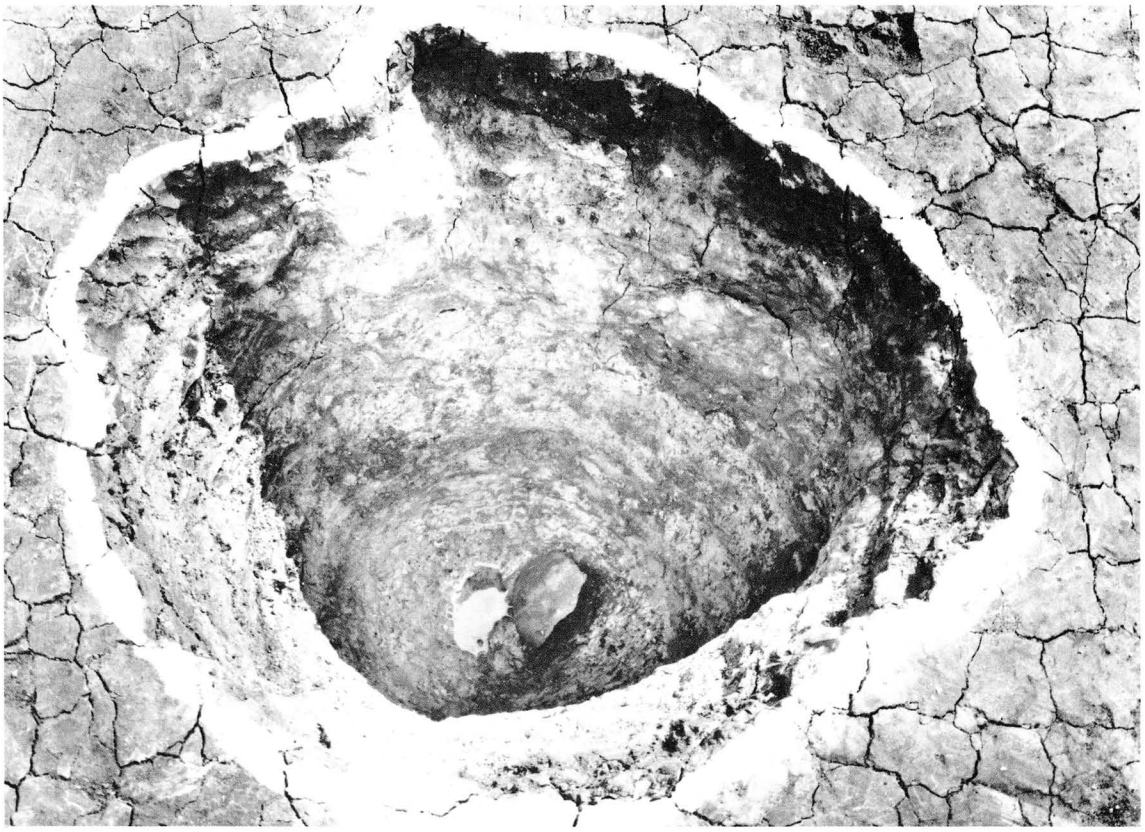


ＳＥ02(西より)　下：ＳＥ02(南より)

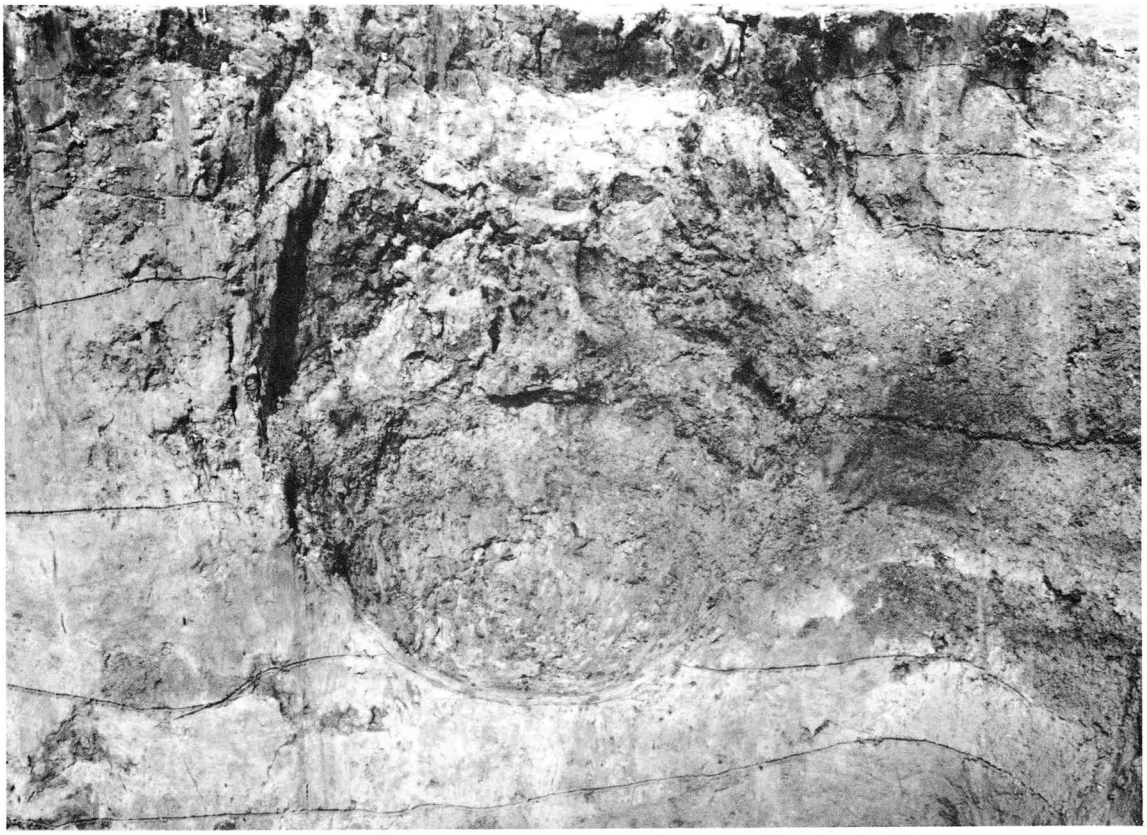


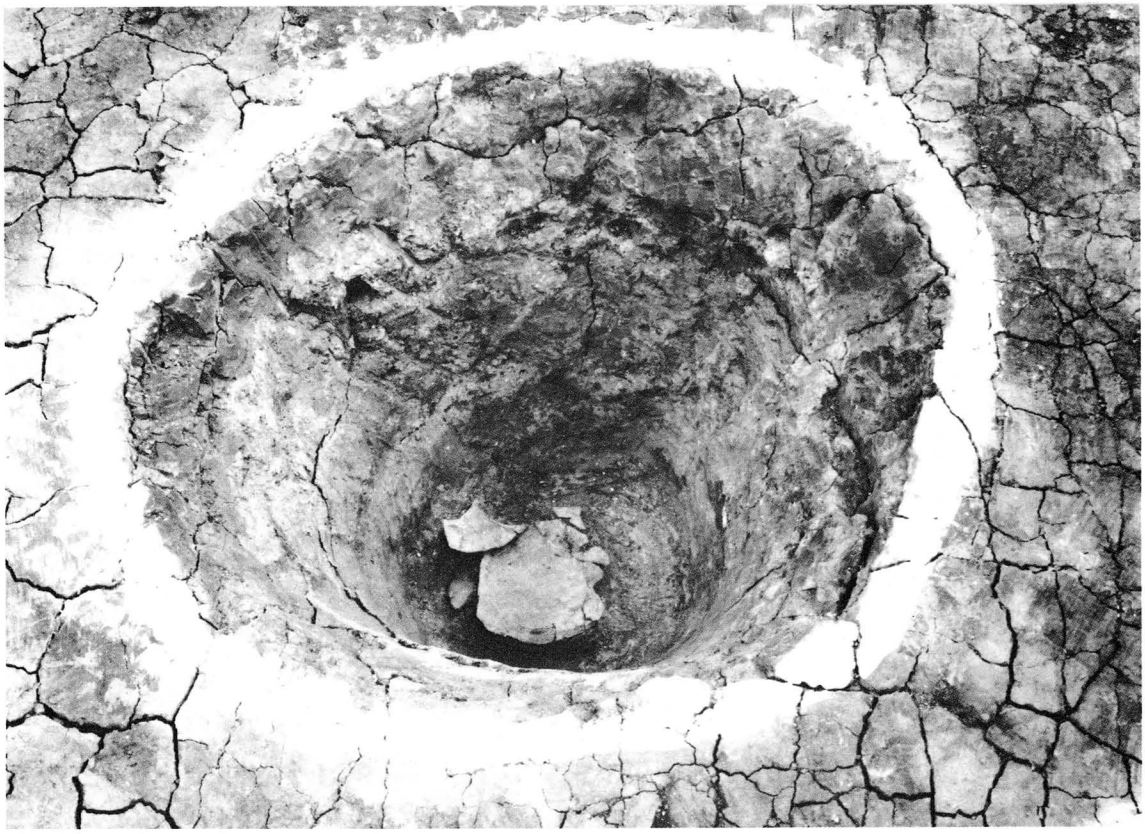
上：ＳＥ02内土師器出土状況　下：ＳＥ02内土師器出土状況



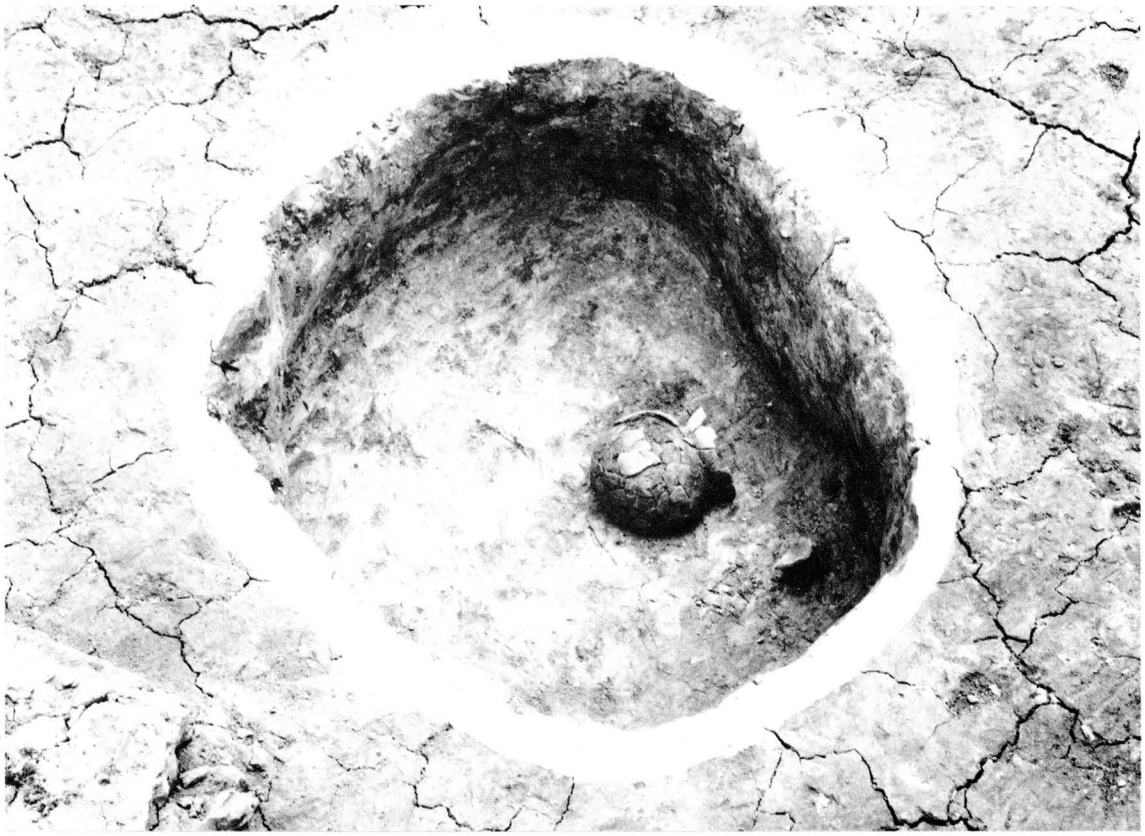


上：ＳＥ03・ＳＫ10・ＳＫ29(西より)　下：ＳＥ03(西より)

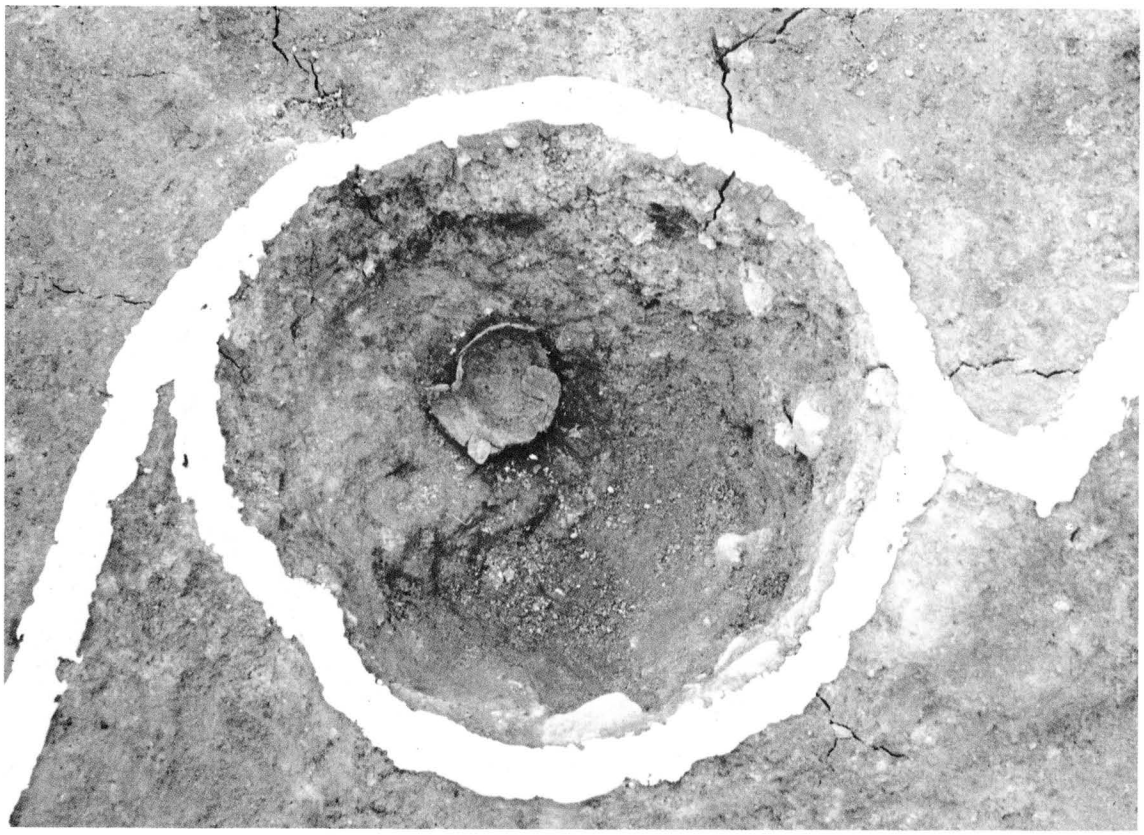


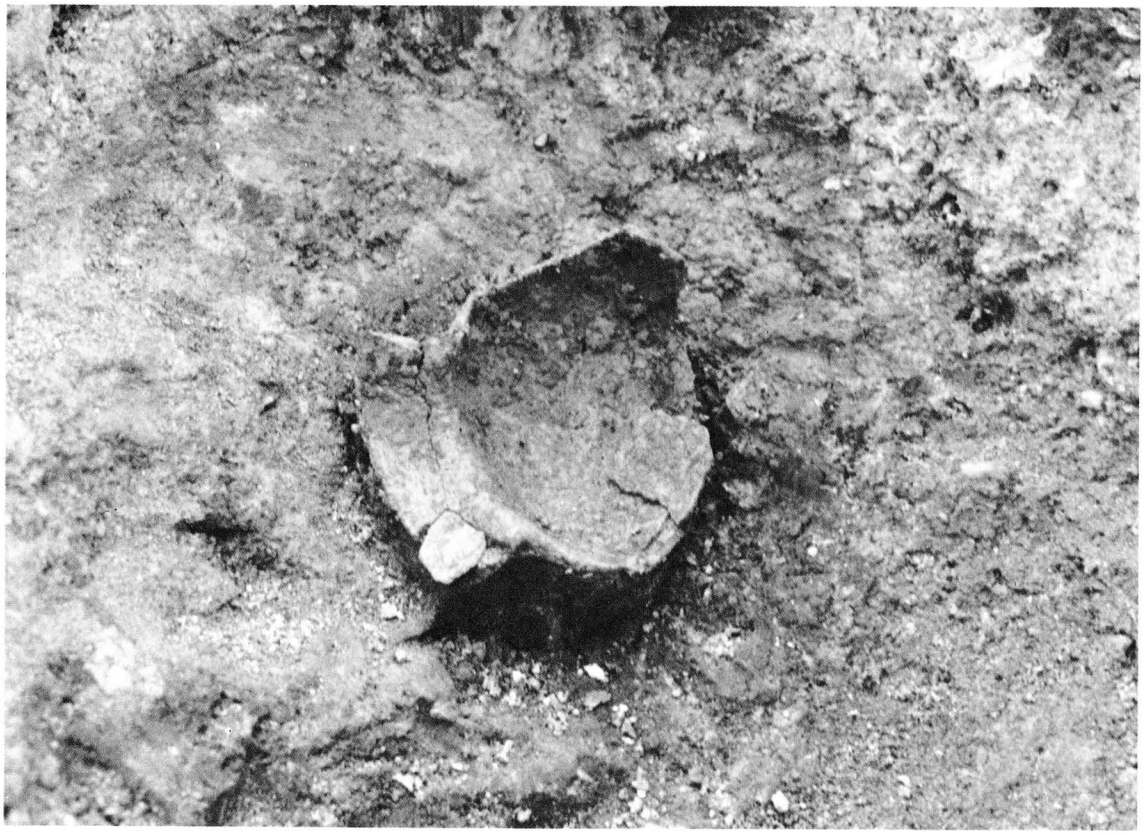


上：ＳＥ03断ち割り（南より）　下：ＳＫ10（北より）

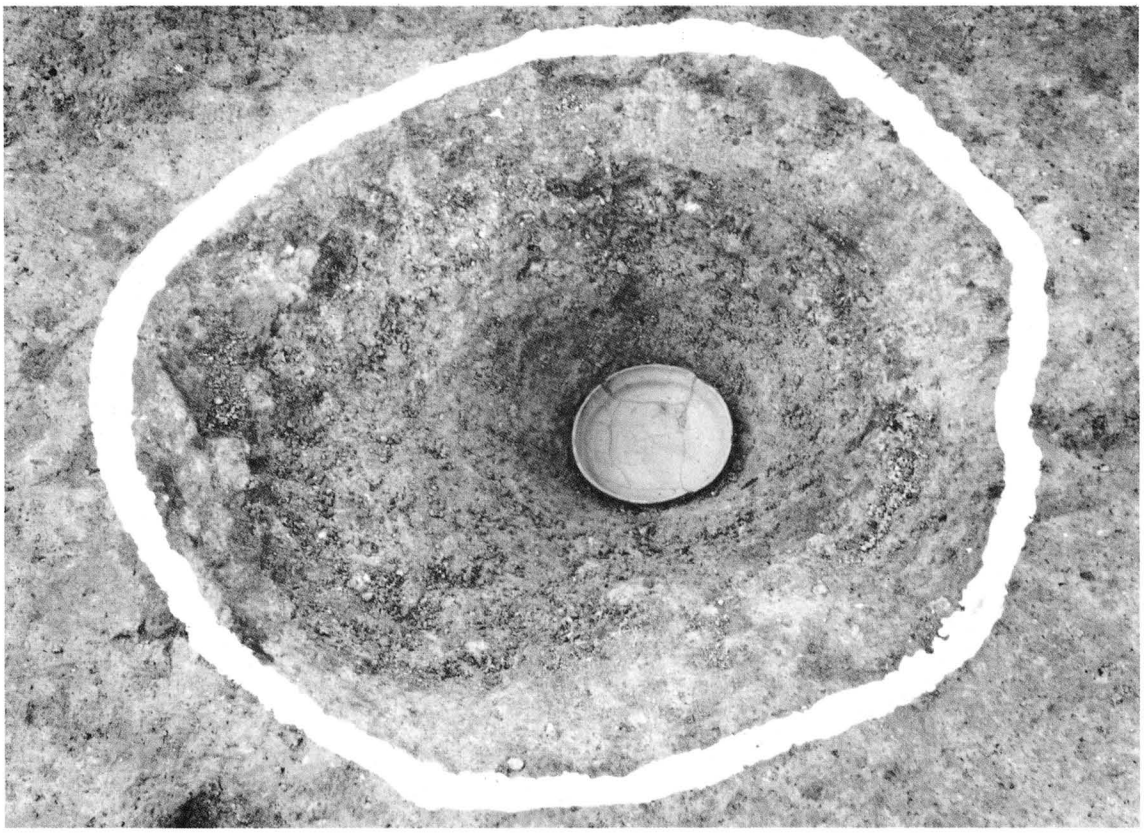


上：ＳＫ29(北より)　下：ＳＫ29内土師器出土状況

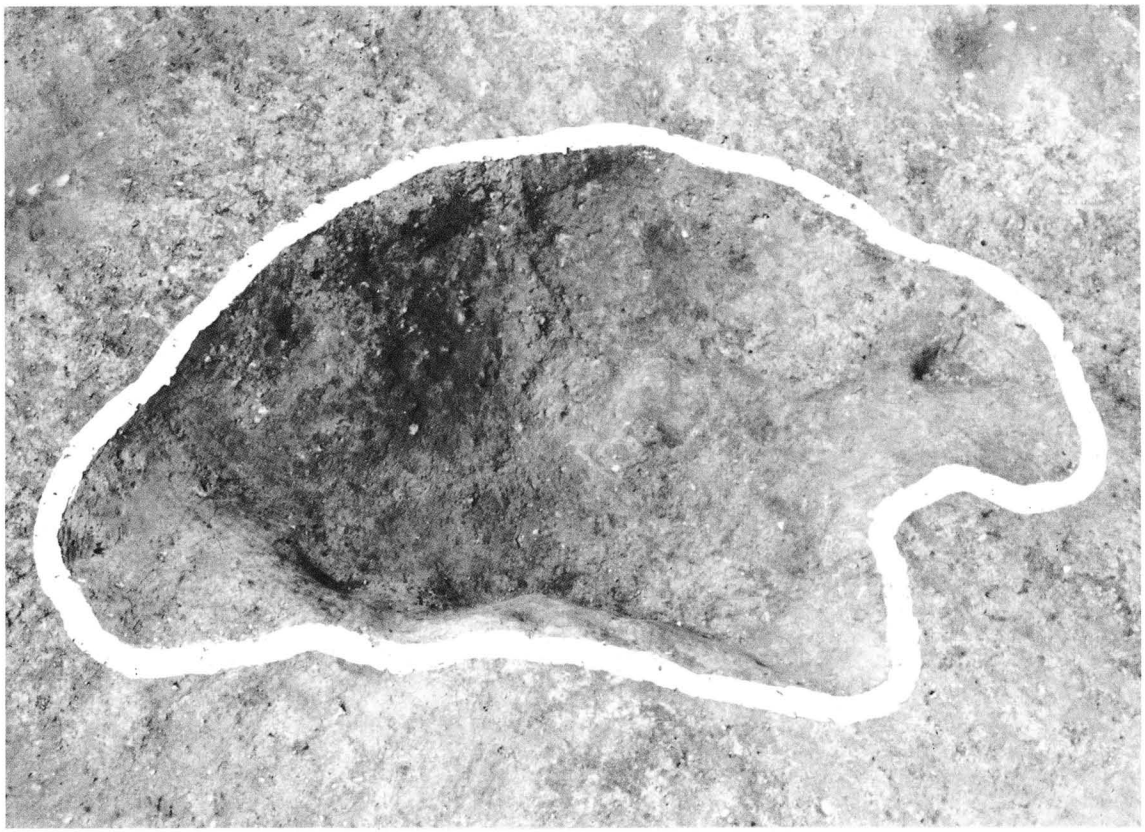


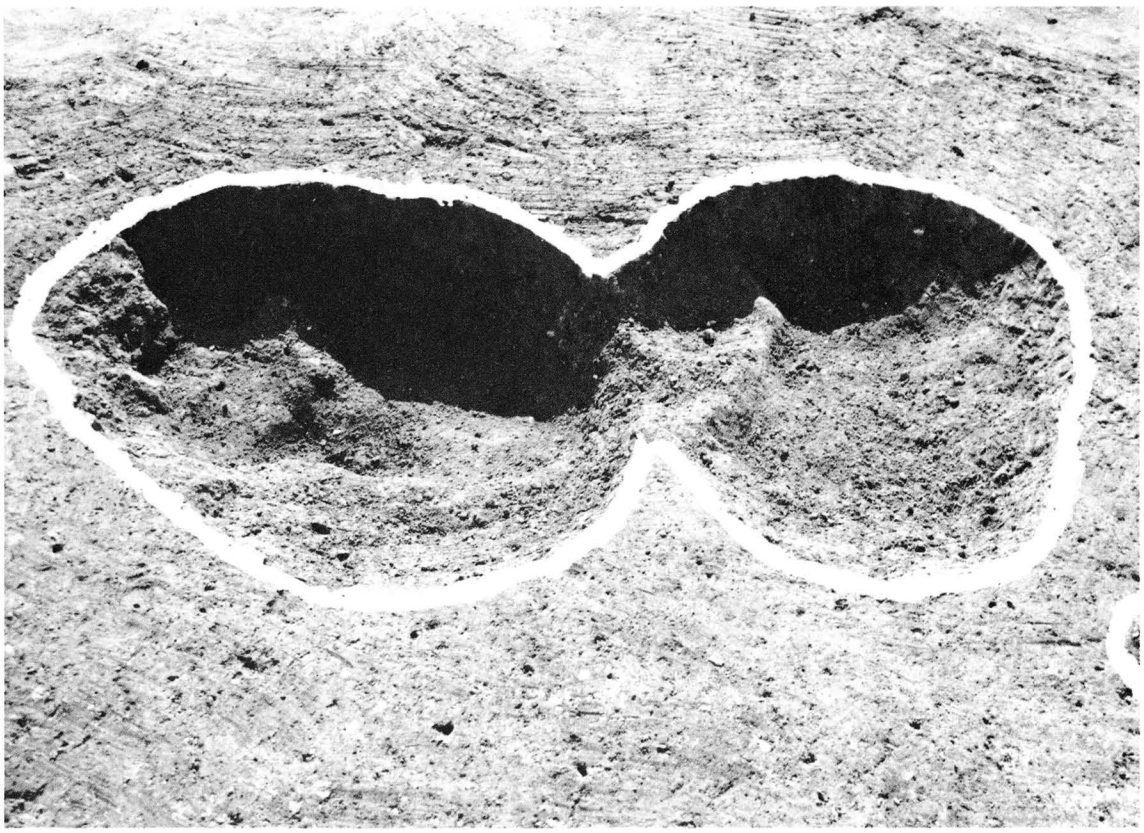


上：ＳＫ35(東より)　下：ＳＫ35内土師器出土状況

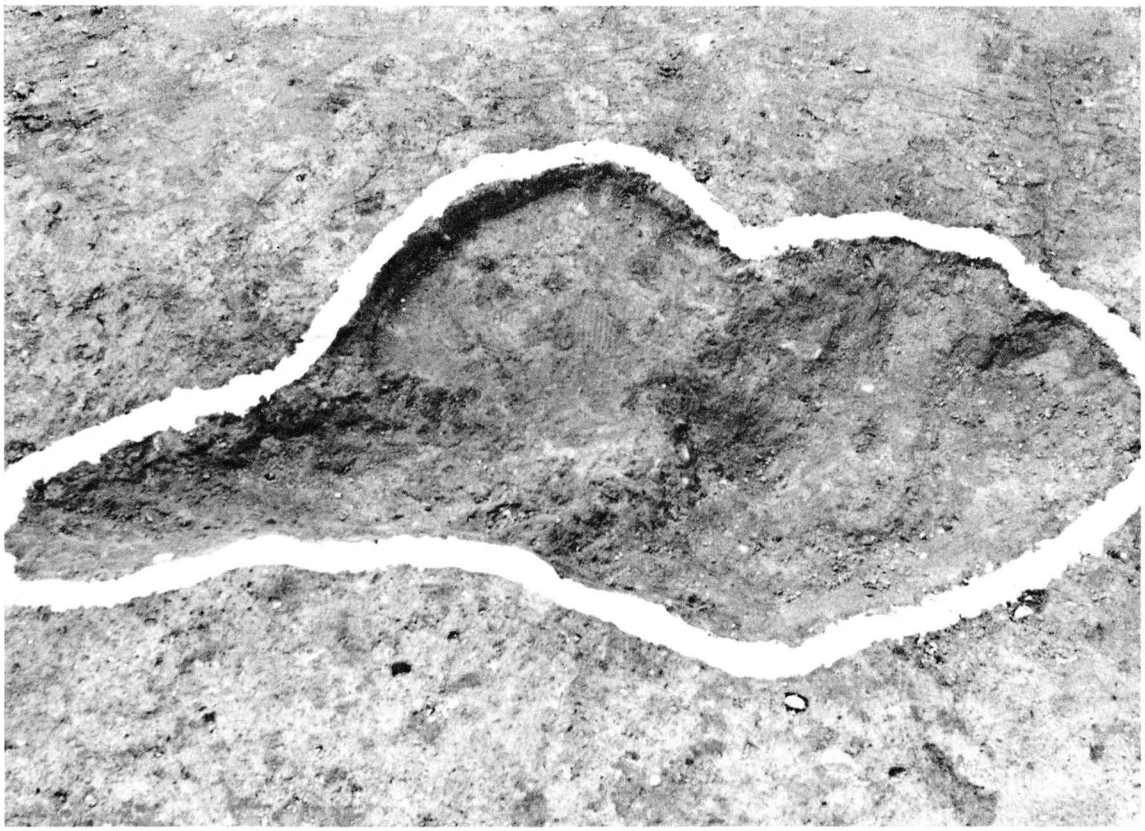


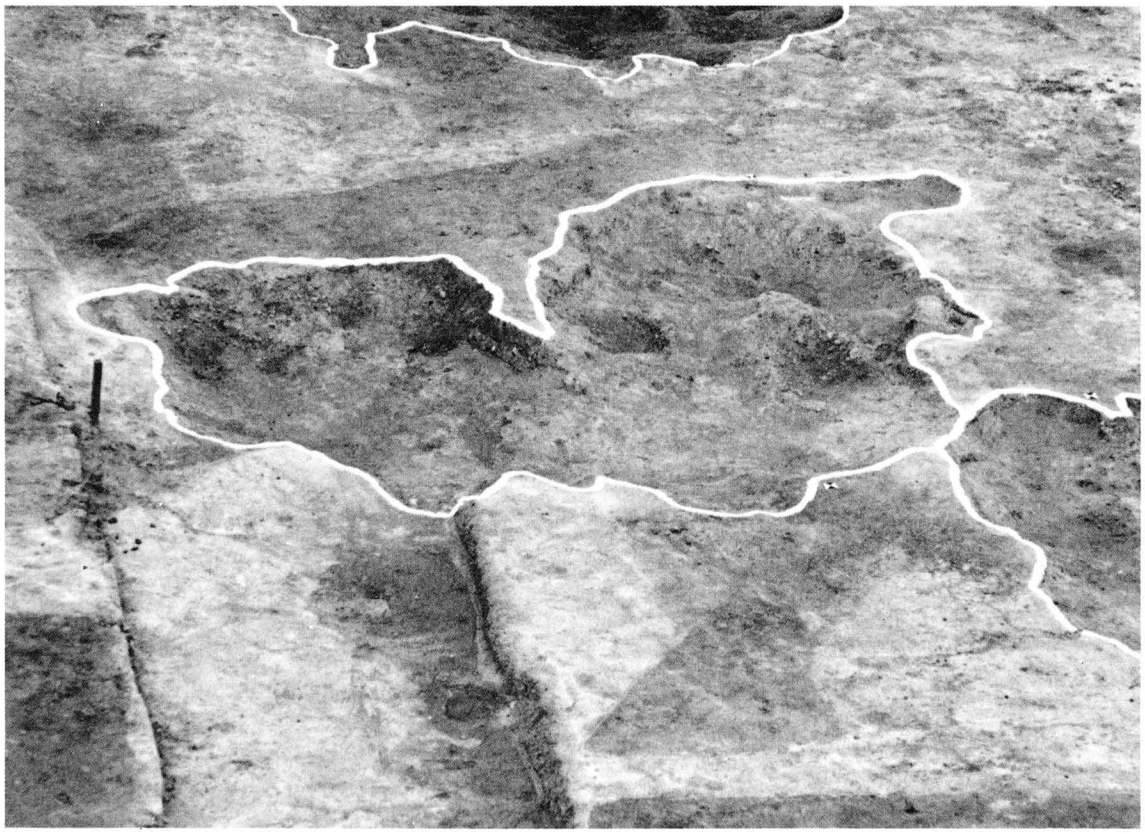
上：ＳＫ41(北より)　下：ＳＫ41内土師器出土状況



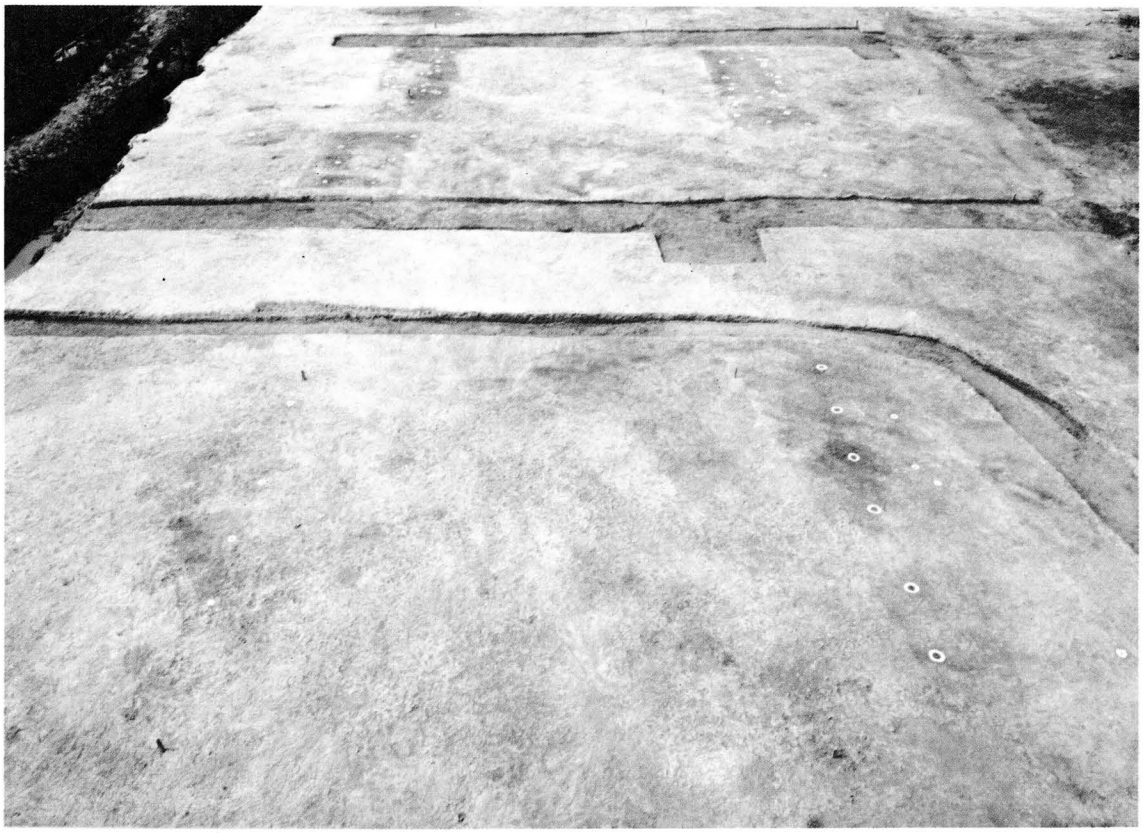


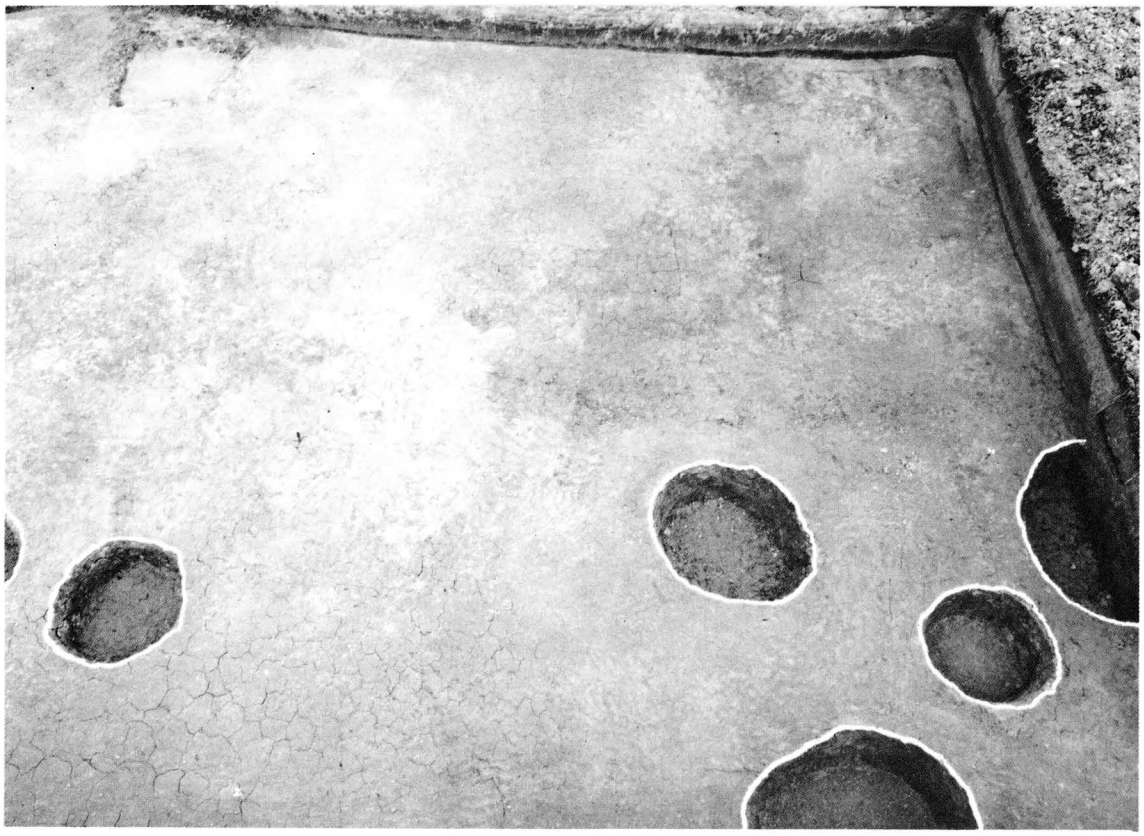
上：ＳＫ16(東より)　下：ＳＫ13(東より)



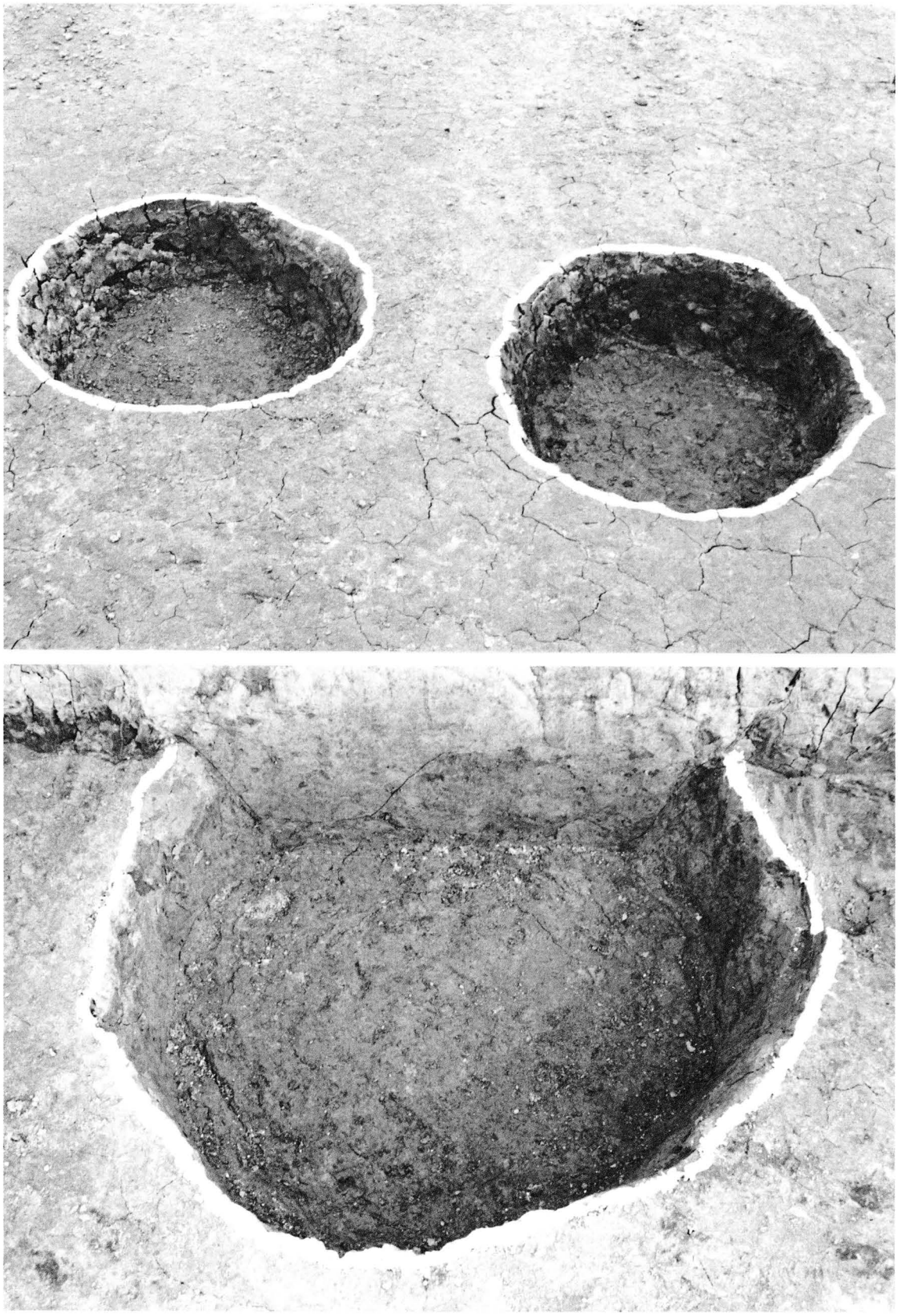


上：ＳＫ23(北より)　下：ＳＫ24(西より)

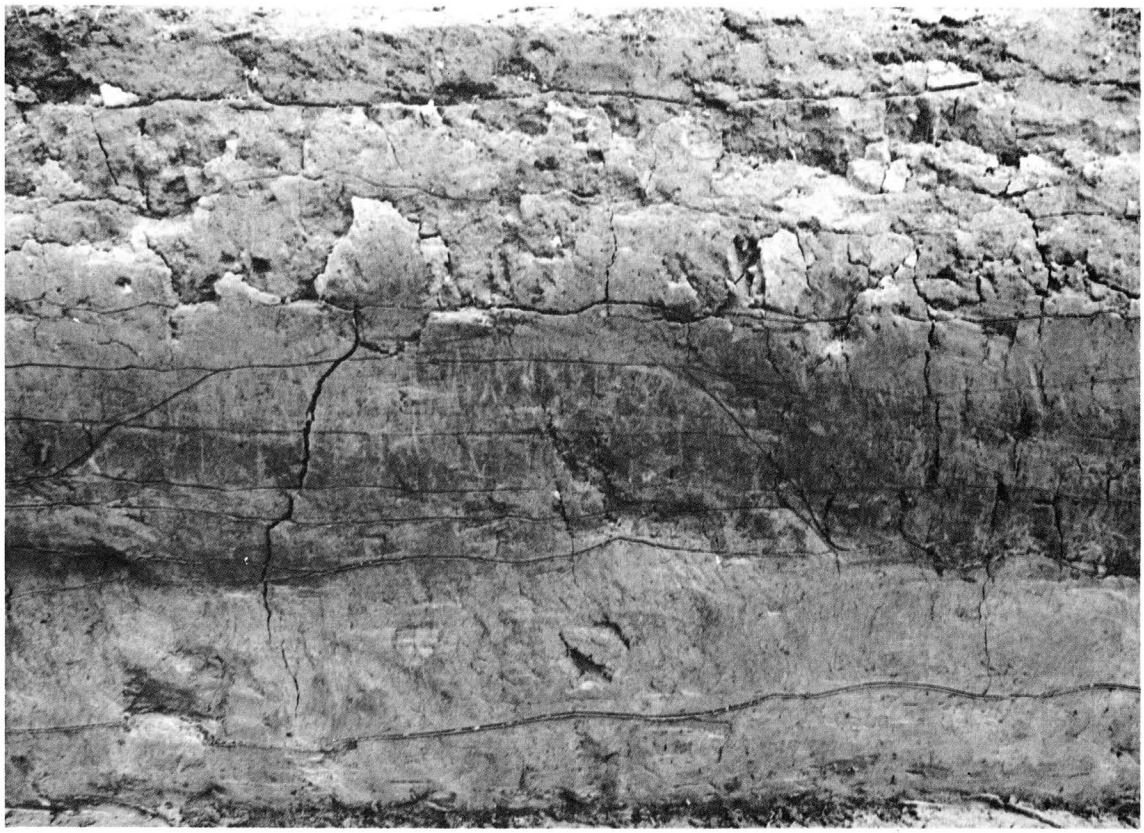


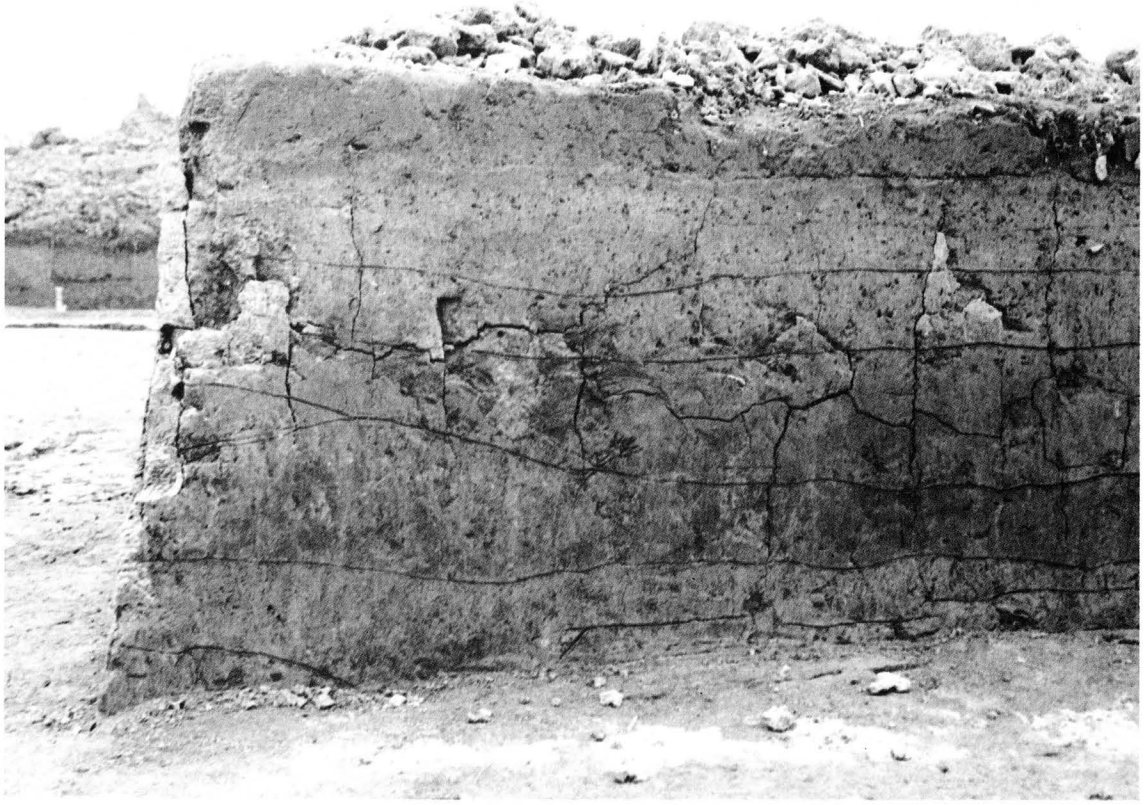


上：ＳＡ01〈左〉・ＳＡ02〈右〉(南より)　下：Ｃ-2地区耕作用井戸群(西より)



上：ＳＥ06(西より)　下：ＳＥ04(西より)

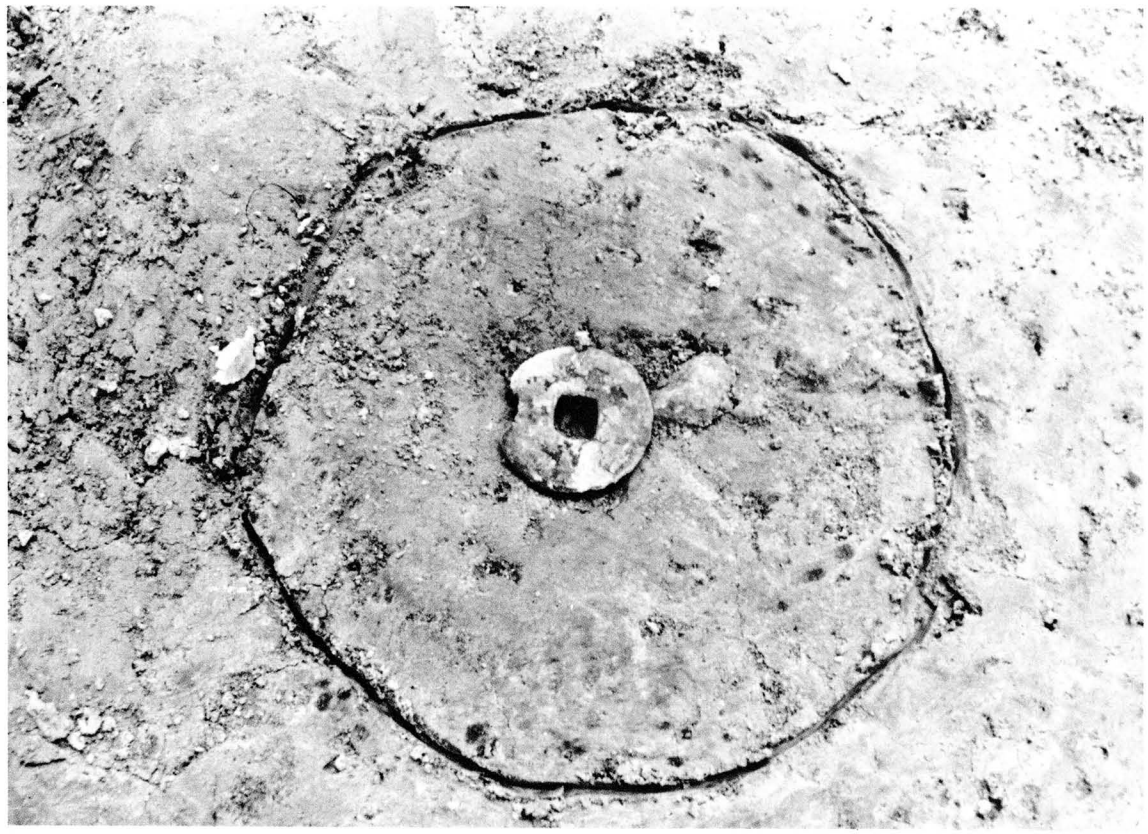


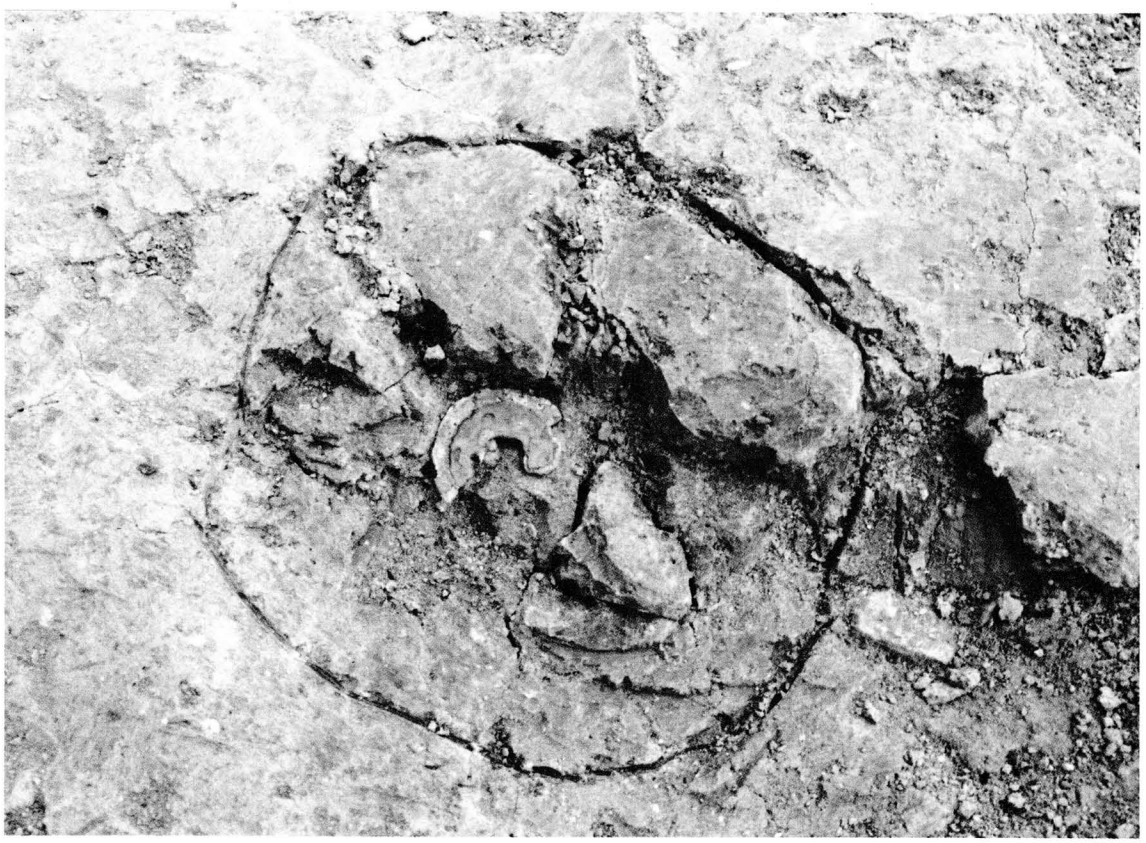


上：条里畦畔(北壁)　下：条里畦畔(南壁)

上：地質調査第10地点(東より)

下：地質調査第７地点(西より)

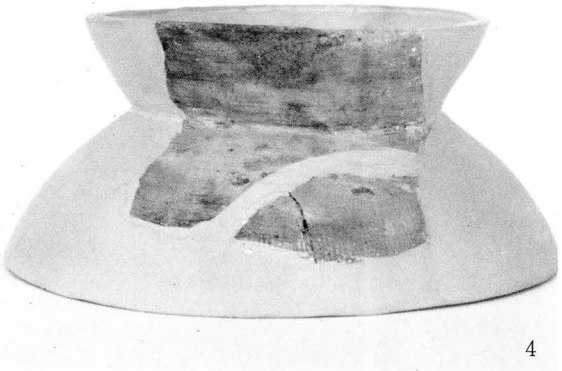




上：「至和元宝」出土状況（C－Ⅱ37）　下：「天禧通宝」出土状況（C－Ⅱ16）

上左：石鏃出土状況(C－Ⅱ37)　上右：石鏃出土状況(C－Ⅱ46)
下左：鉄器出土状況(C－Ⅱ 6)　下右：須恵器出土状況(C－Ⅱ15)

1


4

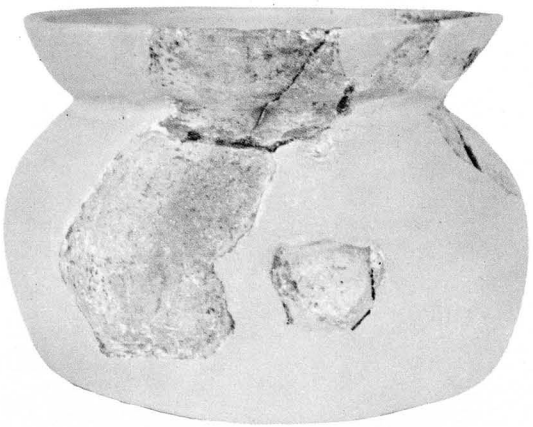
2

5

3

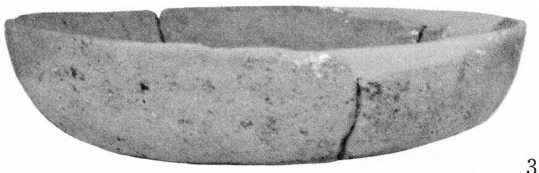
6

遺構内出土遺物



1

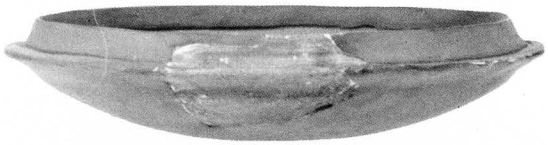
2



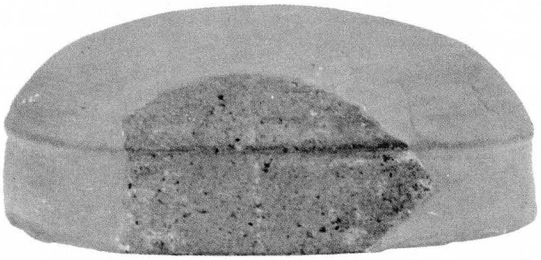
3

4

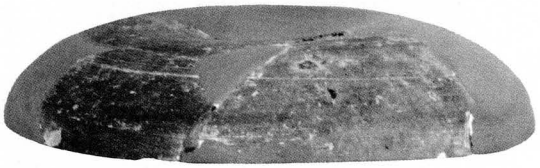
5



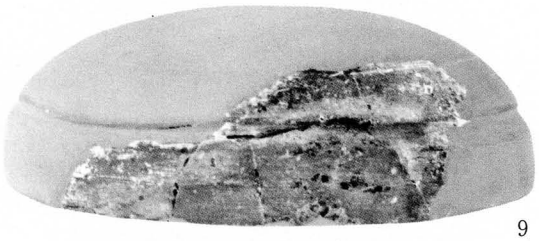
6



7



8



9

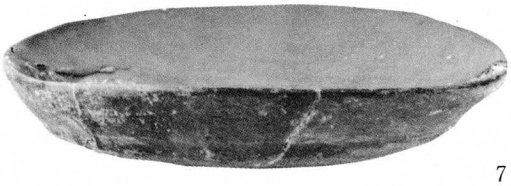
10

遺構内・包含層出土遺物

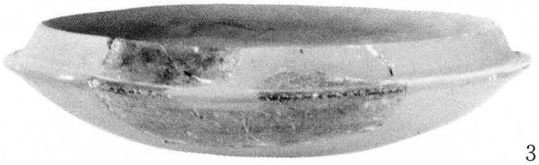
1

6

2

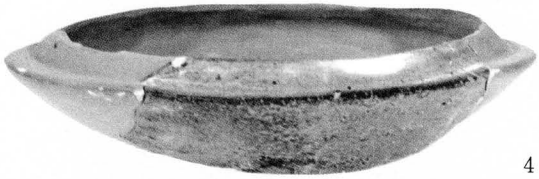


7

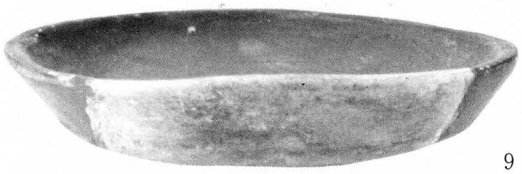


3

8



4

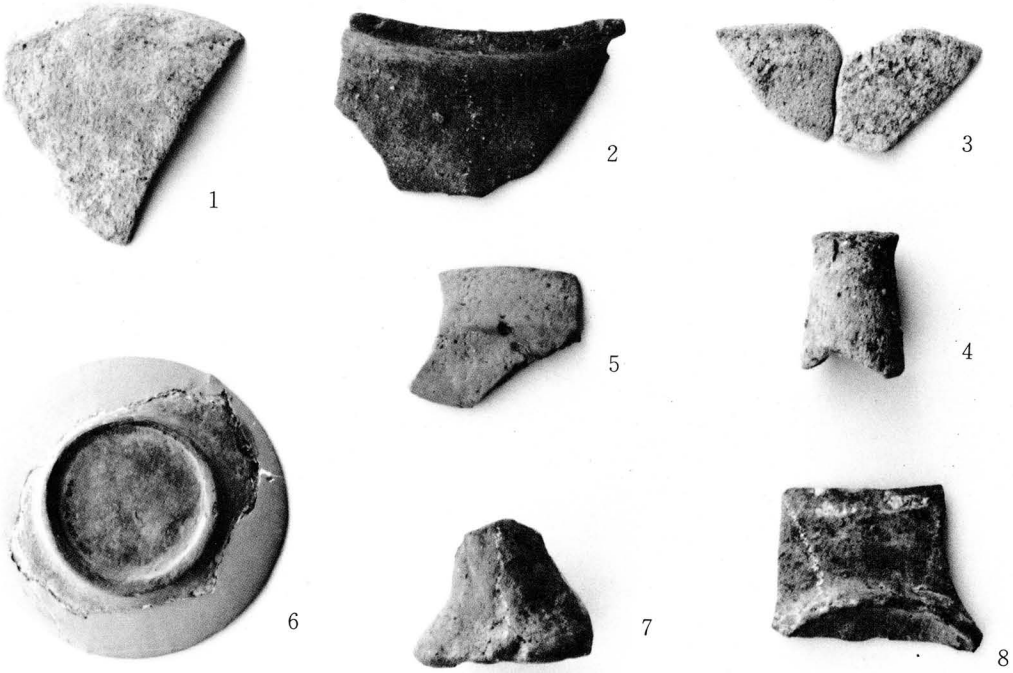


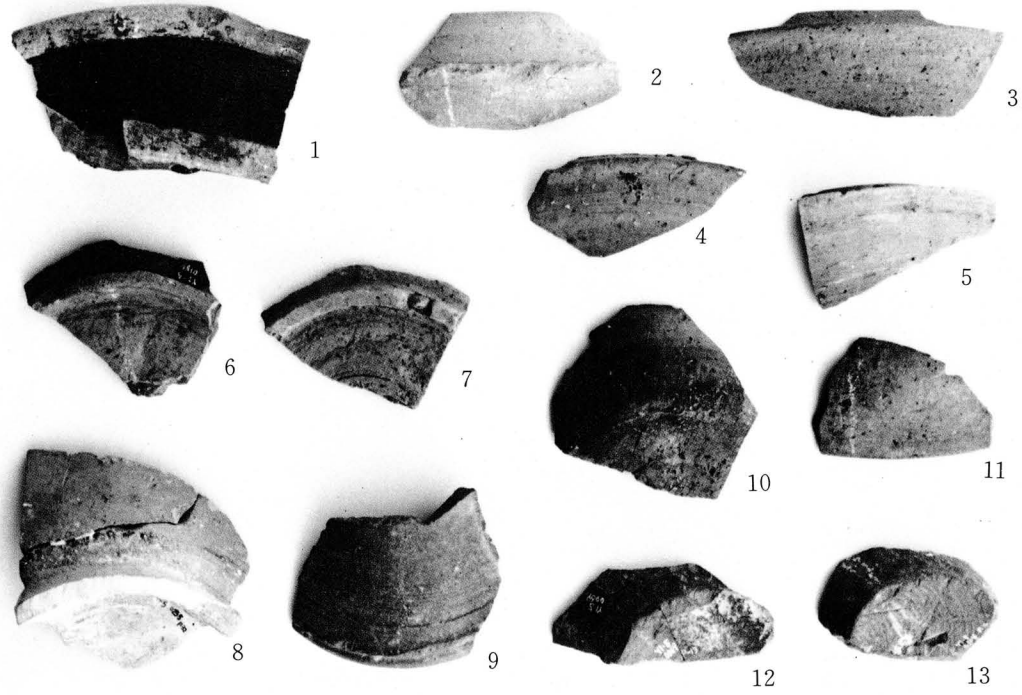
9

5

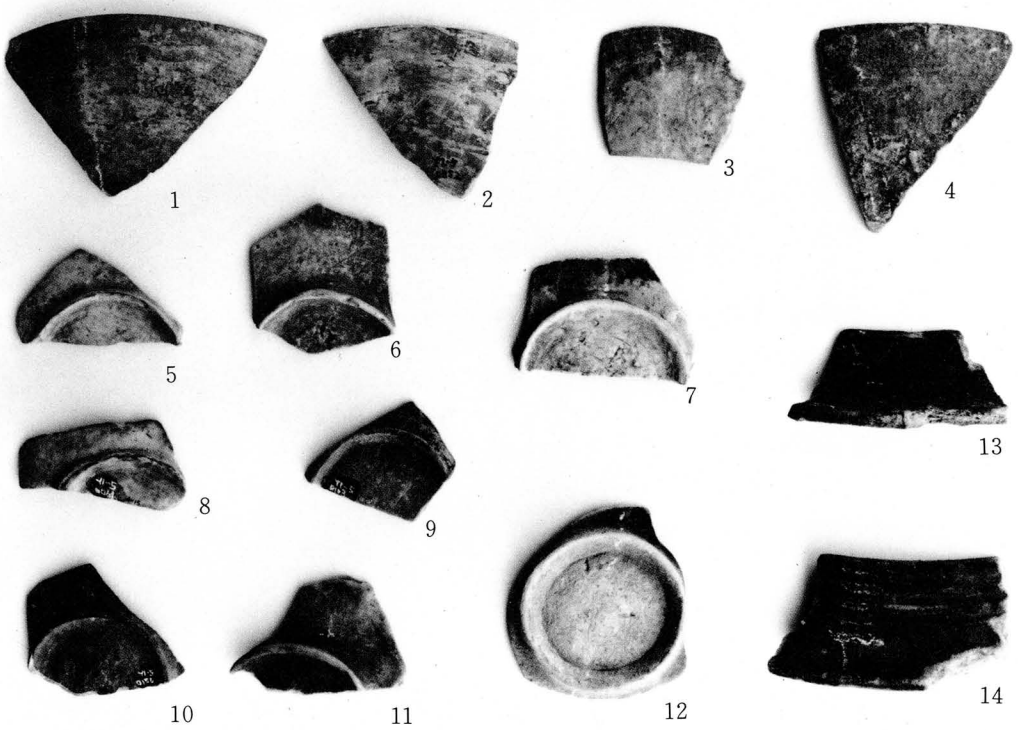
10

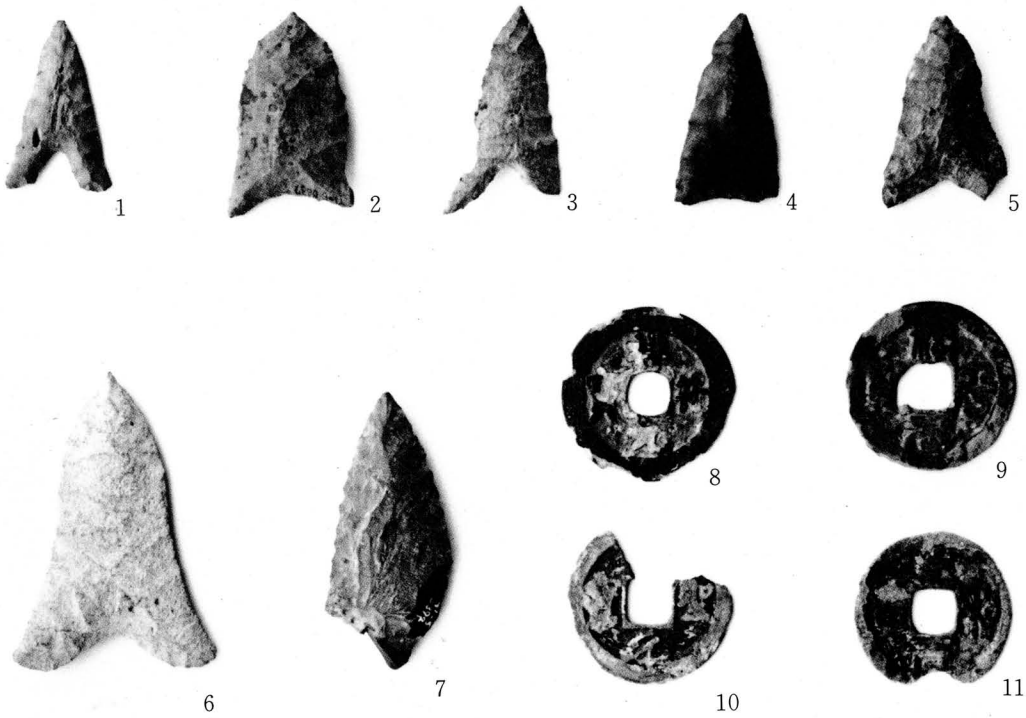
包含層出土遺物





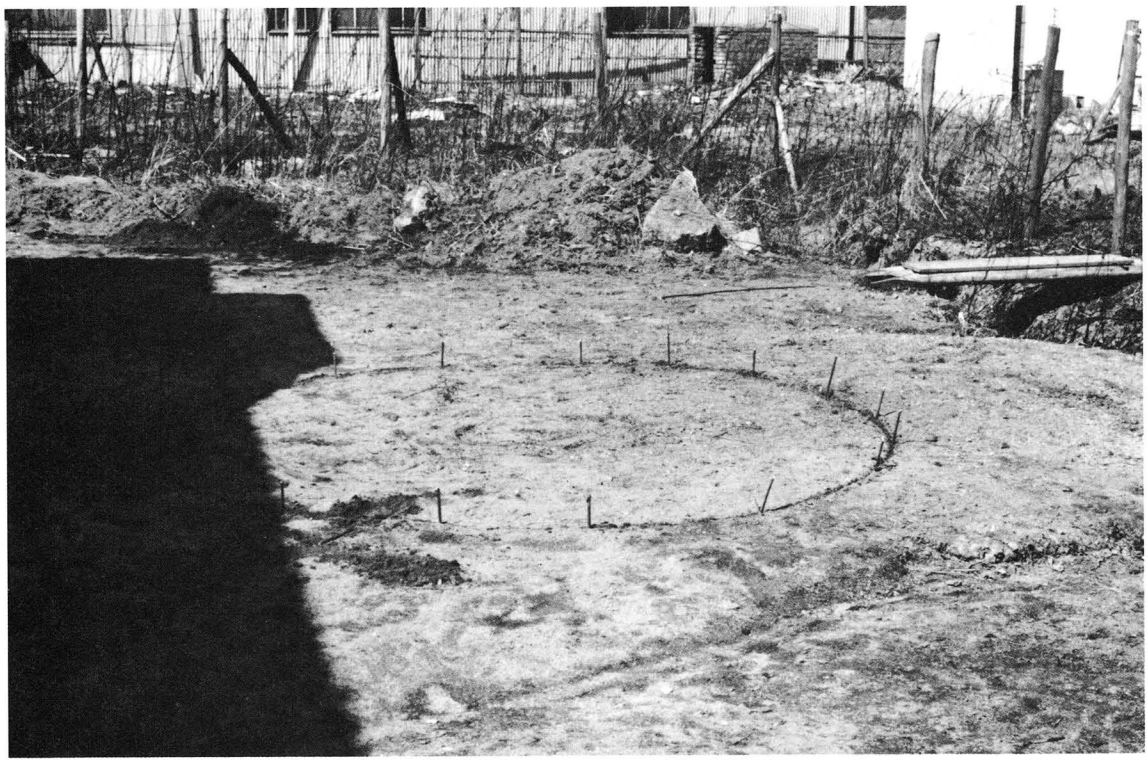
上：遺物(土師器)　下：遺物(須恵器)





上：遺物(瓦器，瓦質土器)　下：遺物(石鏃，銅銭)

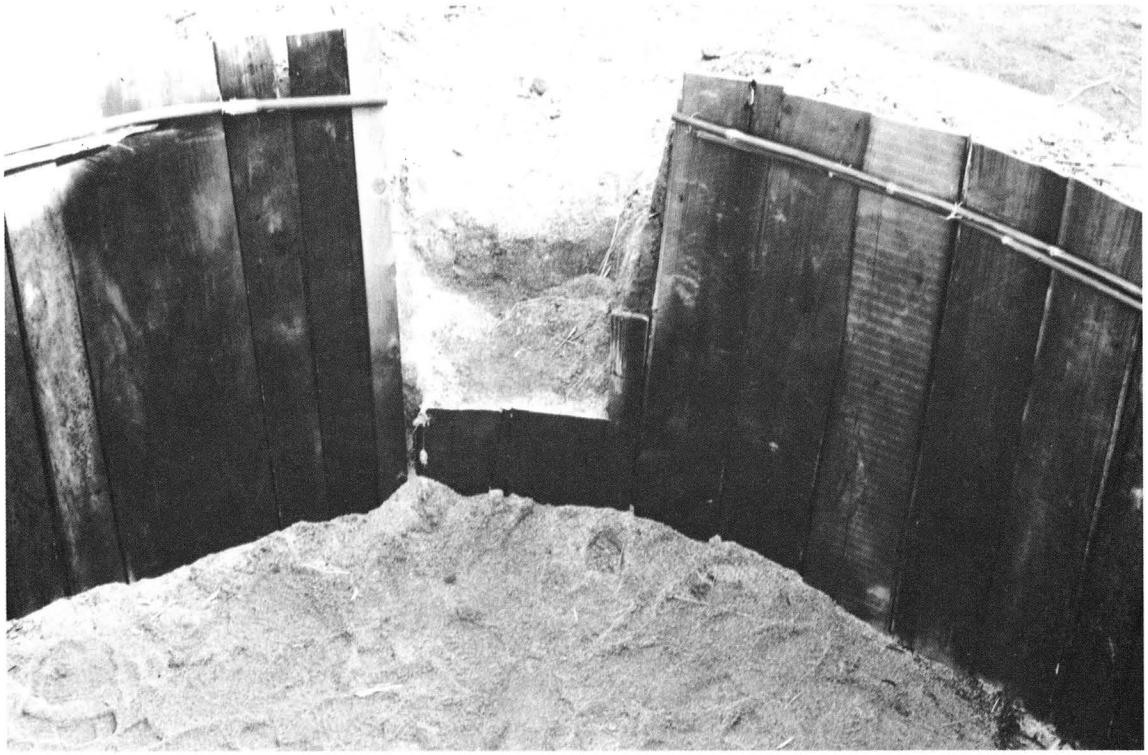
大和川・今池遺跡，条里制遺構復元図

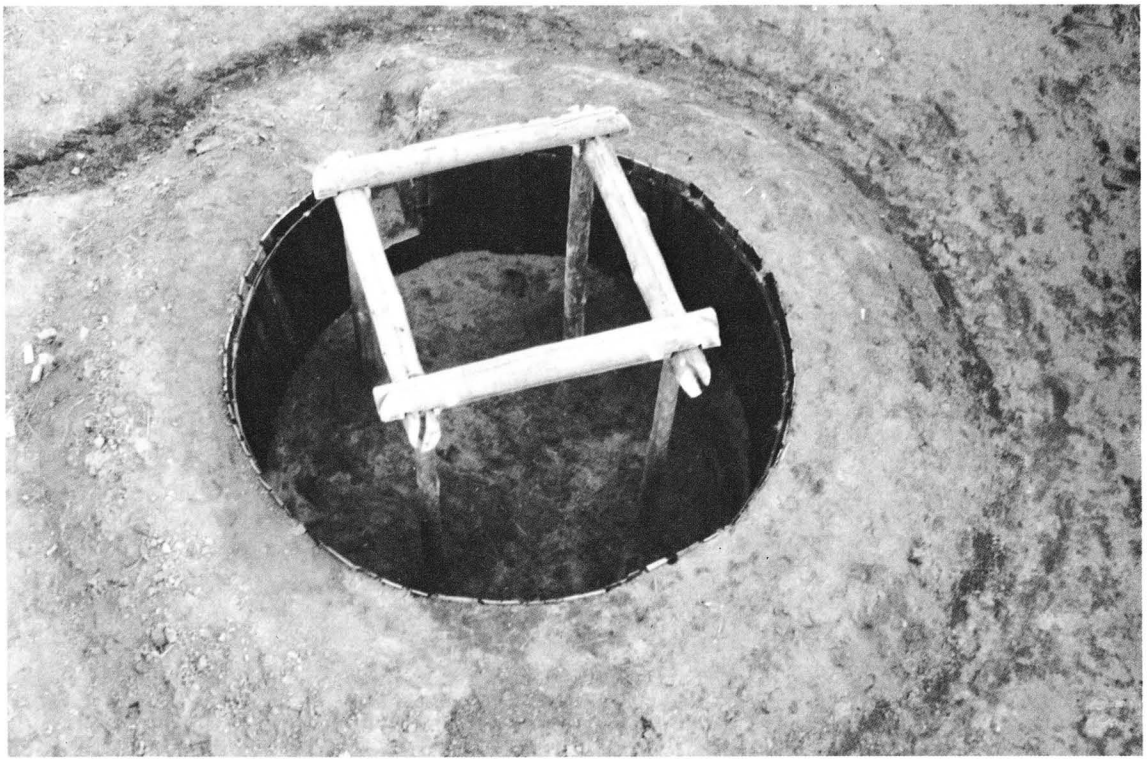


復元住居　面積設定　掘削

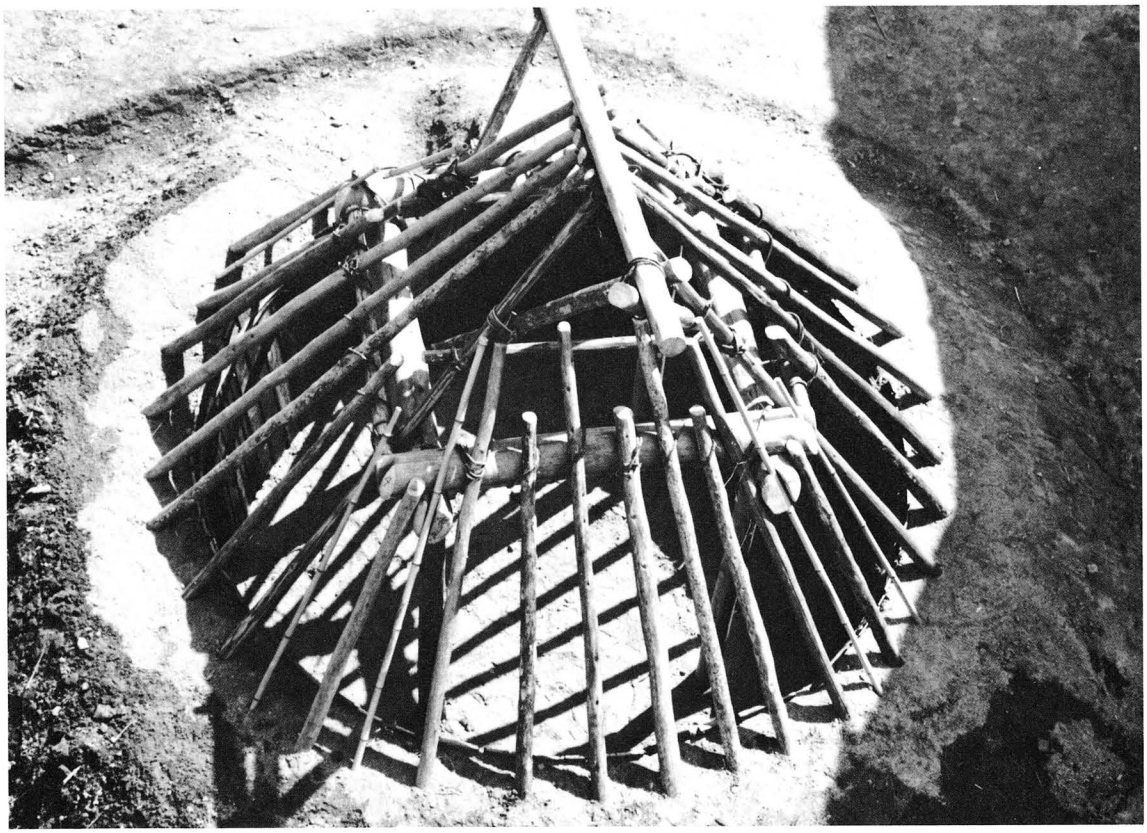
復元住居　側壁の粘土張り　側板建て

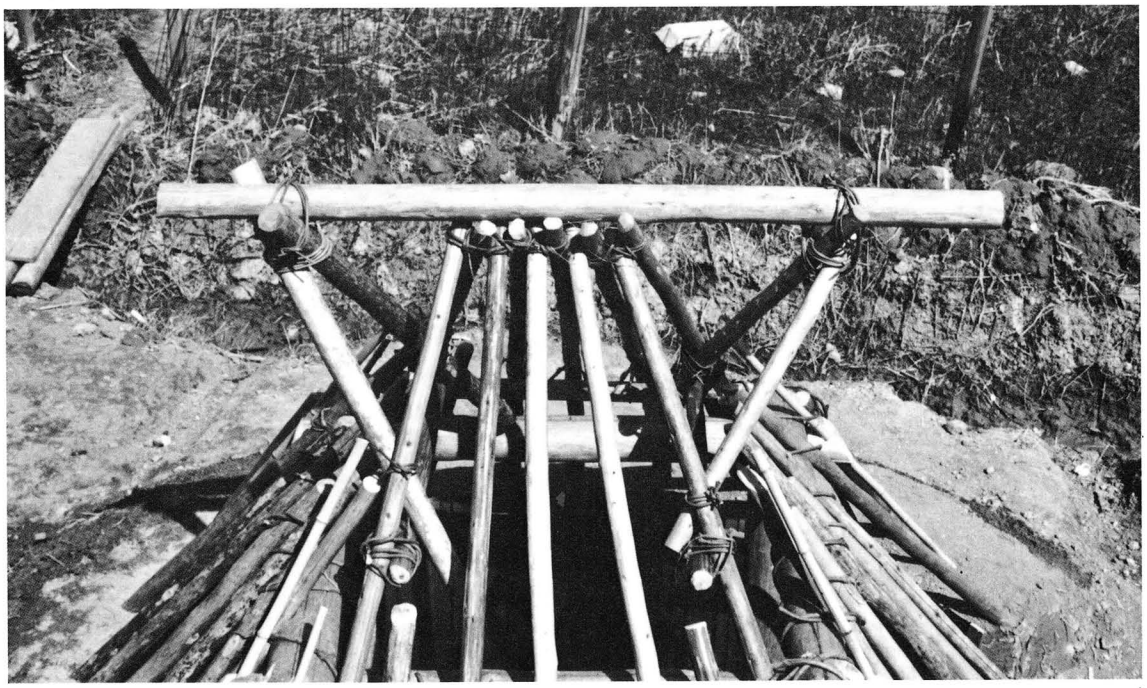
復元住居　側板の焼成　周堤状態



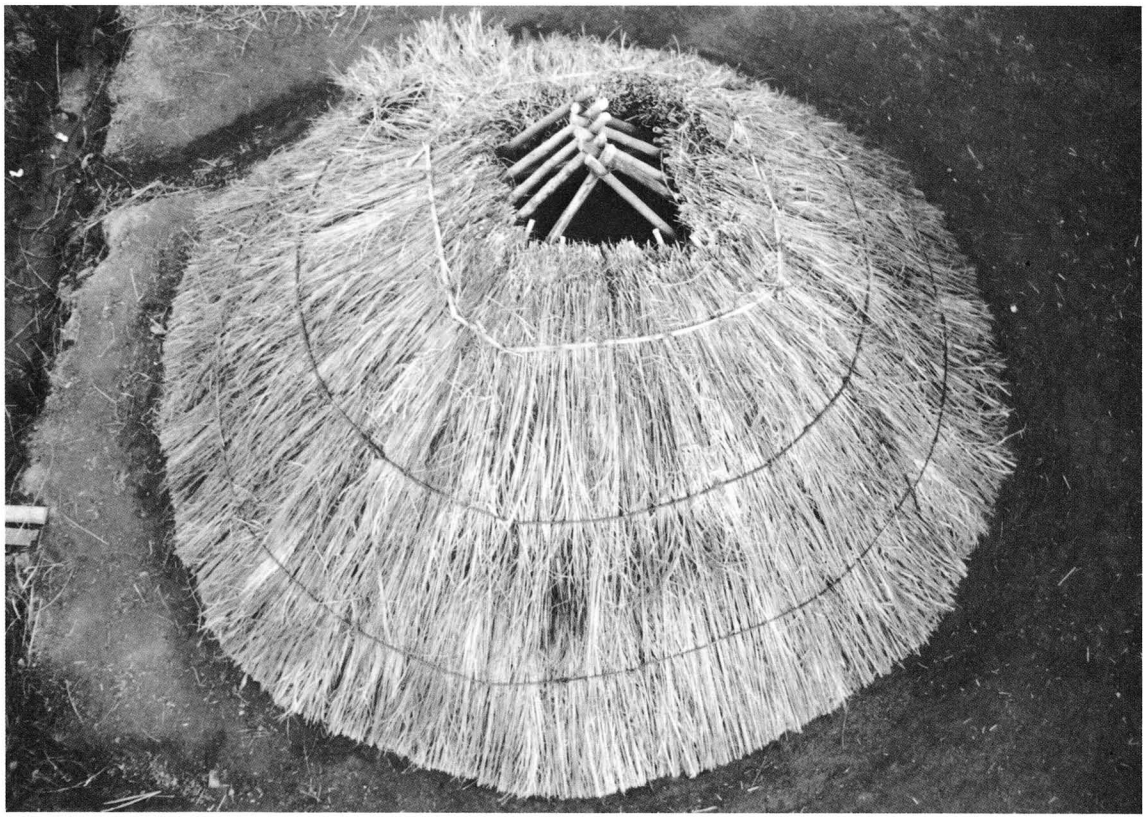


復元住居　入口部　4本柱建て

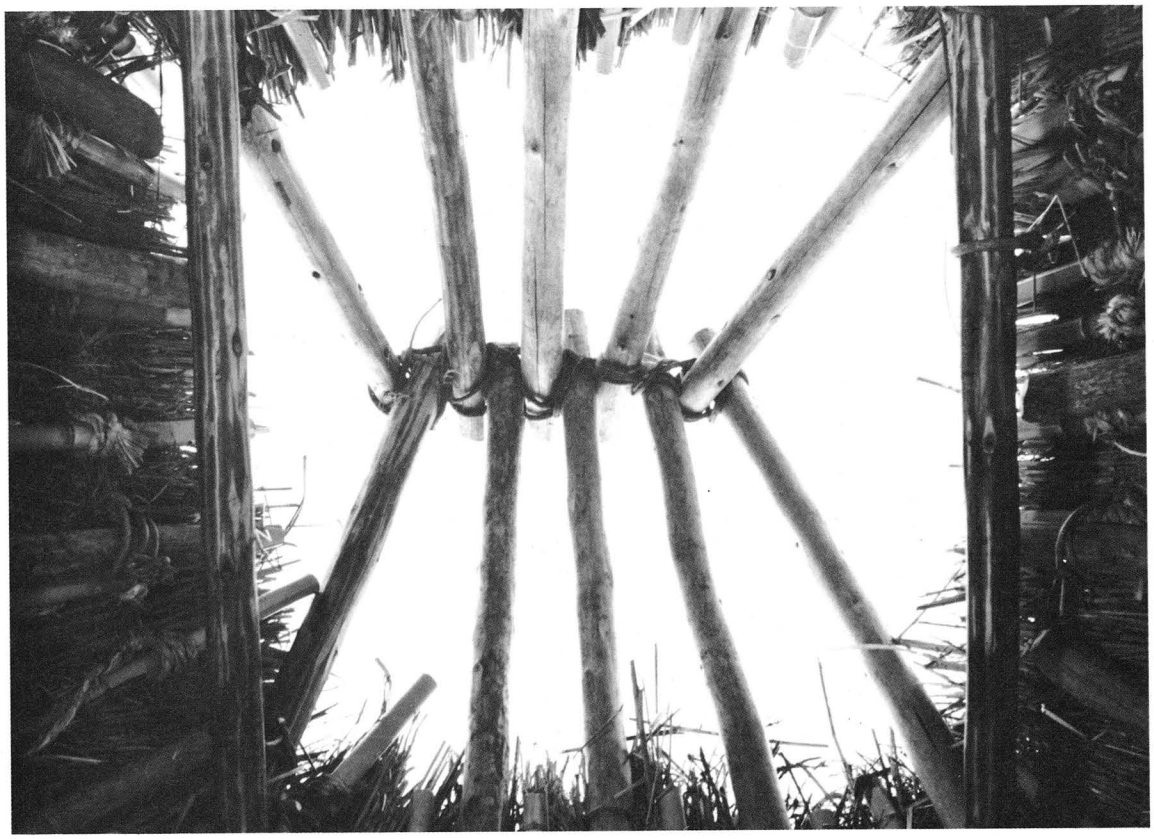




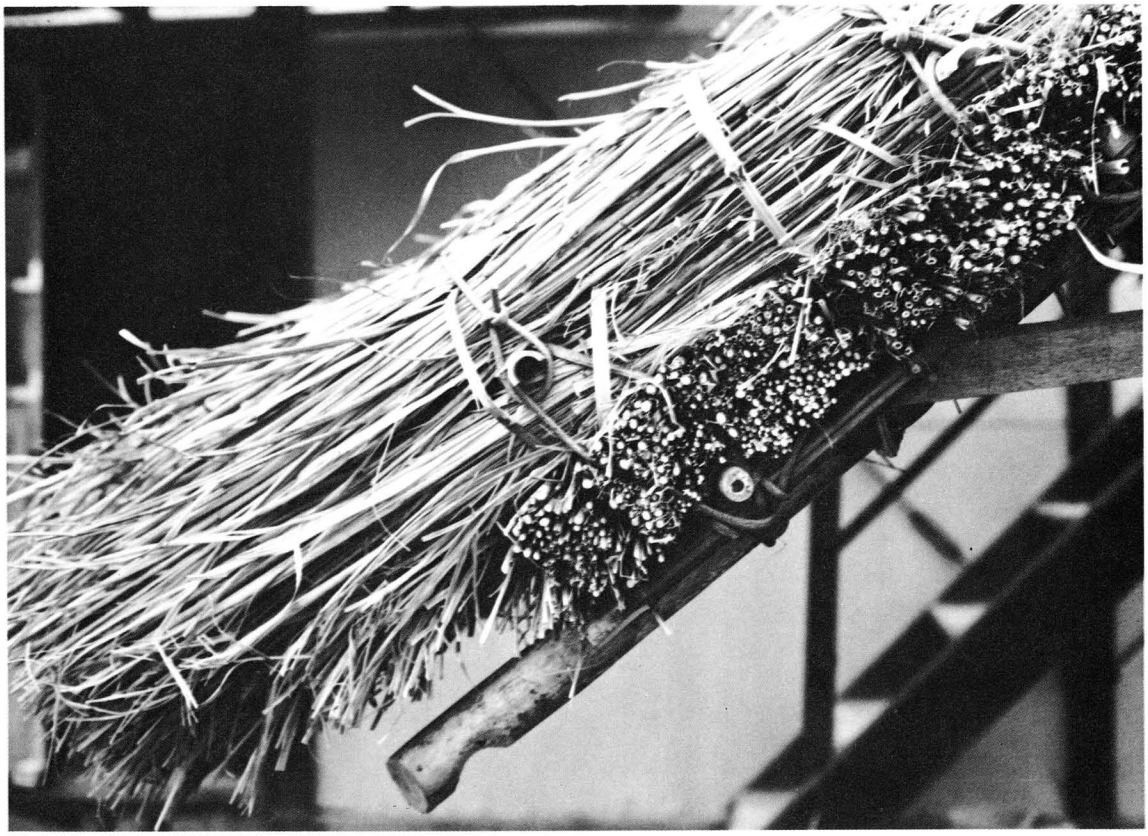
復元住居　木組状態　棟木部分



復元住居　茅葺き状態



復元住居　棟木(内部から)　側板と垂木



復元住居　棟部分　茅葺き状態

復元住居　茅を蔓で押える作業　道具　完成後

大和川・今池遺跡Ⅱ

大和川・今池遺跡第3・4・5地区発掘調査報告書

発行日　昭和55年3月31日
発　行　大和川・今池遺跡調査会
住　所　松原市天美西町7丁目263の1
〒580　TEL 0723－36－9993
印　刷　株式会社 中島弘文堂印刷所